熊本県文化財調査報告　第155集

陣山遺跡

じん　やま

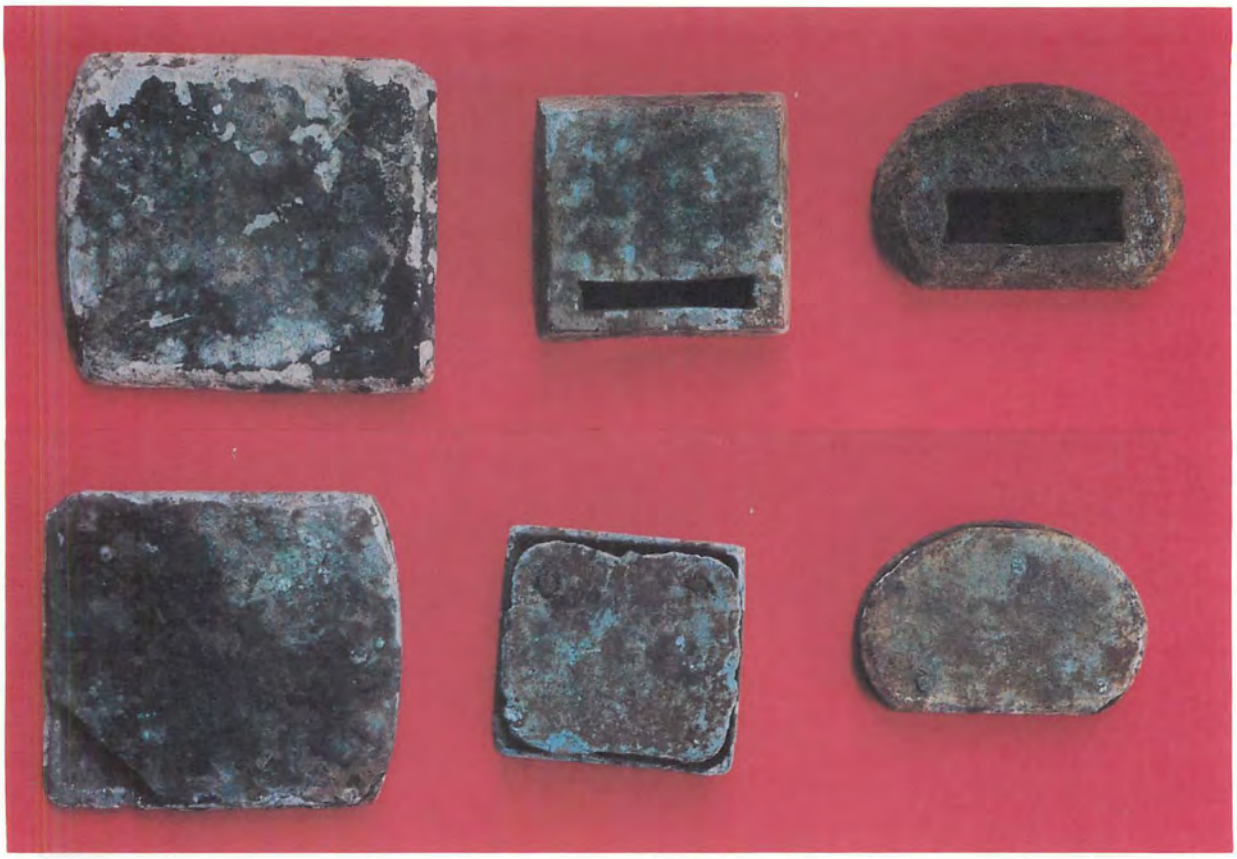
勤労者総合福祉センター(熊本テルサ)建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

1996. 3

熊本県教育委員会

水前寺廃寺・塔
陣山遺跡
蚕業試験場遺跡（平成６年度調査）
蚕業試験場遺跡（平成５年度調査）
陣山廃寺跡
（平成５年度熊本市調査）
（平成６年度熊本市調査）
神水遺跡（平成５年度調査）
国分尼寺推定範囲
神水遺跡（平成６年度調査）
国分僧寺推定範囲
神水遺跡
（昭和58年度熊本市調査）

陣山遺跡周辺航空写真



銙帯（上ー表，下ー裏）

篦描き文字「真吉」

篦描き文字「大寺」

墨書「家」

墨書「今」

滑石製紡錘車（護符線刻）

彩釉陶器（緑釉・二彩）

砥石

鉄鎌

軒平瓦

軒丸瓦

熊本県文化財調査報告　第155集

陣山遺跡

じん　やま

勤労者総合福祉センター(熊本テルサ)建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

1996. 3

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会では、このほど熊本県商工観光労働部の要請により、勤労者総合福祉センター（熊本テルサ）の建設にともなう埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

現在、県庁の周辺では、新県庁舎やこの勤労者総合福祉センターなどの建設工事が相次いでいますが、これらの敷地はいずれも平安時代の遺跡と重なっていたため、事前の発掘調査が行なわれたものです。

遠く平安時代のこと、現在の県庁の周辺には、古代の行政の中枢である国府や国分僧寺、国分尼寺など肥後の国を代表する公的な機関が営まれていたと聞きおよびます。

や帯金具など、当時の役人の持ち物らしき遺物が多量に出土していることから、これらの公的機関との関係が注目されるところですが、とりわけ職員会館として、永く県職員にとって身近であったむつみ荘の跡地に、奇しくも古代の行政に関わっていたと思われる人々の活動の痕跡を見いだしたことは、誠に感慨深いものがあります。

このたび、陣山遺跡の発掘調査の報告書を刊行することになりましたが、本報告書が埋蔵文化財に対する認識と理解を深め、さらには学術研究の進展にいささかでも寄与するところがあれば、誠に喜びに堪えません。

なお、本調査を実施するにあたり、文化財保護の観点から多大の御協力を惜しまれなかった商工観光労働部労政課ならびに地元の関係者の皆様、また御指導・御助言をいただきました諸先生方に深く感謝申し上げたいと思います。

平成８年３月31日

熊本県教育委員会

教育長　東　坂　　力

例　　言

1．本書は、熊本県商工観光労働部が建設を計画している勤労者総合福祉センターＢ型（熊本テルサ）の施工に先立ち、平成６年度に調査を実施した、熊本市水前寺公園に所在する「陣山遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．調査は熊本県商工観光労働部の委託を受けて、熊本県教育委員会が実施したものである。
3．遺跡名は、隣接する遺跡が「陣山廃寺跡」という遺跡名で登録されていたため、当遺跡でもそれにならうことを検討したが、調査が進むにつれ、遺跡の性格が寺院跡ではなく集落であることが判明したため、その所在地の地名（字名）である「陣山」からとり、これを名付けた。
4．現地での調査は、丸山伸治、川俣恵、中川裕二を中心として、西住欣一郎、水野哲郎、河原京子、三好伴典の協力を得て平成６年度におこなった。また、整理作業は丸山、川俣が中心となり、平成７年度に旧むつみ荘敷地内の「陣山遺跡整理室」で実施した。
5．遺物の実測は、川俣（主として土器を担当）と丸山（その他の遺物と土器の一部を担当）が実施したほか、土器の一部を（有）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。また、製図は、遺構や土器を平畑信子が主に担当し、その他の遺物と土器の一部を丸山が実施した。遺物の写真撮影は、丸山が実施した。
6．本書の地形図は、熊本県商工観光労働部から提供を受けたもの及び国土地理院地形図を利用した。
7．本書の執筆および編集は、丸山、川俣が「陣山遺跡整理室」でおこなった。なお、執筆分担は、各項の末尾に記した。
8．整理後の遺物ならびに実測原図、写真フィルム等（遺物・遺構）の保管は、 熊本県文化財収蔵庫（熊本市大江町渡鹿３丁目15－12）でおこなっている。

凡　　例

1．本調査の測量等の基準は、４級基準点測量によって導き出した、国土地理院の設定する「公共座標Ⅱ系」を使用した。このため本報告書中に使用した方位は、すべて公共座標上の北を指している。なお、当遺跡における座標上の北と磁北との偏角は、Ｎ－5°38′43″－Ｗであり、本報告における磁北は、表示してある北より反時計回り方向に当該角度修正することで知ることができる。
2．現地調査で作成した実測図の縮尺は次の通りである。

平板測量図	200分の１
遺構配置図	20分の１
遺構	20分の１
遺構詳細図	10分の１

3．報告書中の遺構実測図の縮尺は、次の通りである。

竪穴住居跡	30分の１
掘立柱建物	60分の１

4．報告書中の遺物実測図の縮尺は、次の通りである。

土器	３分の１
石器（大型）	３分の１
石器（小型）	３分の２
銅製品	５分の４
その他の遺物	３分の２

5．出土遺物の番号は、種別に関係なく掲載順に通し番号をつけている。ただし、一部の遺物については、報告の便宜上重複して掲載したものがある。（遺物番号は同一）
6．出土遺物の説明は、本文中に記した以外のものは、一覧表（観察表）中に一括して記載した。

本　文　目　次

序文
例言・凡例
目次・図版目次・表目次・写真図版目次
陣山遺跡調査のあらまし
第Ⅰ章　序説
第１節　調査に至る経緯と経過…… 21
１．調査に至る経緯…… 21
２．調査の組織…… 21
３．調査の経過（調査日誌抄）…… 22
第２節　遺跡の位置と環境…… 24
１．遺跡の位置…… 24
２．遺跡の地理的環境…… 24
３．調査区の地形…… 25
４．遺跡の歴史的環境…… 25
第３節　発掘調査の概要…… 29
１．調査の方法および調査区の設定…… 29
２．遺跡の基本層位…… 32
３．出土状況…… 35
第Ⅱ章　調査の成果
第１節　縄文時代の遺物…… 36
１．土器…… 36
２．石器…… 37
第２節　弥生時代の遺物…… 41
第３節　古代の遺構・遺物…… 42
１．遺構…… 42
(1)　竪穴住居跡…… 42
(2)　掘立柱建物……134
(3)　溝遺構……139
２．遺物……146
(1)　遺物の分布状況……146
(2)　土器……151
(3)　文字資料……163
(4)　石製品……172
(5)　鉄製品……177
(6)　銅製品……178
(7)　瓦……186
(8)　その他の遺物……193
第４節　その他の時代の遺物……196
１．聾学校にともなう遺物……196
２．泥メンコ（畑人形）……196
第Ⅲ章　総括

挿　図　目　次

第１図　陣山遺跡周辺遺跡位置図
第２図　陣山遺跡調査区設定図
第３図　「熊本テルサ」施工予定図
第４図　陣山遺跡基本土層図
第５図　陣山遺跡遺構配置図
第６図　縄文時代遺物実測図　(1)
第７図　縄文時代遺物実測図　(2)
第８図　縄文時代遺物実測図　(3)
第９図　石庖丁実測図
第10図　第１号住居跡実測図
第11図　第２号住居跡実測図
第12図　第３号住居跡実測図
第13図　第４号住居跡実測図
第14図　第１～４号住居跡出土遺物実測図
第15図　第５号住居跡実測図
第16図　第５号住居跡カマド実測図・出土遺物実測図
第17図　第６号住居跡実測図
第18図　第６号住居跡出土遺物実測図
第19図　第７号住居跡実測図
第20図　第８号住居跡実測図
第21図　第８号住居跡出土遺物実測図
第22図　第９号住居跡実測図
第23図　第10号住居跡実測図
第24図　第９・10号住居跡出土遺物実測図
第25図　第11号住居跡実測図
第26図　第12号住居跡実測図
第27図　第12号住居跡カマド実測図
第28図　第13号住居跡実測図
第29図　第13号住居跡出土遺物実測図
第30図　第14号住居跡実測図・出土遺物実測図
第31図　第15号住居跡実測図・出土遺物実測図
第32図　第16号住居跡実測図・出土遺物実測図
第33図　第17号住居跡実測図
第34図　第18号住居跡実測図
第35図　第19号住居跡実測図
第36図　第19号住居跡カマド実測図
第37図　第19号住居跡出土遺物実測図
第38図　第19号住居跡出土遺物実測図
第39図　第20号住居跡実測図
第40図　第21号住居跡・カマド実測図
第41図　第21号住居跡出土遺物実測図
第42図　第22号住居跡実測図
第43図　第23号住居跡実測図
第44図　第24号住居跡実測図
第45図　第22～24号住居跡出土遺物実測図
第46図　第25号住居跡実測図
第47図　第26号住居跡実測図
第48図　第26号住居跡カマド実測図・出土遺物実測図
第49図　第27号住居跡実測図
第50図　第28号住居跡実測図
第51図　第29号住居跡実測図・出土遺物実測図
第52図　第30号住居跡実測図
第53図　第31号住居跡実測図
第54図　第30・31号住居跡出土遺物実測図
第55図　第32号住居跡実測図・出土遺物実測図
第56図　第33号住居跡実測図
第57図　第34号住居跡実測図・出土遺物実測図
第58図　第35号住居跡実測図
第59図　第32～35号住居跡出土遺物実測図
第60図　第36号住居跡実測図
第61図　第37号住居跡実測図
第62図　第38号住居跡実測図
第63図　第39号住居跡実測図
第64図　第40号住居跡実測図
第65図　第36～41号住居跡出土遺物実測図
第66図　第41号住居跡実測図・出土遺物実測図
第67図　第42号住居跡実測図
第68図　第42号住居跡カマド実測図
第69図　第42号住居跡出土遺物実測図
第70図　第43号住居跡実測図・出土遺物実測図
第71図　第43号住居跡カマド実測図
第72図　第44号住居跡実測図
第73図　第45号住居跡実測図
第74図　第46号住居跡実測図
第75図　第47号住居跡実測図
第76図　第47号住居跡出土遺物実測図
第77図　第48号住居跡実測図
第78図　第48号住居跡カマド実測図
第79図　第49号住居跡実測図
第80図　第50号住居跡実測図・出土遺物実測図
第81図　第51号住居跡実測図
第82図　掘立柱建物配置図

第83図　第１号掘立柱建物実測図
第84図　第２号掘立柱建物実測図
第85図　第３号掘立柱建物実測図
第86図　第１号溝断面図・出土遺物実測図
第87図　第２・３・５・６号溝断面図・出土遺物実測図
第88図　第４・７・８号溝断面図・第４号溝出土遺物実測図
第89図　遺物分布図（全遺物）
第90図　遺物分布図（土師器）
第91図　遺物分布図（須恵器）
第92図　遺物分布図（その他の遺物）
第93図　遺物分布図（分布傾向と遺構配置）
第94図　土師器実測図　(1)
第95図　土師器実測図　(2)
第96図　土師器実測図　(3)
第97図　土師器実測図　(4)
第98図　須恵器実測図　(1)
第99図　須恵器実測図　(2)
第100図　須恵器実測図　(3)
第101図　須恵器実測図　(4)
第102図　須恵器実測図　(5)
第103図　その他の土器実測図
第104図　墨書土器等実測図　(1)
第105図　墨書土器等実測図　(2)
第106図　墨書土器等実測図　(3)
第107図　墨書土器等実測図　(4)
第108図　墨書土器等実測図　(5)
第109図　墨書土器等実測図　(6)
第110図　石製品実測図　(1)
第111図　石製品実測図　(2)
第112図　石製品実測図　(3)
第113図　石製品実測図　(4)
第114図　鉄製品実測図　(1)
第115図　鉄製品実測図　(2)
第116図　鉄製品実測図　(3)
第117図　鉄製品実測図　(4)
第118図　鉄製品実測図　(5)
第119図　銅製品実測図
第120図　瓦実測図　(1)
第121図　瓦実測図　(2)
第122図　瓦実測図　(3)
第123図　瓦実測図　(4)
第124図　瓦実測図　(5)
第125図　瓦実測図　(6)
第126図　土錘実測図
第127図　紡錘車実測図
第128図　旧熊本聾学校施設配置図

表　目　次

第１表　陣山遺跡周辺遺跡一覧
第２表　縄文時代石器観察表
第３表　土師器坏観察表
第４表　土師器椀観察表
第５表　土師器甕観察表
第６表　土師器鉢観察表
第７表　須恵器坏観察表
第８表　須恵器椀観察表
第９表　須恵器蓋観察表
第10表　須恵器壺・甕観察表
第11表　黒色土器観察表
第12表　墨書土器等観察表
第13表　石製品観察表
第14表　鉄製品観察表
第15表　熊本県内銙帯出土地名表
第16表　銅製品計測表
第17表　瓦観察表
第18表　土錘観察表
第19表　紡錘車観察表

写 真 図 版 目 次

図版１．昭和22年・昭和37年陣山遺跡周辺航空写真
図版２．調査区全景
図版３．調査区中央部分．調査区中央～西側部分
図版４．調査区中央部分．調査区南側部分．調査区南側進入路部分
図版５．調査区南側進入路部分．調査区東側部分
図版６．第１号掘立柱建物．第２号掘立柱建物
図版７．第２号掘立柱建物．第３号掘立柱建物
図版８．第２・３号掘立柱建物配置状況．第１号住居跡．第２号住居跡
図版９．第３号住居跡．第４号住居跡．第５号住居跡
図版10．第５号住居跡カマド．第６号住居跡．第７号住居跡
図版11．第８号住居跡．第５～８号住居跡．第９号住居跡
図版12．第10号住居跡．第11号住居跡．第12号住居跡
図版13．第12号住居跡カマド．第９・12号住居跡．第13号住居跡
図版14．第14号住居跡．第15号住居跡．第15号住居跡カマド
図版15．第15号住居跡カマド．第16号住居跡．第17・18号住居跡
図版16．第19号住居跡．第19号住居跡遺物出土状況．第19号住居跡カマド
図版17．第20号住居跡．第21～24号住居跡検出状況．第21号住居跡
図版18．第21号住居跡カマド．第22号住居跡．第22号住居跡鉄鎌出土状況
図版19．第23号住居跡．第24号住居跡．第21～24号住居跡
図版20．第25号住居跡．第26号住居跡．第27号住居跡
図版21．第28号住居跡．第29号住居跡．第30号住居跡
図版22．第31号住居跡．第32号住居跡．第32号住居跡カマド
図版23．第33号住居跡．第34号住居跡．第35号住居跡
図版24．第36号住居跡．第37号住居跡．第38号住居跡
図版25．第39号住居跡．第40号住居跡．第41号住居跡
図版26．第42号住居跡．第42号住居跡カマド．第43号住居跡
図版27．第43号住居跡カマド．第42・43号住居跡．第45号住居跡
図版28．第46号住居跡．第29～46号住居跡．第47号住居跡
図版29．第48号住居跡．第48号住居跡カマド．第49号住居跡
図版30．第50号住居跡．第51号住居跡．第１号溝
図版31．第１号溝．第２号溝．第３号溝
図版32．第３号溝土層断面．第３～５号溝．第４号溝土層断面
図版33．第６号溝．第７号溝．第８号溝
図版34．押型文土器．彩釉陶器
図版35．住居跡出土土器（１～５号住居跡）
図版36．住居跡出土土器（６・８・９・10・13号住居跡）
図版37．住居跡出土土器（13・14・15・19号住居跡）
図版38．住居跡出土土器（16・19号住居跡）
図版39．住居跡出土土器（19・21・24・22～24号住居跡）
図版40．住居跡出土土器（26・29・30・31・34・32～35号住居跡）
図版41．住居跡出土土器（32～35・40・36～41・41・42号住居跡）
図版42．住居跡・溝出土土器（42・43・47・50号住居跡．１号溝）
図版43．溝出土土器（１・３号溝）
図版44．溝出土土器（４・５・６号溝）
図版45．溝出土土器（４号溝）．包含層出土土器（土師器坏）
図版46．包含層出土土器（土師器坏．土師器椀）
図版47．包含層出土土器（土師器椀．土師器蓋．土師器甕）
図版48．包含層出土土器（土師器甕．土師器鉢．須恵器坏）
図版49．包含層出土土器（須恵器坏．須恵器皿．須恵器椀）

図版50．包含層出土土器（須恵器椀）
図版51．包含層出土土器（須恵器椀）
図版52．包含層出土土器（須恵器椀．須恵器蓋）
図版53．包含層出土土器（須恵器蓋．須恵器壺）
図版54．包含層出土土器（須恵器壺．須恵器鉢．須恵器甕）
図版55．包含層出土土器（須恵器甕．黒色土器Ａ類．彩釉陶器）
図版56．包含層出土遺物（円面硯．越州窯青磁碗）．墨書土器
図版57．墨書土器
図版58．墨書土器
図版59．墨書土器
図版60．墨書土器
図版61．墨書土器
図版62．墨書土器
図版63．墨書土器
図版64．墨書土器
図版65．墨書土器
図版66．墨書土器．石庖丁
図版67．縄文時代石器
図版68．石製品（砥石）
図版69．石製品（砥石．硯状石製品．錘）
図版70．石製品（砥石）．鉄製品
図版71．鉄製品
図版72．鉄製品．銅製品
図版73．瓦
図版74．瓦
図版75．瓦
図版76．瓦
図版77．瓦．土錘．紡錘車

陣山遺跡発掘調査のあらまし

調査のきっかけ

陣山遺跡は、熊本県庁の北側に広がる遺跡です。もともと、ここは「県立聾学校」や「むつみ荘」などの敷地でしたが、この跡地に熊本テルサ（勤労者福祉センター）を建設する計画が持ち上がりました。「文化財保護法」は、何かの工事が地下の遺跡に影響を与える場合には、あらかじめ発掘調査をおこない、遺跡の記録を後世に伝えることをさだめています。このため、深く掘削する建物の基礎部分や、道路の部分に限って、発掘調査がおこなわれたものです。

調査は、平成６年５月から翌平成７年３月にかけておこなわれ、約7,000㎡という広い範囲を対象としました。その結果、縄文時代から古代にかけての幅広い時代の人々の生活の跡を確かめることができたのです。

空からみた遺跡周辺（手前が陣山遺跡）

調査でわかったこと

〈縄文時代の遺物〉早期・後晩期

縄文人の幅広い交流

今回の調査で見つかった、もっとも古い時代の遺物は、今から8,000年ほど前（縄文時代早期）の土器で、表面に小さく連続した文様がスタンプされていることから押型文土器と呼ばれるものです。この時代は、まだ農業は行われず、木の実を集めたり、海や山での漁や狩りが生活をささえていました。このため、黒曜石というガラスのような鋭い石で作られた矢じりなども多数出土しています。なお、この黒曜石は、佐賀県、大分県、鹿児島県などからもたらされたものらしく、当時の人々の幅広い交流の様子を教えてくれます。

確認された遺物　押型文土器、石鏃、打製石斧、磨製石斧

押型文土器（縄文時代早期）

黒曜石製石鏃（縄文時代）

〈弥生時代の遺物〉

稲刈り道具の石庖丁

日本で稲作が本格的に始められたのは、弥生時代

（およそ2.300年ほど前）以来のことです。今でも水田の広がる風景は各地で見ることができ、特に黄金色に色づいた田は、日本の秋の風物詩ともなっています。ところで、今では根元から刈る稲も、弥生時代には稲穂の部分だけを刈り取っていました。しかも、この時代は鉄の鎌さえ普及していませんでしたから、石庖丁と言われる、薄い石を研いで作った鎌を使っていたのです。この遺跡で石庖丁が出土していることは、弥生時代に遺跡の周辺で稲作がおこなわれていたことの確かな証拠になるでしょう。

なお、この時代に使われていた黒髪式土器と言われる熊本特有の土器の破片も、わずかながら見つかっています。

確認された遺物　黒髪式土器甕細片、石庖丁

石庖丁（弥生時代）

〈古代の遺構・遺物〉

発見された住居群

今回の調査の中心は、奈良時代後半から平安時代初期にかけてのことです。調査では、この時代の竪穴住居跡が５１軒と、掘立柱建物が３軒、そして当時の人々が使用していた様々な道具が発見されています。これらの建物はすべてが同時に建てられていたわけではありませんが、遺跡周辺が建物の密集地であったことは間違いありません。ところで、こうした家は、なにを背景として建てられ、どういう人がここに住んでいたのでしょうか。

たくさんの建物

古代肥後国の中心

今をさかのぼる1200年ほど前のこと、現在の県庁の周辺は、古代の肥後国においても重要な地点のひとつでした。というのも、古代の地方行政の中心は国府（現在の県庁に相当）と言われる役所ですが、何度か移転を繰り返したうち、一時期は、現在の県庁のすぐ近くに置かれたことがあります。電車通りの周辺に「国府」という地名が残っていますが、あれは「肥後国の行政府」に由来しているのです。また、口絵の航空写真でわかるように、国府の近くには、国立の寺院である国分僧寺や国分尼寺なども建てられていました。

竪穴住居（平安時代）

さて、現在でも重要な施設の周辺には、関連する施設や、そこに勤務する人の住宅などがつくられる

掘立柱建物（平安時代）

のが普通です。今回の調査で見つかった建物群は、これらの公共施設と何らかの関係があると考えられるのです。

特殊な遺物

この関係を裏付けるのが当時の人々が遺した遺物です。出土した土器の中には、毛筆などで文字の書いてあるものがたくさん見つかっています。当時文字の読み書きができるのは、役人や僧侶など一部の人に限られていましたので、ここに住んでいた人は、先に述べた役所や寺院の関係者であると考えるのが自然です。特に「大寺」（口絵写真）や「法」などの文字は、仏教に関係が深いもので、国分僧寺や国分尼寺などとこの遺跡との関係について注目されるところです。このほかにも、朝廷の官位を持つ役人がしめる帯の飾り金具（口絵写真）や、彩釉陶器（口絵写真）と言われる特別な土器なども出土しており、この遺跡が特殊な性格の遺跡であることをしめしています。

寺院より持ち込まれた瓦

鉄製紡錘車．刀子（平安時代）

様々な種類の土器（平安時代）

生活を物語る遺物

これらの特殊な遺物のほかに、当時の人々のふだんの生活を物語る様々な遺物も発見されています。須恵器・土師器などの土器は、甕、壺、甑、坏、碗、高坏、皿、鉢など多彩な種類があり、食べ物を盛る食器や煮炊きのための鍋や釜として、あるいは水や食料を蓄える容器として、日常的に使用されていたことがうかがえます。このほか、魚網につけられ河川などでの漁に使われたものと思われる土錘、糸をつむぐための紡錘車、刀子と呼ばれる小刀や収穫のための鉄鎌（口絵写真）、刃物を研ぐための砥石（口絵写真）、重さを量るための石のおもりなど、当時の人々の生活のありさまをしめす貴重な資料が多量に出土しています。

古代の人々の願い

さて、記された文字の中には、当時の人々の考え方の一端をしめすものも見ることができます。たとえば、石の紡錘車（口絵写真）に刻まれた「井」の文字は、災いを避けようとするお守りの印と思われますし、土器に刻まれた「真吉」の文字（口絵写真）は、おみくじの大吉と同じく、「この土器を使うことでよいことがありますように」という願いが込められたものと考えられます。現代に生きる私たちが、誰しも幸せを願わずにはいられないように、古代に生きた人々も日々の生活の安寧を願いながら、ひたむきに毎日を暮らしていたのです。

確認された遺物　土師器・須恵器各形態，彩釉陶器，硯，錘，銅製品（帯金具ほか），鉄製品（刀子，紡錘車，斧，鎌ほか），砥石，瓦など

おわりに

発掘調査では、私たちに身近な、地域の歴史に関するさまざまな発見があります。今回の発掘調査でも、ここに述べた以外にもたくさんの事実を知ることができました。調査した遺跡は、すでに失われましたが、遺跡に関する最低限の記録はこの報告書によって後々まで知ることができますし、出土した遺物は永久保存され、一部は博物館などに展示されることになります。

さて、この報告書の中にも記したように、県庁の周辺は古代の肥後国の拠点として、多くの貴重な遺跡が埋もれています。1000年以上の時を経て伝えられてきた貴重な遺跡が今後も永く守られ、私たちが祖先の生き方に学ぶためのよりよき材料になればと考えます。

石製のおもり（平安時代）

土　錘（平安時代）

遺跡を訪れた子供達

県庁ロビーでの発掘速報展

第Ⅰ章　序　　説

第１節　調査に到る経緯と経過

１．調査にいたる経緯

熊本県商工観光労働部では、平成８年度中の開業を目指し「勤労者総合福祉センターＢ型」（通称熊本テルサ）の建設事業を進めている。これは、労働省の外郭団体である雇用促進事業団が窓口となり、地域の勤労者に対し、勤労相談の窓口の開設と職業情報の提供、教養・文化・研修・スポーツ活動の場の提供などを目的に建設するもので、開業後には、雇用促進センター、会議室、研修室、ホール、宿泊施設、レストラン、アスレチック、温水プールなどを備えた、多目的な施設となる予定である。

さて、同事業の進行にあたって、建設予定地である熊本県職員会館「むつみ荘」跡地について、事業担当課である商工観光労働部労政課から教育庁文化課に対し、遺跡の有無の照会がなされた。文化課では、この地点そのものは、周知の埋蔵文化財の包蔵地としての登録は行われていなかったものの、周辺は神水遺跡、陣山廃寺跡、蚕糸試験場遺跡といった古代の遺跡が隣接していることから、遺跡の存在が予想されたため、遺跡の所在確認のための試掘調査が必要なことを回答し、さらに労政課による試掘調査の依頼にもとづいて敷地内の建物建設予定地について、試掘調査を実施した。

試掘調査は、平成６年１月14日、文化財保護主事西住欣一郎が行った。建物本体の建設予定地ということで、むつみ荘のグラウンド全域と中庭の一部にかけて、合計９本の試掘坑を設定した。このうち、８本の試掘坑より、平安時代のものと判断される遺物が確認され、しかも、確認された遺物がかなりの量にのぼったため、当該地域一帯には、平安時代の集落を有する遺跡が存在すると判断された。

このため、労政課と文化課では、遺跡の取り扱いについて協議を行い、平成６年度に本調査を実施することとし、平成６年５月から平成７年３月まで、文化課が現地での発掘調査を行った。引き続き、翌平成７年度には報告書を刊行するため整理作業および報告書執筆をすすめ、今回報告書の刊行に到ったものである。

なお、平成８年度中には、熊本テルサの北側進入路部分の調査が行われる予定で、計画が進められているところである。

２．調査の組織

調査主体　熊本県教育委員会

調査責任者　桑山　裕好（文化課長）
白井　哲哉（教育審議員）
丸山　秀人（課長補佐）

調査総括　島津　義昭（主幹・文化財調査第一係長）

調査員　丸山　伸治（主任主事．労政課派遣）
川俣　　恵（主事．新庁舎建設室兼務）
中川　裕二（嘱託）
西住欣一郎（文化財保護主事）
水野　哲郎（文化財保護主事）
河原　京子（嘱託）
三好　伴典（嘱託）

調査指導　平川　　南（国立歴史民俗博物館）

専門調査員　花岡　興輝（熊本史学会会長）
板楠　和子（九州女学院高校）

調査事務〔熊本県商工観光労働部労政課〕
北川　　正（課長）
松本　一誠（課長補佐）
横田　　堅（課長補佐）
後藤　泰之（主幹）
谷川　元憲（主幹）
久保　隆生（参事）
福島　友子（主任主事）

〔熊本県教育庁文化課〕
藤本　和夫（主幹・経理係長）平成７年度
木下　英治（主幹・経理係長）平成６年度
高濱　保子（参事）
中村　幸宏（参事）　平成６年度
高宮　優美（主任主事）
東　　修（主事）　平成７年度

調査協力者（指導・助言）

工楽善通　甲元眞之　柴田博子　鬼塚久美子
隈　昭志　松本健郎　高木正文　高谷和生
古森政次　園村辰実　木﨑康弘　村崎孝宏
山下義満　竹田宏司　稲津暢洋　網田龍生

整理作業

上田庸子　瀬口絹代　西岡良子　平井和子
平畑信子　松本直枝　山田友子

発掘調査

青山玲子　青山顕宏　赤星サエ子　浅生久美子
一宮和子　上田まゆみ　岩永智子　岩永マスヨ
牛嶋康子　内田ルイ子　大舘ムツエ　大舘安敏
緒方範子　岡本佳子　片山孝子　北村義行
木村雅子　隈部幸志　作本真弓　杉本美子
高倉　功　高松北子　田尻美和子　土持アキエ
土持励子　中島久枝　中島ミサエ　永山邦子
南部隆興　成松百合子　成松洋子　西明むつ子
西村裕子　西由貴子　長谷川益雄　服部美紀子
原かおる　平井和子　福田久美子　松永留美子
松野良二　松本加代子　松本直枝　三浦佐与子
森田ミドリ　山中義浩　吉田静枝　吉本佐与子
笠　春美　渡辺いわ子（五十音順）

（付記）発掘調査および整理に際しては、諸先生方より貴重な御指導、御助言をいただきました。また、県土木部営繕課坂口参事、熊本テルサ施工担当の（株）フジタ田辺所長、また地元の皆様からも、多大の御協力を得ました。ここに記して深く感謝申し上げます。

３．調査の経過（調査日誌抄録）

平成６年５月～平成７年３月

平成６年

５／23(月)　本調査に入る前に、遺跡の広がりを把握するために、追加の分布調査を実施する。（旧むつみ荘の中庭部分、進入路部分、進入路東側駐車場部分）この結果、進入路および駐車場部分には遺跡の範囲が広がることが確認される。なお、分布調査終了後、重機にて、第１回目の調査区の表土剝ぎ取り作業を開始する。

５／24(火)　表土剝ぎ取りと平行して、調査区北側部分から遺構の確認作業を開始する。なお、早速カマド付きの竪穴住居跡らしき遺構が確認される。

６／１(水)　重機による表土剝ぎ取り作業が終了する。攪乱部分の堀上げ作業をおこなう。なお、この日調査事務所の建設。

６／２(木)　４級基準点測量と、調査区内に公共座標を設定するための作業を実施する。この結果、調査区内に測量の基準点になる10ｍ四方の方眼が設定される。

６／３(金)　調査区の一角に散水用の水道を敷設する。

６／６(月)　この日より、平安時代の遺物包含層（Ⅲ層）の調査を開始する。Ｆ－６区より掘削をおこなう。

６／７(火)　第１号竪穴住居跡調査開始。なお、第４号住居跡までは上面の削平がひどく、残存状況は悪い。Ｇ－６区調査開始。

６／８(水)　この日より６月13日（月）まで、梅雨により調査の中断を余儀なくされる。しかし、まとまった雨はこれが最後で、平成６年は記録的なカラ梅雨となる。

６／14(火)　第２号住居跡調査開始。Ｇ－５、Ｇ－７、Ｈ－６区調査開始。

６／17(金)　第３号住居跡調査開始。Ｇ－７区調査開始。

６／21(火)　この日より、包含層遺物の取り上げ作業を断続的に実施する。なお、Ｇ－６区より、国分尼寺より搬入されたものらしい軒丸瓦が出土し、注目される。Ｈ－４、Ｈ－５、Ｉ－４、Ｉ－５区の調査開始。

６／24(金)　第４号住居跡調査開始。

６／28(火)　「県庁周辺遺跡調査マップ」6,000部を発行。庁内外に配布する。

６／30(木)　Ｈ－７区調査開始。

７／６(水)　Ｉ－６区調査開始。Ｇ－７、Ｈ－６区遺構確認。

７／11(月)　Ｇ－８区調査開始。

７／12(火)　Ｈ－７区より緑釉陶器が出土する。

７／19(火)　Ｈ－８、Ｉ－７区調査開始。

７／26(火)　Ｊ－７区調査開始。

７／27(水)　Ｆ－６区調査開始。

7／29(金)　Ｆ－７区調査開始。この日夕方、ひさしぶりに激しい雷雨あり。恵みの雨となる。
8／1(月)　Ｆ－８区調査開始。
8／3(水)　先に発行した「県庁周辺遺跡調査マップ」が地元紙「熊本日日新聞」に掲載される。当遺跡の紹介とともに、見学や体験発掘の呼びかけをおこなったため、この日より遺跡の見学者が増える。
8／4(木)　第５号住居跡調査開始。なお、見学者用に第１号住居跡（調査済み）の骨組みモデルを、竹を使って復元する。
8／8(月)　Ｆ－９区調査開始。第６号住居跡調査開始。
8／9(火)　花稜中学校の生徒約50名が体験発掘に訪れる。なお、この模様は翌日の「熊本日日新聞」に掲載される。
8／13(土)　ＲＫＫラジオの番組にて当遺跡の調査が紹介される。
8／17(水)　第７号住居跡調査開始。
8／1(月)　Ｅ－６区調査開始。
8／22(月)　第８号住居跡調査開始。
8／24(水)　Ｅ－７区調査開始。
8／30(火)　Ｅ－８区調査開始。
9／6(火)　第10・11号住居跡調査開始。Ｅ－９区調査開始。
9／8(木)　第１号掘立柱建物調査開始。
9／12(月)　第９号住居跡調査開始。
9／13(火)　Ｄ－６区調査開始。水洗いした土器の中から、「大寺」という文字をはじめ、多数の墨書・箆描き土器が見つかり、「国分僧寺」等との関係につき注目される。
9／14(水)　Ｄ－７区調査開始。
9／16(金)　第12号住居跡調査開始。
9／19(月)　第13号住居跡調査開始。Ｃ－６、Ｂ－６区調査開始。この頃、異常乾燥と強風により、遺跡周辺に土埃が激しく飛散する。このため、日没時までの散水が日課となる。
9／20(火)　第14号住居跡調査開始。
9／21(水)　第15号住居跡調査開始。Ｄ－８区調査開始。
9／26(月)　Ｃ－９、Ｄ－９区調査開始。
9／27(火)　第16号住居跡調査開始。
9／28(水)　Ｅ－10区調査開始。
10／4(火)　銅製の帯金具（丸鞆）が出土。
10／5(水)　Ｆ－10区調査開始。
10／11(火)　第17号住居跡調査開始。Ｇ－10区調査開始。
10／14(金)　第18号住居跡調査開始。
10／18(火)　第１回目の航空写真撮影。出土した「帯金具」に関する記事が「熊本日日新聞」に掲載される。
10／22(土)　当遺跡の紹介記事が「朝日新聞」に掲載される。
10／25(火)　旧むつみ荘の建物解体工事が終了したことを受けて、この日より中庭部分・進入路部分など、第２回目の表土剝ぎ取り作業を開始する(11／８まで)。なお、排土は調査終了部分に埋め戻すこととする。第３回目の分布調査実施。
11／1(火)　「遺跡調査だより第１号」2,000部を、庁内および遺跡周辺に配布する。以後調査終了まで、７号を発行し、配布する。
11／7(月)　第１号溝調査開始。第４回目の分布調査実施。
11／8(火)　第19号住居跡調査開始。旧むつみ荘中庭部分調査開始。
11／11(金)　第20号住居跡調査開始。
11／15(火)　城東小学校児童約50名が体験発掘実施。第５回目の分布調査実施。
11／17(木)　Ｈ－８、Ｈ－９区調査開始。
11／21(月)　Ｇ－10区調査開始。
11／24(木)　Ｈ－10区調査開始。
11／25(金)　Ｈ－11、Ｉ－11区調査開始。
11／29(火)　第21～24号住居跡調査開始。第３号溝調査開始。
12／1(木)　第25号住居跡調査開始。
12／2(金)　Ｇ－11区調査開始。
12／6(火)　Ｅ－10区調査開始。この頃から２月上旬にかけて、工事開始に合わせて調査区を

部分的に引き渡すために、休日出勤が常態となる。

12／８(木)　桜木小学校児童約２４０名が遺跡見学に訪れる。

12／12(月)　第26号住居跡調査開始。Ｇ－９、Ｆ－９区調査開始。

12／19(月)　Ｆ－11区調査開始。

12／20(火)　第２号掘立柱建物調査開始。東側進入路部分調査開始。

12／21(水)　第４号溝調査開始。

12／22(木)　Ｅ－11区調査開始。

平成７年

１／６(金)　第27号住居跡調査開始。第５号溝調査開始。Ｊ－６区調査開始。

１／９(月)　第３号掘立柱建物調査開始。

１／13(金)　第28・29号住居跡調査開始。Ｆ－11区調査開始。

１／21(土)　調査区西側部分調査終了。工事側に引き渡し。

１／24(火)　第30・32～43号住居跡調査開始。

１／25(水)　Ｊ－７、Ｋ－６区調査開始。

１／26(木)　第31号住居跡調査開始。

２／１(水)　第45号住居跡調査開始。

２／２(木)　第44・46・47号住居跡調査開始。

２／４(土)　東側進入路部分調査終了。工事側に引き渡し。

２／８(水)　Ｈ－13、Ｈ－14区調査開始。

２／10(金)　Ｈ－12区調査開始。

２／14(火)　Ｊ－８、Ｊ－９、Ｉ－11区調査開始。

２／15(水)　第48～50号住居跡調査開始。

２／16(木)　Ｉ－９区調査開始。

２／21(火)　Ｉ－10区調査開始。

２／27(月)　Ｈ－11区調査開始。

３／６(月)　「県庁周辺発掘速報展」を県庁１階ロビーにて開催(3/10まで)する。2,200名を越える見学者あり。

３／17(金)　第51号住居跡調査開始。

３／22(水)　第２回目の航空写真撮影。

３／23(木)　調査終了。全調査区を工事側に引き渡し。

第２節　遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置

遺 跡 名　陣山遺跡

所 在 地

地　　番　熊本県熊本市水前寺公園28－51
(旧熊本県職員会館むつみ荘跡地)

旧 町 名　熊本市　大字今村　字陣山

位　　置　北緯32°47′17″東経130°44′30″

面　　積　調査対象　約7,000㎡(平成６年度分)

対象事業

名　　称　勤労者総合福祉センターＢ型（熊本テルサ）建設工事

主　　体　雇用促進事業団、熊本県、熊本市

建設計画

平成４年度　用地測量、地質調査

平成５年度　基本構想、基本設計

平成６年度　実施設計、埋蔵文化財調査、用地造成、建設着工

平成７年度　公益法人の設立、建設工事、埋蔵文化財調査（報告）

平成８年度　施設完成、開業準備、開業、埋蔵文化財調査（調査、報告）

２．遺跡の地理的環境

阿蘇火山の噴出物によって、外輪山西側斜面から熊本平野にかけて緩やかに広がる台地を、熊本台地（肥後台地）と呼ぶ。この台地は、菊池川から木山川流域にかけての、いくつかの小台地から構成されており、そのほぼ中央に位置するのが、熊本市の東部を占める託麻台地である。

託麻台地は、およそ150～20ｍほどの標高を持ち、外輪山の裾から熊本市方向へ約10㎞にわたってなだらかな傾斜を見せている。同台地は、もともと白川が造成した隆起扇状地であり、大まかな地層としては、表層からローム質の火山灰土（黒色ローム層）、砂礫層（託麻砂礫層）、新規阿蘇火山噴出物からなる。周辺の土壌は、一般に保水力に乏しく水田には適さないが、台地の縁辺には、八景水谷、水前寺、江津

湖などの水量豊富な湧水地帯を擁し、遺跡の立地には格好の条件を備えていると言えよう。

さて、当遺跡の立地は、この台地の最も末端（西端）に当たる部分である。低地の平野部とのちょうど分岐点であり、また、熊本市域を潤しながら有明海へと注ぐ白川、そして熊本市南部の水田地帯を支える木山川・加勢川にはさまれて、低地の稲作、台地上の畑作とが混在する肥沃な土地ということができる。

３．調査区の地形

先に述べたように、遺跡の所在地は台地の末端という性格を持っている。第１図「陣山遺跡周辺遺跡位置図」を見ると、標高20ｍの等高線が、隣接する陸上競技場・競輪場を取り囲むように、続いてわずかな距離を隔てて標高15ｍの等高線が熊本県庁の周囲を回りながら、いずれも北東から南西方向に、ちょうど舌状の形を呈しながらのびている。目と鼻の先にある水前寺成趣園と当遺跡との比高差は、やがて10ｍほどにも達するなど、遺跡の周辺が都市部の地形としては、かなり急で複雑な傾斜を有していることが理解できる。当遺跡周辺には「陣山」という地名が残っているが、確かに西方の電車通り付近から当遺跡周辺を眺めると、小高い「山」という印象を持たされる。

さて、今回設定した調査区は、この舌状にのびる地形の尾根に相当する部分である。調査区自体の中では、急激な傾斜は見られないが、それでも北（武道館方向）から南（県庁方向）に向かって、比高差１ｍ程度の緩やかな傾斜を見せている。第５図「陣山遺跡遺構配置図」。時を同じくして調査を行った県庁北側駐車場付近の調査区からは、多少仰ぎ見るような格好になり、それが両調査区の遺跡としての性格の違いにも影響しているように思われる。

４．遺跡の歴史的環境

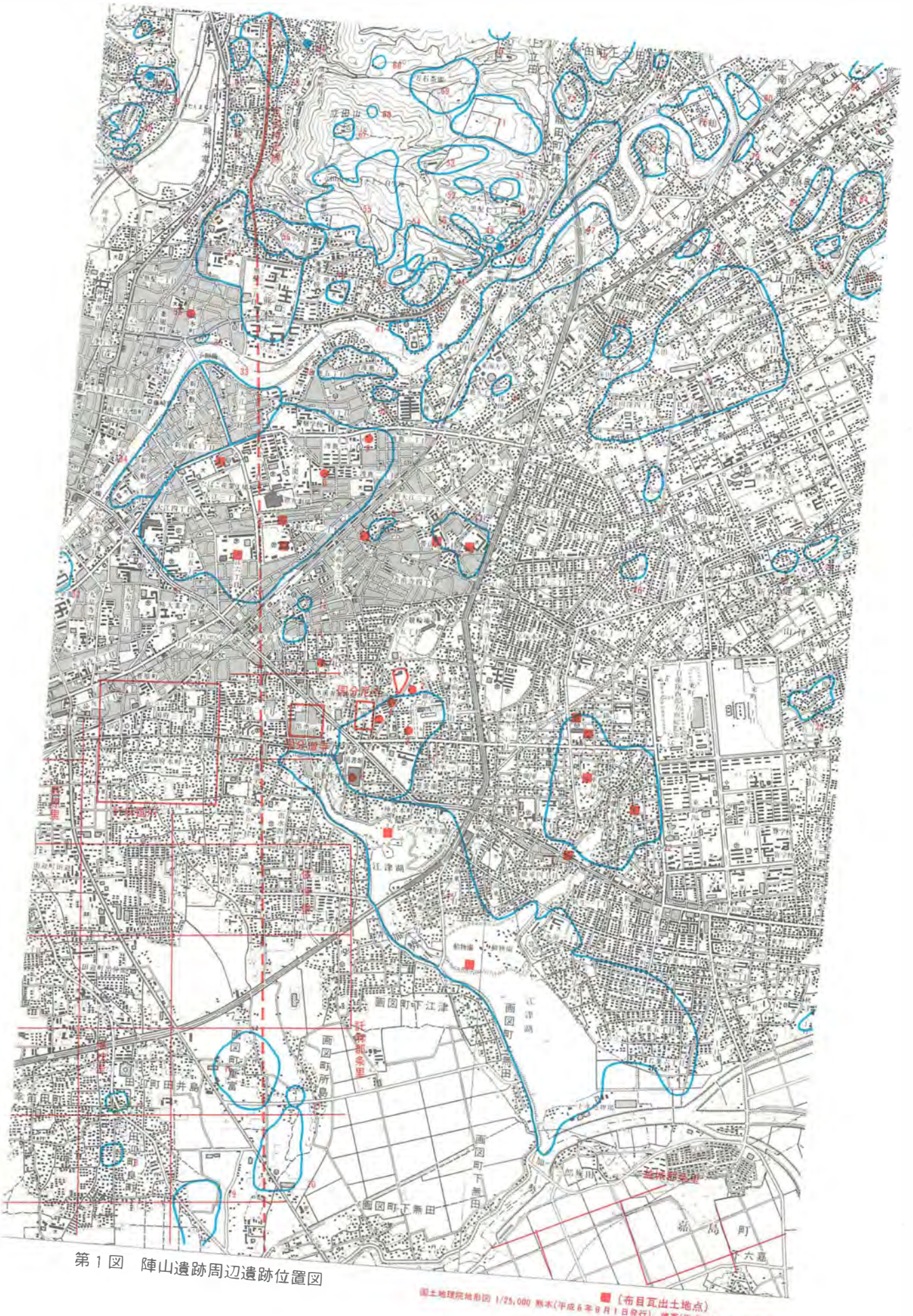
今回調査の行われた陣山遺跡の一帯は、熊本市周辺でも特に遺跡の集中する地点であり、各時代の人々の生活の痕跡を多くとどめている。周辺遺跡については、第１図「陣山遺跡周辺遺跡位置図」および第１表「陣山遺跡周辺遺跡一覧」に示しているが、ここでは遺跡分布の傾向と、時代毎の注目される遺跡について簡単にまとめてみたい。

はじめに、遺跡の大まかな立地についてであるが、遺跡の分布図からは次のような点を読みとることができる。①白川を中心とした河川に沿った地域に、多くの分布が見られること②遺跡の分布が時代が降るにつれ、台地上から平野部つまり低地へと移り変わってくることなどである。これは、河川の流域に集中的な遺跡が分布するのはしばしば見られることであるし、弥生時代以降、人々の生活の場が狭い丘陵部から水利の便のよい低地へ移ったことなどから理解することができよう。また、こうした経済段階の発展という自然派生的な要因とともに、古代の一時期において、当遺跡の所在する託麻郡に肥後国府、国分僧寺、国分尼寺などの公的機関が造られていたことから、同時期の遺跡が周辺に多く分布するという、いわば人為的な側面も見過ごすことはできない。

さて当遺跡は、このような分布傾向の中で、平安時代初期の遺構・遺物を中心とする遺跡として、どのような立地をするものであるか、また周辺にはどのような遺跡が存在するのであろうか。

まず、「旧石器時代」の遺物の発見は数例が報告されている。当遺跡と同時に調査が進行した神園山山麓の石の本遺跡（国体主会場建設用地）からは、ＡＴ層よりさらに下層の赤褐色土中より、局部磨製石斧、剝片石器などの石器が出土しており、県内最古の旧石器として注目を集めている。このほか、立田山山麓の天拝山Ａ遺跡からは、サヌカイト製のポイント、竜田陳内遺跡からは、三稜尖頭器などの出土があり、遺物の出土例が次第に増加しつつある状況にある。

次に「縄文時代」であるが、白川沿岸の河岸段丘上に多くの遺跡が点在している。熊本北バイパス建設事業に関連し調査の行われた、上西原遺跡・竜田陳内遺跡では、押型文土器・曽畑式土器など縄文前期の土器を確認しているし、早～晩期の多量の土器を出土した新南部遺跡群、多量の土偶が出土した上南部遺跡、白川沿岸では唯一の貝塚で鐘ケ崎式土器などを出土した渡鹿貝塚、後期中葉の北久根山式土器などを出土しその標識遺跡ともなっている北久根山遺跡などをその代表的な遺跡としてあげることができる。このように縄文期を通じた人々の活発な活



第１図　陣山遺跡周辺遺跡位置図

番号	遺　跡　名	備　　考
1	陣山遺跡	本報告遺跡，平成６年度県文化課調査
2	蚕糸試験場遺跡	平成５・６年度県文化課調査
3	神水遺跡	平成６年度県文化課調査
4	陣山廃寺跡	平成５年度熊本市文化課調査
5	陣山廃寺跡	平成６年度熊本市文化課調査
6	神水遺跡	官衙跡？昭和58・59年度熊本市文化課調査
7	水前寺廃寺跡	塔心礎
8	渡鹿廃寺跡	託麻郡寺？
9	渡鹿郡家跡	託麻郡家？
10	南平上遺跡	須恵器，土師器，瓦，骨蔵器，鉄製品
11	帯山遺跡群	須恵器，土師器
12	北水前寺遺跡	須恵器，土師器
13	西水前寺町遺跡	須恵器，土師器
14	神水遺跡群	
15	江津湖遺跡群	
16	重富遺跡	
17	下乙地頭館跡	
18	四才町陳屋敷遺跡	
19	良町二石遺跡	
20	山王遺跡	
21	所島大工免遺跡	
22	健軍神社周辺遺跡群	縄文，弥生ほか
23	佐土原遺跡	
24	新外Ｂ遺跡	
25	新外Ａ遺跡	
26	三郎塚遺跡	
27	保田窪東一本松遺跡	
28	乾原・迎八反田遺跡	縄文（早期～晩期）
29	南原遺跡	
30	新南部西原遺跡	縄文早～前期，弥生，古墳
31	大江遺跡群	
32	本荘遺跡	
33	大江白川遺跡	縄文早～前期土器，弥生カメ棺
34	新屋敷遺跡	須恵器，土師器，瓦
35	子飼遺跡	縄文後期土器
36	蚕養駅家推定地	
37	黒髪町遺跡群	黒髪町遺跡，九州女学院遺跡，坪井古屋敷出土甕棺
38	辻遺跡	須恵器，土師器，布目瓦
39	渡鹿遺跡群	渡鹿貝塚，北原甕棺遺跡
40	桜山中学校校庭遺跡	須恵器
41	宇留毛Ｂ遺跡	縄文晩期，土師器
42	宇留毛Ａ遺跡	縄文後・晩期
43	カブト山遺跡	縄文早～晩期，
44	宇留毛小頓橋際横穴群	つつじケ丘横穴群含む
45	長薫寺古墳	円墳？横穴式石室
46	竜田口遺跡	縄文後期
47	新南部遺跡群	新南部Ａ～Ｄ遺跡，北久根山遺跡等
48	女瀬平横穴群	
49	浦山第１横穴群	Ａ・Ｂ２群，Ａは４基・Ｂは３基
50	浦山第２横穴群	基数不明，消滅
51	九女グランド遺跡	
52	宇留毛浦山市営墓地遺跡	縄文，須恵器，土師器
53	立田山東中腹遺跡	
54	宇留毛神社周辺遺跡群	横穴墓等
55	黒髪町下立田遺跡群	須恵器，土師器
56	小峰遺跡	縄文後・晩期土器，須恵器，土師器，布目瓦
57	打越貝塚	
58	打越遺跡群	打越城跡，打越甕棺遺跡
59	永浦遺跡群	稲荷山古墳，白川学園石棺，永浦城跡，天福寺跡
60	高平箱式石棺	
61	松崎八幡箱式石棺	
62	室園遺跡	
63	松崎遺跡群	松崎甕棺遺跡，松崎中世遺跡
64	万石塚坊主古墳	
65	稲荷山古墳	県指定史跡
66	万石乗越遺跡	
67	立田山山頂遺跡	須恵器，土師器
68	万石茶山古墳群	横穴式石室
69	万石茶山遺跡	弥生（夜臼式）
70	天拝山遺跡	旧石器，縄文早～前期土器
71	秣野遺跡	縄文土器，須恵器，土師器
72	陳内上ノ園遺跡群	上ノ園Ａ・Ｂ遺跡，竜田陳内館跡
73	迫ノ上遺跡群	弥生甕棺，須恵器，土師器
74	竜田陳内遺跡群	竜田陳内遺跡，陳内宮の前遺跡
75	三の宮遺跡	縄文晩期土器
76	牧鶴遺跡群	牧鶴古墳，西牧鶴箱式石棺群，中牧鶴箱式石棺群
77	下南部遺跡	縄文後・晩期土器，弥生～古墳集落跡
78	松の窪遺跡	
79	平ノ山遺跡	
80	王田遺跡	縄文後・晩期土器，須恵器，土師器，石器
81	北小迫遺跡	
82	八反田居屋敷遺跡	
83	八反田遺跡群	縄文後・晩期
84	南小迫遺跡	
85	長嶺遺跡群	
86	供合松ノ上遺跡	

第１表　陣山遺跡周辺遺跡一覧

動の痕跡を各所でたどることができるほか、晩期の住居跡から炭化米を検出し、縄文期の稲作に関する論議に一石を投じたことで有名な上の原遺跡も、当遺跡の比較的近くに位置している。

「弥生時代」の遺跡としては、中・後期の遺跡を中心として、広く分布している。黒髪式土器の標識遺跡ともなっている立田山麓の黒髪遺跡、後期を中心とする集落が確認された石原亀の甲遺跡、また当遺跡と近接する地点としては、無文土器を出土した江津湖苗代津遺跡や加勢川河底遺跡のほか、神水遺跡（熊本市総合体育館および県立図書館の敷地）においても、70棟におよぶ竪穴住居群、須久式の合口甕棺、多数の石庖丁などを確認している。この時代は、稲作とともに次第に水の便を求めて、人々の生活域が次第に低地へと広がってきたことがわかる。

「古墳時代」になると、周辺の遺跡数は減少するが、後期頃より立田山麓から白川右岸にかけて膨大な数の横穴群が築かれるようになる。これは、比較的に加工のしやすい凝灰岩の崖面がその周辺に存在するためで、現在でも道路沿いの崖面に、横穴の開口部分をしばしば見かけることがある。先に調査が行われ、墓前祭祀の様子などもわかる好資料として県指定の文化財ともなったつつじヶ丘横穴群などは有名である。ただ、この期にあたる大規模な集落の存在はあまり明確にされていない。

「奈良・平安時代」になると、当遺跡の周辺の様相は一変することになる。律令体制の導入とともに、肥後においても行政組織の整備、条里制の施行などが進められ、その影響が周囲に及ぶのである。

これまでの研究によると、地方行政の要となる肥後の国府は、移転を繰り返し数ヶ所で営まれたと考えられている。益城国府、託麻国府、益城宮地国府、飽田国府などがそれであり、当遺跡の近辺には、このうち現在も地名の残る国府本町付近に国府(託麻)が置かれていたことが確認されている。また、このほか当遺跡の周辺の公的機関としては、国分僧寺、国分尼寺などがあり、その造営時期を奈良時代の後半と考えると、いわゆる託麻の国府もあまり変わらない時期に営まれていたと考えるのが自然であろう。いずれにせよ、推定託麻国府、国分僧寺、国分尼寺、そして官道（西海道）の周辺には、大江遺跡群、神水遺跡などをはじめとして、奈良から平安期にかけての、大規模な遺跡があり、当該時期にこれら公的施設を中心として一定のにぎわいを見せていたのは間違いないことのようである。

ところで当遺跡周辺は、国府が飽田郡へと移転した後、公的な機関は次第に移転や衰亡をたどったであろうが、肥沃な土地を背景にして、生産の場として位置づけられることになる。託麻郡一帯には、王家領としての性格を持つ「託麻庄」が成立し、後に同庄は安富庄（託麻本庄）と、当遺跡を包含する神蔵庄（新庄）に分かれるものの、鎌倉から南北朝期にかけて、大友氏の一族である詫麻氏によって永く領有されることとなる。

なお、この間、当遺跡の周辺が歴史的に注目されるのは、九州における南朝の拠点勢力であった菊池武朝と足利義満の命を受けた九州探題今川了俊との、天授４年（1378)「託麻原の合戦」の際の主戦場となったことである。そもそも遺跡周辺に残る「陣山」の地名は、この戦のおり陣が置かれたところから名付けられたと言われている。

さて託麻郡は、近世期には加藤家を経て細川氏の支配に組み込まれる。郡高は１万9088石であり、郡内には本庄、田迎の２手永が置かれ、村数は89を数えた。このうち、当遺跡周辺は「今村」として本庄手永に属した（村高615石余)。明治29年には、託麻郡は飽田郡と合併し飽託郡となり、さらに大正年間には遺跡周辺も熊本市に編入され、現在にいたっている。

現在の遺跡周辺は、東バイパスなどの基幹道路がすぐ側を通り、店舗やビルなどが密集し、熊本市における一つの拠点となる一方、路地に入れば閑静な住宅が軒を並べている。以前は桑畑などののどかな風景が広がる畑作地帯であったというが、昭和42年に県庁が現在の場所に移転して以来、開発の進度は次第にその速さを増し、また今回の新庁舎や熊本テルサの建設が周辺の開発に弾みをつけることは間違いない。古代の一時期に周辺に国府をはじめとする行政の施設が置かれ、周辺をにぎあわせたことが、奇しくも現代において繰り返されたことになる。　　（丸山）

第３節　発掘調査の概要

１．調査の方法および調査区の設定

【調査区の設定】

本調査に先立つ平成５年度に、「熊本テルサ」工事予定地内の建物本体部分に合計９本のトレンチ（試掘坑）を設定して行った分布調査では、そのほとんどのトレンチ（８本）から平安時代初期の遺物を確認した。しかも、確認された遺物量は、通常の試掘で確認される量を遥かに越えたものであったため、試掘調査対象地の全域を本調査の対象とすることが決定された。

平成６年度に実施した本調査では、この建物本体部分に加え、施工計画の進展とともに設計の固まった、貯溜漕、進入路、立体駐車場など、付帯設備の工事該当区域内にも間隔を詰めた小規模の試掘坑（15本）を設定し、遺構の広がりを随時確認じながら、実際の調査区を決定していった。こうして、最終的に調査を行った範囲が、第２図「陣山遺跡調査区設定図」である。

これによると、遺跡の中心部分は、工事予定地の南側部分であり、北側に当たる旧むつみ荘建物本体部分は、旧むつみ荘建設ないし旧聾学校建設工事によって破壊されていたため調査より除外した。また立体駐車場部分は、試掘調査では遺構の広がりが予想されたが、計画を変更し建設を見合わせる旨の通知が労政課よりなされたので、調査地より除外することとした。

なお調査区には、測量の基準とするための、調査用グリッド（区画）を、10ｍの間隔で設定した。グリッドの設定方向は、４級基準点測量によって導き出した公共座標Ⅱ系のメッシュの方向に沿ったもので、北から南に向かってアラビア数字で、また直交する側を西から東へアルファベットで表している。

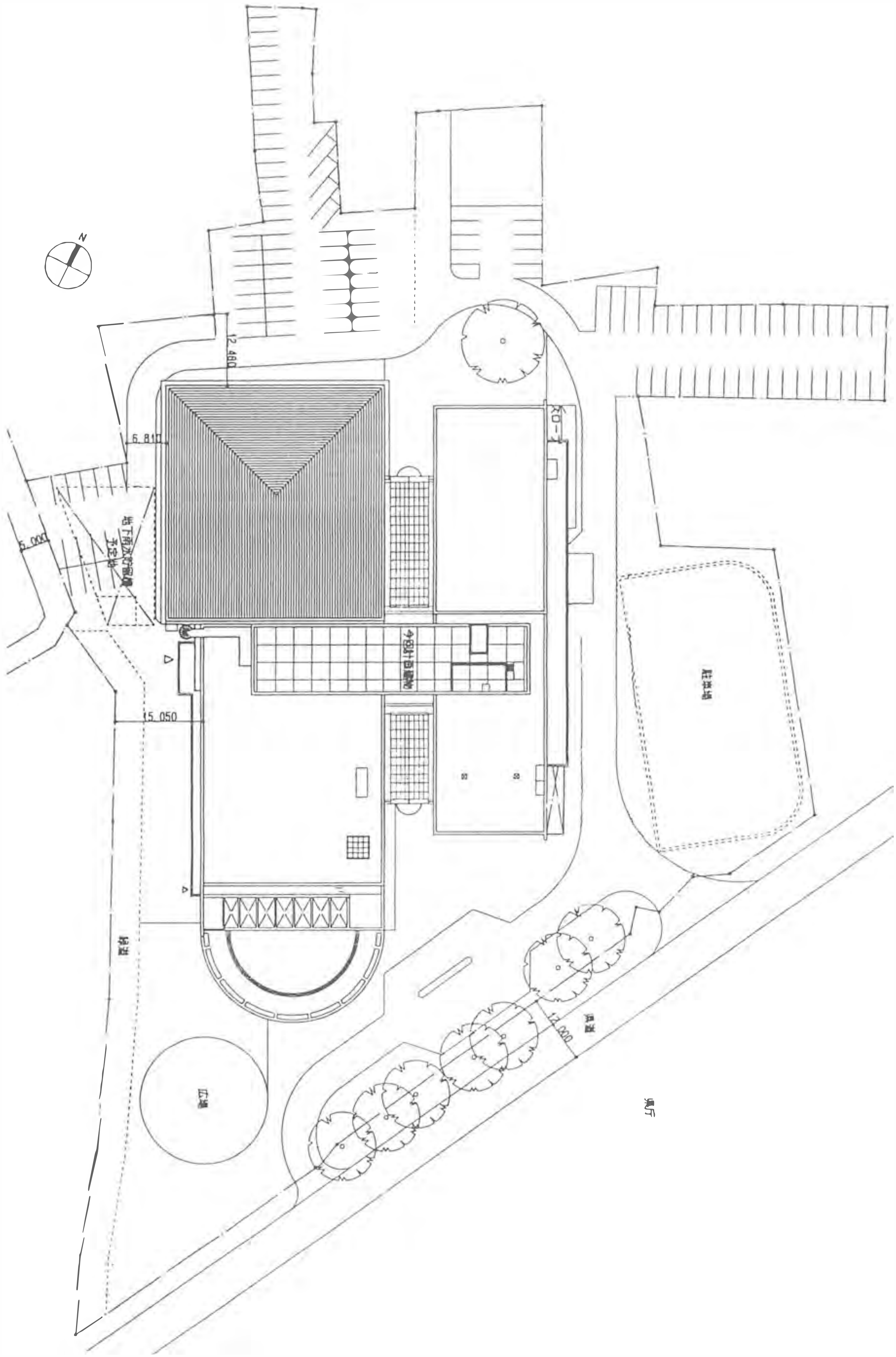
【調査の方法】

調査方法は、グリッド法を採用した。具体的には、第Ⅰ層の表土を重機を使用し一括して剝ぎ取った後、平安時代の遺物包含層である、第４図「陣山遺跡基本土層図」の第Ⅱ層および第Ⅲ層までを土層観察用の畦（セクション）を適宜確保しながら、一区画毎に人力で掘り下げて行く方法をとった。こうして掘り出した遺物は、出土位置及び高度を電算入力した上で、取り上げを行っている。遺物の出土量が多い区画では、同一の作業を繰り返し行う手順となる。なお、セクションは遺物取り上げ終了後、取り外した。

これらの遺物の取り上げ作業が終了した時点で、区画毎に清掃を行い、第Ⅳ層の上層で遺構の有無を確認した。存在が確認された遺構については、引き続き調査を行い、全体を1/20、部分（カマドなど）を1/10の縮尺で実測図を作成したほか、遺構の配置を確認するための全体図としては、1/200の平板測量図を作成することとした。なおこのほか、それぞれの調査段階において、適宜写真撮影を実施している。

また、土層の観察と平安時代以前の文化層の有無の確認のため、３カ所で深掘りのトレンチを設定した。第Ⅶ層まで人力によって掘り下げたが、遺構・遺物は確認できなかった。　（丸山）

第２図　陣山遺跡調査区設定図（調査区及び測量基準メッシュ）



第３図　「熊本テルサ」施工予定図

2．遺跡の基本層位

土層の観察および、縄文時代・旧石器時代遺物包含層の確認のため、合計3ヶ所で深掘りのトレンチを設定した。このうち、比較的地層の残存状況の良好だったものについて、第4図「陣山遺跡基本土層図」として、示すことにした

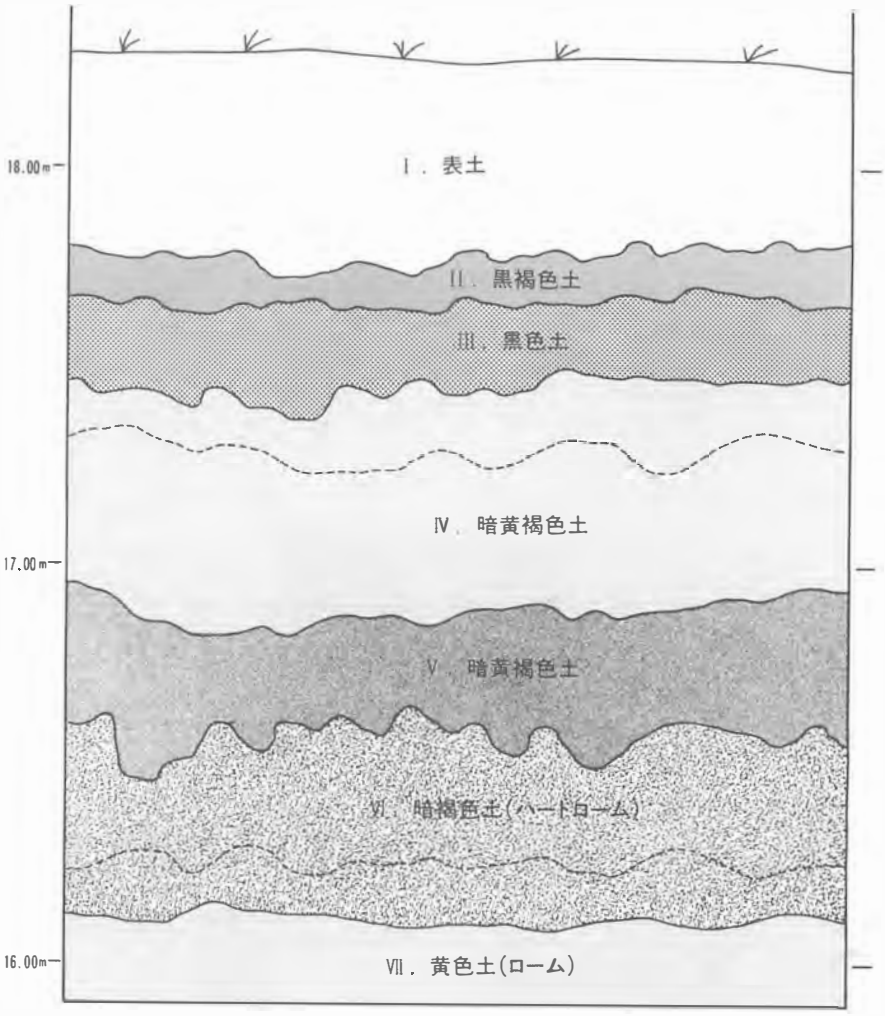
先ず、第Ⅰ層は表土であり、旧むつみ荘グラウンドの土など客土が2～3枚含まれている。厚みは50cm内外である。

第Ⅱ層は、黒褐色を呈し、次の第Ⅲ層がより不純になった層である。カーボン粒や焼土粒ほか不純物が多く混入している。平安時代遺物の一部や、中世の青磁片などをわずかに包含している。厚みは10cm内外である。

第Ⅲ層は黒色のフカフカした土壌で、俗に「黒ボク土」と呼ばれる火山灰層である。厚みはおよそ20cmから40cm程度で、層の上面を中心として、当遺跡の奈良～平安時代遺物のほとんどを包含する土層である。なお、調査区の南側では第Ⅱ層と第Ⅲ層の残存状況はよかったが、北側では、上部を削られているところも多く、次の第Ⅳ層が表土の直下から現れた地点も多かった。

第Ⅳ層は、黄褐色を呈しやや粘質の、いわゆる「赤ホヤ」の土壌化したものと考えられる層である。大きくは上下2層に分けられ、上層は第Ⅲ層が混入する漸移層であり、平安時代遺物の一部のほか、縄文時代遺物をわずかに含むことがある。下層はより純な土壌で遺物は含まない無遺物層である。なお、遺構の確認作業は、遺構の埋土と色調において差異のあるこのⅣ層で行っている。厚みは40cm内外である。

第Ⅴ層は、暗黄褐色土である。第Ⅳ層と比較して色調においてやや暗く、粘性もやや低くフカフカしている。縄文時代早～前期に相当する層と考えられるが、当遺跡においては遺物は含まない。厚みは30cm内外である。

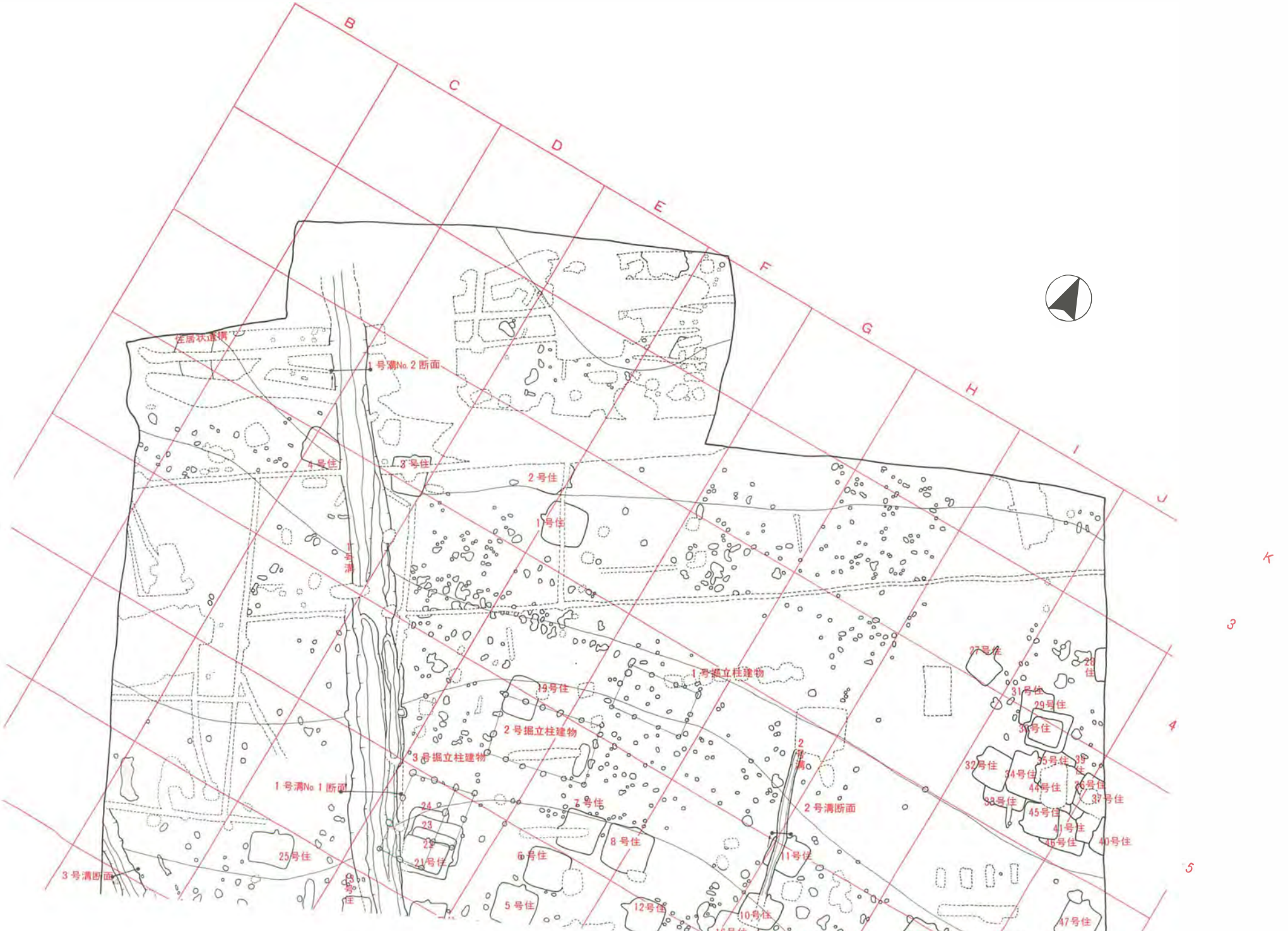


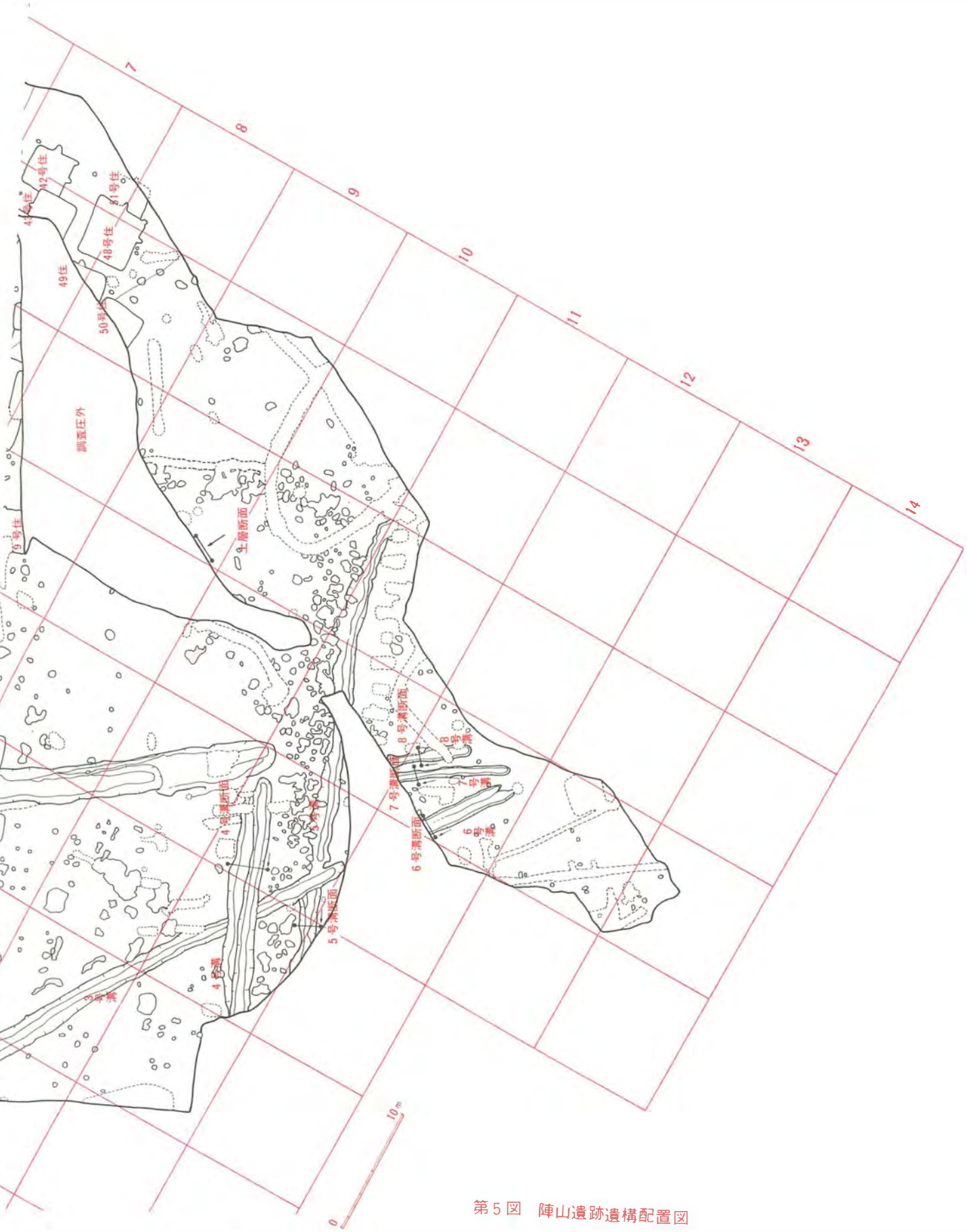
第4図　陣山遺跡基本土層図

第Ⅵ層は、言わゆる「ニガシロ」と言われるハードローム層であり、キメの粗いガチガチした堅い土層である。層は上下2層に分かれており、上層は第Ⅴ層の暗黄褐色に、下層は第Ⅶ層の赤褐色土に近い。厚みは50cm内外である。

第Ⅶ層は、かなり純粋なローム層であり、黄色を呈する。キメの細かい土壌であり粘質である。旧石器時代の地層に相当すると思われる。

このほか、調査地内の建設工事の掘削状況から観察すると、第Ⅶ層下は砂層、さらに礫層へと続くものと見られる。この砂礫層中には4～5mほどの直径の、安山岩の巨大な塊を多量に含んでおり、阿蘇山の火砕流に伴うものかと思われる。なお、現在の当遺跡付近における第1層目の地下水の透水層は地表面下約9m程度の深度と聞いている。　（丸山）


B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
3
4
5
住居状遺構
1号溝No.2断面
4号住
3号住
2号住
1号住
1号溝
19号住
1号掘立柱建物
2号掘立柱建物
3号掘立柱建物
1号溝No.1断面
24
23
22
21号住
25号住
3号溝断面
7号住
8号住
6号住
5号住
12号住
2号溝
2号溝断面
11号住
10号住
27号住
28住
31号住
29号住
30号住
32号住
34号住
35号住
36住
44号住
26号住
37号住
33号住
45号住
41号住
46号住
40号住
47号住



第５図　陣山遺跡遺構配置図

3．出土状況

陣山遺跡において出土した、時代毎の主要な遺構・遺物及び、それぞれの出土地点は、およそ次の通りである。出土地点については、第５図「陣山遺跡遺構配置図」に示している。

⑴　縄文時代

土器は押型文土器が８点、石器は石鏃24点、打製石斧１点、磨製石斧２点、敲石１点、などの出土がある。押型文土器や一部の石鏃は、早期に属するものと思われるが、一方隣接する神水遺跡（県庁南側駐車場）で後・晩期の土器が確認されていることなどから当該期の遺物も含まれているものと考えられる。しかし遺物が層的あるいは面的に一定の傾向を示していないことや、この期の遺構が見られないことなどから、本来的な出土とは考えられず、搬入品である可能性が高いと考えている。

⑵　弥生時代

石庖丁２点及び黒髪式土器甕片１点を検出している。前代と同じく遺構やその他の遺物は見られない。近接する神水遺跡（熊本市総合体育館、熊本県立図書館）の調査では、弥生期の遺構と共に、多量の石庖丁が検出されていることなどから、搬入品の可能性が高いと考えられる。

⑶　奈良～平安時代

当遺跡で出土した遺構・遺物のほとんどは、当該時期のもので占められている。

・掘立柱建物

調査区ほぼ中央付近に３棟を確認した。１号（２間×３間）、２号（３間×５間）、３号（２間×３間，東面に庇）であり、このうち、第１号建物は、時期がややずれるものの、第２号・第３号建物は、同時期に存在していた可能性が高い。

なお、周辺にはこのほかにもピットが多数存在することから、その他の掘立柱建物の存在を想定し、精査するも検出にはいたらなかった。

・竪穴住居跡

51棟を検出している。分布は、Ｊ－５区付近に集中的に分布するほか、Ｇ～Ｊ－７・８区付近にも密集しているようである。なお、この住居群は、北及び西方向には続かないものの、南及び東方向にはもう少し広がるものらしい。調査区の東側の駐車場付近の確認調査では、多量の遺物が確認されたし、南側にあたる、県庁北側駐車場の調査では、調査区の北端で、この住居群の南端に相当する住居跡２棟を確認している。

なお、住居跡はいずれも小規模であるほか、南壁を除くいずれかの壁面にカマドを設置している点などに共通性が見られる。

・溝遺構

合計８本を確認する。第１号溝が幅３～４ｍと、やや大きいほかは、いずれも１ｍ内外のものである。どの溝も水の流れたような形跡はなく、何らかの区画のために掘られたものと思われる。切り合い関係では、いずれも溝が住居跡を切ることから、住居群にやや後行するものらしい。

・その他の遺構

その他、明確ではないが、可能性のある遺構として、道路状遺構と、柵列状遺構がある。

まず、道路状遺構であるが、第３号溝の北側に沿って、約50㎝程度の幅の硬化面が断続的に確認された（網掛け部分）。なお、この硬化面は、Ｅ－10区の中ほどから、二つに分岐しており、Ｈ－10区方向に延びている。

一方、第２号掘立柱建物の北側に、東西に並ぶピット群、そして第５号溝の北側に沿うように並ぶ同様のピット群（Ｉ－10区で北へ屈曲）を検出している。いずれも直径30㎝程度のピットで、樹根を多数含みながら、密集し連続して掘られている。明確ではないが、ピット中には中世以降の遺物の混入は見られず、掘立柱建物を中心とした建物を囲むような柵列、ないし垣のようなものである可能性がある。（両遺構とも、現地において明確な判断が得られなかったので、本項での可能性の指摘にとどめたい）

なお、遺構の集中する地点とほぼ重複して、多量の遺物を確認している。出土遺物の内訳は、土師器および須恵器の各形態（墨書等含む）、彩釉陶器（緑釉３点、二彩１点）、硯２点、越州窯青磁１点、石製品（砥石16点、硯状石製品１点、分銅１点）、鉄製品60点、銅製品９点、瓦の各形態、土錘12点、紡錘車12点などである。（遺物の総量はコンテナに換算して、約100箱ほど）

⑶　その他の時代の遺物

中世の遺物としては、龍泉窯青磁、白磁、瓦質土器の火舎の細片をそれぞれ少量確認している。ただし、図化に耐えるような遺物はなかった。

なお、以前この地に聾学校が営まれていた頃の遺物、ならびに遺跡周辺の畑の土中に多量に含まれる畑人形（泥メンコ）を確認しているので、参考資料として掲載している。（丸山）

第Ⅱ章　調査の成果

第１節　縄文時代の遺物

【縄文時代遺物の概観】

当遺跡において確認された縄文時代の遺物は、押型文土器および石鏃、磨製・打製の石斧、敲石などの石器である。なお、調査区内に縄文期のものと思われる遺構の検出はなく、これらの遺物は、いわゆる包含層の中より出土したものである。しかも出土層位は、本来的な縄文時代遺物包含層ではなく、平安期の出土遺物に混じっての出土(Ⅲ層)である。また、出土遺物の分布も散発的で、一定の分布傾向を示すものではない。

１．土器（第６図）

【押型文土器】

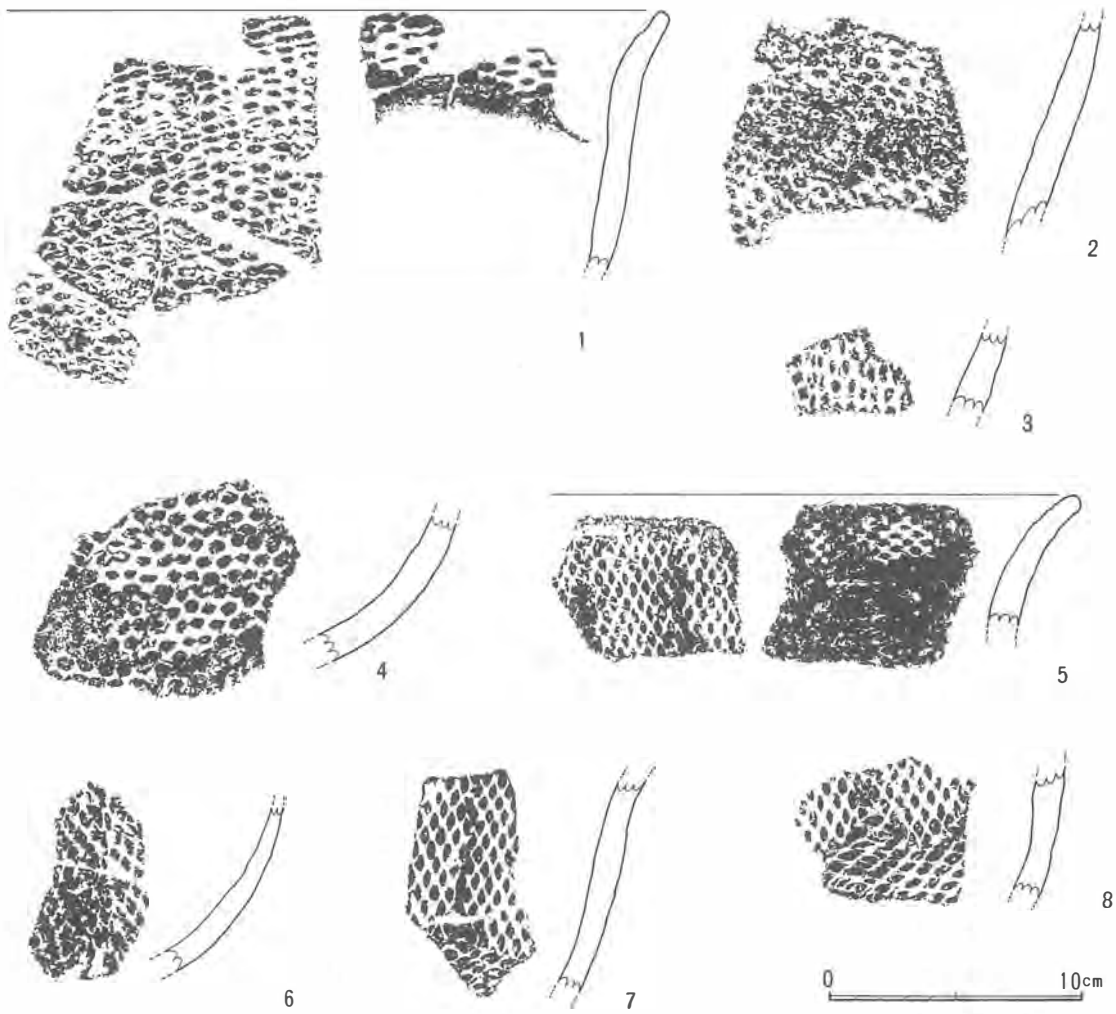
８個体を確認するのみである。出土範囲はＤ－７、Ｆ－６・７、Ｇ－６区におよそ限られているが、出土数が少ないため、一定の分布傾向を示すとはいえない。殆ど[illegible]のではない。文様は全て楕円文であり、その形態から２つに分類できる。

ａ　丸みのある楕円文を施されたもの（１～４）。

ｂ　菱形に近い楕円文を施されたもの（５～８）。

文様帯は縦、或いは横の一方向を示すものと、両方向を併せ持つものがみられるが、小破片のため、器形全体の構成は不明である。

以下、個々の土器について説明する。



第６図　縄文時代遺物実測図（1）

1は、出土した中で最も残りの良い個体で、F－6区内のピットより出土した7つの破片の接合資料である。口径は復元できず、底部も欠損しているため器高も不明だが、残存高が約19.2㎝である。文様は、口唇部と口縁内面部、及び表面に横方向に施される。

2は、G－6区出土の胴部の破片である。文様は摩耗が激しく詳細は不明だが、横方向に施文されている。

3は、F－7区出土の胴部の破片で、縦方向の施文である。

4は、F－7区出土の胴部の破片で、横方向の施文である。粘土帯の輪積みの痕が残り、その幅は約3㎝である。

5は、第1号溝出土の口縁部の破片である。口縁内面部には横方向、表面には縦方向の施文がなされる。口唇部への施文はない。

6は、D－7区出土の胴部の破片で、縦方向の施文である。表面は橙色を呈している。

7は、D－7区出土の胴部の破片である。上部が縦方向、下部が横方向の文様帯を持つ。

8は、D－7区出土の胴部の破片である。7と同様の文様帯を持つ。　（川俣）

2．石器（第7．8図）

当遺跡で確認した縄文時代の石器は、石鏃24点、磨製石斧2点、打製石斧1点、敲石1点の、合計28点である。いずれも、本来の層的な出土ではなく、奈良～平安期の遺物包含層Ⅲ層に混在しての出土である。このため、層位的な分類はできなかった。遺物中には縄文期を通じた幅広い時期の遺物が混じっていると思われるが、ここでは器種別に一括して報告を試みたい。

【石鏃】（第7図　9～32）

出土した石鏃の総数は24点を数える。一見していくつかの時期の遺物が混在している模様であるが、報告の便宜上、一括して形態別に分類し、配列した。

a．二等辺三角形で、基部が平らなもの

9～11であり、全体形は二等辺三角形を基調とし、基部のえぐれは見られない。側面の刃部がやや膨らむものがある。

b．二等辺三角形で、基部が緩やかにえぐれるもの

12～17であり、全体形は二等辺三角形を基調とし、基部に緩やかなえぐれが見られる。比較的大型の石鏃である。なお、12.13は基部のえぐれは、比較的浅く、他の資料とやや異なっている。

c．二等辺三角形で、基部がU字形にえぐれるもの

19、20であり、全体形は二等辺三角形を基調とし、基部がU字形に深くえぐれている。

d．二等辺三角形で、基部がV字形にえぐれるもの

21～25であり、全体形は二等辺三角形を基調とし、基部にV字形の鋭角的なえぐれが見られる。

e．正三角形で、基部が平らなもの

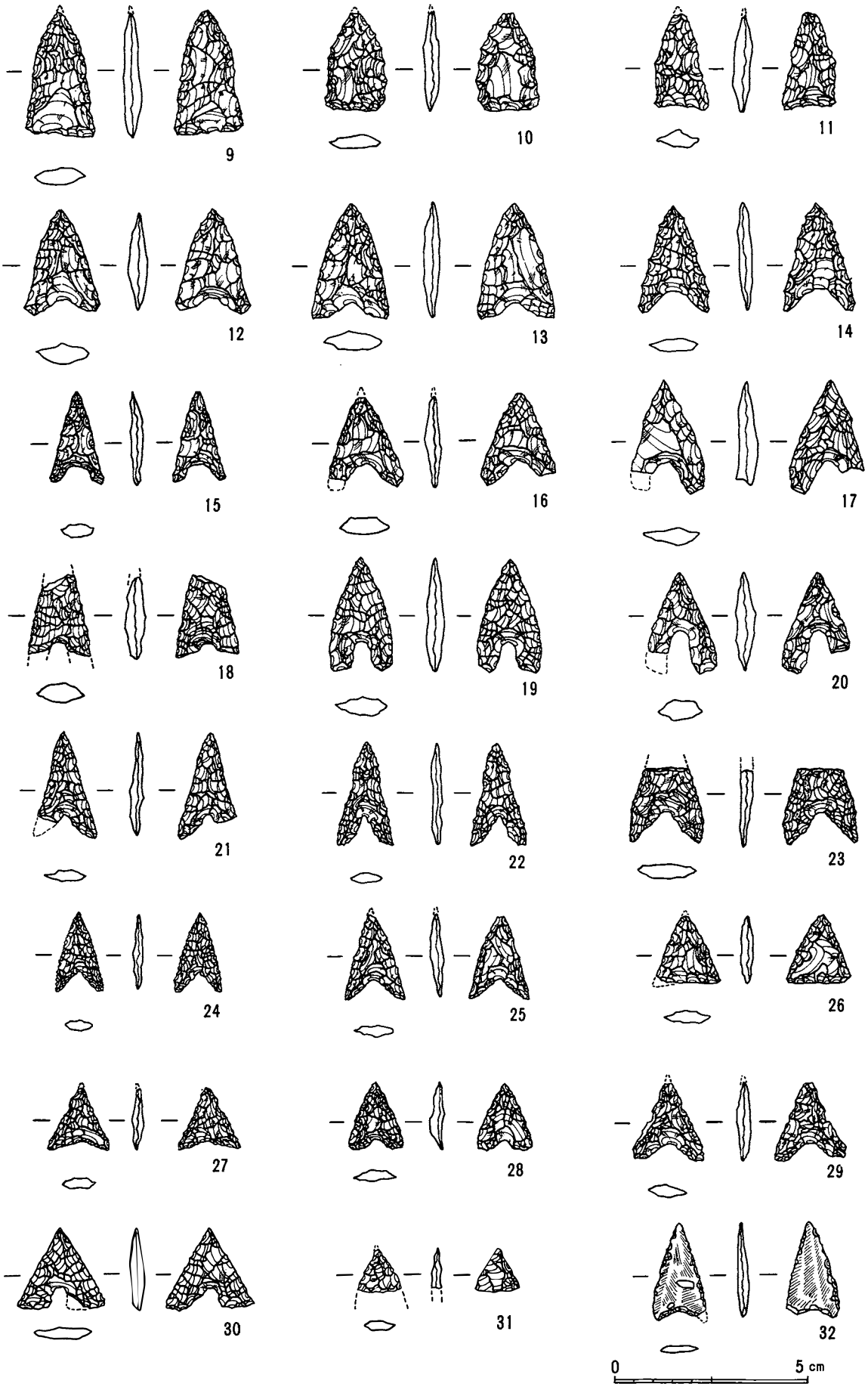
26、27であり、全体形は正三角形を基調とし、基部にえぐれが少ないか、平らなものである。

f．正三角形で、基部がえぐれるもの

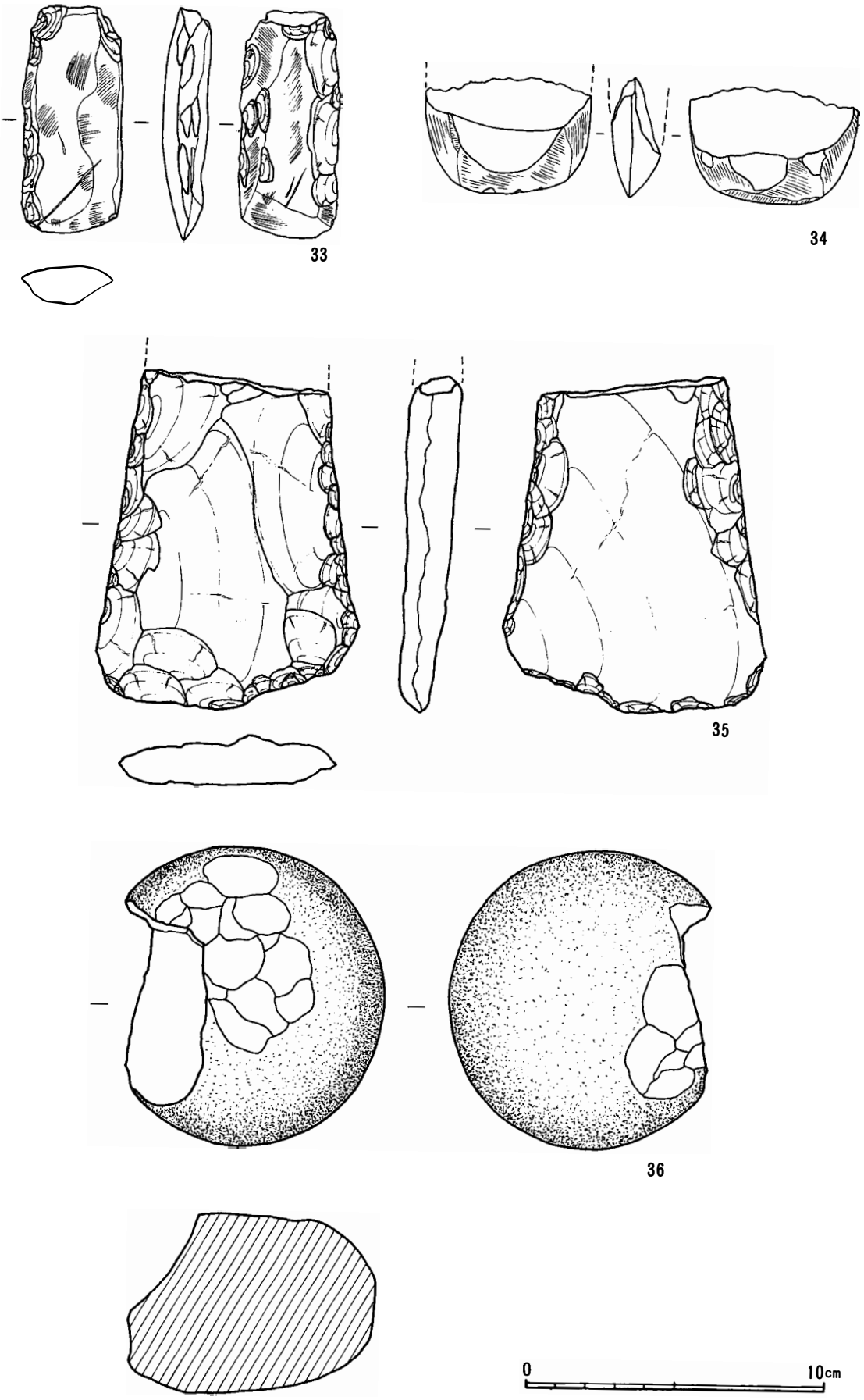
28～30であり、全体形は正三角形を基調とし、基部にえぐれが入る。なお、28．29は浅く、30の資料はU字形に深くえぐれるのが特徴である。

なお、18．31は大きく欠損するため、詳細は不明である。

以上の遺物のほか、特異な石鏃として、局部磨製石鏃が1点みられた。32がそれで、半透明な姫島産



第７図　縄文時代遺物実測図　(2)



第８図　縄文時代遺物実測図　(3)

に類似する黒曜石を、通常の調整を施した後、両面の凸部を丹念に研磨して厚みをとっている。ただし研磨は側面には簡単にしか施さないため、２次調整のための側面（刃部）の剥離面は、鋭角的ではないものの、そのまま残されている。この種の製品は縄文早期の文化層にともなう遺物らしい。

なお、石鏃に使用された石材は、黒曜石、安山岩、玄武岩、チャートなどがあり、このうち、黒曜石の産地としては、腰岳系(漆黒のもの)、姫島系(半透明の灰色)、桑ノ木鶴系(透明感のある良質な材)にそれぞれ類似した少なくとも３ヶ所程度の産地が想定される。

【磨製石斧】（第８図33．34）

２点が出土している。34は、両刃の磨製石斧で、刃部には使用に伴うと見られる痕跡が残っている。しかし、刃部以外を大きく欠損するため、詳細は不明である。

33は、小型で両刃の磨製石斧である。片面は、素材の自然面をそのまま利用するため、全体が緩やかに湾曲している。刃部は使用のため、片減りしている。

【打製石斧】（第８図35）

１点のみの出土である。安山岩製の打製石斧で、刃部を残し、基部を大きく欠損している。基部と比較して刃部がやや「ハ」の字形に開いており、刃部は使用のため片減りしている。白川沿岸の縄文後・晩期の遺跡より出土するものと酷似している。

【敲石】（第８図36）

１点のみの出土である。丸い自然礫の平坦面の両側が敲打により剥離している。研磨によって磨耗した面は、明らかには認められず、敲石として使用したものと考えられる。　（丸山）

No	器種名	出土地点	石　材	寸法(長・幅・厚)cm	重量g	色　調	そ　の　他
9	石鏃	5671	玄武岩	*3.2×1.8×0.5	2.3	黒灰色	比較的大型の石鏃である。側面部がややえぐれるのに対し、基部のえぐれが見られないのが特徴である。なお、先端部がわずかに欠損する。
10	石鏃	6305	玄武岩	*2.5×1.69×0.43	1.6	黒灰色	側面が丸みをおびて膨らみ、基部のえぐれがほとんど見られない鏃である。調整は粗いほか、先端部をわずかに欠損する
11	石鏃	6207	黒曜石	*2.5×1.4×0.52	1.4	黒色	全体の形状が不揃いで、調整が非常に粗い。基部はえぐれが見られず、直線的である。なお、先端部がわずかに欠損する。石材は腰岳系と推定される
12	石鏃	5667	安山岩	2.7×1.97×0.52	1.6	灰色	全体的に粗い調整をほどこす。基部のえぐれが少ない
13	石鏃	８号住	玄武岩	2.93×2.5×0.45	1.6	背灰色	大型の鏃である。刃部はゆるやかに湾曲し、基部はわずかにえぐれている。先端部をわずかに欠損する
14	石鏃	3411	玄武岩	2.75×1.8×0.38	1.0	黄灰色	ていねいな調整をほどこしたものである。基部のえぐれがやや深いのが特徴である
15	石鏃	6346	玄武岩	2.4×1.4×0.3	0.8	暗灰色	均整のとれた二等辺三角形を呈するもので、基部が広くえぐれるのが特徴である
16	石鏃	6201	玄武岩	*2.33×*1.96×0.43	1.3	黄灰色	中型の鏃で、基部は広く深くえぐれるのが特徴である。先端部および基部の一方が欠損する
17	石鏃	6287	黒曜石	2.8×1.9×0.5	1.8	黒色	大型の鏃で、側面は基部にかけてゆるやかに湾曲する。調整は全体に粗い。基部の一方を欠損する。石材は腰岳系統か
18	石鏃	6343	チャート	*2.1×*1.6×0.55	1.6	緑灰色	全体的に厚みがあり形状も大型になる鏃である。先端部および基部の両方が欠損する
19	石鏃	Ⅰ－６区	黒曜石	2.9×1.75×4.3	1.4	透明な黒色	側面の刃部がゆるやかに湾曲し、基部が深くえぐれているのが特徴である。調整は丁寧である。石材はきわめて透明感のあるもので、桑ノ木鶴系統の石材に類似する
20	石鏃	4950	チャート	2.6×*1.8×0.5	1.1	黒灰色	基部が深くえぐれるのが特徴である。なお基部の一方が欠損する
21	石鏃	6281	黒曜石	2.8×*1.55×0.35	0.8	透明な黒色	全体に細身でていねいな調整をほどこす。刃部は直線的で基部のえぐれは深い。石材は姫島産の黒曜石に類似する。なお、基部の一方を欠損する
22	石鏃	6292	黒曜石	2.66×1.5×0.29	0.8	透明な黒色	細身の石鏃であるが、刃部の側面ほぼ中程がややえぐれるのが特徴である。石材はやや透明感のある姫島系統の石材であると思われる
23	石鏃	Ｆ－11	黒曜石	*1.95×1.95×0.33	1.0	黒色	大型の鏃で、基部のえぐれが広く深く入るため、基部の先端はとがっている。上半を大きく欠損する。石材は腰岳系と思われる
24	石鏃	Ⅰ－６区溝	黒曜石	2.08×1.25×0.23	0.4	透明な黒色	均整のとれた二等辺三角形を呈する中型の鏃である。調整も非常に緻密でていねいに行っている。石材は非常に良質で透明感に富む。桑ノ木鶴系統の石材と推定される
25	石鏃	Ｆ－８区	玄武岩	*2.2×1.1×0.3	0.6	暗背灰色	中型の石鏃で調整も比較的にていねいである。基部のえぐれは広く直線的なのが特徴である。先端部を一部欠損する
26	石鏃	Ⅰ－６区Ｐ	チャート	*1.75×*1.67×0.3	0.7	透明な灰色	小型の鏃で、正三角形に近い全体形を呈する。基部のえぐれはほとんどなく直線的である
27	石鏃	4133	黒曜石	*1.57×1.55×0.3	0.4	透明な灰色	正三角形に近い小型の鏃で、基部のえぐれはわずかに見られる程度である。先端部をわずかに欠損する。姫島系の黒曜石を使用するものと思われる
28	石鏃	4788	チャート	1.71×1.43×0.35	0.6	黄緑灰色	小型の鏃で、正三角形に近い全体形を呈する。基部のえぐれも比較的浅い
29	石鏃	Ｆ－11	玄武岩	2.0×1.83×0.38	0.8	黒灰色	正三角形に近い中型の鏃で、基部が広くえぐれるのが特徴である。先端部がわずかに欠損する
30	石鏃	984	黒曜石	2.1×2.3×0.38	0.9	透明な黒色	中型の鏃である。全体は正三角形を呈し、刃部は直線的、基部は深くえぐれる。基部の一方はわずかに欠損する。なお、石材は姫島系統に類似する
31	石鏃	5880	黒曜石	*1.13×*1.15×0.27	0.3	黒色	下半を大きく欠損するため全体形は不明である。石材は腰岳系統に近い
32	磨製石鏃		チャート	2.55×1.35×0.25	0.7	黄緑灰色	出土の鏃のうち特異なものである。側面の刃部を残して、全体を研磨している。なお、基部の一方を欠損する
33	磨製石斧	4189	粘板岩	7.5×3.3×1.5	54.5	黄灰色	小型で両刃の磨製石斧である。片面は自然面そのままを利用し、緩やかに湾曲している。なお、刃部は片減りしている
34	磨製石斧	Ｆ－８区	玄武岩	*3.7×5.7×*1.7	44.0	暗背灰色	大きく欠損しているため、全体形は不明であるが、両刃の磨製石斧である。刃部には使用に伴うと見られる痕跡がのこる
35	打製石斧	１号溝	安山岩	*11.3×8.8×1.8	222.0	黄灰色	上半を大きく欠損する打製石斧である。縄文時代後・晩期の遺跡から多量に出土する「石鍬」としての性格を持つ石斧と共通した形態を持つ。なお刃部の一方は使用のためか、片減りしている
36	敲き石？	Ｈ－12	砂岩	9.9×*8.9×6.1	740.0	灰色	丸い自然礫の平坦面の両面の一部が敲打により剥落している。敲き石として使用したものか、その他の用途があるものか不明

第２表　縄文時代石器観察表

第２節　弥生時代の遺物

当遺跡より出土した弥生時代の遺物は、石庖丁が２点及び黒髪式土器甕片１点である。（黒髪式土器については第４号溝の項を参照のこと）

遺跡の地理的環境の項で述べたように、遺跡の周辺は、台地と平野部の中間地点に位置し、弥生期の生活域としては格好の条件を備えている。このため、近接する神水遺跡（熊本市総合体育館、県立図書館敷地）では、70棟にも及ぶこの時期の住居跡や多数の石庖丁などを確認している。

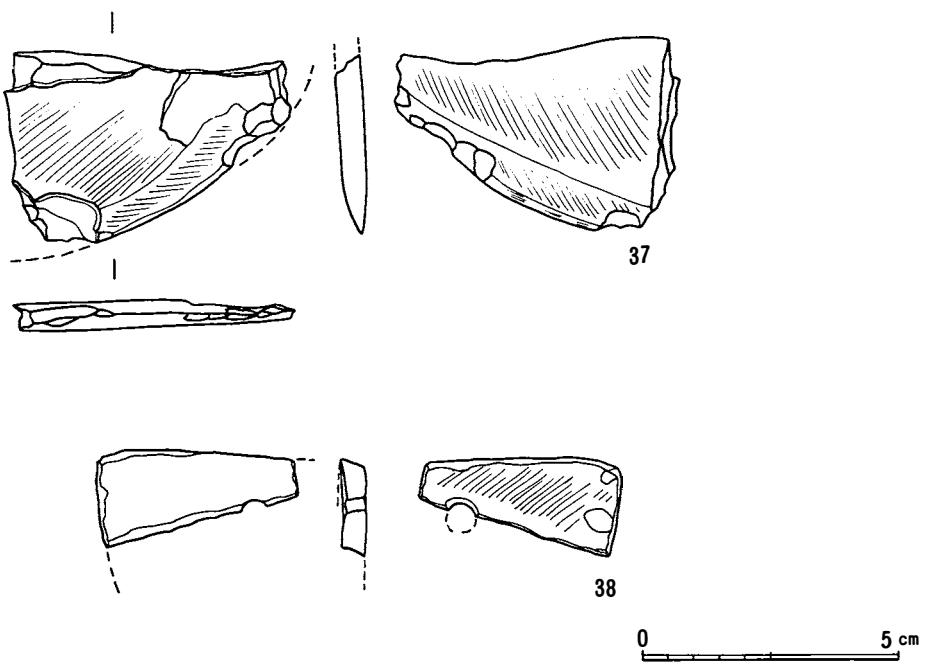
さて、当遺跡には、この時期の遺構やその他の遺物は見られないことから、出土した石庖丁は、神水遺跡を含めた、調査区域外よりもたされたものと考えられる。

【石庖丁】（第９図）

37は、刃部が弧を描く、三日月形の全体形を呈する石庖丁らしい。薄い粘板岩系の素材を使用し、側面や刃部を丁寧に研磨し、両刃に仕上げている。なお、欠損が激しく、窄孔された紐通しの穴の部位は認められない。また、刃部は数カ所が欠落するなど、消耗の度合いが激しい。残存部位重量は16.6ｇである。

38も、同様に刃部が弧を描く三日月形の全体形を呈する石庖丁である。玄武岩系の素材を使い、側面を研磨した痕跡や、紐通しのために窄孔された穴が認められる。なお、側面が薄く剝落するほか、刃部等を大きく欠損する。残存部位重量は6.5ｇである。

（丸山）



第９図　石庖丁実測図

第３節　古代の遺構・遺物

１．遺構

(1)　竪穴式住居跡

当遺跡で確認した竪穴式住居跡は、総数51棟を数える。このほかにも、本調査に先だって調査が行われた熊本市文化課による市営団地敷地の調査でも同様の住居を確認しており、一帯にはかなり大きな集落が存在していたことが推定される。

さて住居跡群の特徴としては、①規模がきわめて小さいこと②住居の方向に規則性があること③確認できるすべての住居にカマドが設置されていること、などを指摘することができる。

①の住居の規模は、平均的な住居においても３ｍ四方程度であり、中には第27号住居跡のように約2.6ｍ×2.1ｍと、かなり狭い空間のものもある。一般的に時代が降るとともに住居跡は小型化する傾向にあるらしい。次に②の住居の方向については、ほとんどの住居は、カマドの方向にかかわらず、ほぼ南北の方向に沿って造られている。ただし、住居群の配置については一定の規則性を見出すまでにはいたらないようである。また③のカマドの有無は、攪乱に切られたものや調査区外に住居がおよぶものを除いて、すべての住居に付属しており、それぞれが一定の条件のもとに独立した単位であったことを推定させる。なお、カマドの方向に築造時期による規則性などは見られず、南側を除くいずれかの壁面に沿って不規則に設置されているようである。

なお、このほか、いずれの住居も出土遺物は少なく、柱穴の規模が小さいこと、硬化面がかなり堅緻に形成されていたことなどについて共通性が見られた。

以下、個々の住居跡については、その全体の平面および断面の実測図と、特にカマドの残存状況が良好なものについては、カマド詳細図を掲載している。なお、実測図中、網掛けを施した部分は、濃い部分がカマドの燃焼によって焼土の分布する地点を、また薄い部分は、カマドに使用されていた粘土および同種の粘土が床に貼付されている地点をそれぞれ示している。また主軸方位は、カマドの中軸線を測り記したものである。　　（丸山、川俣）

第１号住居跡（第10図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－82°－Ｗ

［区域］

Ｆ－５区

［重複］

攪乱の溝に切られる

【構造】

［形状］

隅丸の方形

［規模］

長軸　3.50ｍ×短軸　3.15ｍ

［深さ］

確認面より約10㎝

［覆土］

暗褐色土。分層できず

［床面］

床面の南東寄りに全体の３分の２を覆う程度に硬化面が分布する

［柱穴］

４本柱。いずれも堀り方が10～15㎝、柱痕が６～８㎝程度と小さい

［カマド］

西側壁面中央部に設置されている。少々煙道が北にねじれ、粘土で造られているソデの部分がわずかに残る

［付帯設備］

床面南西隅に直径約20㎝、深さ約20㎝程度のハート型のピット１基を検出する。貯蔵穴かもしれない

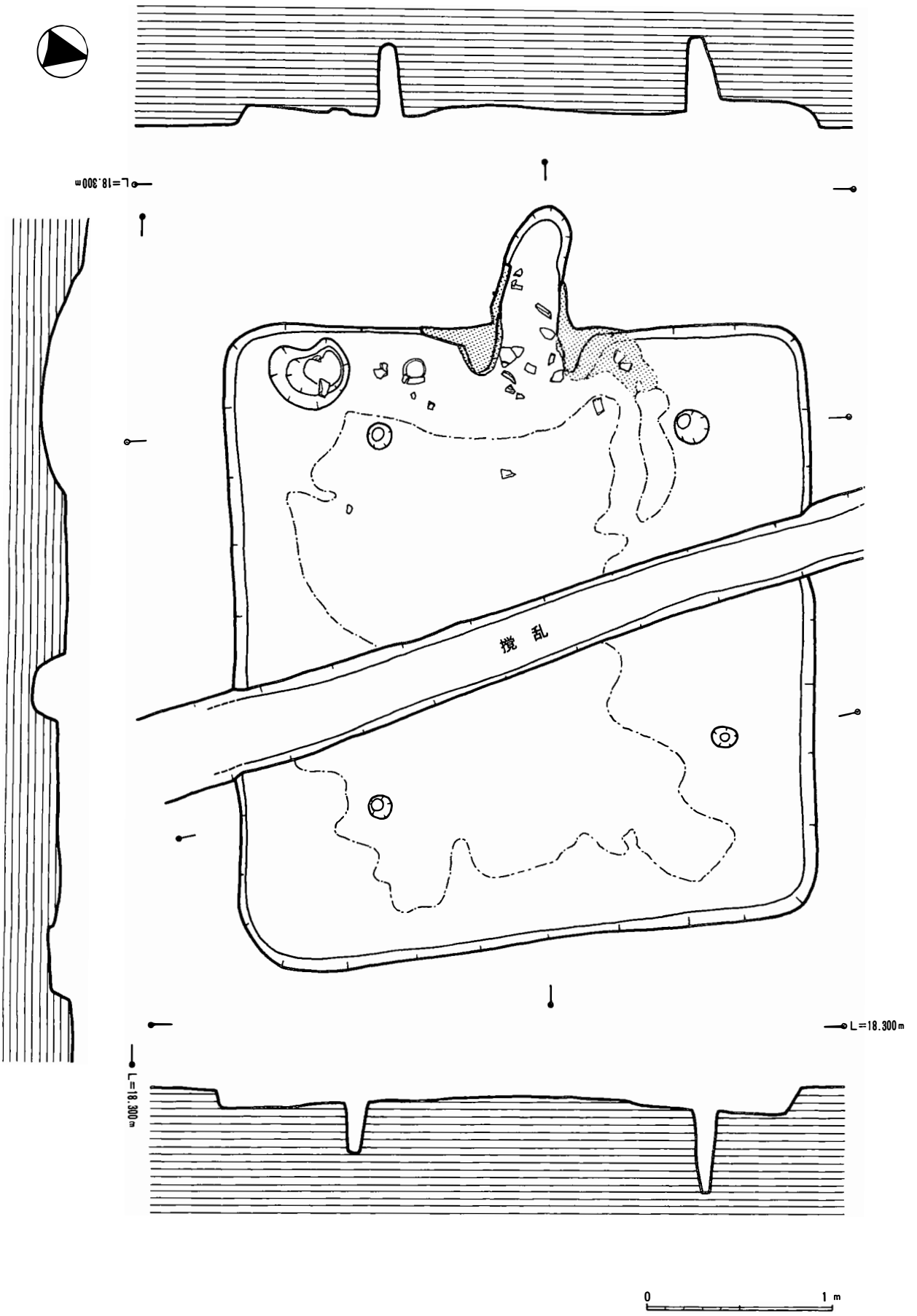
【特記事項】

切り合いはないが、第２号住居跡と隣接する

【遺物】（第14図 39）

39は、完形にちかい土師器の坏である。全面に回転ヘラミガキが施され、口径13.3㎝、器高3.35㎝、底径7.0㎝を測る。橙色を呈する

その他、土師器の細片が少量出土するが、図化には至らなかった



第10図　第１号住居跡実測図

第２号住居跡（第11図）

【位置】

［主軸方位］

不明

［区域］

Ｅ－５区

［重複］

攪乱の溝に大きく切られる

【構造】

［形状］

不明

［規模］

不明

［深さ］

確認面より７～８㎝

［覆土］

暗黒褐色土。分層できず

［床面］

通常の住居と異なり、硬化面の形成範囲は部分的で、わずかにカマド前方の一部に40㎝四方程度の、小規模な範囲を検出する

［柱穴］

４本柱と思われるが、このうち３本を検出。深さなどは不揃いで、一抹の疑問が残る

［カマド］

東側壁面に設置する。両ソデに使用されていたらしい粘土の一部と燃焼面の焼土を検出する

［付帯設備］

カマド北側の壁面沿いにピットを１基検出する。周辺の住居にも類例があることから、貯蔵穴等の用途の穴かも知れない。また、カマド前方部に２～３㎝程度の厚みで粘土を貼り付けた1m四方程度の規模のくぼみを検出する。用途は不明だが、他に類例があることや、カマドに使用するのと類似した粘土であることから、カマドと何らかの関係があるものかも知れない

【特記事項】

当住居は、激しく削平を受けていることから、残存状況はきわめて悪い。住居内にかすかにもう１本のラインが見られることから、あるいは２棟の住居の切り合いの可能性もある

【遺物】（第14図 40～45）

40は、土師器の坏である。口径13.8㎝、器高3.2㎝、底径8.8㎝を測る。底部はヘラ切り後ナデ、体部外面下部はヘラケズリ後回転ナデ、他は回転ナデ後回転ヘラミガキで仕上げられる。外面は橙色からにぶい橙色、内面はにぶい橙色を呈する

41は、土師器の坏である。口縁部が楕円形を呈するので、口径12.0～13.0㎝、器高3.6㎝、底径10.0㎝を測る。底部はヘラ切り後ナデ、体部は回転ナデ、見込みはナデで仕上げられる。外面は橙色、内面はにぶい橙色を呈する

42は、土師器の坏である。口径15.2㎝、器高3.6㎝、底径11.4㎝を測る。摩耗のため調整は不明で、淡黄褐色を呈する

43は、須恵器の皿である。口径13.0㎝、器高2.0㎝、底径10.5㎝を測る。底部はヘラ切り後ナデ、体部は回転ナデ、見込みはナデで仕上げられる。灰色を呈する

44も、須恵器の皿である。口径17.2㎝、器高2.05㎝、底径14.0㎝を測る。底部はヘラ切り後ナデ、体部は回転ナデ、見込みは回転ナデ後ナデで仕上げられる。灰オリーブ色を呈する

45は、須恵器の蓋である。口径14.3㎝、器高約2.2㎝を測る。天井部はヘラケズリ後ナデ、口縁部付近は回転ナデ、体部内面はナデで仕上げられる。淡黄灰色を呈する

第３号住居跡（第12図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－14°－Ｗ

［区域］

Ｄ－５，Ｄ－６区

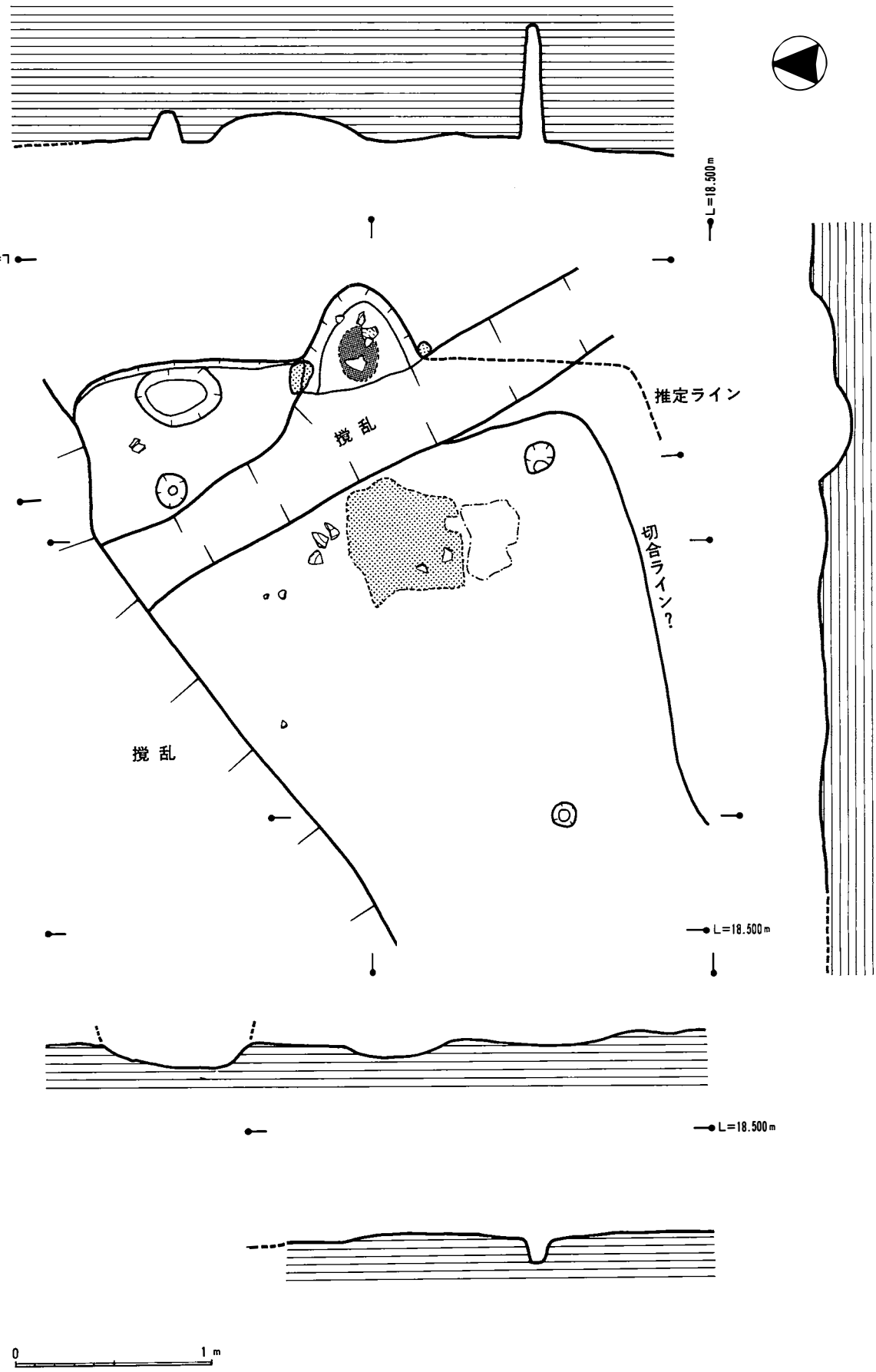
［重複］

攪乱によって、住居跡中央部を大きく切られる

【構造】

［形状］

隅丸の台形に近い方形。東側壁面がやや外に張り出すなど多少いびつな形である



第11図　第２号住居跡実測図

［規模］

長軸　3.0m×短軸　2.8m

［深さ］

確認面より7～8cm

［覆土］

暗黒褐色土。分層できず

［床面］

他住居のようなしっかりとした硬化面は形成されず、南西コーナーの一部に検出したのみ

［柱穴］

4本柱。規模がやや不揃いである

［カマド］

北側壁面中央やや東よりに設置する。残存状況は悪く、燃焼面の焼土を検出するのみである

［付帯設備］

カマドに向かって左側の壁沿いに直径50cm、深さ15cm程度のピット1基を検出。あるいは貯蔵穴状の用途のものかも知れない

【特記事項】

不整形の住居である。他の住居に見られるような堅緻な硬化面が見られない。攪乱に切られるほか、上部の削平が激しく、全体的な残存状況は悪い

【遺物】（第14図 47）

土師器の細片がわずかに出土した。実測可能な一点のみ図示した

47は土師器の坏で、残存高2.9cm、底径9.0cmを測る。底部はヘラ切り後ナデ、体部外面下部はヘラケズリ、内面は回転ナデ、見込みはナデで仕上げられる。なお、摩耗のため体部外面の調整は不明である。外面はにぶい橙色を呈し、内面には橙色の赤彩が施される

第4号住居跡（第13図）

【位置】

［主軸方位］

N－100°－W

［区域］

D－6区

［重複］

東側の壁を第1号溝遺構に、南東隅を攪乱溝に切られる

【構造】

［形状］

隅丸の方形

［規模］

長軸　3.20m×短軸　3.14m

［深さ］

確認面より5～16cm

［覆土］

暗褐色土。分層できず

［床面］

硬化面が床面中央部に東西に広がるほか、小さくブロック状に点在する

［柱穴］

4本柱。長径15～25cm、短径10～20cm、深さ36～48cm程度

［カマド］

西側壁面中央部よりやや南側に設置されている。燃焼面と南側のソデが残るが、ソデの下部に土師器椀がはまりこんだ形で検出されたので、このソデは原位置を動いているものと思われる

［付帯設備］

検出せず

【特記事項】

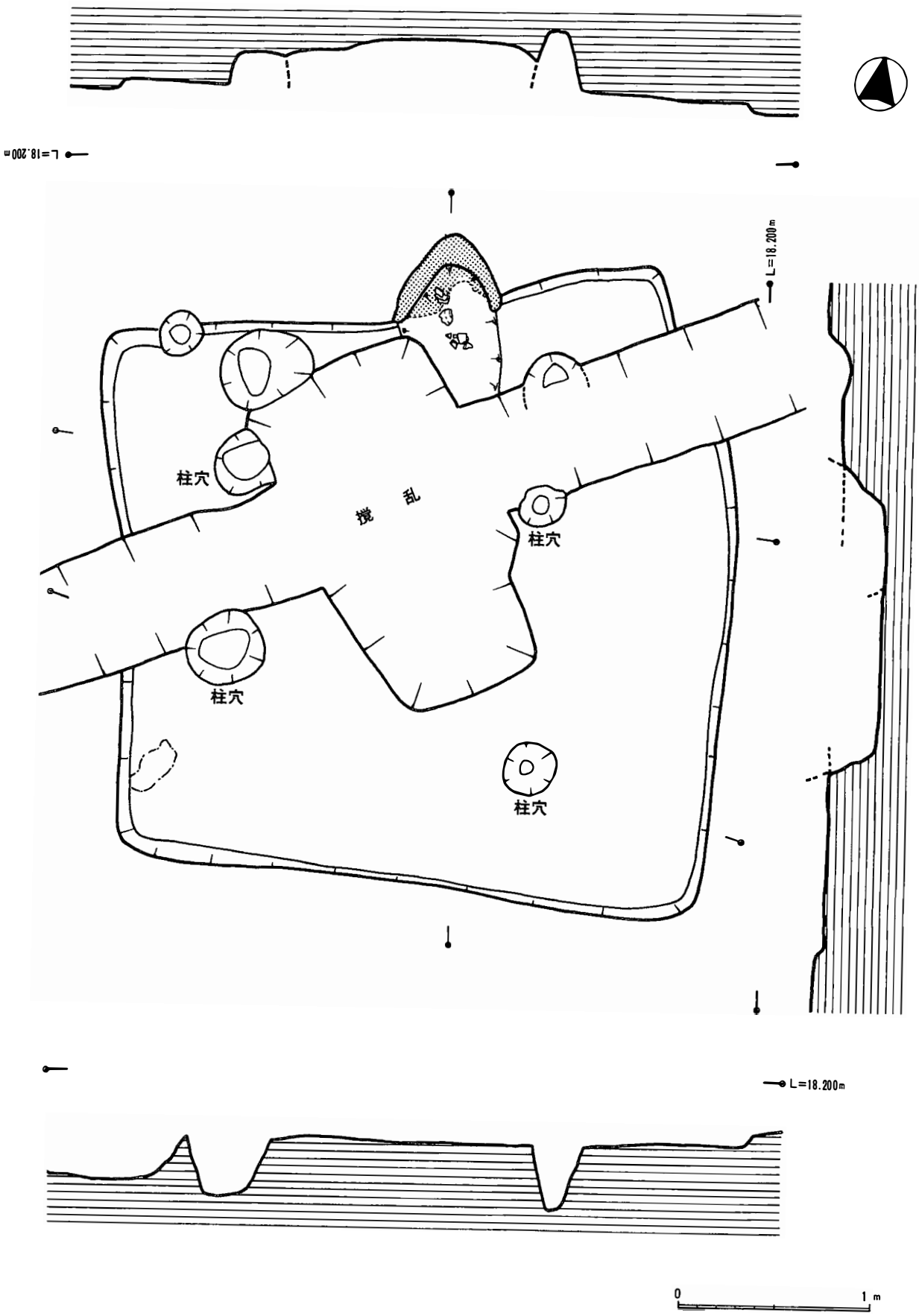
北側に、住居にまたがって硬化面が広がり、切り合いの遺構の存在が予想されたが、その硬化面を伴う遺構は検出できなかった

【遺物】（第14図 46　第103図 306）

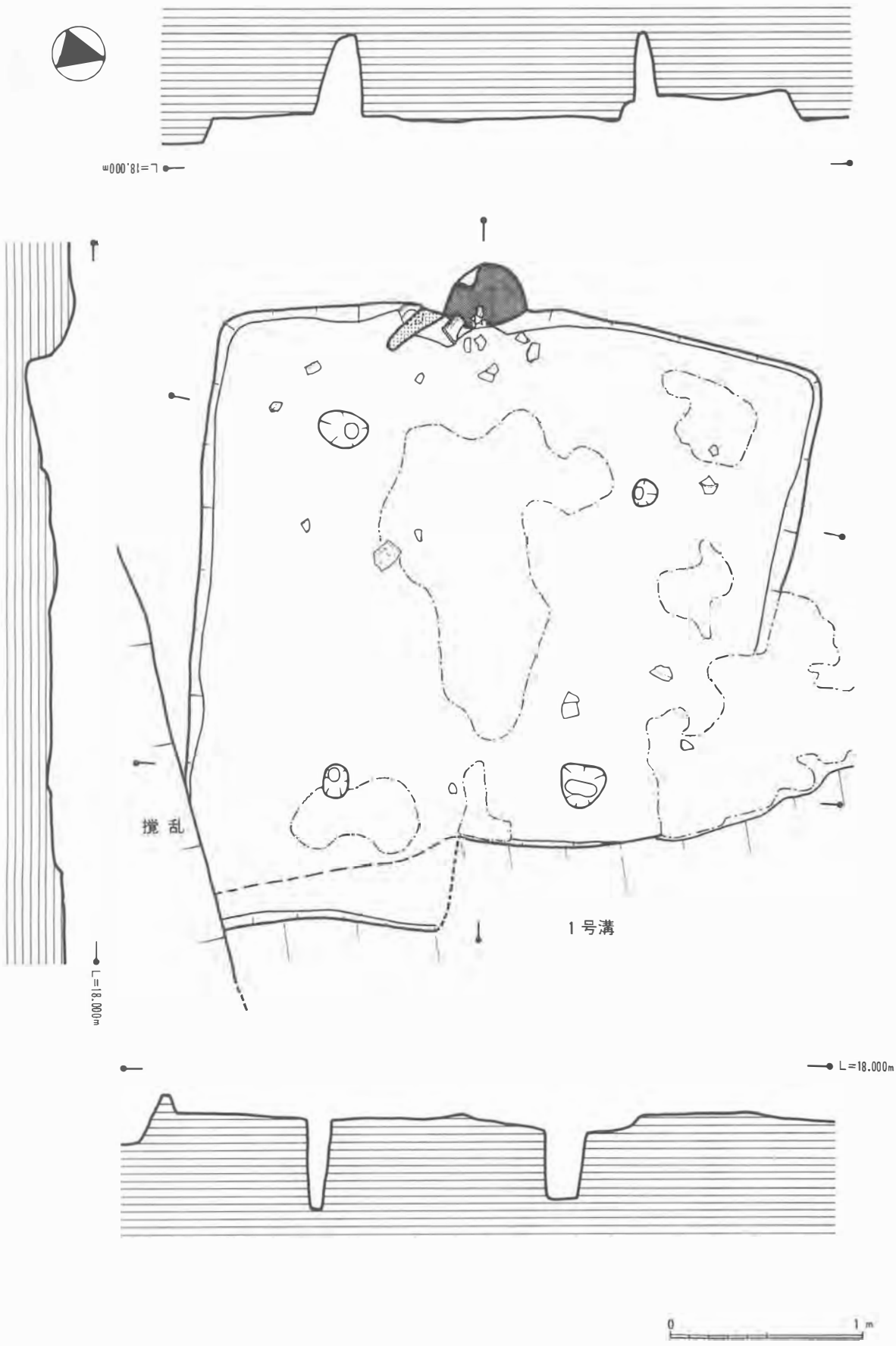
少量の須恵器とやや多量の土師器が出土した。実測可能な2点を示した

46は、須恵器の蓋である。口径15.0cm、残存高2.6cmを測る。天井部は回転ナデ、ヘラケズリ後ナデ、口縁部付近は回転ナデ、内面はナデで仕上げられる。暗黄灰色から黄灰色を呈する

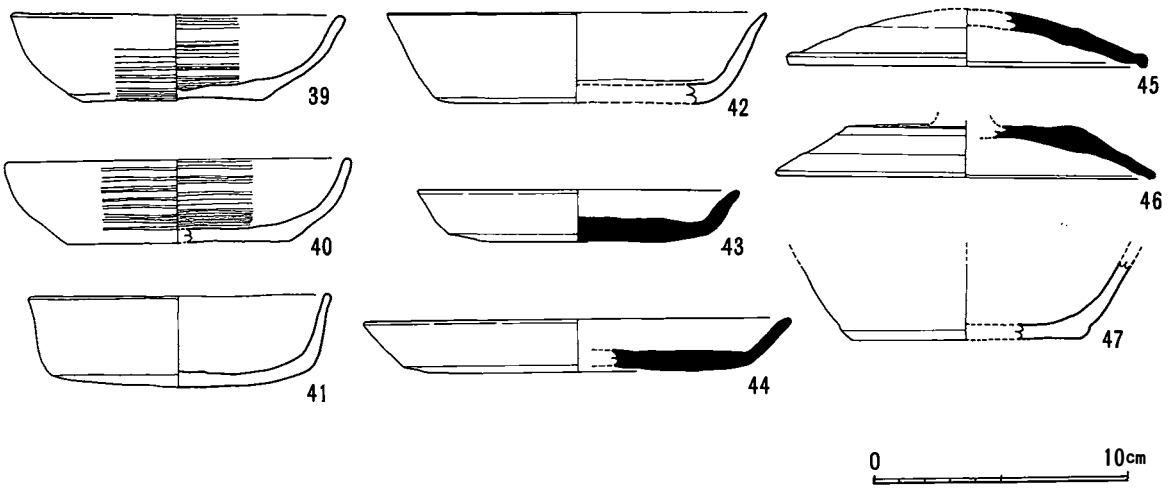
306は、黒色土器A類の坏である。口径14.8cm、器高6.0cm、底径6.5cmを測る。体部外面は回転ヘラケズリ、内面はヘラミガキ、口縁部付近は回転ヘラミガキ、回転ナデ、ヘラミガキ等で仕上げられる。外面はにぶい橙色を呈する



第12図　第３号住居跡実測図



第13図　第４号住居跡実測図



第14図　第１～４号住居跡出土遺物実測図

第５号住居跡（第15･16図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－99°－Ｗ

［区域］

Ｇ－８区

［重複］

認められず。ただし、隣接する住居跡として第６、７、８号住居跡がある

【構造】

［形状］

隅丸の方形

［規模］

長軸　3.48ｍ×短軸　3.13ｍ

［深さ］

確認面より約20㎝

［覆土］

暗褐色土。分層できず

［床面］

床面中央部東寄りに硬化面が分布する

［柱穴］

検出せず

［カマド］

北側壁面中央よりやや東よりに設置されている。砂岩質の石をソデとし、粘土がそれを支えている

［付帯設備］

直径約40㎝、深さ約10～30㎝のピット４基。用途は不明である

【特記事項】

床面全体を掘り下げて探したが、柱穴は認められなかった

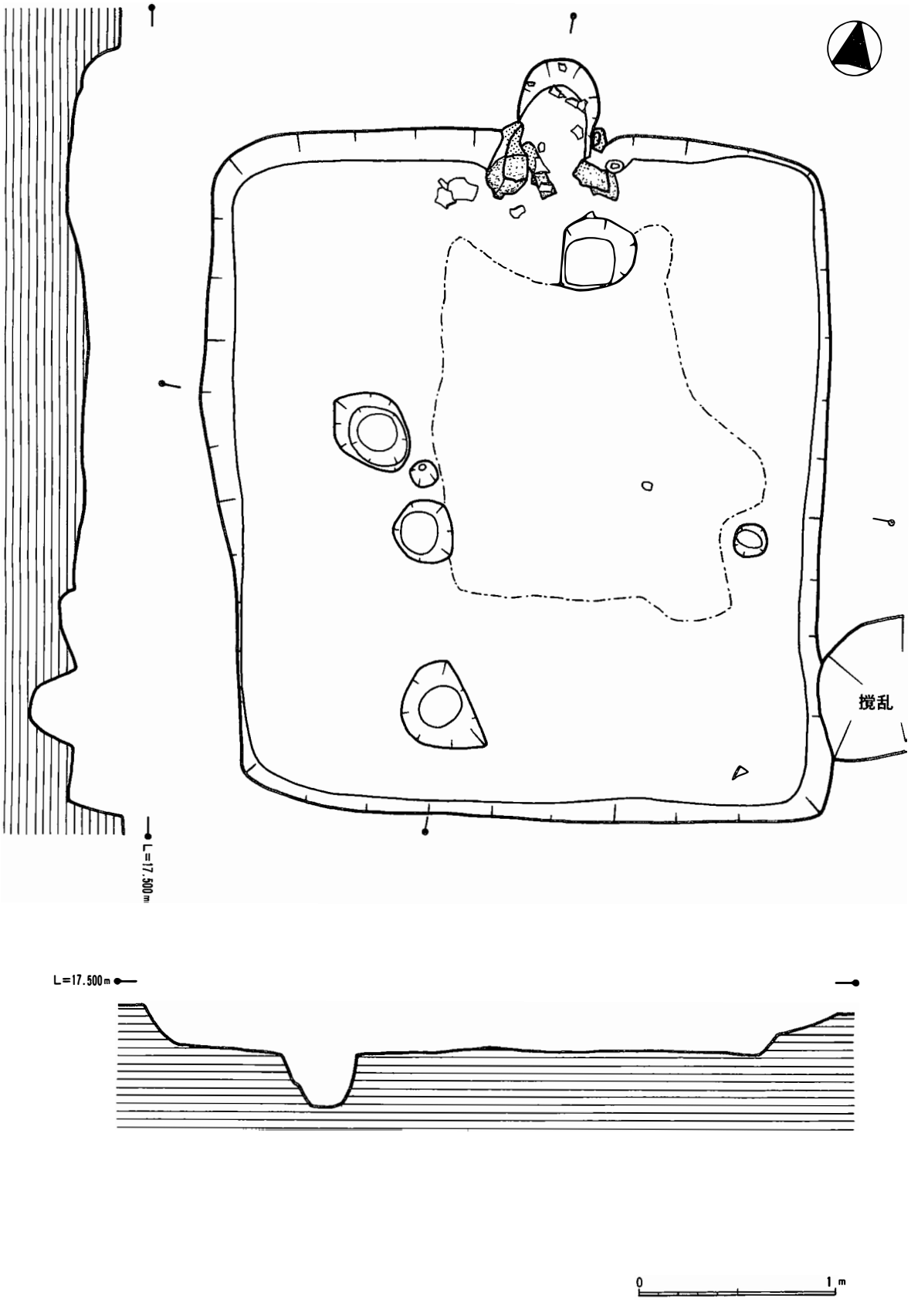
【遺物】（第16図　48～50）

須恵器と土師器片が出土したが、実測可能な３点のみ図示した

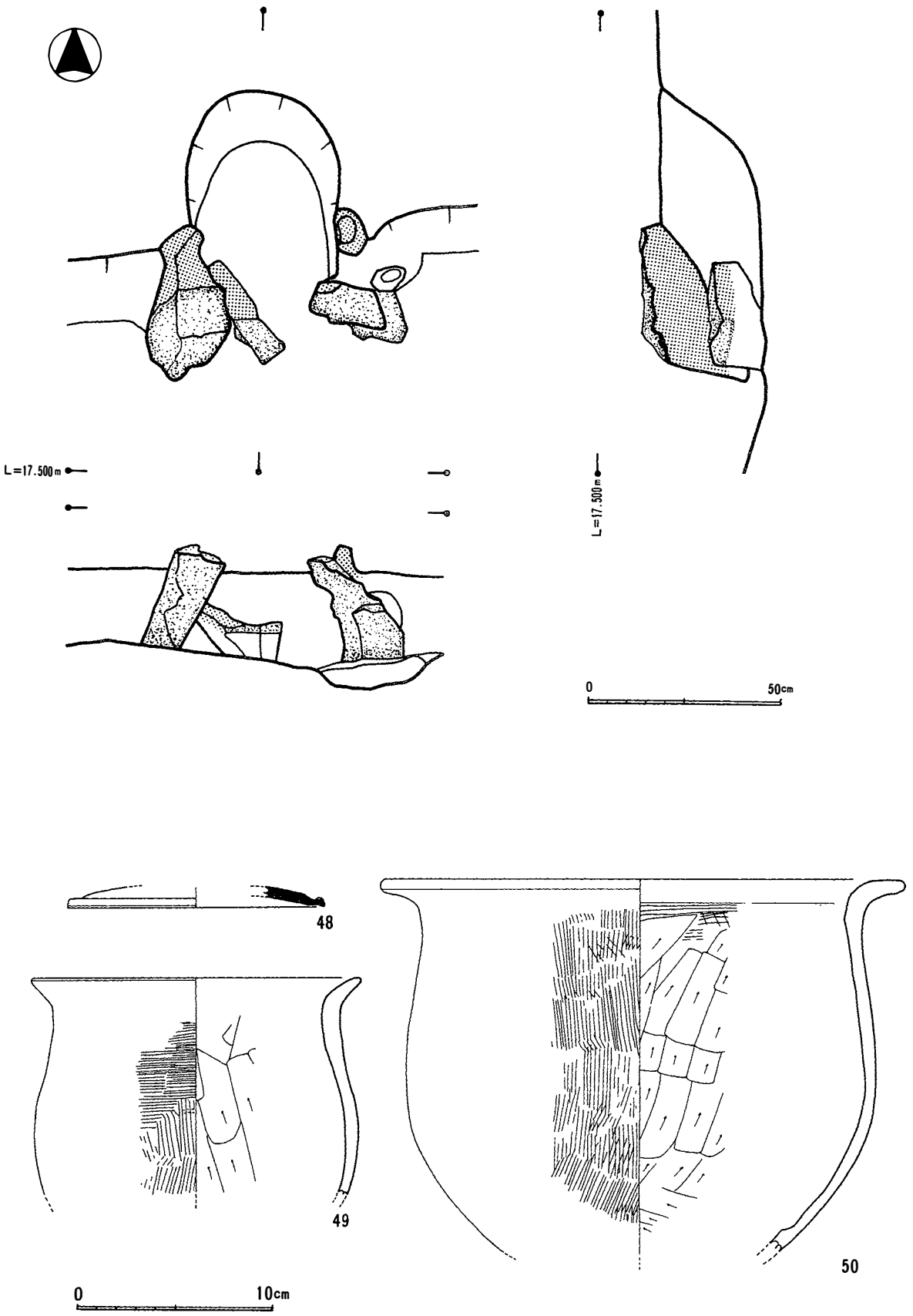
48は、須恵器の蓋である。口径13.2㎝、器高約1.1㎝を測る。口縁外部と体部外面はナデで仕上げられ、口縁端部から体部内面にかけて自然釉が見られる。灰色を呈する

49は、土師器の甕である。口径17.0㎝、残存高10.8㎝を測る。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメ、内面はヘラケズリで仕上げられる。浅黄橙色を呈する

50も土師器の甕である。口径27.1㎝、残存高19.0㎝を測る。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメ後部分的にナデ、内面は一部ハケメ後ヘラケズリで仕上げられる。外面はにぶい橙色、内面は灰白色を呈する



第15図　第５号住居実測図



第16図　第５号住居跡カマド実測図・出土遺物実測図

第６号住居跡（第17図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－79°－Ｅ

［区域］

Ｇ－８区

［重複］

東側壁面を攪乱に切られるが、その他の切り合いは認められず

【構造】

［形状］

隅丸の長方形

［規模］

長軸　3.50ｍ×短軸　2.96ｍ

［深さ］

確認面より約12㎝

［覆土］

暗黒褐色土。不純物を含む。分層できず

［床面］

床面ほぼ中央部を東西に、かなりしっかりとした硬化面が帯状に広がる

［柱穴］

４本柱。直径25～45㎝程度の規模

［カマド］

東側壁面ほぼ中央部に設置する。攪乱によって大きく切られるため、燃焼面の焼土の一部と粘土を検出するのみで、詳細は不明。なお、カマドは故意に破壊されたものらしく、南東コーナー一帯には、ソデ石や粘土、灰などの散乱が認められた

［付帯設備］

床面中央部に直径40㎝、深さ55㎝程度のピットを検出する。用途不明

【特記事項】

当遺構は、他住居との切り合い関係は認められないが、第５～８号住居跡ときわめて隣接して建てられている。それぞれの住居は、建て替えの際、相互の住居跡の存在を意識して建てられたような印象がある

【遺物】（第18図 51.52）

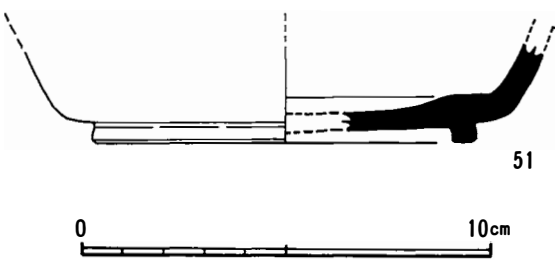
［土器］

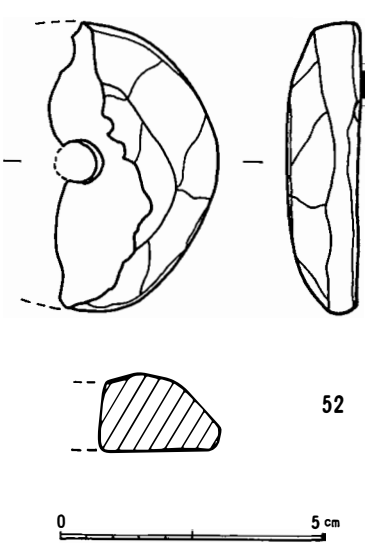
少量の須恵器と、土師器が出土した。細片のため実測可能な一点のみ図示した

51は、須恵器の椀である。残存高2.2㎝、高台径9.4㎝を測る。底部から体部外面にかけてはナデ、内面と見込みは回転ナデで仕上げられる。灰色を呈する

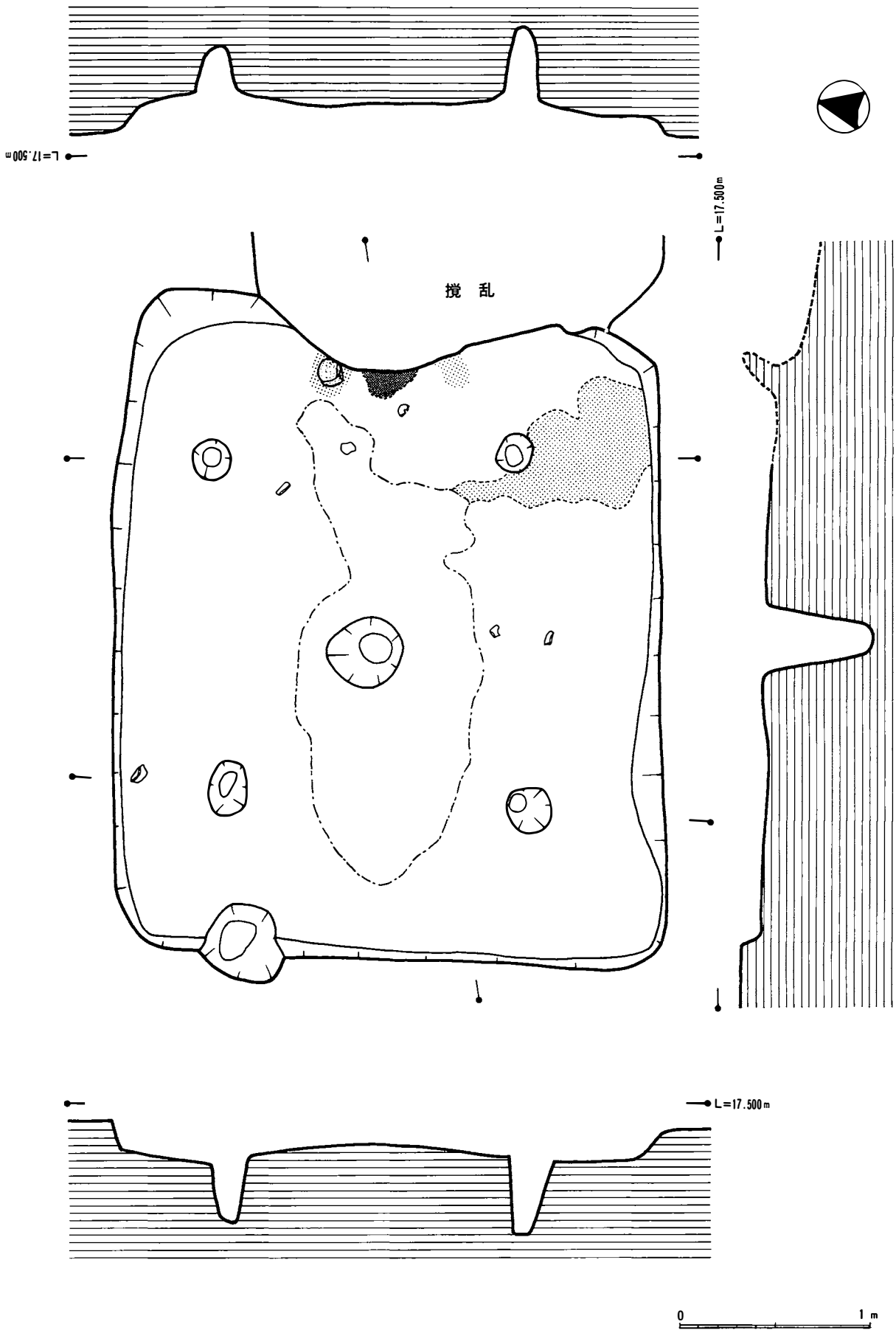
［その他］

52は紡錘車で、通常砥石として使用される木目石を素材としている。やや厚手で、片面は直線的、もう片面は斜めに傾斜させ、面を取るような加工を施している。（5.5×1.35×孔径0.75㎝,23.0ｇ）





第18図　第６号住居跡出土遺物実測図



第17図　第６号住居跡実測図

第７号住居跡（第19図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－101°－Ｗ

［区域］

Ｇ－７区

［重複］

切り合い関係はないが、第８号住居跡ときわめて隣接する。また攪乱の溝に中央を大きく切られる

【構造】

［形状］

隅丸の正方形

［規模］

長軸　3.3ｍ×短軸　3.2ｍ

［深さ］

確認面より約24㎝

［覆土］

暗黒褐色土。分層できず

［床面］

床面ほぼ中央部に、カマド前方から反対側の壁にかけて、東西方向に帯状のしっかりした硬化面が広がる

［柱穴］

４本柱

［カマド］

西側壁面の中央やや南よりに設置する。ソデの一方の粘土がわずかに残るが、攪乱の溝に切られているため、詳細は不明

［付帯設備］

柱穴以外に本来的に付属していたらしいピット２基を検出する。ひとつは東側壁面中央の出入り口付近に設置されていたもの、もう１基はカマド北側の壁に沿って造られたピットで、貯蔵穴などの用途で使用されたものかと思われる

【特記事項】

当住居には切り合いはないが、第５・６・８号住居跡と隣接しており、それぞれの住居は建て替えの際、相互の住居跡の存在を意識してたてられたような印象がある

【遺物】

少量の須恵器と土師器が出土した。細片のため、図化には至らなかった

第８号住居跡（第20図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－18°30′－Ｗ

［区域］

Ｈ－７，Ｇ－７区

［重複］

東南コーナーを攪乱に切られる

【構造】

［形状］

隅丸の方形

［規模］

長軸　3.6ｍ×短軸　3.4ｍ

［深さ］

確認面より約12㎝

［覆土］

やや明るい茶褐色土。微細な土器のクズを含む。分層できず

［床面］

カマド前方を中心とした床面ほぼ中央部付近に、広範囲に硬化面が広がる

［柱穴］

４本柱。配置にやや歪みがある。いずれも深さは25㎝程度と浅い

［カマド］

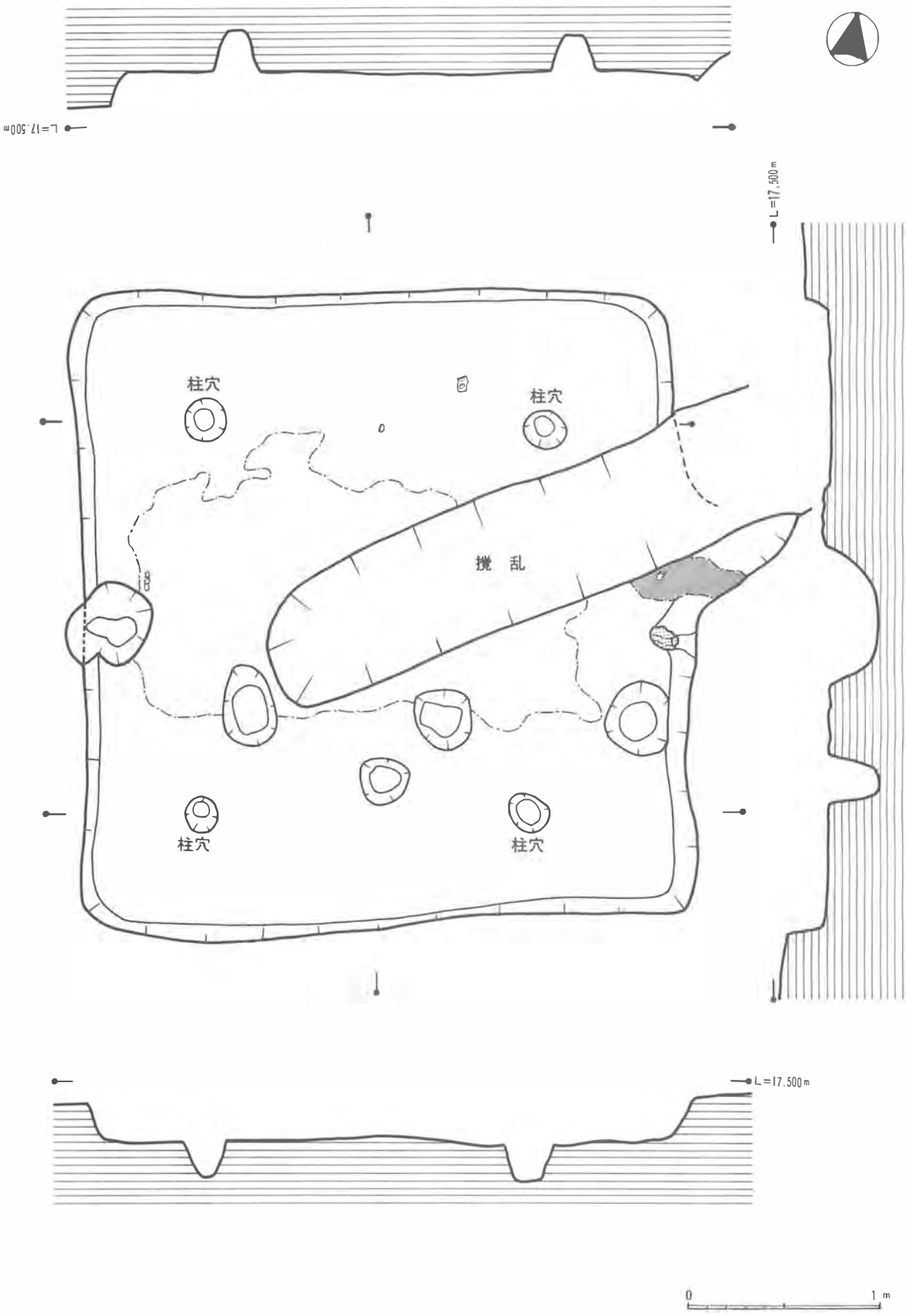
北側壁面のやや北東コーナーよりに設置する。残存状況は悪いが、ソデに使用されていたらしい粘土の一部などを検出する。なお、カマド前方の床面には、ソデ石の破片や、カマドの部材として使用されたことで煤の付着したらしい平瓦などが出土した

［付帯設備］

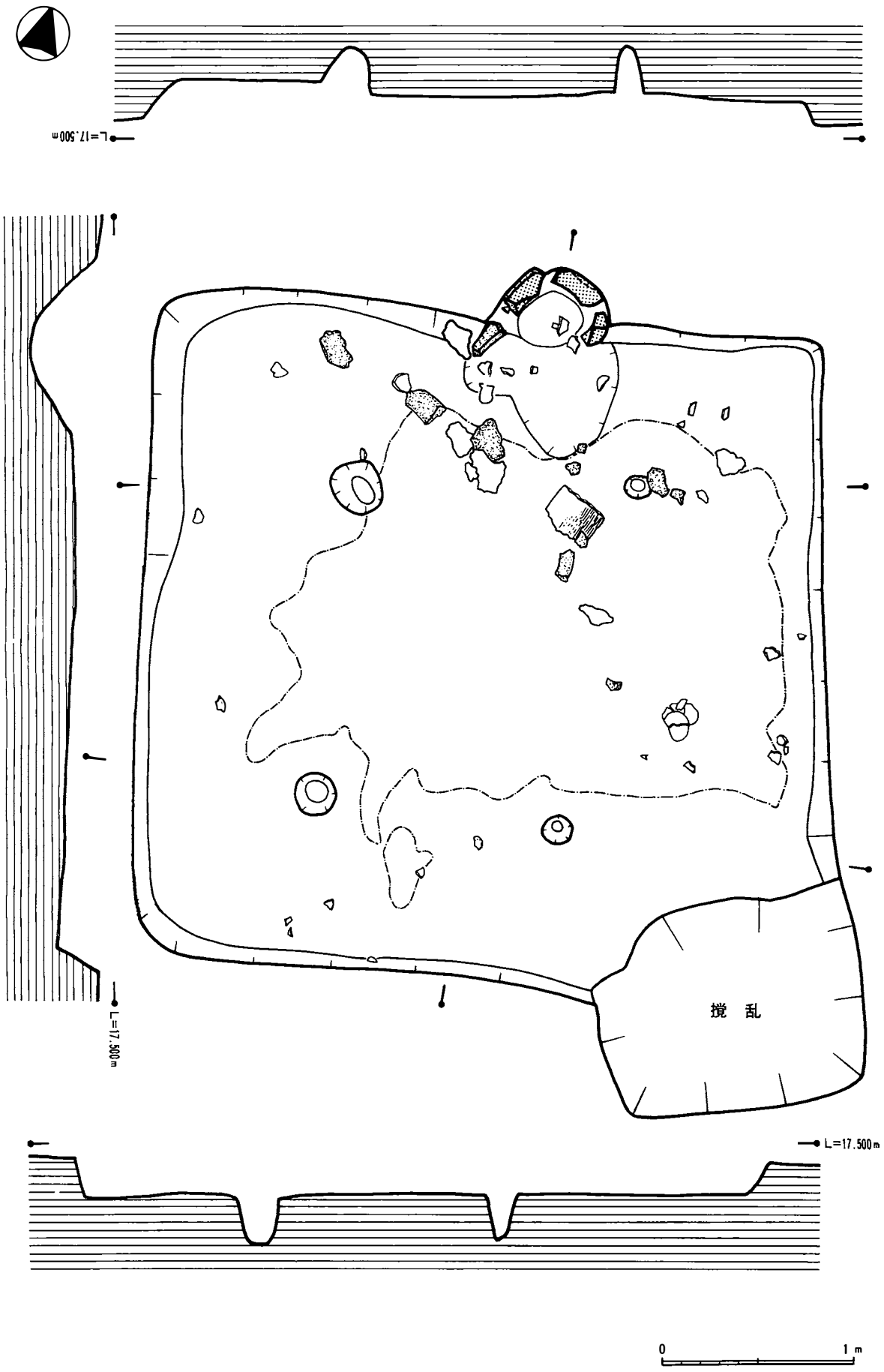
検出せず

【特記事項】

カマドの部材として、瓦の使用が見られる点などが注目される。恐らく国分尼寺などから搬入さ



第19図　第７号住居跡実測図



第20図　第８号住居跡実測図

れたものと考えられる。当住居の住人と当該寺院などとの関係につき注目される

【遺物】（第21図 53～59）

［土器］

54は、土師器の坏である。口径12.0㎝、器高3.8㎝、底径7.0㎝を測る。底部はヘラ切り後ナデ、体部は回転ナデ、見込みは回転ナデ後ナデで仕上げられる。底部以外の所々に橙色の赤彩が見られる。にぶい橙色を呈する

55も、土師器の坏である。口径12.1㎝、器高3.6㎝、底径6.4㎝を測る。調整は54と同様である。淡黄橙色から橙色を呈する

56も、土師器の坏である。口径12.4㎝、器高3.3㎝、底径8.2㎝を測る。調整は前出の２点と同様である。暗黄橙色を呈する

57は、須恵器の椀である。残存高1.4㎝、高台径9.4㎝を測る。底部から高台にかけて、及び見込みはナデ、体部外面は回転ナデで仕上げられる。灰白色を呈する

58は、土師器の甕である。口径21.6㎝、残存高6.2㎝を測る。口縁部はヨコナデ、体部外面は一部ハケメ後ナデ、内面はヘラケズリで仕上げられる。外面は淡褐色、内面はにぶい橙色を呈する

［その他］

53は、黄灰色の色調を呈する平瓦である。調整は、凹面は布目圧痕の上を刷毛で調整し、凸面は側縁に平行して縄目叩きの後、刷毛でナデている。なお、凹面には一面に煤が付着している

59は、中茎の部分を欠損するが、側面に刃部を形成することから刀子であると思われる。（＊4.1×0.9×0.1㎝,2.7ｇ）

第９号住居跡（第22図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－79°－Ｅ

［区域］

Ｈ－８区

［重複］

認められず

【構造】

［形状］

全体が不明だが隅丸のほぼ正方形か

［規模］

東西軸　2.75ｍ

［深さ］

確認面より約20㎝

［覆土］

暗黒褐色土。分層できず

［床面］

床面ほぼ中央のカマド前方部から西側壁面一帯にかけて、かなりしっかりとした硬化面が広がる

［柱穴］

柱穴らしきものとしては３本を確認する

［カマド］

東側壁面ほぼ中央部に設置する。焚き口の両側のソデに使用されていたらしい粘土塊を検出するが、燃焼にともなう焼土は検出せず

［付帯設備］

床面中央よりやや南西よりに直径30㎝、深さ50㎝程度の規模のピットを検出する

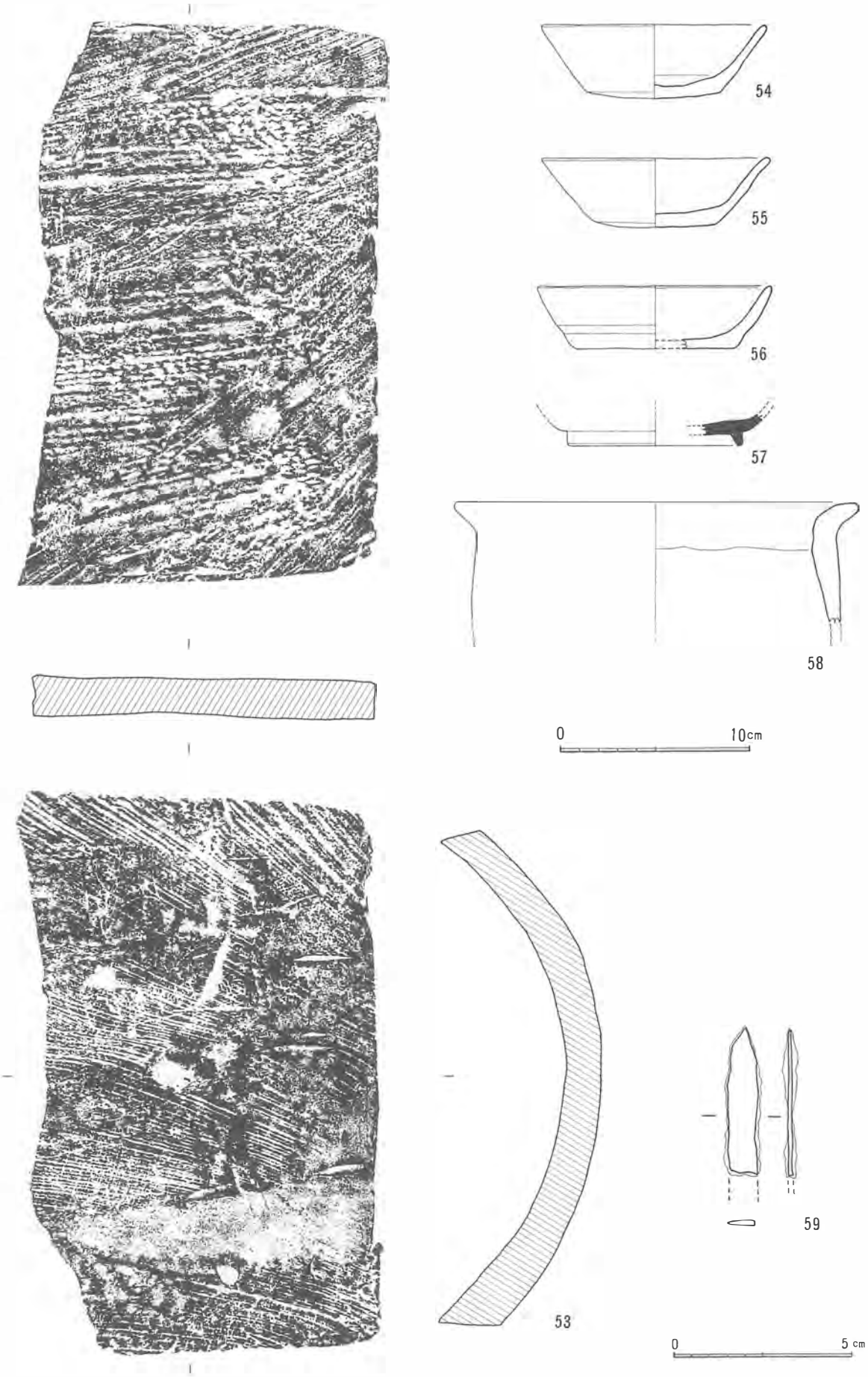
【特記事項】

南側が調査区域外におよぶため、住居跡の詳細は不明である。当住居の検出部位には、切り合いはないが、第12号住居跡ときわめて隣接しており、相互の住居が同時に建てられていた可能性は考えにくい

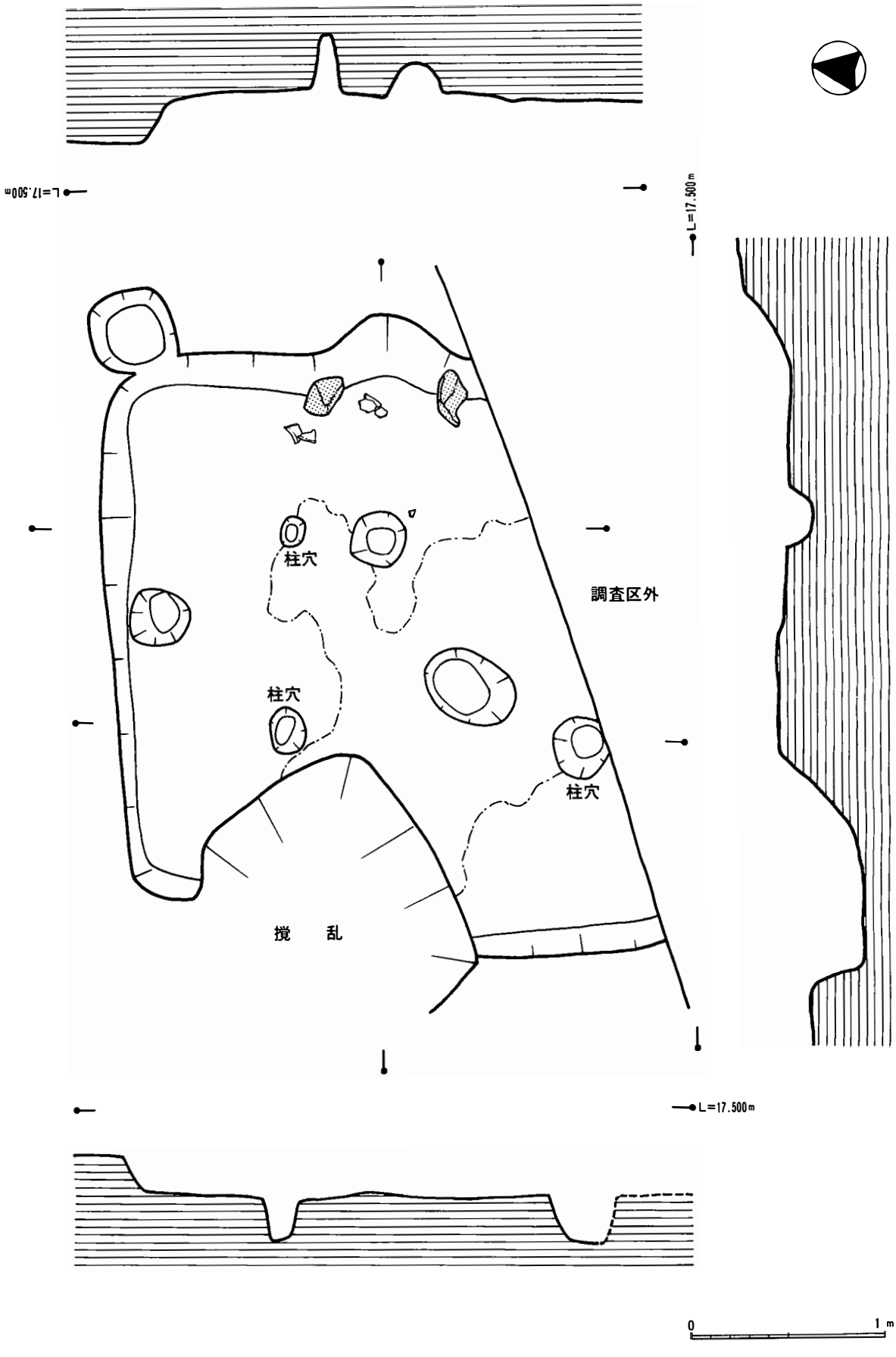
【遺物】（第24図 60.61）

60は須恵器であるが、底部を欠損するため、高台の有無は不明。口径12.2㎝、残存高2.6㎝を測る。回転ナデで仕上げられ、黄灰色を呈する

61は、土師器の甕である。口径22.0㎝、残存高7.25㎝を測る。口縁部はヨコナデ、体部内外面はヘラケズリ後ナデで仕上げられる。外面は浅黄橙色、内面は灰白色を呈する



第21図　第８号住居跡出土遺物実測図



第22図　第９号住居跡実測図

第10号住居跡（第23図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－10°－Ｗ

［区域］

Ｉ－７区

［重複］

南西隅で第16号住居跡を切り、中央部を第２号溝に切られる

【構造】

［形状］

隅丸の方形を呈する

［規模］

長軸　3.15ｍ×短軸　2.82ｍ

［深さ］

確認面より約15㎝

［覆土］

暗褐色土。分層できず

［床面］

床面中央部の狭い範囲に、粘土混じりの硬化面が広がる

［柱穴］

４本柱と考えられるが、３基のみ検出できた。直径約15㎝、深さ約30㎝

［カマド］

北側壁面中央からやや東側よりに設置されている。残りは悪く、掘り込みがわずかに検出された

［付帯設備］

ピットを３基検出する。床面中央やや西北よりのものは、直径約50㎝、深さ約50㎝程度で、貯蔵穴としての用途を持つものかもしれない。残り２基は、直径約30㎝、深さ約30㎝程度で用途は不明である

【特記事項】

床面を精査するも、４本目の柱穴は見あたらなかった

【遺物】（第24図 62～66）

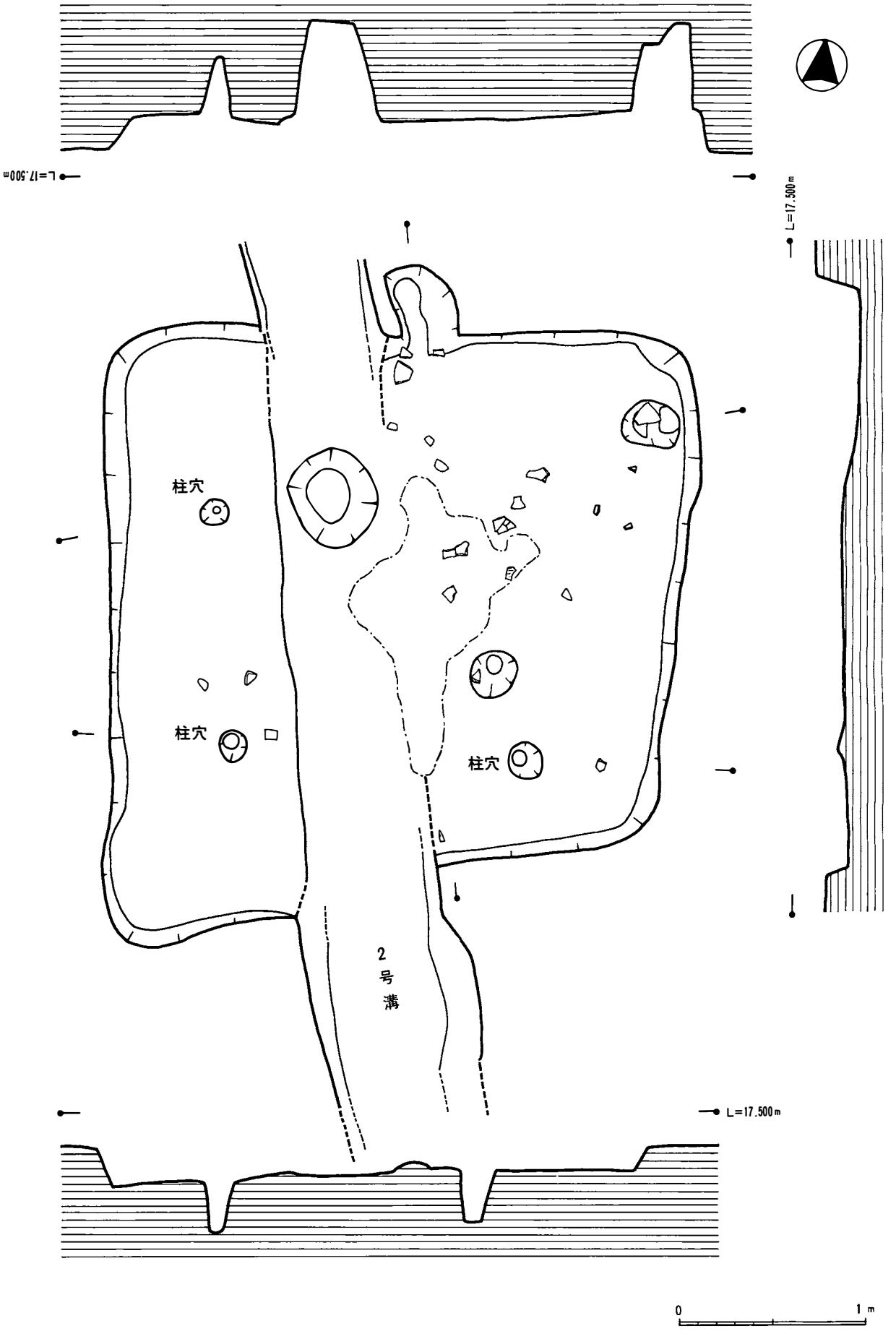
62は、土師器の鉢である。口径19.0㎝、器高11.2㎝、底径12.1㎝を測る。口縁部付近はヨコナデ、体部内面の一部はヘラケズリ後ナデで仕上げられるが、全体的に摩耗しており、調整が不明な部分が多い。体部外面上部と内面全体に赤彩が施され、その他は浅黄橙色から淡赤橙色を呈する

63は、須恵器の蓋である。口径15.6㎝、残存高1.0㎝を測る。体部外面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデ、口縁部付近は回転ナデで仕上げられる。灰色を呈する

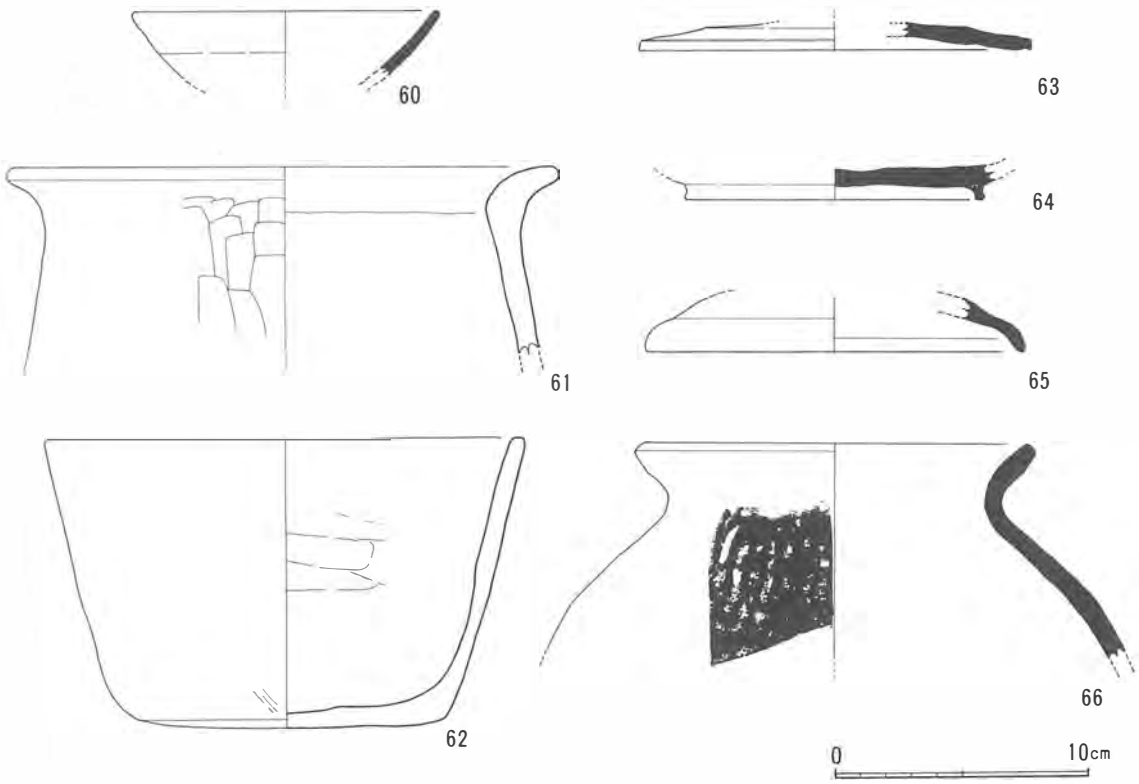
64は、須恵器の皿である。底部が６分の１程残存しており、復元高台径は12.0㎝を測る。底部はヘラ切り後回転ナデ、見込みはナデで仕上げられる。外面は灰白色、内面は淡橙色を呈する

65は、須恵器の蓋である。口径15.0㎝、残存高2.1㎝を測る。口縁部外面は回転ナデ、内面はナデで仕上げられる。外面は黄灰色、内面は灰紫色を呈する

66は、須恵器の壷である。口径15.9㎝、残存高8.25㎝を測る。口縁部と体部内面は回転ナデ、外面は平行タタキ後ヨコナデで仕上げられる。口縁部と体部外面には黒灰色の薄い自然釉が付着する。灰白色を呈する



第23図　第10号住居跡実測図



第24図　第９・10号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡（第25図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－2°－Ｅ

［区域］

Ｉ－８区

［重複］

西側壁面に沿って第２号溝遺構に切られる

【構造】

［形状］

隅丸の正方形に近い

［規模］

長軸　3.14ｍ×短軸　3.10ｍ

［深さ］

確認面より約24cm

［覆土］

暗黒褐色土。分層できず

［床面］

床面中央部に南北に硬化面が分布する。ただし、西側部分は溝に切られるため不明。また、北東コーナーには、粘土を貼り付けた部分あり

［柱穴］

４本柱。直径30cm、深さ25～35cm前後

［カマド］

北側壁面ほぼ中央付近に設置されている。両側のソデ石の基部がそのまま残り、粘土で埋め込まれている状況がわかるなど、残存状況は比較的良好である。なお、カマドの掘り方はかなり深く、製作時に燃焼面より一旦かなり深く掘り下げていることなどが理解できる

［付帯設備］

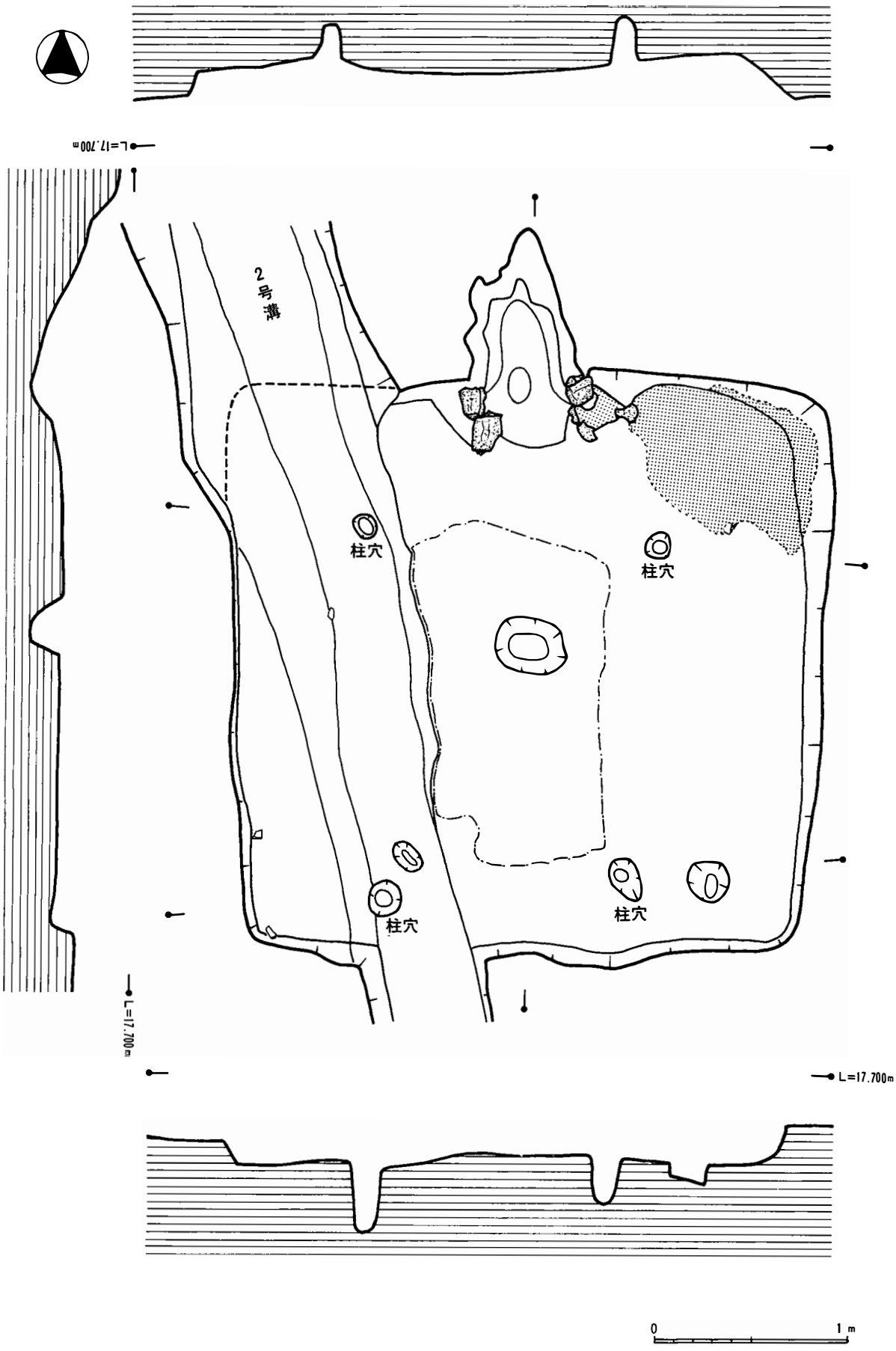
床面ほぼ中央部に直径約40cm、深さ約20cm程度のピット１基を検出する。住居に伴うものと判断され、炭化物を含む。灰捨てや貯蔵穴としての用途を持つものかもしれない。また、北東コーナー一帯の床に粘土を貼り付けた約１ｍ四方程度の部分が見られる。中央部はややくぼんでおり、粘土はカマドに使用されたものと類似し、火を受け赤変したような色調を呈する。カマドに関連する何らかの施設かと思われる

【特記事項】

第２号溝遺構に大きく切られるものの、カマドの残存状況がよく、その構造などについて注目される遺構である

【遺物】

少量の須恵器と土師器が出土したが、細片のため図化に至らなかった



第25図　第11号住居跡実測図

第12号住居跡（第26･27図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－99°－Ｗ

［区域］

Ｈ－８区

［重複］

認められず

【構造】

［形状］

隅丸の長方形

［規模］

長軸　3.04ｍ×短軸　2.68ｍ

［深さ］

確認面より約25㎝

［覆土］

４層に分層する。詳細は土層断面図参照

［床面］

床面中央部に東西に細長く硬化面が分布する。ただし、他住居に見られるように堅緻なものではない

［柱穴］

４本柱と考えられるが、配置がややアンバランスであることなどから、多少疑問が残る

［カマド］

西側壁面中央からやや北側よりに設置されている。煙道の一部も確認できるなど残存状況は比較的良好である。ソデは粘土で造られているが、向かって左側にねじれているなど異形である

［付帯設備］

床面ほぼ中央部に直径約40㎝深さ約40㎝程度のピット１基を検出する。住居に伴うものと判断され、あるいは貯蔵穴としての用途を持つものかもしれない。また、南西コーナー一帯の床に粘土を貼り付けた約１ｍ四方の部分が見られる。中央部はややくぼんでおり、粘土はカマドに使用されたものと類似し、火を受け赤変したような色調を呈する。カマドに関連する何らかの施設かと思われる

【特記事項】

検出した住居跡の中では、残存状況の比較的良好な住居跡である。柱穴が明確に検出できないのは、当遺跡の住居が従来の竪穴住居と異なる構造を持つものであるからかもしれない。カマドの状況がよく、注目される資料である

【遺物】

土師器の細片がわずかに出土したが、図化には至らなかった

第13号住居跡（第28図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－67°－Ｅ

［区域］

Ｆ－９区

［重複］

なし

【構造】

［形状］

隅丸の長方形

［規模］

長軸　3.27ｍ×短軸　2.55ｍ

［深さ］

確認面より約15㎝

［覆土］

暗褐色土。分層できず

［床面］

床面ほぼ全面に硬化面が広がり、特にカマドの前方は粘土混じりである

［柱穴］

４本柱と考えられる。直径12～20㎝、深さ25～50㎝を測る

［カマド］

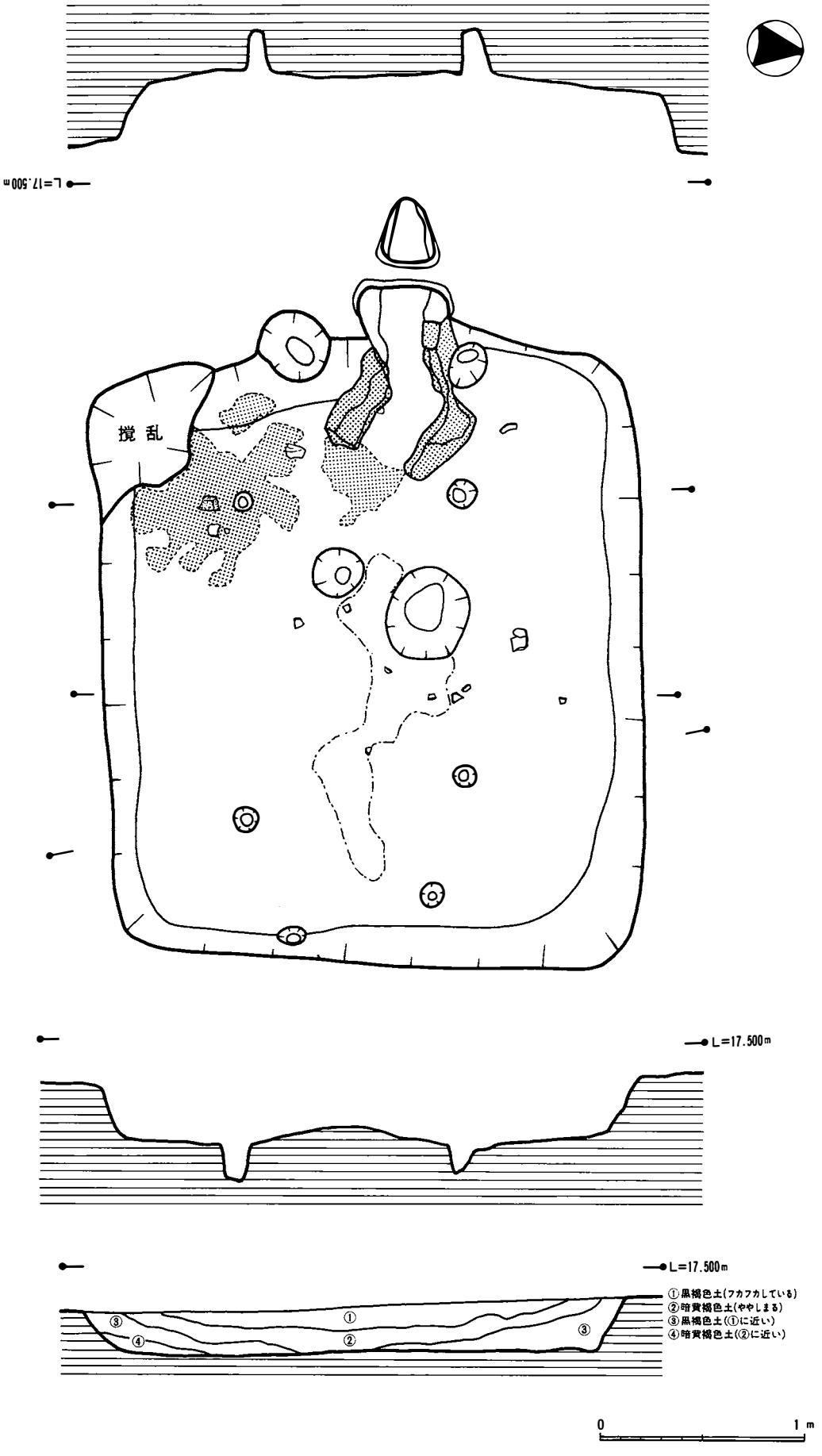
東側壁面の南東隅の近くに設置されている。両ソデがわずかに残る程度である

［付帯設備］

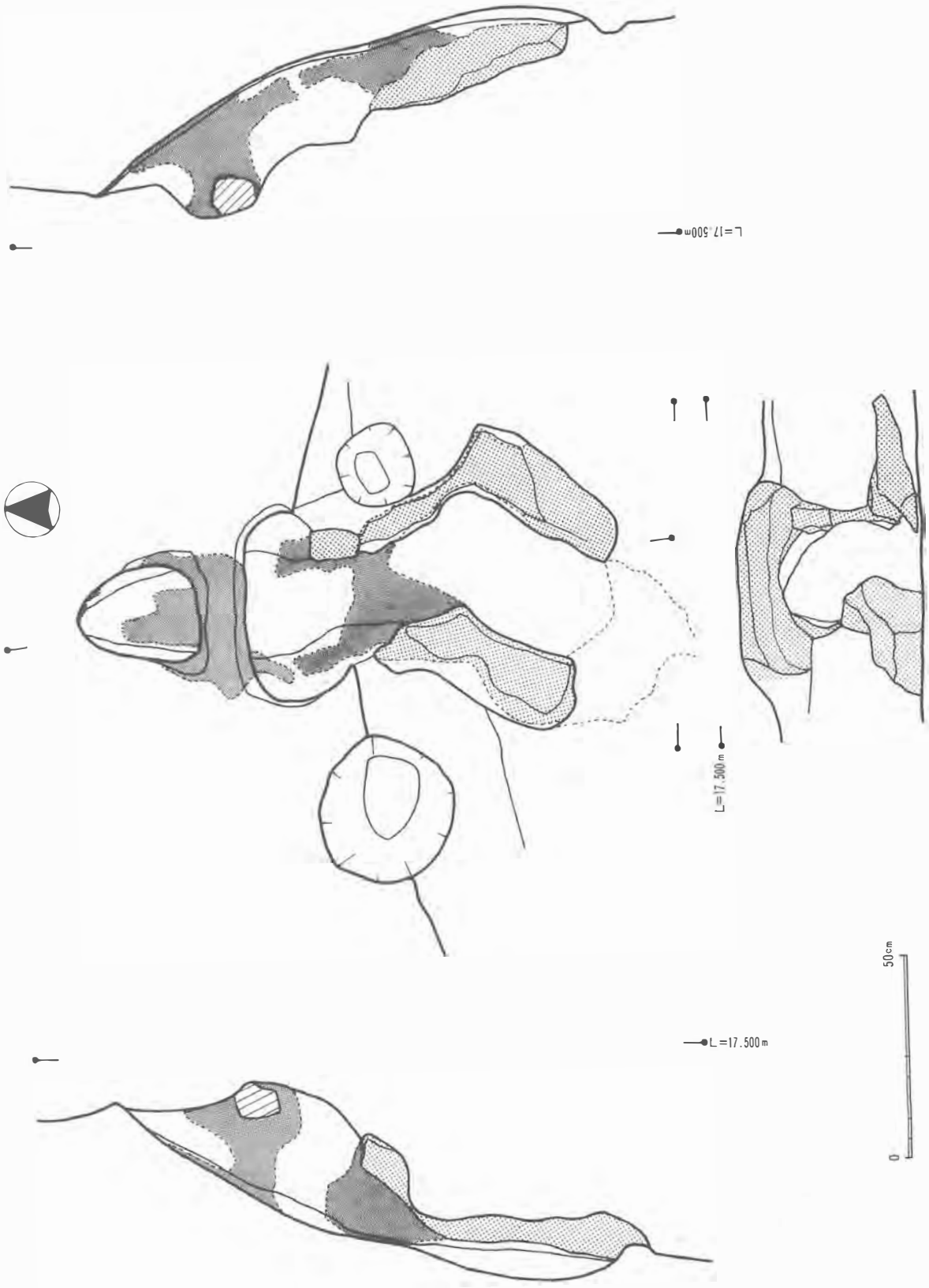
ピットを５基検出する。直径約30㎝、深さ約20㎝程度

【特記事項】

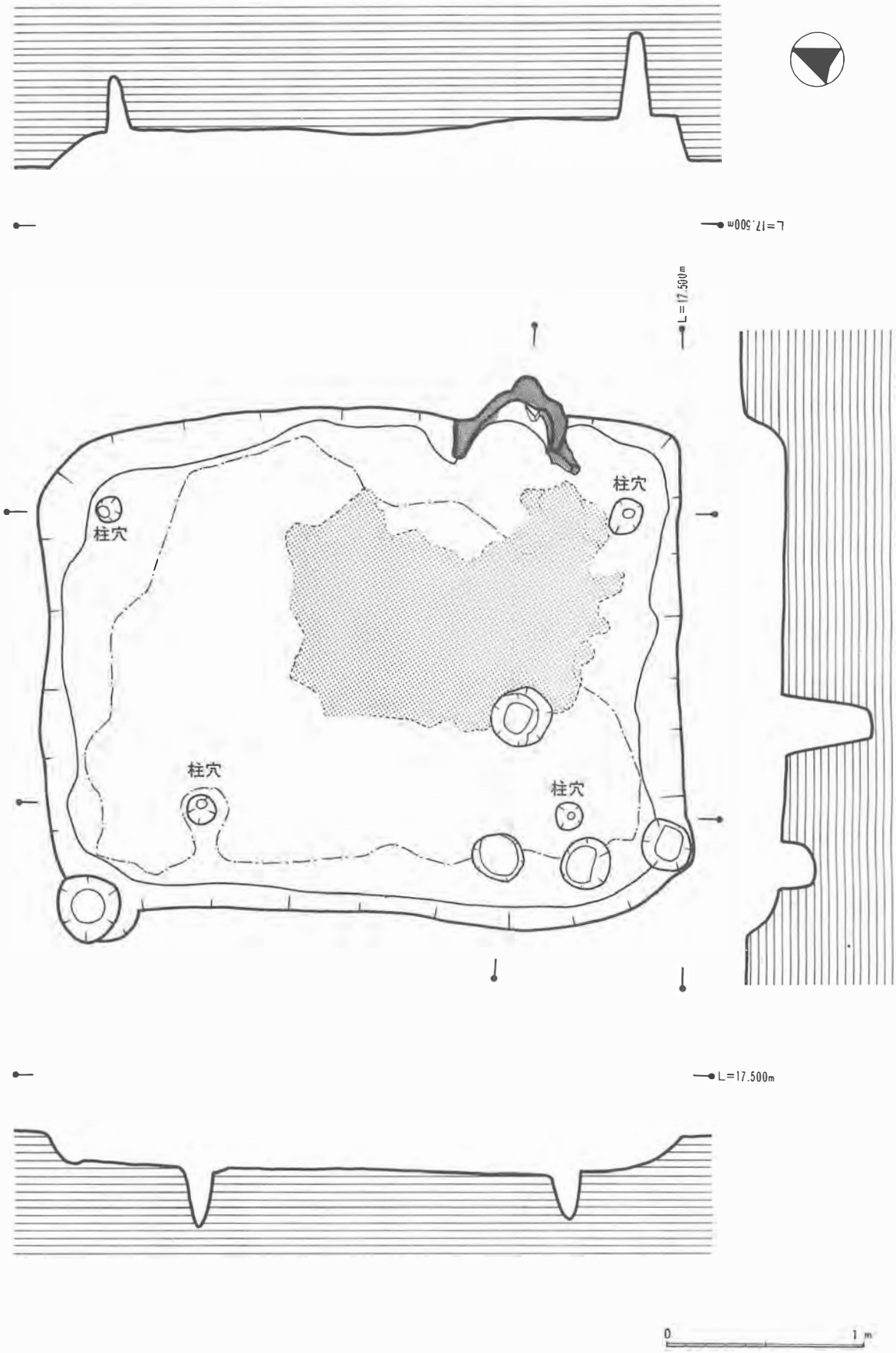
形状が長方形であることや、カマドの位置のずれなどから周りの住居跡との時期差が考えられる



第26図　第12号住居跡実測図



第27図　第12号住居跡カマド実測図



第28図　第13号住居跡実測図

【遺物】（第29図 67～70）

67は、須恵器椀である。口径12.4㎝、器高4.2㎝、高台径7.8㎝を測る。体部外面はナデ、内面は回転ナデで仕上げられる。土師質で暗赤橙色を呈する

68は、須恵器蓋である。口径16.0㎝、残存高2.1㎝を測る。口縁部付近は回転ナデ、体部はナデで仕上げられる。外面は暗褐色、内面は黄灰色を呈する

69は、土師器甕である。口径15.0㎝、残存高5.3㎝を測る。口縁部は回転ナデ、体部外面は摩耗のため調整不明で、内面はヘラケズリで仕上げられるが、単位は不明である。淡赤橙色を呈する。体部の張りがなく、比較的小型である

70も、土師器甕である。口径21.8㎝、残存高5.15㎝を測る。口唇部はヨコナデ、体部外面はハケメ後ナデ、内面はヘラケズリ後一部ナデで仕上げられる。外面はにぶい褐色、内面は灰褐色を呈する

第14号住居跡（第30図）

【位置】

［主軸方位］

不明

［区域］

Ｉ－７・８区

［重複］

西側壁面が第16号住居跡を切る

【構造】

［形状］

住居跡の半分以上が調査区域外のため、詳細は不明

［規模］

東西3.40ｍ

［深さ］

確認面より約14㎝

［覆土］

暗褐色土。分層できず

［床面］

硬化面は検出せず

［柱穴］

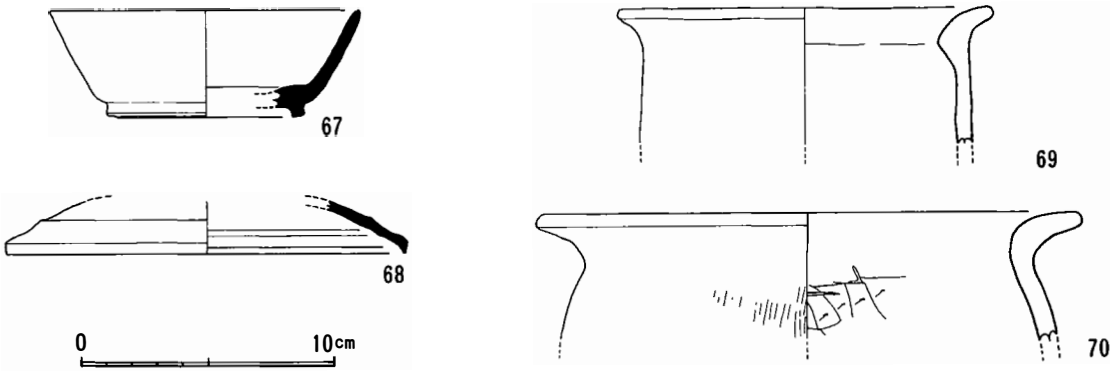
検出せず

［カマド］

西側壁面に片ソデのみ検出された

［付帯設備］

大小５基のピットが検出された。２基の小ピットは直径約20㎝、深さ約８㎝程度。中央のは直径約40㎝、深さ約15㎝で共に用途は不明。２基の大ピットのうち１基は長径60㎝、短径50㎝、深さ約60㎝、残りは半分調査区外で径は不明だが、深さは約50㎝で貯蔵穴としての用途を持つものかもしれない



第29図　第13号住居跡出土遺物実測図

【特記事項】

半分以上が調査区外のため詳細は不明だが、周辺住居跡に共通してみられる硬化面が確認できなかった

【遺物】（第30図 71～75）

71は、当遺跡唯一の輪状つまみを持つ須恵器の蓋である。口径13.6㎝、器高2.25㎝を測る。天井部と口縁部付近は回転ナデ、体部外面はヘラケズリ、内面はナデで仕上げられる。外面全体に黒い自然釉が付着。灰色を呈する

72は、須恵器の壷であろう。残存高3.5㎝、高台径11.4㎝を測る。底部から高台にかけては回転ナデ、体部外面はヘラケズリ、内面はヨコナデ、見込みはナデで仕上げられる。灰色を呈する

73は、土師器の坏である。口径15.0㎝、器高4.1㎝、底径12.4㎝を測る。底部はヘラ切り後ナデ、体部は回転ナデで仕上げられる。浅黄橙色を呈する

74は、土師器の甕である。口径27.6㎝、残存高9.35㎝を測る。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメ、内面はヘラケズリで仕上げられる。浅黄橙色を呈する

75も、土師器の甕である。口径29.0㎝、残存高8.65㎝を測る。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメ後一部ナデ、内面はヘラケズリで仕上げられる。外面はにぶい橙色、内面は淡黄橙色を呈する

第15号住居跡（第31図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－1°－Ｗ

［区域］

Ｊ－６，Ｊ－７区

［重複］

第43号住居跡を切る

【構造】

［形状］

南北にやや長い隅丸の長方形

［規模］

長軸　3.8ｍ×短軸　3.65ｍ

［深さ］

確認面より15㎝

［覆土］

暗褐色土。分層できず。部分的に樹根が入る

［床面］

床面中央部から南側壁面にかけて、ロームの混じった硬化面が細長く広がる。なお、最終的な生活面の下の一部に硬化面の広がりが見られ、床面は張り替えた可能性がある

［柱穴］

４本柱

［カマド］

北側壁面ほぼ中央部に設置する。焚き口両側のソデ石が残り、粘土等で埋め込まれた状況が理解できる。なお、ソデ石の上部は破壊されており、破片が前面に散乱する

［付帯設備］

検出せず

【特記事項】

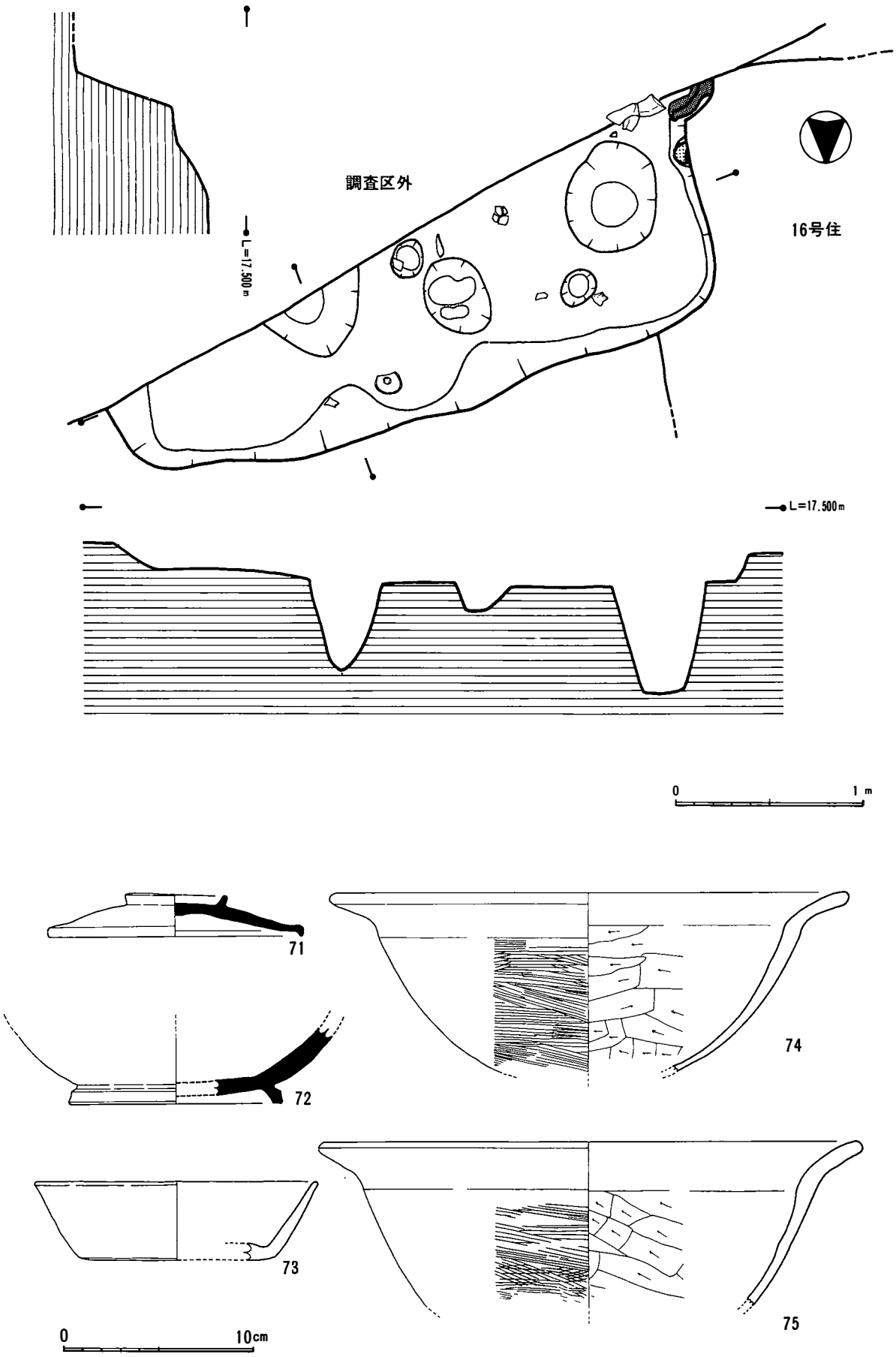
調査区域の都合上、住居跡南側の一部は未調査。樹根が入るため、上面の攪乱が激しい。「床面」の項に記したように、最終的な生活面（硬化面）の下に以前の硬化面が残る部分があり、そこにはカマドのソデ石として使用する部材の破片が埋め込まれたり、カマドに使用したらしい粘土を床に貼り付けた痕跡が残る。つまり、カマドは頻繁に使用するため破損しやすく、定期的に補修を繰り返しながら使用されたことがうかがわれる

【遺物】（第31図 76～78）

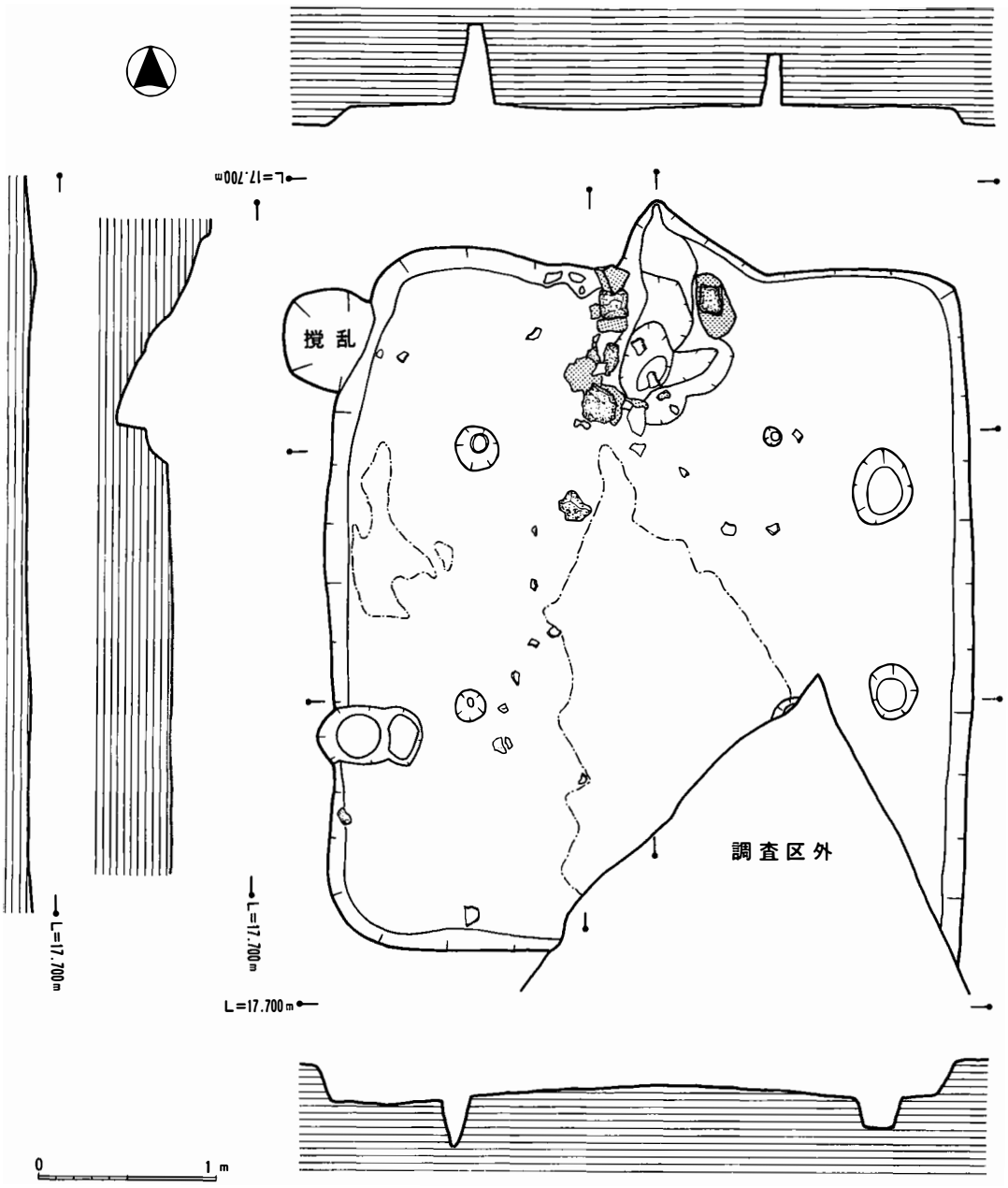
76は、土師器の坏である。口径12.2㎝、器高3.9㎝、底径8.1㎝を測る。全面ナデ後体部内面は回転ヘラミガキで仕上げられ、全面に赤彩が施される。にぶい橙色を呈する

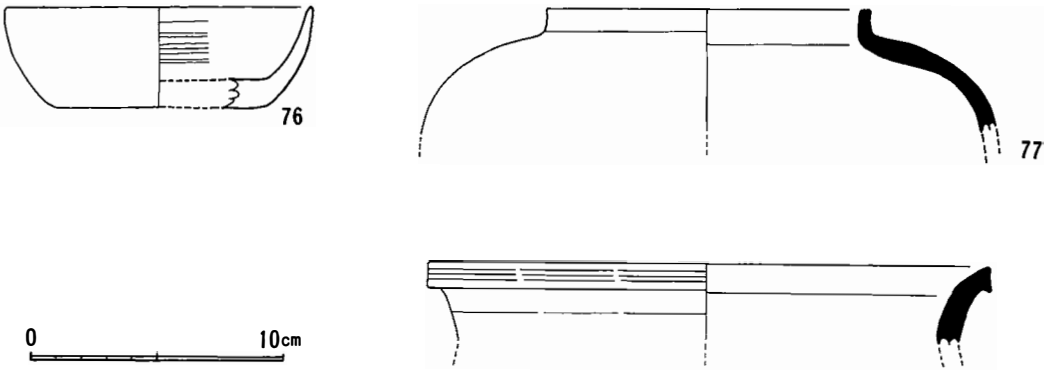
77は、須恵器の壷である。口径12.8㎝、残存高4.6㎝を測る。口縁部と体部内面は回転ナデ、体部外面はナデで仕上げられる。灰色を呈する

78は、須恵器の甕である。口径22.4㎝、残存高3.1㎝を測る。残存部は回転ナデで仕上げられ、口縁内部に一条の沈線がめぐる。灰オリーブ色を呈する



第30図　第14号住居跡実測図・出土遺物実測図





第31図　第15号住居跡実測図・出土遺物実測図

第16号住居跡（第32図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－101°－Ｗ

［区域］

Ｉ－７・８区

［重複］

北東隅を第10号住居跡に、南東隅を第14号住居跡に、カマドの西側は土坑に切られる

【構造】

［形状］

隅丸の長方形

［規模］

長軸　3.99ｍ×短軸　3.39ｍ

［深さ］

確認面より約12㎝

［覆土］

暗褐色土。分層できず

［床面］

床面全体に硬化面が分布する

［柱穴］

ピットは多数検出されるが、柱痕を伴う柱穴としては確認できなかった。位置的に見ると適当と思われるものは３基ある

［カマド］

西側壁面ほぼ中央に設置されている。住居跡内側の掘り込みと粘土による右ソデがわずかに残り、左ソデには瓦が使用されている

［付帯設備］

大小取り混ぜたピットが検出されるが、用途は不明

【特記事項】

当遺跡の住居跡は柱穴のわかりにくいものが多いが、この住居跡も確実に柱穴といえるものがあるか分からない

【遺物】（第32図 79）

わずかな須恵器とやや多量の土師器が出土したが、殆ど細片で実測可能な一点のみ図示した

79は、土師器の甕である。口径29.4㎝、残存高13.8㎝を測る。把手が一部残存する。把手の下部がタタキ後ナデで仕上げられるほかは、回転ナデで仕上げられる。にぶい橙色を呈する

第17号住居跡（第33図）

【位置】

［主軸方位］

不明

［区域］

Ｉ－７，Ｊ－７区

［重複］

第18号住居跡を切る。（17－新，18－旧）

【構造】

［形状］

不明

［規模］

東西　2.0ｍ

［深さ］

確認面より約10㎝

［覆土］

暗黒褐色土。分層できず

［床面］

確認した床面ほぼ全域に比較的軟らかい硬化面が広がる

［柱穴］

４本柱と思われるが、このうち２本を検出

［カマド］

未検出であるが、他住居の例から、東西いずれかの壁面に設置されていたものと推定される

［付帯設備］

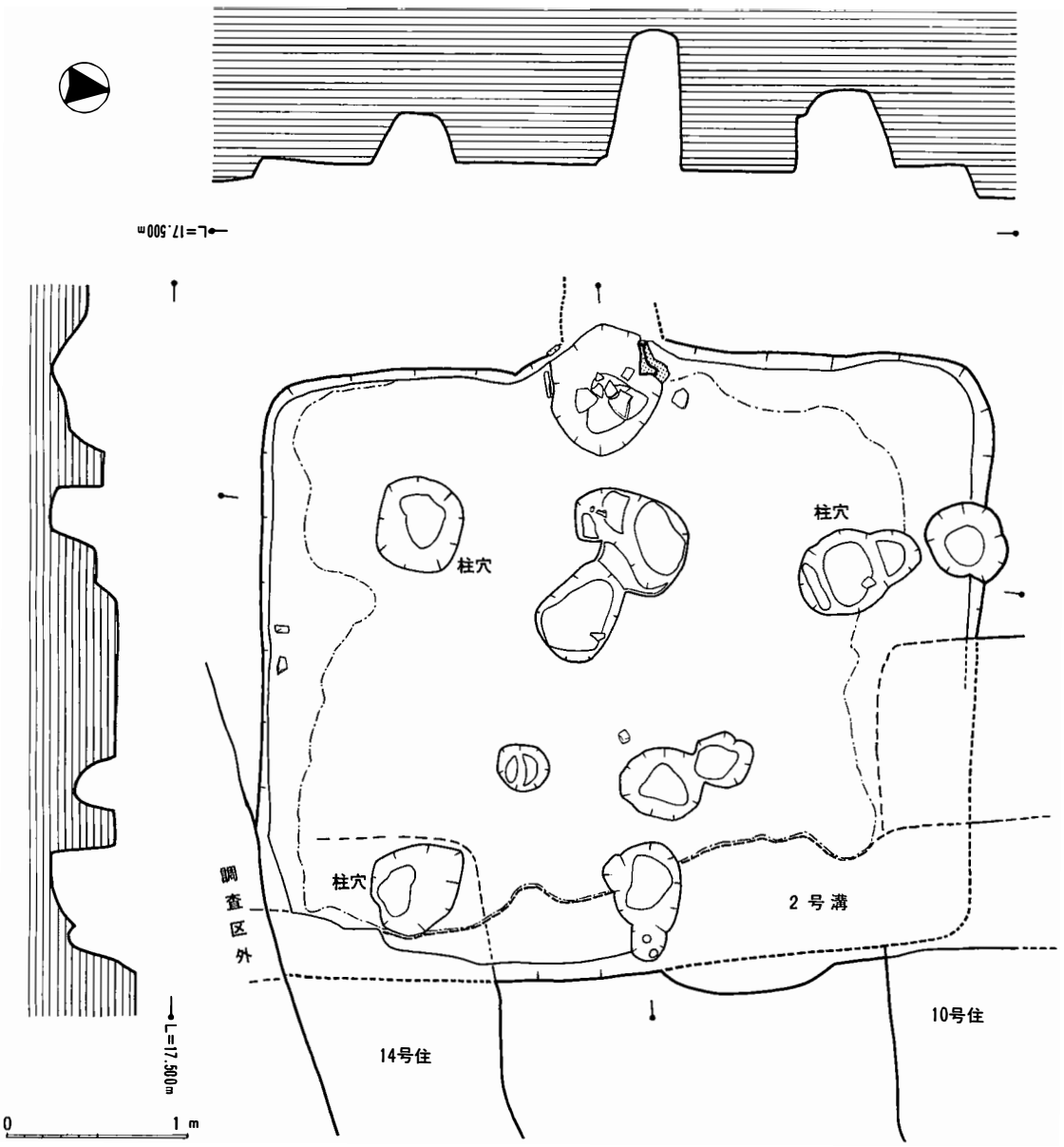
検出せず

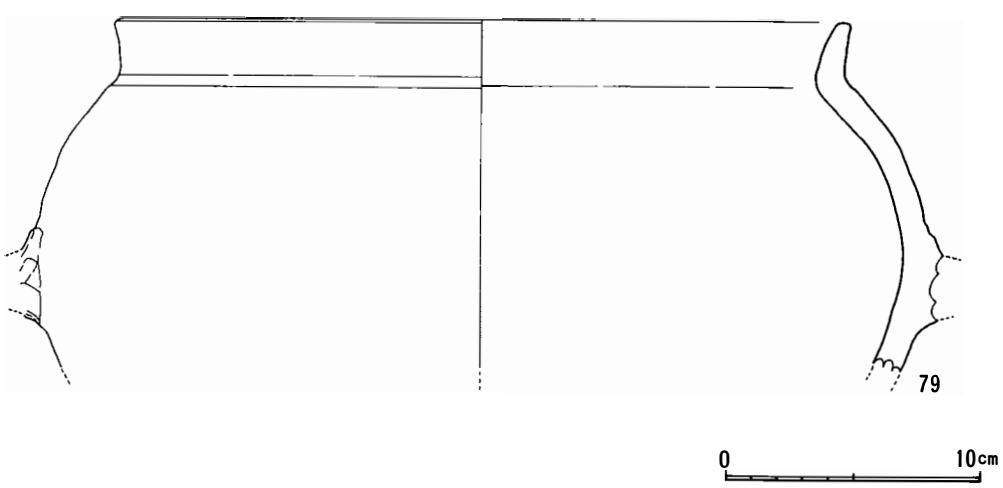
【特記事項】

比較的小型の住居跡であると推測されるが、未調査の部分が多く、詳細は不明である

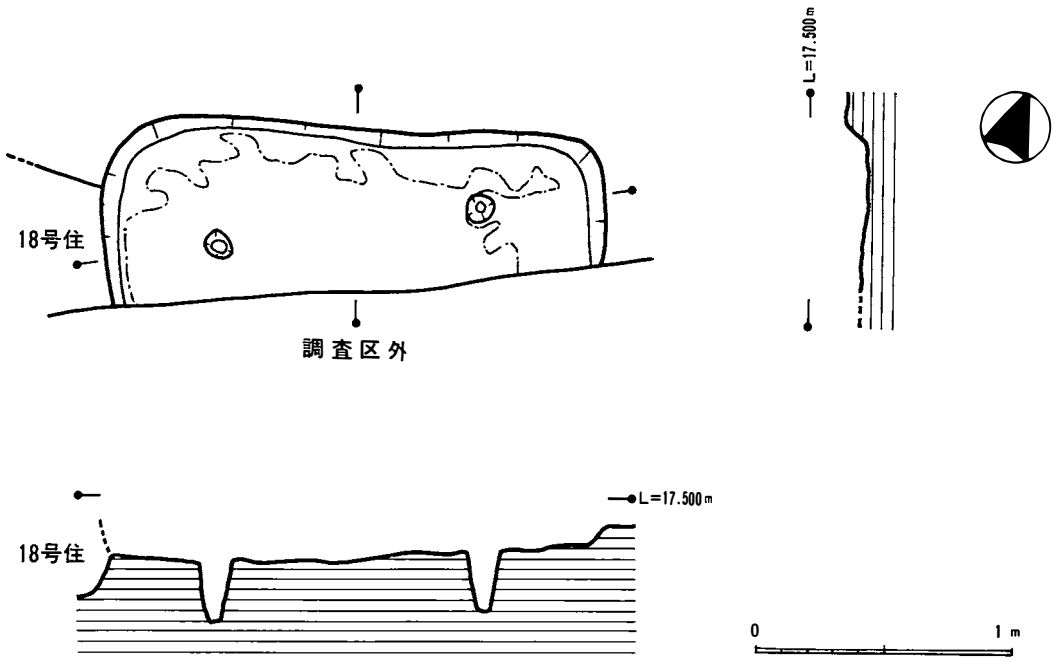
【遺物】

検出せず

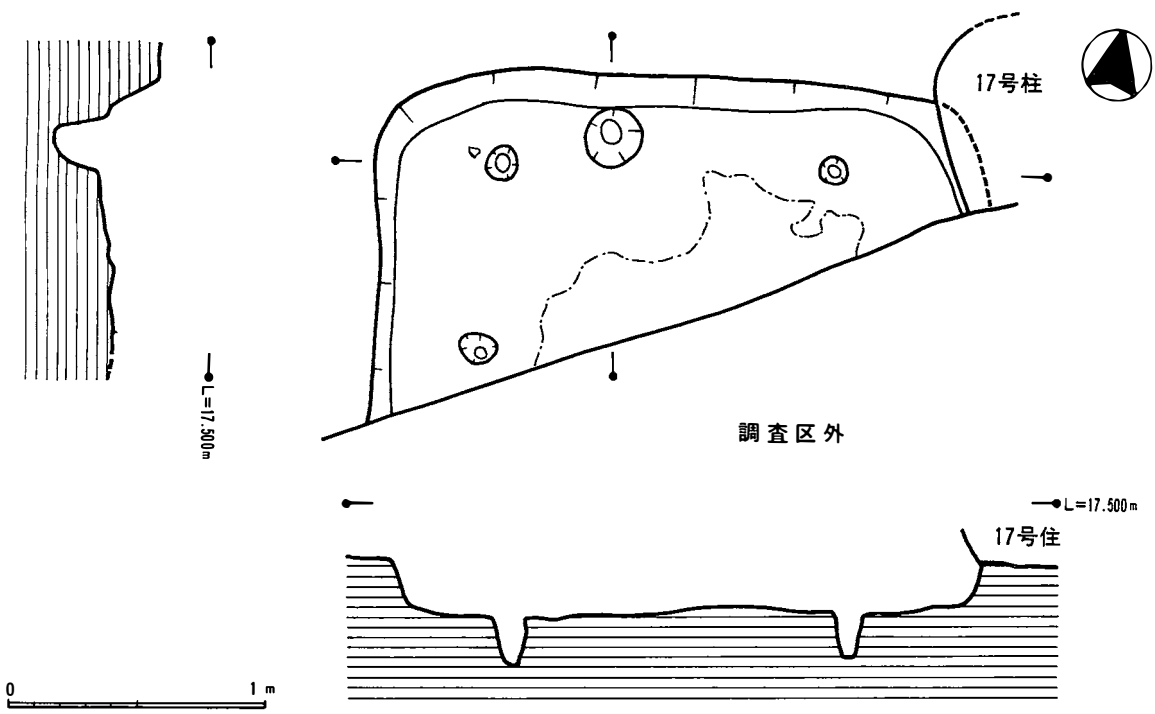




第32図　第16号住居跡実測図・出土遺物実測図



第33図　第17号住居跡実測図



第34図　第18号住居跡実測図

第18号住居跡（第34図）

【位置】

［主軸方位］

不明

［区域］

Ⅰ－７区

［重複］

第17号住居跡に切られる。(17－新，18－旧)

【構造】

［形状］

不明

［規模］

東西　2.4ｍ

［深さ］

確認面より約20㎝

［覆土］

暗褐色土。分層できず

［床面］

床面ほぼ中央部に、かなりしっかりとした硬化面が広がる

［柱穴］

４本柱と思われるが、このうち３本を検出

［カマド］

未検出であるが、他住居の例から、東側壁面に設置されていたものと推定される

［付帯設備］

検出せず

【特記事項】

未調査の部分が多く、詳細は不明である

【遺物】

土師器の細片がわずかに出土する

第19号住居跡（第35･36図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－103°－Ｗ

［区域］

Ｆ－６・７区

［重複］

第２号掘立柱建物と重複する。第２号掘立柱建物が廃棄された後に当住居が造られており、柱穴の上に当住居のカマドが造られるなど、相互の遺構の明確な切り合い関係が確認できる

【構造】

［形状］

ほぼ正方形に近い、隅丸方形

［規模］

長軸　3.2ｍ×短軸　2.8ｍ

［深さ］

確認面より約15㎝

［覆土］

基本的に暗褐色土であるが、上部はややフカフカした土、下部はやや硬く締まった同色の土が入る

［床面］

東側壁面から西側壁面にかけて、かなりしっかりとした硬化面が広がる

［柱穴］

４本柱。規模はいずれも不揃いで、深さは20～25㎝程度

［カマド］

西側壁面のほぼ中央部に設置されており、両側のソデ石の一部、煙道の一部、支脚の抜き取り痕跡が残るなど、残存状況は比較的良好である。カマド内には、完形の丸瓦が残されていたが、出土状況からソデ石の上部にわたすなど、カマドの部材の一部として使用していたものらしい

［付帯設備］

検出せず

【特記事項】

床面直上において、砥石、鉄鎌、皿、甕などがまとまりとして確認され、当住居で一括して使用されていた遺物の可能性がある。またカマドに瓦の使用が認められるなど、当遺跡におけるカマドの構造を理解する好資料である

【遺物】（第37図 80～94，第38図 95，第111図 403）

［土器］

当遺跡の住居跡の中では、土器の残存状況が最も良いもののうちのひとつである

80～88は、土師器の坏である

80は、口径14.4㎝、器高2.6㎝、底径8.8㎝を測る。摩耗のため調整は不明である。全面に赤彩の痕がわずかに残る。にぶい橙色を呈する

81は、口径13.7㎝、器高3.0㎝、底径9.2㎝を測る。摩耗のため調整が不明な部分が多いが、体部は回転ナデで仕上げられる。部分的に橙色の赤彩が残る。にぶい橙色を呈する

82は、口径15.2㎝、器高3.6㎝、底径10.0㎝を測る。底部はヘラ切り後ナデ、体部外面は回転ナデ後ナデ、内面は回転ナデ、見込みはナデで仕上げられる。全面に橙色の赤彩の痕が残る。にぶい橙色を呈する

83は、口径16.6㎝、器高3.15㎝、底径9.6㎝を測る。底部はヘラ切り後ナデ、体部外面下部はヘラケズリ、外面上部と内面は回転ナデ、見込みは回転ナデ後ナデで仕上げられる。全面に橙色の赤彩が施される。にぶい橙色を呈する

84は、口径13.5㎝、器高2.9㎝、底径9.4㎝を測る。底部はヘラ切り後ナデ、体部は回転ナデで仕上げられる。全面に橙色の赤彩が見られる。にぶい橙色を呈する

85は、口径14.8㎝、器高3.25㎝、底径10.6㎝を測る。底部はナデ、体部はヨコナデで仕上げられる。全面に橙色の赤彩が残る

86は、口径16.7㎝、器高3.85㎝、底径10.25㎝を測る。底部はヘラ切り後ナデ、体部外面は回転ナデ、内面から見込みにかけては回転ナデ後粗い回転ヘラミガキが施される。全面に橙色の赤彩が残る。にぶい橙色を呈する

87は、口径14.25㎝、器高3.1㎝、底径8.5㎝を測る。底部はヘラ切り後ナデ、体部は回転ナデ、見込みはナデで仕上げられる。全面に橙色の赤彩が施される。にぶい橙色を呈する

88は、底部のみ残存し、底径7.9㎝を測る。底部はヘラ切り後雑なナデ、見込みは回転ナデで仕上げられる。残存部分全面に橙色の赤彩が残る。にぶい橙色を呈する

89は、須恵器の蓋である。口径15.8㎝、残存高2.3㎝を測る。口縁部付近は回転ナデ、体部はナデで仕上げられる。外面は淡黄灰色、内面は灰色を呈する

90も、須恵器の蓋である。口径17.4㎝、残存高2.2㎝を測る。口縁端部から体部内面にかけては回転ナデ、天井部にちかい体部はナデ、体部と口縁の境の外面はヘラケズリ後回転ナデで仕上げられる。灰白色を呈する

91は、須恵器の椀である。残存高4.4㎝、高台径9.6㎝を測る。体部内面は回転ナデ、見込みはナデで仕上げられるが、外面は摩耗のため調整不明である。淡黄灰色を呈する

92～94は、土師器の甕である

92は、口径27.4㎝、残存高12.7㎝を測る。口縁外部はヨコナデ、体部外面は一部ハケメ後ナデ、内面はヘラケズリで仕上げられる。口縁内部は摩耗のため調整不明。にぶい橙色を呈する

93は、口径27.4㎝、残存高8.9cnを測る。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメ後ヨコナデとナデ、内面はヘラケズリ後一部ハケメで仕上げられる。内面の口縁と体部の境に数条の沈線がめぐる。にぶい橙色を呈する

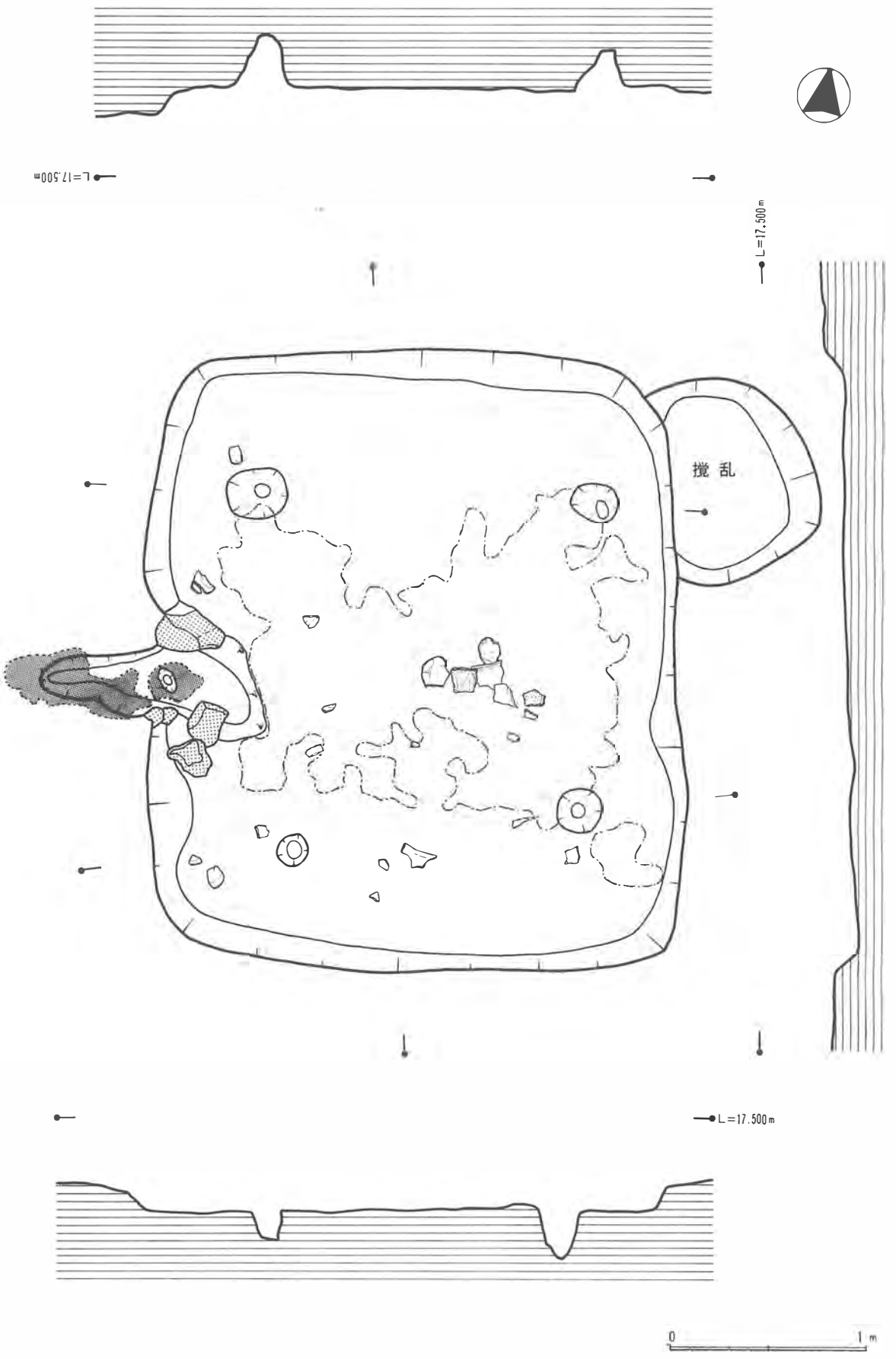
94は、口径28.4㎝、残存高9.25㎝を測る。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメと部分的にナデ、内面はヘラケズリで仕上げられる。外面は淡黄橙色、内面はにぶい橙色を呈する

［その他］

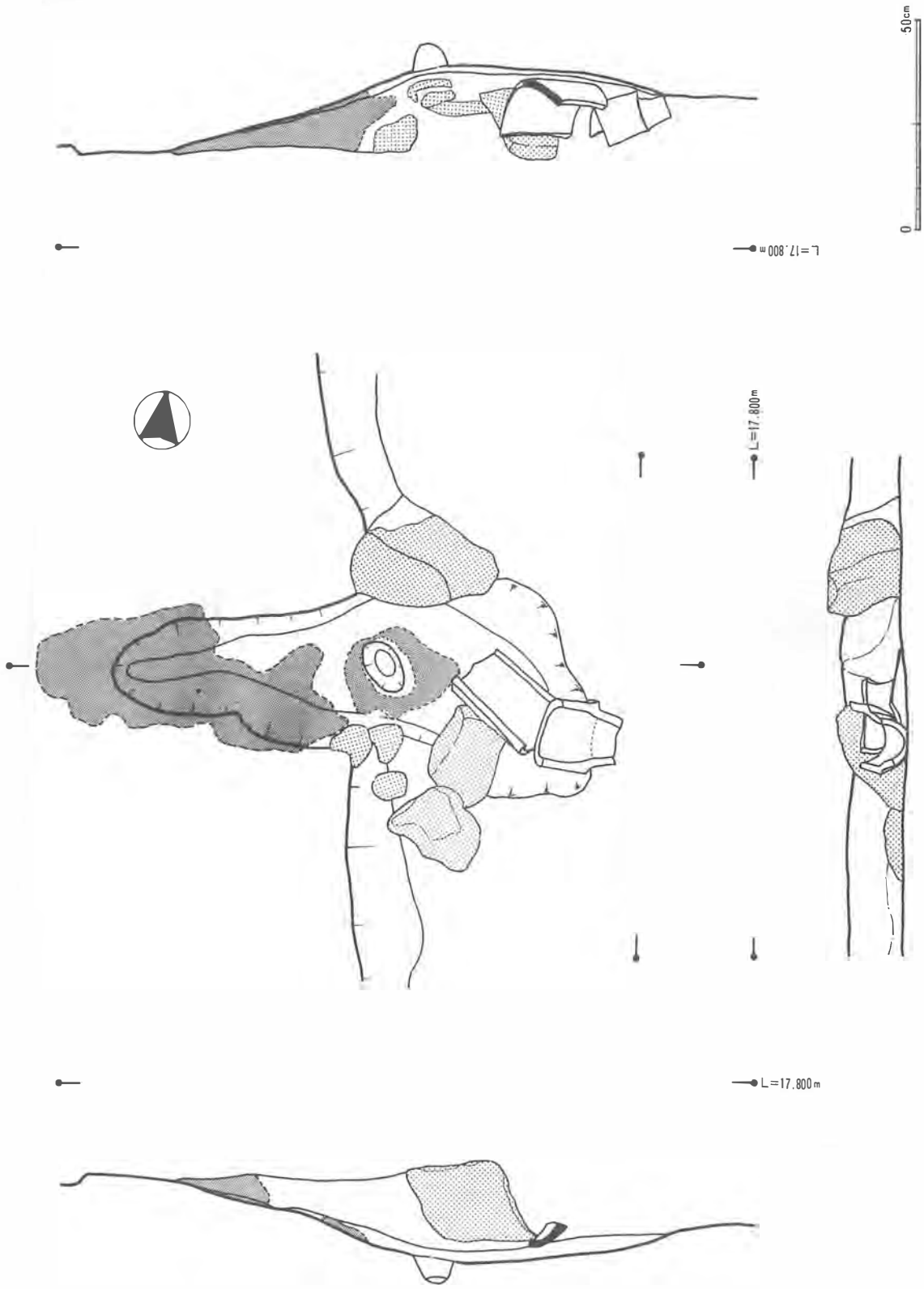
95は、鉄鎌である。刃部の先端をわずかに欠損するものの、ほぼ完形である。刃部が緩やかに湾曲し、着柄部の折り返しが見られるなど、鎌としての特徴を備えている。折り返し部分から推定される着柄角度は、約110度前後であり、かなり鈍角的に柄に装着されていたことがわかる。(13.0×2.3×0.2㎝，32.2ｇ)

96は、完形の丸瓦である。カマドの部材として使用されたと推定されるものである。「粘土紐巻上げ技法」によるもので、4～5㎝程度の幅の粘土紐の接合面が確認できる。調整は、凹面布目圧痕、凸面が箆状の工具により大きく調整したあと、ナデ調整を施している

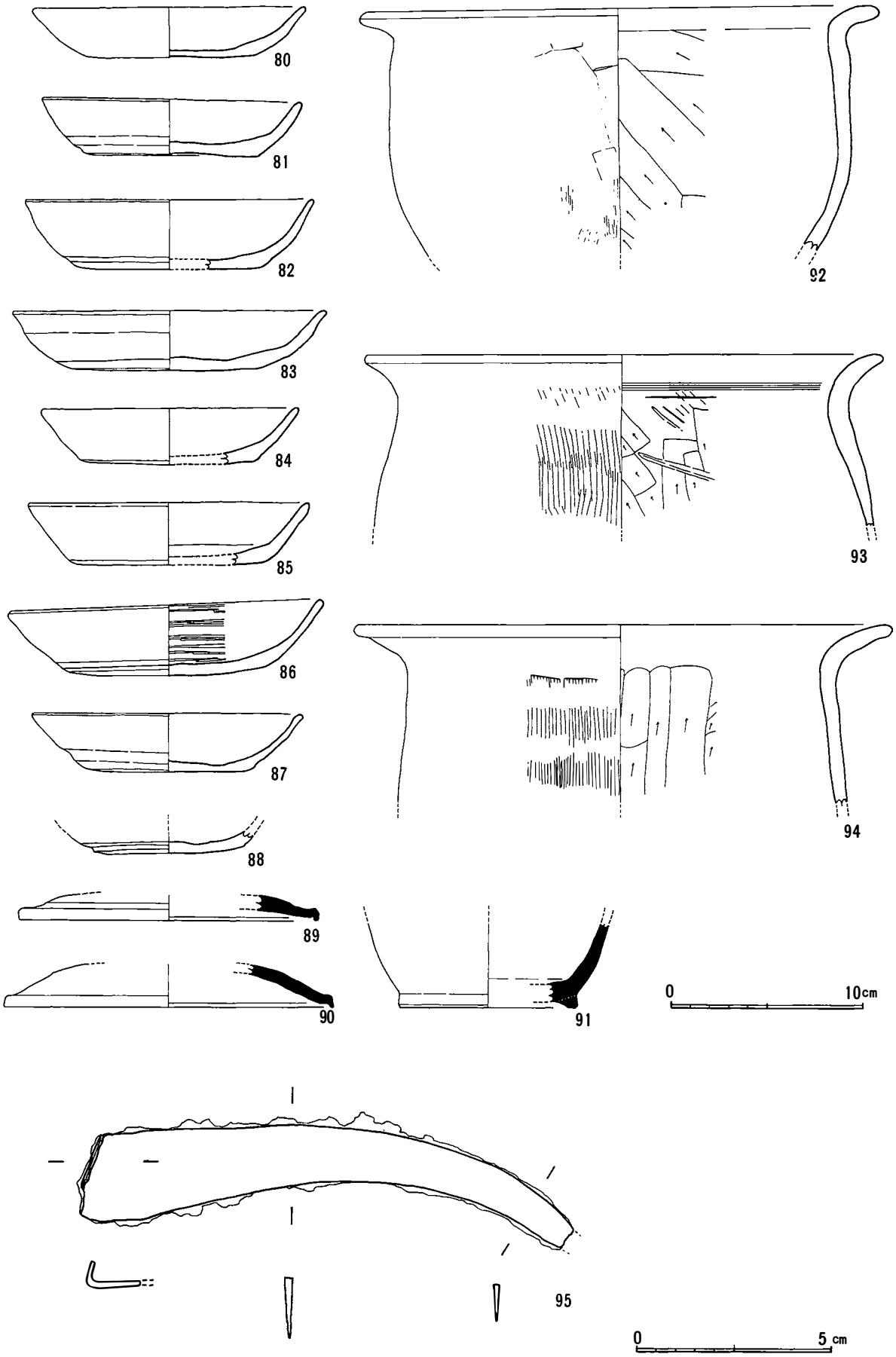
403の粗砥が、床面直上から出土している



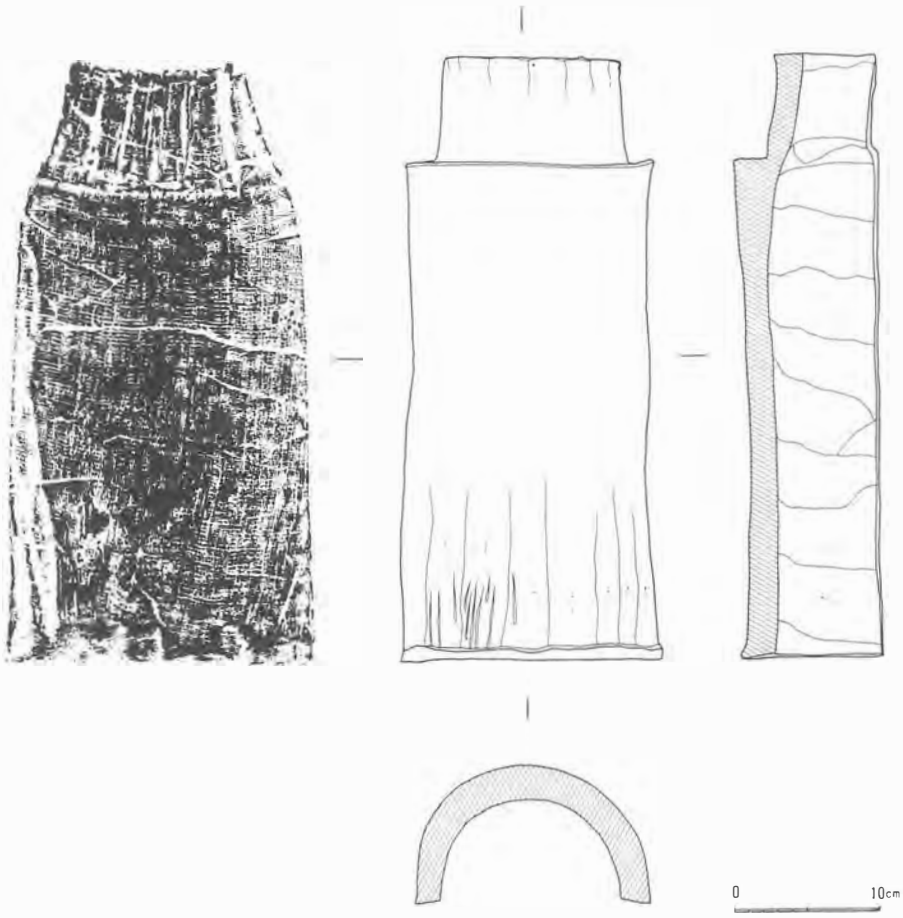
第35図　第19号住居跡実測図



第36図　第19号住居跡カマド実測図



第37図　第19号住居跡出土遺物実測図



第38図　第19号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡（第39図）

【位置】

［主軸方位］

不明

［区域］

Ｅ－３区

［重複］

北側を攪乱に大きく切られるほか、床面の２箇所に攪乱の穴が入る

【構造】

［形状］

全体形は不明

［規模］

不明

［深さ］

確認面より20㎝

［覆土］

暗黒褐色土。上部の削平が激しいため、かなり不純な土が混入する

［床面］

床面ほぼ中央部付近に、硬化面が広がる

［柱穴］

４本柱と思われるが、このうち３本を検出する

［カマド］

東側壁面に設置する。焚き口に向かって右側のソデ石と粘土の一部は残るが、カマドのほとんどは、攪乱に切られており、詳細は不明

［付帯設備］

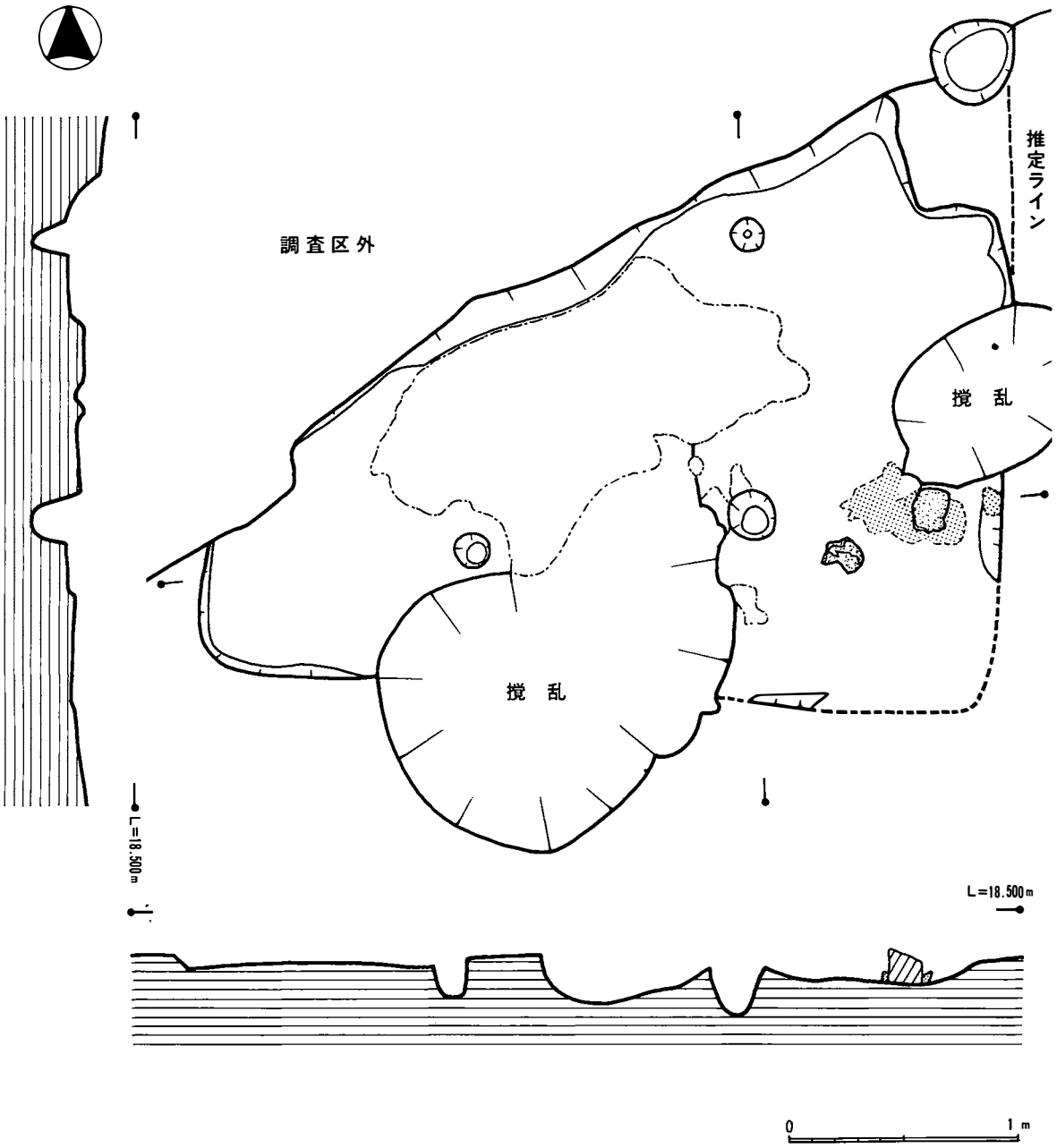
検出せず

【特記事項】

今回確認した住居のうち、最も北側で確認した住居である。上面の削平が激しく、遺構全体の残存状況はよくない。遺構配置図では、孤立した住居のように見えるが、周辺には住居跡の痕跡と見られる焼土の分布も見られ、一群の住居の中の１棟と考えられる

【遺物】

須恵器と土師器が少量出土したが、細片のため図化には至らなかった



第39図　第20号住居跡実測図

第21号住居跡（第40図）

【位置】

［主軸方位］

N－11°－W

［区域］

F－8区

［重複］

第21～24号住居跡が重複する。（新）21→22→23→24（旧）つまり、一連の切り合いの中で最も新しい住居である。また、当住居は第1号溝遺構にも切られており、同遺構が住居より後の時期の溝であることがわかる

【構造】

［形状］

東西に長い隅丸の長方形である。全体的な規模は小型

［規模］

長軸　3.83m×短軸　2.56m

［深さ］

確認面より約20cm

［覆土］

暗黒褐色土。分層できず。ただし、覆土中には、破壊された住居跡の硬化面の残骸と思われるブロック状の土が混入する

［床面］

床面中央部にまとまった形で、かなりしっかりとした硬化面が残る。なお、この硬化面の東側一帯には赤褐色の粘土を貼り付け、硬化している部分がある

［柱穴］

４本柱

［カマド］

北側壁面ほぼ中央部に設置する。焚き口に向かって左側のソデ石が残り、粘土で埋め込まれたソデ石の根元を検出した。なおこの奥には粘土中に埋め込まれたと思われる土師器が残る

［付帯設備］

分布する硬化面の東西両側は、直線的に切れて、一段下がる部分が認められた。つまり両脇には、何らかの敷物が敷き込まれていた可能性があると思われる

【特記事項】

連続して建て替えられた４棟切り合いの住居のうち、最も新しいものである。竪穴住居の、最も末期の構造を示すものと思われる

【遺物】（第41図 97～100, 第45図 102）

［土器］

98は、土師器の甕である。口径23.5㎝、残存高13.1㎝を測る。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメ、内面はヘラケズリで仕上げられる。外面はにぶい橙色から橙色、内面は浅黄橙色を呈する

99も土師器の甕である。口径26.0㎝、残存高12.7㎝を測る。口唇部と口縁外部はヨコナデ、口縁内部はハケメ、体部外面はハケメ後ヨコナデ、内面はヘラケズリで仕上げられる。浅黄橙色から橙色を呈する

100も土師器の甕である。口径24.9㎝、器高約24.5㎝を測る。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメ後下部にナデ、内面はヘラケズリで仕上げられる。口唇部に凹線がめぐる。外面はにぶい黄橙色、内面は灰黄褐色を呈する

102は、須恵器の蓋である。口径14.6㎝、器高1.2㎝を測る。天井部はヘラ切り後未調整、その他は回転ナデで仕上げられる。灰色を呈する。なおこれは、21～24号住居のいずれから出土したものか確定できない

［その他］

97は、土製の紡錘車である。暗黒褐色を呈し、一見すると縄文土器の焼成を思わせる。全体の半ばを欠損している。計測値は次の通り。(5.4×1.5×孔径0.7㎝,18.0ｇ)

第22号住居跡（第42図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－77°－Ｅ

［区域］

Ｆ－８区

［重複］

第21～24号住居跡が重複する。(新) 21→22→23→24 (旧)

【構造】

［形状］

隅丸の方形。正方形に近いが、南側壁面がやや外に張り出す

［規模］

長軸　3.7ｍ×短軸　3.7ｍ

［深さ］

確認面より10～13㎝

［覆土］

暗黒褐色土。分層できず

［床面］

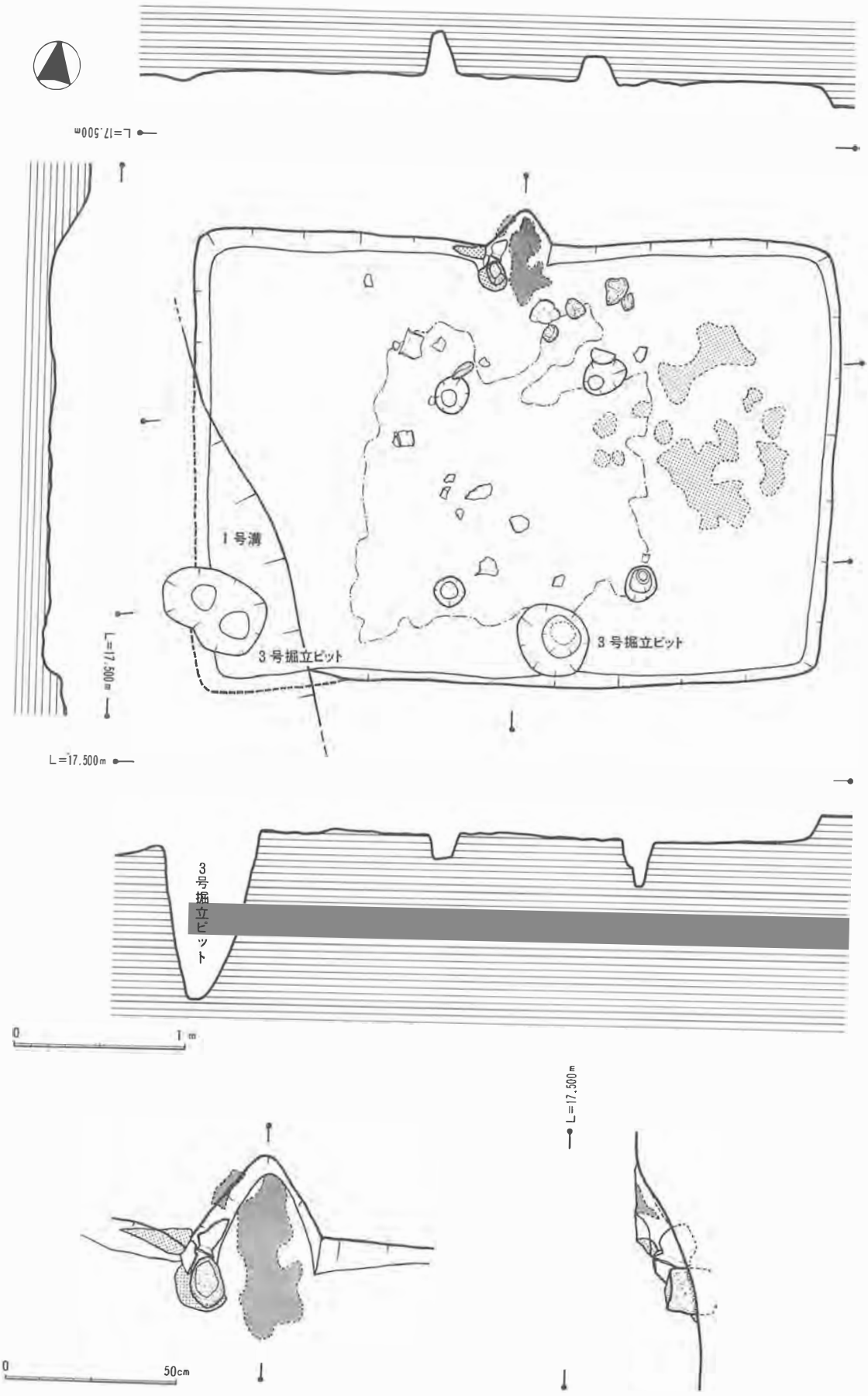
第21号住居跡に床面の大部分を切られているため判明しないが、床面全体に広く硬化面が形成されているもようである

［柱穴］

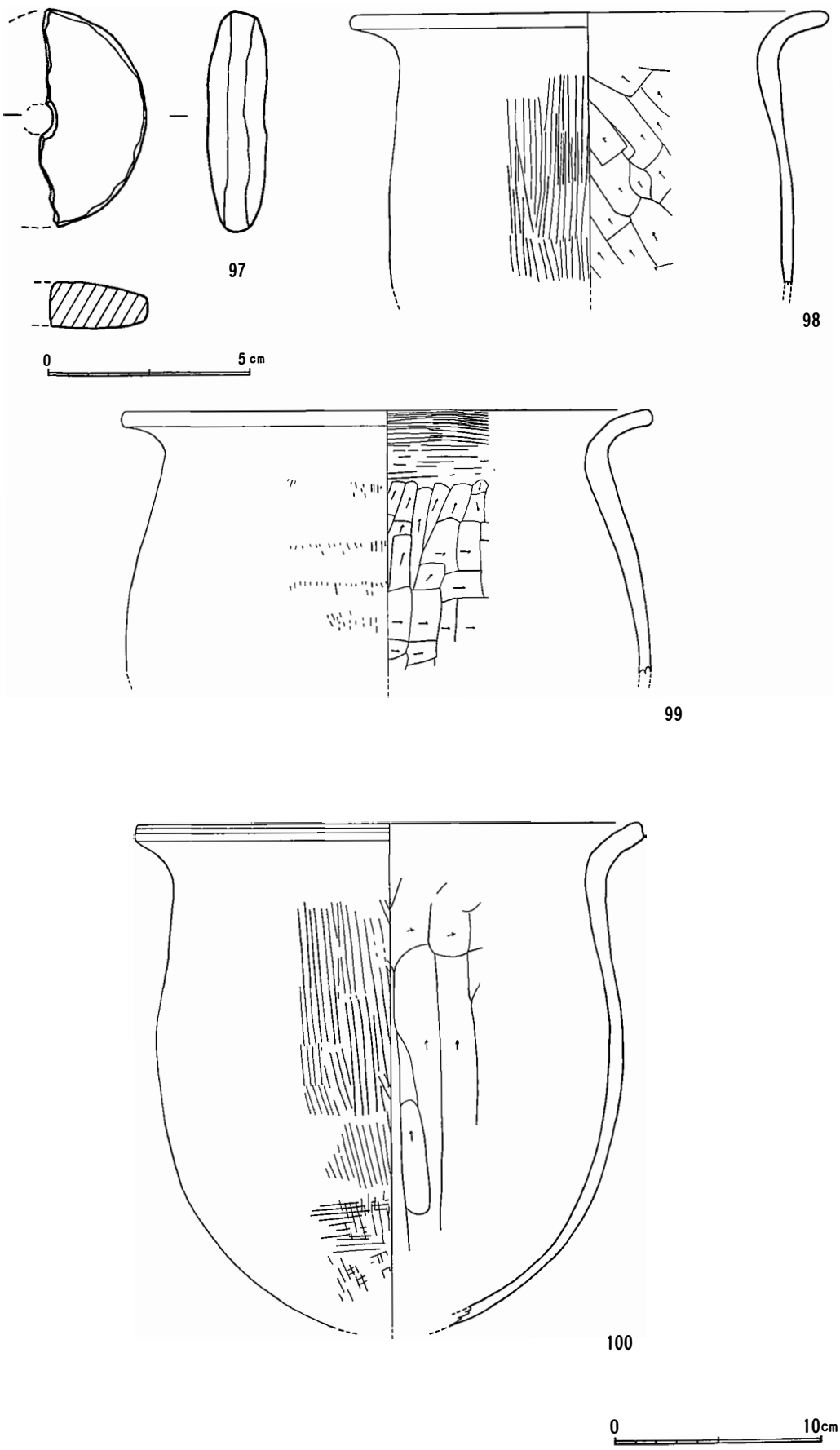
４本柱。規模は小さいものの、深さは30～50㎝と、他の住居とくらべてやや深い

［カマド］

東側壁面ほぼ中央部に設置する。焚き口の両側



第40図　第21号住居跡・カマド実測図



第41図　第21号住居跡出土遺物実測図

には他住居と同様に、ソデ石の根元が残り、塗り込まれていた粘土の一部を残している

［付帯設備］

検出せず

【特記事項】

連続して建て替えられた4棟切り合いの3番目の住居である。竪穴住居末期の住居構造の変遷を知る上で重要である

【遺物】（第45図 105）

［土器］

土師器と須恵器の細片がわずかに出土する。

［その他］

105は、鉄鎌である。刃部の先端をわずかに欠損するもののほぼ完形である。刃部は、全体がゆるやかに湾曲し、着柄部の折り返しが見られるなど鎌の特徴を示している。折り返しから推定される着柄角度は、約110度前後と、かなり鈍角的に柄に装着されていたようである。（12.7×2.2×0.2cm，32.0ｇ）

第23号住居跡（第43図）

【位置】

［主軸方位］

N－104°－W

［区域］

F－8区

［重複］

第21～24号住居跡が重複する。（新）21→22→23→24（旧）

【構造】

［形状］

東西にやや長い長方形

［規模］

長軸　4.1m×短軸　3.4m

［深さ］

確認面より4cm程度

［覆土］

暗褐色土。分層できず

［床面］

床面中央部に東西方向に硬化面が広がるようであるが、第22号住居跡に大きく切られるため、詳細は不明

［柱穴］

4本柱と思われるが、切り合いが激しく、精査するも検出せず

［カマド］

西側壁面ほぼ中央部に設置する。燃焼面の焼土は確認するが、ソデ石等は検出せず

［付帯設備］

検出せず

【特記事項】

連続して建て替えられた4棟切り合いの2番目の住居である。竪穴住居末期の住居構造の変遷を知る上で重要な資料である

【遺物】

土師器の細片がわずかに出土する

第24号住居跡（第44図）

【位置】

［主軸方位］

N－73°－E（推定）

［区域］

F－8区

［重複］

第21～24号住居跡が重複する。（新）21→22→23→24（旧）。つまり、一連の切り合いの中で最も古い住居である

【構造】

［形状］

全体は不明であるが、隅丸の方形に近いものらしい

［規模］

不明。3.1m四方程度か？

［深さ］

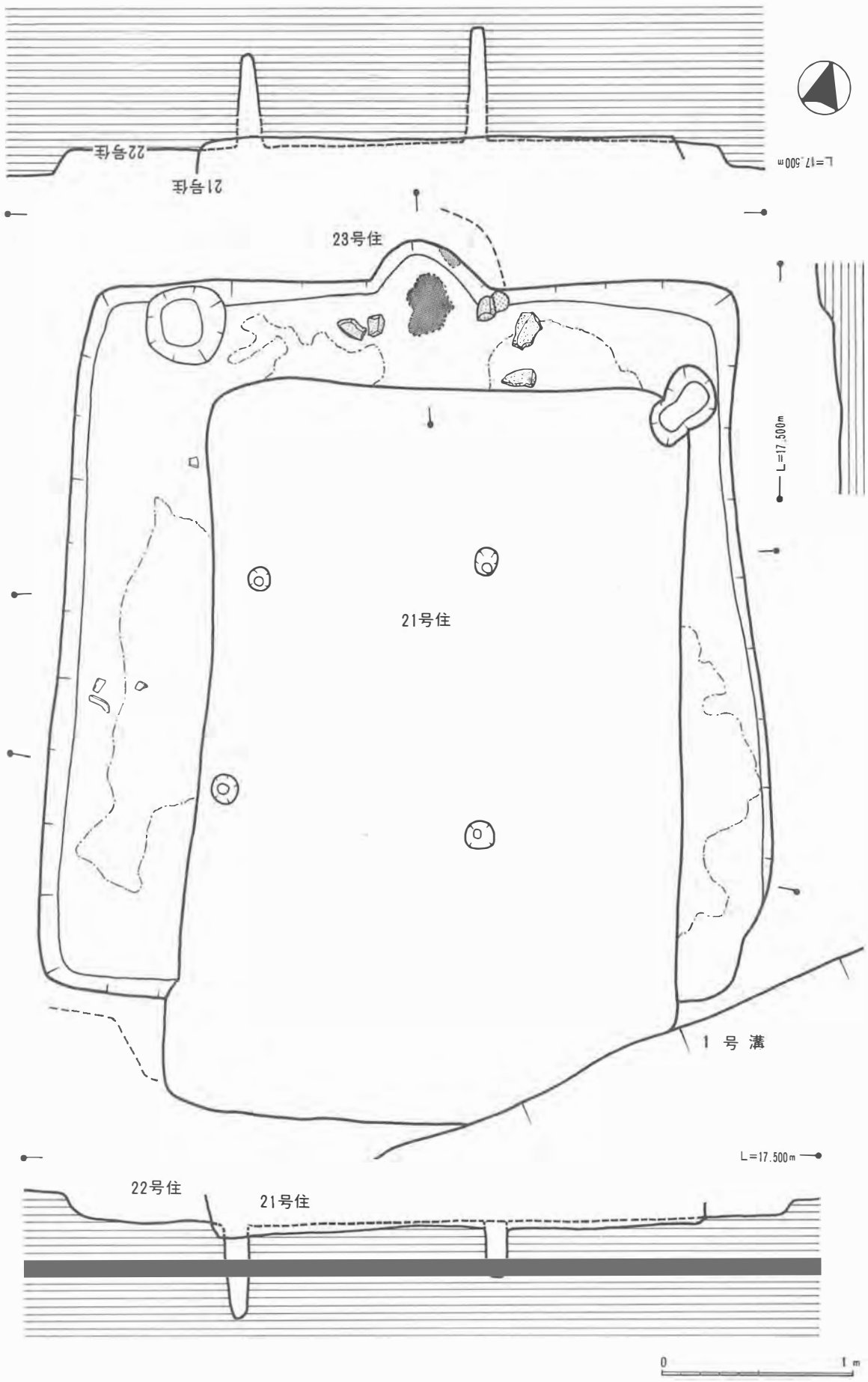
確認面より15cm程度

［覆土］

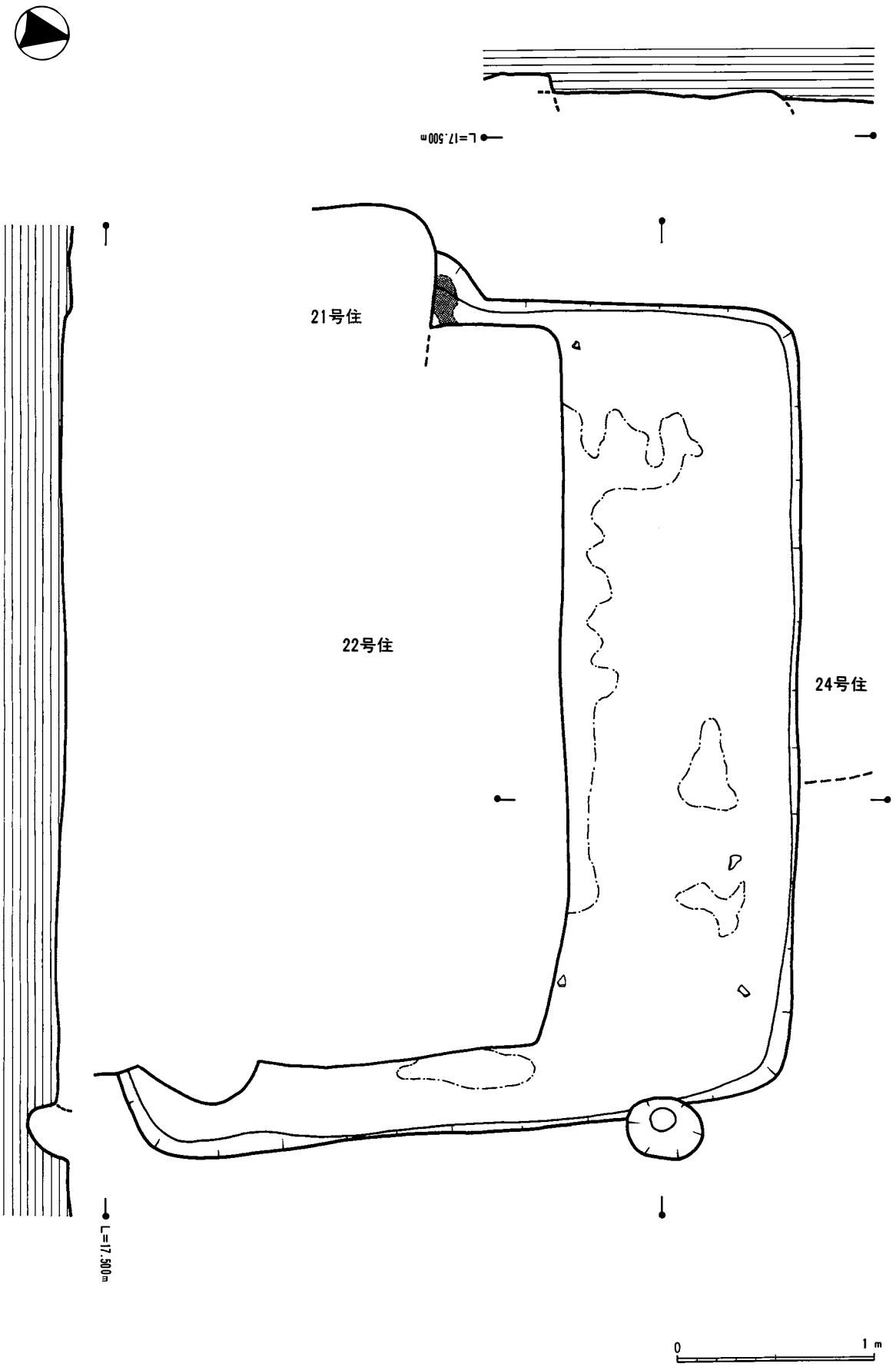
暗褐色土。分層できず

［床面］

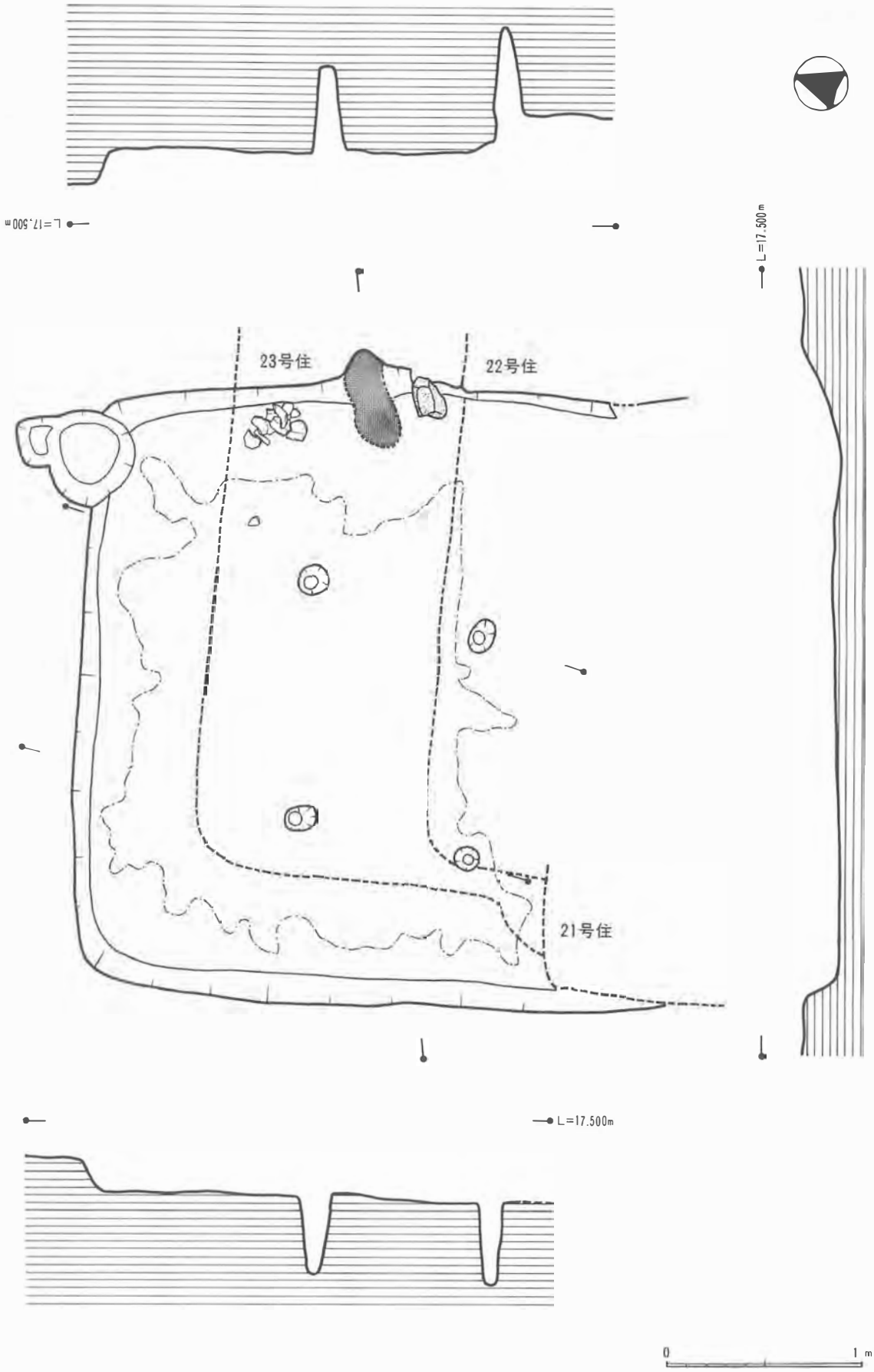
切り合いが激しいため全体は不明だが、床面全体に広く硬化面が形成されていたらしい



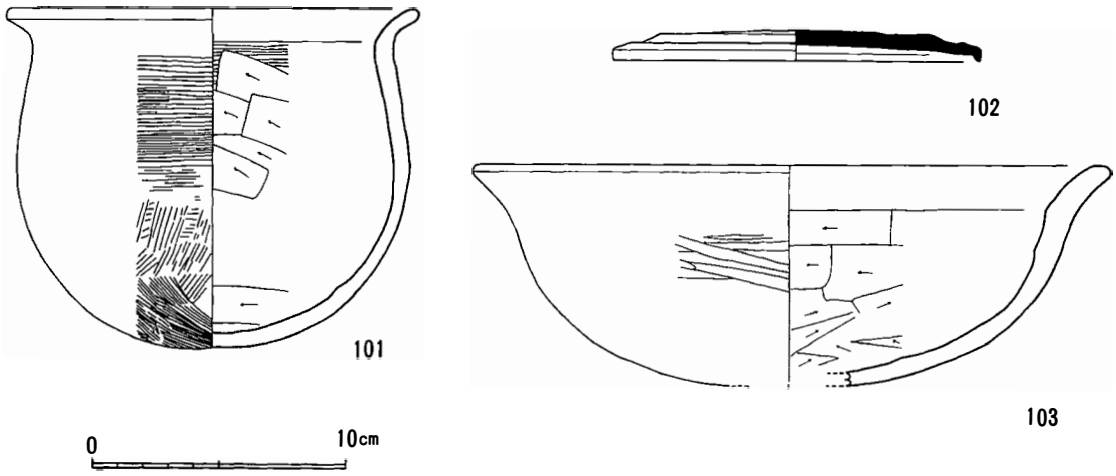
第42図　第22号住居跡実測図

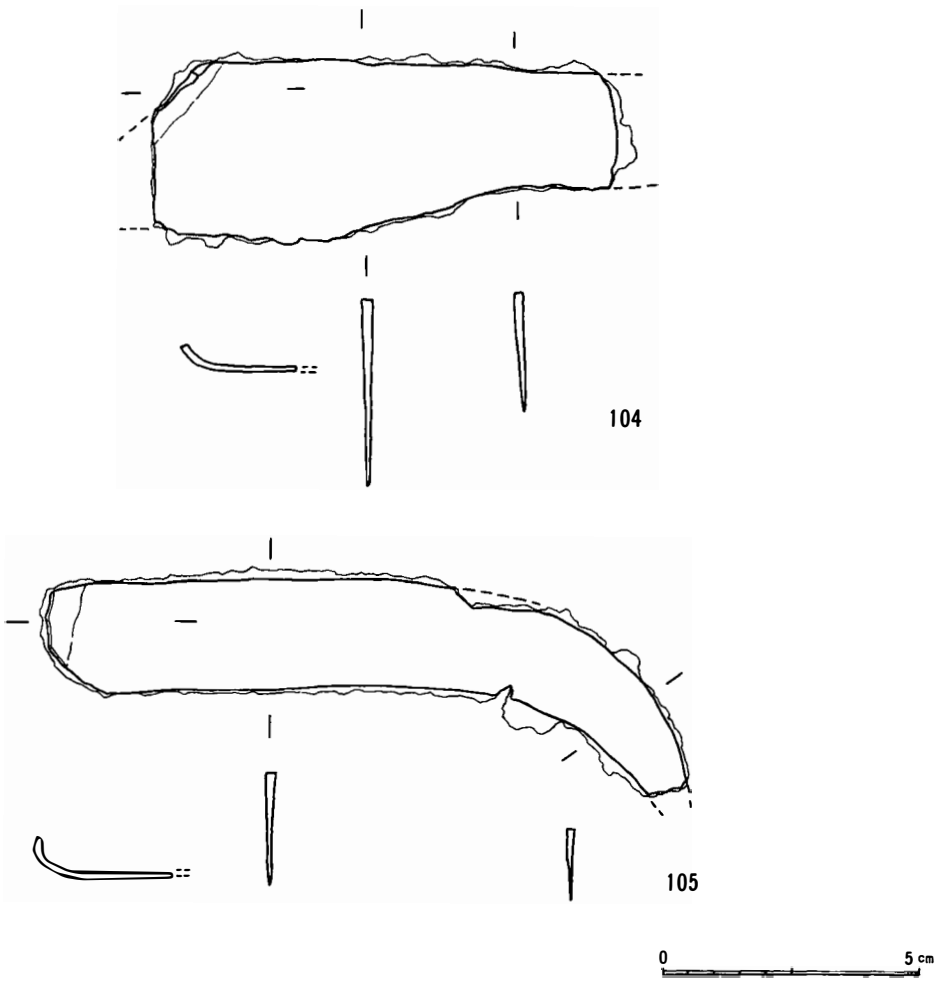


第43図　第23号住居跡実測図



第44図　第24号住居跡実測図





第45図　第22～24号住居跡出土遺物実測図

［柱穴］

４本柱。南東側ピットがやや内側に入る。柱穴の規模は小さいが、深さは40㎝程度と、当遺跡の中では深い方に属する

［カマド］

東側壁面ほぼ中央部に設置する。燃焼面の焼土がよく残るほか、右側のソデ石の根元が粘土で下部を固められた状態で残っている

［付帯設備］

検出せず

【特記事項】

連続して建て替えられた４棟切り合いの住居のうち、最も古いものである。竪穴住居末期の住居構造の変遷を知る上で重要である。なお、当住居群は、第３号掘立柱建物と重複するが、同建物はこの住居群に先行するもようである

【遺物】（第45図 101.103.104）

［土器］

101は、土師器の甕である。口径16.5㎝、器高13.25㎝を測る。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメ、内面は一部ハケメ後ヘラケズリで仕上げられる。外面は淡橙色、内面はにぶい橙色を呈する

103も、土師器の甕である。口径25.5㎝、器高約8.6㎝を測る。口縁部はヨコナデ、体部外面はナデ、内面はヘラケズリで仕上げられる。にぶい橙色を呈する

［その他］

104は、鉄鎌である。両端部を欠損するものの、刃部の形成の具合や、着柄部の折り返しの様子から、鎌としての特徴を備えている。折り返し部分から推定される着柄角度は、約130度程度と、かなり鈍角的に柄に装着されていたらしい。（＊9.2×3.5×0.2㎝,41.2ｇ）

第25号住居跡（第46図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－23°－Ｗ

［区域］

Ｅ－９区

［重複］

認められず

【構造】

［形状］

隅丸の長方形。東西に細長く、全体として小型である

［規模］

長軸　3.6ｍ×短軸　2.6ｍ

［深さ］

確認面より約30㎝

［覆土］

５層に分層する。詳細は土層断面図参照のこと

［床面］

床面ほぼ中央部付近一帯に、かなりしっかりとした硬化面が残る

［柱穴］

４本柱。規模や配置が多少不揃いである

［カマド］

北側壁面中央からやや東よりに設置する。焚き口に向かって右側のソデ石が残る。前面に石を使用し、後ろに粘土を塗り込んでいる。なお、煙道の一部が残る

［付帯設備］

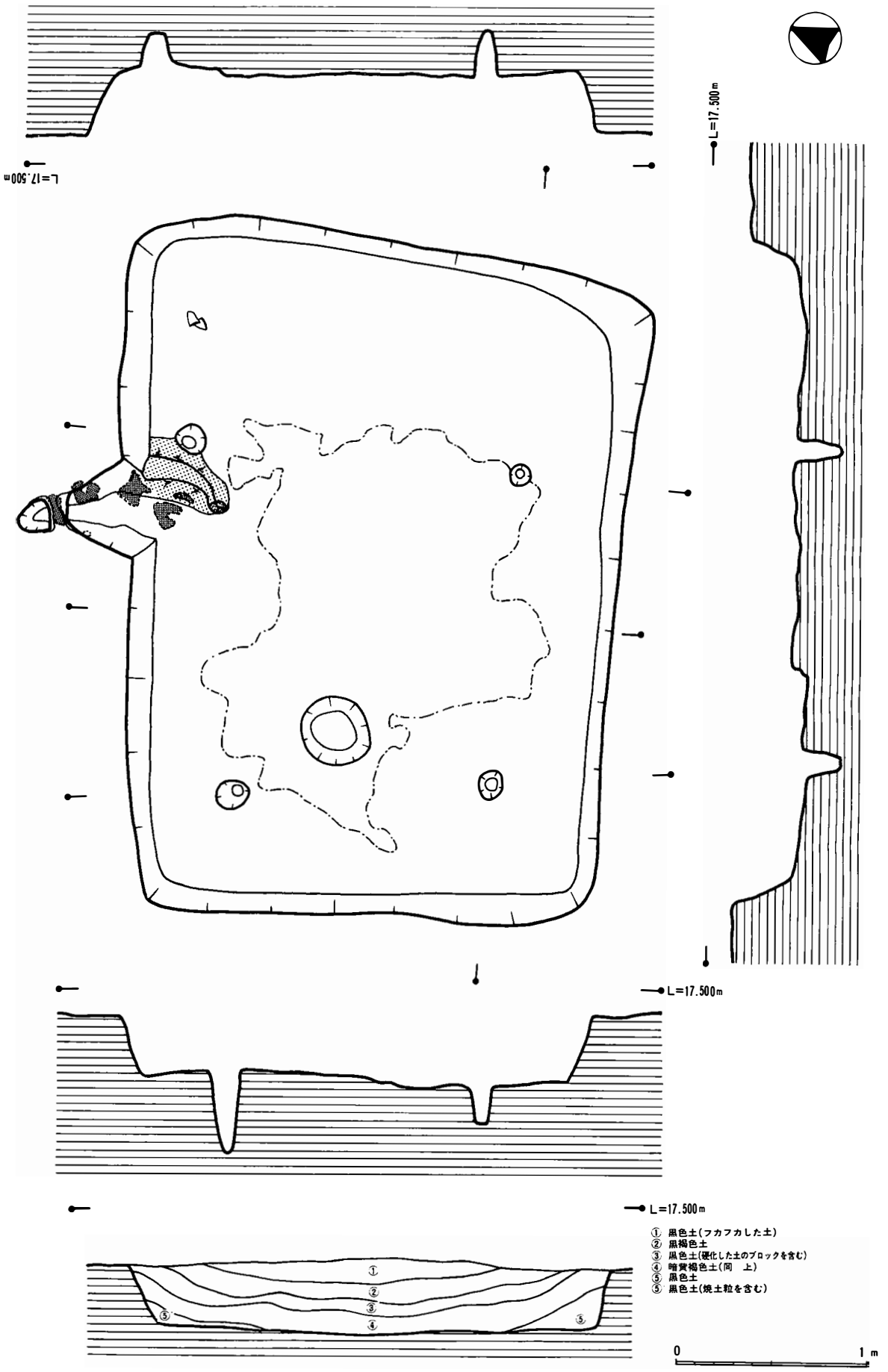
床面中央部からやや西よりにピット１基を検出

【特記事項】

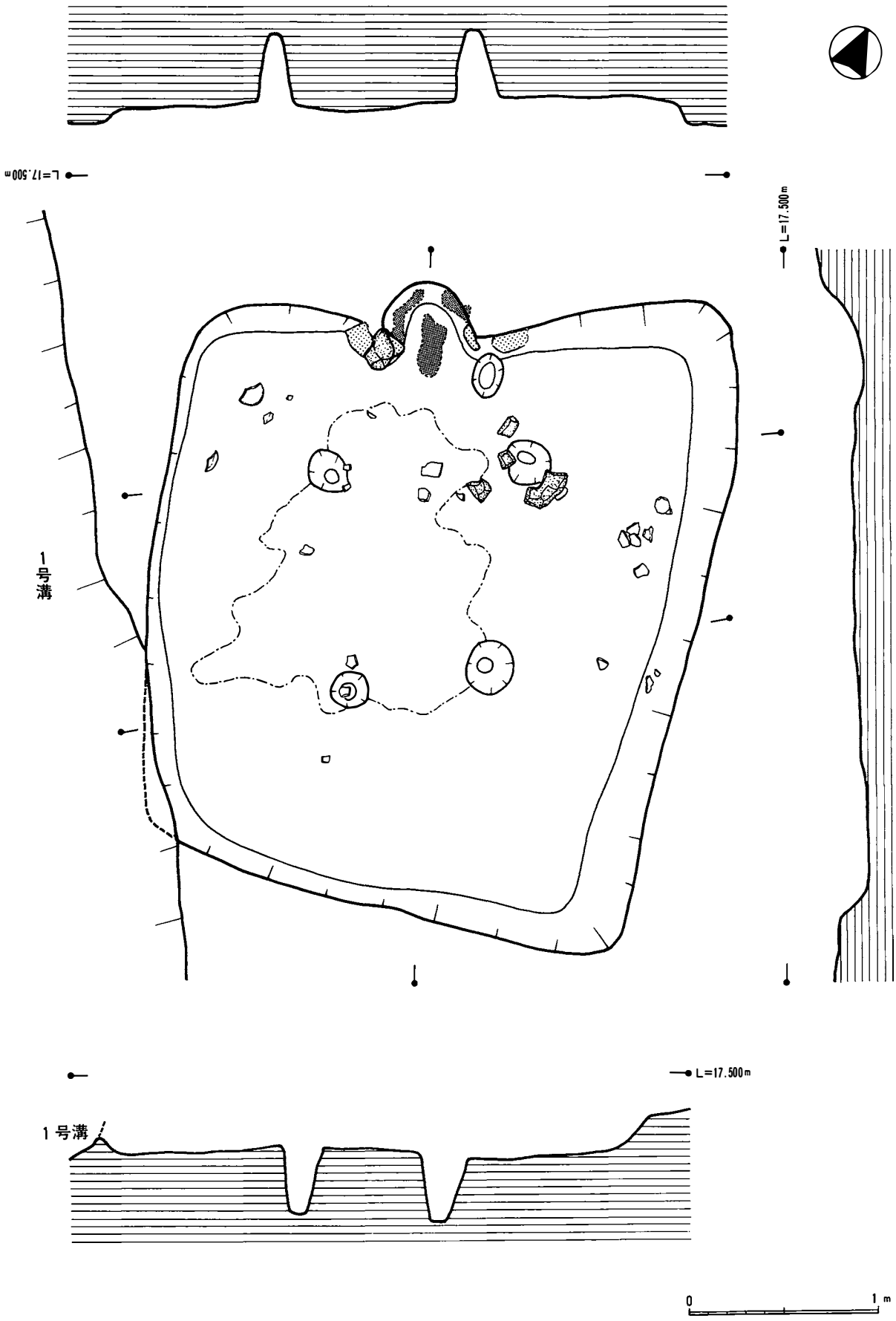
当遺跡の住居群の配置の中で、ほぼ西の端に位置しているものである。規模が小型で、カマドの位置がずれるなど、竪穴住居の末期の構造に近いと判断している

【遺物】

土師器の細片が少量出土したが、図化には至らなかった



第46図　第25号住居跡実測図



第47図　第26号住居跡実測図

第26号住居跡（第47図）

【位置】

［主軸方位］

N－21°－W

［区域］

F－9区

［重複］

第1号溝遺構に南西コーナーを切られる。（1号溝－新，26号住－旧）

【構造】

［形状］

隅丸の長方形。北東コーナーがやや外に張り出す

［規模］

長軸　3.0m×短軸　2.9m

［深さ］

確認面より10～18cm

［覆土］

暗褐色土。分層できず

［床面］

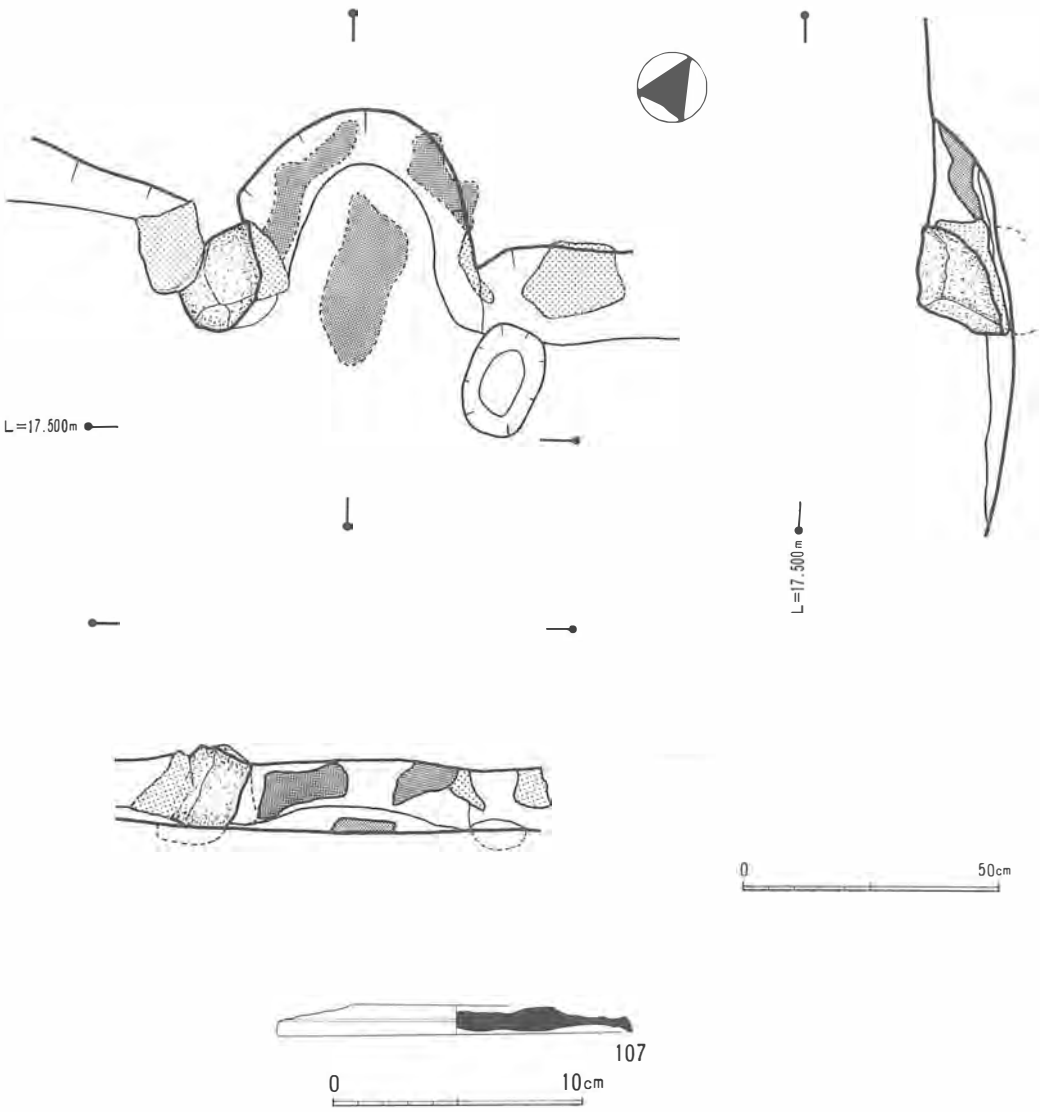
床面ほぼ中央のカマド前方部付近一帯に、かなりしっかりとした硬化面が残る

［柱穴］

4本柱

［カマド］

北側壁面ほぼ中央部に設置する。焚き口に向かって左側のソデ石が残るほか、右側のソデ石の抜き取り痕を検出する



第48図　第26号住居跡カマド実測図・出土遺物実測図

［付帯設備］

検出せず

【特記事項】

第１号溝遺構に切られることで、溝と住居跡との時期関係を判定することが可能である

【遺物】（第48図 107）

若干の須恵器と、かなりの土師器が出土したが、実測可能な須恵器の蓋一点のみ図示した

107は、口径14.35㎝、器高1.2㎝を測る。口縁部付近は回転ナデ、体部外面はヘラ切り後ナデ、内面はナデで仕上げられる。灰オリーブ色を呈する

第27号住居跡（第49図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－4°－Ｅ

［区域］

Ｉ－４区

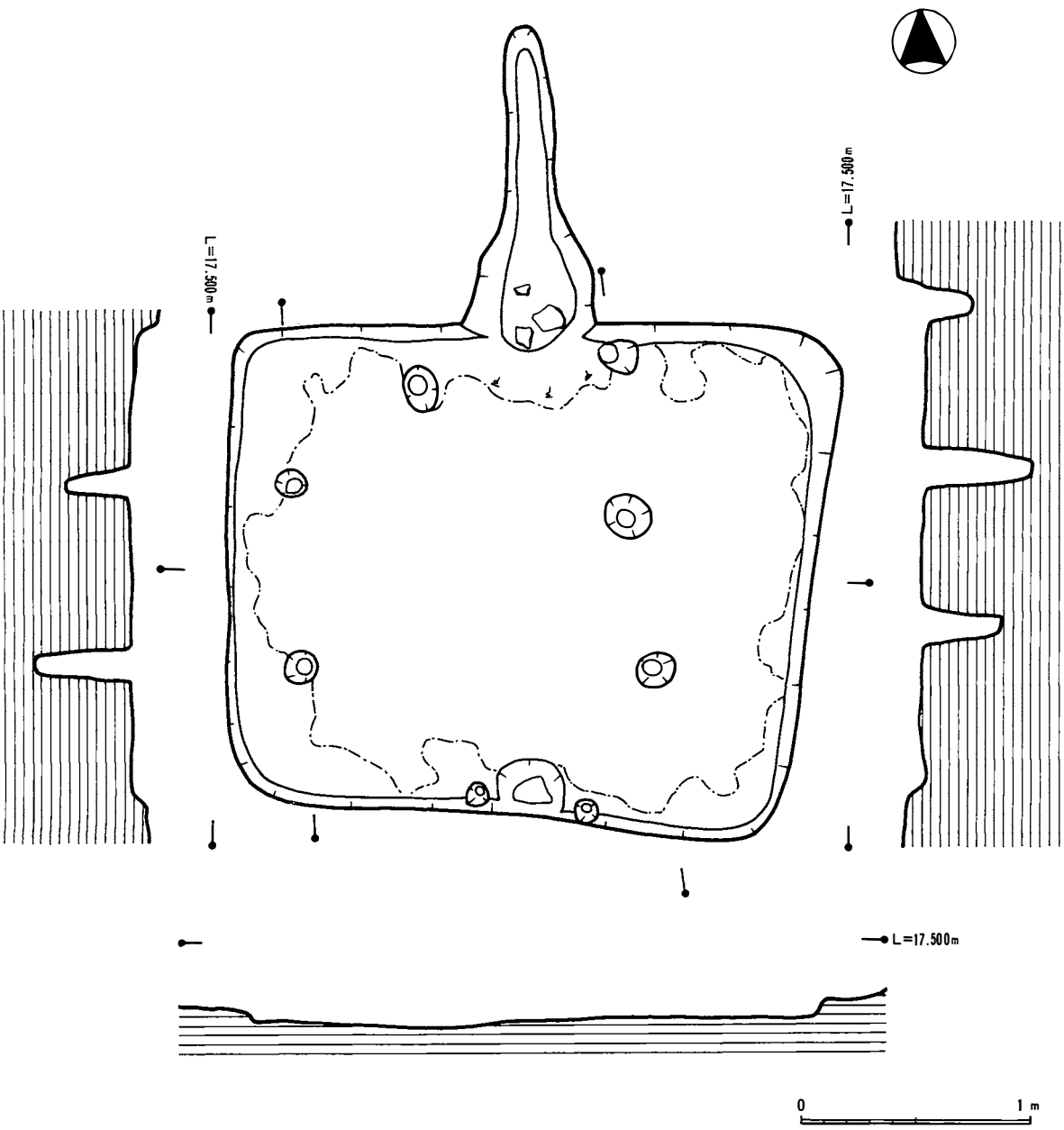
［重複］

認められず

【構造】

［形状］

東西にやや長い長方形



第49図　第27号住居跡実測図

［規模］

長軸　2.58ｍ×短軸　2.08ｍ

［深さ］

確認面より約8㎝

［覆土］

暗褐色土。分層できず

［床面］

小型の住居であるが、床面の全面にかなりしっかりとした硬化面が残る

［柱穴］

４本柱

［カマド］

住居跡北側壁面中央部に設置されていたものらしく、煙道状のものが住居外にのびている。しかし、焼土やソデ石や粘土などの残存がないことなどから、疑問が残る。一部に樹根が入る

［付帯設備］

出入り口と思われる南側壁面中央部に、小ピットに両脇を挟まれたピット１基を検出する。用途等不明

【特記事項】

今回検出した住居の中で、最も規模の小さいものである。しかし、床面の項に記したように、硬化面が壁際ぎりぎりまで形成されることや住居自体の規模が小さいことなど、従来の屋根構造の住居は想定しにくい。たとえば直立する壁の住居など、異なった住居構造のありかたを示唆するような資料である

【遺物】

土師器の細片が少量出土したが、図化には至らなかった

第28号住居跡（第50図）

【位置】

［主軸方位］

不明

［区域］

Ｊ－４区

［重複］

認められず

【構造】

［形状］

全体形不明

［規模］

南北軸　2.8ｍ

［深さ］

確認面より約10㎝

［覆土］

暗黒褐色土。分層できず

［床面］

堅緻な硬化面は検出せず

［柱穴］

不明

［カマド］

不明

［付帯設備］

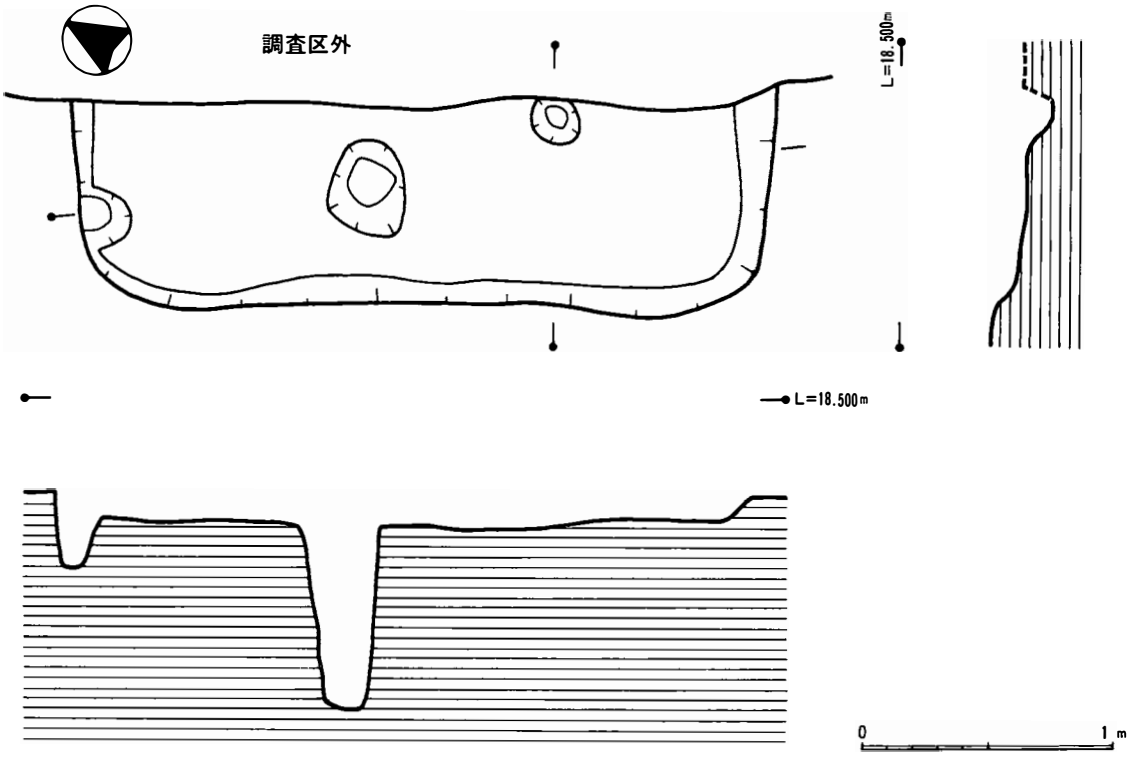
検出せず

【特記事項】

住居跡のほとんどが調査区域外にかかるため、詳細は不明

【遺物】

土師器の細片が少量出土したが、図化には至らなかった



第50図　第28号住居跡実測図

第29号住居跡（第51図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－107°－Ｗ

［区域］

Ｊ－５区

［重複］

第30号住居跡を内包し、西北隅で第31号住居跡を切る。（新）29→30→31（旧）

【構造】

［形状］

隅丸の方形

［規模］

長軸　3.29ｍ×短軸　3.26ｍ

［深さ］

確認面より14～24㎝

［覆土］

暗褐色土。分層できず

［床面］

硬化面が部分的に分布するが、他の住居跡のように堅緻なものではない。第30号住居跡の掘り込み上面に形成されたためではないか、と推定している

［柱穴］

この住居跡の調査段階では検出できなかったが、第30号住居跡の調査段階で検出されたピットの中に位置的に適当と思われるものが４基ある

［カマド］

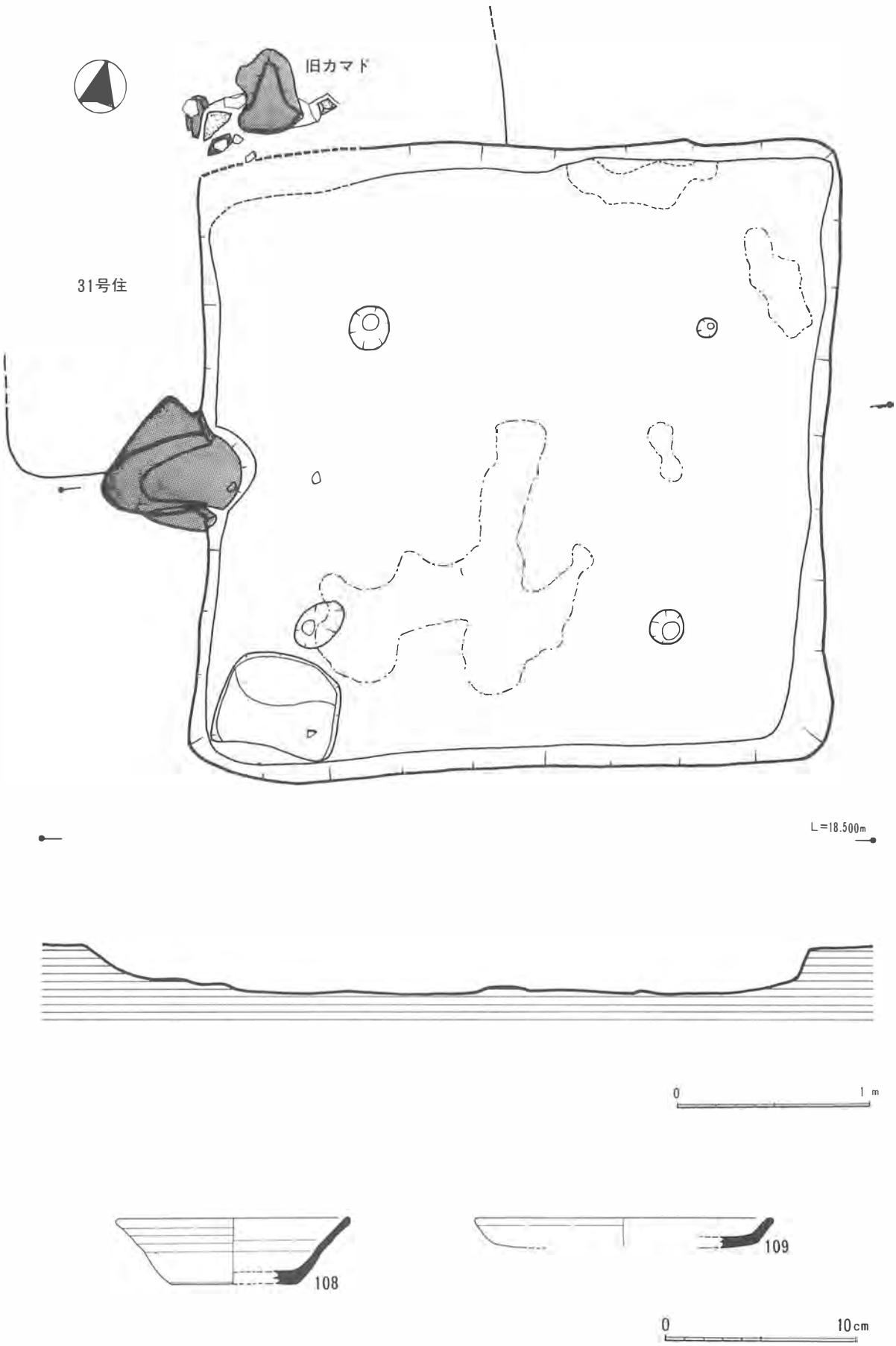
西北隅に古いカマド、西側壁面中央部に新しいカマドが設置されている。古いカマドには、袖に砂岩質の石が用いられるが、新しい方は粘土による袖と燃焼面が残るだけである。おそらく、場所の不便さにより早々に新しい方へ移行したのだろう

［付帯設備］

南西隅に深さ5㎝ほどのくぼみがあり、灰が検出された

【特記事項】

第30号住居跡を拡張して造られ、柱穴も30号住のものをそのまま利用したのではないか、と推定している



第51図　第29号住居跡実測図・出土遺物実測図

【遺物】（第51図 108.109）

須恵器、土師器の細片がかなり出土したが、実測可能な２点のみ図示した

108は、須恵器の坏である。口径12.5㎝、器高3.5㎝、底径6.8㎝を測る。底部はヘラ切り後ナデ、体部は回転ナデ、見込みはナデで仕上げられる。淡黄灰色を呈する

109は、須恵器の皿である。口径15.9㎝、器高約1.5㎝、底径13.7㎝を測る。体部外面から底部にかけて粒状の、体部内面には黒色の自然釉が見られる。灰色を呈する

第30号住居跡（第52図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－110°－Ｗ

［区域］

Ｊ－５区

［重複］

第29号住居跡に内包され、第31号住居跡を切る。（新）29→30→31（旧）

【構造】

［形状］

隅丸の長方形

［規模］

長軸　2.68ｍ×短軸　2.03ｍ

［深さ］

確認面より10～15㎝

［覆土］

暗褐色土。分層できず

［床面］

硬化面は検出せず。北西隅に粘土の張り付けがなされる

［柱穴］

第29号住居跡との共用と推定されるものが４基

［カマド］

西側壁面中央部に設置される。わずかに燃焼面が残るのみ。後にこの直上に第29号住居跡のカマドがつくられた

［付帯設備］

ピット３基を検出する。直径約20～30㎝、深さ約10～30㎝で用途不明

【特記事項】

当初は、第29号住居跡の掘り込みかと思われたが、カマドが検出されたので一軒の住居とみなした。おそらくすぐに手狭になり、拡張した結果が第29号住居跡となるのだろう

【遺物】（第54図 113）

土師器が少量出土したが、実測可能な一点のみを図示した

113は、須恵器の高台付き皿である。口径18.2㎝、器高2.6㎝、高台径10.8㎝を測る。体部内面と見込みは回転ナデで仕上げられ、底部から体部外面にかけては自然釉の付着により調整不明である。外面は灰オリーブ色、内面は灰色を呈する

第31号住居跡（第53図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－24°－Ｗ

［区域］

Ｊ－４区

［重複］

南東隅を第29・30号住居跡に切られる。（新）29→30→31（旧）

【構造】

［形状］

隅丸の方形

［規模］

長軸　2.82ｍ×短軸　2.62ｍ

［深さ］

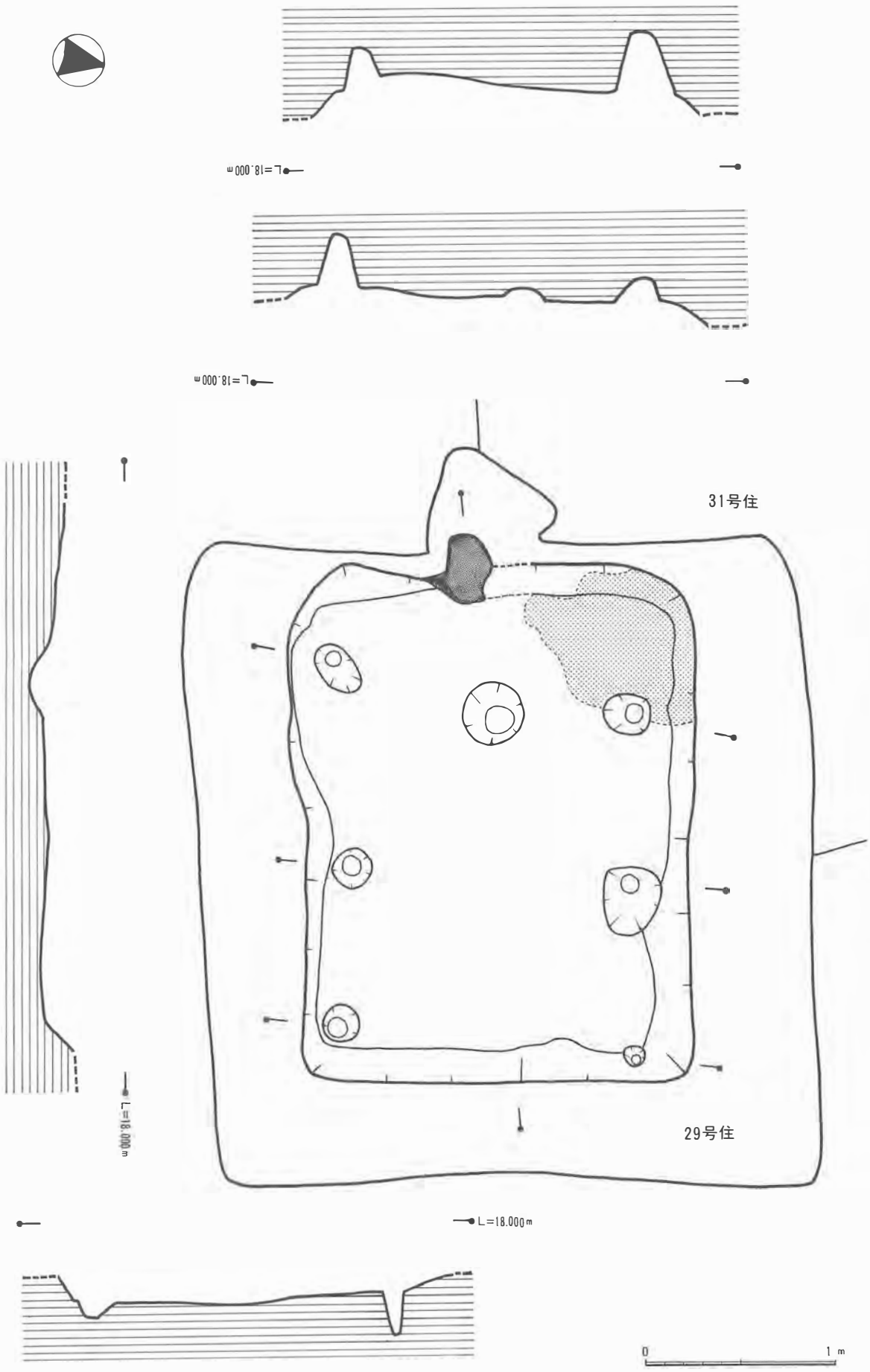
確認面より10～20㎝

［覆土］

暗褐色土。分層できず

［床面］

床面中央部に狭い範囲で硬化面が分布する。ただし、切り合いの関係より、元々はもう少し広かったと考えられる。東北隅には床面の下に粘土の張り付けがみられる



第52図　第30号住居跡実測図

［柱穴］

直径約12㎝、深さ約30㎝の柱穴が４基検出された。ただし、南東の柱穴は、切り合いのため正確な規模は不明

［カマド］

北側壁面中央に設置されている。砂岩質の石を用いた片ソデと燃焼面が残る

［付帯設備］

直径約40㎝、深さ13～30㎝のピット２基を検出する

【特記事項】

床面への粘土の張り付けは、他のいくつかの住居にも見られる

【遺物】（第54図 110～112）

110は、土師器の甕である。口径13.0㎝、残存高5.0㎝を測る。口縁内部はヨコナデ、体部内面はナデで仕上げられ、外面は摩耗のため調整不明である。外面は橙色、内面は媒の付着により黒色を呈する

111は、須恵器の椀である。口径11.8㎝、器高2.8㎝、高台径6.8㎝を測る。底部はナデ、その他は回転ナデで仕上げられる。体部外面に、ヘラ状工具による二条の凹線がみられる。外面は淡黄灰色、内面は灰色を呈する

112は、須恵器の壷である。口径約12.6㎝、残存高2.2㎝を測る。残存部は回転ナデで仕上げられる。外面は灰色、内面は灰オリーブ色を呈する

第32号住居跡（第55図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－90°－Ｗ

［区域］

Ｊ－５区

［重複］

第32～35号住居跡が重複する。（新）34→32→33（旧）

【構造】

［形状］

隅丸の方形に近い

［規模］

長軸　3.1ｍ×短軸　2.8ｍ

［深さ］

確認面より約10㎝

［覆土］

暗黒褐色土。分層できず

［床面］

床面ほぼ中央部を、カマド前から東側壁面に向けて、東西に60㎝程度の幅で帯状に硬化面がのびる。この位置は柱に挟まれた部分で、住居内の通路の位置を知ることができる

［柱穴］

４本柱。東西に細長く配置されている

［カマド］

北側壁面ほぼ中央部に設置する。焚き口に向かって左側のソデ石が残るほか、右側のソデ石の抜き取り痕を検出する

［付帯設備］

検出せず

【特記事項】

硬化面の広がりから、住居跡の構造や機能などについて知る有効な資料である。出入り口の場所が推定できるほか、北・南側壁面で硬化面が切れているのは、同所に何らかの敷物が敷き込まれていたものかも知れない

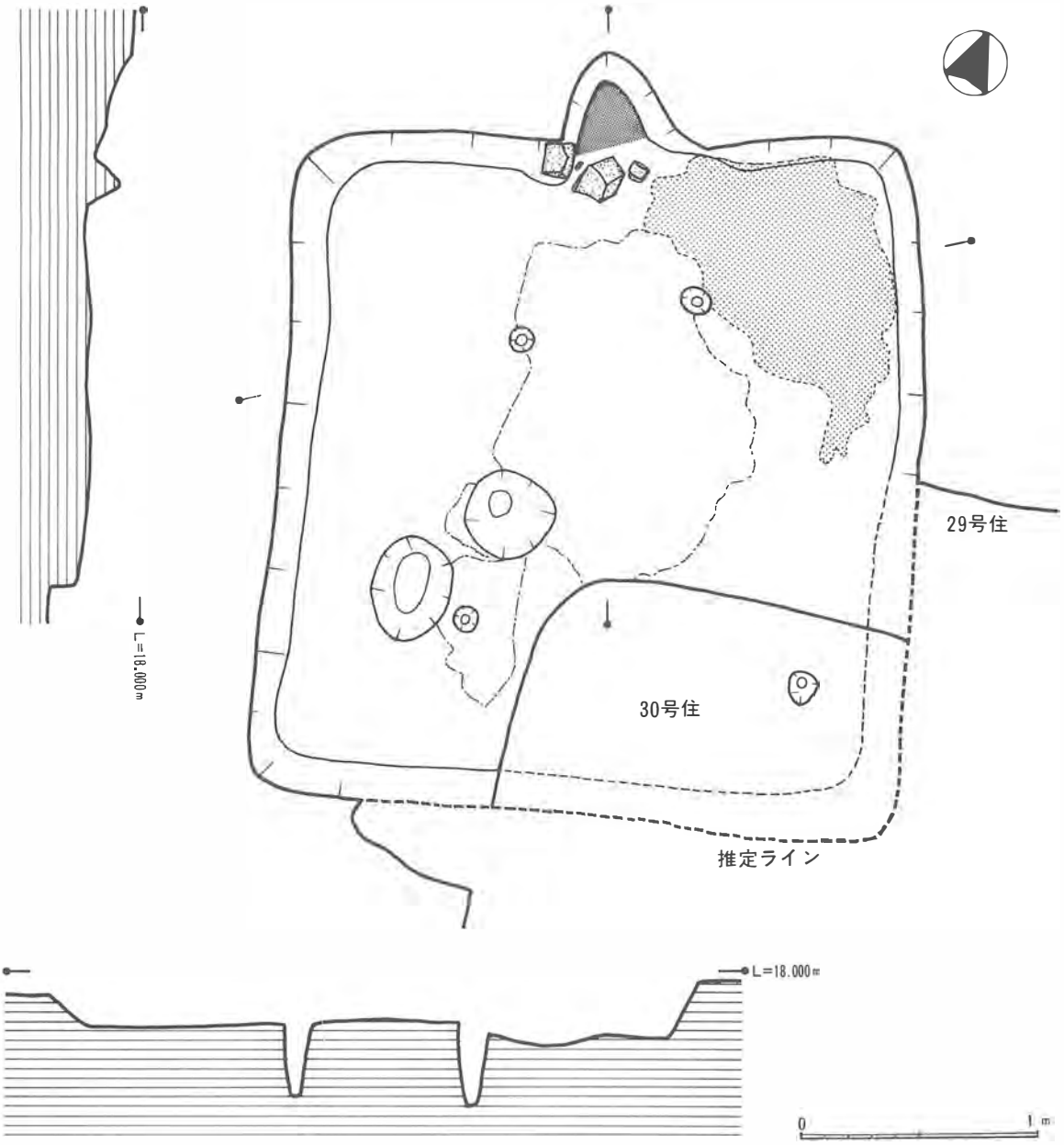
【遺物】（第55図 114，第57図 115，第59図 116～120）

須恵器と土師器が出土するが、住居跡の切り合いにより、出土位置が確実でないものが多い。遺物番号の次に出土の可能性のある住居番号をあげておく

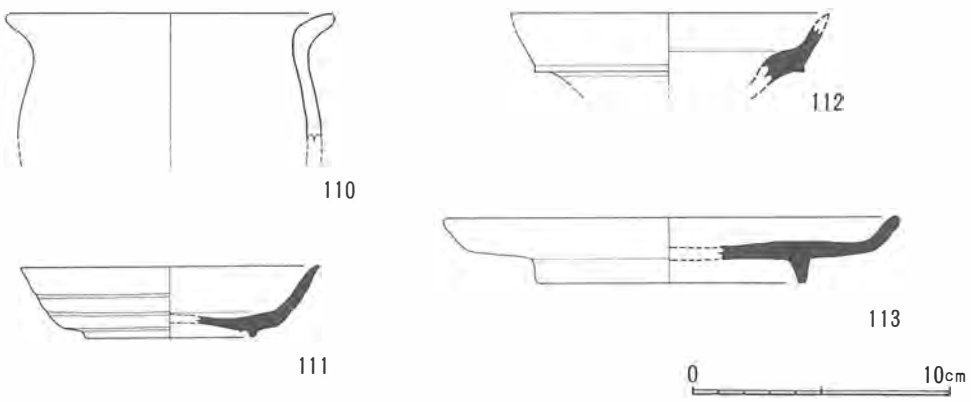
114（32）は、土師器の甕である。口径30.2㎝、残存高8.2㎝を測る。体部外面に一条の凹線がめぐる。ヨコナデで仕上げられ、浅黄橙色を呈する

115（32～34）は、土師器の甑である。把手の上部はヨコナデ、下部はタタキ後ナデ、把手はケズリ後ナデ、内面はナデで仕上げられる。体部外面に二条の沈線がめぐる。浅黄橙色を呈する

116（32～35）は、土師器の皿である。口径16.6㎝、器高2.0㎝、底径12.8㎝を測る。底部はヘラ切り後ナデ、体部は回転ナデ、見込みはナデで仕上げ



第53図　第31号住居跡実測図



第54図　第30・31号住居跡出土遺物実測図

られる。外面は淡橙色、内面は橙色を呈する

117(32～35)は、須恵器の椀である。残存高2.1㎝、高台径10.0㎝を測る。体部は回転ナデ、見込みは不定方向にハケメが入る。底部は自然釉付着のため調整不明である。外面は灰色、内面は灰オリーブ色を呈する

118(32～35)は、須恵器の椀である。残存高1.8㎝、高台径11.2㎝を測る。底部は摩耗のため調整不明で、その他は回転ナデで仕上げられる。外面は紫灰色、内面は灰オリーブ色を呈する

119(32～35)は、須恵器の壷である。口径15.0㎝を測る。回転ナデで仕上げられ、灰オリーブ色を呈する

120（32～35）は、須恵器の壷で、法量は不明である。残存部はヨコナデで仕上げられ、体部外面の突帯の下部に櫛描波状文がめぐる。外面は灰色、内面は灰オリーブ色を呈する

第33号住居跡（第56図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－106°－Ｗ

［区域］

Ｊ－５区

［重複］

直接の切り合い関係としては、第32～34号住居跡が重複する。（新）34→32→33（旧）

【構造】

［形状］

方形に近い隅丸の長方形

［規模］

長軸　3.5ｍ×短軸　3.2ｍ（推定）

［深さ］

確認面より5～6㎝

［覆土］

暗黒褐色土。分層できず

［床面］

床面中央部付近に硬化面が残るようであるが、全体は切り合いのため不明

［柱穴］

４本柱と思われるが、うち南側の２本を検出

［カマド］

西側壁面ほぼ中央部に設置されていたようであり、重複する第32号住居跡の下より、焼土や灰の一部を検出。ただし、切り合いのため残存状況は悪い

［付帯設備］

検出せず

【特記事項】

第32・34号住居跡に、床の北側半分を切られるため、詳細は不明。住居群密集地の中の一つである

【遺物】

第32号住居跡の遺物の項参照

第34号住居跡（第57図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－14°－Ｗ

［区域］

Ｊ－５区

［重複］

第32～35号住居跡が重複する。（新）35→34→32→33（旧）

【構造】

［形状］

隅丸の方形に近い

［規模］

南北軸　3.2ｍ×？

［深さ］

確認面より約10㎝

［覆土］

暗褐色土。分層できず

［床面］

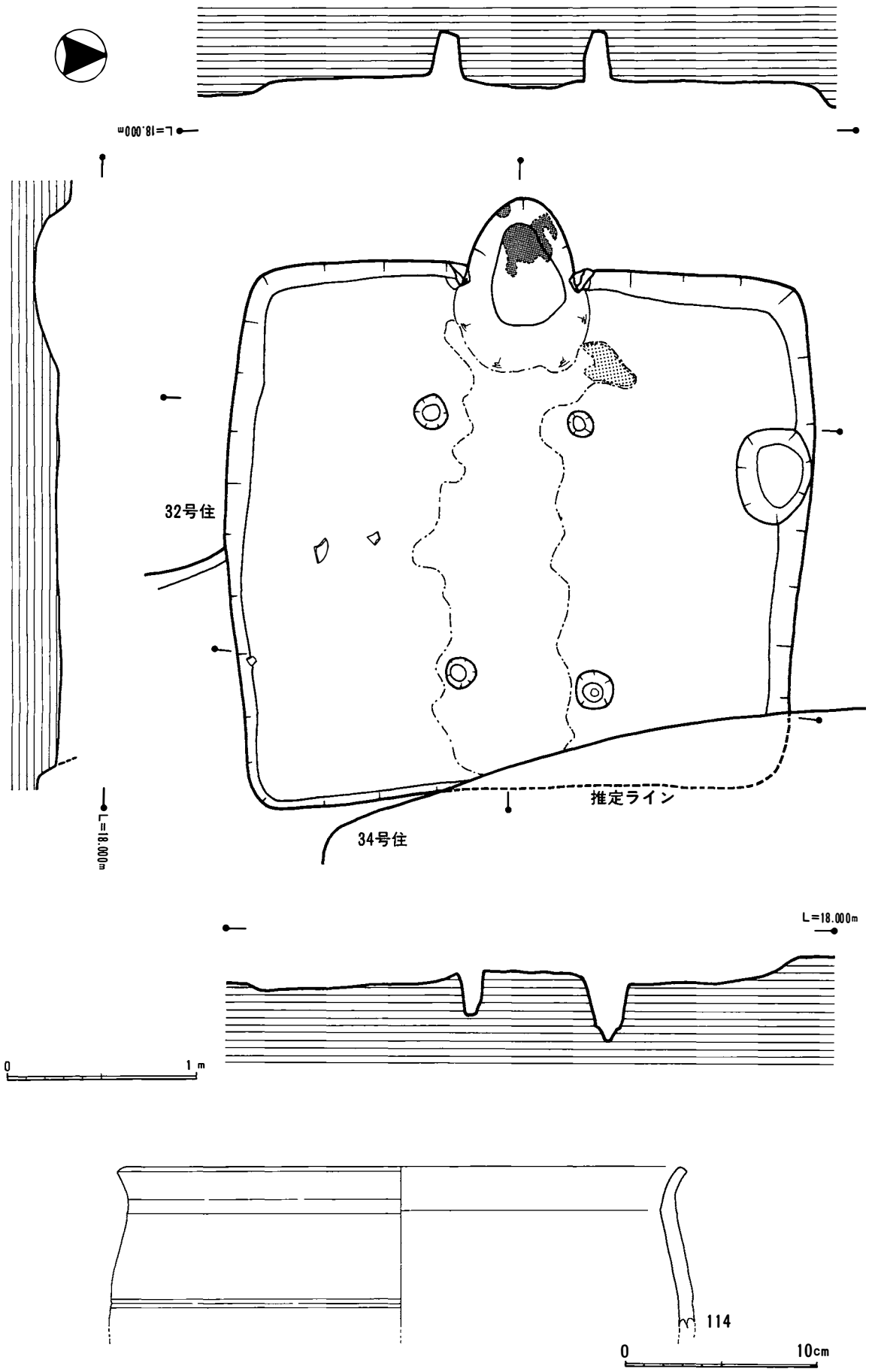
床面中央部を南北に硬化面が断続的に分布する。他住居に見られるような堅緻なものではない

［柱穴］

精査するも検出できず

［カマド］

北側壁面ほぼ中央部に設置する。焚き口に向か



第55図　第32号住居跡実測図・出土遺物実測図

って左側のソデ石の一部が残るほか、粘土の痕跡を検出する

［付帯設備］

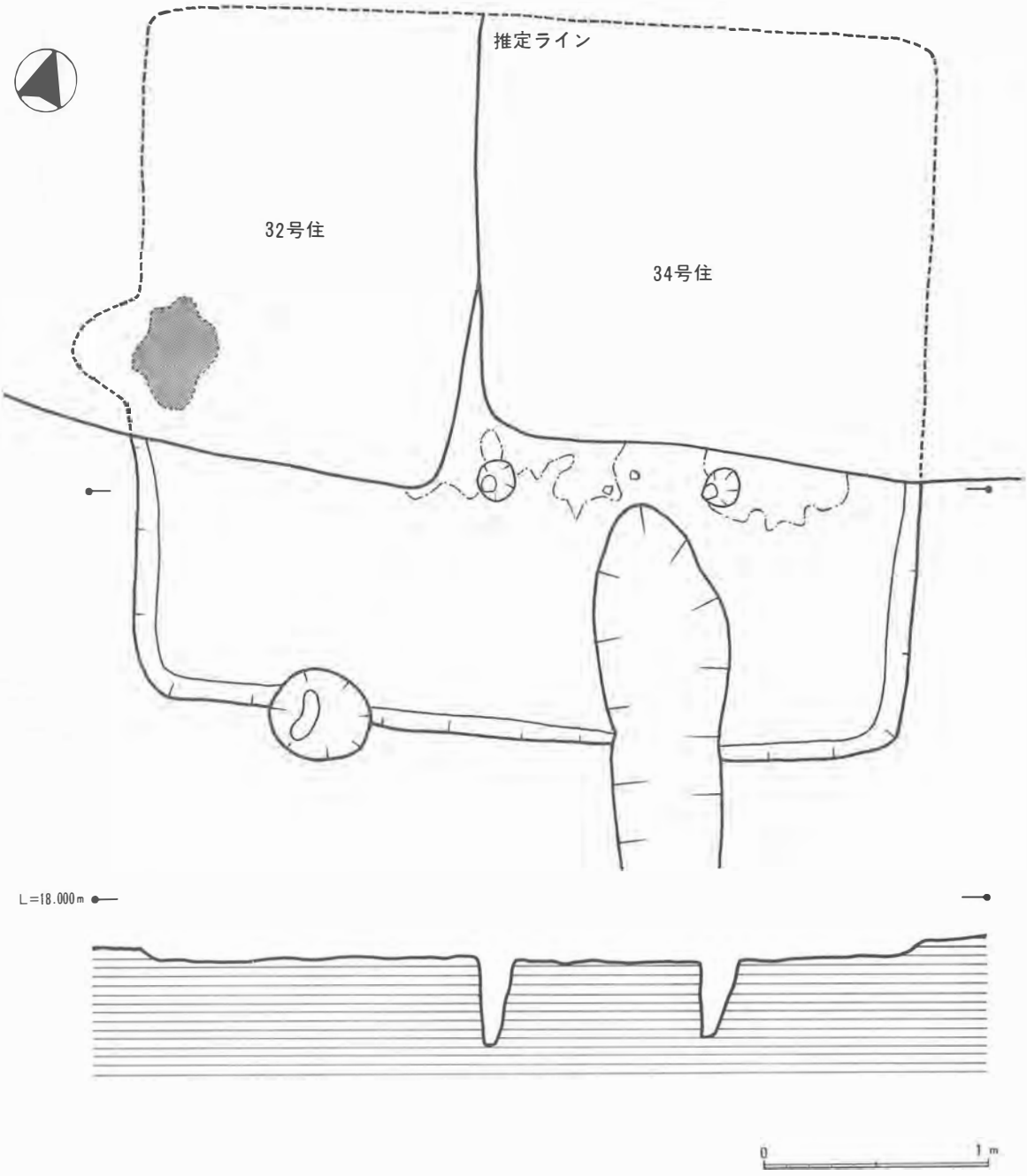
北西コーナー部分一帯に、0.8×0.6ｍ程度の規模で、粘土を貼り付けている箇所やくぼんだ部分を検出する。用途等不明

【特記事項】

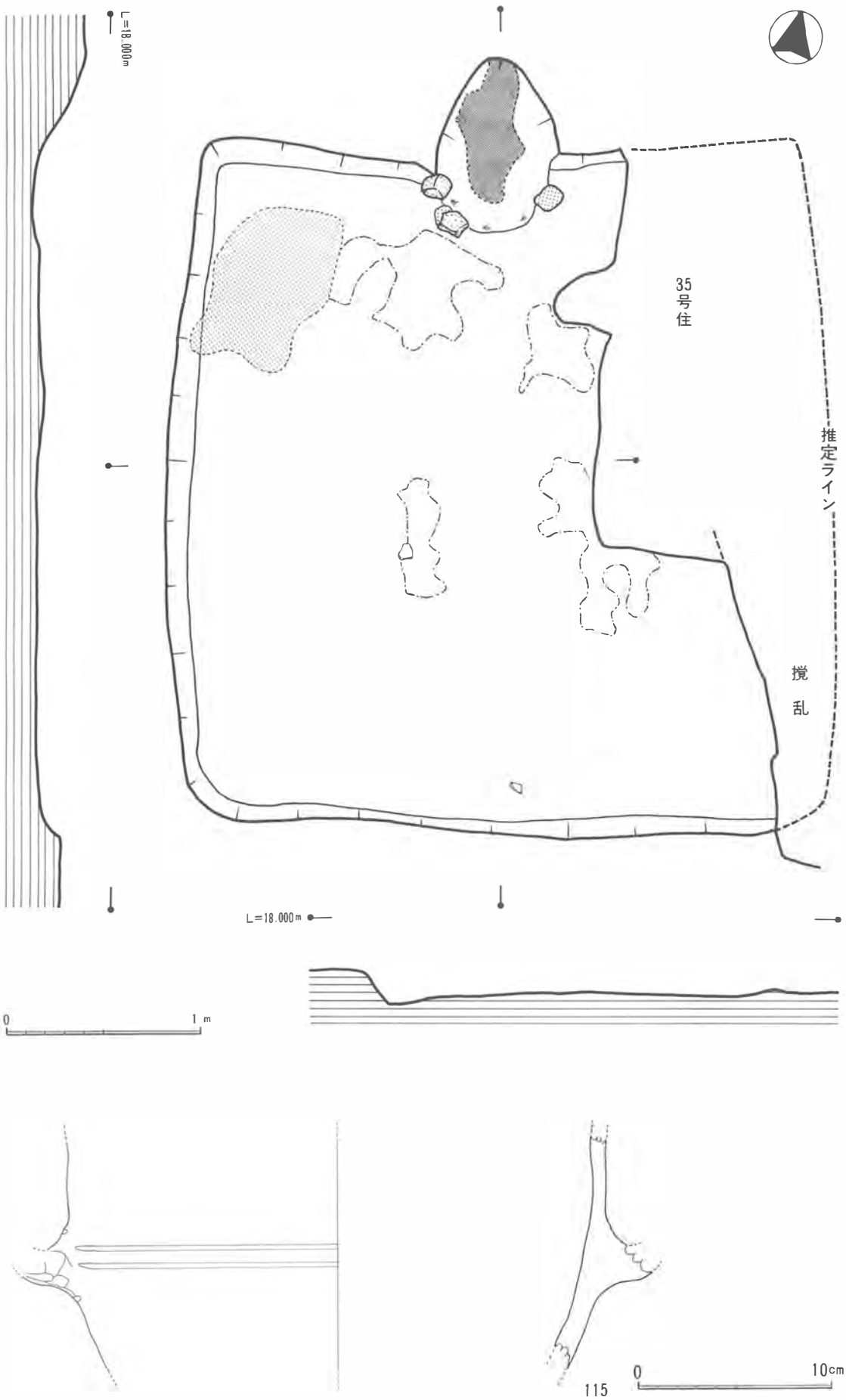
切り合いの住居群が集中する地点の住居である。残存状況はあまりよくない

【遺物】

第32号住居跡の遺物の項参照



第56図　第33号住居跡実測図



第57図　第34号住居跡実測図・出土遺物実測図

第35号住居跡（第58図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－93°－Ｗ

［区域］

Ｊ－５区

［重複］

第29・34・35・36・44号住が重複する。（新）36・29→35→34・44（旧）。なお、36-29，34-44の相互間の新旧は不明

【構造】

［形状］

隅丸の台形に近い

［規模］

長軸　3.1ｍ×短軸　2.7ｍ（推定）

［深さ］

確認面より約20㎝

［覆土］

暗褐色土。分層できず

［床面］

硬化面等検出せず

［柱穴］

本来４本柱であると思われるが、北西の１本のみを検出する。その他は攪乱等に切られて不明

［カマド］

西側壁面ほぼ中央部に設置する。両側のソデ石の一部と、燃焼による焼土等を検出する

［付帯設備］

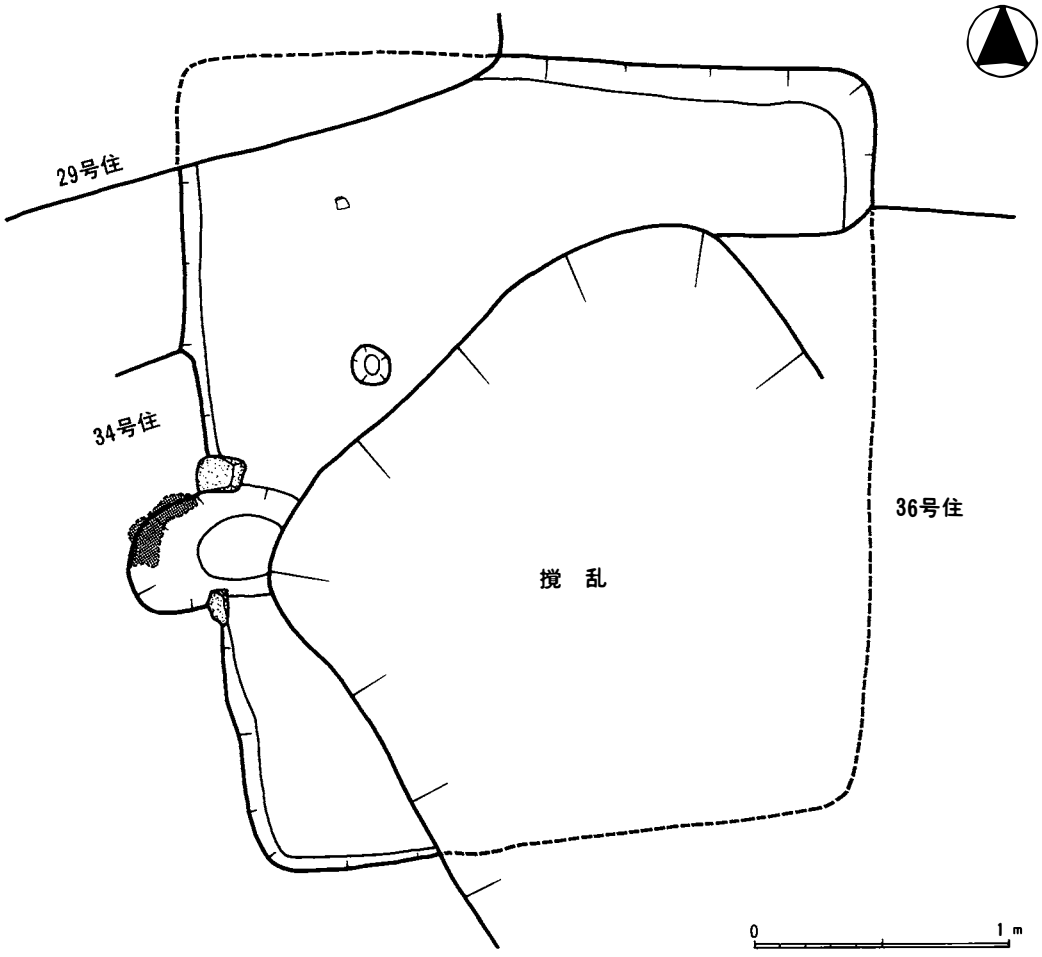
検出せず

【特記事項】

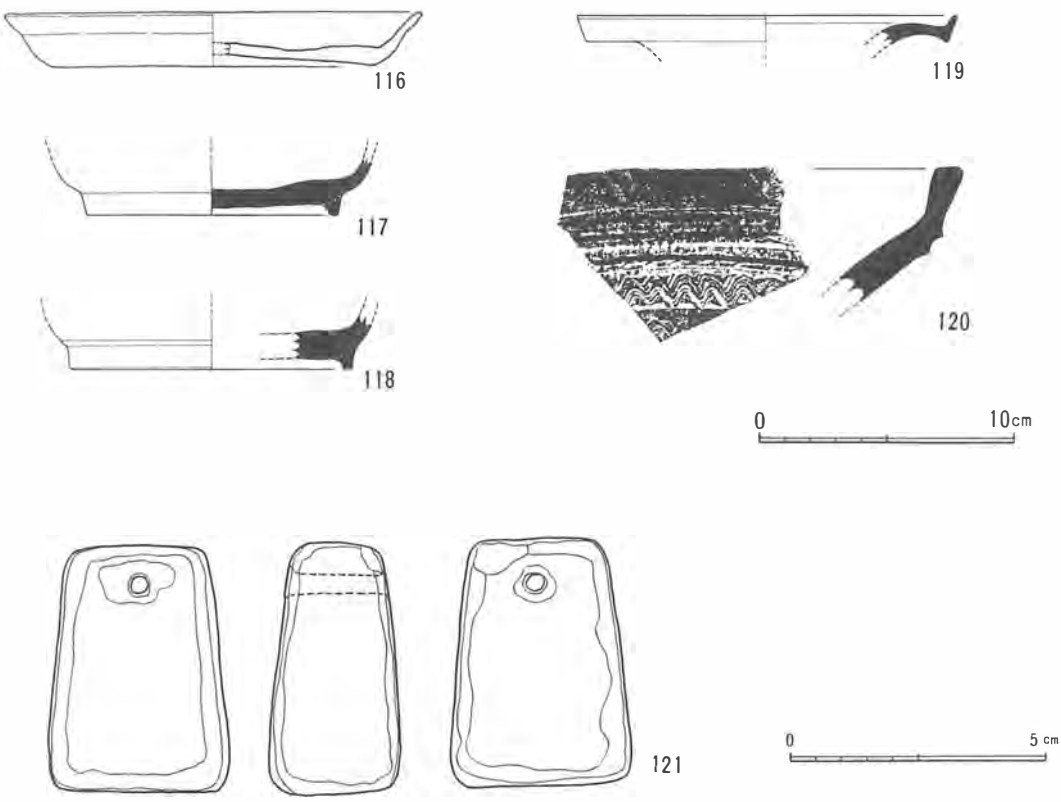
第35号住居跡の一帯は住居の集中する地点で、激しい切り合いとなっている。当住居は、切り合いのうち、ちょうど中間に位置する時期に築造された住居と考えられる

【遺物】

第32号住居跡の遺物の項参照



第58図　第35号住居跡実測図



第59図　第32～35号住居跡出土遺物実測図

第36号住居跡（第60図）

【位置】

［主軸方位］

不明

［区域］

Ｊ－５区

［重複］

直接の切り合い関係としては、第35～38号住居跡が重複する。（新）35→36→37→38（旧）

【構造】

［形状］

不明

［規模］

不明

［深さ］

確認面より約25㎝

［覆土］

暗褐色土。分層できず

［床面］

カマド前方部から床面中央部付近にかけて、硬化面が広がるもののようである。しかし、西側を大きく撹乱に切られるため、詳細は不明

［柱穴］

１本を検出

［カマド］

東側壁面に設置する。粘土の一部などを確認するものの、カマド本体部分が撹乱の穴に切られるため詳細は不明

［付帯設備］

検出せず

【特記事項】

住居の集中する地点に位置する。切り合いが激しいことや、撹乱に主要部分を切られるため、詳細は不明である

【遺物】（第65図 123～126）

若干の須恵器とかなりの土師器が出土するが、住居跡の切り合いの関係により、出土位置の確実でないものが多い。遺物番号の次に、出土の可能性のある住居をあげておく

123（36～41）は、土師器の坏である。口径14.0㎝、器高4.3㎝、底径10.6㎝を測る。体部外面は回転ナデで仕上げられ、その他の調整は摩耗のため不

明である。淡橙色から橙色を呈する

124（36～41）は、土師器の坏である。口径14.3㎝、器高3.6㎝、底径10.0㎝を測る。底部はヘラ切り後ナデ、その他は回転ナデで仕上げられる。にぶい橙色を呈する

125（36～41）は、須恵器の坏である。口径13.0㎝、器高3.3㎝、底径7.4㎝を測る。底部と見込みはナデ、体部は回転ナデで仕上げられる

126（36～41）は、須恵器の椀である。高台径9.2㎝を測る。底部はヘラ切り後ナデ、見込みはナデで仕上げられる。灰オリーブ色を呈する

第37号住居跡（第61図）

【位置】

［主軸方位］

不明

［区域］

Ｊ－５，Ｋ－５区

［重複］

直接的には、第36～40号住居跡が重複関係にある。（新）36→37→38・39・40（旧）

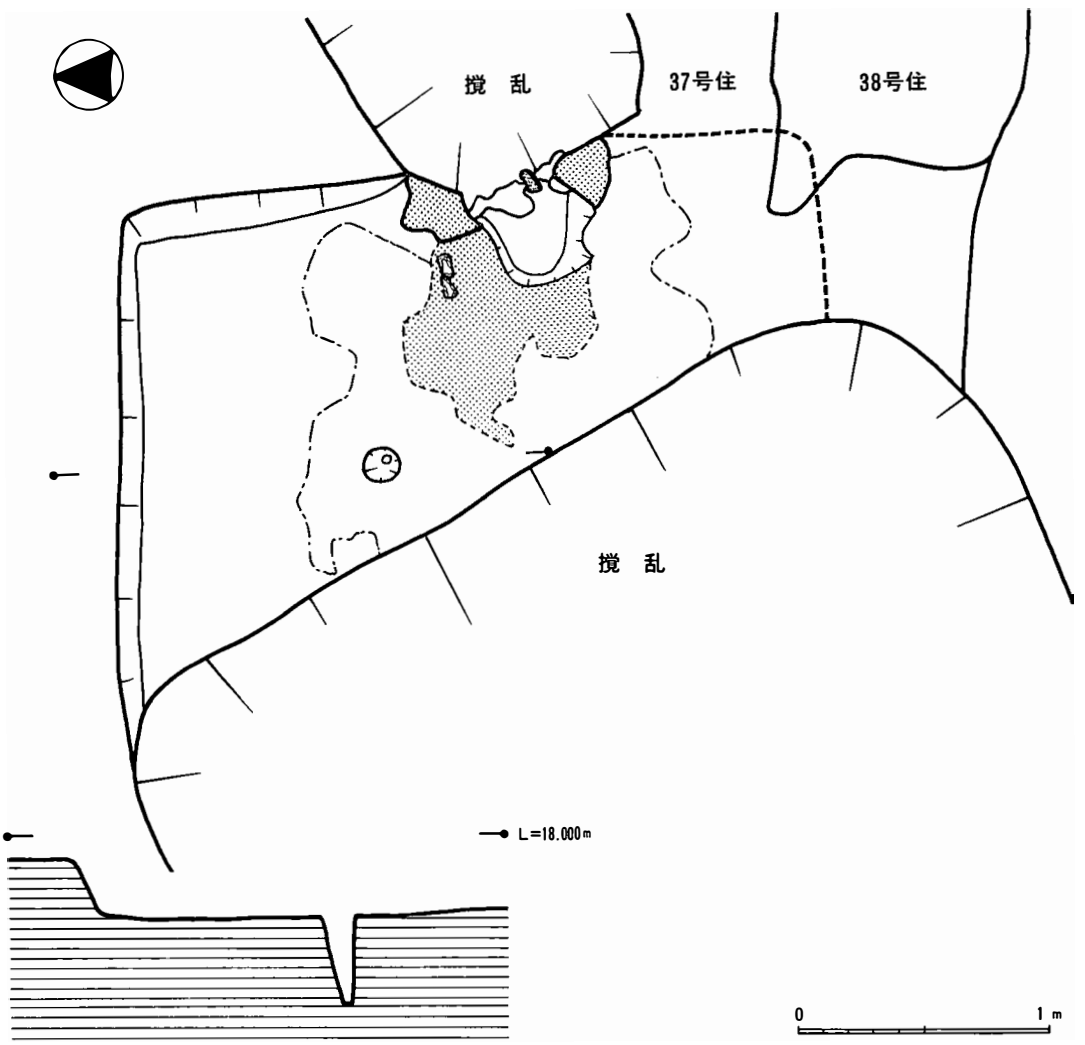
【構造】

［形状］

全体形は不明

［規模］

南北　3.0ｍ



第60図　第36号住居跡実測図

［深さ］

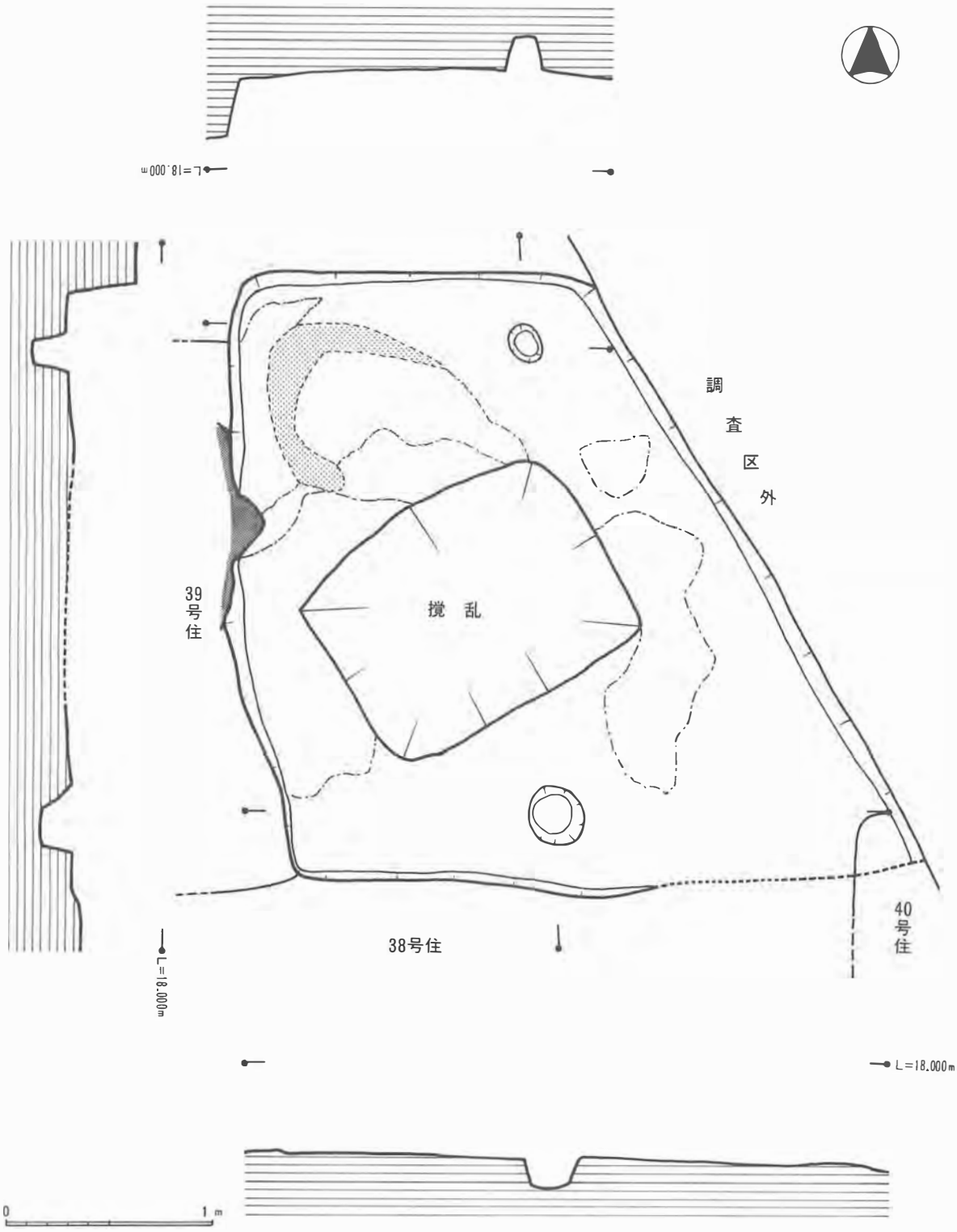
確認面より35～40cm

［覆土］

暗黒褐色土。分層できず

［床面］

床面の西側を中心として、硬化面が広がっていたと思われるが、中央部に撹乱の穴が入るため、詳細は不明



第61図　第37号住居跡実測図

［柱穴］

調査範囲内で２本を検出

［カマド］

検出には至らなかったが、他住居の例からみて、東側壁面に設置されていたものか

［付帯設備］

検出せず

【特記事項】

当遺跡中、住居群が最も集中した部分である。全体を検出しないため、切り合い関係が明確でない点がある

【遺物】

第36号住居跡の遺物の項参照

第38号住居跡（第62図）

【位置】

［主軸方位］

不明

［区域］

Ｊ－５区

［重複］

直接の切り合い関係としては、第37・38・40・41・46号住居跡が重複する。（新）37→38→41・46（旧）。ただし、第40号住居跡との新旧関係については、確認できなかった

【構造】

［形状］

不明

［規模］

不明

［深さ］

確認面とほとんど差無し

［覆土］

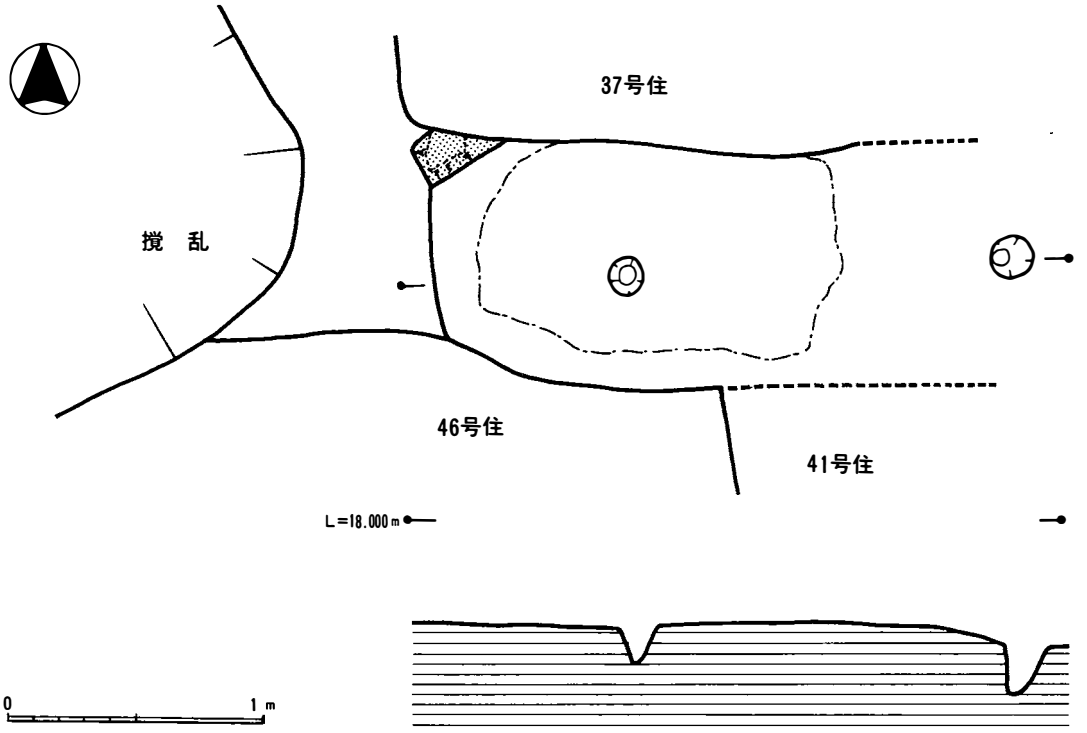
暗褐色土。分層できず

［床面］

床面の南西コーナーと思われる位置に、部分的に硬化面が残る。全体は不明

［柱穴］

４本柱と思われるが、このうち２本を検出する



第62図　第38号住居跡実測図

［カマド］

第37号住居跡に大きく切られるものの、カマドのソデの残骸と思われる部分が認められる。西側壁面に設置されていたものと考えられる

［付帯設備］

検出せず

【特記事項】

切り合い関係が非常に複雑な遺構であり、詳細は不明

【遺物】

第36号住居跡の遺物の項参照

第39号住居跡（第63図）

【位置】

［主軸方位］

不明

［区域］

Ｊ－５区

［重複］

第35・36・37・39号住居跡が重複する。（新）36・37→39→35（旧）

【構造】

［形状］

不明

［規模］

不明

［深さ］

確認面より35㎝

［覆土］

暗褐色土。分層できず

［床面］

カマド前面一帯に硬化面が広がる。全体は攪乱に切られるため不明

［柱穴］

１本を確認

［カマド］

東側壁面に設置する。焚き口両側のソデ石の一部や粘土塊などが残るが、第37号住居跡に切られるため、残りは悪い

［付帯設備］

検出せず

【特記事項】

住居が集中する地点に位置する。切り合いが激しいため、全体像不明

【遺物】

第36号住居跡の遺物の項参照

第40号住居跡（第64図）

【位置】

［主軸方位］

不明

［区域］

Ｋ－５区

［重複］

直接の切り合い関係としては、第37・38・40・41号住居跡が重複する。第41号住居跡を切るものの、他住居との新旧関係は判別できなかった

【構造】

［形状］

不明

［規模］

不明

［深さ］

確認面より10～20㎝

［覆土］

暗黒褐色土。分層できず

［床面］

カマド前面一帯に、硬化面が残る。粘土を貼り付けて、それが硬化したものらしい

［柱穴］

４本柱と思われるが、１本を検出

［カマド］

西側壁面ほぼ中央部に設置する。燃焼面の焼土などを確認するが、ソデ等の痕跡は検出に至らなかった

［付帯設備］

検出せず

【特記事項】

住居群が集中する地点の住居跡である。切り合

いが激しく、確認面が浅かったため他住居との新旧関係が明確でなかった点も多い。また東側の大部分が調査区域外に及ぶため、住居の詳細は不明

【遺物】（第65図 122）

122は、土師器の坏である。口径14.4cm、器高3.05cm、底径8.6cmを測る。体部はナデ後回転ヘラミガキで仕上げられ、橙色の赤彩が施される

その他、第36号住居跡の遺物の項参照

第41号住居跡（第66図）

【位置】

［主軸方位］

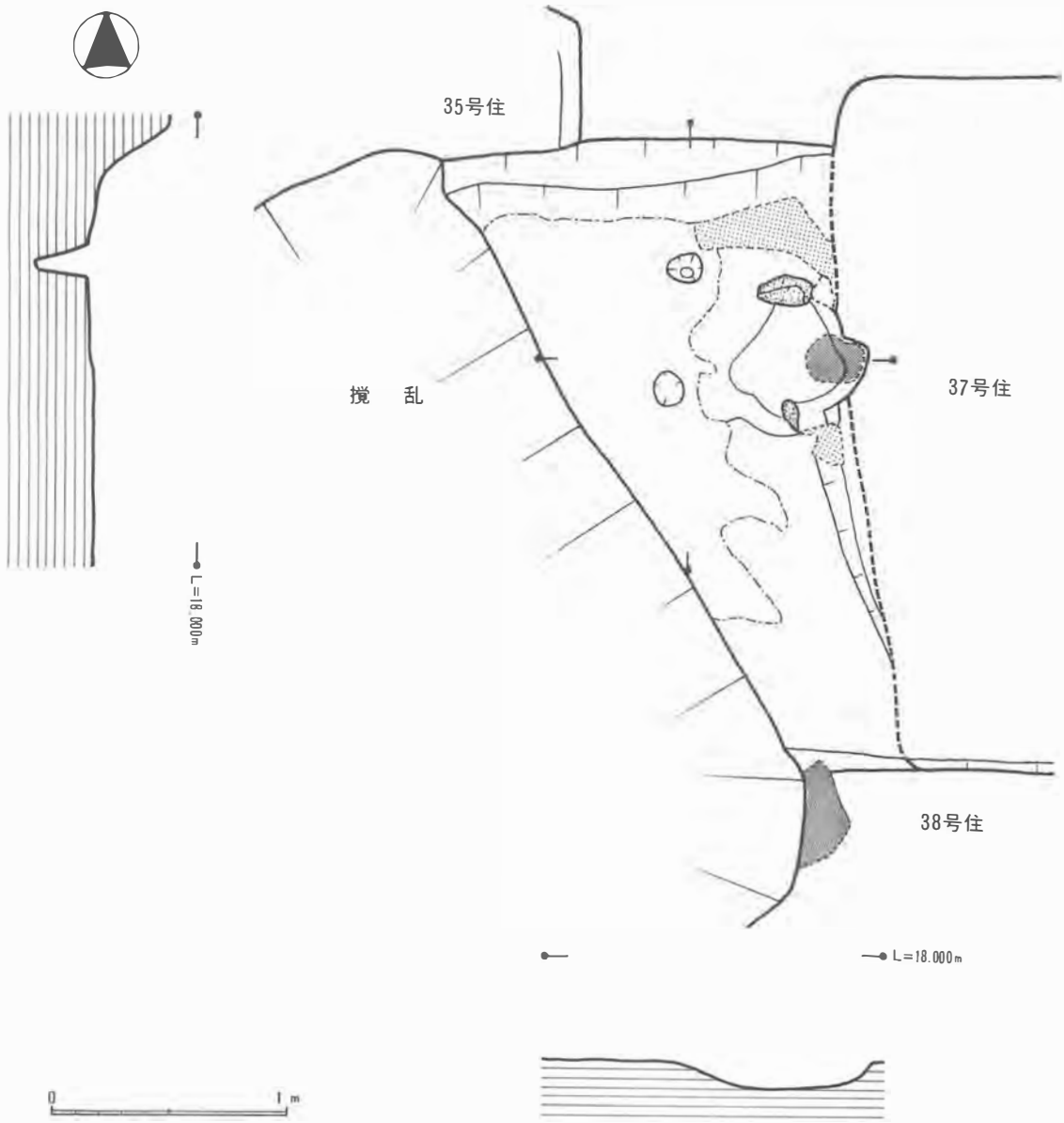
不明

［区域］

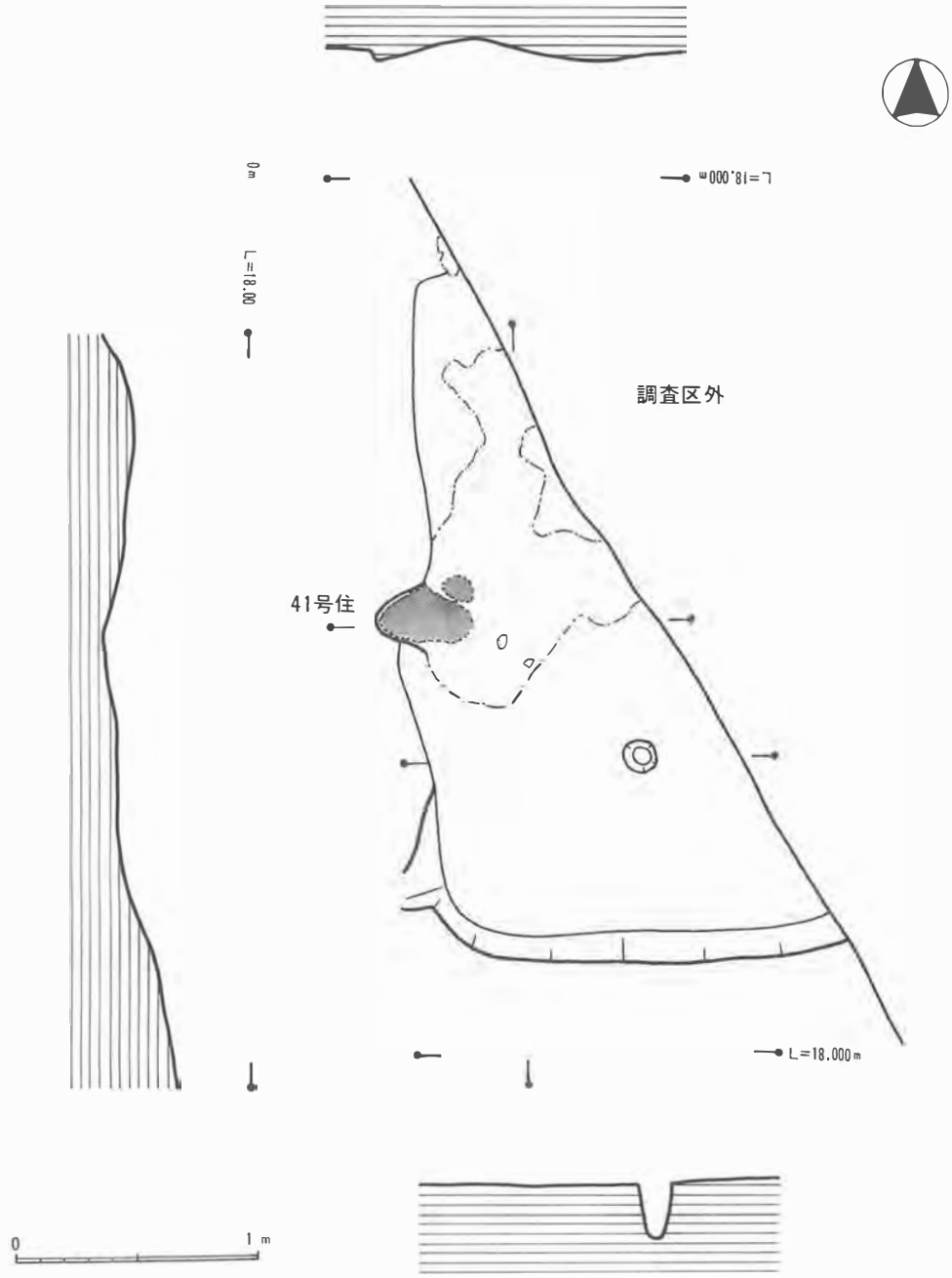
K－5区

［重複］

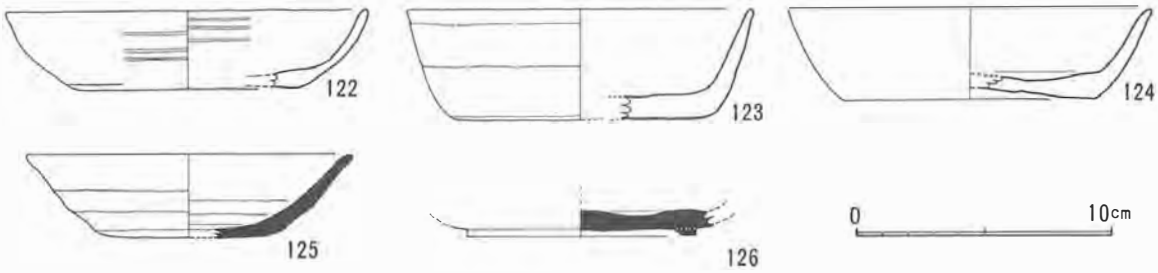
直接の切り合い関係としては、第37・38・40・41・46号住居跡が重複する。（新）40・37・38→41→46（旧）



第63図　第39号住居跡実測図



第64図　第40号住居跡実測図



第65図　第36～41号住居跡出土遺物実測図

【構造】

［形状］

不明

［規模］

不明

［深さ］

確認面より約15㎝

［覆土］

暗黒褐色土。分層できず

［床面］

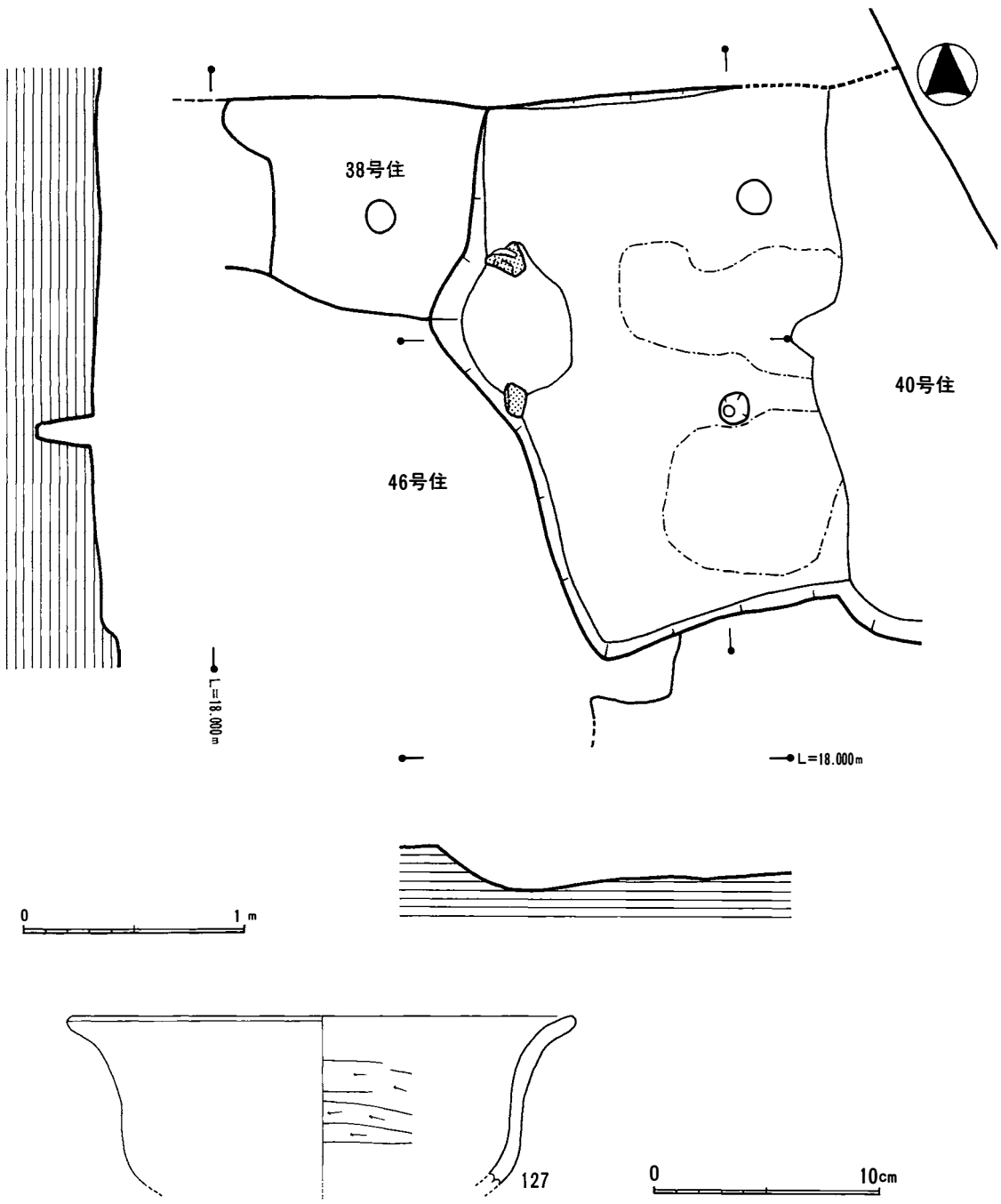
床面中央部から南側にかけて、硬化面が分布する。詳細は、切り合いのため不明

［柱穴］

床面南西部に１本を検出。図中北側のピットは、第38号住居跡のもの

［カマド］

西側壁面に設置する。両側のソデに使用されていたらしい粘土塊を検出する



第66図　第41号住居跡実測図・出土遺物実測図

［付帯設備］

検出せず

【特記事項】

住居群密集地の中央部に位置する住居である。切り合いが激しいことなどから、詳細は不明

【遺物】（第66図 127）

127は、土師器の甕である。口径22.8㎝、残存高7.5㎝を測る。口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラナデ、内面はヘラケズリで仕上げられる。にぶい橙色を呈する

その他、第36号住居跡の遺物の項参照

第42号住居跡（第67･68図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－92°－Ｅ

［区域］

Ｊ－７，Ｋ－７区

［重複］

第15・42・43号住居跡が重複する。（新）15→43→42（旧）

【構造】

［形状］

隅丸の正方形に近い

［規模］

長軸　3.4ｍ×短軸　3.4ｍ

［深さ］

確認面より約20㎝

［覆土］

黒色土。分層できず

［床面］

床面全体に広く、締まった硬化面が形成される。特に北西には壁面に至るまで、しっかりとした硬化面が続いており、入り口のあった部分を推定させる

［柱穴］

４本柱。検出は困難であったが、直径10㎝深さ20㎝ほどの柱穴が並びそうである

［カマド］

東側壁面ほぼ中央部に設置する。カマドの焚き口は壁面に対してやや南側に開口している。全体的に残存状況は良好で、煙道の様子も理解できる。また燃焼面には灰層も10㎝程度の厚みで残されていた

［付帯設備］

検出せず

【特記事項】

住居内に検出した柱穴は規模が小さく、柱穴として使用されたものか一抹の疑問が残る。他方、住居外に直径40㎝ほどの柱穴が４本あり、これにより建てられた可能性も否定できない

【遺物】（第69図 128～134）

128は、土師器の蓋である。口径16.0㎝、残存高1.7㎝を測る。調整は、摩耗のため不明である。外面は灰橙色、内面は淡橙色を呈する

129は、須恵器の蓋である。口径8.0㎝、残存高1.6㎝を測る。天井部は回転ナデ、ヘラケズリ後一部回転ナデ、体部外面と口縁部は回転ナデ、内面は回転ナデとナデで仕上げられる。外面は青灰色、内面は灰白色を呈する

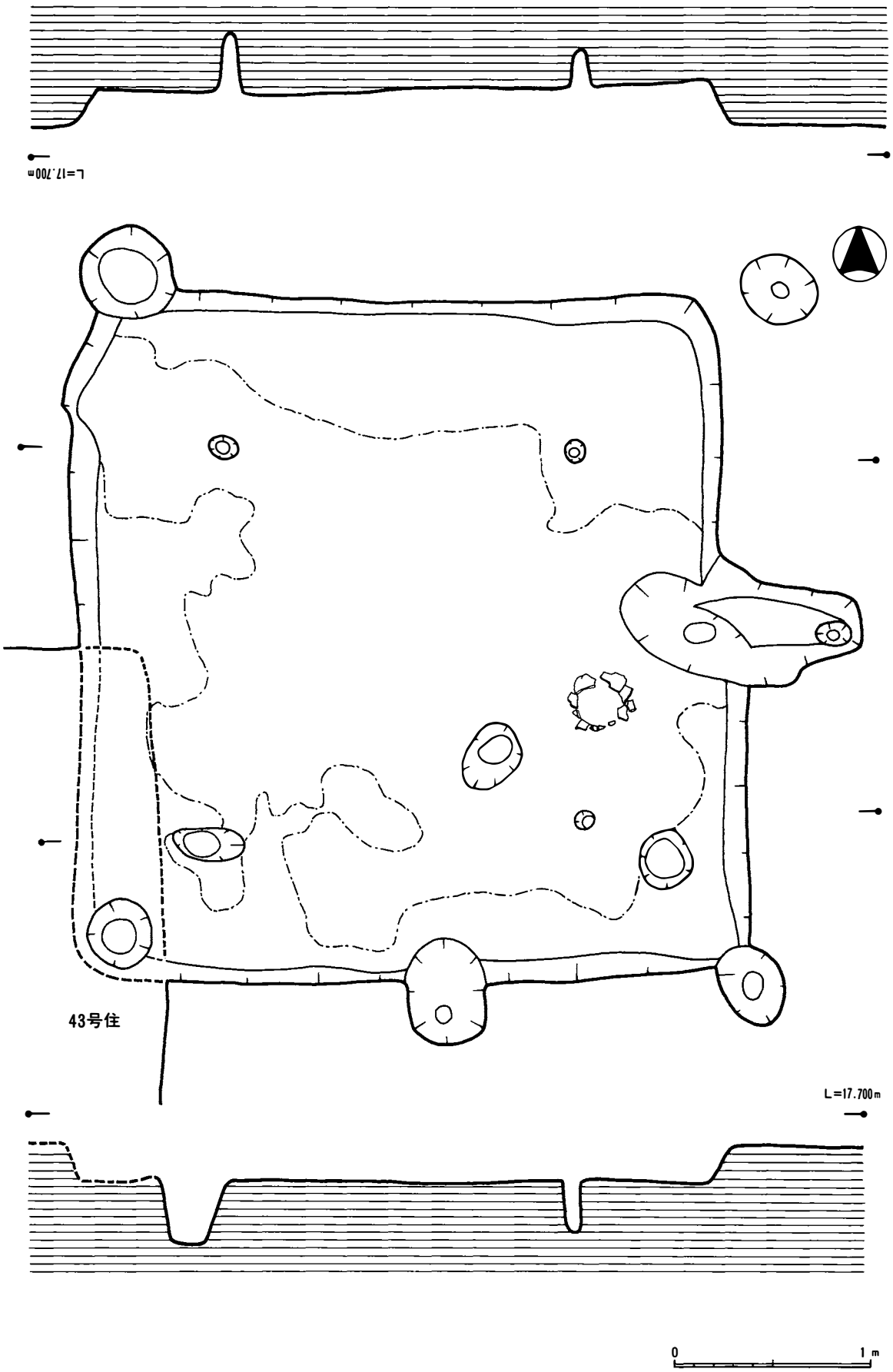
130は須恵器の椀で、高台径9.2㎝を測る。底部から高台にかけては回転ナデ、見込みはナデで仕上げられる。外面は灰白色から灰色、内面は黄灰色を呈する

131は、須恵器の椀である。口径14.0㎝、器高3.4㎝、高台径8.0㎝を呈する。底部と見込みはナデ、その他は回転ナデで仕上げられる。体部外面に黒色の薄い自然釉が付着し、他は灰色を呈する

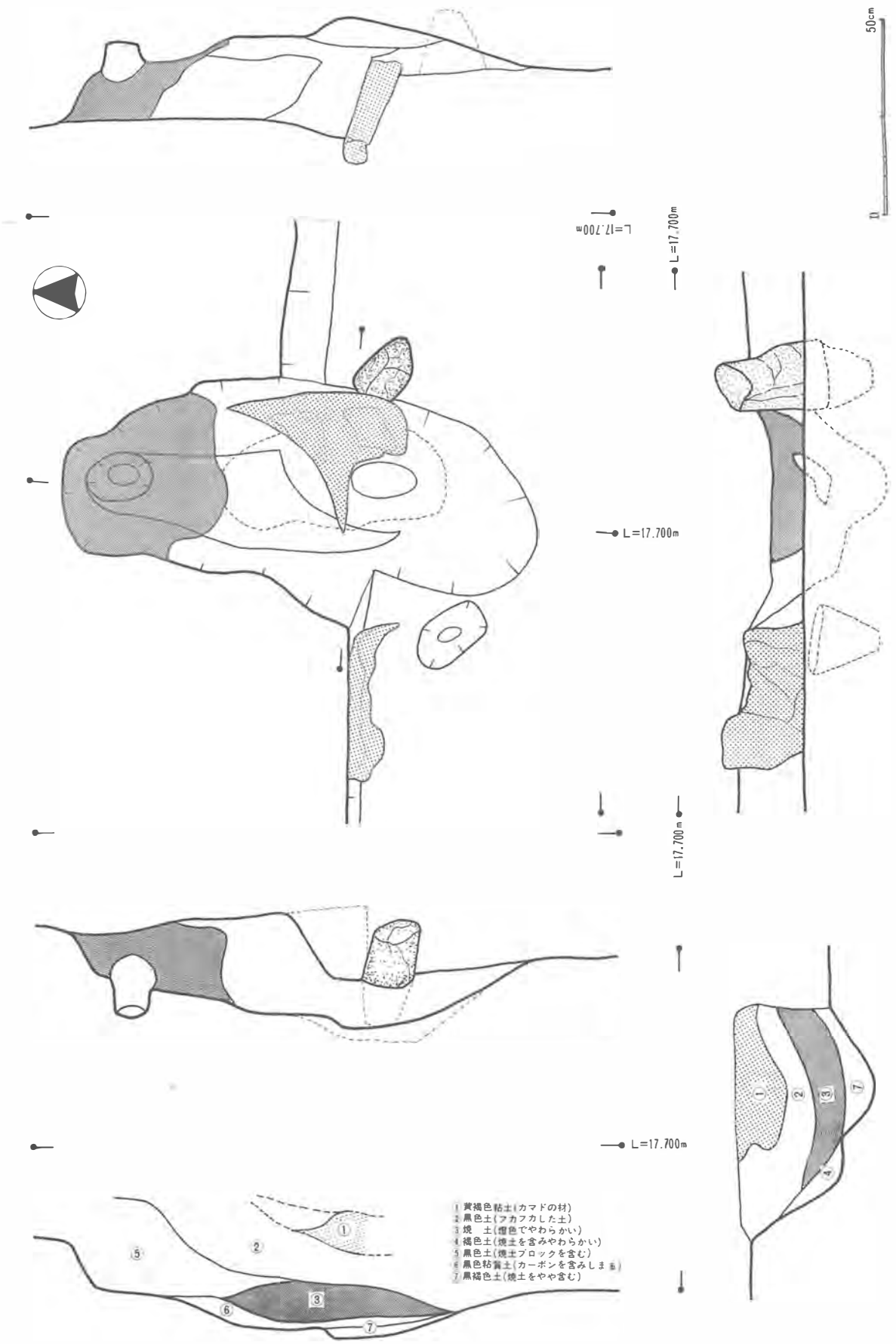
132は、須恵器の椀である。残存高2.6㎝、高台径9.0㎝を測る。底部はヘラ切り後ナデ、体部は回転ナデ、見込みはナデで仕上げられる。外面は灰色、内面は黄灰色を呈する

133は、土師器の甕である。口径22.5㎝、残存高11.0㎝を測る。口縁端部から外部はヨコナデ、内部はハケメ、体部外面はハケメ、内面はヘラケズリで仕上げられる。浅黄橙色を呈する

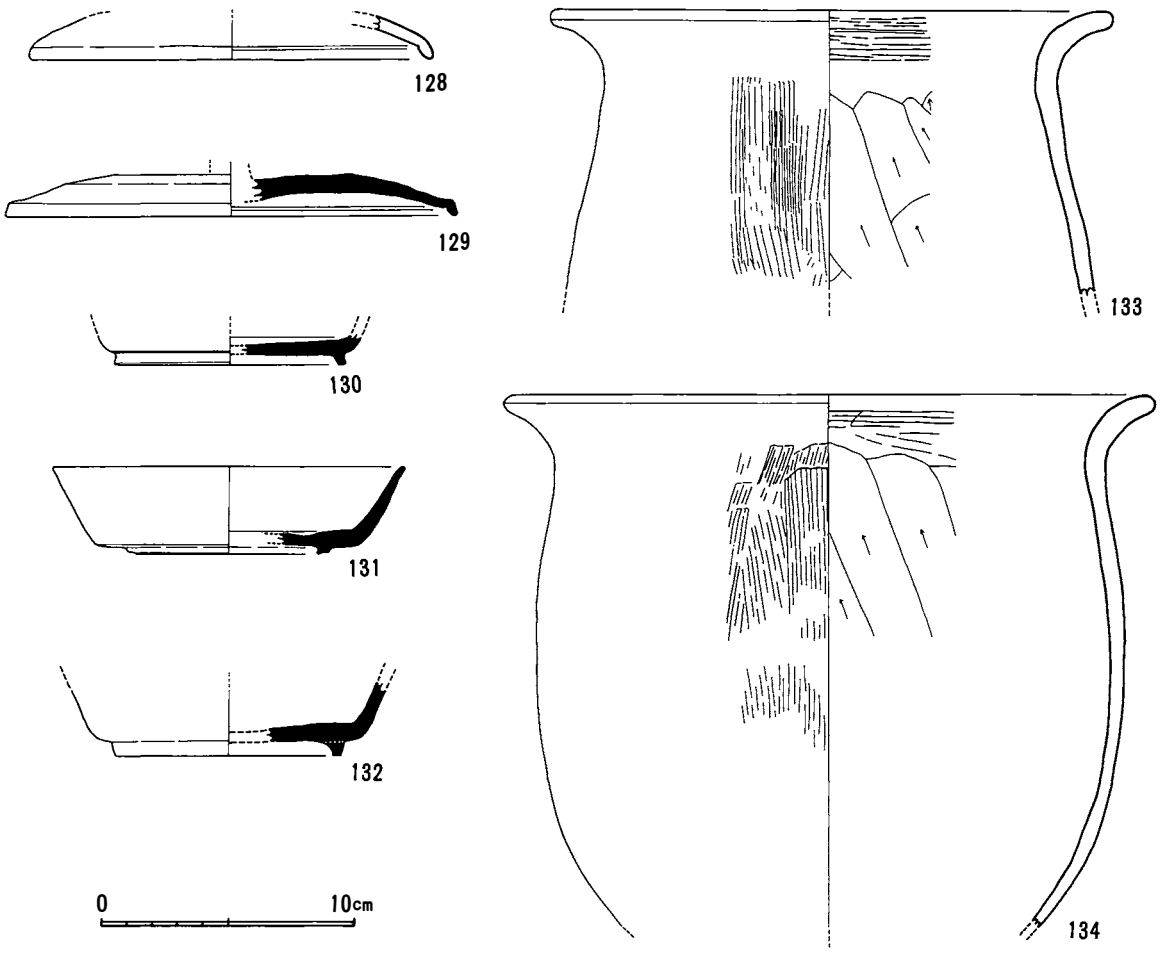
134も土師器の甕である。口径26.0㎝、残存高20.85㎝を測る。調整は133と同様である。にぶい橙色を呈するが、口縁部から体部外面上部にかけて橙色の赤彩が見られる



第67図　第42号住居跡実測図



第68図　第42号住居跡カマド実測図



第69図　第42号住居跡出土遺物実測図

第43号住居跡（第70･71図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－1°－Ｗ

［区域］

Ｊ－７区

［重複］

第15号住居跡に北西コーナーを切られ、第42号住居跡の南西コーナーを切る。（新）15→43→42（旧）

【構造】

［形状］

正方形に近い隅丸方形

［規模］

長軸　3.5ｍ×短軸　3.2ｍ

［深さ］

確認面より15～20cm

［覆土］

暗褐色土。分層できず

［床面］

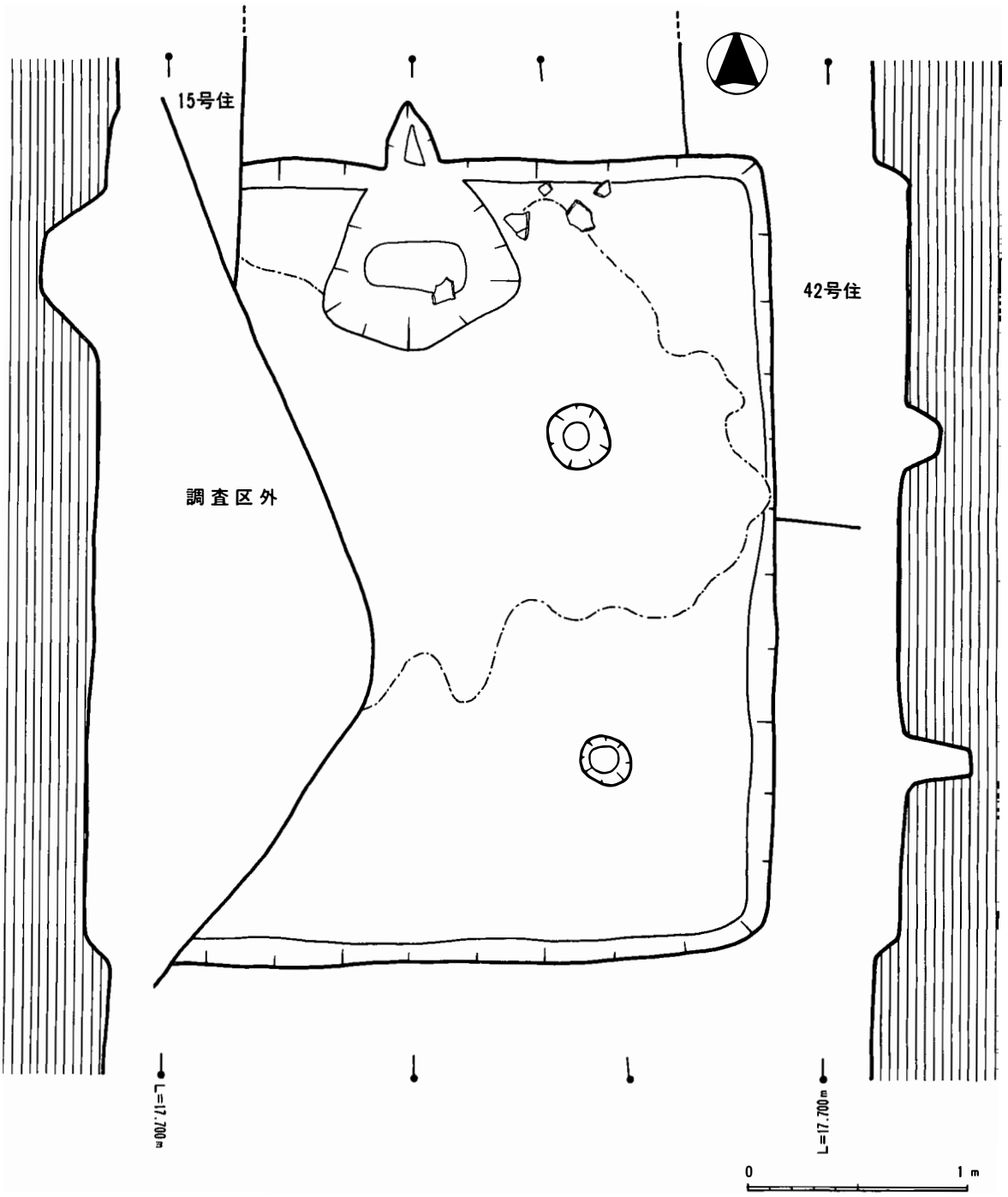
床面中央部からカマド前方にかけて、しっかりとした硬化面が残る。床周辺部には掘り方を検出する

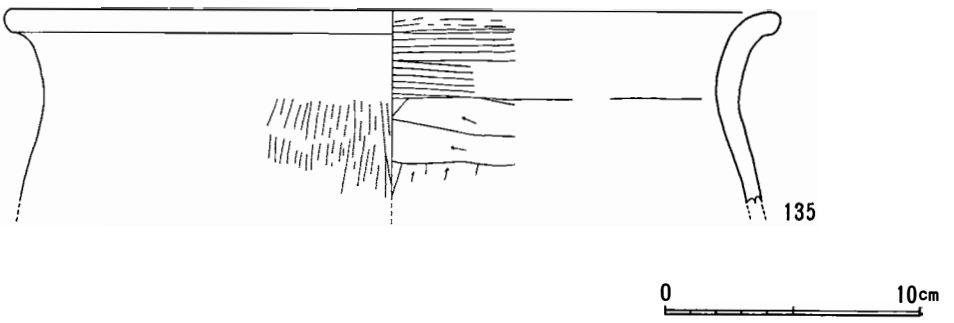
［柱穴］

４本柱と思われ、東側の２本を検出。直径25～30cmほどで、深さは15～25cmとばらつきがある

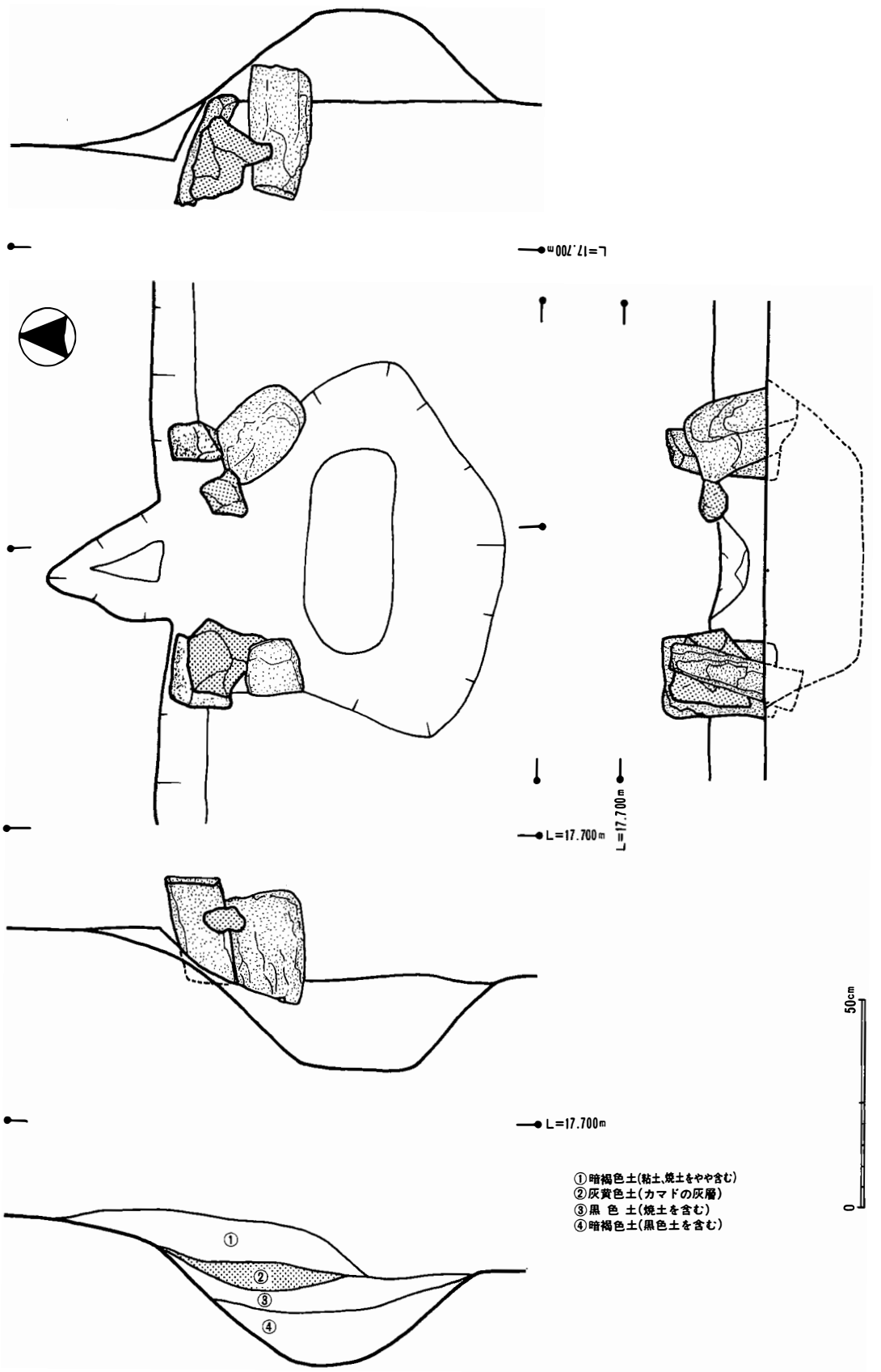
［カマド］

北側壁面ほぼ中央部？に設置する。左右のソデ石の残存状況は良好。それぞれ２対の種類の異なる石が置いてある。壁に近い方は黄色で表面が粒子状に風化する凝灰岩で、内部に近い方は粘土質の石で表面がもろく崩れる。ソデ石の内側は燃焼のため焼けているほか、粘土で固めた痕跡も残っている。煙道はわずかに残る。なお、灰等の広が





第70図　第43号住居跡実測図・出土遺物実測図



第71図　第43号住居跡カマド実測図

る燃焼面の下にはさらに20cmほどのくぼみがあり、カマド設置時一度深い掘り込みを行ったことが理解できる

［付帯設備］

検出せず

【特記事項】

カマドの残存状況がきわめて良好で、その構造を知るための好資料である。なお、住居跡東側は調査区域外におよぶ

【遺物】（第70図 135）

カマド周辺に土師器の甕の破片が多量に集中するほか、土師器の細片がかなり出土したが、実測可能な一点のみ図示した

135はかなり大型の土師器の甕で、口径31.0cm、残存高7.6cmを測る。口縁端部から外部はヨコナデ、内部はハケメ後ヨコナデとナデ、体部外面はハケメ後ナデ、内面はヘラケズリで仕上げられる。外面はにぶい褐色、内面は明褐灰色を呈する

第44号住居跡（第72図）

【位置】

［主軸方位］

不明

［区域］

Ｊ－５区

［重複］

第35号住居跡を切る

【構造】

［形状］

不明

［規模］

不明

［深さ］

不明

［覆土］

暗黒褐色土。ただし、灰や焼土などを含む

［床面］

不明

［柱穴］

不明

［カマド］

焚き口の方向から、住居跡の西側壁面の一部に設置されていたものらしい。燃焼面の焼土とソデに貼り付けていた粘土の一部が残る

［付帯設備］

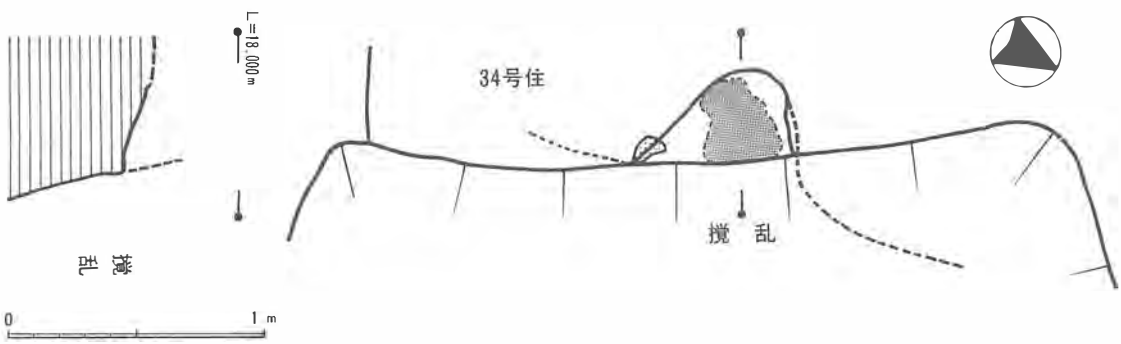
検出せず

【特記事項】

当遺跡で最も住居の切り合いが集中する地点の一角に位置する。攪乱の穴に切られ、カマドのみの検出のため、詳細は不明である

【遺物】

検出せず



第72図　第44号住居跡実測図

第45号住居跡（第73図）

【位置】

［主軸方位］

Ｎ－74°－Ｗ

［区域］

Ｊ－５区

［重複］

第46号住居跡を切る。(46－旧，45－新)。なお北側を攪乱に切られる

【構造】

［形状］

隅丸の方形。東側壁面が南北にやや張り出し、台形に近い形状を呈する

［規模］

長軸　3.0ｍ×短軸　2.9ｍ

［深さ］

確認面より15～20㎝

［覆土］

暗黒褐色土。分層できず

［床面］

床面ほぼ中央部付近に、帯状の硬化面が形成される。なお、南東コーナーにも、一部硬化面が認められる

［柱穴］

４本柱。北東の柱穴がやや中央により、いびつな形を呈している。深さは20㎝内外で、規模も小さい

［カマド］

西側壁面中央からやや南よりに設置する。両ソデに使用していたらしい粘土の痕跡のほか、燃焼面中央部に設置された支脚の抜き取り痕を検出する

［付帯設備］

カマドに向かって右側の床面北西コーナーの一角に、カマドに使用していたらしい粘土を貼り付けた部分を検出する

【特記事項】

竪穴住居跡の切り合いの集中する地点に位置する住居である。カマドの支脚の痕跡のほか、北西コーナー部分の粘土の張り付け、南東コーナーの部分的な硬化面の形成などが注目される

【遺物】

土師器の細片がわずかに出土したが、図化には至らなかった

第46号住居跡（第74図）

【位置】

［主軸方位］

不明

［区域］

Ｊ－５，Ｋ－５区

［重複］

第41・45号住居跡に切られる

【構造】

［形状］

正方形に近い隅丸の方形？

［規模］

東西軸　3.8ｍ

［深さ］

確認面より10～12㎝

［覆土］

暗褐色土。分層できず

［床面］

床面中央部付近に、広く硬化面が形成される

［柱穴］

４本柱と考えられるが、このうち３本を検出する

［カマド］

切り合いのため不明であるが、類例から判断して、西側壁面に設置されていたと推定される

［付帯設備］

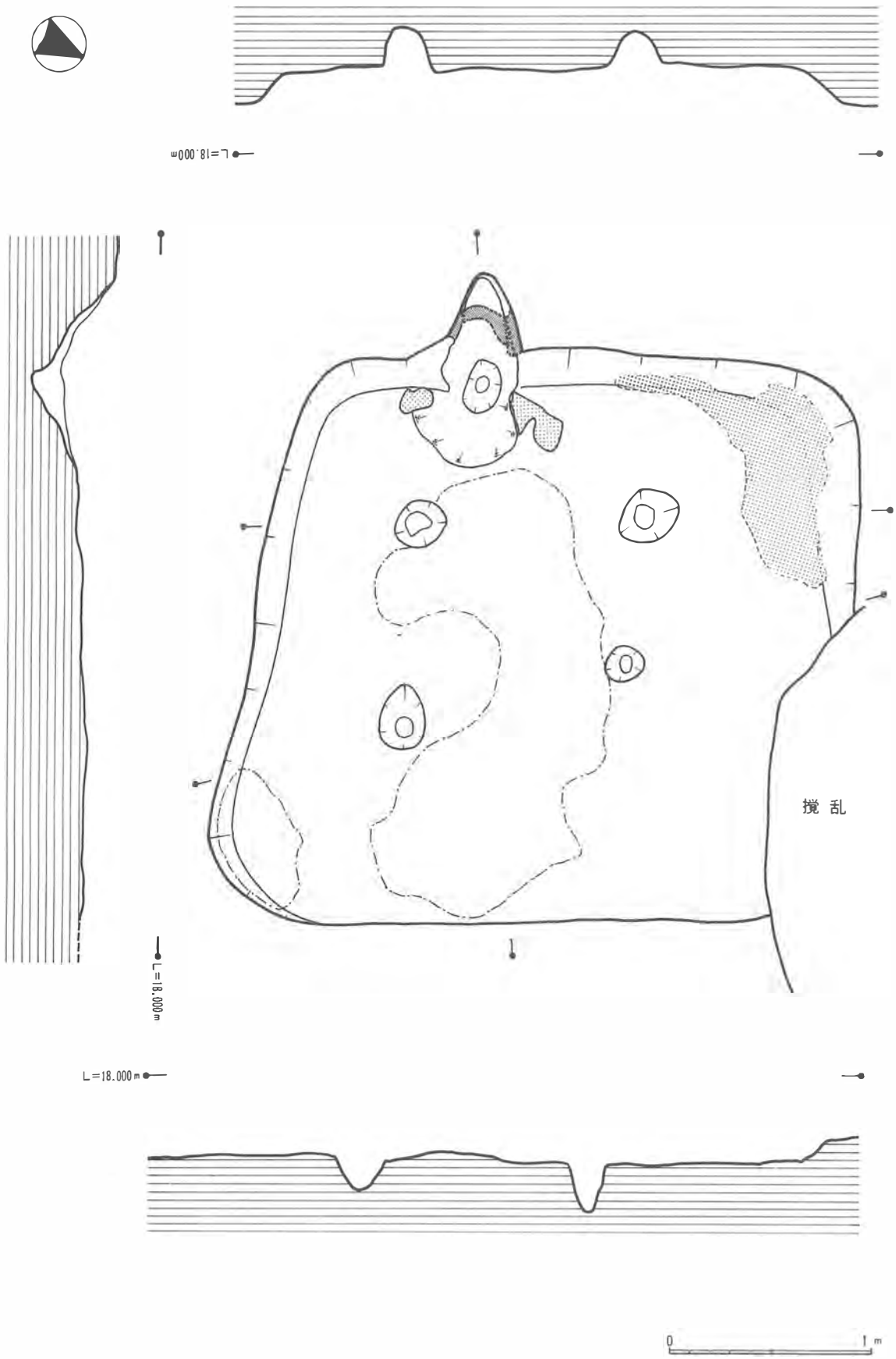
検出せず

【特記事項】

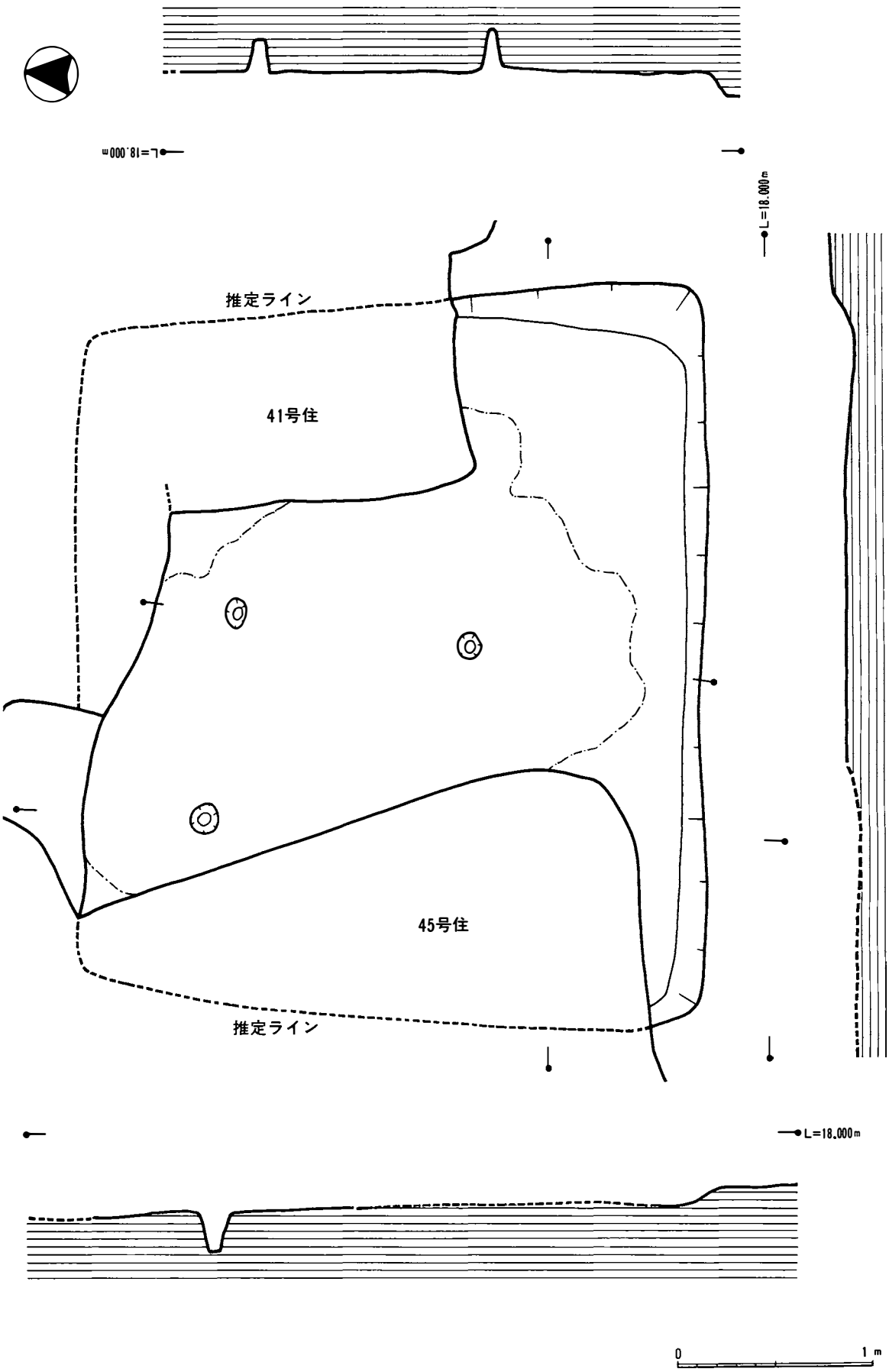
竪穴住居が集中する地点に位置する住居跡である。切り合いが激しく、詳細は不明

【遺物】

検出せず



第73図　第45号住居跡実測図



第74図　第46号住居跡実測図

第47号住居跡（第75図）

【位置】

［主軸方位］

N－1°－W

［区域］

K－6区

［重複］

土坑に北西コーナーを切られる。（土坑－新，47号住－旧）

【構造】

［形状］

南北にやや長い隅丸方形

［規模］

長軸　3.6m×短軸　3.3m

［深さ］

確認面より約18cm

［覆土］

暗褐色土。分層できず

［床面］

カマド前方部から南側壁面にかけて広範囲に、かなりしっかりとした硬化面が残る。床面の残存状況は良好である

［柱穴］

4本柱。しかし、柱穴間の間隔が狭く、柱穴の規模も小さい。深さは20～30cm内外である

［カマド］

北側壁面ほぼ中央部に設置する。破壊を受けているものの、燃焼面中央付近に支脚として使用されたらしい砂岩状の石が残存する

［付帯設備］

検出せず

【特記事項】

竪穴住居跡の集中する地点の南東側に、単独で存在する住居である。カマドに支脚が残存することなどが注目される

【遺物】（第76図 136）

土師器と須恵器の細片が数点出土した。そのうち実測可能な一点のみ図示した

136は、土師器の甕である。口径26.5cm、残存高6.5cmを測る。口縁端部に沈線がめぐり、回転ナデで仕上げられる。にぶい橙色を呈する

第48号住居跡（第77・78図）

【位置】

［主軸方位］

N－87°－W

［区域］

J－7，J－8，K－7，K－8区

［重複］

第51号住居跡を切る。（新）48→51（旧）

【構造】

［形状］

隅丸の方形

［規模］

長軸　4.5m×短軸　4.0m

［深さ］

確認面より10～15cm

［覆土］

暗黒褐色土。分層できず

［床面］

床面ほぼ全体に、しっかりとした硬化面が広がる。南東コーナー付近では壁際にかなり近接して硬化面が分布する

［柱穴］

4本柱。当遺跡で確認した住居の柱穴としては、比較的バランスのとれた配置である

［カマド］

東側壁面ほぼ中央部に設置する。床を掘り下げてソデ石等を据えている。煙道の一部も残っているなど、比較的残存状況はよいが、一部が樹根により切られている

［付帯設備］

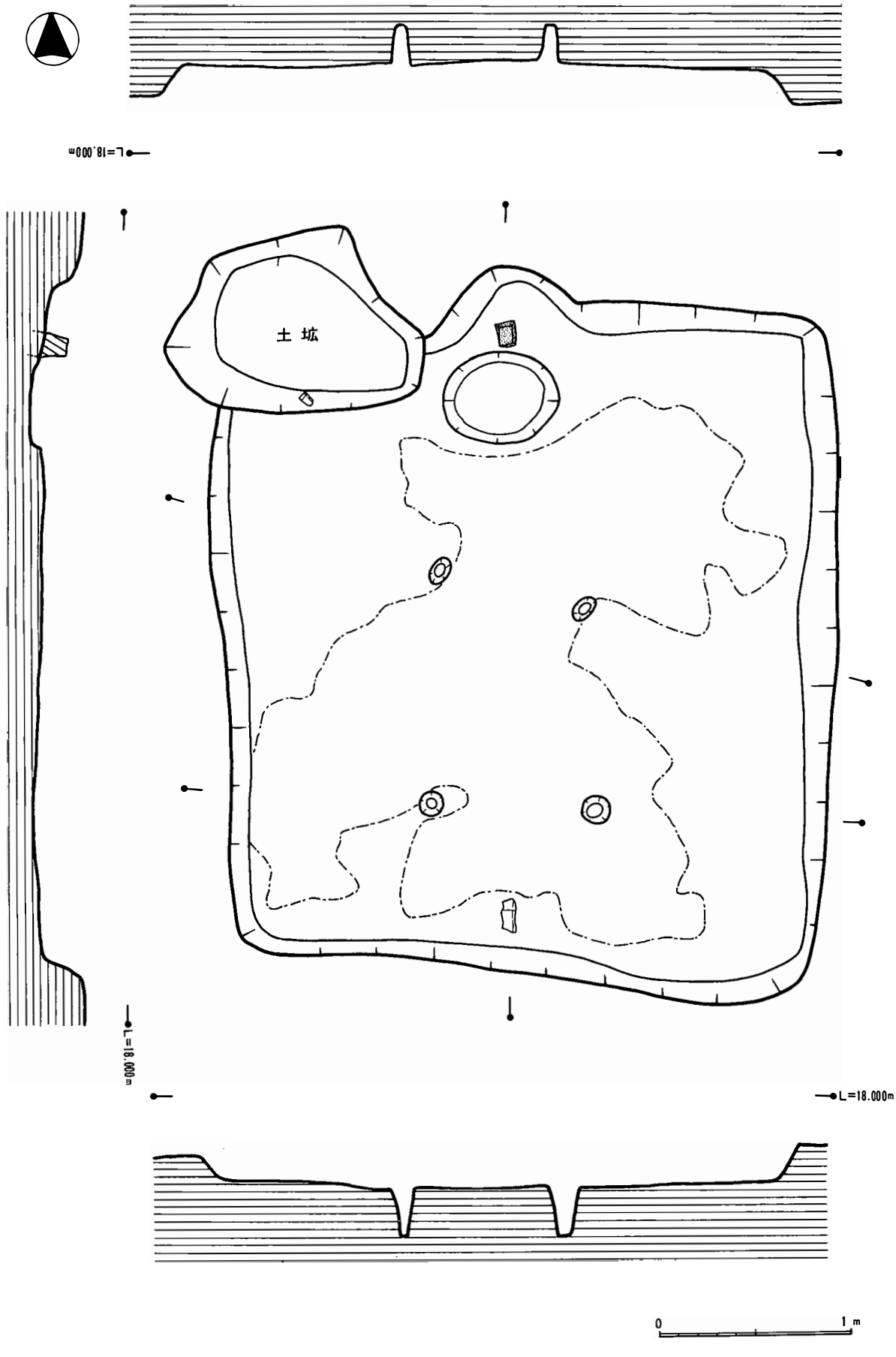
検出せず

【特記事項】

当遺跡で検出した住居跡中で、最大の規模を持つ住居である。他の住居が小振りであるのに比べて、際だっている。他住居との関係につき注目される住居である

【遺物】

土師器の細片が少量出土したが、図化には至らなかった



第75図　第47号住居跡実測図

第76図　第47号住居跡出土遺物実測図

第49号住居跡（第79図）

【位置】

［主軸方位］

不明

［区域］

Ｊ－７，Ｊ－８区

［重複］

樹根、および攪乱に一部を切られる。第50号住居跡と近接する

【構造】

［形状］

不明

［規模］

不明

［深さ］

確認面より約15cm

［覆土］

暗褐色土。分層できず

［床面］

他住居のような広範囲での硬化面の形成は見られない。ブロック状の硬化面を一部に検出する

［柱穴］

南東方向の柱穴と思われるものを１基検出する。深さは約25cmほど

［カマド］

設置されている位置が調査区外にかかるため、検出せず。なお他住居のカマド設置の様子から、北側か西側のいずれかの壁面に設置されていたものと推定される

［付帯設備］

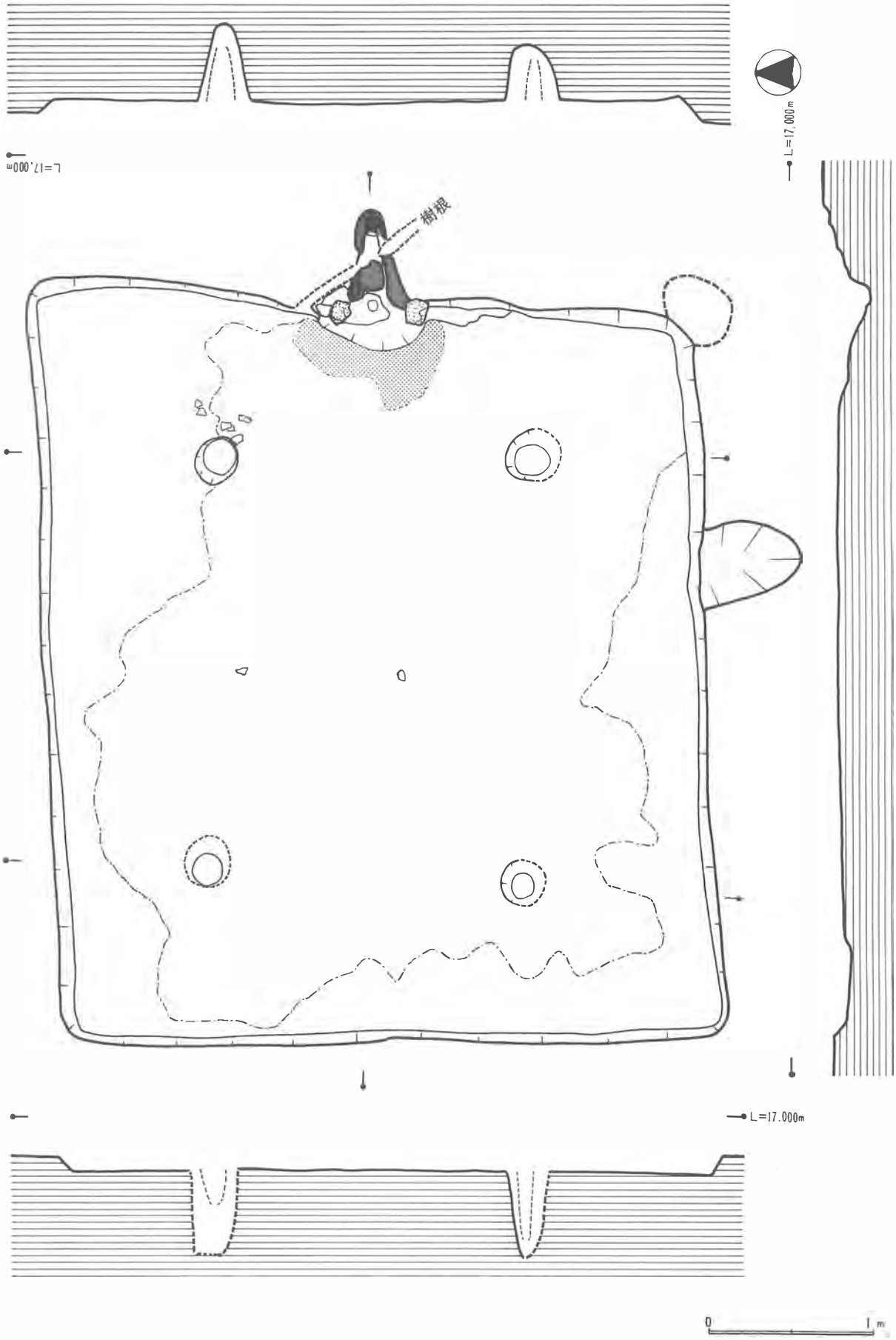
検出せず

【特記事項】

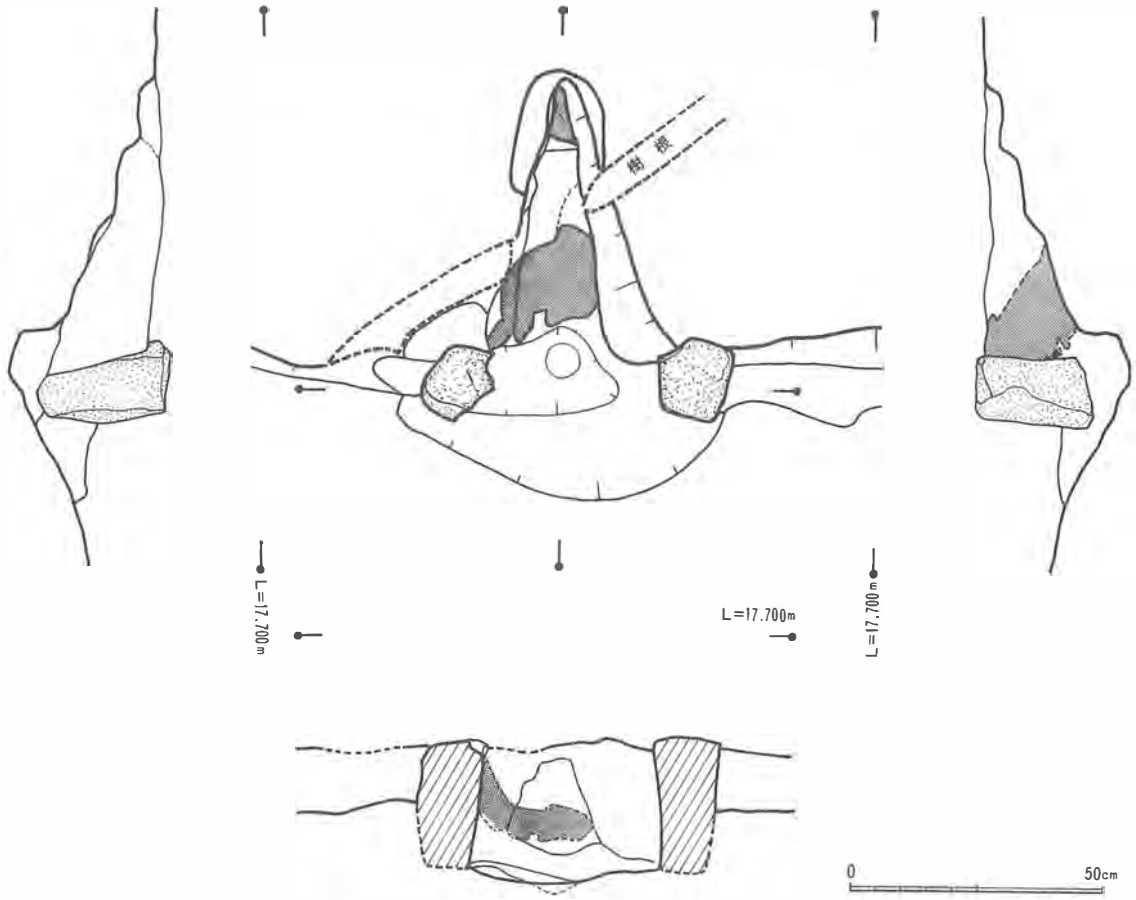
住居跡の半ばが調査区域外におよぶため、詳細な構造や重複の様子等は不明である

【遺物】

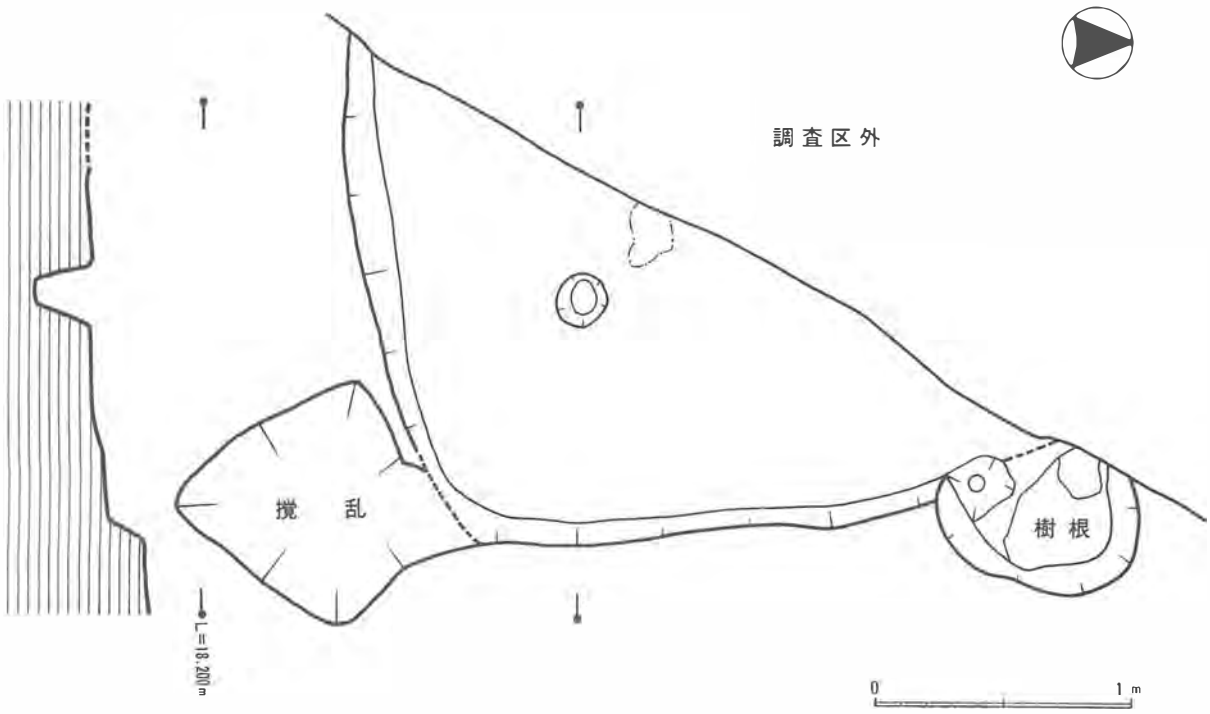
土師器の細片が少量出土したが、図化には至らなかった



第77図　第48号住居跡実測図



第78図　第48号住居跡カマド実測図



第79図　第49号住居跡実測図

第50号住居跡（第80図）

【位置】

［主軸方位］

不明

［区域］

Ｊ－８区

［重複］

認められず。ただし、北側で第49号住居跡と隣接する

【構造】

［形状］

調査区外に広がるため不明

［規模］

南北3.77ｍ

［深さ］

確認面より約25㎝

［覆土］

暗褐色土。分層できず

［床面］

北側を掘りすぎたためか、南側にのみ硬化面が検出された。ただし、他住居に見られるように堅緻なものではない。その掘りすぎた部分には、焼土と硬化面の広がりが確認されたが、おそらく他の住居跡との切り合いではなく、この住居が作られた最初の床面ではないかと思われる

［柱穴］

１基のみ検出。直径約15㎝、深さ約50㎝

［カマド］

東側壁面北側に設置されていたと思われるが、残存状況が極めて悪い

［付帯設備］

検出せず

【特記事項】

周りの住居跡と比較すると、カマドの規模が著しく小さいことから、或いは調査区外に検出されるのかもしれない

【遺物】（第80図 137～139）

137は、土師器坏である。口径14.6㎝、器高3.3㎝、底径9.8㎝を測る。底部は回転ヘラ切り後ナデ、体部は回転ナデ、見込みはナデで仕上げられ、全面に橙色の赤彩が施される

138は、土師器甕である。口径20.6㎝、残存高6.9㎝を測る。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はナデ、体部内面はヘラケズリで仕上げられる。外面は黄灰色から橙色、内面はにぶい橙色を呈する

139も、土師器甕である。口径26.2㎝、残存高13.2㎝を測る。口縁部外面はヨコナデ、内面はハケメ、体部外面はハケメ後一部ヨコナデ、体部内面はヘラケズリによって仕上げられる。浅黄橙色を呈する

第51号住居跡（第81図）

【位置】

［主軸方位］

不明

［区域］

Ｋ－７，Ｋ－８区

［重複］

第48号住居跡に西側を大きく切られる（48号住－新，51号住－旧）。また、調査区外にかかる部分があるため、詳細は不明

【構造】

［形状］

不明

［規模］

不明

［深さ］

不明

［覆土］

不明

［床面］

カマド部分のみの残存のため不明

［柱穴］

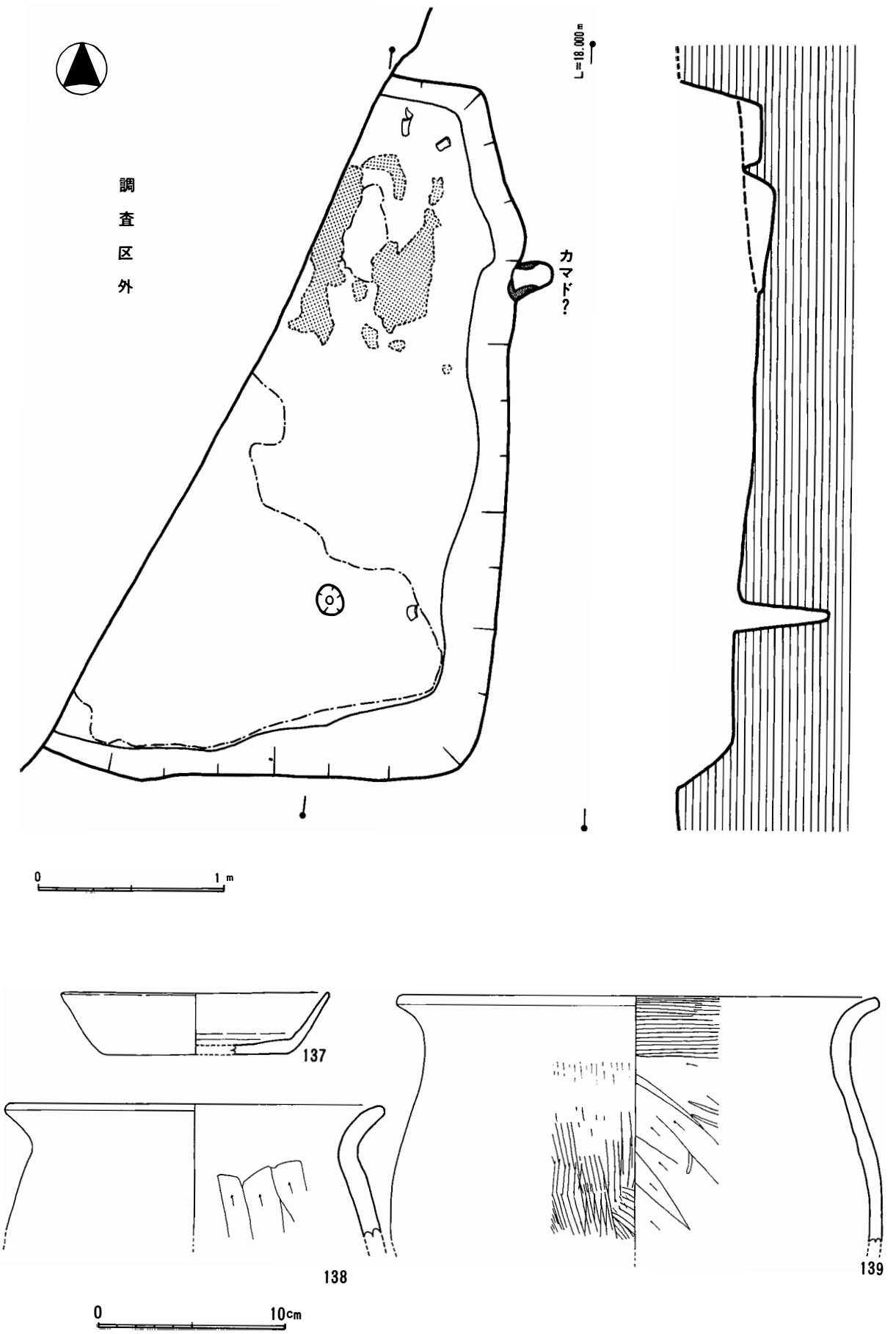
不明。カマド北側に１本の柱穴を検出したが、当住居に伴うものか不明

［カマド］

東側壁面に設置してあったらしく、向かって右側のソデ石の根元部分のみを検出する

［付帯設備］

検出せず



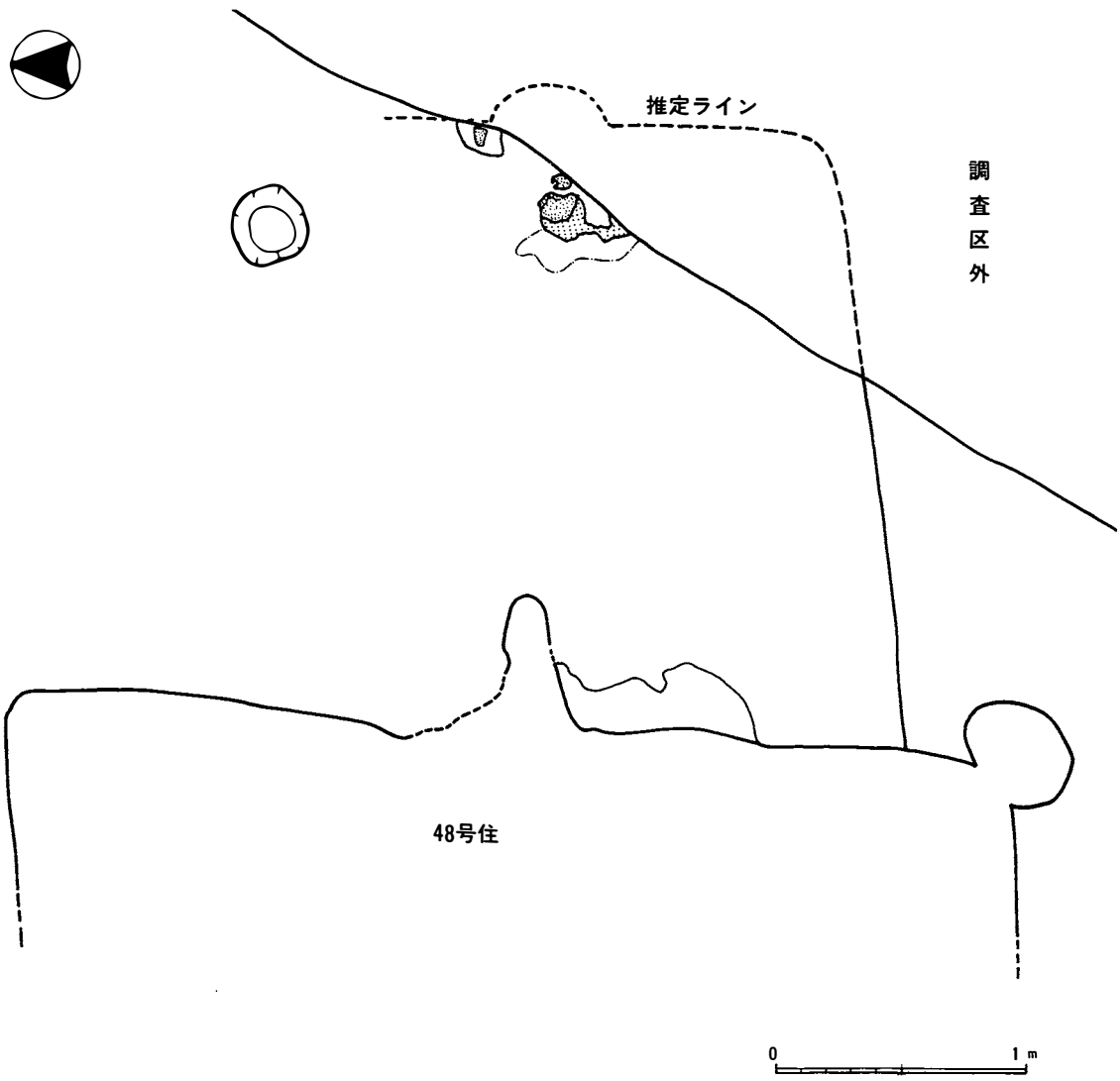
第80図　第50号住居跡実測図・出土遺物実測図

【特記事項】

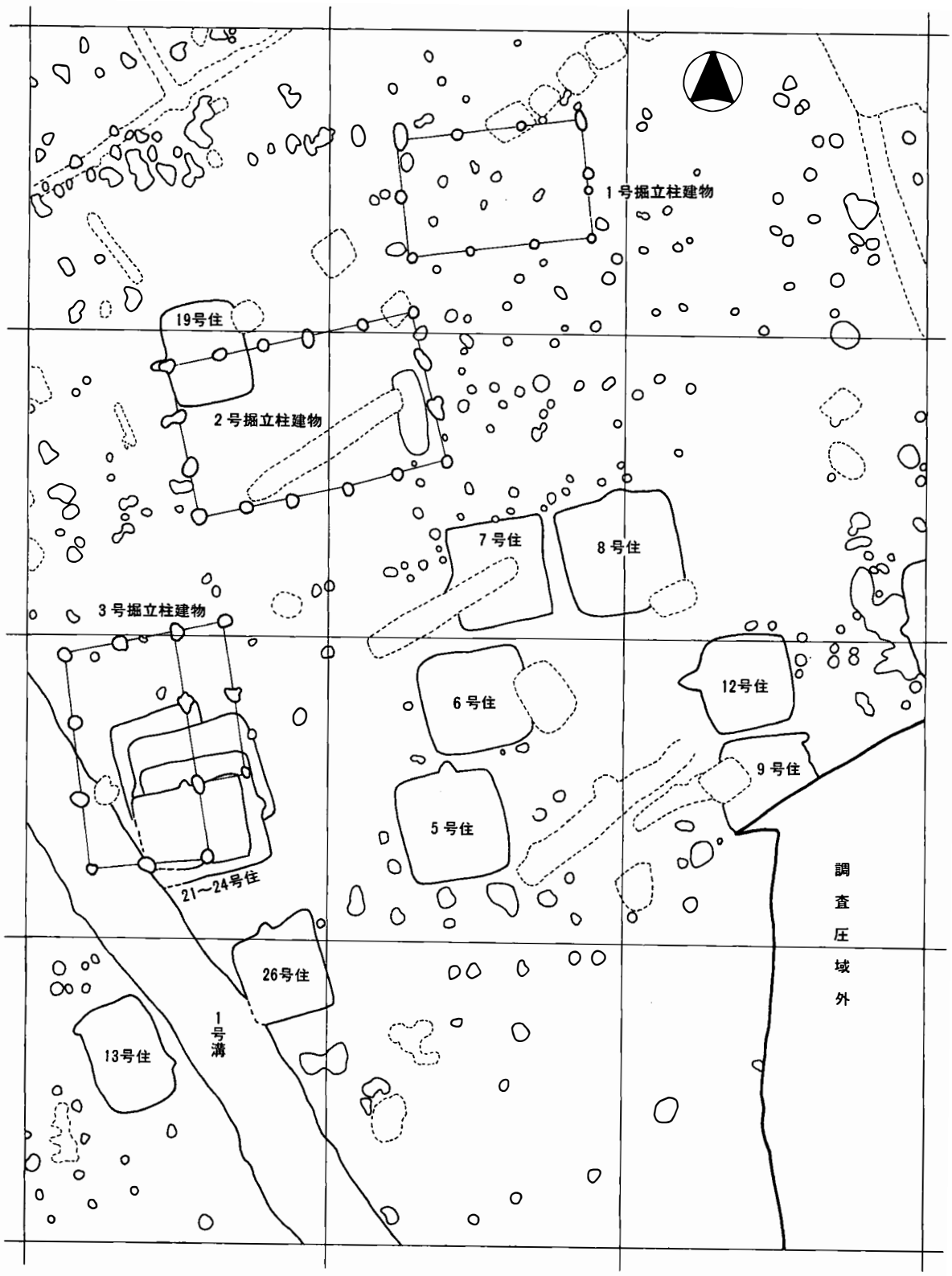
切り合いが激しいことと、一部調査区外にかかることなどから、カマドの一部のみを検出する。詳細は不明である

【遺物】

検出せず



第81図　第51号住居跡実測図



第82図　掘立柱建物配置図

(2) 掘立柱建物

当遺跡で確認した掘立柱建物は、3棟である。内訳は、1号（2×3間）、2号（3×5間）、3号（2×3間、東面に庇）であり、第82図「掘立柱建物配置図」に、その配置を示している。

各建物の報告中に記したが、第1号掘立柱建物は、時期がややずれるものの、第2号・第3号掘立柱建物は、ほぼ同時期に存在していた可能性が高い。第2号建物の棟方向と第3号建物の桁方向がほぼ合致すること、両者の南壁と東壁が同一方向を向いて造られており、ほぼL字型になること、第3号建物の庇が東に面して造られていること、両者の近接する隅柱の距離が、ほぼ正確に12尺（3.6m）になること、などがその理由である。

このことから考えれば、第5号～12号竪穴住居跡の一群の住居があり、その外側に第2号建物と第3号建物とがL字型に囲むという両者の建物の配置が読みとれる。さらに、両者の方向がほぼ一致することなどからも、掘立柱建物と竪穴住居との組み合わせという集落の建物配置が推定できそうである。

なお、報告中の棟方向は公共座標の北を基準とした数値である（※詳細は凡例を参照のこと）。また柱間の寸法は北→南、西→東へと表し、1尺は30cmで換算している。ただ柱間によっては、正確な数値と合致せず、誤差の見られることがあった。この際は「＊」記号を寸法の前に付すこととした。　　（丸山、川俣）

第1号掘立柱建物（第83図）

【位置】

[棟方向]

N－82°－E

[区域]

G－6区

[重複]

なし

【構造】

[形状]

桁行3間（約6.2m）×梁行2間（約3.9m）

[規模]

桁行　北列（＊7－7－7）尺

　　南列（＊7－7－＊7）尺

梁行　東妻（6－7）尺

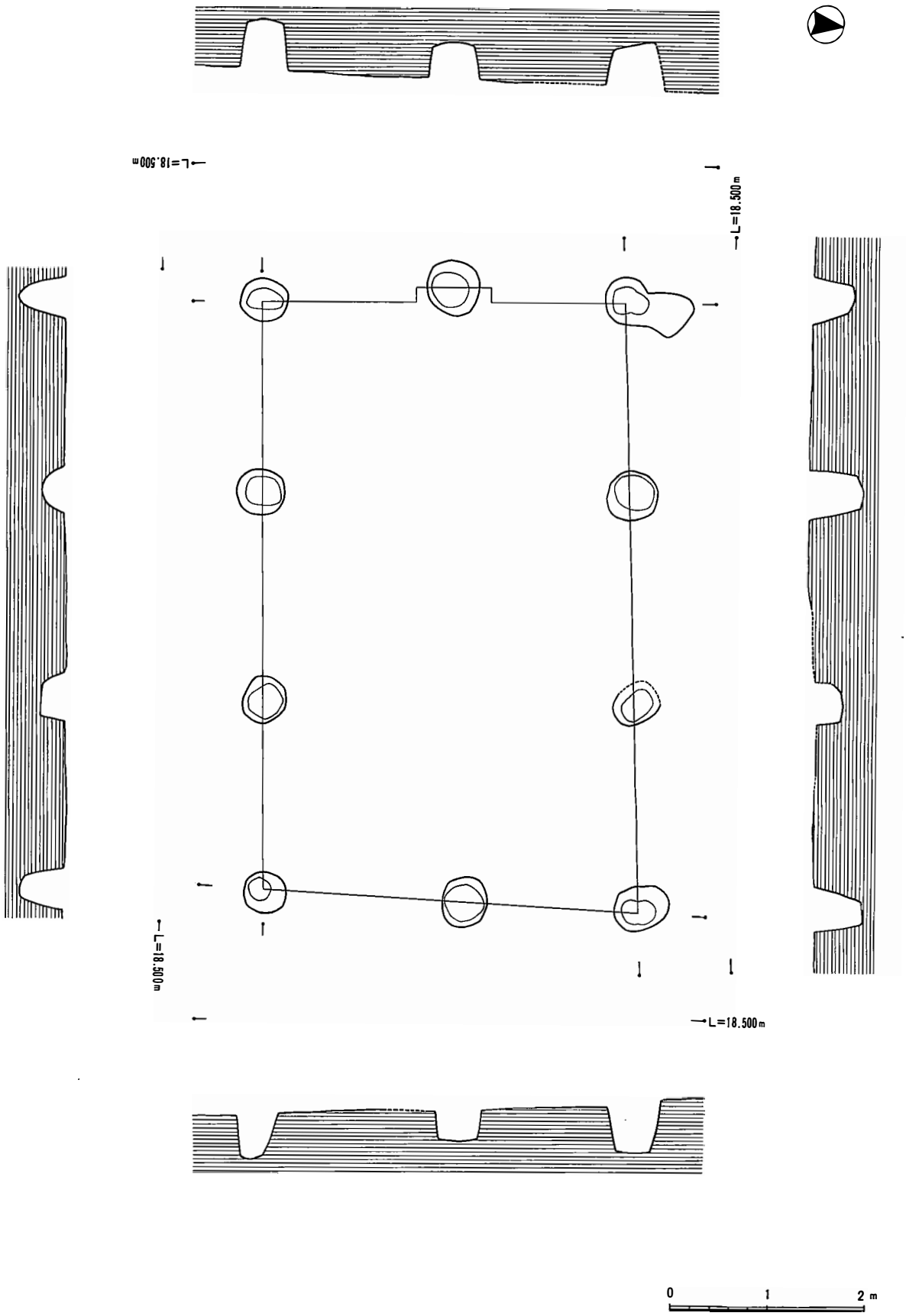
　　西妻（6－＊7）尺

[柱穴]

柱の掘り方の直径はいずれも50cm前後。柱痕跡は確認していない。両妻の中央の柱穴のみが他に比べてやや浅い

【特記事項】

第2・3号掘立柱建物跡とは軸の方向が異なり、やや時期が異なる可能性がある



第83図　第１号掘立柱建物実測図

第２号掘立柱建物（第84図）

【位置】

［棟方向］

Ｎ－78°－Ｅ

［区域］

Ｆ・Ｇ－６・７区

［重複］

第19号住居跡に切られる

【構造】

［形状］

桁行５間（約8.4m）×梁行３間（約5.1m）

［規模］

桁行　北列（６－＊５－＊５－６－＊６）尺

　　南列（＊５－５－６－６－＊６）尺

梁行　東妻（＊６－＊６－６）尺

　　西妻（＊６－＊６－６）尺

［柱穴］

柱の掘り方の直径は40～50cm前後。柱痕跡は15cm程度。隅柱が他に比べてやや深い

【特記事項】

この第２号掘立柱建物の棟方向と、第３号掘立柱建物の桁方向がほぼ合致し、双方の近接する隅柱の距離がほぼ正しく12尺（3.6ｍ）となることから、両建物は同時に存在した可能性がある

第３号掘立柱建物（第85図）

【位置】

［棟方向］

Ｎ－8°30′－Ｗ

［区域］

Ｆ－７・８区

［重複］

第21～24号住居跡と重複する。第22号住居跡の床面の下から当建物の柱穴を検出していることから同住居よりも古いが、詳細は不明。なお、第１号溝遺構にも切られる

【構造】

［形状］

桁行３間（約7.2m）×梁行２間（約3.9m）

東面に１間×２間の庇付き

［規模］

桁行　西列（８－８－８）尺

　　東列（８－８－８）尺

梁行　北妻（６－７）尺

　　南妻（＊６－７）尺

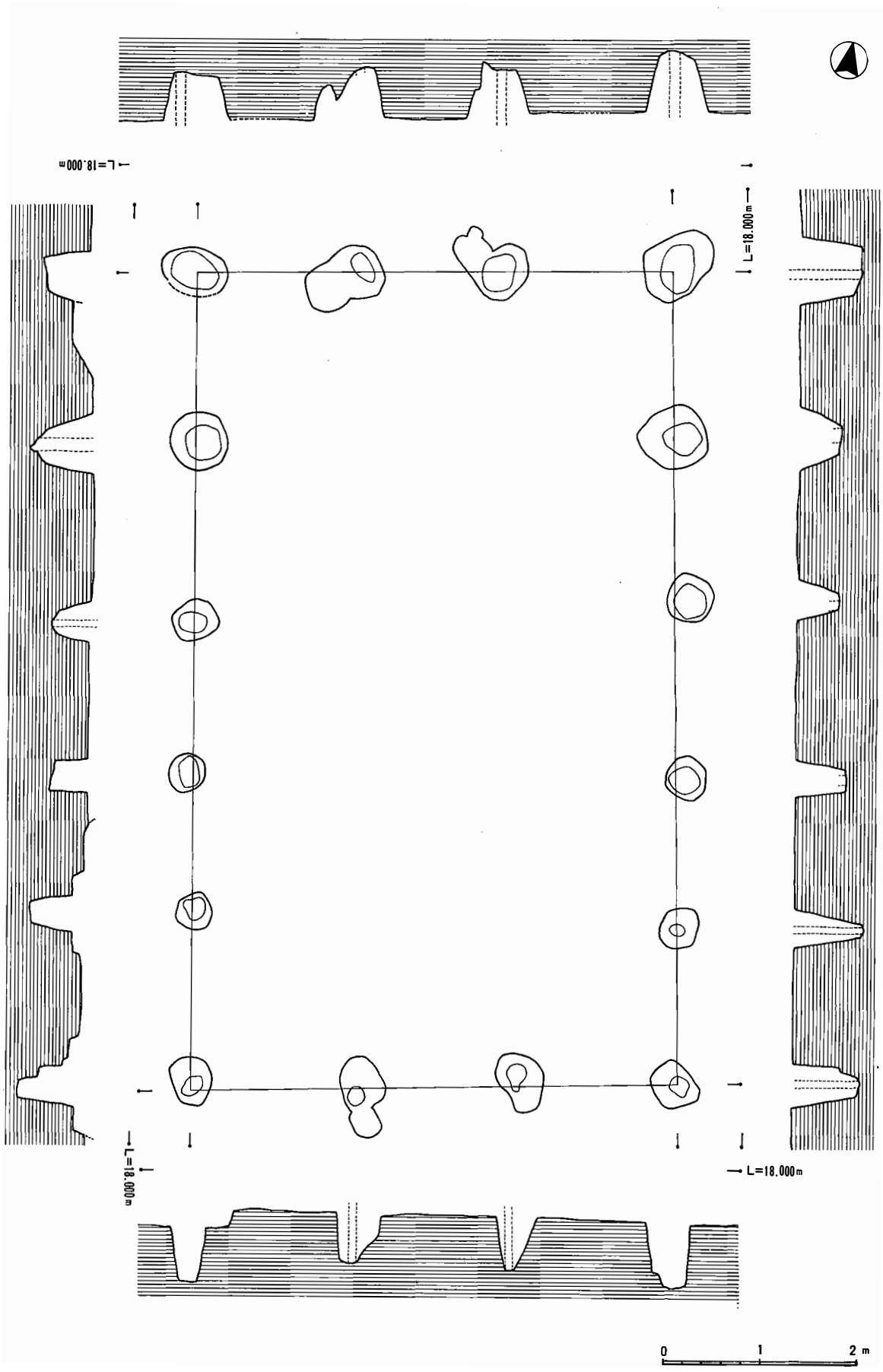
庇　　東へ５尺の張り出し

［柱穴］

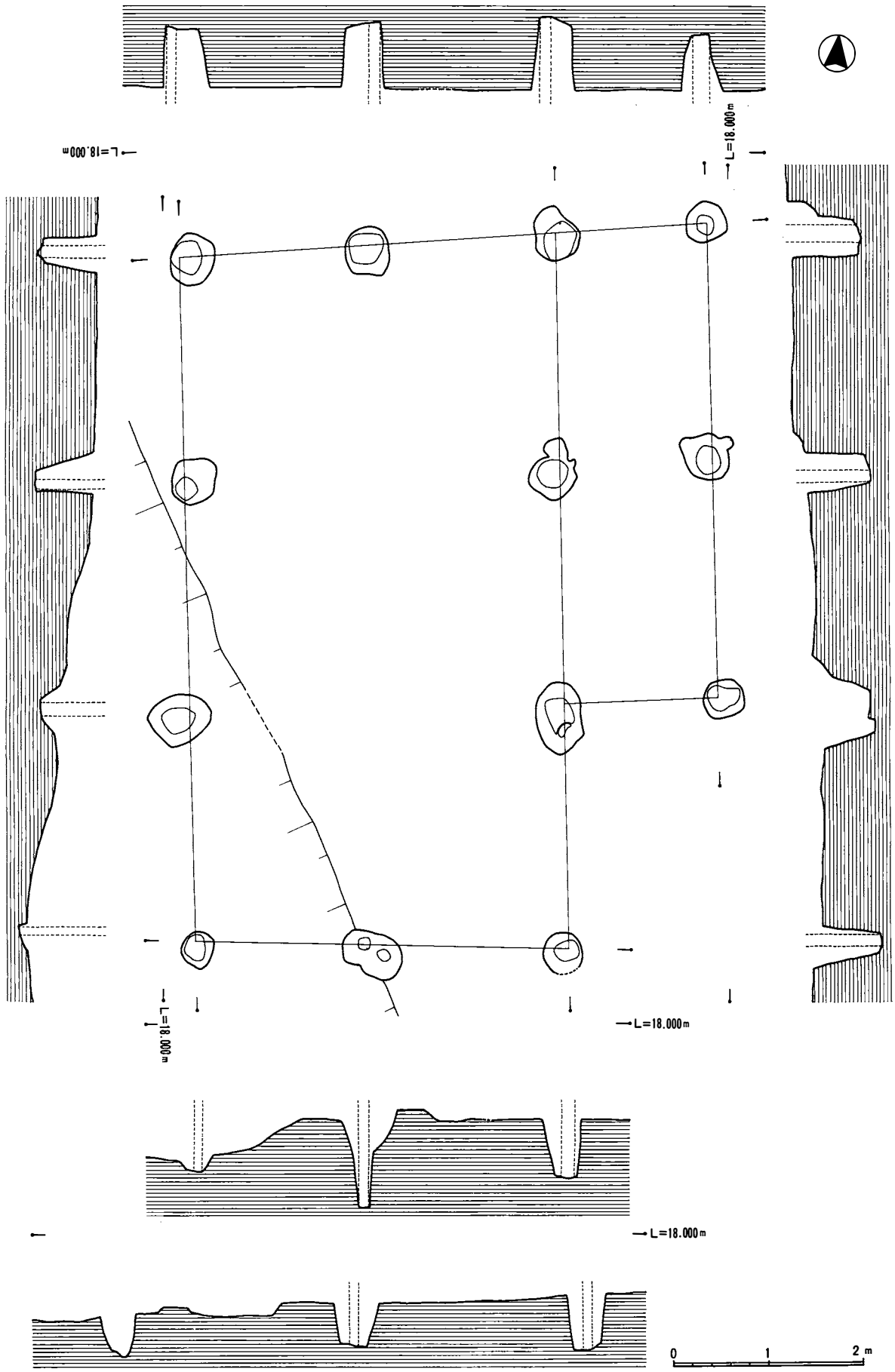
柱の掘り方の直径は50～60cm前後。柱痕跡は15cm程度。柱穴の深さはほぼ均等

【特記事項】

この第３号掘立柱建物の北側の桁方向と、第２号掘立柱建物の棟方向がほぼ合致し、双方の近接する隅柱の距離がほぼ正しく12尺（3.6ｍ）となることから、両建物は同時に存在した可能性がある。なお、この建物の庇が東に面して造られているのも、これを裏付けるものと思われる



第84図　第２号掘立柱建物実測図



第85図　第３号掘立柱建物実測図

(3) 溝遺構

竪穴住居、掘立柱建物以外の遺構として確認されたものに溝遺構がある。今回調査区内で確認された総数は８本である。これらの溝のうち、第２・７・８号溝などは、規模も小さく、出土遺物もきわめて少ないため、明確な時期判定は不可能だが、埋土の状態から、おおむね古代～中世以前の遺構と考えられる。また、その他の溝に関しても、中世の遺物が含まれないことや、重複関係もいずれも溝が住居を切っていることなどから、おおむね住居の時期よりやや後行する時期の遺構と考えている。

なお、第６号溝は、第３号溝の延長かと思われるが、第３号溝は途中に浅い部分があり途切れるので、ここでは便宜的に別の遺構として取り上げている。

（丸山、川俣）

【第１号溝遺構】（第86図）

［方向］

Ｎ－34°－Ｗ（南東方向に緩やかに傾斜）

［重複］

第４・13・21・26号住居跡、第３号掘立柱建物を切る

［形状］

幅が３～４ｍ程度と、今回確認した溝の中では最も規模の大きなものである。全体は直線的で、途中には、２本ほど小規模な溝が、重なって掘られている

［埋土］

・NO.1断面

①暗茶褐色土（カーボン粒等を含む濁った土）

②暗茶褐色土（①に類似するがやや明るい）

③黒褐色土（粘性がありかなり締まっている）

④黒褐色土（③より軟らかくフカフカしている）

・NO.2断面

①茶褐色土（やや明るい土で、少し締まっている）

②暗茶褐色土（軟らかくフカフカしている）

③暗茶褐色土（②と類似するが、やや明るい）

④黒褐色土（②③と類似する）

［特記事項］

当溝の南端と第４号溝東端に当たる部分で、双方の溝が途切れており、相互の溝を意識して築かれたものらしい。溝には水の流れたような形跡はなく、区画などの用途で掘られたものと思われるが、双方の溝で造られる区画は、やや鋭角的である

［遺物］（第86図）

140は、両端部を欠損するが、細い板状の鉄片を基調として片方がバチ型に開いている。何らかの刃物ではないかと推定している。（＊7.8×1.0×0.45cm, 10.6ｇ）

141は土師器椀で、口径12.0cm、器高4.85cm、高台径6.8cmを測る。全面が回転ナデで仕上げられ、にぶい橙色を呈する

142は土師器で、底部を欠損するため高台の有無は不明である。口径12.0cm、残存高3.5cmを測る。体部外面が回転ナデ、内面がナデで仕上げられ、橙色を呈する

143は、当遺跡で唯一の黒色土器Ｂ類である。口径14.2cm、残存高2.5cmを測る。体部外面が回転ナデ、内面がヘラミガキで仕上げられる

144は黒色土器Ａ類の椀で、残存高1.4cm、高台径6.6cmを測る。底部がナデ、高台と体部外面が回転ナデ、見込みがヘラミガキで仕上げられる。外面はにぶい橙色を呈する

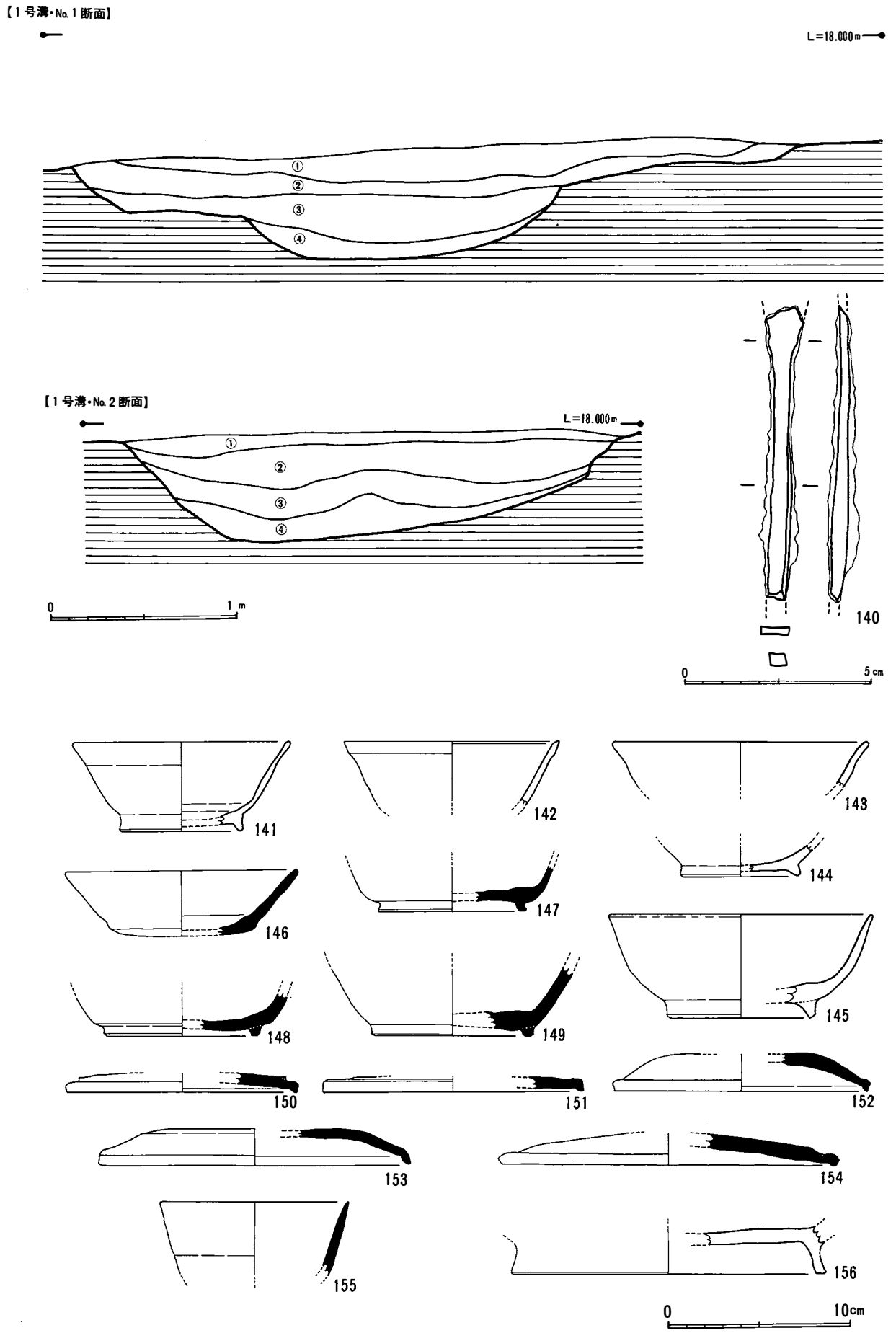
145は黒色土器Ａ類の椀で、口径14.6cm、器高5.6cm、高台径8.2cmを測る。全面がナデで仕上げられ、外面は淡橙色を呈する

146は須恵器坏で、口径12.8cm、器高3.6cm、底径8.0cmを測る。底部がヘラ切り後ナデ、体部外面が回転ナデ後ナデ、内面が回転ナデ、見込みがナデで仕上げられる。黄灰色を呈する

147は須恵器椀で、残存高2.3cm、高台径8.2cmを測る。底部がヘラ切り後ナデ、高台が回転ナデ、体部外面が回転ナデ後ナデ、内面から見込みが回転ナデで仕上げられる。灰色を呈する

148は須恵器椀で、残存高2.2cm、高台径8.6cmを測る。底部がヘラ切り後ナデ、高台がナデ、体部外面が回転ナデ、内面から見込みにかけて回転ナデで仕上げられる。灰色を呈する

149は須恵器椀で、残存高3.5cm、高台径9.0cmを測る。底部がヘラ切り後ナデ、高台がナデ、体部外面が回転ナデ後ナデ、内面が回転ナデ、見込みがナデで仕上げられる。灰色を呈する



第86図　第１号溝断面図・出土遺物実測図

150は須恵器蓋で、口径12.8cm、器高約1.0cmを測る。全面が回転ナデで仕上げられる。体部外面に、重ね焼きの際に他の個体から剝離した部分が残る。灰色を呈するが、口縁端部と内面に黒色の自然釉、口縁外面に黄橙色の自然釉が見られる

151は須恵器蓋で、口径14.5cm、器高約0.9cmを測る。体部はナデ、口縁端部と内面が回転ナデで仕上げられる。灰褐色を呈する

152は須恵器蓋で、口径14.2cm、器高約2.0cmを測る。天井部はヘラケズリ、体部外面は回転ナデ、内面は回転ナデとナデとで仕上げられる。灰色を呈するが、口縁端部から体部内面にかけて灰黒色の自然釉が見られる

153は須恵器蓋で、口径17.2cm、器高約2.0cmを測る。天井部はヘラ切り後回転ナデ、体部外面はヘラケズリと回転ナデ、体部内面は回転ナデとナデで仕上げられる。灰色を呈する

154は須恵器蓋で、口径18.8cm、器高約1.8cmを測る。天井部は回転ナデ、体部外面はヘラケズリとナデ、口縁端部は回転ナデ、体部内面は回転ナデ後ナデで仕上げられる。外面は黄灰色、内面は灰色を呈する

155は須恵器で、底部を欠損するため高台の有無は不明である。口径10.0cm、残存高4.0cmを測る。体部内外面は回転ナデで仕上げられる。黄灰色を呈し、体部外面には自然釉が見られる

156は、高台及び底部の6分の1が残存し、復元高台径17.2cmの土師器皿と思われる。高台底部を除く全面が回転ヘラミガキで仕上げられ、橙色の赤彩が施される

【第2号溝遺構】（第87図）

［方向］

N－18°－W（南東方向に緩やかに傾斜）

［重複］

第10・11・16号住居跡を切る

［形状］

幅が0.6～1m程度と、比較的規模の小さな溝である。途中屈曲する場所もあるがおおむね直線的である

［埋土］

①暗褐色土（焼土粒などをわずかに含む）

②茶褐色土（軟らかくフカフカしている）

［特記事項］

確認面が低かったため、溝の底部のみが残るような状況で、検出状況は良好とは言えない。住居跡3棟を切るほかは、詳細は不明

［遺物］

土師器、須恵器細片を含むが、図化にたえるものはなし

【第3号溝遺構】（第87図）

［方向］

N－57°－W（南東方向に緩やかに傾斜）

［重複］

第4号溝に切られ、第5号溝を切る

［形状］

幅が0.8～1.4m程度の規模の溝である。確認面からの深さは約80cm程度である。ほぼ直線的にのびる

［埋土］

①茶褐色土（明るくわずかに締まっている）

②暗茶褐色土（①に類似するがやや締まっている）

③明茶褐色土（①よりも明るくフカフカしている）

［特記事項］

越州窯系の青磁の出土が注目されるほか、かなり多量の瓦が埋土中に含まれる点が、他の溝遺構と異なっている

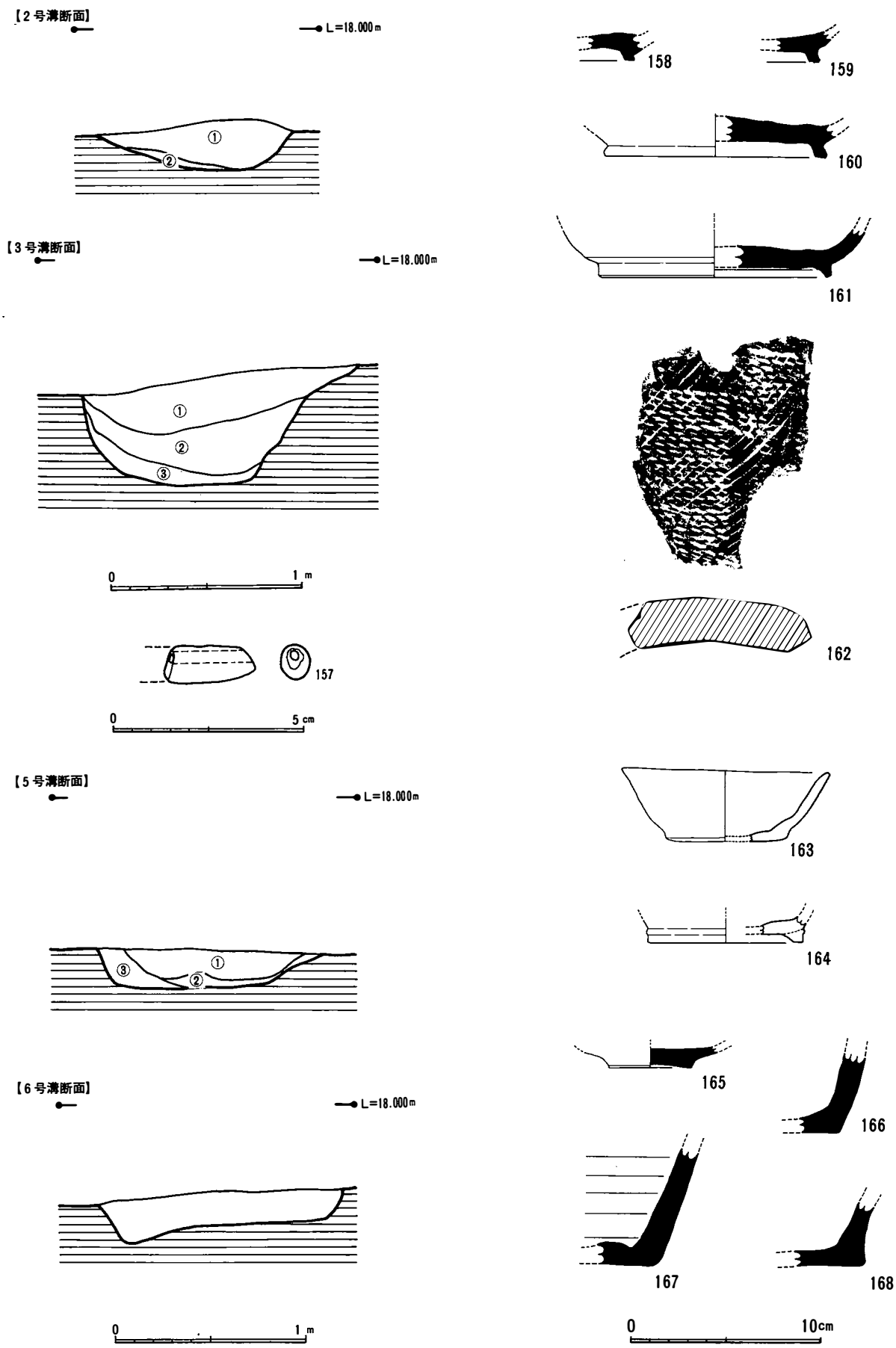
なお、この溝の北側には、溝の方向にほぼ沿うように50cm程度の幅の硬化面が断続的に分布していた。同時期の道路遺構かと思われる。また、6号溝は、この溝の延長にあたっている模様である

［遺物］（第87図）

157は、土製の紡錘車である。土師質で、色調は灰色、穿孔位置が片側にずれるほか、端部を大きく欠損している。（＊2.4×0.9×0.18cm，1.7g）

158は、須恵器の椀であるが、法量は不明である。底部はナデ、高台は回転ナデ、見込みは回転ナデとナデで仕上げられる。暗灰色を呈する

159も須恵器の椀で、法量は不明である。底部は回転ナデ後ナデ、高台は回転ナデ、見込みは回転ナ



第87図　第２・３・５・６号溝断面図・出土遺物実測図

デとナデで仕上げられる。外面は灰色、内面は褐色を呈する

160は、須恵器の壷である。底部のみ残存し、高台径が11.8cmである。底部はヘラ切り後ナデ、高台は回転ナデ、見込みは回転ナデ後一部ナデで仕上げられる。外面は灰色、内面は黄灰色を呈する

161も須恵器の壷である。底部のみ残存し、高台径が12.4cmである。底部から体部外面にかけては回転ナデ、見込みはナデで仕上げられる。灰色を呈する

162は、黒灰色を呈す平瓦である。凸面は、縄目叩きのあと、間隔の広い櫛状の工具で施文し、凹面は、ナデ調整を施すため、布目圧痕はほとんど見られず無文化する

【第４号溝遺構】（第88図）

［方向］

Ｎ－77°－Ｅ（北東方向に緩やかに傾斜）

［重複］

第３号溝を切る

［形状］

1.6ｍ程度の幅を持つ溝である。一度掘られた溝を南側に浅く拡幅して使用したものと見られ、確認面よりの深度は、元の溝が約80cm程度、拡幅部分が35cm程度を測る

［埋土］

①明茶褐色土（焼土粒を含みやや締まりがある）

①′茶褐色土（①に類似するがやや暗い）

①″茶褐色土（①よりも暗くフカフカしている）

②暗茶褐色土（焼土粒を多量に含み、①より締まっている）

②′暗茶褐色土（②よりやや暗い）

③黒褐色土（不純物をあまり含まない）

④黒褐色土（不純物を含み、フカフカしている）

⑤灰黒褐色土（地山のロームを含み締まっている）

［特記事項］

当溝の南端と第１号溝南端に当たる部分で、双方の溝が途切れており、相互の溝を意識して築かれたものらしい

［遺物］（第88図）

169は、黄灰色を呈する丸瓦である。凸面は縄目叩きのあとをナデており無文化、凹面は布目圧痕がそのまま残る

170は、土師器の椀である。残存高3.7cm、高台径6.4cmを測る。底部はヘラ切り後回転ナデ、高台は回転ナデ、体部外面はナデ、内面はヘラナデ、見込みは回転ナデで仕上げられる。にぶい橙色を呈し、内外面に橙色の赤彩が施される

171は、土師器の坏である。底部のみ残存し、底径が6.4cmである。底部はヘラ切り後ナデ、見込みは回転ナデで仕上げられる。黄橙色を呈する

172は、須恵器の椀である。残存高2.0cm、高台径9.6cmを測る。底部はヘラ切り後ナデ、高台は回転ナデ、体部外面はナデ、内面は回転ナデ、見込みは回転ナデ後ナデで仕上げられる。黄灰色を呈する

173は、須恵器の椀である。残存高2.0cm、高台径8.5cmを測る。底部はヘラ切り後ナデ、高台から体部内外面、見込みにかけては回転ナデで仕上げられる。淡黄灰色を呈する

174は、須恵器の蓋である。口径15.5cm、器高0.9cmを測る。天井部はヘラケズリ、体部外面はナデ、体部内面は回転ナデで仕上げられる。口縁端部に暗灰色の自然釉が見られ、残りは灰色を呈する

175は、須恵器の高坏の坏部である。口径10.2cm、残存高2.9cmを測る。回転ナデで仕上げられ、灰色を呈する

176は、当遺跡唯一の弥生時代の土器で、黒髪式土器の甕である。口径26.4cm、残存高3.5cmを測る。全体をナデで仕上げられる。黄橙色を呈する

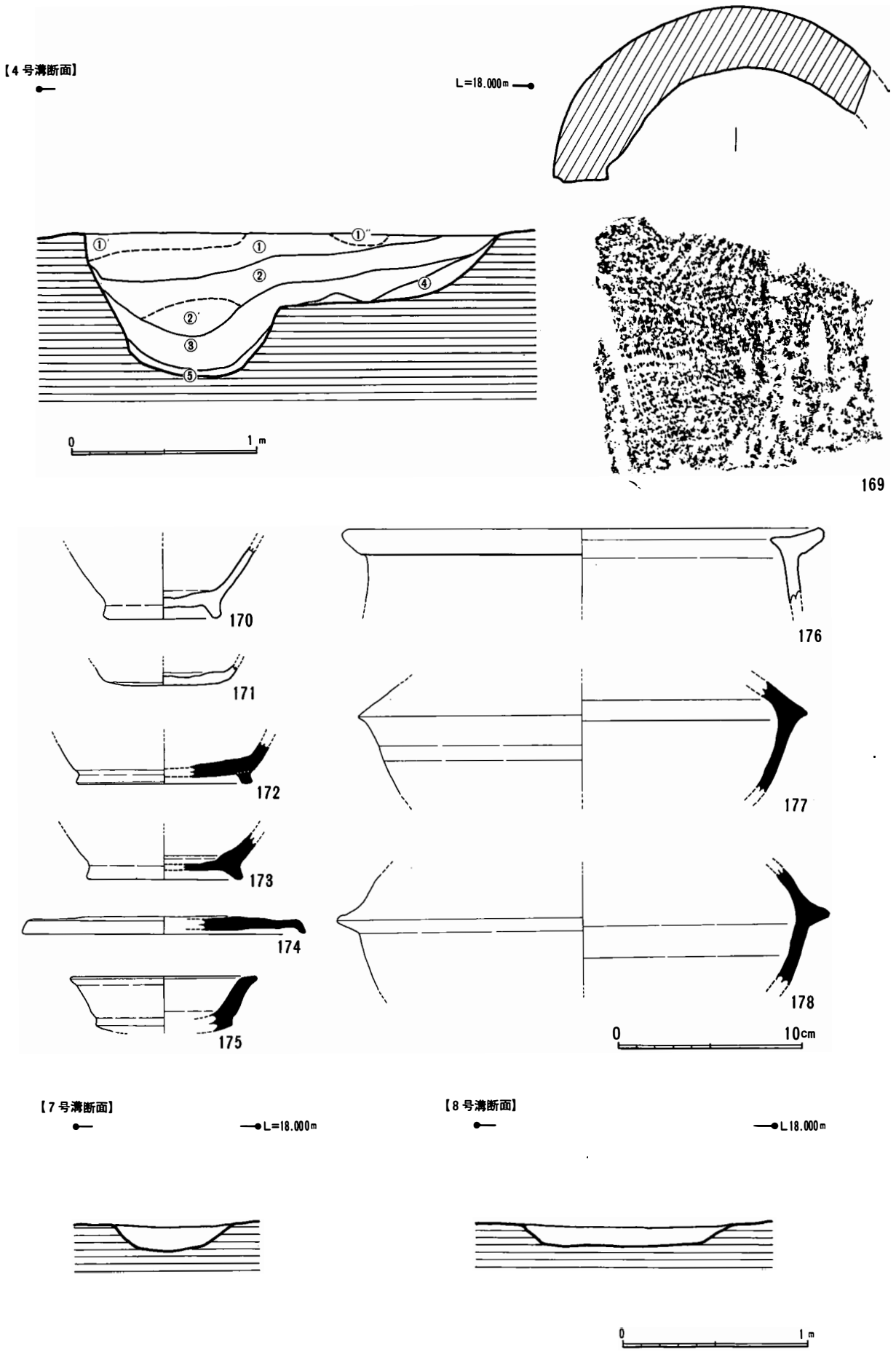
177は、須恵器の壷である。胴径24.6cm、残存高6.0cmを測る。外面は回転ナデ、内面は上部が回転ナデ、下部がタタキ後回転ナデで仕上げられる。外面は灰色、内面は淡褐色を呈するが、外面張り出しの下部には褐色の自然釉が見られる

178も須恵器の壷である。胴径27.0cm、残存高6.3cmを測る。内面は回転ナデで灰色、外面張り出しの上部はナデで黄灰色の自然釉、張り出し下部は回転ナデで暗灰色の自然釉が見られる

【第５号溝遺構】（第87図）

［方向］

Ｎ－69°－Ｅ（北東方向に緩やかに傾斜）



第88図　第４・７・８号溝断面図・第４号溝出土遺物実測図

［重複］

第３号溝に切られる

［形状］

幅が1～1.3ｍ程度、確認面よりの深度が、約20cm程度の溝である

［埋土］

①暗茶褐色土（微量の焼土粒を含む。フカフカしている）

②暗茶褐色土（①に類似するがやや締まっている）

③茶褐色土（不純物を含まない。粘性がある）

［特記事項］

切り合い関係から推定すると、今回検出した溝の中で、最も古い時期のものと思われる。ただし、確認面が低いことから、残存状況は悪く、詳細は不明

［遺物］（第87図）

163は、高台なしの土師器椀である。口径11.0cm、器高3.9cm、底径6.5cmを測る。底部はヘラ切り後ナデ、体部は回転ナデ、見込みは回転ナデ後ナデで仕上げられる。にぶい橙色を呈する

164は、土師器の椀である。底部のみ残存し、高台径は8.2cmである。ナデで仕上げられるが、高台と体部のつなぎ目が未調整の部分もある

【第６号溝遺構】（第87図）

［方向］

Ｎ－55°－Ｅ（南東方向に緩やかに傾斜）

［重複］

先端は、２本の溝が重複するらしい

［形状］

幅が１ｍ程度、深度は確認面より約20cmと、残存状況はあまりよくない。３号溝の延長かと思われるが、端部は２本と重複する

［埋土］

明茶褐色土（カーボン粒等を含み、フカフカしている）分層できず

［特記事項］

確認面が低かったため、残存状況は悪い。詳細は不明

［遺物］（第87図）

165は、須恵器の小壷であろうか。薄く平らな高台を持ち、その径は4.4cmである。回転ナデで仕上げられ、外面は灰白色を呈し、内面には黄灰色の釉が見られる

166～168は、須恵器の壷である。いずれも底部の一部が残存する

166は、底部がナデ、体部外面が回転ナデ、内面が回転ナデ後ナデで仕上げられる。外面は赤褐色、内面は淡赤褐色を呈する

167は、底部がヘラ切り後ナデ、体部内外面が回転ナデ、見込みが未調整である。灰色を呈する

168は、回転ナデで仕上げられ、外面は灰色、内面は淡赤褐色を呈する

【第７号溝遺構】（第88図）

［方向］

Ｎ－33°－Ｗ（顕著な傾斜見られず）

［重複］

なし

［形状］

幅が0.5ｍ程度と、小規模なもので、深度は確認面より約15cm程度と浅い

［埋土］

暗茶褐色土（カーボン粒等を含みフカフカしている）分層できず

［特記事項］

検出面が低いため、残存状況悪い。詳細は不明

［遺物］

土師器、須恵器細片をわずかに含む

【第８号溝遺構】（第88図）

［方向］

Ｎ－35°－Ｗ（顕著な傾斜見られず）

［重複］

なし

［形状］

幅が0.8ｍ程度、確認面よりの深度約10cm

［埋土］

暗茶褐色土（カーボン粒やローム層のブロック等を含む濁った土。フカフカしている）分層できず

［特記事項］

第７号溝と平行して作られるが、確認面が低く、検出状況が悪かったため、詳細は不明

［遺物］

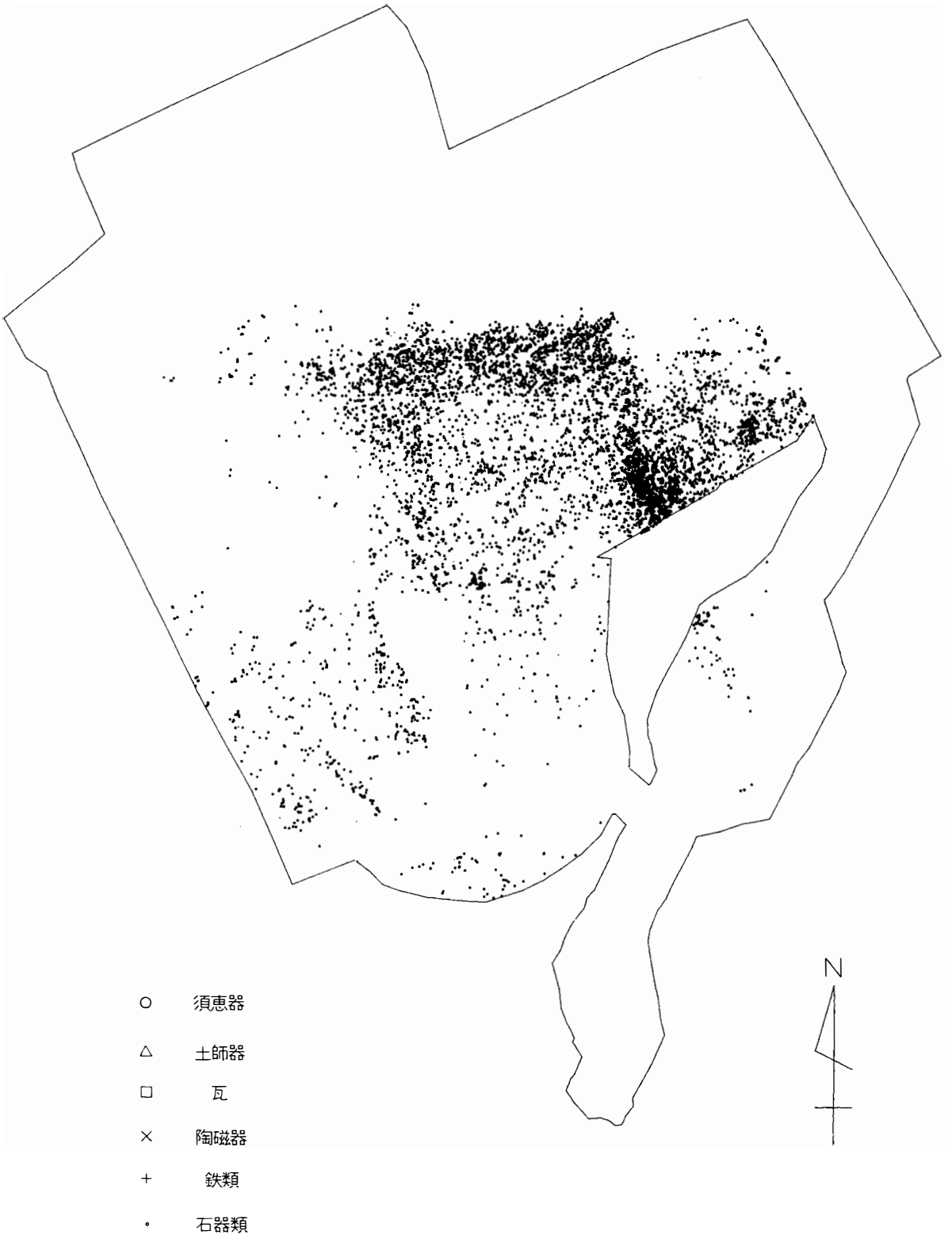
土師器、須恵器の細片を含む

２．遺物

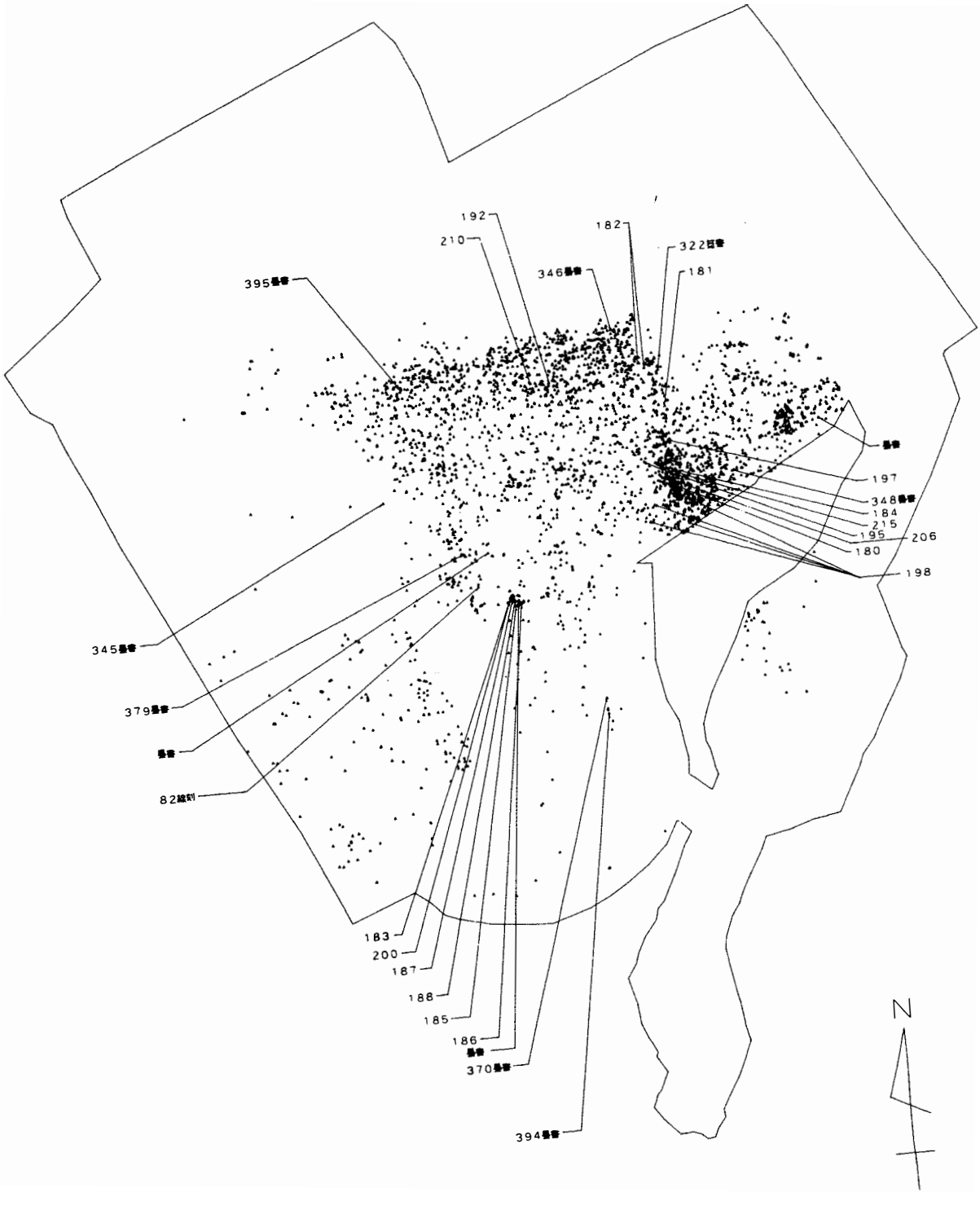
(1)　遺物の分布状況(第89～93図)

次に当遺跡より出土した遺物（包含層内遺物）の分布状況を示す。

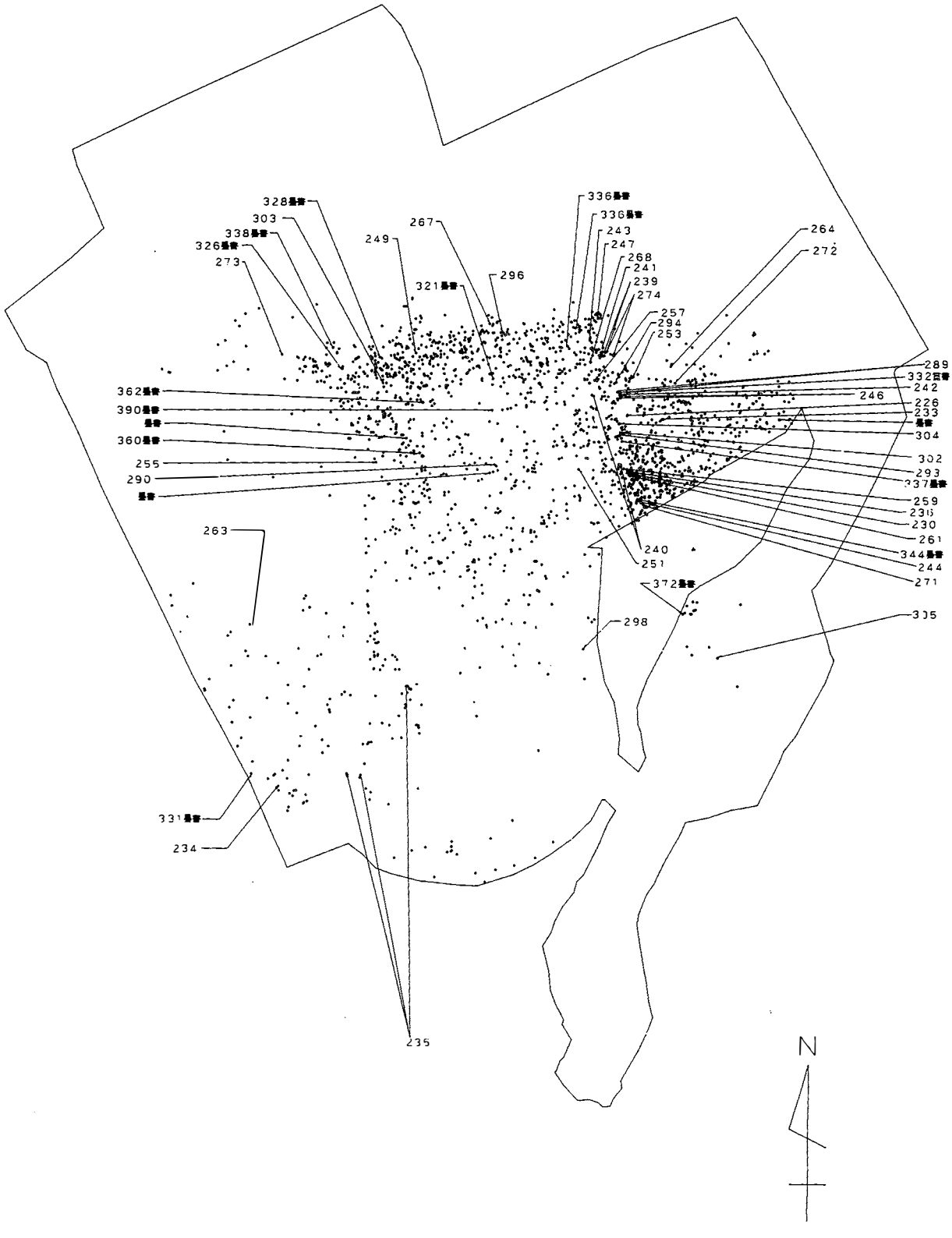
ドットは、一括遺物以外の取り上げ遺物である。遺構の集中地点に遺物の分布も集中している。遺構確認面が低かったため、遺構内の遺物も混在していると思われる。



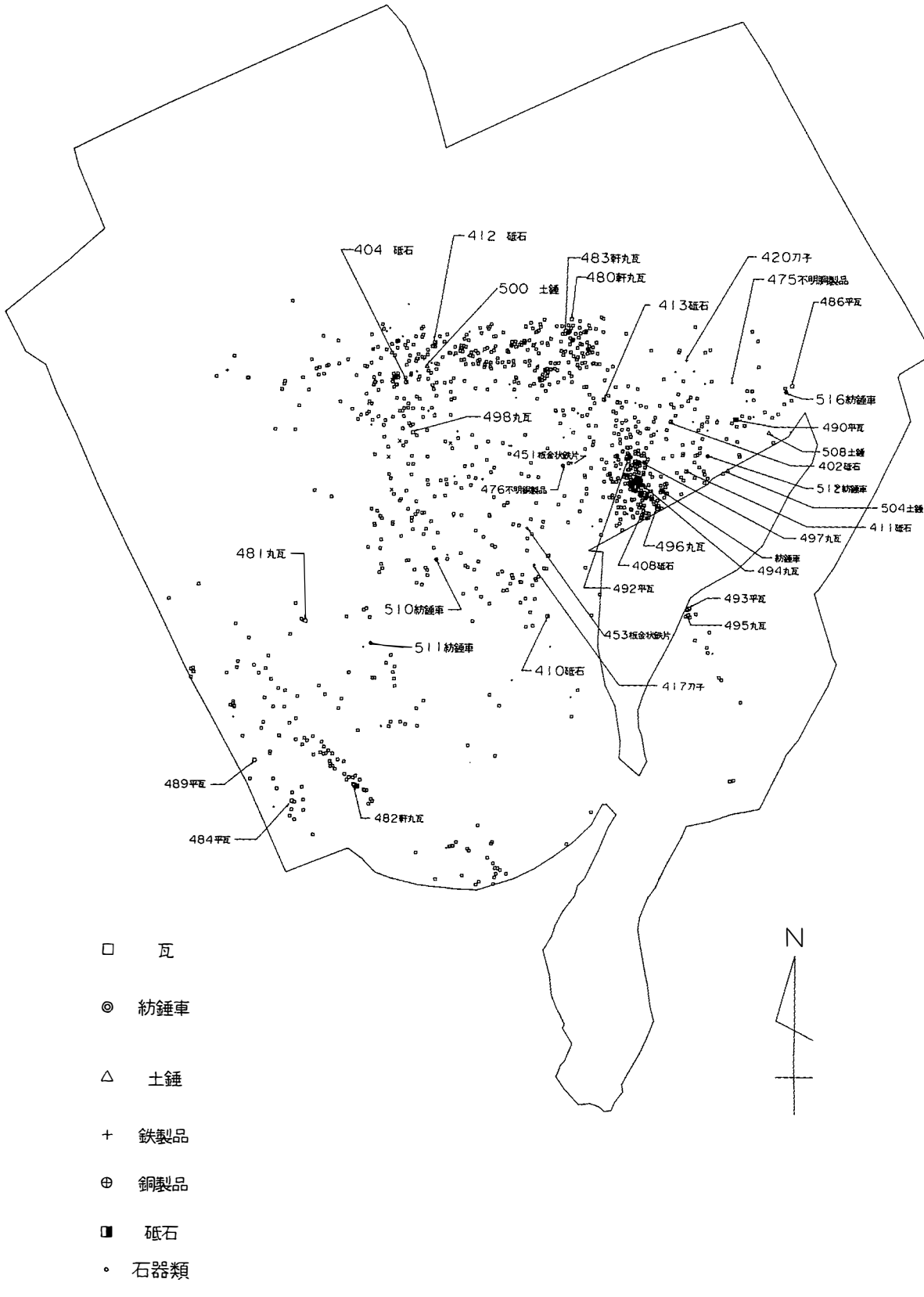
第89図　遺物分布図（全遺物）



第90図　遺物分布図（土師器）



第91図　遺物分布図（須恵器）



第92図　遺物分布図（その他の遺物）

第93図　遺物分布図（分布傾向と遺構配置）※ドットは瓦の出土分布

(2) 土器

遺物包含層からは、多量の土器が出土した。その種類は、土師器、須恵器、黒色土器、彩釉陶器、陶硯等である。そのなかで、復元可能で且つ特徴的なものを図示した。ここでは、それらの土器を中心に、遺構から出土した土器も交えながら分類をおこないたい。

器種の呼称について、坏と椀の区別は、原則として高台を持つものを椀、そうでないものを坏とした。皿、盤は統一して皿とした。

【土師器】　坏（第94図）

大量に出土したが、殆どが細片である。特に残りが良く、特徴をつかめるものを、ここに掲載する。「第３表　土師器坏観察表」のとおり、法量については、口径は11～13cm台の小型のものと、14～16cm台のやや大型のものとが見られるが、器高はほぼ３cm台にまとまるものが多い。住居跡より出土するものについても同様である。調整については、底部は回転ヘラ切り離し後ナデ、体部は回転ナデ、見込みは回転ナデあるいはナデと殆ど違いはない。又、ここに紹介した資料については全てに赤彩が施される。なお、大まかには、以下のように分類できる。

Ⅰ類：比較的厚いしっかりしたつくりのもの(179～184)

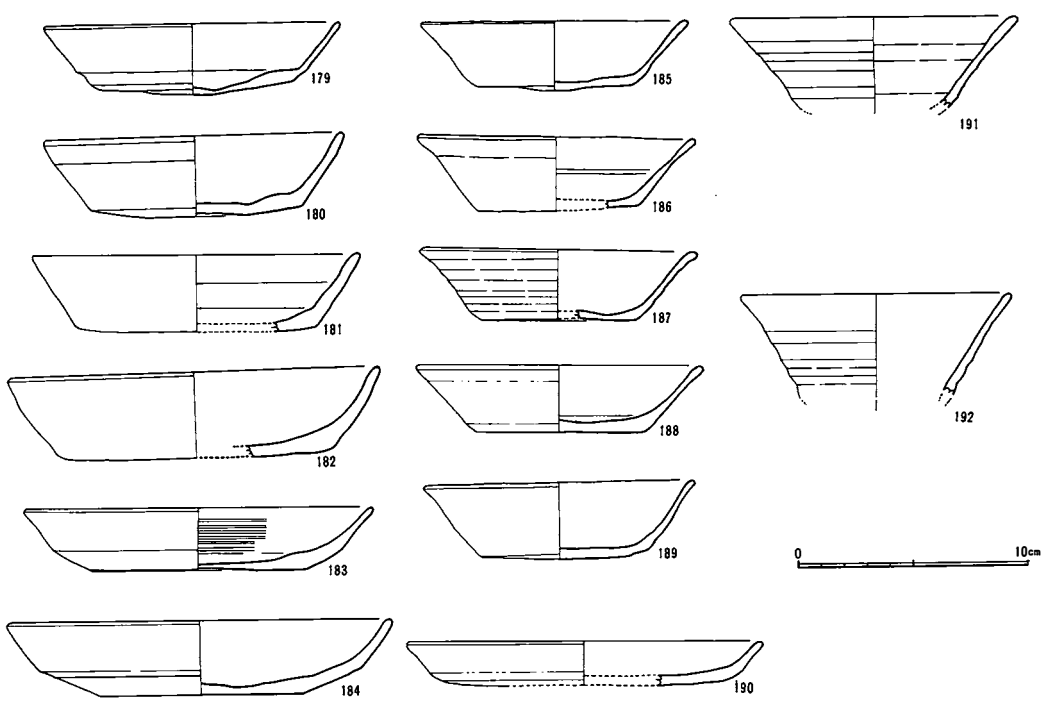
179は、体部外面下部が、ヘラケズリ後ナデで仕上げられ、それにより稜を形成している。体部の立ち上がりは直線的である。

180～182の中で特徴的なのは、181は全面に、183は主に体部外面から底部外面にかけて、赤彩後更に黒彩が施されていることである。体部は、やや丸みをもちながらも直線的に立ち上がる。

183、184で最も特徴的なのは、底部から体部外面にかけてヘラケズリがなされ、体部に稜を形成することである。さらに183は、体部内面に粗い回転ヘラミガキが施される。体部は、丸みをもって立ち上がる。

No	出土地点	口径	器高	底径	色　調	焼成	調整(底部)	体部外面	体部内面	見込み	分類	備　考
179		13.0	3.1	8.9	橙色（赤彩）	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	Ⅰ	底部と体部の境にヘラケズリ、全面に赤彩
180	2093,2107,2114	13.2	3.45	9.3	橙色（赤彩）	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	Ⅰ	全面に赤彩後黒彩
181	2249,2250	14.4	3.35	10.5	(外)橙色(内)にぶい橙色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	Ⅰ	全面に赤彩
182	1523,1537	16.4	3.7	12.3	黄橙色、明赤褐色（赤彩）	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	Ⅰ	体部内面に赤彩
183	3388	15.4	2.8	9.4	橙色、明赤褐色（赤彩）	良	ヘラケズリ	回転ナデ	回転ミガキ	回転ヘラミガキ	Ⅰ	体部内面と口縁外部に赤彩
184	2135	17.0	3.2	8.9	にぶい橙色,明赤褐色(赤彩)	良	ヘラケズリ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	Ⅰ	底部以外に赤彩
185	2952	11.9	3.05	6.9	(外)黄橙色(内)黄白色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	Ⅱ	全面に赤彩（橙色）
186	2956,3389	12.3	3.2	7.1	にぶい橙色、橙色（赤彩）	良	ヘラケズリ後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	Ⅱ	全面に赤彩
187	2940,2941	12.4	3.15	6.95	浅黄橙色、橙色（赤彩）	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	Ⅱ	全面に赤彩（底部は部分的）
188	2942,3393	12.8	2.85	7.4	浅黄橙色、橙色（赤彩）	良	ナデ	回転ナデ	不明	不明（摩耗）	Ⅱ	おそらく全面に赤彩
189	3393～3395	12.05	3.35	7.4	にぶい橙色、橙色（赤彩）	良	ヘラケズリ後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	Ⅱ	全面に赤彩

第３表　土師器坏観察表



第94図　土師器実測図（1）

Ⅱ類：薄くもろい感じのつくりのもの(185～189)

体部の立ち上がりはⅠ類と違い、底部からやや膨らみをもちながら外反気味に立ち上がる。

186と189は、底部がヘラケズリ後ナデで仕上げられるが、細いヘラ痕跡が不定方向に残る。このⅡ類の土器は、住居跡からは出土しない。

なお、191､192は、底部を欠損するため高台の有無は不明である。口径はそれぞれ190は12.6㎝､191は11.8㎝で体部は回転ナデで仕上げられる。体部外面に明瞭にロクロ痕が残るのが特徴である。

皿（第94図 190）

皿の出土はきわめて少なく、ここには１点を掲載するのみである。190は、口径15.8㎝、器高1.9㎝、底径12.8㎝を測る。底部はヘラ切り後ナデ、体部は回転ナデ、見込みはナデで仕上げられる。全面に赤彩が施されるなど、様相は坏と全く変わらない。黄橙色を呈する。

椀（第95図 194～204）

これも大量に出土するが、坏と同様特徴的なもののみを掲載した。

全体的な特徴としては①直線的に立ち上がる体部②底部と体部の境につく、外開き気味の高台、があげられる。以下のような分類が可能と思われる。

Ⅰ類：体部が大きく外方に開く扁平なもの（195～197）

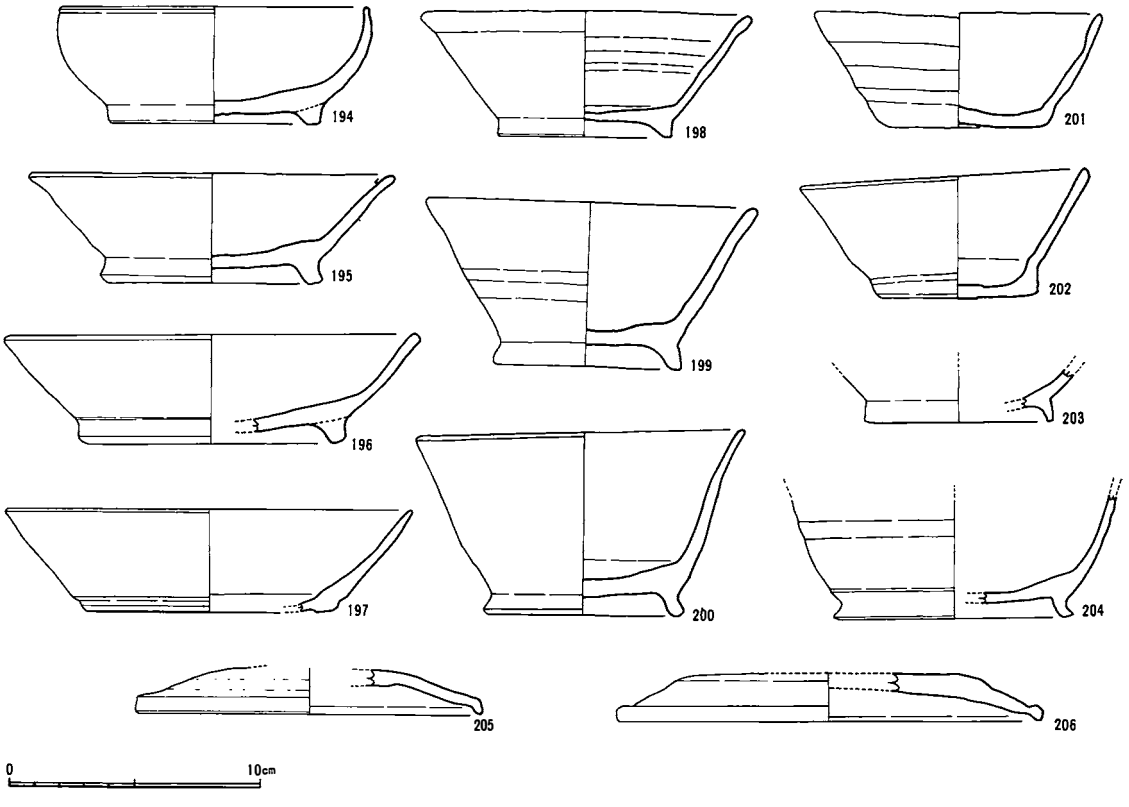
Ⅱ類：坏のⅡ類と同様、薄くもろい感じのつくりのもの（198）

Ⅲ類：体部の立ち上がりがより垂直に上方へ向かい、器高が高くなるもの（199･200）

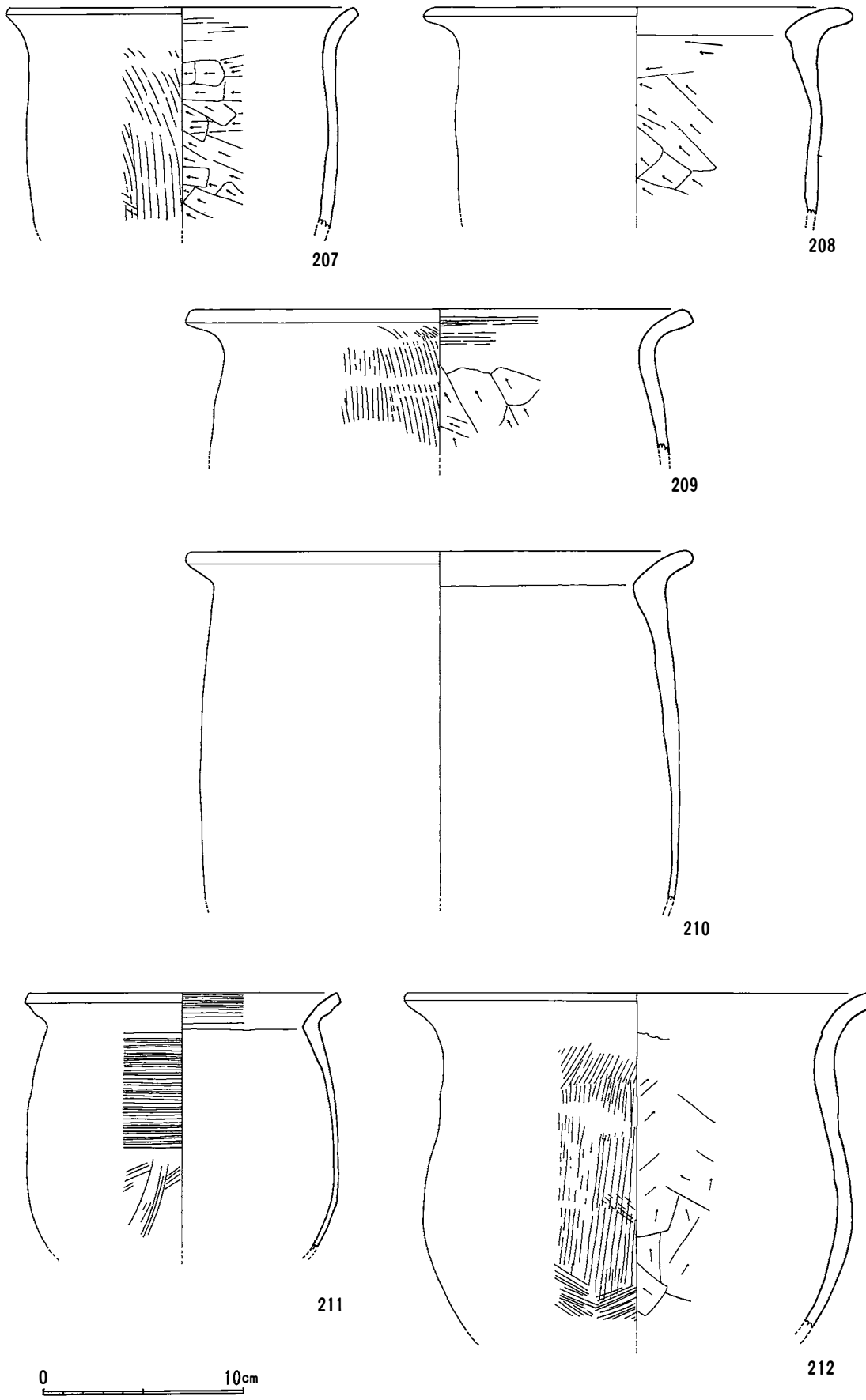
Ⅳ類：高台をもたないもの（201･202）

No	出土地点	口径	器高	高台径	色調	焼成	調整（底部）	体部外面	体部内面	見込み	分類	備考
194	H－7区P	12.4	4.6	8.4	浅黄橙色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	Ⅴ	須恵質
195	H－7区、2168	14.6	4.3	8.9	橙色（赤彩）	良	ナデ､ケズリ後回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	Ⅰ	高台にハケメ状の工具痕､底部に板状圧痕
196	J－4区P	16.7	4.25	10.6	淡橙色、橙色（赤彩）	良	ナデ(ハケメ状工具痕)	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	Ⅰ	内面、外面、高台の底に赤彩
197	2882	16.2	4.1	10.2	にぶい橙色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	Ⅰ	非常に低い高台
198	2101､3179､3184､3224､3962	13.4	4.9	6.8	にぶい橙色､橙色(赤彩)	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	Ⅱ	内面に４条の沈線、全面に赤彩
199	H－7区特殊不明遺構	13.4	6.45	7.65	橙色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	Ⅲ	
200	2938	13.3	7.45	8.1	橙色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	Ⅲ	
201	G－6．7区、302	12.0	4.5	6.8	にぶい橙色	良	ナデ（板状圧痕）	回転ナデ後ナデ	回転ナデ後ナデ	回転ナデ	Ⅳ	ゆがんでいる
202	G－7区土坑	11.6	5.1	6.65	浅黄橙色	良	ナデ（板状圧痕）	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	Ⅳ	ゆがんでいる
203	D－9区			7.5	にぶい橙色､橙色(赤彩)	良	不明（破片のため）	回転ナデ	ナデ	ナデ		内面、外面に赤彩
204	F－6区			9.6	浅橙色、橙色（赤彩）	良	回転ナデ	不明（摩耗）	不明（摩耗）	不明（摩耗）		全面に赤彩がなされるが､摩耗が激しい

第４表　土師器椀観察表



第95図　土師器実測図（2）



第96図　土師器実測図 (3)

Ⅴ類：非常に丸みを帯びた体部をもつもの（194）

蓋（第95図 205･206）

蓋の出土はきわめて少なく、２点のみ掲載した。

205は、口径14.0cm、器高約1.8cmを測る。天井部は残存しないが、その他は回転ナデで仕上げられる。口縁部は軽く折り曲げられる程度である。外面は暗赤褐色、内面は橙色を呈する。

206は、口径17.1cm、器高約1.9cmを測る。天井部はヘラ切り後ナデ、体部外面から口縁部付近は回転ナデ、体部内面はナデで仕上げられる。口縁部付近で屈曲し、端部は丸くなる。

甕（第96図 207～第97図 213）

Ⅰ類：縦長半楕円形の胴部をもつもの

Ⅰ－ａ類．肩部の張りがなく、胴部の膨らみが殆どないもの（207～210）

Ⅰ－ｂ類．肩部の張りがなく、胴部がなだらかに膨らむもの（211･212）

Ⅰ－ｃ類．肩部が強く張り、強くくびれた頸部から口縁部が大きく屈曲し、胴部が膨らむもの（213）

Ⅱ類：器高が低く、口径が大きいもの。74・75（第29図 14号住）、103（第44図 24号住）に見られる、鉢の形態に近いものである。

いずれの形態も、口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメ、体部内面はヘラケズリと調整に関して基本的に違いはない。口縁部の形態は、「く」の字状に屈曲するか、大きく外反するかのいずれかを示すことが多い。

当遺跡に於いては、圧倒的にⅠ類が多く、中でもⅠ－ｂ類が優勢である。

鉢（第97図 214～216　第24図 62）

鉢の出土量は少なく、ここではそれぞれ特徴がまったく異なる４個の遺物をあげることにする。全体的に分類にたえるほどの資料が揃わなかったので、個々の遺物の説明にとどめる。なお、法量、調整等は、「第６表　土師器鉢観察表」を参照のこと。

214は、口縁部の膨らみと、体部外面のカキメが特徴的である。

215は、おそらく深鉢であろう。

216は、大型の坏のようである。胎土や調整も土師器の坏と変わらない。

62は、第10号住居跡から出土し、体部外面のハケメ、内面のヘラケズリなど、土師器の甕に見られる調整がなされる。

【須恵器】坏（第98図 217～230）

大量に出土するが、主に細片のため、比較的残りの良いものを図化し、掲載した。

大体の傾向として、口径12～13cm、器高３～４cmにおさまるものが多い。体部は、多少の差はあるものの、直線的に立ち上がる傾向を示す。調整も、「第７表　須恵器坏・皿観察表」に見られるように、さほどの違いはない。しかしながら、その中にあって、明らかに違う特徴を示すものが数点見られるので、以下それについて簡単に述べることにする。

219～221は、体部が大きく外に開き、底部と体部の境が余り明瞭でないために、不安定な印象を与える。特に220・221は、体部内面から見込みにかけて境がなく、丸くつるんとした感じになる。

逆に227・228は、体部と底部の境が明瞭で、体部は外反して立ち上がる。

230は、底部ヘラ切り後のナデが未調整に見えるほど雑で、全体的に厚ぼったい印象を与える。

皿（第98図 231～233）

出土量が少ないため、３点のみ掲載した。その他、第２号住居跡からも２点（第14図 43･44）出土しているので、併せて述べることにする。

法量は、口径が13～15cm前後の比較的小型のもの（43･231･232）と、17～18cm前後の比較的大型のも

No	出土地点	口径	器高	色調	焼成	口唇部	口縁部外面	口縁部内面	体部外面	体部内面	備考
207	F－6区P	17.7	残高10.95	にぶい橙色～暗褐色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ後ヨコナデ	ハケメ後一部ナデ	ヘラケズリ（右→左）	
208	C－5区	21.6	残高10.2	橙色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	ナデ	ヘラケズリ（右下→左上）後一部ナデ	
209	2231	25.6	残高7.2	浅黄橙色～橙色	良	ヨコナデ	ハケメ後ヨコナデ	ハケメ後ヨコナデ	ハケメ後一部ヨコナデ	ヘラケズリ（右下→左上）	
210	K－7区	25.6	残高17.4	浅黄橙色～橙色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ後ナデ	ヘラケズリ（右下→左上）	口縁部内面と体部内面に赤彩
211	3004,3012	15.8	残高12.7	にぶい橙色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ後ヨコナデ	ハケメ	ヘラケズリ（右下→左上）	体部内面のヘラケズリは摩耗のため単位不明
212	G－7区	23.6	残高16.7	(外)にぶい黄橙色～橙色 (内)浅黄橙色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	摩耗のため不明	ハケメ後頸部にヨコナデ	ヘラケズリ後ナデ	口縁部外面と体部外面に赤彩
213	2959,5966	24.6	残高12.8	橙色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ（頸部）、ハケメ	頸部ヨコナデ後ヘラケズリ（左下→右上）	

第５表　土師器甕観察表

のに分けられる。調整は、「第７表　須恵器坏・皿観察表」に見られるようにさほどの差はないが、231だけは、底部がヘラケズリで仕上げられている。

椀（第99図、100図 272･273）

大量に出土したが、やはり細片が多く、特徴的なものを図示するにとどめた。

法量については、ばらつきがあるため分類はさけた。形態上の特徴によって、以下のように分類を行った。なお、第99図、並びに第８表については、一旦図版を組んだ後に分類を修正したために、大変見づらくなっているのでご了承ください。

まず、体部の立ち上がりについて、

Ⅰ類：直線的に立ち上がるもの

Ⅱ類：外反気味に立ち上がるもの

次に、高台の張り付け位置により、

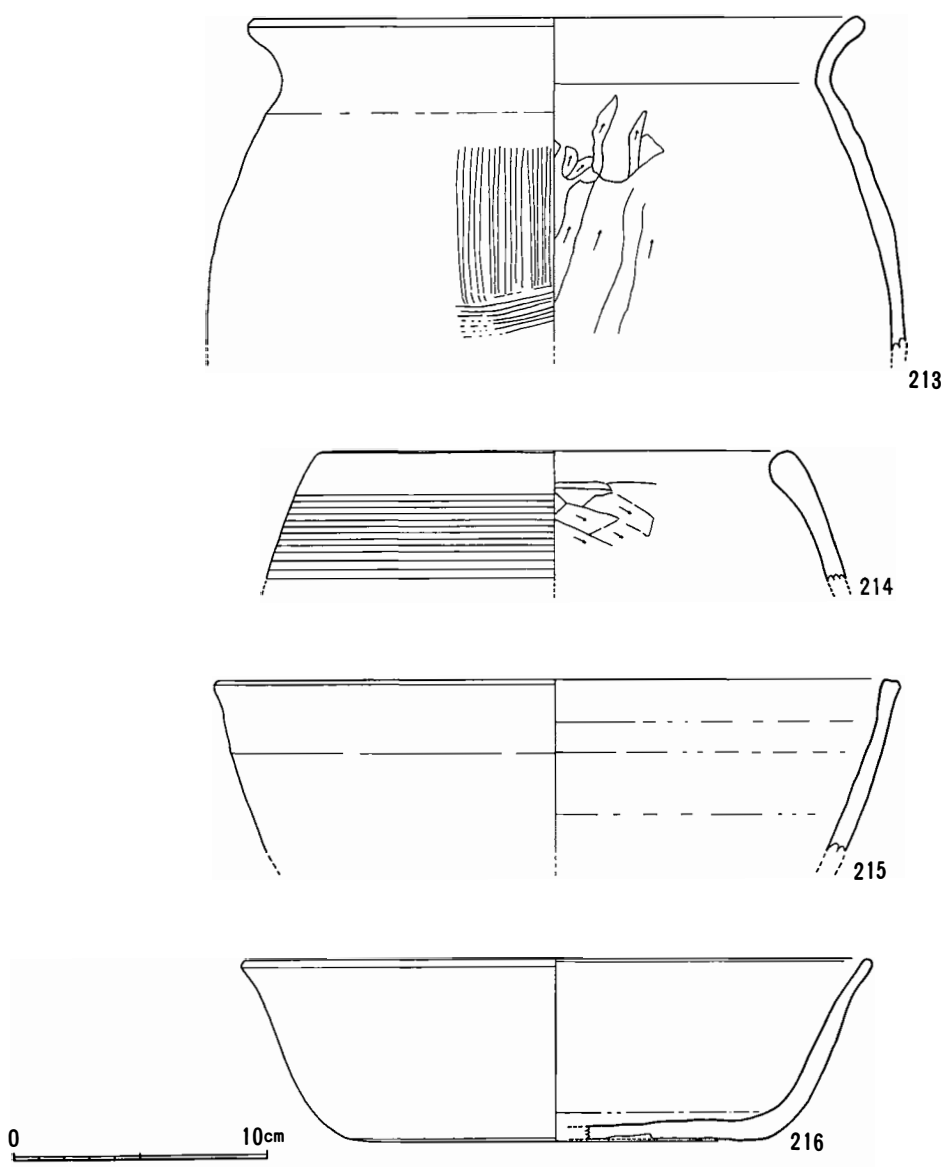
①外底部周縁よりかなり内側に張り付けるもの

②外底部周縁よりやや内側に張り付けるもの

③外底部周縁に張り付けるもの

No	出土地点	口径	器高	底径	色調	焼成	口縁部	体部外面	体部内面	底部	見込み	備考
214	H－７区	18.0	残高5.15		にぶい赤褐色	良	ヨコナデ	カキメ	ヘラケズリ			カキメは間隔・向きが不規則
215	2137,2140	27.3	残高6.8		橙色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ			おそらく全面に赤彩
216	H－７区	25.2	7.2	16.7	にぶい赤褐色、赤褐色(赤彩)	良	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	回転ナデ後ナデ	

第６表　土師器鉢観察表



第97図　土師器実測図（4）

最後に、高台の断面形、及び形態により、

a：方形を呈するもの
- 基部がくびれる（234）
- 外面がほぼ垂直で、内面が内弯（242～244）
- 外面が「く」の字で、底部は全面接地（237）、内側接地（238）、外側接地（240）
- 凹形で（241・245）、「ハ」の字に開く（241・262）
- 逆「ハ」の字にすぼまる（259）

b：扁平な方形を呈するもの
- 基部がくびれ、内側接地（235）、外側接地（236・255）
- 基部はくびれず（254・258）、凹形（250・257）、内側接地（252）、外側接地（256・270）

c：逆台形を呈するもの（246～249・251）

d：細身のやや高い高台が「ハ」の字につくもの（265～268）

e：全体に丸みを持つ細い高台が外弯するもの（261）

f：全体に丸みを持つ太いもの（264・269）

g：端部が丸いもの（263）

h：半円形を呈するもの（272）

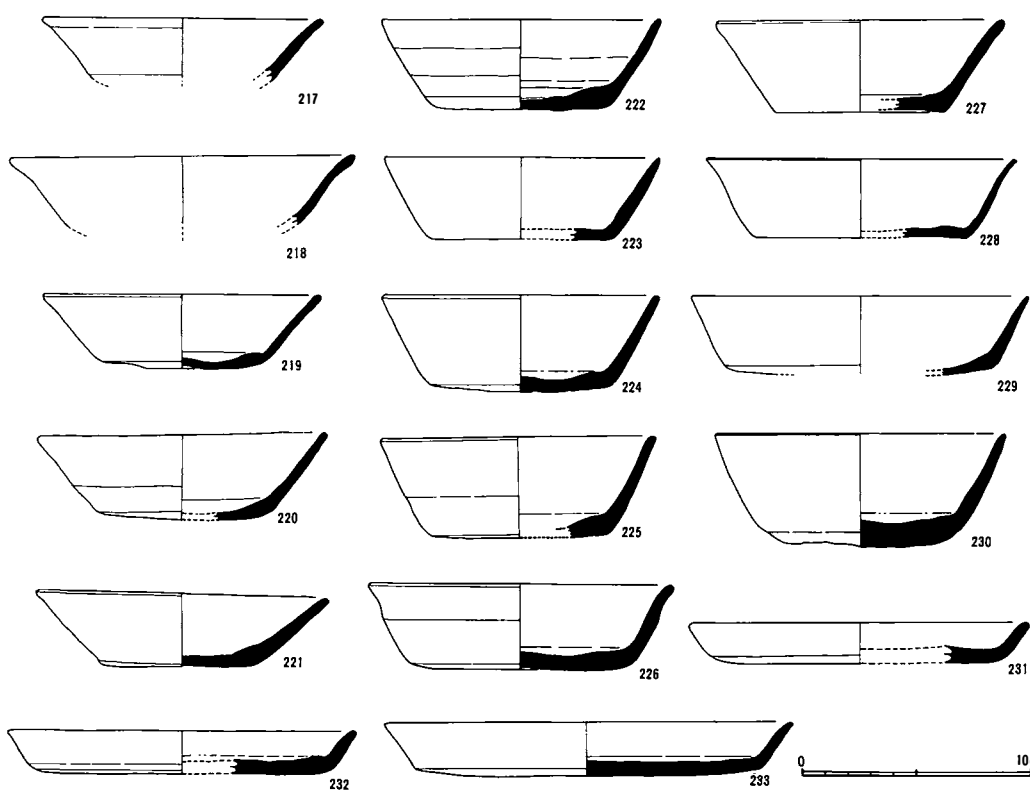
i：丸みを帯びた逆三角形を呈するもの（273）

以上のような分類となる。

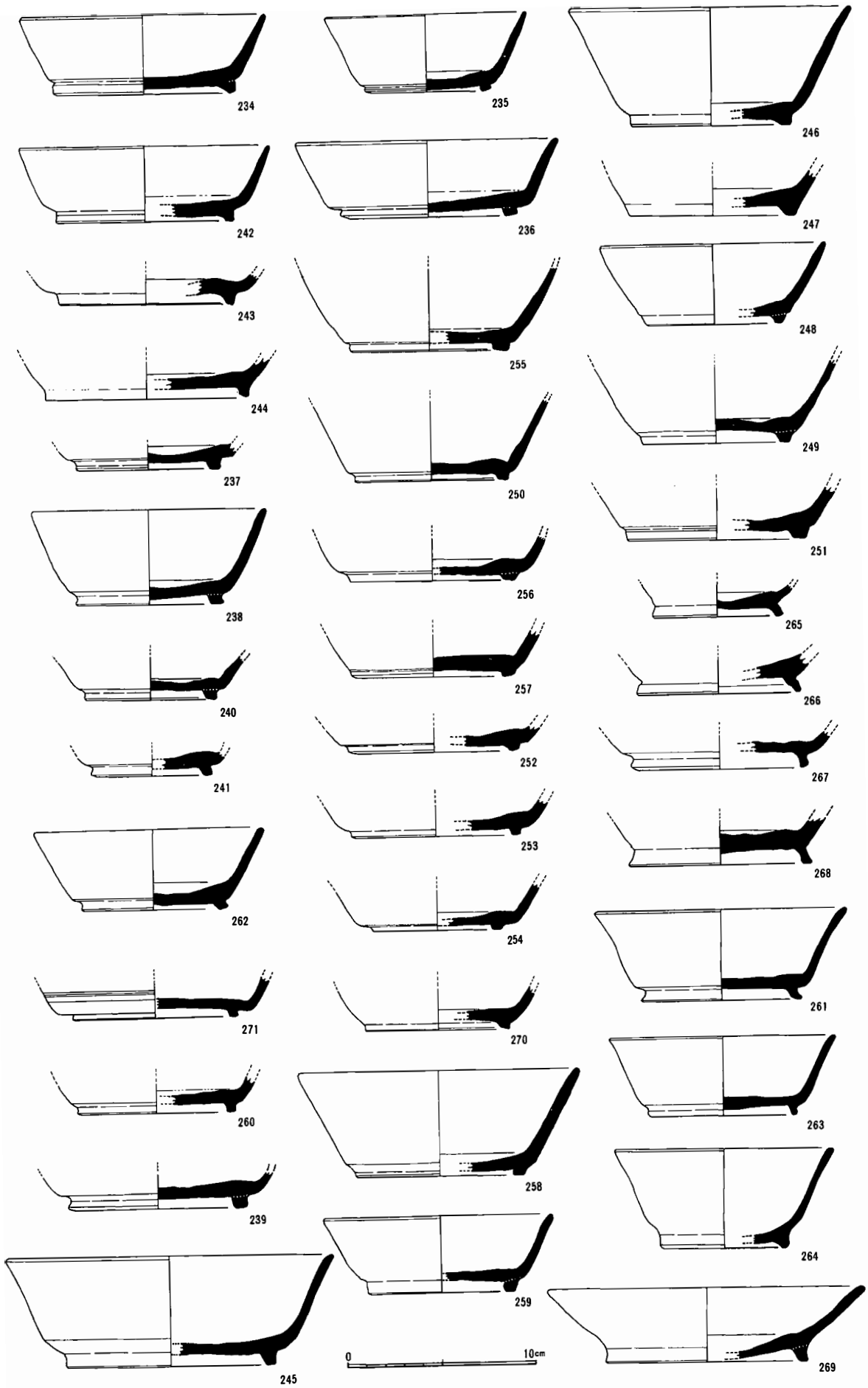
この3つの分類のうちでの、組み合わせの確率は、単純に数えればⅠ－②－a、即ち直線的に立ち上がる体部を持ち、高台は断面形が方形で、外底周縁部のやや内側につく、という器形が優勢ということになるが、そう結論づけるには、資料不足といえるだろう。

No	器種名	出土地点	口径	器高	底径	色調	焼成	調整(底部)	体部外面	体部内面	見込み	備考
217	坏	F－7区	12.4			黄灰色	良		ナデ、回転ナデ	回転ナデ		
218	坏	H－7区P	15.2			黄灰色	良		ナデ、回転ナデ	回転ナデ		
219	坏	H－7区	12.2	3.2	7.2	黄灰色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	
220	坏	K－6区	12.7	3.7	7.7	黄灰色	良	ナデ	回転ナデ後ナデ	回転ナデ	ナデ	
221	坏	E－6区P	12.9	3.2	7.0	黄橙色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	土師質
222	坏	I－7区	12.4	3.9	7.6	(外)黄灰色(内)灰白色	良	ナデ	回転ナデ後ナデ	回転ナデ後ナデ	回転ナデ	内面の所々にヘラ先痕、体部下部にヘラケズリ
223	坏	F－6区P	12.2	3.55	7.7	黄灰色	良	ナデ	ナデ	回転ナデ	ナデ	
224	坏	E－10区	12.4	4.2	8.1	灰色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	体部下部にヘラケズリ
225	坏	H－7区	12.3	4.35	7.8	灰色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	体部下部は回転ナデ後ナデ
226	坏	2679	13.6	3.7	10.1	黄灰色～灰白色	普通	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	
227	坏	H－5区P	12.7	4.0	7.6	灰白色（一部灰色）	不良	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
228	坏	C－6区	13.6	3.4	9.2	黄灰色	普通	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
229	坏	I－9区	14.8	約3.4	11.8	黄灰色（一部灰色）	不良	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	土師質
230	坏	H－7区,4949	12.8	4.9	8.25	灰色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	底部のナデは未調整に見えるほど雑
231	皿	I－9区	15.0	1.75	12.0	灰色	良	ヘラケズリ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	
232	皿	F－10区	15.4	1.9	13.2	灰色	不良	ナデ	回転ナデ	ナデ	ナデ	
233	皿	3708	18.1	2.4	15.5	黄灰色	良	ナデ	ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	

第7表　須恵器坏・皿観察表



第98図　須恵器実測図（1）



第99図　須恵器実測図（2）

No	出土地点	口径	器高	高台径	色調	焼成	調整(底部)	体部内面	体部内面	見込み	分類	備考
234	6092	13.0	4.1	9.6	灰色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	Ⅰ ② a	
242	2452	13.2	3.95	9.4	灰色	良	ケズリ後回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	Ⅰ ② a	
243	1704			9.2	黄灰色～灰色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	② a	体部外面から底部にかけて部分的に自然釉
244	3984			10.7	(外) 暗灰色 (内) 黄灰色	普通	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	③ a	体部外面に自然釉
237	J－7区			7.6	黄灰色	良	回転ナデ			ナデ	① a	底部破片のため体部の調整不明
238	H－7区P	12.4	4.9	7.8	灰色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	Ⅰ ② a	
240	2329,2474			7.0	灰色	普通	ナデ	回転ナデ後一部ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	② a	
241	1695			6.4	灰色、青灰色 (釉)	良	ナデ	回転ナデ		ナデ	② a	体部外面から高台底部にかけて自然釉
262	I－10区	12.2	4.25	7.8	(外)浅黄色～灰色(内)浅黄色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ(一定方向)	Ⅰ ② a	
271	4242			8.7	灰色	普通	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	① a	体部外面下部に沈線かカキメ
260	1748			8.4		良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	② a	
239	1682,1691			9.5	灰色	良	ナデ	ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	② a	
245	I－9区	17.4	5.8	11.1	灰白色	普通	ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	Ⅱ ② a	
259	H－7区,2332,2333	12.25	4.1	7.85	黄灰色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	Ⅱ ③ a	
235	6266～6269	10.8	4.05	6.7	灰色	良	ナデ	ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	Ⅰ ② b	
236	2356,2902	14.0	4.0	9.4	灰色	良	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	Ⅱ ① b	体部外面に薄く自然釉
255	G－6区,947			8.5	灰色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	Ⅰ ② b	
250	E－6区P			8.2	灰色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	Ⅰ ② b	
256	F－6区P			8.9	灰色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	② b	底部に同心円状に細い工具痕、体部外面に自然釉
257	1594			8.7	黄灰色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	③ b	
252	H－6区			9.1	灰色	良	ナデ	ナデ	回転ナデ	ナデ	② b	
253	1670			9.0	灰色	普通	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	② b	
254	I－7区			6.8	灰色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	① b	
270	71,72			7.7	灰色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	③ b	
258	2433	15.0	5.45	9.0	淡黄灰色	普通	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	Ⅱ ③ b	
246	H－7区,2453,2459,2460	14.8	6.15	8.4	灰色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	Ⅱ ② c	
247	1728			8.8	灰色	良	ナデ	ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	③ c	
248	F－11区	11.8	4.2	7.2	灰色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	Ⅰ ③ c	
249	4661			7.6	(外) 灰褐色 (内) 暗赤褐色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	Ⅰ ③ c	
251	2703			9.4	灰色	普通	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	② c	
265	1715			6.85	灰色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	③ d	
266				8.6	(外) 赤褐色 (内) 灰色	良	回転ナデ	回転ナデ		ナデ	③ d	体部外面、高台内外面、底部に自然釉
267	63			9.2	灰色～灰白色	良	ナデ、回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	② d	
268	1638			9.6	灰色	良	回転ナデ	ケズリ後回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	③ d	
261	4856,4857	13.2	4.7	8.4	灰色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	Ⅱ ② e	
263	6045	11.85	4.1	7.85	灰色、赤褐色 (自然釉)	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	Ⅱ ③ g	体部外面から底部に自然釉
264	2828	11.5	5.2	6.8	灰色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	Ⅱ ③ f	
269	F－6区P	16.7	3.9	10.6	灰白色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	Ⅰ ③ f	
272	2827	11.0	3.05	7.0	灰色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	Ⅱ ① h	体部外面から底部にかけて自然釉
273	5602	15.4	5.85	9.2	(外) 灰色 (内) 黄灰色	普通	ナデ、回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	Ⅱ ③ i	

第8表　須恵器椀観察表

No	出土地点	口径	器高	分類	焼部	色調	焼成	つまみ部・天井部外面	天井部内面	体部外面	体部内面	口縁部	備考
274	1673,1674	12.6	1.85	Ⅰ	a	灰色	良	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ後ナデ	回転ナデ	口縁部付近内外面に自然釉
275	F－9区	16.6	3.4	Ⅰ	c	灰色	良	回転ナデ	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	ナデ	回転ナデ	
276		17.4	2.4	Ⅰ	c	灰色	良	回転ナデ	回転ナデ	ヘラケズリ後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
284	4953	14.7	71.25	Ⅰ	f	灰色	良	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	ケズリ後回転ナデ	回転ナデ後ナデ	回転ナデ	
285	1238	13.6	2.2	Ⅰ	g	灰色	良	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	ヘラケズリ	回転ナデ後ナデ	回転ナデ	
286	4406	16.8	3.3	Ⅰ	i	灰オリーブ色	良	回転ナデ	ナデ	ヘラケズリ	ナデ	回転ナデ	
280	I－7区P	14.8	1.7	Ⅱ	d	灰色	良	不定方向のヘラケズリ	ナデ	回転ナデ	ナデ	回転ナデ	谷型の器形
282	2406	13.8	1.1	Ⅱ	f	黄灰色	良	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ後ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	回転ナデ	
289	2455,2457	15.0	1.75	Ⅱ	i	灰色	良	未調整	回転ナデ後ナデ	ナデ	回転ナデ後ナデ	回転ナデ後一部ナデ	
277	4958	14.6	約2.9	Ⅲ	b	灰褐色	普通	ヘラケズリ	回転ナデ後ナデ	ヘラケズリ	回転ナデ後ナデ	回転ナデ	
278	2842	15.0	約1.25	Ⅲ	e	灰色	良	ヘラ切り後ナデ	ナデ	回転ナデ後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	内面の一部に自然釉
288	I－9区	16.9	約1.5	Ⅲ	h	黄灰色	良			ケズリ後回転ナデ、ヘラケズリ	ナデ	回転ナデ	
287	4420	14.7	約1.2	Ⅲ	i	灰オリーブ色	良	ヘラケズリ	ナデ	ヘラケズリ	ナデ	回転ナデ	
279	F－11区	15.0		Ⅳ	f	灰色	良			ナデ	ナデ	回転ナデ	口縁部外面に自然釉
283	4946	13.4		Ⅳ	f	灰色	普通			ヘラケズリ	回転ナデ	回転ナデ	
281	1918	18.6		Ⅳ	g	(外)灰白色(内)にぶい赤褐色	良			自然釉付着のため不明	回転ナデ	回転ナデ	全面に自然釉

第9表　須恵器蓋観察表

蓋（第100図 274～289）

まず、天井部の形態と、残存状況から以下のように分類する。

Ⅰ類：天井部につまみを持つもの

Ⅱ類：天井部につまみを持たないもの

Ⅲ類：天井部を欠損するためつまみの有無が不明のもの

Ⅳ類：つまみの有無、及び器高が不明のもの

さらに、口縁部の形態により、次のように分類する。

a：口縁部の屈曲が見られず、内面に見受けの段を持たないもの（274）

b：口縁部の屈曲が見られず、下方に内弯気味にカーブを描き、端部は丸く終わるもの（277）

c：口縁部が内方に屈曲するもの（275・276）

d：口縁部が外方に屈曲するもの（280）

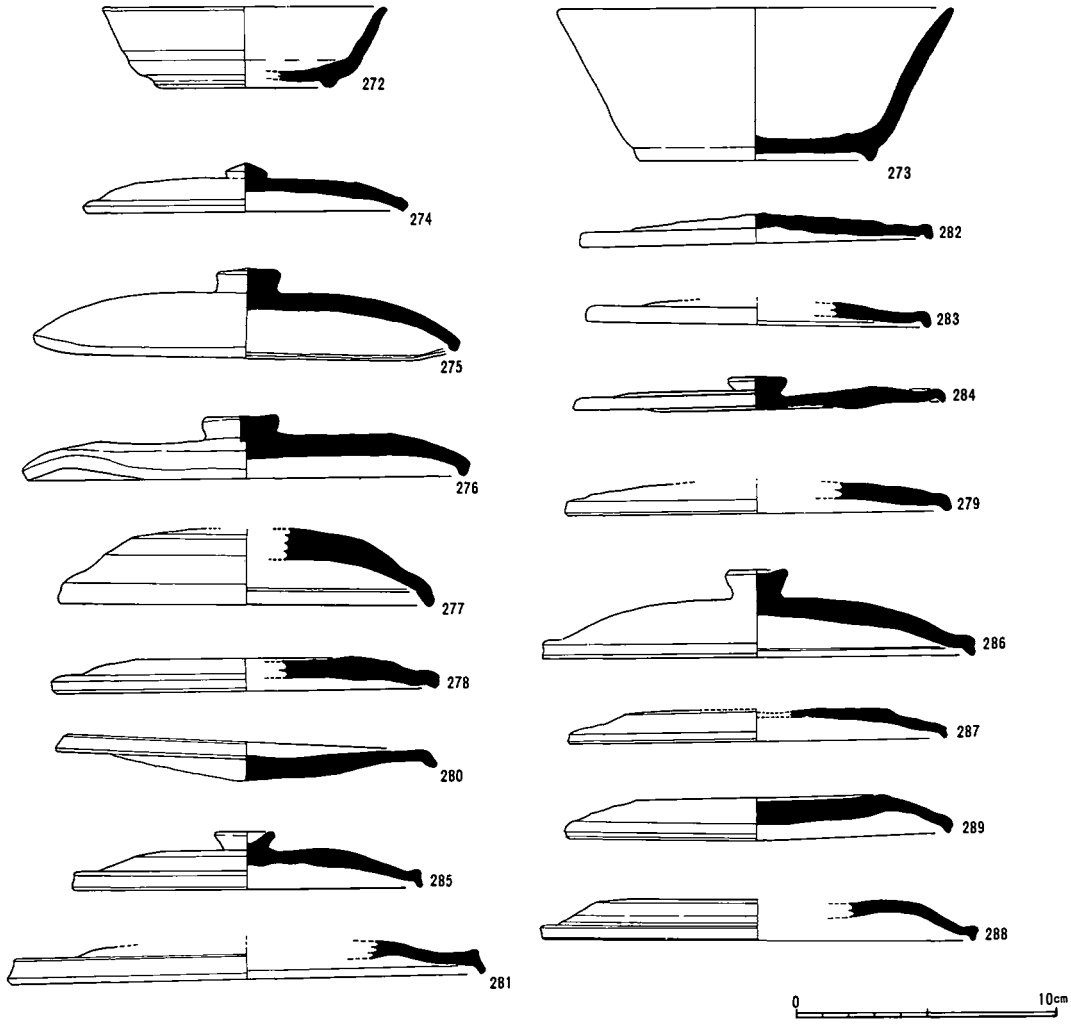
e：口縁部が端部近くで屈曲し、端部が丸いもの（278）

f：口縁部が端部近くで屈曲し、端部がやや外向きに終わるもの（279・282～284）

g：fの形態で、端部外面に明確な稜をなすもの（281・285）

h：口縁部が端部近くで屈曲し、端部は内方に屈曲するもの（288）

i：端部が外反気味に小さく突出するもの（286・287・289）



第100図　須恵器実測図（3）

壺（第101図 290・291・293・295・298・299）

形態上より以下のように分類できる。なお、法量、調整等については、「第10表　須恵器壺・鉢・甕観察表」を参照のこと。

Ⅰ－a類：平底の底部に高台がつくもの(291・295)

Ⅰ－b類：丸底の底部に高台がつくもの（293）

Ⅱ－a類：長頸のもの（290・298・89）

Ⅱ－b類：短頸のもの（77）

Ⅲ類：突帯付きのもの（299）肩部から胴部にかけて2本の突帯がめぐり、胴部の突帯が最大胴径となる。口頸部は残存しないが、おそらくラッパ状に開くものと思われる。

鉢（第101図 294・296・297）

出土数はきわめて少なく、分類は行わなかった。主な特徴として、296は、底部外面に指頭圧痕が残る。297は、体部外面下部の一部にヘラケズリ痕が残る。

甕（第101図 300・301　第102図）

形態上から2つに分類できる。

Ⅰ類：口頸部が短いもの（300～302）

300は、特に強く口頸部が外反する。

301は、口頸部が垂直に立ち上がって外反する。

302は、殆ど頸部がないほど短い。

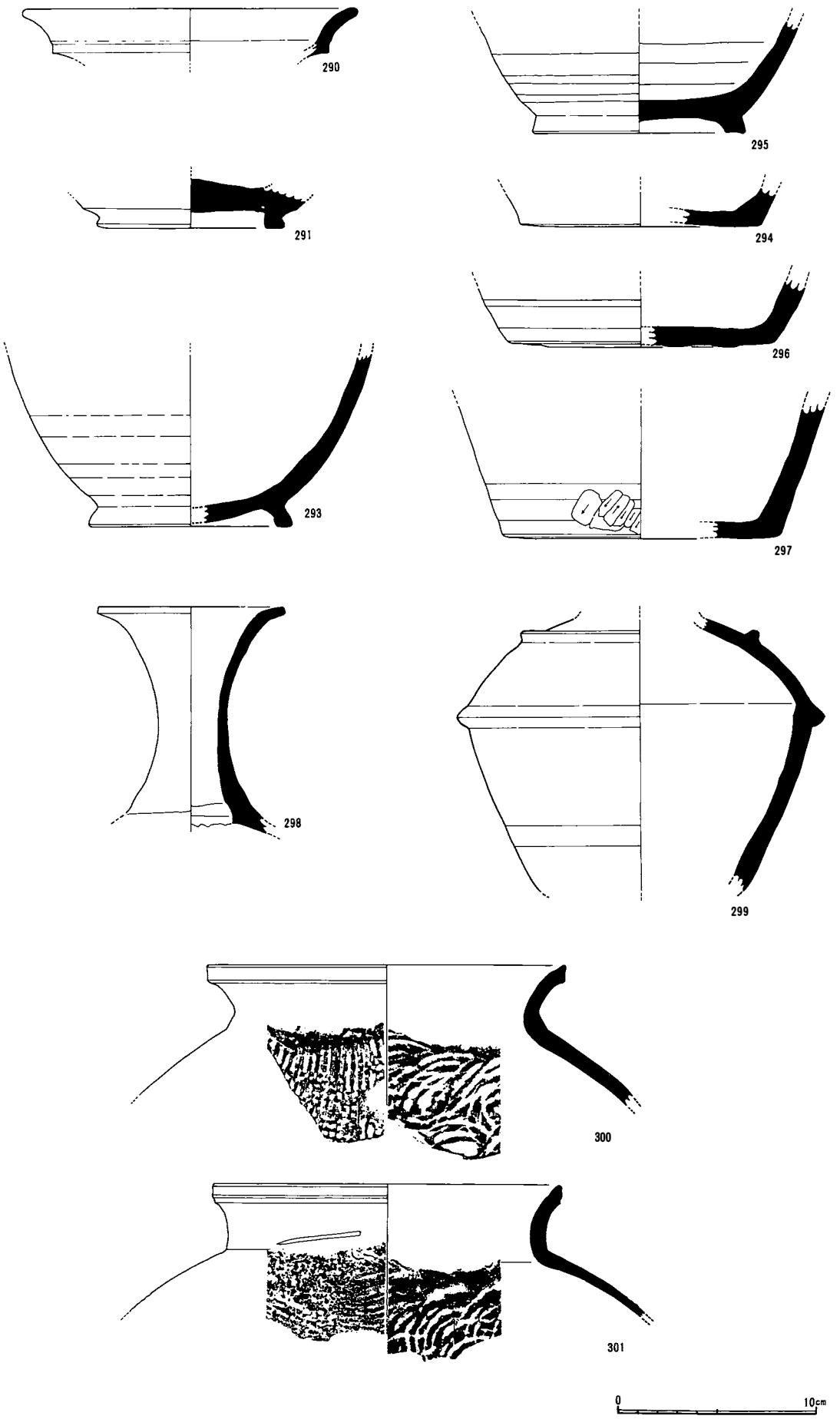
Ⅱ類：口頸部が長く、大型のもの（303～305）

303は、この中では小型で、雑な櫛描波状文が施される。

305は、頸部内面上部にカキメが施されるのが特徴である。

【黒色土器】（第103図 306～310）

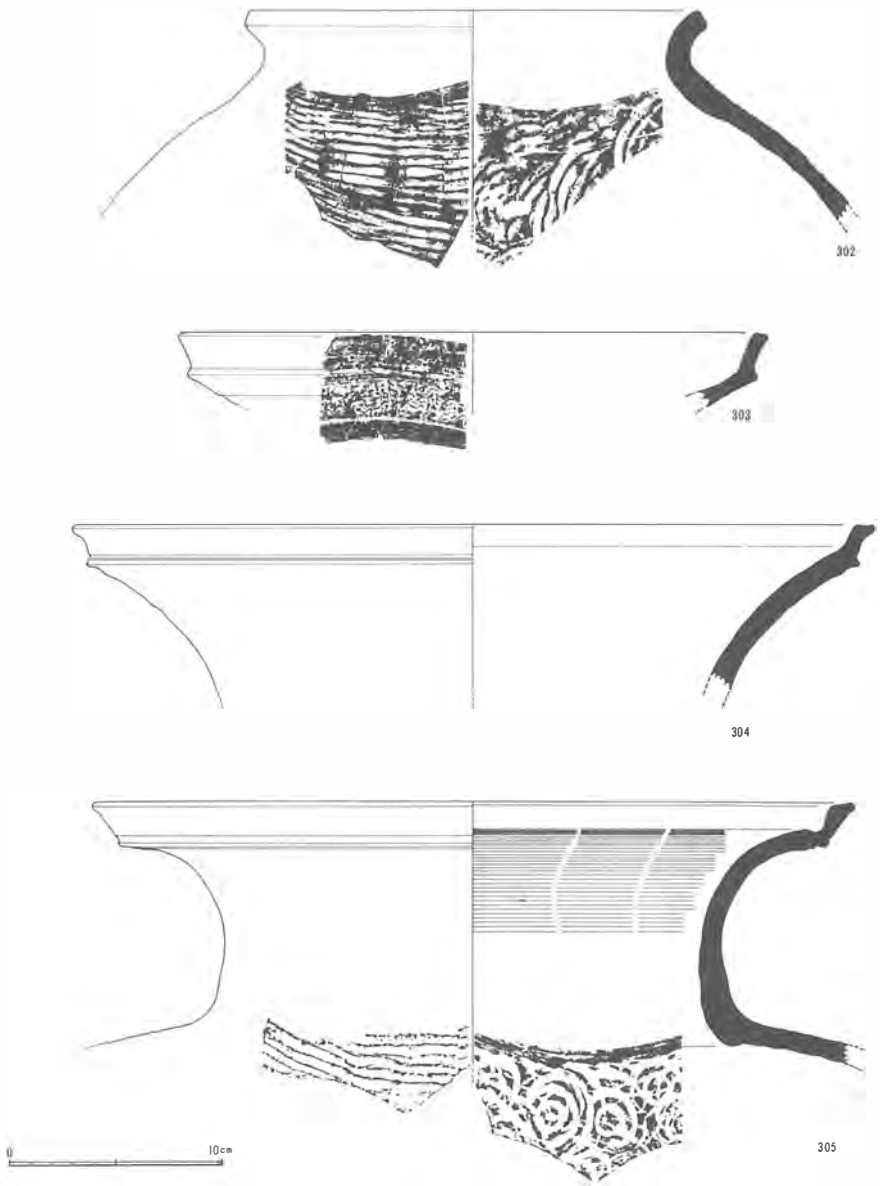
黒色土器は、主に内面黒色のA類が出土し、両面黒色のB類は、第1号溝遺構から口縁部破片が1点出土するのみである。器種は、第4号住居跡から坏が1点出土する以外は、全て椀である。高台形は、丸みを帯びた断面逆三角形のものが殆どであるが(307・308・310)、中に全体に丸みを帯びた高い形のもの（309）も見られる。調整は、体部内面にヘラミガキがなされるもの（306・309・310）と、そうでないものが見られる。



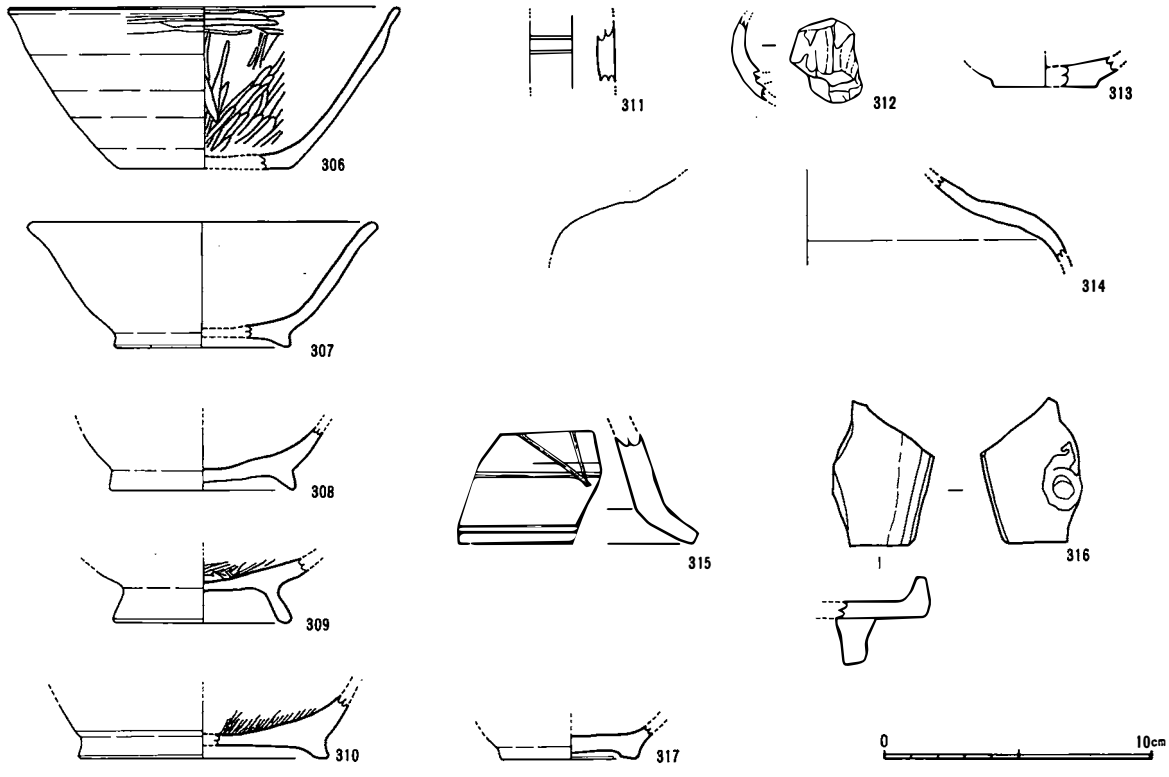
第101図　須恵器実測図（4）

No.	器種名	出土地点	口径	器高	底・高台径	色調	焼成	(調整) 口縁外部	口縁内部	体部外面	体部内面	見込み	底部	分類	備考
290	壺	1895	17.0	残高2.4		黄褐色	良	回転ナデ	回転ナデ					Ⅱ	口縁部のみの小破片
291	壺	2408		残高2.4	9.5	灰色	良			ヘラケズリ		ナデ	ナデ、指頭圧痕	Ⅰ	
293	壺	H-7区,2417,2418		残高8.6	10.3	黄灰色	良			ケズリ後回転ナデ	ナデ(不定方向)	ナデ(不定方向)	ケズリ後ナデ		
294	鉢	1650		残高1.7	12.2	(外)黄灰色 (内)黄橙色	良			回転ナデ	回転ナデ	ナデ	回転ナデ	Ⅰ	
295	壺	2377		残高5.4	10.8	灰色	良			ヘラケズリ後回転ナデ	ナデ	ナデ	回転ナデ		
296	鉢	78		残高3.3	13.6	灰色	良			回転ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ	ナデ	ケズリ後ナデ、ナデ(指頭圧痕)	Ⅰ	
297	鉢	Ⅰ-11区		残高6.7	14.1	灰色	良			回転ナデ、ケズリ後回転ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ		
298	壺	6199	9.5	残高10.6		灰白色	良	回転ナデ(頸部外面)	ナデ(頸部内面)					Ⅱ	長頸壺
299	壺	H-7区	胴径18.6	残高13.55		灰白色～灰色	普通			回転ナデ、ケズリ後回転ナデ	回転ナデ			Ⅲ	突帯付胴張壺
300	甕	C-6区P	18.4	残高6.6		オリーブ灰色～灰色	良	回転ナデ	回転ナデ	格子目タタキ	同心円文タタキ後ナデ			Ⅰ	
301	甕	G-6区P	17.9	残高6.7		(外)オリーブ灰色～オリーブ黒色 (内)にぶい赤褐色～オリーブ褐色	良	回転ナデ	回転ナデ	タタキ後回転ナデ、タタキ(平行・格子目)	ナデ、同心円タタキ後回転ナデ			Ⅰ	
302	甕	2724	22.0	残高9.75		灰色	良	回転ナデ	回転ナデ	タタキ後回転ナデ、平行タタキ	ケズリ後回転ナデ 同心円タタキ後回転ナデ 同心円タタキ後ナデ			Ⅰ	
303	甕	4437	28.0	残高3.4		灰色	良	回転ナデ	回転ナデ	雑な波状文	回転ナデ			Ⅲ	
304	甕	2498	38.0	残高7.7		(外)灰赤色 (内)淡黄色～暗褐色	良	回転ナデ	回転ナデ	タタキ後回転ナデ、タタキ後ナデ	回転ナデ			Ⅲ	全体に自然釉
305	甕	6289	36.2	残高12.25		(外)灰オリーブ～暗オリーブ、極暗褐色 (内)灰オリーブ、暗赤褐色	良	回転ナデ	回転ナデ	格子目タタキ後回転ナデ、平行タタキ後回転ナデ 平行タタキ	カキメ、ナデ、同心円タタキ			Ⅱ	

第10表　須恵器壺・鉢・甕観察表



第102図　須恵器実測図 (5)



第103図　その他の土器実測図

No	器種名	出土地点	口径	器高	高台(底)径	色調	焼成	調整(底部)	体部外面	体部内面	見込み	備考
306	坏	4号住	14.8	6.0	6.5	(外)にぶい橙色(内)黒色	良	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
307	椀	2939	13.2	4.7	6.6	(外)にぶい橙色(内)黒色	良	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	
308	椀	1084			7.0	(外)淡橙色(内)黒色	普通	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	高台外面に赤彩(橙色)
309	椀	2110			6.7	(外)にぶい橙色(内)黒色	良	ナデ	回転ナデ		ヘラミガキ	
310	椀	E－8区			9.4	(外)にぶい橙色(内)黒色	良	回転ナデ	ヘラケズリ		ヘラミガキ	

第11表　黒色土器観察表

【彩釉陶器】(第103図 311～314)

二彩が1点、緑釉が3点出土した。以下、個々について述べる。

311は、二彩の浄瓶である。細頸の頸部の一部のみ残存する。二条の沈線がめぐる。釉は、軟質で剝離が著しいが、緑色と白色が残る。

312は、緑釉の壺である。把手の体部への張り付け部分が残存する。把手の内面はヘラケズリがなされる。硬質で黄緑色を呈する。

313は、緑釉の壺である。円盤状の高台をもつ底部のみ残存する。高台径は3.9cmを測る。硬質で明黄緑色を呈する。

314は、緑釉の壺である。肩部のみ残存する。軟質で暗黄緑色を呈する。

【陶硯】(第103図 315･316)

須恵器の硯が2点出土した。

315は、円面硯の脚部である。外面にヘラによる沈線の文様が見られるが、或いは透かしが文様化したものか。外面は淡赤褐色、内面は淡赤褐色から灰色を呈する。

316は、風字硯の脚部である。厚さ0.8～1.5cm、高さ1.7cmの円柱状の脚と、硯尻部の一部が残存する。側縁部は折り曲げた後ヘラケズリ、その後全体をナデて仕上げられる。焼成は須恵質で良好である。

【青磁】(第103図 317)

第1号溝遺構出土の越州窯青磁の碗である。底部のみ残存し、残存部分には全面施釉がなされる。たたみつき部分に目痕が残る。焼成は良好で、釉は緑灰色、露胎は灰色を呈する。　(川俣)

(3) 文字資料(墨書、篦描等)（第104～109図）

当遺跡で確認された文字資料は、135点を数える。内訳としては、墨書土器が131点、篦描き土器が3点、そして滑石製の紡錘車に鋭利なもので刻まれたものが1点である。本項では、これらを一括し、「文字資料」として、このうちの代表的な81点を、図化し掲載した。

さて、確認された文字資料を、簡単に分類すると、次のようになると思われる。

①文字の書かれたもの

ａ．吉祥句

ｂ．方角を示すもの

ｃ．施設を示すもの

ｄ．仏教関係

ｅ．地名らしいもの

ｆ．人を示すもの

ｇ．その他の文字

②符号のようなもの

③文字か符号か判明しないもの

①文字の書かれたもの

〈ａ．吉祥句〉（第104図）

320～322が吉祥句と思われる遺物である。

320は、丁寧に回転ヘラミガキを行い赤彩をほどこした土師器の坏で、底部に「賀」の字を記している。儀礼など特別な用途に使用された器であると思われる。

321は、須恵器の坏に特殊なくずしで「益成」の２字を記したものである。土器の底部の調整が粗いため、文字もやや乱れている。

322は、壺の胴部外面に横向きに「真吉」の文字を記したものである。かなり文字を書き慣れた人の字体で、見事な筆跡である。焼成前の土器に、鋭利な先端を持つ針状の工具で、細身の文字を記している。なお、この土器は、土師器とも須恵器とも判明しないもので、色調や胎土は土師器のそれであるが、内面の調整はたたき痕や篦削りを併用するなど、両者の技法が混在している。

〈ｂ．方角〉（第105図　323～325．327）

「東」が３点、「南」が１点それぞれ確認されている。

323は、土師器椀の底部に「東」の１文字を記している。

325は、器種は判別しないが、土師器の体部に「東」と記している。

327は、土器の破損のため文字が乱れるものの、土師器坏の体部に、「東」と記したものと判読している。

324は、須恵器坏の底部に「南」の１文字を記したもので、１点のみの確認である。

〈ｃ．施設〉（第105図　326．328～331）

「家」が１点、「厨」「門」それぞれ２点、「井」１点を確認している。

326は、須恵器の底部に「家」と記している。かなり手慣れた筆跡に見える。

328は、須恵器坏の底部に「厨」の１文字を記している。

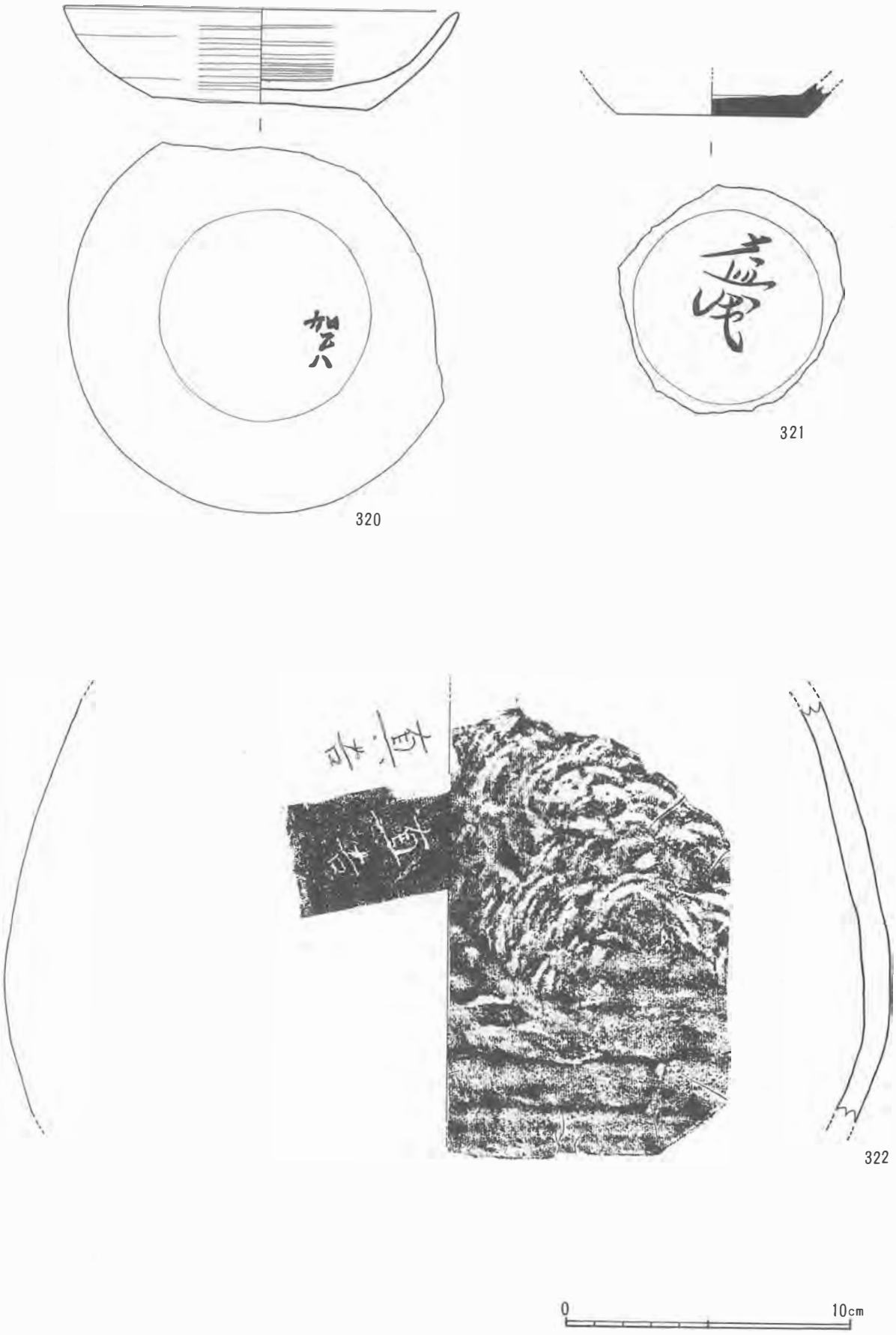
329は、土師器坏の底部に特有のくずしで「厨□」と記している。２文字目は、欠損のため判明しない。330．331ともに「門」の文字を記すが、いずれも欠損のため、文字の片側のみを残している。330は須恵器椀、331は須恵器坏に記したものである。

また、実測図は別に掲載するが、第127図の510は、滑石製紡錘車の平坦面に「井」の文字を刻んだものである。ここでは、便宜的に施設を示す「井」と分類したが、魔除けの護符として使用された可能性が高い。

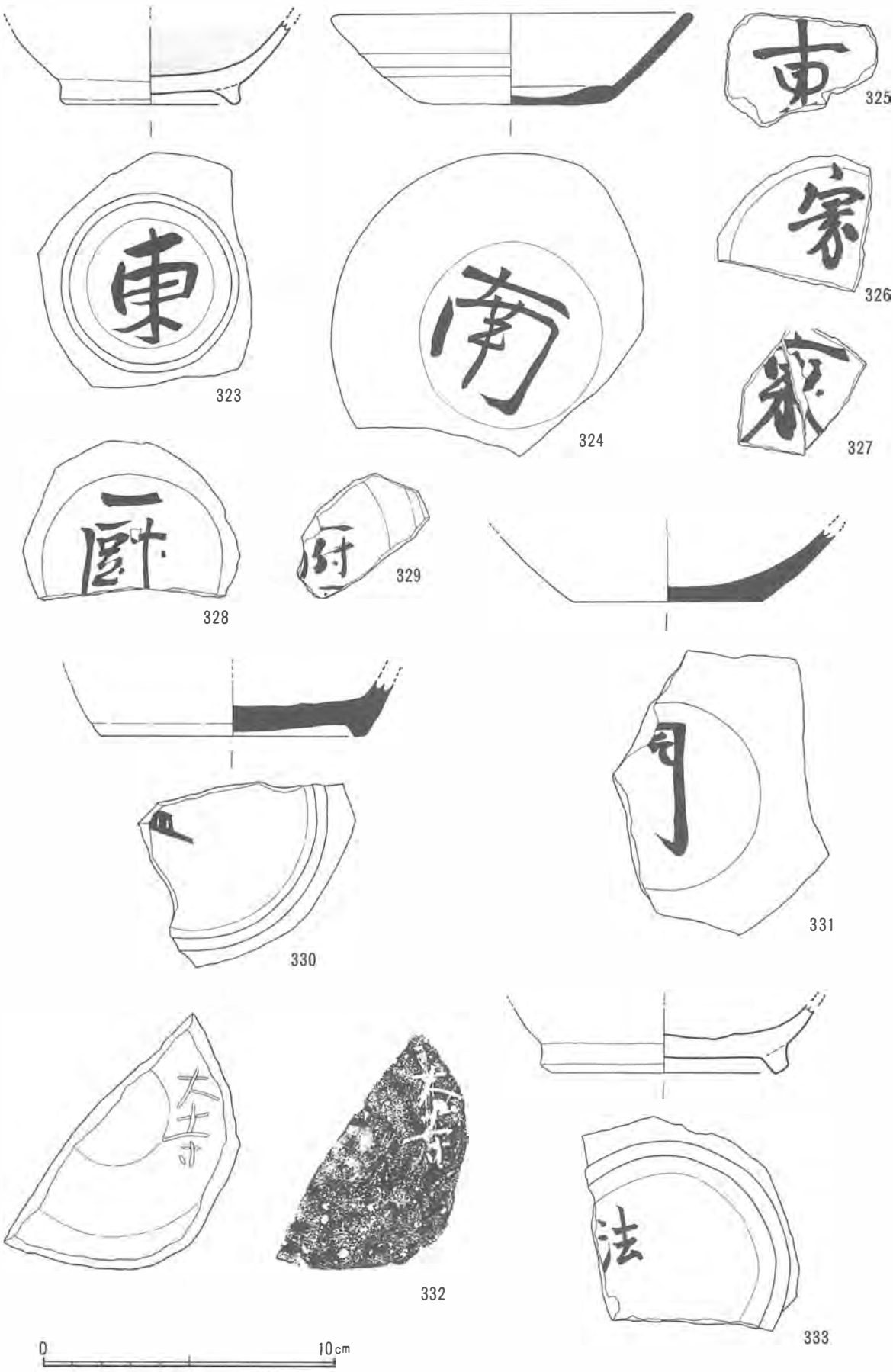
〈ｄ．仏教関係〉（第127図　332．333）

333は、「法」の一字を土師器椀の底部に記したものである。

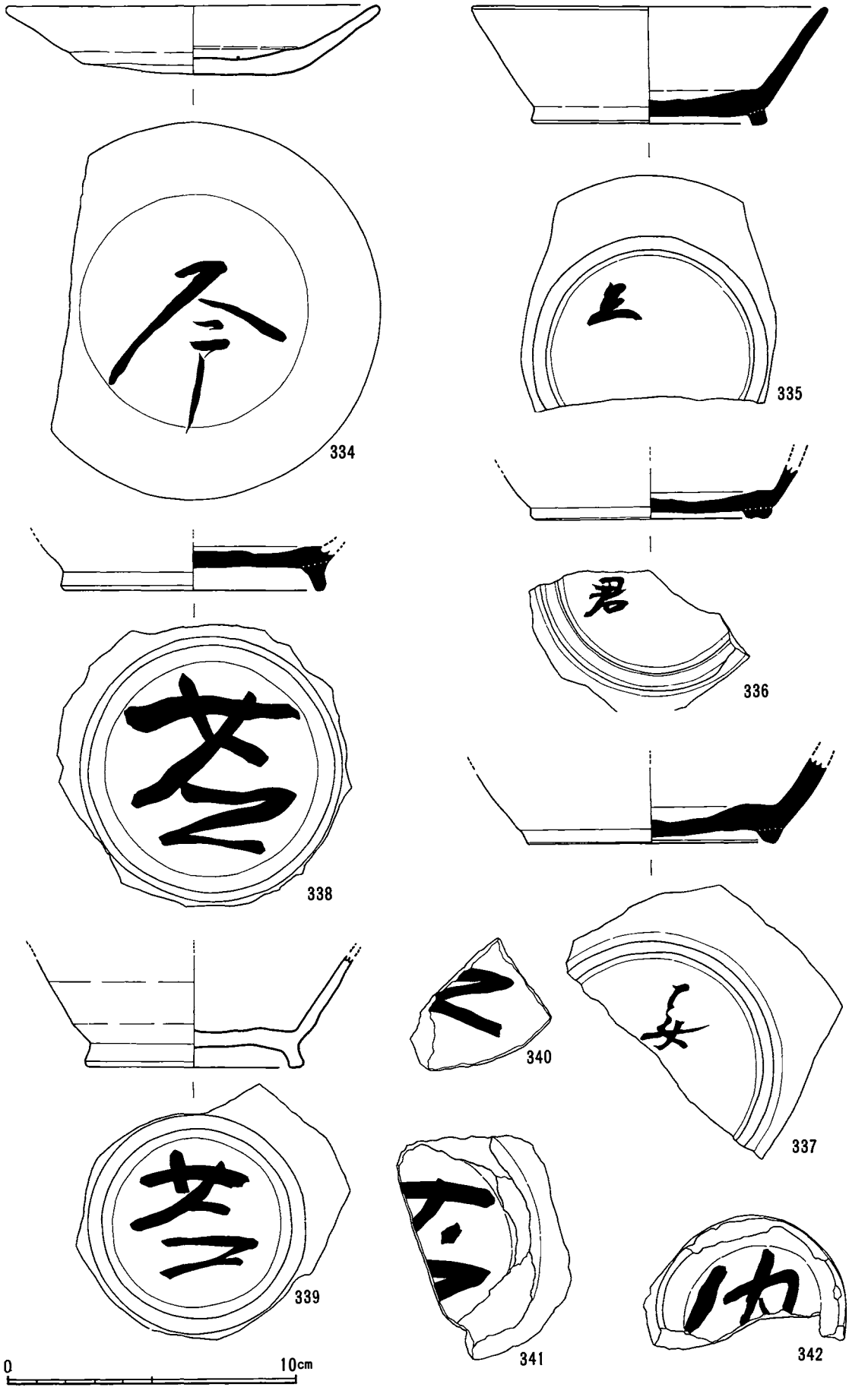
332は、「大寺」の文字を、焼成前の須恵器の鉢らしき底部内面に、篦等の工具で刻んだものである。もともとこの土器が、寺院の備品として製作されたことを示すものと考えられる。当遺跡の近くには、国分僧寺、国分尼寺、水前寺廃寺等が所在しており、これらの施設との関係につき注目されるところであ



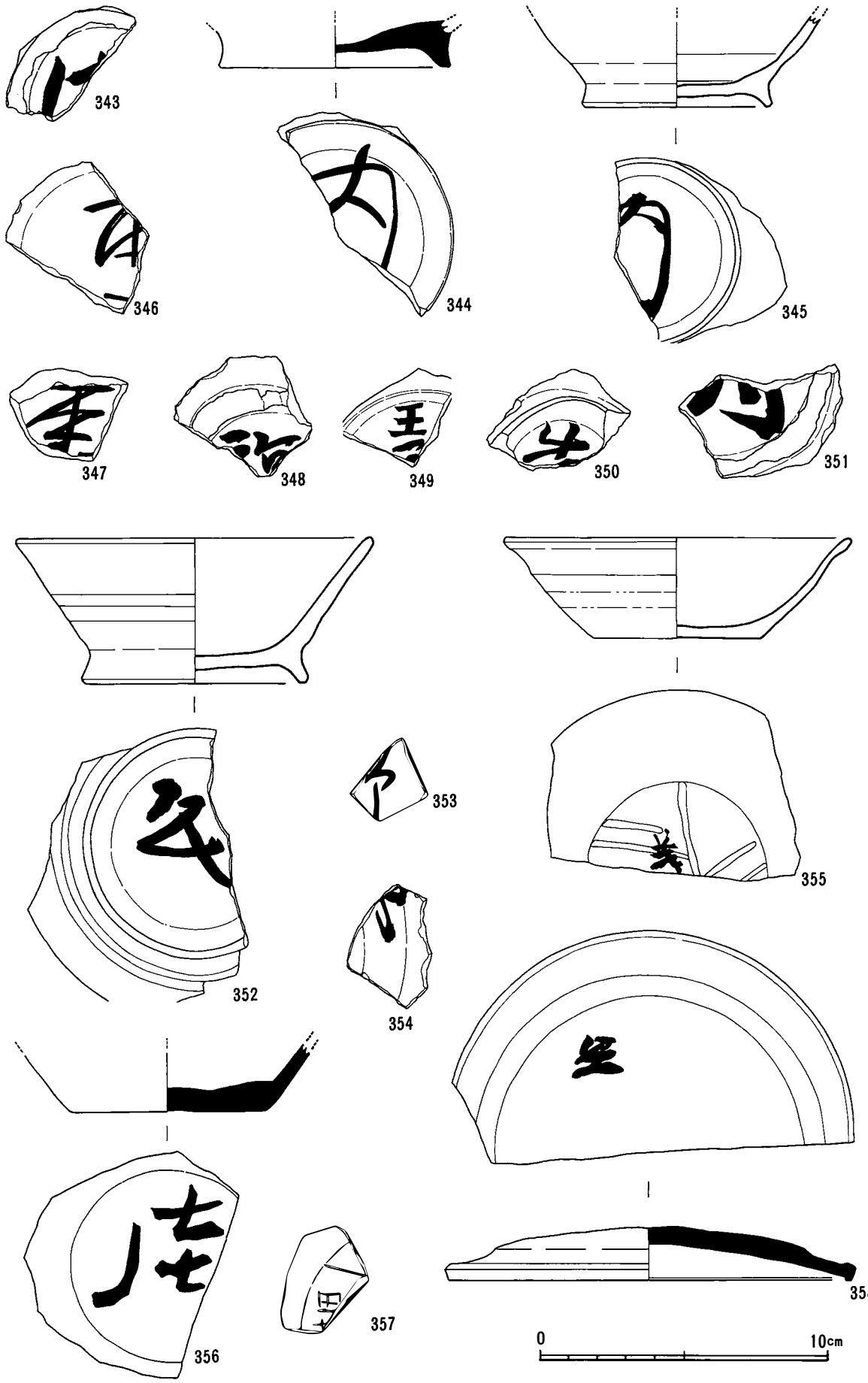
第104図　墨書土器等実測図（1）



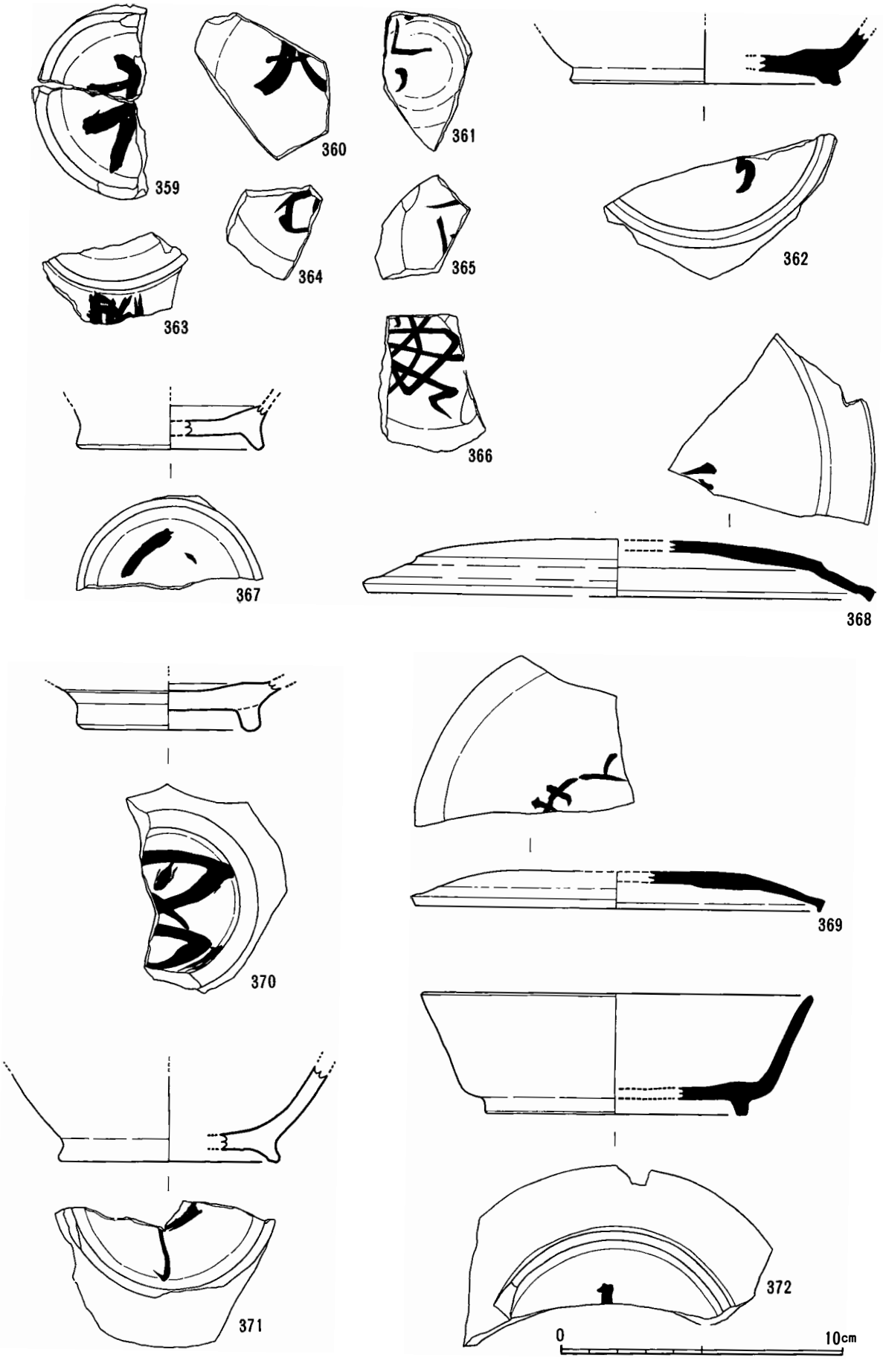
第105図　墨書土器等実測図　(2)



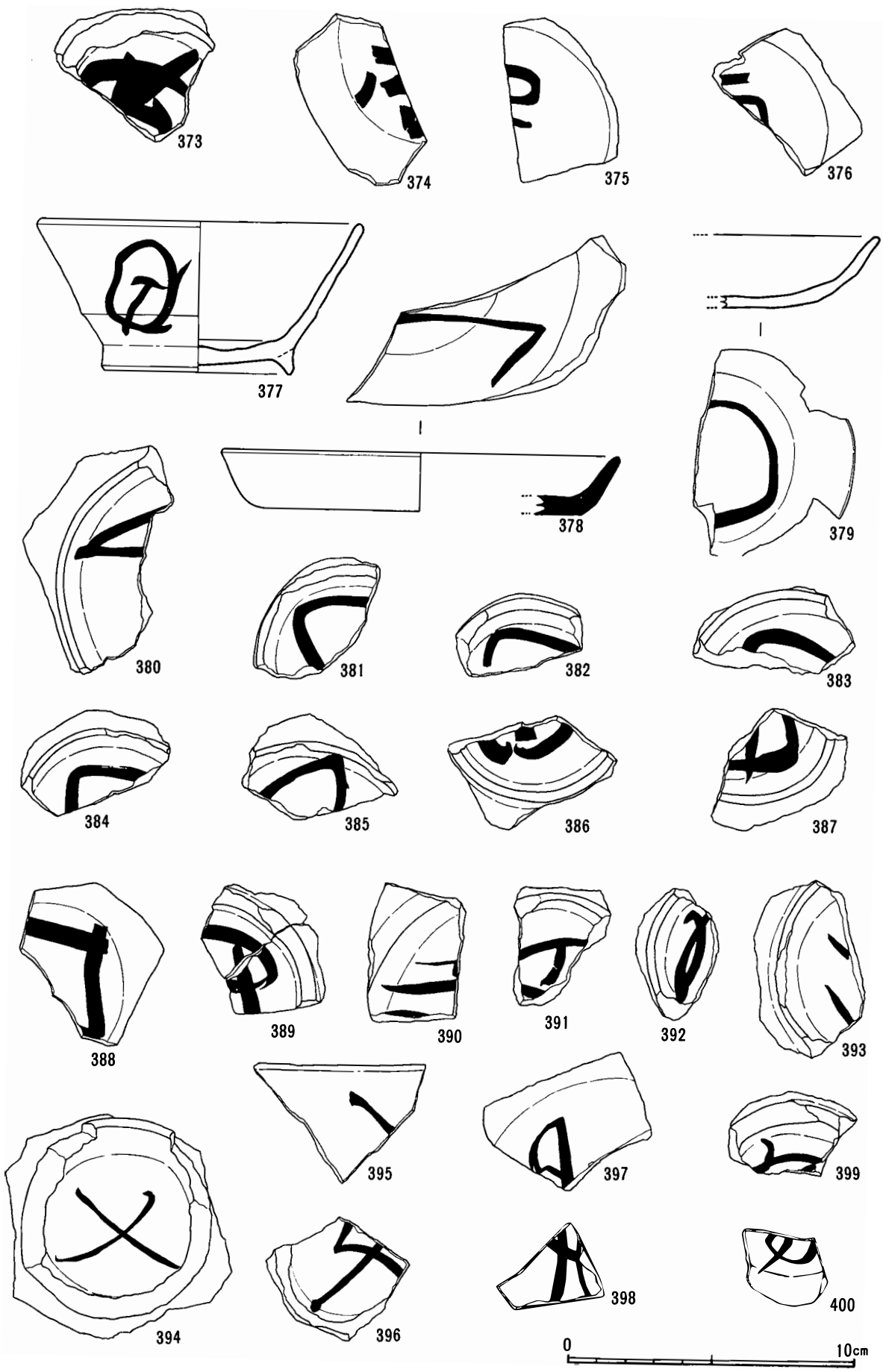
第106図　墨書土器等実測図　(3)



第107図　墨書土器等実測図（4）



第108図　墨書土器等実測図　(5)



第109図　墨書土器等実測図 (6)

る。遺跡の性格を考える上で、注目される資料である。

〈ｅ．地名〉（第106図　334）

334は、浅い土師器の坏の底部外面に「今」の異体字を１字記したものである。最近まで、当遺跡の周辺には「今村」の地名が残っており、この地名の初出は、天文４年（1535）の「鹿子木親員知行目録」であるとされてきた。しかし、この墨書が地名を記したものだとすると、「今村」が古代に遡るものであることを示すものと思われる。

なお、この資料は、第８号住居跡からの出土である。

〈ｆ．人を示すもの〉（第106図　336.337）

２点が出土している。

336は、須恵器椀の底部に「君」の１字を記している。上位者の個人用食器の目印とされたものかと思われる。

337は、２文字で「□女」と記されている。１字目は「乙」ないし「丁」ではないかと考えているが、詳細は不明である。須恵器椀の底部に記されたものである。

〈ｇ．その他文字〉（第106図　335.338～第108図361.369）

その他の文字として、以上のａ～ｆの分類に入らないもの、あるいは、文字ではあるが判読できないものを次に取り上げている。

335および358は、ともに「足」の１字を記したものと思われる。335は須恵器椀、358は須恵器蓋である。

338と339の２点は同じ文字が書かれたもので、草かんむりがしっかりと書かれているものの、釈文は不明である。340も部分であるが、筆の運びがこれら２点に類似している。338は須恵器椀、339は土師器椀、340は土師器坏である。

342～345は、いずれも「内」と解される遺物である。342.343.345は土師器椀、344のみが須恵器の椀に記したものである。

このほか、判読が可能な文字としては、349の「王□」や、352の「公」、369の「千人」？などがある。

また、357は、土師器の坏の底部外面に、焼成前に箆状の工具で文字を刻んだもので、「田□」ではないかと考えている。２文字目は、欠損のため判読不能である。

②符号のようなもの（第109図　377～400）

墨書土器の中には、円や楕円、さらに線、点を加えて符号らしきものを記したものがある。なお、墨書土器として確認している遺物の多くは、この符号状のものが多く、当遺跡で土器に墨書を施す場合には、文字よりもこの種の符号が多用されていたらしいことを示している。

なお典型的な符号の資料としては、377が円と線の組み合わせ、そして379は「○」を記している。また、394は「×」印を記すなど、いくつかのパターンが見られるようである。

③文字か符号か判明しないもの（第108図　362～368.370～376）

図面掲載の順序は相前後するが、部分のため文字か符号か判明しないものを掲載している。筆運びが文字に類似するものもあるが、おおかたは符号に近いと思われる。　（丸山）

No	文字の別	出土地点	器　種	記入部位	文字種別	釈　文	そ　の　他
320	墨書	34号住	土師器坏	底部外面	文字	「賀」	内器面に赤彩、内外共に篦磨きを施し丁寧に作られた土師器坏である。底部に「賀」の1字が記され、特別な用途の土器と推定される
321	墨書	101	須恵器坏	底部外面	文字	「益成」	須恵器坏の底部に「益成」と2文字を記す。ただし、底部の調整が粗く、字の残りは悪いため、詳細は不明
322	篦描	1544	土師器？壺	胴部外面	文字	「其吉」	焼成前の壺の胴部外面に横向きに、鋭利な工具で文字を刻んでいる。内器面の調整は、篦削りや敲きが混在している
323	墨書	G－9区	土師器椀	底部外面	文字	「東」	土師器椀の底部に「東」の1字を巧みに記す。黒色土器A類
324	墨書	H－7区	須恵器坏	底部外面	文字	「南」	須恵器坏の底部に大きく「南」の1字を記す。文字はかなり薄いなど残存状況は悪い
325	墨書	H－7区	土師器	体部外面	文字	「東」	器を伏せた状態で見えるように、体部に逆向きに文字が書かれている
326	墨書	5529	須恵器坏	底部外面	文字	「家」	底部外面に手慣れた筆で「家」の1文字を記している
327	墨書	F－6区	土師器坏	体部外面	文字	「東」	器を伏せた状態で見えるように、体部外面に逆向きに文字を記す。黒色土器A類
328	墨書	4714	須恵器坏	底部外面	文字	「厨」	「厨」の一字がしっかりとした筆運びで書かれたものである。文字はかなり薄くなっており、残存状況は悪い
329	墨書	D－10区	土師器坏	底部外面	文字	「厨□」	「厨」の文字を独特のくずしで記す。2文字目は、部分のため判読不能
330	墨書	I－9区	須恵器椀	底部外面	文字	「門」	底部ほぼ中央に1字を記すが、「門」らしい文字の片側だけが見える
331	墨書	6285	須恵器坏？	底部外面	文字	「門」	須恵器坏の底部に1字を記すようである。「門」の文字の片側のみが見える
332	篦描	2456	須恵器鉢？	底部内面	文字	「大寺」	須恵器の鉢らしき土器の底部内器面に、「大寺」の2文字を篦描する。焼成前に描かれたもの
333	墨書	2212	土師器椀	底部外面	文字	「法」	土師器椀の底部に「法」の1字を小さく記す。なお、底部以外に赤彩を施す
334	墨書	8号住No.24	土師器皿	底部外面	文字	「今」	内器面に赤彩を施した土師皿の底部外面に「今」の異体字を1字記している。遺跡周辺の地名「今村」に関連があるものと見られる
335	墨書	25号住	須恵器椀	底部外面	文字	「足」	須恵器椀の底部に、小さく「足」の1文字を記す
336	墨書	1619	須恵器椀	底部外面	文字	「君」	須恵器椀の底部に「君」の1字を記す。部分のため、上に文字があったかどうか不明
337	墨書	2412	須恵器椀	底部外面	文字	「□女」	須恵器椀の底部に2文字を記す。「丁女」ないし「乙女」と推定する
338	墨書	5566	須恵器椀	底部外面	文字	?	土師器椀の底部に1文字を記す。草かんむりを記すなど明確な文字だが、釈文は不明。「花」の異体字にも類似する
339	墨書	F－6区P	土師器椀	底部外面	文字	?	ピット中より出土。底部に1字を記す。草かんむりを記すなど、明確な文字であるが、意味は不明。「花」の異体字に類似する
340	墨書	E－10区	土師器坏	底部外面	文字	?	内外ともに赤彩を施す土師器に記している。部分のみで詳細は不明だが、338・339と同様の文字ではないかと考えている
341	墨書	一括	須恵器椀	底部外面	文字	?	筆の運びがしっかりとしており、文字と推定される。部分のため詳細は不明
342	墨書	C－5区	土師器椀	底部外面	文字	「内」	「内」という文字を1文字記したもので、このほかにも類例がある
343	墨書	F－9区	土師器椀	底部外面	文字	「内」？	高台の内側に1文字記されたものらしく、「内」の字ではないかと推定される。部分のため詳細は不明
344	墨書	3353	須恵器椀	底部外面	文字？	「内」？	須恵器椀の底部に1字を記したもので「内」と推定される。ただし、字が曲線的であり、符号の可能性もある
345	墨書	5620	土師器椀	底部外面	文字	「内」	土師器椀の底部に「内」の1字を記している
346	墨書	1427	土師器坏	底部外面	文字	?	巧みな筆運びで書かれている。2文字以上であったらしく、上の文字は「厨」のくずしに類似する
347	墨書	E－11区	土師器坏	底部外面	文字	?	筆の運びが連続的で、文字と考えられる
348	墨書	3568	土師器椀	底部外面	文字	「福」？	部分のため不明であるが、「福」などの字に類似する
349	墨書	I－6区	土師器坏	底部外面	文字	「王□」？	複数の文字が書かれていたようである。「王」は判明するが、これが単独の文字であるか、部首であるかは不明
350	墨書	E－8区	土師器椀	底部外面	文字	?	文字の上部が見られる
351	墨書	E－8区	土師器椀	底部外面	文字	?	留め、はねの具合が明確で、「月」「寺」などの文字が推定される
352	墨書	H－7区P	土師器椀	底部外面	文字	「公」？	16号住の西側のピットより出土。巧みな筆使いで「公」の1文字を記す。一部を重ね書きする
353	墨書	E－8区	土師器	体部外面	文字	?	体部の外面に横向きに書かれている。「予」をつくりに使用した文字らしい
354	墨書	J－5区	土師器	体部外面	文字	?	体部外面に横向きに書かれた文字らしい。なお、この土器は黒色土器のA類
355	墨書	一括	土師器坏	底部外面	文字	?	「茂」らしい1文字を確認する。土師器坏は、全面に赤彩を施し、底部には篦削りの痕跡が段になって残る
356	墨書	E－10区	須恵器坏	底部外面	文字	?	須恵器坏の底部に1文字を記す。土器のスレにより、文字が薄れ判読不能
357	篦描	一括	土師器坏	底部外面	文字	「田□」？	細く鋭利な工具で焼成前の土師器に文字を刻んでいる。「田」の字が判読できる
358	墨書	21号住No.2	須恵器蓋	蓋外面	文字？	「足」？	須恵器蓋の外面隅に1文字を記す
359	墨書	1号溝	土師器椀	底部外面	文字	?	全体形が不明だが、偏がしっかりとしており、文字であるらしい
360	墨書	5208	須恵器坏	底部外面	文字？	?	「大」の字に類似するが、筆が重複するなど不明である
361	墨書	G－6区	土師器坏	底部外面	文字	?	内外ともに赤彩を施す薄手の土師器に記している。2文字らしいが、詳細は不明
362	墨書	5149	須恵器椀	底部外面	文字？	?	須恵器の椀の底部に文字らしきものを記すが、部分のため詳細不明
363	墨書	E－9区	土師器椀	体部外面	文字・符号？	?	体部に逆向きに書かれているようである。文字か符号か判明せず
364	墨書	H－10区	土師器坏	底部外面	文字・符号？	?	内外ともに赤彩を施した土師器底部に記される。文字に近いと思われるが、詳細は不明
365	墨書	F－8区	土師器坏	底部外面	文字・符号？	?	部首は「まだれ」に近い文字らしいが、部分のため詳細は不明
366	墨書	G－8区	須恵器坏	底部外面	文字・符号？	?	直線を複雑に組み合わせている。文字か符号か不明である。重ね書きの可能性もある
367	墨書	1号溝	土師器椀	底部外面	文字・符号？	?	1号溝よりの出土。部分であることと、墨書の残存状況が悪いことから詳細は不明
368	墨書	15号住	須恵器蓋	蓋外面	文字・符号？	?	須恵器蓋の外器面ほぼ中央に墨書を施す。文字のようであるが、部分のため詳細は不明
369	墨書	8号住	須恵器蓋	蓋外面	文字・符号？	「千人」？	蓋のほぼ中央部に円を描くように墨書される。詳細は不明
370	墨書	5833	土師器椀	底部外面	文字・符号？	?	土師器椀の底部に肉太の筆で記すが、部分のため文字か符号か不明
371	墨書	H－6区	土師器椀	底部外面	文字・符号？	?	筆のハネなどもあり文字に類似するが、部分のため詳細は不明。黒色土器A類
372	墨書	6315	須恵器椀	底部外面	文字・符号？	?	部分のため詳細不明
373	墨書	D－10区	土師器椀	底部外面	文字・符号？	?	肉太の筆で書いているが、部分のため文字か符号か判明せず
374	墨書	D－10区	土師器坏	底部外面	文字・符号？	?	文字らしい筆の運びで、部首は「まだれ」の系統の文字と考えられる
375	墨書	一括	須恵器坏	底部外面	文字・符号？	?	376に類似するもので、全体が不明なため、文字か符号か判明せず
376	墨書	G－9区	土師器坏	底部外面	文字・符号？	?	内外ともに赤彩を施す土師器の底部に記している。部分のため文字か符号か判明せず
377	墨書	一括	土師器椀	体部外面	符号		楕円と線を組み合わせた符号であると考えられる。重書した痕跡も残る
378	墨書	31号住	須恵器盤	底部内面	符号		内器面に墨書されたもので記入部位としては少数である。直線を基調としており、符号と考えられる
379	墨書	5036	土師器坏	底部外面	符号	「○」	浅い土師器坏の底部に「○」印を記す。同様の符号は他にも類例多し
380	墨書	E－8区	須恵器椀	底部外面	符号		直線を基調とした符号であると推定される
381	墨書	F－11区	土師器椀	底部外面	符号		楕円や○などを描く符号と考えられる
382	墨書	G－9区	土師器椀	底部外面	符号		楕円か四角形に近い符号と思われる
383	墨書	D－8区	土師器椀	底部外面	符号		楕円に近い符号と思われる
384	墨書	F－10区	土師器椀	底部外面	符号		楕円か四角形に近い符号と思われる
385	墨書	G－7区	土師器椀	底部外面	符号		楕円や円のみを書く符号と思われる
386	墨書	I－9区	土師器椀	底部外面	符号		円の中に点を打ったような符号と思われる
387	墨書	H－8区	土師器椀	底部外面	符号		楕円と線の組み合わせの符号と思われる
388	墨書	E－10区	須恵器坏	底部外面	符号	「□」	四角形「□」を書いた符号であるかと思われる
389	墨書	H－10区	土師器椀	底部外面	符号		円と直線の組み合わせによる符号と思われる
390	墨書	1203	須恵器坏	底部外面	符号？		直線的な2本の線が記されるが、部分のため詳細は不明
391	墨書	F－10区	土師器椀	底部外面	符号		楕円と直線の組み合わせの符号と思われる
392	墨書	G－8区	土師器椀	底部外面	符号		文字のような筆の運びとは考えられず、符号と判断される
393	墨書	K－7区	須恵器椀	底部外面	符号？		直線的な2本の線が記されるが、部分のため詳細は不明
394	墨書	6209	土師器椀	底部外面	符号	「×」	「×」印を付けた、土器の識別符号と思われる
395	墨書	4779	土師器	体部外面	符号		直線を基調とした符号と思われ、筆の運びから「×」印に近いものではないかと推定される
396	墨書	G－6区	土師器椀	底部外面	文字・符号？	「×」？	文字か符号か判明しないが、「×」印に近いものと考えられる。文字とすれば、「女」などに近いものか
397	墨書	I－7区	土師器坏	底部外面	符号		文字でなく、符号と思われる。土器は内外ともに赤彩をほどこす
398	墨書	C－6区P	土師器	底部外面	符号		直線を基調とする符号と見られる。ピット中からの出土である
399	墨書	H－7区	土師器椀	底部外面	符号		円と線の組み合わせの符号と思われる
400	墨書	E－11区	土師器坏	底部外面	符号		曲線を基調とした符号と思われる
510	線刻	5434	紡錘車	穿孔部脇	文字	「井」	滑石製の紡錘車の片面に、鋭利な工具を使用して「井」の文字を刻んでいる

第12表　墨書土器等観察表

⑷　石製品（第110～113図）

奈良～平安期の石製品としては、砥石16点、硯状石製品１点、分銅（錘）１点などが出土した。砥石に関しては13点を図化し、掲載している。なお、図中で薄い網掛けは使用のため磨耗した部分を示し、濃い網掛けは、カーボンの付着部位を示している。

【砥石】（第110～112図）

鉄製品の項で述べるように、当遺跡では、刀子や鉄鎌などの刃物が多量に出土している。刃物の使用には、砥石の日常的な使用が不可欠であることから、出土点数が比較的多いもの頷かれるところである。

さて、確認された砥石は、刃物の１次的な研磨に使用する目の粗い砥石（401～407）と、２次的な研磨（仕上げ）に使用する密な砥石（408～413）との両様があり、出土比率はほぼ同数である。素材としては、前者は砂岩、後者は木目石を使用している。特にこの木目石は、現在でも天草地方の特産となっている木目石と酷似しており、当時の物資の流通の一端をうかがうことができそうである。

なお、両遺物の法量は、粗砥が比較的大きく、通常の砥石の方が小さいという差が見られる。これは、粗砥より通常の砥石の使用頻度が圧倒的に多いという点（粗砥は最初の刃の形成や潰れた刃の再生などの際しか使用しない）により、研磨の度合いが異なることや、粗砥は携帯して使用されることが少なかったことなどに起因するものと思われる。

〈粗砥〉（第110・111図　401～407）

401・402は、粗砥の中でも比較的大型のもので、入手した自然石を適当な大きさに割って使用したらしく、側面の一部に自然面をそのまま残している。また、401は研磨面の裏側にカーボンが付着した部分があり、この遺物が砥石としての用途以外に使用されていた可能性もある。

403は、粗砥の中では丁寧に加工されたもので、全体を扁平な台形に加工した後、側面は面取りを行っている。４面を研磨に使用しており、うち１面には、集中的な研磨のため、くぼんだ部分が見られる。なお、この遺物は第19号住居跡の床直上からの出土であり、同住居において使用されていた可能性が高い。

404～407は比較的小さい部類に属する砥石である。いずれも、大規模な砥石の破片を２次的に利用したと思われ、破断面が不整形を呈している。また、細身のものを研いだ際に付いたと見られる筋状の擦痕も部分的に認められる。

〈密な砥石〉（第112図）

413は、両端部がやや欠損するものの、四角柱状を呈し、製品としての砥石の本来の姿をとどめている。４面を使用しており、磨耗のため湾曲している。

408～412は、小型の砥石である。もともと大型の砥石が割れたり、使い込まれて磨耗したものを再利用したものなども含まれていると見られる。刀子などの鉄製品の使用には頻繁な研磨が必要であり、これらの砥石は、小型の携帯用として使用された可能性もある。

【硯状石製品】（第113図　414）

緻密な粘板岩系の素材を使用した遺物で、硯ではないかと推定されるものである。

もともと薄い長方形の板状を呈していたものと考えられ、端部及び側面には素材の切り出しの際についたと見られるギザギザの擦痕が残される。また、裏面（底面）は丁寧に研磨されているが、表面は薄く剝落しており、原況をとどめない。

なお、裏面の研磨面には、針などで傷付けたような痕跡があり、筋状の溝、四角形、「ト」の字に類似するような傷が見られる。戯れ書きの可能性もあるが、詳細は不明である。

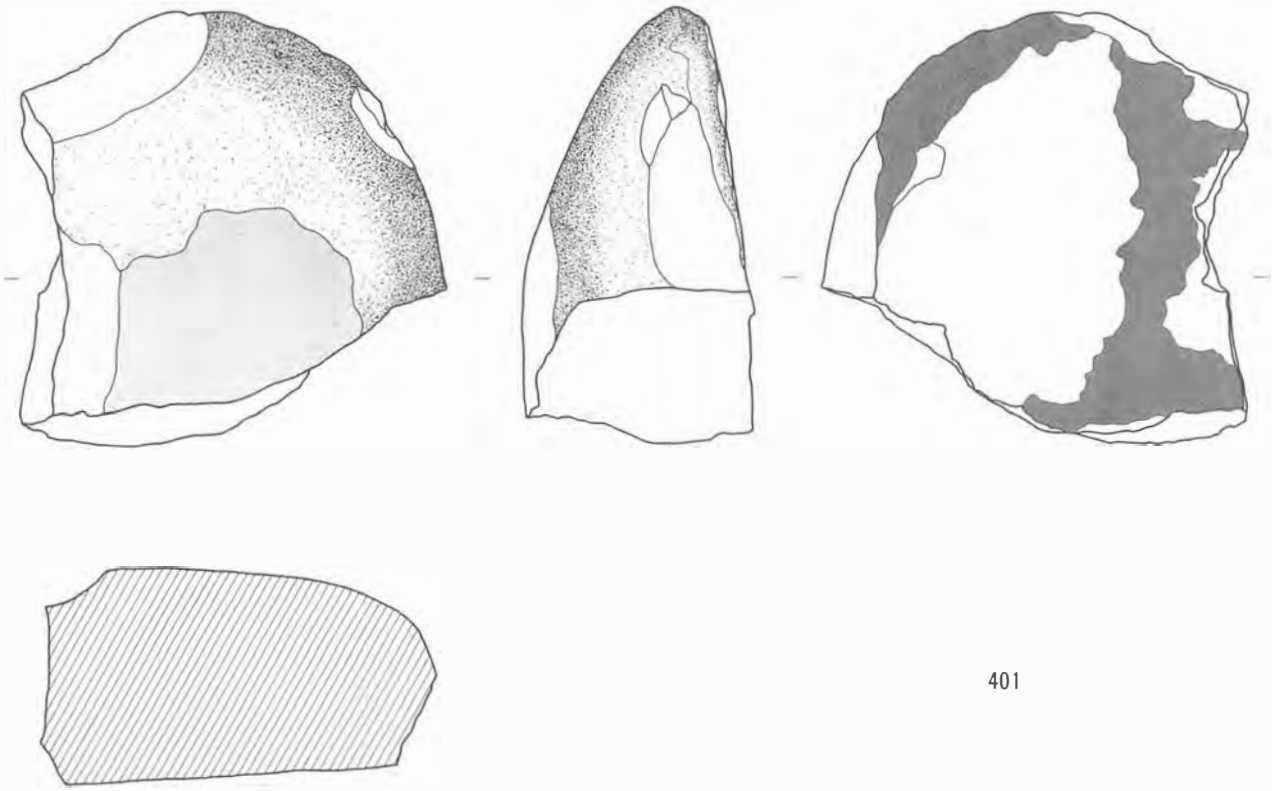
【分銅（錘）】（第113図　121）

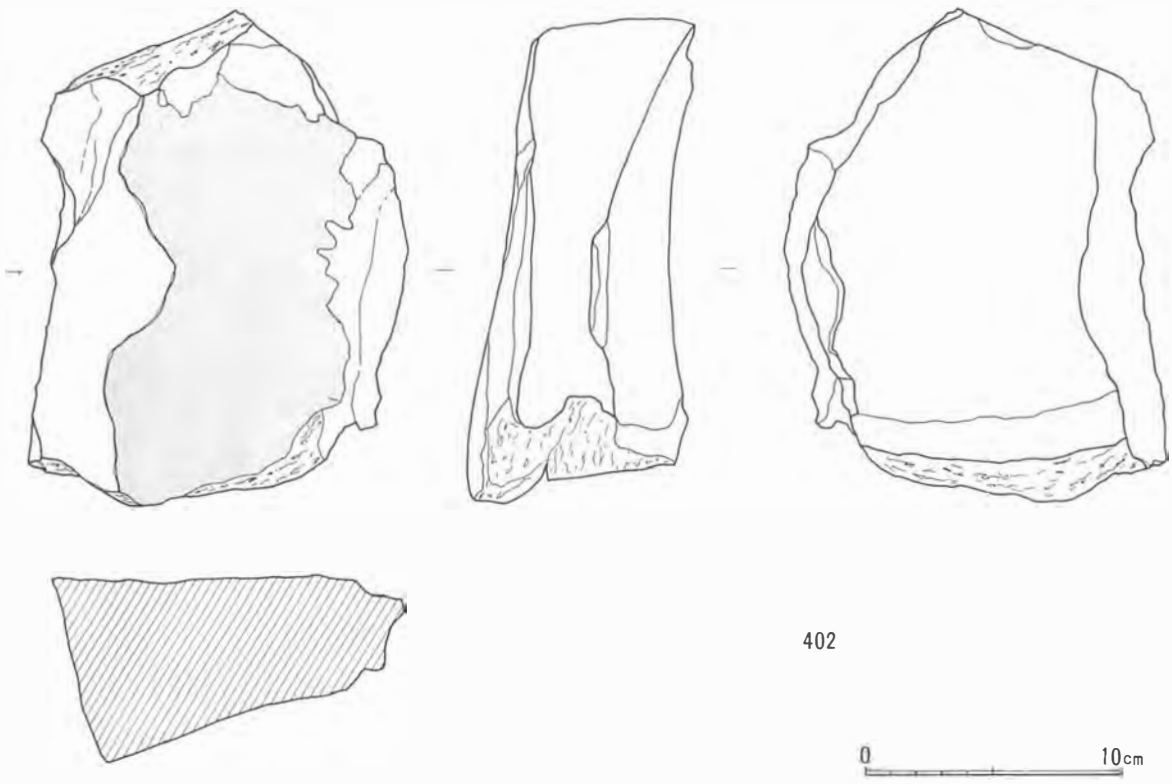
形状から「おもり」として使用されたと見られる製品である。

通常は砥石として使用される木目石を、分銅の形に研磨している。また、上部には小さく穿孔し、紐などを通して使用するように作られている。

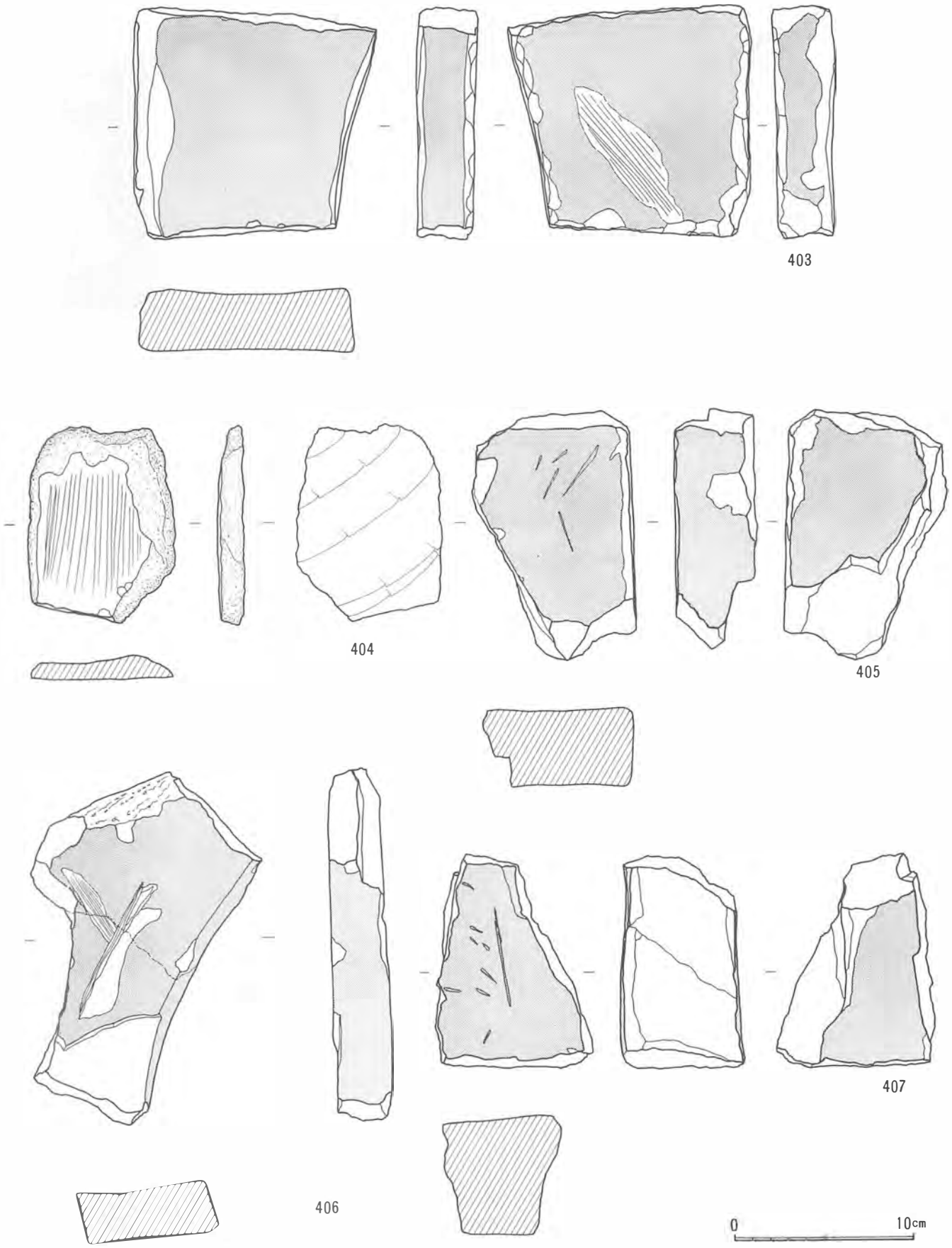
やや角の部分の磨耗が見られるが、現重量は67.8gを量る。形状は分銅に酷似するが、磨耗分を推定換算しても定量であるべき分銅の単位とは合致せず、棹秤の「錘」として、棹にぶら下げスライドさせながら使用していた可能性が高いと推定している。第32～35号住居跡の埋土中からの出土である。

（丸山）

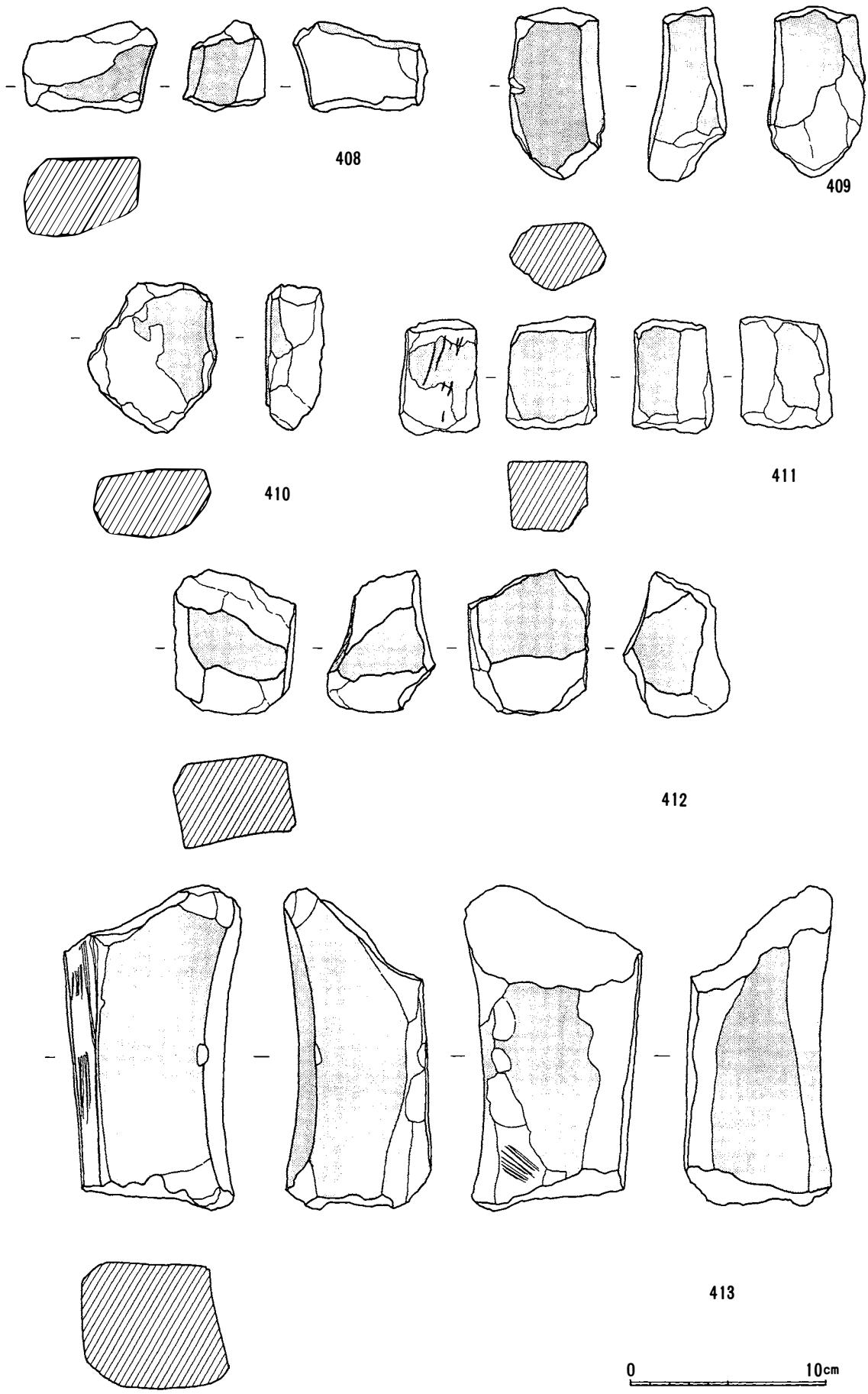




第110図　石製品実測図（1）



第111図　石製品実測図　(2)

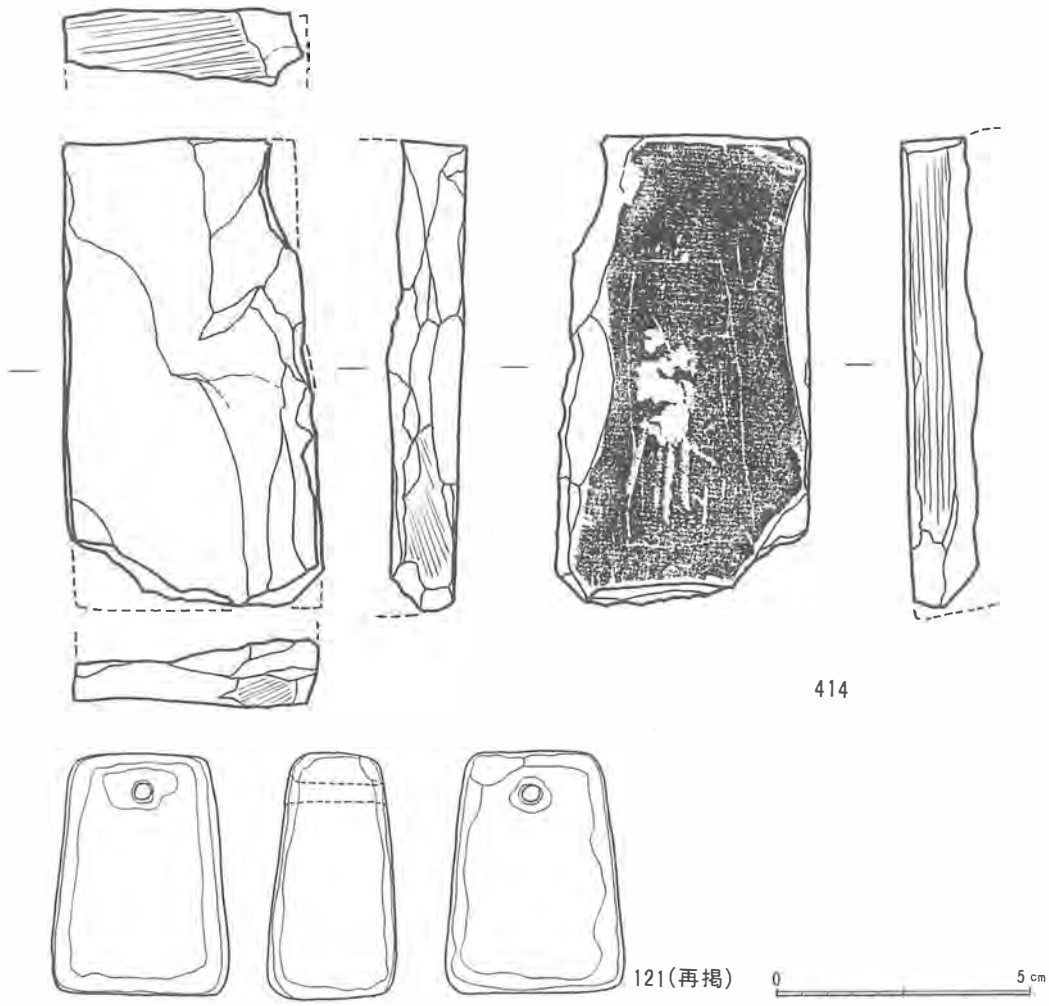


第112図　石製品実測図 (3)

No	器種名	出土地点	石　材	寸法(長・幅・厚)cm	重量g	色　調	そ　の　他
401	砥石　粗	Ｉ－11区	砂岩	17.1×16.8×9.2	3000	暗赤褐色	砂岩の下面を割り、座りのよい状態にして、上面の自然面の一部を研磨のために使用している。なお、下面には火を受け煤が付着するなど、砥石以外の用途にも使用されたらしい
402	砥石　粗	4787	砂岩	19.3×15.1×9.2	2449	赤褐色	粗砥として使用した砥石で、全体に火を受けて赤変している。風化が激しいが、一面に使用にともなう研磨面が残る
403	砥石　粗	19住No.14	砂岩	12.8×13.6×3.4	1075	黄赤褐色	住居跡床直上出土の粗砥である。端部の２面をのぞき、使い込まれており、磨耗している。うち一面には、集中的な研磨によるものか、くぼみができている。なお、鉄分が一部に吸着している
404	砥石　粗	4770	砂岩	10.9×8.2×1.4	152	赤褐色	粗砥であり、砂岩を薄く割り片面を研磨のため使用している。なお、研磨面には、幾筋もの条痕が残る
405	砥石　粗	Ｉ－11区	砂岩	13.7×9.2×4.7	687	赤褐色	粗砥であり、三面が使用のため磨耗する。うち一面には鋭利なものを研いだことによる条痕も残るほか、敲打した箇所も見られる
406	砥石　粗	Ｉ－７区Ｐ	砂岩	19.5×12.9×3.1	897	暗赤褐色	粗砥として使用されたもので、２面を研磨に使用している。主使用面には鋭利なものを研磨した際についたらしい条痕が残る。なお、部分的に火を受け煤が付着している
407	砥石　粗	Ｊ－11区	砂岩	11.7×8.9×6.8	876	赤褐色	粗砥であり、二面が使用のため磨耗するほか、鋭利なものを研いだためか一面に条痕が残る。受熱したらしく赤変した部分のほか、煤の付着も見られる
408	砥石　密	3898	木目石	4.7×7.0×4.2	142	黄灰色	仕上げ用の密な砥石で、もともと大きなかたまりで使用されていたものが欠損した後、小破片も砥石として再利用したものらしい。三面を研磨する
409	砥石　密	Ｉ－７区	木目石	8.8×4.9×4.1	166	赤灰色	小型で仕上げ用の密な砥石で、手に持つようにして使用したらしい。側面の４面が使用されており、磨耗の度合いからかなり使い込まれたことがわかる
410	砥石　密	5879	木目石	7.8×6.7×3.1	156	黄灰色	仕上げ用の密な砥石の残欠であり、連続する２面を使用した磨耗痕が残っている。なお全面にわたって風化、剥落が著しい
411	砥石　密	3856	木目石	5.9×4.6×3.9	164	黄灰色	仕上げ用の密な砥石で小型である。側面の４面を研磨のため使用しており、うち１面には、浅い条痕が数条残る
412	砥石　密	4750	木目石	7.3×6.3×5.6	264	黄灰色	仕上げ用の密な砥石である。使用されているうちに小型化して最後は破損したものらしい。側面の４面を研磨のため使用している
413	砥石　密	2721	木目石	16.7×9.2×7.6	1266	黄灰色	確認した密な砥石中最大のもので、製品としての砥石の原型を示すものか。割れている端部二面を除き、かなり使用され、磨耗している。側面の一部に条痕が残る
414	硯？	Ｇ－５区	粘板岩	9.2×5.1×1.5	90	青灰色	全体形は薄い長方形の板状であり、硯に類似する。表面は剥離し欠損するが、裏面は丁寧に研磨され、また側面も荒削りながら調整の痕跡がある。なお、裏の研磨面には、鋭利な針などで戯れ書きを施した痕跡もあり
121	分銅	32～35住	木目石	4.8×3.6×2.6孔0.4	67.8	黄灰色	通常は砥石に使用する石材を使用して、棹はかりの「錘」らしきものを作る。上部は穿孔されており、紐などでつるしていたことがわかる。なお、柔らかい石材のため、表面は風化が進んでいる

＊現存値

第13表　石製品観察表



第113図　石製品実測図　(4)

⑸　鉄製品（第114～118図）

今回の調査で確認された鉄製品の総数は、60点を数える。分布状況は、３点出土している鉄鎌がすべて竪穴住居跡からの出土である点が注目されるほかは、他の遺物の分布と格段の差異はみられず、遺構が集中している区域の包含層からまんべんなく出土している。内訳は、刀子が12点、鉄釘らしい遺物が９点、鉄斧１点、紡錘車１点、鉄鎌３点、その他に不明の鉄製品が26点である。

なお、このほか、欠損や腐食が激しく詳細の不明な鉄製品が33点、またスラッグが大小35点ほど出土している。

【刀子】（第114図 415～425. 59）

415～425.59が、刀子と推定される遺物である。

このうち415は、先端をわずかに欠損するものの、刃部から中茎にかけての残りが良く、刀子本来の形状を示している。

417は完形であり、刃部がよく使い込まれて磨耗するなど、刀子の使用状況が知られる資料である。

また426～429は、ひとまず不明鉄製品と分類したが、形状や刃部の形成のありようから、刀子ないし、類似の刃物ではないかと推定している。なお、428は、刃部の形成が見られず、未成品ではないかと推定される。

【釘状鉄製品】（第115図 430～439）

430～439は、四角柱状の形状を呈し、5㎜内外の径を持つことから、鉄釘ではないかと推定される遺物である。端部を欠損し、全体が湾曲するものも多い。

【板金状鉄片】（第115～116図 440～459）

440～459であり、いくつかの形状があるが、板金を基本として加工を施すもので、一括して板金状鉄片として分類した。

まず440～446は、細い板金状の鉄片であり、1～2㎜前後の厚みを持ち、全体形は直線的である。

447～450は、上記と同様の細い板金状の鉄片であるが、途中よりＬ字ないし、それに近い形に屈曲するのが特徴である。459は、素材は上記に近いが、加工が半円形を呈している。

452は、板というよりは、中心部は棒に近いものであるが、両端部は広がっており、やや扁平になるものである。

451. 453. 454は、これまでと違い、やや幅広い板状の鉄片である。なかでも、453は、端部の一方が包み込むように折り返す細工が施される。

456～458は、方形に近い鉄片である。456は、側面がやや折り返されるなどの細工が施される。

【環状鉄製品】（第116図 460.461.464）

460.461は、小型の環状の鉄製品である。3㎜程度の太さを持つ棒状の鉄片を円形に屈曲させている。

464はやや大型で、6㎜程度の太さの棒状の鉄片を、上記と同様に円形に加工している。ややねじれており、端部同士は離れている。

【異形鉄製品】（第116図 455.463.462）

以上の分類に属しない鉄製品としては、3点がある。455は、両端部を欠損するが、板金状の鉄片に径2㎜の孔をあけている。何かの製品の部分であると思われる。

463は、薄い板金に5列にわたって、透かしの細工に見られるような小さな孔をあけている。何かの装飾の一部かも知れない。

462は、一方を欠損するものの、反対側の端部には、素材を円形に折り返し、何かを通すような孔を作っている。太い針のような印象を持たされる遺物である。

【鉄斧】（第117図 465）

465は、両刃の鉄斧である。内部は空間があり、柄を挿入する形で装着したものと思われる。ただし、この鉄斧は、Ｃ－５区の攪乱中から土器などと混在して確認されたもので、時期判定に一抹の疑問が残る遺物である。

【紡錘車】（第117図 466.468）

468は、両端部を欠損するものの、完形に近い紡

錘車である。薄い円盤状の鉄片に細い鉄棒を装着して使用したものである。

466も全体の半ばを欠損するものの、形状から紡錘車と推定される。

【円形鉄製品】（第117図 467.469）

467は、欠損のため全体形は不明だが、いびつな円形を呈していた鉄製品である。端部の一方に折り返しを作り、中央部分に穿孔している。

469は、厚みのあるもので、精巧に面を加工し、中央がくぼんだ円盤状の製品に仕上げている。両遺物とも、紡錘車に類似するが、厚み、穿孔の有無とその位置について異なっており、異種の遺物と思われる。

【鉄鎌】（第118図 95.104.105）

3点が出土している。104が刃部の半ばを欠損するのに対し、95.105はほぼ完形で確認された。「曲刃柄鎌」に近い鎌で、いずれも、柄に対して直角より広い角度で装着されていたらしい。端部は装着のため、柄に掛けるための返りが施されている。

104は第24号住居跡、95は第19号住居跡、105は第22号住居跡から、それぞれ出土している。（丸山）

⑹　銅製品（第119図）

今回の調査で確認された銅製品は、総数で９点である。出土地点は、掘立柱建物や竪穴住居などの遺構が集中する地点に分布しており、その他の遺物の分布傾向と格段の差異は見られない。

製品の種別としては、銙帯と思われるものが、丸鞆、巡方、鉈尾そして、鉸具の一部と推定されるものが各１点ずつ出土している。このほか、蝶番状のもの１点、飾り金具らしいもの２点、鋲１点、不明銅製品１点である。以上のように、銅製品は何らかの装飾品の一部であるものがほとんどを占めている。

【銙帯】（第119図 470～473）

473は、腰帯のバックルに相当する鉸具の一部ではないかと推定される遺物である。鉄製の軸にやや扁平な銅製の棒状の金属が巻きつけるように付属しており、銅の部分はもともと動くように作られていたらしい。鉄部分は両端を欠損するため詳細は不明だが、前者は弓金具、後者は刺金ではないかと推定している。

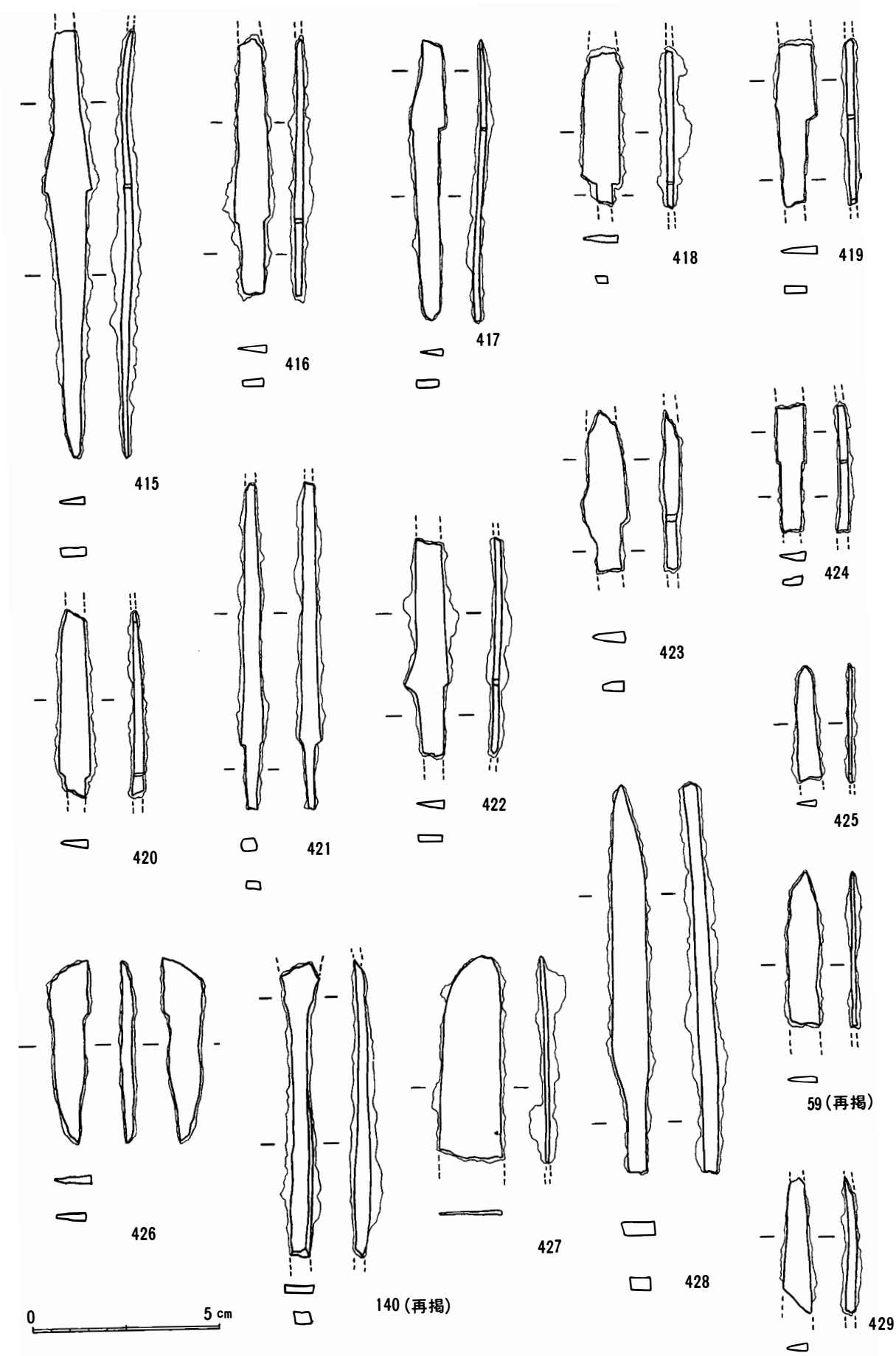
471は、銅製の丸鞆で、革の帯を両側から挟むための裏側の留め具も残るなど、完形品である。漆の塗布の痕跡などは認められない。

472は、銅製の巡方で、丸鞆と同様に裏側の留め具も残っており、ほぼ完形の遺物である。大きさから、471とほぼ同程度の規格によって作られたものと考えられる。漆の塗布などの痕跡は認められない。

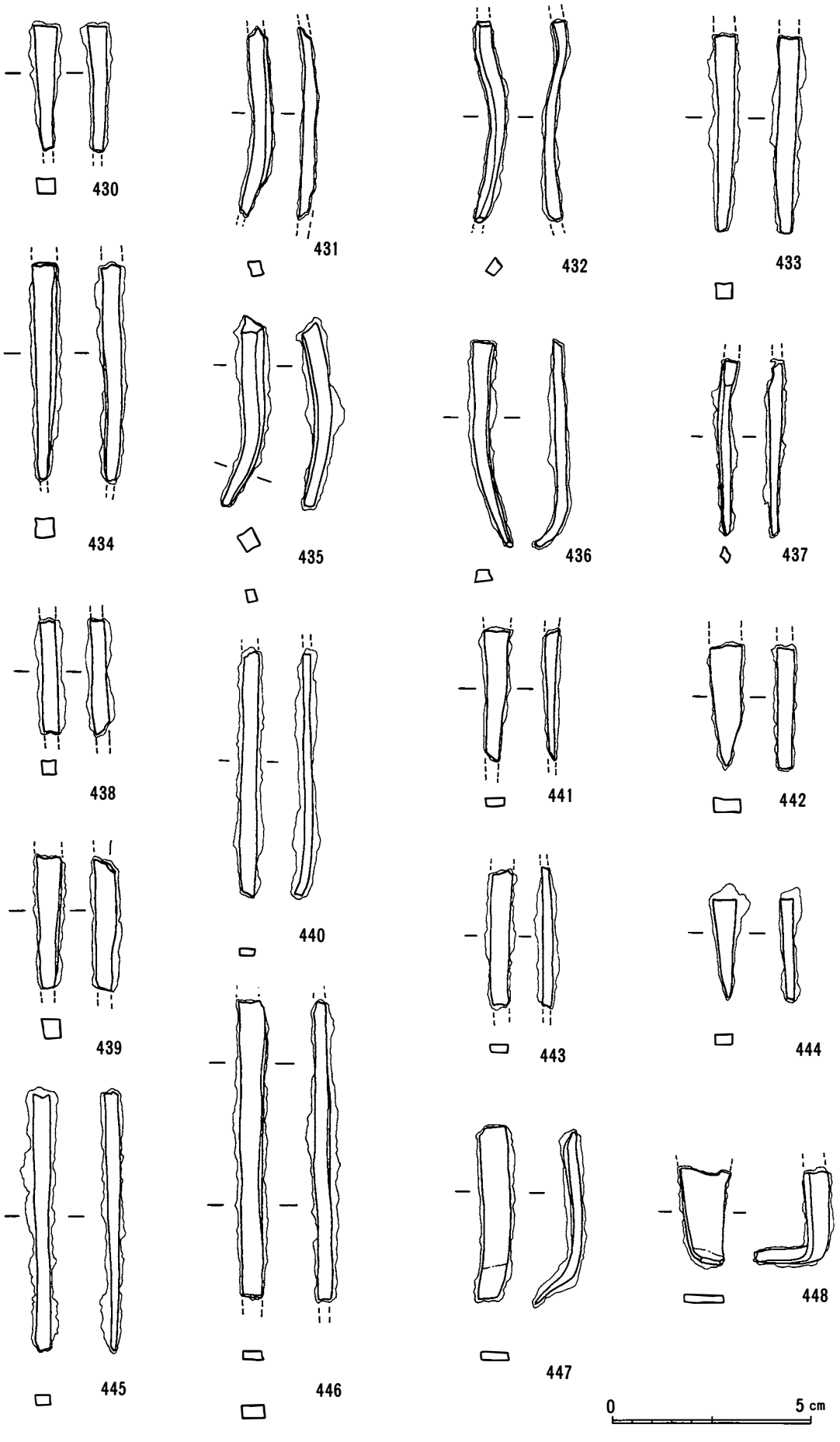
470は、帯の端に取り付けられた金具である銅製の鉈尾である。前２点とは異なり、やや大型の規格である。裏の留め具の一部が欠損するが、残存状況は良好で、完形に近い遺物である。なお、漆の塗布等の痕跡は認められない。

腰帯は、大宝律令の「衣服令」によって定められたもので、五位以上の貴族は、玉や金銀の材質の飾りを付け、六位以下の下級官人は、石や銅製の飾りに黒漆を塗布したものを、使用したとされている。今回、当遺跡から出土した製品は、いずれも銅製であることから、六位以下の下級官人の使用になるものと見てよいであろう。

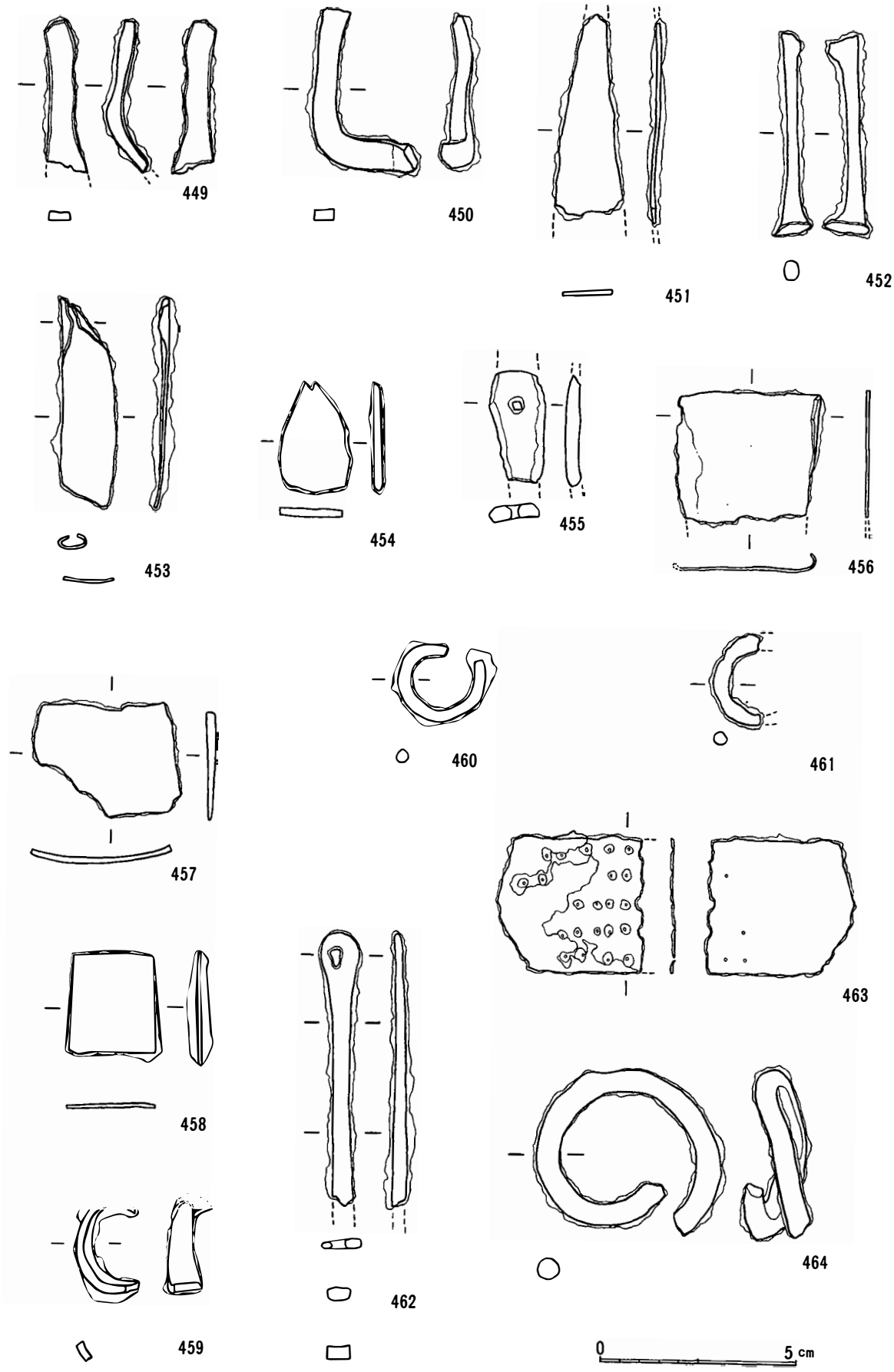
なお、巡方、丸鞆、鉈尾ともに、残存状況はきわめて良好で、製品の精巧な作りを今に残している。特に同種の金具が出土する場合には、金具の表面だけの出土が多く、裏側の留め具は失われていることが多いが、今回はいずれもそのまま残り、廃棄された当初は、帯の革が遺存していたことが推定される。472は、Ｇ－６区の第１号掘立柱建物のすぐ南側のピットより出土しており、何らかの儀礼等に伴う廃棄の可能性もある。（丸山）



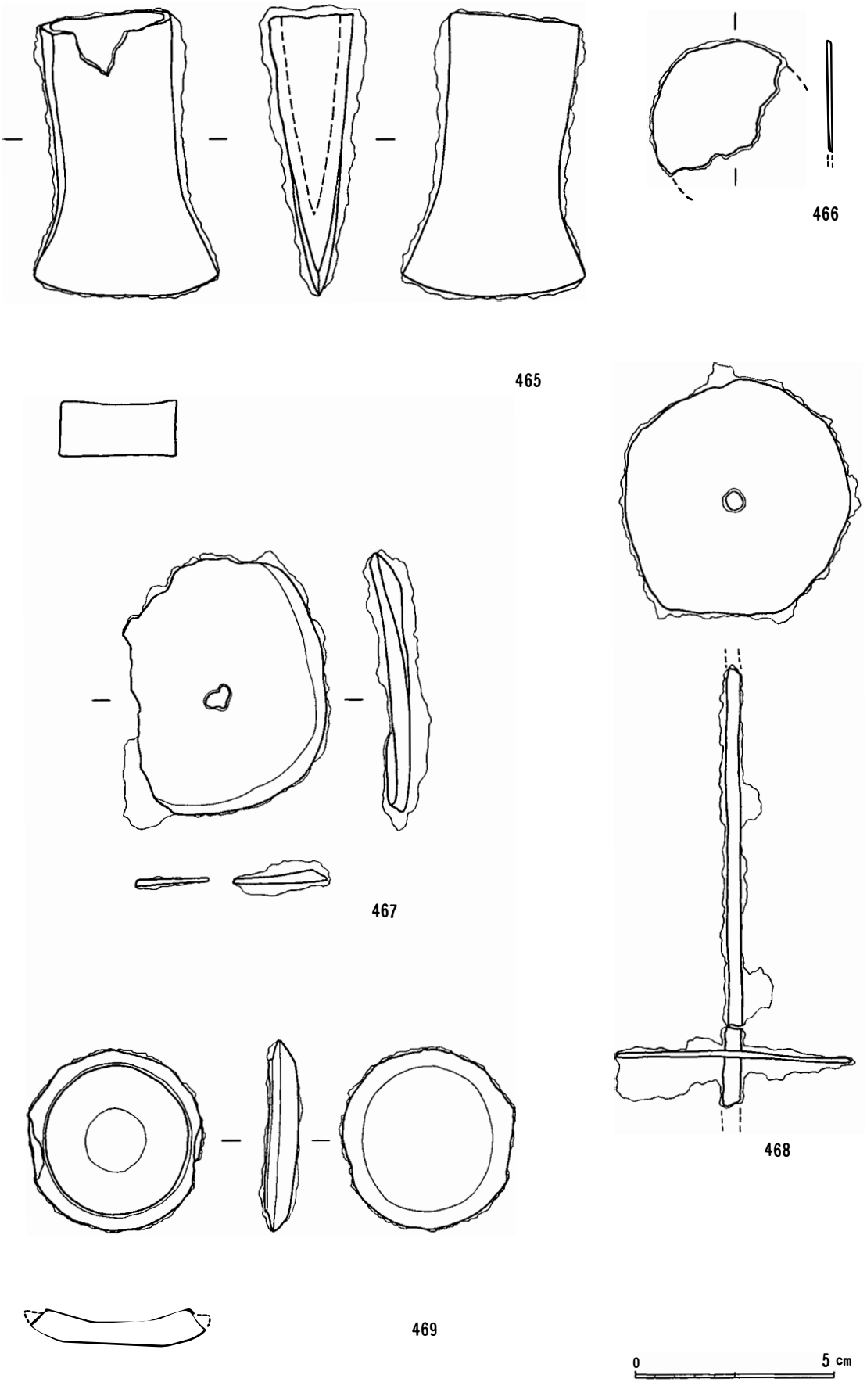
第114図　鉄製品実測図（1）



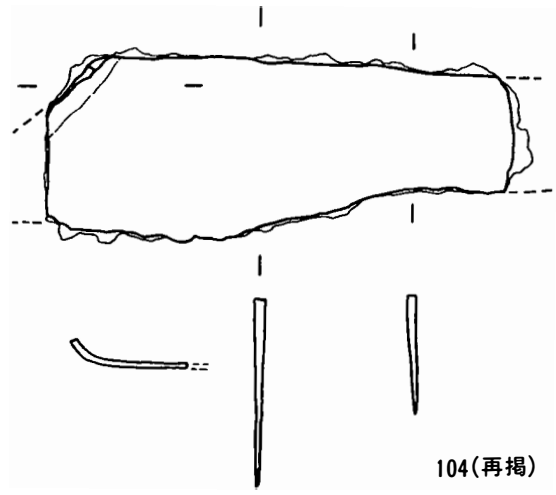
第115図　鉄製品実測図　(2)

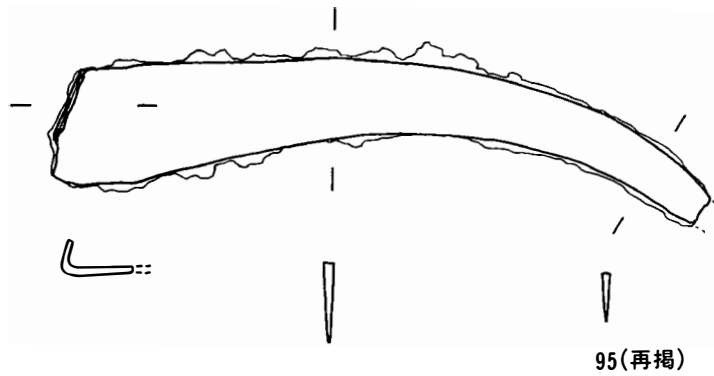


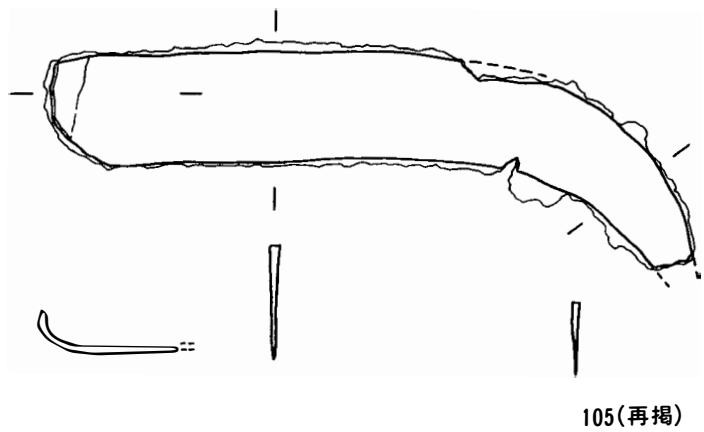
第116図　鉄製品実測図　(3)



第117図　鉄製品実測図 (4)





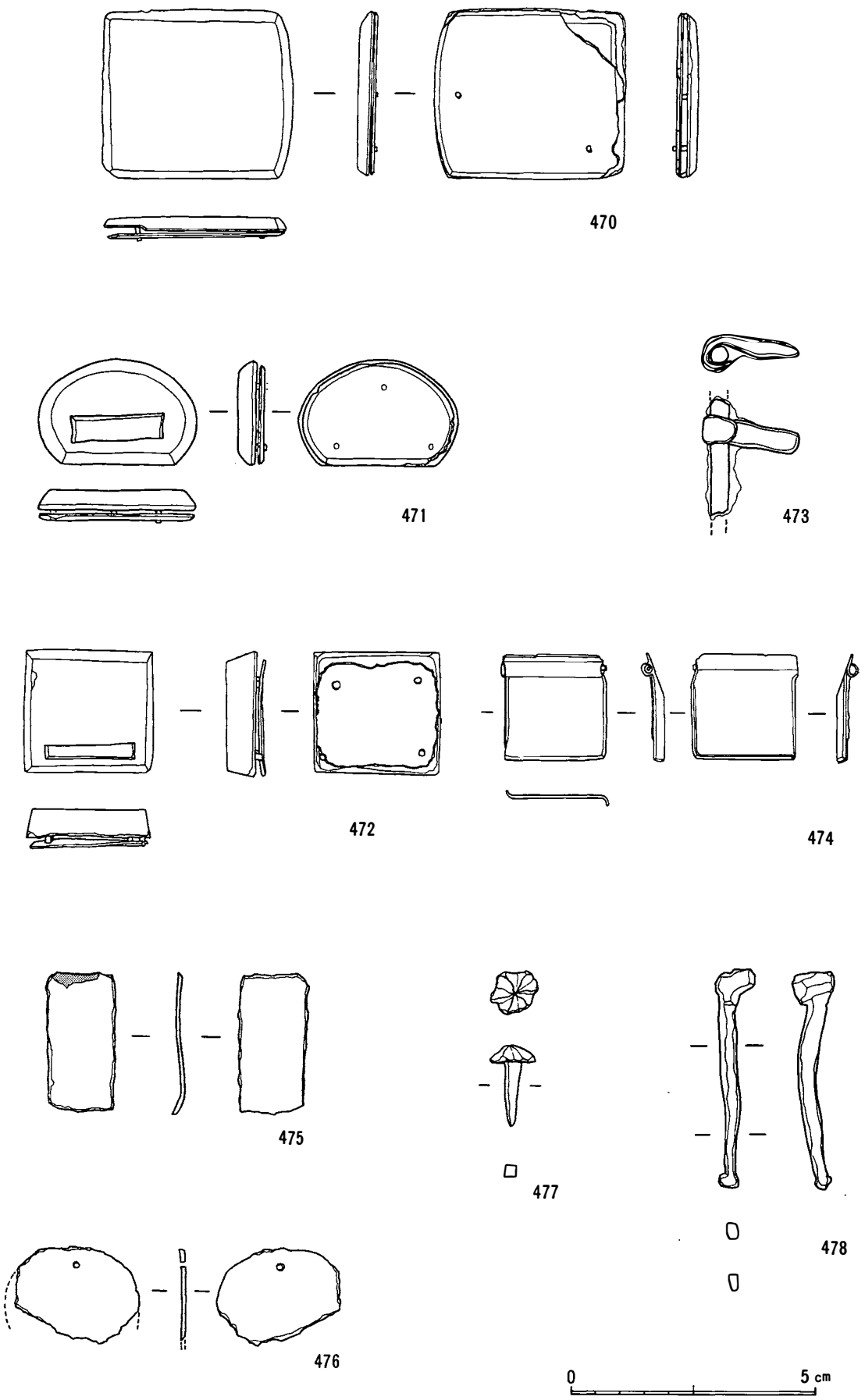


第118図　鉄製品実測図　(5)

＊現存値

No	器種名	出土地点	寸法(長・幅・厚)cm	重量g	そ　の　他
415	刀子	Ｆ－８区	＊11.3×1.25×0.2	14.2	刃部の先端を欠損するものの、刃部から中茎にかけて残存状況のよい刀子である。なお、刃部は使い込まれ研ぎ減っている
416	刀子	Ｇ－９区	＊6.9×0.9×0.22	8.1	刃部の一部を欠損するが、形状から刀子の刃部から中茎にかけての部分であると思われる
417	刀子	3405	7.4×0.9×0.17	5.6	非常によく使い込まれた刀子で、中茎の長さに対して、刃部は研ぎによって磨耗し、短くなっている
418	刀子	一括	＊4.0×1.0×0.2	3.8	両端部を欠損するものの、形状から刀子の刃部から中茎にかけての部分と思われる
419	刀子	Ｅ－９区	＊4.3×1.05×0.2	4.7	両端部を欠損するが、刃部を形成するなど、刀子としての特徴を備えている
420	刀子	2875	＊4.9×0.9×0.25	3.9	両端部を欠損するものの、刃部を形成していることなどから、刀子の刃部から中茎にかけての部分であると思われる
421	刀子？	一括	＊8.6×0.55×0.6	10.2	一見すると刀子のような形状を呈するが、刃部の形成などはなく用途は不明である
422	刀子	Ｇ－６区	＊5.7×1.2×0.21	6.0	両端部を欠損するものの、刀子の刃部から中茎にかけての部分である。刃部は、使用に伴いかなり磨耗している
423	刀子	Ｄ－９区	＊4.3×1.3×0.5	4.4	両端部を欠損するが、側面に刃部を形成することなどから刀子と思われる
424	刀子	Ｅ－９区	＊3.3×0.73×0.25	2.2	両端部を欠損するものの、刃部を形成していることなどから、刀子の刃部から中茎にかけての部分であると思われる
425	刀子？	Ｉ－７区	＊3.0×0.65×0.1	1.1	端部を欠損するため、全体形は不明であるが、刃部を形成するところから、刀子の部分であろうと思われる
59	刀子	８号住	＊4.1×0.9×0.1	2.7	中茎の部分を欠損するが、側面に刃部を形成することなどから、刀子と思われる
426	刃物状鉄片	Ｆ－10区	＊4.8×1.1×0.35	3.7	欠損のため全体形は不明だが、刃部を形成することなどから、刀子の一部かもしれない
140	刃物状鉄片	１号溝	＊7.8×1.0×0.45	10.6	両端部を欠損し全体形は不明だが、細身の板状鉄片を基本として、一方がバチ型に開くものである。何らかの刃物ではないかと推定している
427	刃物状鉄片	一括	＊5.4×1.7×0.1	8.6	一方を大きく欠損し、全体形は不明であるが、刃部を形成しているところから、何らかの刃物であると思われる
428	刃物状鉄片	Ｄ－６区	10.2×0.9×0.6	19.4	一見すると刀子のような形状を呈するが、刃部の形成などはなく用途は不明である。未成品の可能性もある
429	刃物状鉄片	Ｆ－10区	＊3.6×0.7×0.25	2.5	両端を大きく欠損し、全体形は不明であるが、刃部を形成するところから、刀子の部分にも類似している
430	鉄釘	Ｆ－10区	＊3.1×0.6×0.5	3.1	細い四角柱状の鉄片であり一部を欠損する。形状から鉄釘の一部分であろうと思われる
431	鉄釘	Ｊ－５区	＊4.7×0.5×0.3	3.5	両端部を欠損するが、四角柱状の形状から、釘と思われる鉄製品である
432	鉄釘	Ｇ－９区	＊5.1×0.4×0.25	3.0	四角柱状の細身の形状などから釘と判断される。全体がややねじれている
433	鉄釘	一括	＊5.0×0.45×0.45	6.2	端部を欠損するが、四角柱状の形状から、釘と思われる鉄製品である
434	鉄釘	Ｅ－９区	＊5.4×0.5×0.5	8.5	四角柱状の断面形などから、釘と思われる。なお一方に向かって次第に細くなっている
435	鉄釘	Ｋ－６区	4.7×0.6×0.4	5.8	全体にねじれているが、四角柱状の形状から鉄釘と推定される
436	鉄釘	Ｅ－９区	5.2×0.4×0.3	3.7	ほぼ四角柱状の断面形などから、釘と思われる。なお一方に向かって細くなるほか、全体がねじれている
437	鉄釘	Ｈ－10区	＊4.3×0.3×0.35	1.7	ほぼ四角柱状の断面形などから、釘と思われる。全体がややねじれる
438	鉄釘？	Ｇ－６区	＊2.8×0.4×0.4	2.6	四角柱状の鉄片であり、鉄釘と推定される。両端部を欠損するため全体形は不明
439	鉄釘	Ｅ－10区	＊3.3×0.6×0.5	5.5	四角柱状の断面形などから、釘と思われる
440	板金状鉄片	Ｇ－11区	＊6.1×0.38×0.23	5.1	断面が長方形を呈する細身の板状鉄片である
441	板金状鉄片	Ｇ－６区	＊3.25×0.66×0.25	2.7	細い板状の鉄片である。両端部を欠損するため全体形は不明
442	板金状鉄片	Ｊ－６区	＊3.0×0.9×0.4	3.5	長方形の断面を持つ板状の鉄片である。一方を大きく欠損するため、詳細は不明である
443	板金状鉄片	Ｆ－10区	＊3.4×0.5×0.3	2.9	長方形の断面形を持つ細身の板状の鉄片である。両端を欠損するため、全体形は不明
444	板金状鉄片	Ｇ－７区	＊2.4×0.6×0.33	2.4	全体が三角形を呈する板状の鉄片である
445	板金状鉄片	Ｃ－６区Ｐ	6.5×0.4×0.35	6.9	長方形の断面形を持つ細身の板状の鉄片である。全体形は不明
446	板金状鉄片	Ｉ－７区	＊7.5×0.5×0.35	9.8	長方形の断面形を持つ、細身の板状の鉄片である
447	板金状鉄片	Ｇ－６区	4.4×0.7×0.2	5.7	長方形の断面形を持つ細身の板金で、途中より緩やかに屈曲する
448	板金状鉄片	Ｄ－６区	2.9×3.8×0.23	3.4	不整形を呈する薄い板状の鉄片である。なお全体がわずかに湾曲する
449	板金状鉄片	Ｇ－７区	＊3.8×1.1×0.4	5.4	長方形の断面形を持つ細身の板状の鉄片である。全体が途中で屈曲している
450	板金状鉄片	Ｆ－９区	4.2×2.8×0.25	8.5	断面が長方形を呈する細身の板状の鉄片である。途中でＬ字型に屈曲する
451	板金状鉄片	2728	＊5.1×1.75×0.1	6.2	一方が広がる薄い板状鉄片である。両端部が欠損するため、全体形は不明
452	板金状鉄片	Ｃ－６区Ｐ	5.2×0.9×0.3	6.4	楕円形の断面形を持つもので、端部がやや広がるものである。全体形不明
453	板金状鉄片	3144	5.3×1.4×0.3	6.0	薄い板状の鉄片であり、一方は両側面から包み込むように折り返してある。全体形などは不明
454	板金状鉄片	Ｇ－９区	2.8×1.8×0.2	4.4	不整形をなす薄い板状の鉄片である
455	異形鉄製品	Ｄ－８区	＊2.8×1.5×0.4孔0.2	6.7	両端部を欠損するため全体形は不明であるが、目釘を留める穴のようなものが、穿孔されている
456	板金状鉄片	Ｈ－10区	3.3×3.6×0.1	10.8	ほぼ四角形を呈する板状の鉄片である。端部は緩やかに折り返してある
457	板金状鉄片	Ｄ－６区	＊2.4×1.3×0.18	10.8	Ｌ字型に屈曲する板状の鉄片である。端部の一方が欠損する
458	板金状鉄片	Ｅ－９区	2.5×2.2×0.1	8.5	ほぼ四角形の形状を持つ薄い板状鉄片である
459	板金状鉄片	Ｅ－10区	2.5×1.6×0.9	3.6	半円形に屈曲した板状の鉄片である
460	環状鉄製品	Ｆ－８区	2.0×2.3×0.3	2.4	いびつながら、ほぼ円形を呈する環状の鉄製品である。なお端部同士は接合していない
461	環状鉄製品	Ｈ－７区	2.5×＊1.2×0.32	2.1	両端部を欠損するものの、全体ではほぼ円形を呈すると思われる。装飾品？
462	異形鉄製品	Ｅ－10区	＊6.95×1.05×0.38	7.2	一方を欠損するため、全体形は不明だが、端部を折り返して環を作っている。何かを通して使用したものと思われる
463	異形鉄製品	Ｇ－７区Ｐ	3.4×3.75×0.08	8.1	五角形の薄い板状の鉄片である。表面には横に５列にわたって穿孔している。何かの装飾に使用したものか
464	環状鉄製品	Ｄ－10区	4.1×4.7×0.6	28.6	ややいびつではあるが、環状を呈する遺物である
465	鉄斧	Ｃ－５区	7.1×4.6×2.1	114	比較的小型の両刃の斧である。内部には基部から空洞があり、柄を挿入して装着するような構造である。刃部は片減りするなど使い込まれた痕跡がある
466	紡錘車	Ｄ－８区	＊3.3×＊3.4×0.1	8.9	半ばを欠損するが、ほぼ円形を呈すると思われる遺物である。類似の出土品の形状から紡錘車と判断する。なお、柄の装着部分については確認していない
467	円形鉄製品	Ｉ－９区	＊6.4×5.1×0.5	51.0	いびつな円形を呈し、中央に穿孔、そして縁辺に面加工などを施すが、欠損のため全体形は不明である。紡錘車にやや似ている
468	紡錘車	Ｆ－６区	＊11.0×6.0×柄径0.4	34.6	薄い円盤状の板金に柄を装着したものである。なお、当遺物は住居跡からの出土である
469	円形鉄製品	Ｆ－10区	4.5×4.5×0.8	53.0	精巧に作られた円盤状の鉄製品である。一部に面を取り段を作るなど厚手でていねいな作りである
104	鏃	24号住	＊9.2×3.5×0.2	41.2	両端部を欠損するものの、刃部の形成の様子や着柄部の折り返しなどから鏃と判断される。柄との装着の角度はおよそ１３０度内外と推定される
95	鏃	19号住	13.0×2.3×0.2	32.2	刃部の先端をわずかに欠損するもののほぼ完形の鏃である。刃部を形成すること、全体の緩やかな湾曲、着柄部の折り返しなど鏃の特徴を持っている。なお刃部との装着の角度はおよそ112度前後と推定される
105	鏃	22号住	12.7×2.2×0.2	32.2	刃部の先端をわずかに欠損するもののほぼ完形の鏃である。刃部を形成すること、全体の緩やかな湾曲、着柄部の折り返しなど鏃の特徴を持っている。なお刃部との装着の角度はおよそ110度前後と推定される

第14表　鉄製品観察表



第119図　銅製品実測図

【その他の銅製品】

474は、蝶番状の銅製品である。何らかの調度品の角につけられていたものと思われ、縁の2面を折り返し角を作っている。また、細い軸が付属していることから可動式で、蝶番のような機能を持っていたのではないかと考えられる。

475は、薄い板状の銅製品で、端部の一方がやや湾曲している。また、一部には塗布された漆らしい塗料の一部が残り、もともとこの製品の表面が加工されていたことを示している。

476は、部分的に欠損するが楕円形を呈する薄い板状の銅製品である。上部には、径1㎜ほどの小さい孔があけられ、何かに取り付けられるか、ぶら下げられていたものと思われる。475とともに、何かの飾り金具と推定している。

477は、頭部が6つの稜線を持つ銅製の鋲である。何らかの調度品に取り付けられた飾り金具と思われる。

478は、丸みを帯びた四角柱状の銅製品で、両端部に大小の瘤状の突起が付属する。全体は緩やかに湾曲する。何らかの装飾品の一部かと思われるが、詳細は不明。

なお、以上の9点と別に、直径3㎝程度の銅のスラッグが1点出土している。　（丸山）

(7)　瓦（第120～125図）

当遺跡から出土した瓦の総量は、コンテナ（60×45×20㎝）詰めにして、約6箱になる。分布の傾向としては、第3号溝遺構からややまとまった量が出土したほかは、他の土器の分布状況と特段の差異は見られない。（第93図遺物分布図）

さて、当遺跡自体は、瓦葺きの建物を持つ遺跡ではないため、すべての瓦は、直線にして約250ｍの距離にある「国分尼寺」などからの搬入品であると思われる。後に述べるように、包含層以外では竪穴住居内のカマド付近から出土することも多く、これらの瓦がカマドの部材として使用されていたことがうかがわれる。つまり、当遺跡では、瓦の搬入→使用→廃棄という一つのサイクルが出来上がっていたため、比較的多量の瓦が搬入されたと考えられるのである。

本項では、出土した瓦のうち、特徴を備えたもの20点をサンプルとして図化し掲載した。

番号	遺跡名	所在地	出土遺物	備考
1	陣山	熊本市	銅銙(巡方,丸鞆,鉈尾)	本報告遺跡
2	神水	熊本市	銅銙,石銙(巡方)	熊本市文化課調査
3	新南部	熊本市	銅銙	熊本市文化課調査
4	二本木	熊本市	銅銙,石銙	熊本市文化課調査
5	御幸木部古屋敷	熊本市	石銙(丸鞆)	県文化課調査
6	上高橋高田	熊本市	石銙(巡方,丸鞆)	熊本市文化課調査
7	熊本城三の丸	熊本市	石銙(巡方)	熊本市文化課調査
8	大江	熊本市	石銙(巡方)	熊本市文化課調査
9	柳町	玉名市	銅銙(丸鞆)	県文化課調査
10	御宇田	鹿本町	石銙(巡方)	県文化課調査
11	楠ノ木	菊陽町	石銙(巡方)	県文化課調査
12	高木原	西合志	銅銙(丸鞆)	
13	湯舟原	旭志村	石銙(丸鞆)	
14	寺尾	松橋町	銅銙(巡方)	県文化課調査
15	境目西原	宇土市	石銙(丸鞆)	
16	田中	小川町	石銙	
17	上の原	城南町	銅銙(鉈尾)	県文化課調査
18		上村	石銙(巡方)	

第15表　熊本県内銙帯出土地名表

No	器種名	出土地点	寸法(長・幅・厚)cm	重量g
470	鉈尾	H－8区	2.3×2.15×0.85	18.8
471	丸鞆	F－6区？	2.1×3.25×0.5	8.9
472	巡方	G－6区P	3.5×4.0×0.4	13.6
473	鉸具？	K－6区	3.0×2.4×0.5	6.7
474	蝶番金具？	F－8区	2.1×2.1×0.25	2.7
475	不明銅製品	2874	2.85×1.4×0.1	3.1
476	不明銅製品	2727	＊2.0×＊2.5×0.1	2.3
477	鋲金具	F－7区	1.7×0.95×0.25	0.8
478	不明銅製品	一括	4.4×0.85×0.4	3.1

＊現存値

第16表　銅製品観察表

【軒丸瓦】（第120図　479～483）

479は、細片だが中心の蓮弁の様子から、「複弁八葉連珠文軒丸瓦」と見られ、中房に13個の蓮子、複弁八葉の蓮弁、さらに珠文16個を周囲に配するものと見られる。国分僧寺・尼寺の創建時（奈良朝中期）の瓦と推定されるものである。

480・481は、ともに「単弁四葉唐草文軒丸瓦」と見られる。小さめの中房に６個の蓮子、蓮弁は大きな単弁４葉で、周囲に四角形を呈する退化した唐草文を配する。国分僧寺・尼寺でも同様の瓦が出土し、奈良朝後期のものと推定されるものである。なお、480は、丸瓦との接着箇所から剝離した様子が観察できる。

482は、分厚い外縁を特徴とするが、細片のため詳細は不明。

483は、瓦当の下部に当たる部分であり、「単弁八葉唐草文軒丸瓦」と見られる。大きめの中房に８個の蓮子、八葉の単弁を配し、周囲に大きな唐草文をめぐらしている。平安朝前期と推定される瓦である。

【軒平瓦】（第120図　484・485）

485は、「均正唐草文軒平瓦」と見られる。上下に連続する珠文をめぐらし、中心に唐草文とそれをはさむ小葉を配している。481・482の丸瓦と対になるものと見られる。また、484は、唐草がやや肥大するが、485と同様のモチーフで作られており、その変形ではないかと思われる。

【平瓦】（第121～123図　486～493）

出土した平瓦の文様は、いずれも凹面は粘土と台の剝離のための布目圧痕がつき、凸面は粘土叩き締めの型の圧痕が残っている。特に凸面の叩きには、縄目と格子目の２種類の型が使用されたようである。両者の出土比率は、縄目が圧倒的に多く、格子目の資料はきわめて少数であった。

まず、486～491は、凸面に縄目叩き痕が見られる例である。489を除く資料は、瓦の側縁部に平行して縄目叩きを施している。叩き痕は、491に見られるように、そのまま粗く残すものもあるが、488のようにナデ調整を施し、無文化するものも認められる。

489は、以上と逆に、側縁部に直交して縄目叩きを施し、その上を粗い刷毛状の工具で調整を行っているものである。

一方凹面の調整は、凸面同様に、布目圧痕をそのまま残すもの、ナデや刷毛目の調整を軽く施すものの両様が見られる。

次に、492・493は、凸面に格子目の叩き痕が見られる資料である。格子目は、5㎜～10㎜前後と、比較的粗い。また凹面は、いずれも布目圧痕がそのまま残されている。

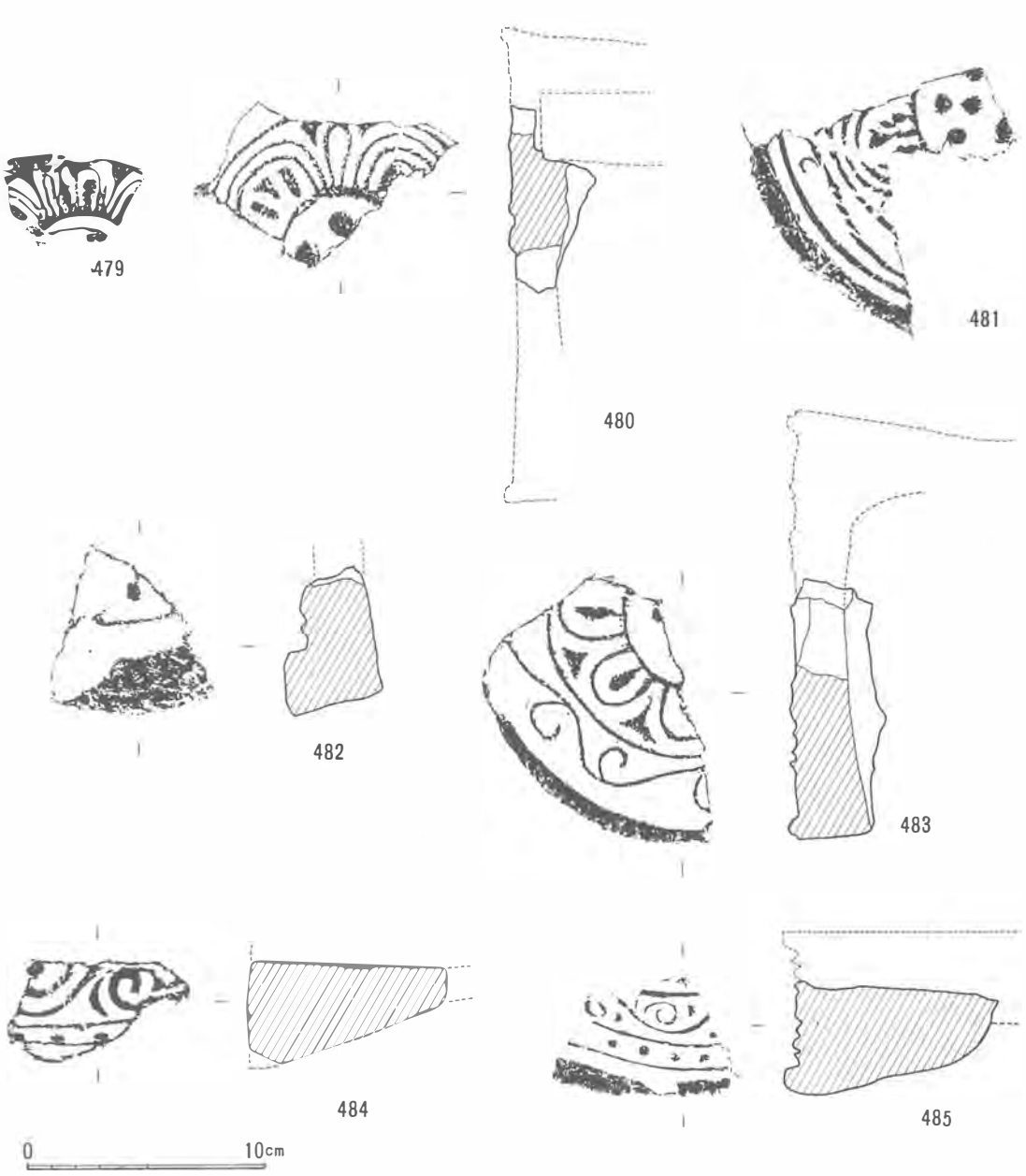
なお、これらの資料のほか、第８号住居跡からも平瓦（第21図，53）が出土している。同住居の項で触れたように、カマドの焚き口前方の床面直上から出土したもので、凹面は火を受け、一面に煤が付着していた。このことから、同遺物は、カマドの部材として利用されたことが推定される。瓦が出土する住居はほかにも多く、瓦が恒常的に使用されていたらしいことが知られるのである。53は、凹面は布目圧痕の上を刷毛で調整し、凸面は側縁に平行して縄目叩きを施した後、凹面と同様にナデている。瓦の分割角度は113°であり、３枚分割と推定される。

【丸瓦】（第123～125図　494～498）

出土した丸瓦のうち、５点を図化し掲載した。494～496は、丸瓦の本体部分、497・498は継ぎ目部分（玉縁）を見ることができる。

いずれの瓦も、凹面部に布目圧痕が残るほか、凸面は、側縁と平行に縄目叩きを施している。ただし、496のように叩き目の上を丁寧にナデて、無文化したものも見られる。

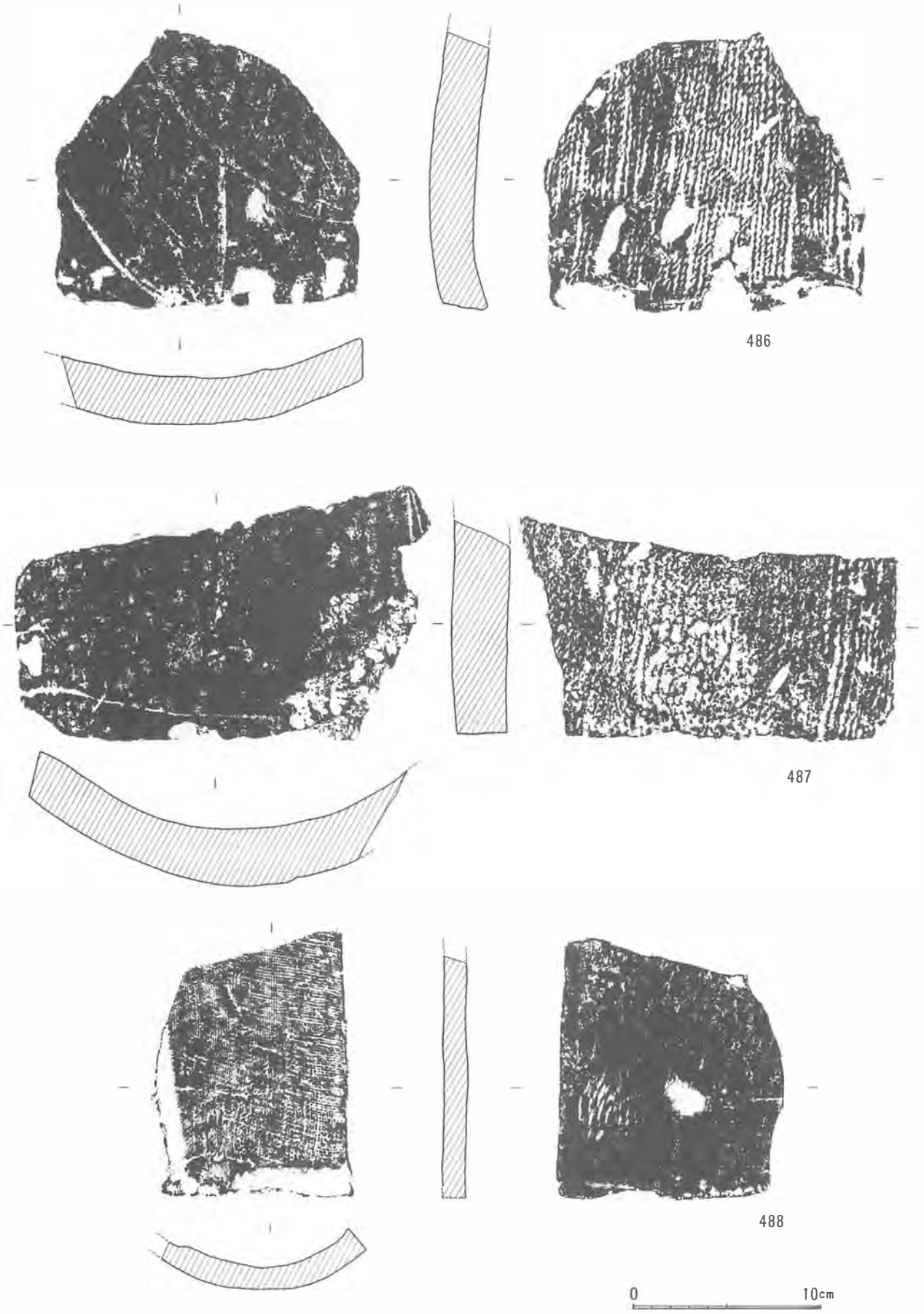
また、このほか第19号住居跡からは、完形に近い丸瓦（96）を１点確認している。破壊されたカマドの内部から出土したもので、53の平瓦同様にカマドの部材として使用されたものらしい。「粘土紐巻上げ技法」により製作されたもので、4～5㎝程度の幅の粘土の接合面が確認できる。調整は、凹面には布目圧痕が残るほか、凸面にはヘラ状の工具で側縁と平行に大きく整形した上で、直交する方向にナデ調整を施している。（丸山）



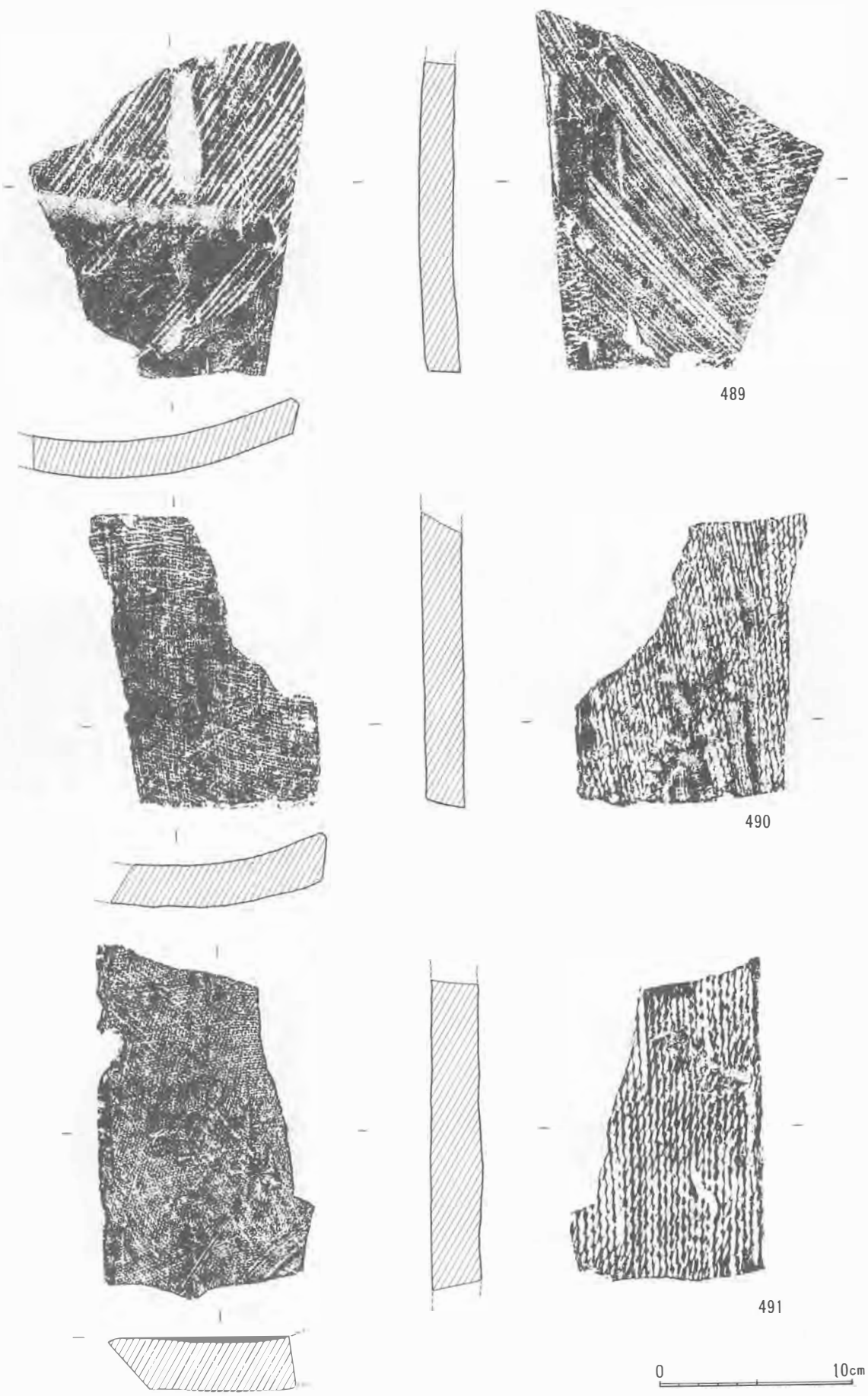
第120図　瓦実測図（1）

No	器種名	出土地点	色　調	そ　の　他
53	平瓦	８号住	黄灰色	凹面は、布目圧痕の上を刷毛で調整し、凸面は側縁に平行して縄目叩きの後凹面と同様に刷毛でナデている。瓦の分割角度は約113°と推定される。なお凹面には、カーボンが付着する
96	丸瓦	19住23	灰白色	「粘土紐巻上げ技法」により製作されたもので完形である。調整は、凹面には布目の圧痕が残り、また凸面には、ヘラ状の工具で大きく整形した上で、ナデ調整を横方向に施すため無文化
162	平瓦	３号溝	黒灰色	凸面は、縄目叩きのあと、間隔の広い櫛状のもので施文する。凹面は、ナデ調整を施すため、布目圧痕はほとんど残らず
169	丸瓦	４号溝	黄灰色	凸面は、縄目叩きの上をナデており無文化、凹面は布目圧痕が残る
479	軒丸瓦	G－11区	赤褐色	複弁八葉連珠文軒丸瓦。国分僧寺、国分尼寺の創建時の瓦。奈良朝中期。火を受けたものか赤褐色を呈する
480	軒丸瓦	1957	黒灰色	単弁四葉唐草文軒丸瓦。国分僧寺、国分尼寺の瓦としては第二番目に出てくるもの。奈良朝後期。瓦当と丸瓦の接着箇所が確認できる
481	軒丸瓦	5704	黒灰色	単弁四葉唐草文軒丸瓦。国分僧寺、国分尼寺の瓦としては第二番目に出てくるもの。奈良朝後期。なお、480と類似するが、当遺物が粗製である
482	軒丸瓦	6117	肌色	外周の縁が太いのが特徴であるが、細片のため詳細は不明
483	軒丸瓦	1956	黄褐色	単弁八葉唐草文軒丸瓦。平安朝前期。瓦当の下部分の出土らしい
484	軒平瓦	6100	灰色	均正唐草文軒平瓦。単弁四葉唐草文軒丸瓦との組み合わせが想定される軒平瓦
485	軒平瓦	１－10区	青灰色	均正唐草文軒平瓦。上縁および下縁に円珠文を施し、中央に唐草文を配している
486	平瓦	4204	黄褐色	凸面は、縄目叩き痕、凹面は布目圧痕が残る
487	平瓦	Ｃ－６区	黄褐色	凸面は、縄目叩きを施した後ナデ、凹面はナデにより布目はほぼ消失
488	平瓦	Ｃ－６区	黄灰色	凸面は、縄目叩きをナデで消しており、凹面は布目圧痕が残る
489	平瓦	6286	青灰色	凸面は、粗い刷毛目で調整し、凹面も同様に布目圧痕の上を刷毛目によってナデている
490	平瓦	3820	黄灰色	凸面は、縄目叩きを施した後軽くナデ、凹面はナデのため一部で布目圧痕が消える
491	平瓦	Ｄ－７区	黄褐色	凸面は、縄目叩き痕、凹面は布目圧痕が残る
492	平瓦	2553	青灰色	凸面は、大きな格子目叩き痕、凹面は布目圧痕が残る
493	平瓦	6344	黄褐色	凸面は、大きな格子目叩き痕、凹面は布目圧痕が残る
494	丸瓦	4887	青灰色	凸面は、縄目叩き痕、凹面は布目圧痕が残る
495	丸瓦	6317	茶褐色	凸面は、縄目叩きの上をナデており無文化、凹面は布目圧痕が残る
496	丸瓦	4240	青灰色	凸面は、ヘラナデを施しており無文、凹面は布目圧痕がそのまま残っている
497	丸瓦	2556	黄褐色	凸面は、縄目叩きの後ナデており無文、凹面は布目圧痕がそのまま残っている
498	丸瓦	968	青灰色	凸面は、縄目叩き痕、凹面は布目圧痕が残る

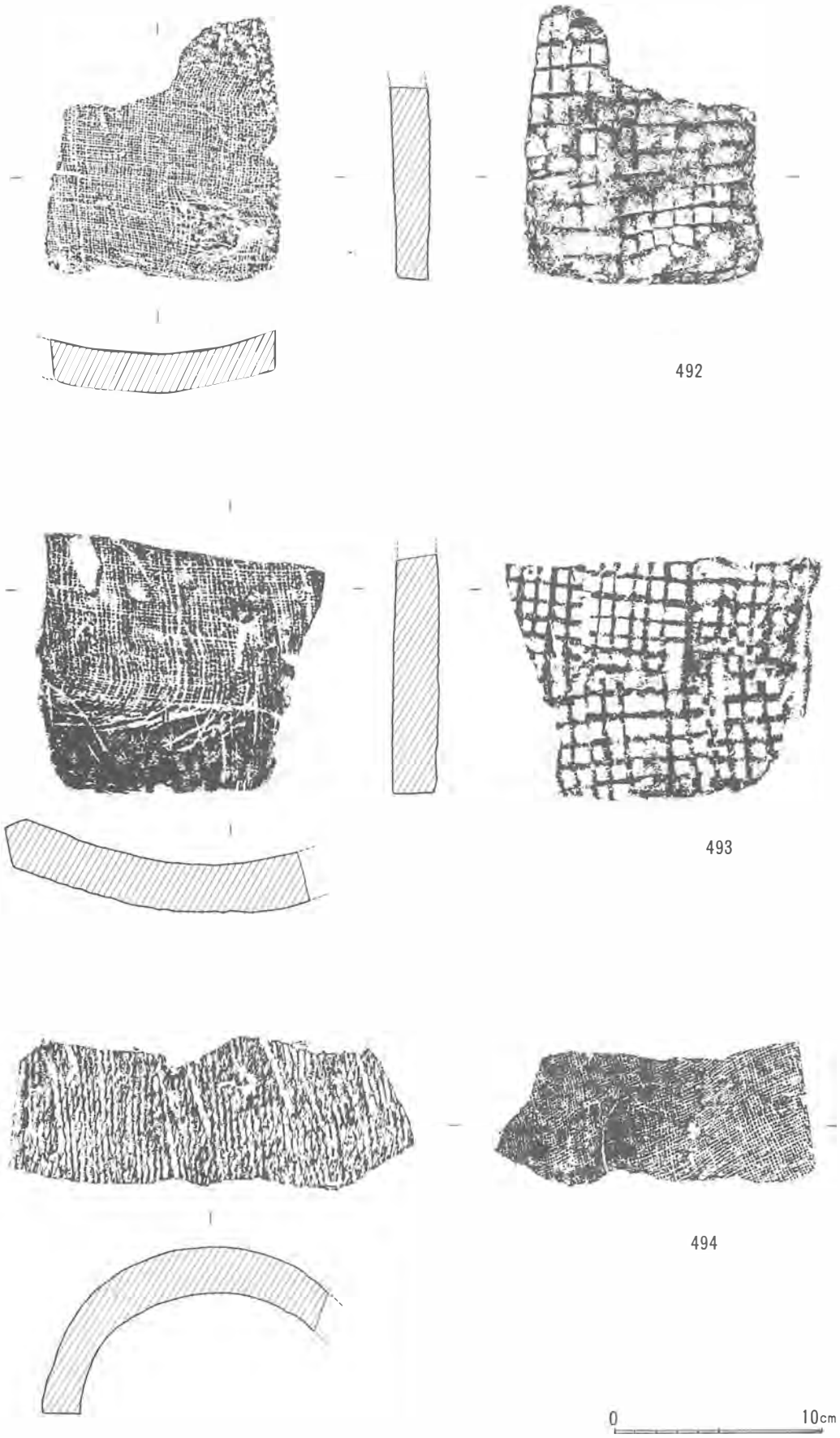
第17表　瓦観察表



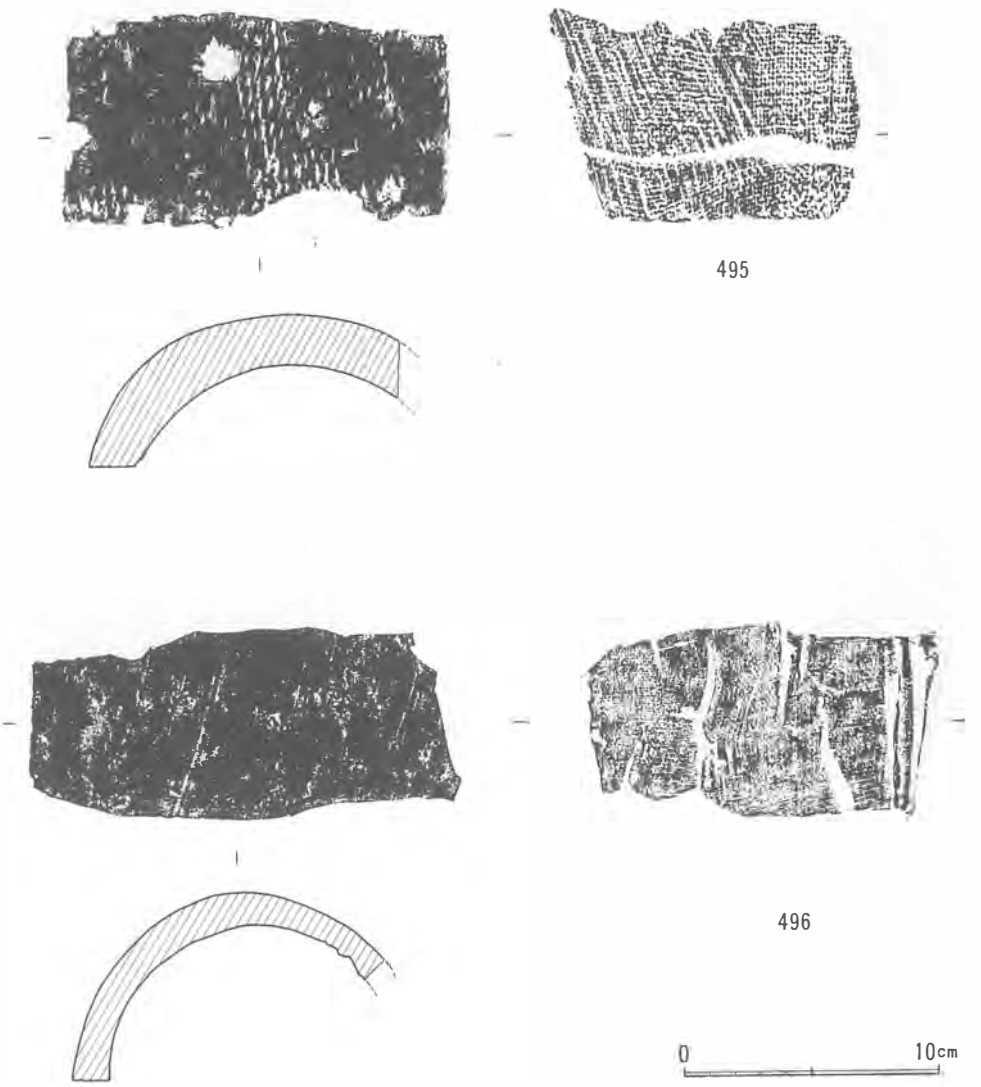
第121図　瓦実測図 (2)



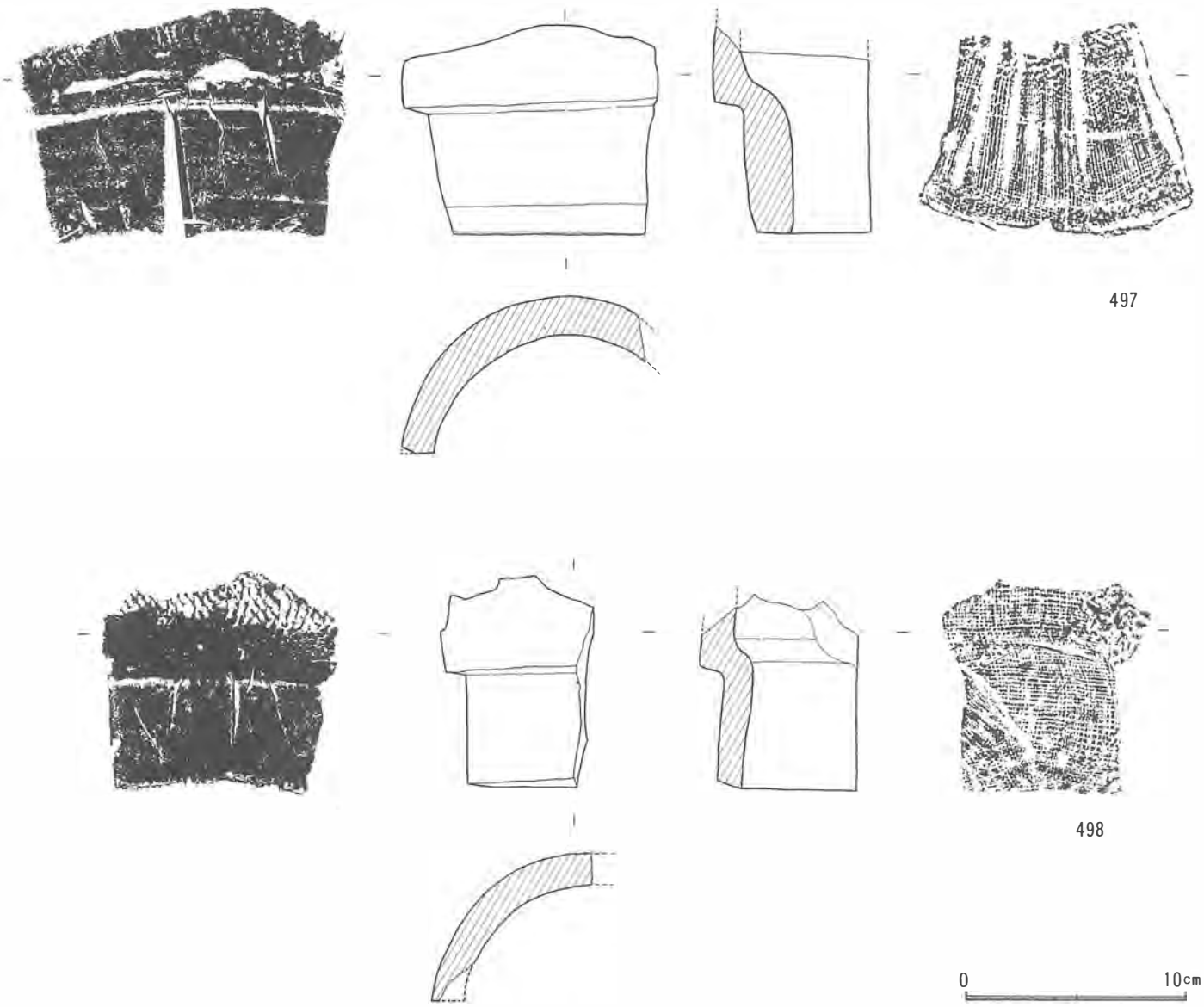
第122図　瓦実測図（3）



第123図　瓦実測図（4）



第124図　瓦実測図 (5)



第125図　瓦実測図（6）

(8)　その他の遺物

【土錘】（第126図　499～509）

土錘は、合計12点が出土している。大まかな形態としては、(a)小型で細身のもの（499）、(b)中型のもの（157.500～507）、(c)大型で太身のもの（508.509）などが見られる。　また、ほとんどの資料は、同時に出土している土師器と、材質も焼成の状況についても類似している。

なお、この土錘の用途は、漁網錘として使用されたと考えるのが普通であろうと思われるが、隣接する蚕糸試験場遺跡（県庁北側駐車場付近）の調査において、川ニナなどの淡水産の貝を廃棄したポケット貝塚が確認されていることと併せて、注目しておきたい。

【紡錘車】（第127図　510～517）

紡錘車は、合計12点（鉄製１点は鉄器の項に報告）が出土しており、ここでは、このうち10点を図化し掲載している。

確認した資料のほとんどは、直径5～6㎝前後と共通性があり、紡錘車の標準的な大きさを示すものと思われる。また、土製は表裏の別が明確でないものが多いが、石製は片面が直線的、もう片面は山形に傾斜をつけてある製品が見られた。

材質は、石製が3点、土製が8点である。石製は、510の滑石製のもの、52の砥石の材質と同様の木目石、513の砂岩を使用したものがあり、特に510は、護符としての「井」の字を刻んでいる点が注目される。

一方、土製の資料としては、512が瓦質、517が須恵質であるほかは、土師質であり、それぞれ、厚みにおいて若干の差異が見られるところである。なお515は土師器坏からの転用品と見られ、土器の底部などを研磨して、紡錘車として使用されていたことが分かる。また517は、須恵器坏からの転用品と思われるが、未穿孔であり、未成品の可能性が高い。　（丸山）

＊現存値

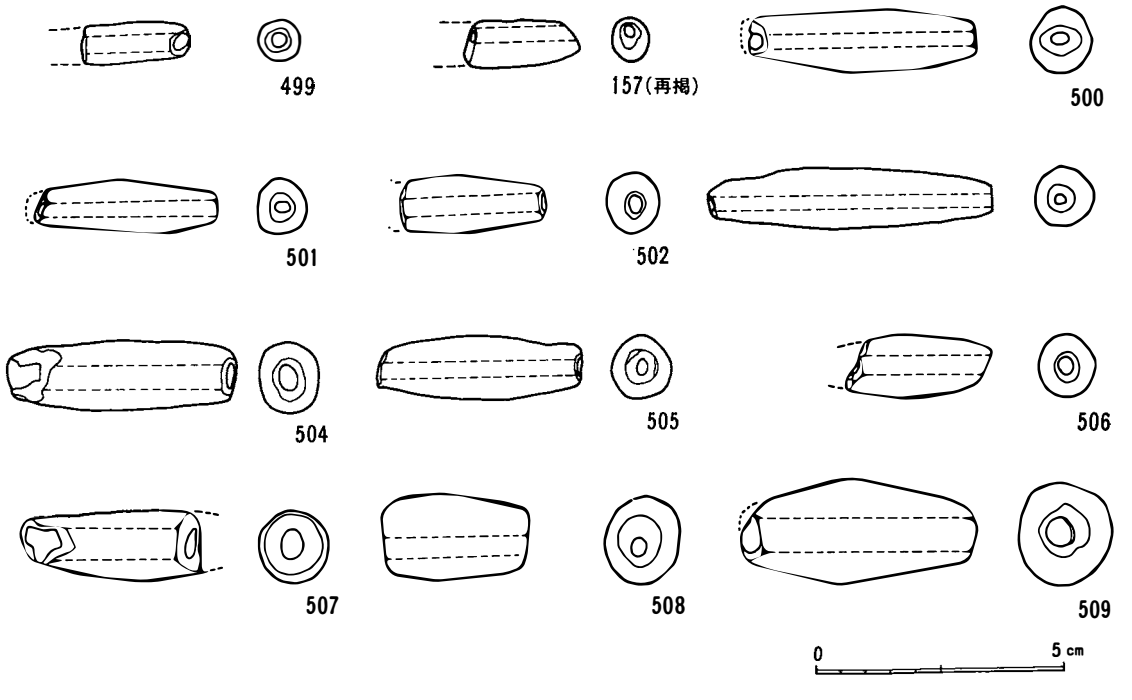
No	器種名	出土地点	色　調	寸法(長・幅・厚)㎝	重量g	そ　の　他
499	土錘	F－6区	赤褐色	＊2.2×0.8×0.3	1.4	胎土も焼成も土師器に類似する。端部の一方を大きく欠損する。焼成は良
157	土錘	3号溝	灰色	＊2.4×0.9×0.18	1.7	胎土も焼成も土師器に類似する。穿孔の位置がやや片側にずれるほか、端部の一方を大きく欠損する。焼成は良
500	土錘	4785	赤灰色	＊4.8×1.3×0.32	7.7	胎土も焼成も土師器に類似する。焼成は不良
501	土錘	F－8区	赤褐色	＊3.8×1.1×0.32	4.0	胎土も焼成も土師器に類似する。端部の一方をわずかに欠損する。焼成は良
502	土錘	F－9区	赤褐色	＊3.1×1.2×0.25	3.8	胎土も焼成も土師器に類似する。端部の一方を大きく欠損する。焼成は良
503	土錘	E－8区	赤褐色	5.8×1.2×0.22	7.8	胎土も焼成も土師器に類似する。焼成は良
504	土錘	4259	肌色	4.7×1.5×0.4	8.4	胎土も焼成も土師器に類似する。端部の一方をわずかに欠損する。焼成は不良
505	土錘	D－10区	赤褐色	4.3×1.3×0.25	6.8	胎土も焼成も土師器に類似する。焼成は良
506	土錘	F－10区	肌色	＊3.0×1.3×0.32	3.8	胎土も焼成も土師器に類似する。端部の一方を大きく欠損する。焼成は良
507	土錘	D－10区	赤褐色	＊3.7×1.4×0.45	6.4	胎土も焼成も土師器に類似する。端部の一方を大きく欠損する。焼成は良
508	土錘	4472	赤褐色	3.1×1.8×0.3	8.5	胎土も焼成も土師器に類似する。全体形は短く太い。焼成は良
509	土錘	G－8区	肌色	4.7×2.1×0.55	16.2	胎土も焼成も土師器に類似する。全体形は短く太い。焼成は良

第18表　土錘観察表

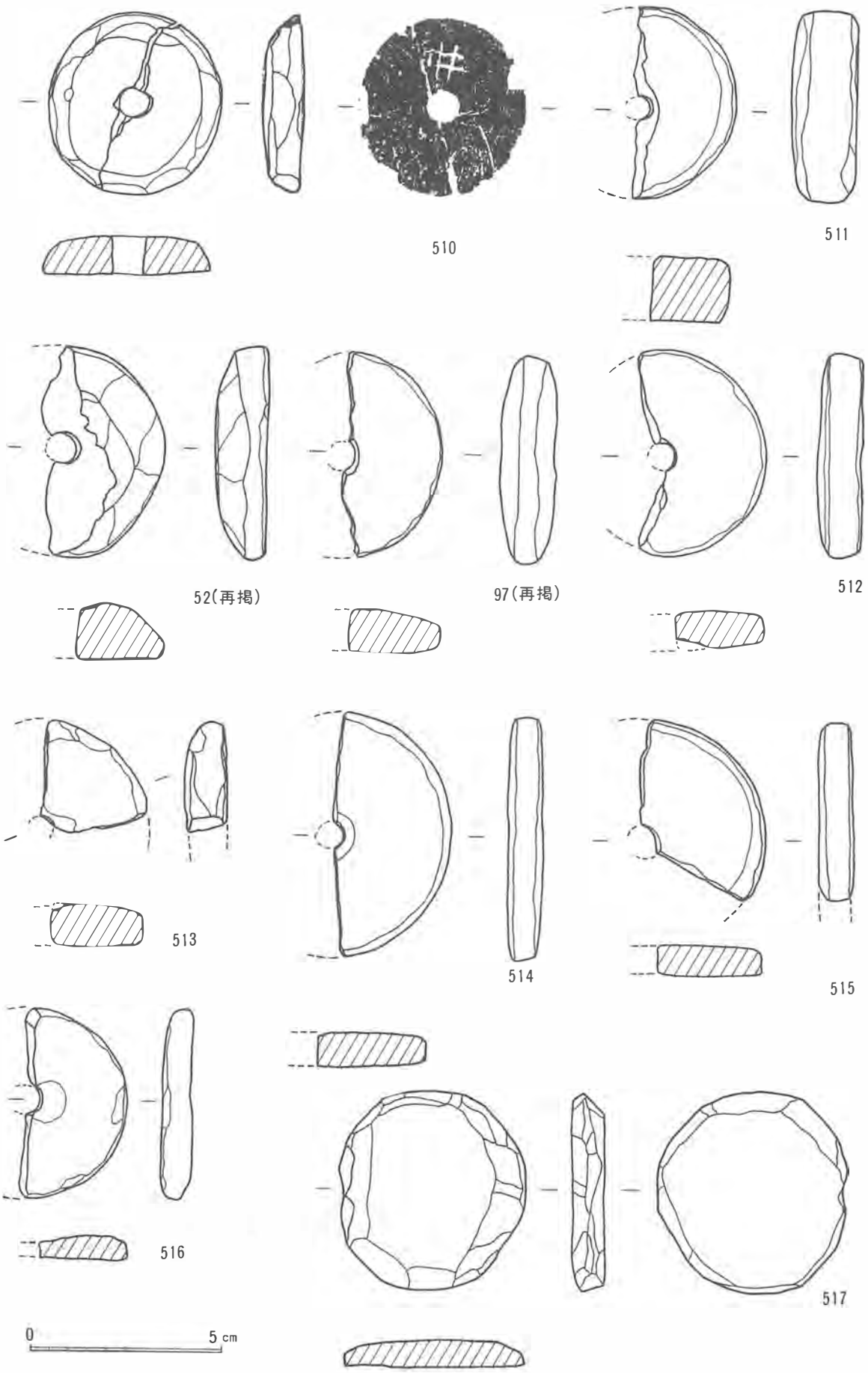
No	器種名	出土地点	色　調	材　質	寸法(径・厚・孔径)㎝	重量g	そ　の　他
510	紡錘車	5434	黒褐色	滑石	4.7×1.0×0.83	33.8	片面は直線的、もう片面は斜めに研磨し、加工している。平坦な面には、「井」の字の線刻が見られる。護符ではないかと思われる
511	紡錘車	5738	薄い赤褐色	土製・土師質	5.0×1.8×0.62	25.8	やや厚手の土錘である。表裏の別は見られない。半ばを欠損する
52	紡錘車	6住No.6	赤褐色	木目石	5.5×1.35×0.75	23.0	砥石に使用される木目石製である。片面は直線的、もう片面は斜めに研磨し加工している。約半分が欠損
97	紡錘車	21住一括	暗黒褐色	土製・土師質	5.4×1.5×0.7	18.0	平安期の住居からの出土であるが、一見縄文土器の焼成を思わせる。全体の半ばを欠損する
512	紡錘車	3796	暗灰色	土製・瓦質	5.4×1.2×0.7	20.4	当遺跡から出土した遺物のうち、唯一の瓦質の紡錘車である。厚みは中程度であり、半ばを欠損する
513	紡錘車	G－6区	赤褐色	砂岩	＊2.9×1.1×？	12.6	砂岩質の石を研磨して作ってある。厚みは中程度であり、約4分の3を欠損する
514	紡錘車	J－4区	赤褐色	土製・土師質	6.3×0.9×0.7	22.4	薄手の紡錘車であり均整のとれた形をしている。全体の半ばを欠損する
515	紡錘車	E－9区	赤褐色	土製・土師質	＊4.7×0.8×＊0.7	13.6	薄手の紡錘車である。全体的に磨耗が激しく土師器からの転用品らしい。なお、側縁部の一面は面取りをほどこす
516	紡錘車	4112	赤褐色	土製・土師質	5.0×0.8×0.8	11.2	薄手の土錘である。穿孔部とその周囲もややくぼんでいるのが特徴である。半ばを欠損する
517	紡錘車	3989	暗灰色	土製・須恵質	5.0×0.8	25.8	須恵器杯等の底部を再利用しているものであり、穿孔部は見られず未成品と見られる

＊現存値

第19表　紡錘車観察表



第126図　土錘実測図



第127図　紡錘車実測図

第４節　その他の時代の遺物

１．聾学校にともなうと思われる遺物

今回調査の行われた場所は、もともと熊本県職員会館「むつみ荘」の敷地であり、県の職員にとっては、研修や会議の場所として永い間なじみの深い場所であった。ところで、このむつみ荘が昭和４５年に建設される前は、もともとこの地は聾学校の敷地として使用されていた。現在地（熊本市東町）に移転する前の熊本県立盲学校は、昭和４年に建設され、次第に拡充されていき、昭和22年の盲学校独立を経て、昭和44年の移転前には第128図「旧熊本聾学校施設配置図」に掲げたような配置で学校施設が整備されていたようである。

さて、調査中、この聾学校の時代のものと思われる遺物が、「ゴミ捨て穴」から出土している。通常この種の出土品は考古学の発掘調査の対象資料としては取り上げないが、聾学校の記憶を現地にとどめたものとして、参考に写真のみを掲載した。

遺物としては、卒業記念の湯飲み、アルミの１銭硬貨、学生ボタン、人形（女の子，乃木希典）、仁丹を入れる容器、飲み薬の薬瓶、目薬の瓶、炭の火起こし、ハーモニカ、インク瓶、おはじき、食器類等があげられる。特に乃木希典人形などは戦前の時代風潮などを表しており興味深い。

２．泥メンコ（畑人形）

当遺跡に限らず、県庁周辺一帯には、直径２～３cm程度の人形のような遺物が、出土品の中に混入することがある。当遺跡で見つかった人形の形態としては、人物や仏などの像、蕪や大根などの野菜、お城などの建物をかたどったものなどが見られ、いずれも粘土を型に入れ整形したあと素焼きしたもので、ちょうど色や材質も土師器に類似したものである。

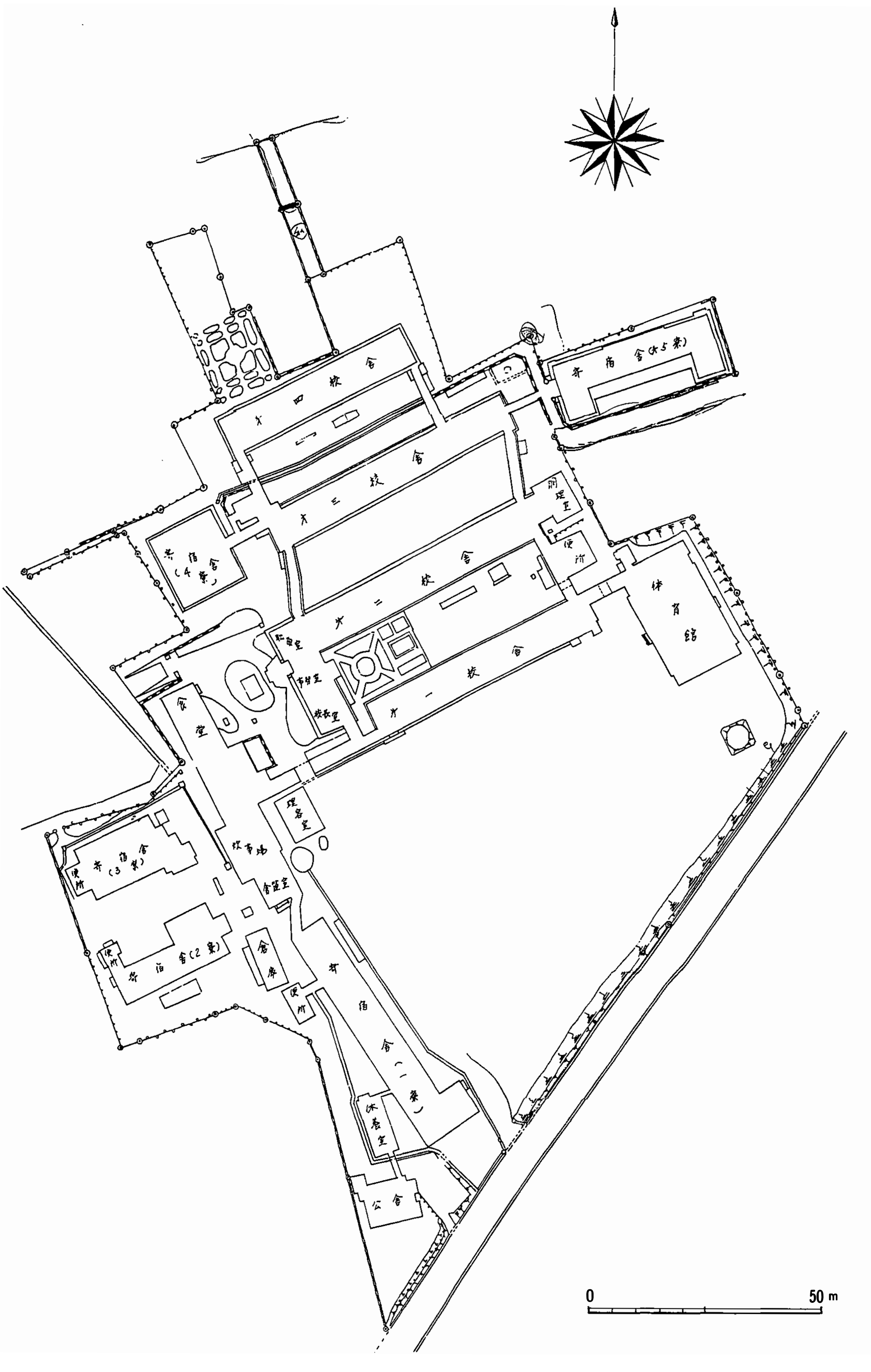
いずれの出土品も比較的新しい掘り込みの中に含まれるもので、「泥メンコ」あるいは「打ち起こし」と呼ばれる熊本の各地に分布する子供の玩具である。

ただ、周辺にお住まいの方の話によると、玩具ならば人家の近くで見つかるのが普通なのに、この遺物は畑の土中にたくさん含まれており、地元の人は「畑人形」と呼んでいた、との由。疑問に思い調べてみると、「泥人形を畑の中に混ぜることで畑の地力を上げるという儀礼では？」あるいは、「遊技の際に火鉢の中に混入したものが、灰と一緒に畑にまかれたものでは？」といった考えなどがあり、詳細は不明だが、参考として写真とともに記録にとどめることにしたい。　（丸山）

※県文化課参事　高木正文氏、同文化財保護主事　山下義満氏らの御教示による

聾学校に伴う遺物

泥メンコ



第128図　旧熊本聾学校施設配置図

第Ⅲ章　総　　括

調査に到る経緯の項に記したように、当遺跡は、周知の遺跡としての登録こそおこなわれていなかったものの、周辺遺跡の調査結果や試掘調査における遺構や遺物の濃密さなどから、奈良時代後半から平安時代初頭にかけての、かなりの規模を有する遺跡であることが予想されていた。このため、調査は旧むつみ荘の建物部分などをのぞいて、そのほとんどの敷地が対象となり、約7.000㎡の広範囲にわたっておこなわれた。

調査は足かけ10ヶ月に及んだが、文化財調査と工事のスケジュールの双方ともに余裕がなく、特に終盤の３ヶ月ほどは、工事の進捗状況を横目で見ながら調査を急ぎ、終了部分から順次工事側に引き渡すなど、綱渡り的な調査工程を余儀なくされた。

しかし、こうした過密な調査工程に反し調査の成果は大きく、古代の公共施設の周辺集落の様相の一端を示す、良好な資料を得られたのではないかと考える。以下に、当遺跡の調査で得られた成果について、簡単なまとめをこころみたい。

〈縄文時代出土遺物について〉

縄文時代の遺物としては、早期の押型文土器（楕円押型文）が数点出土したほか、早期および晩期のものと見られる石鏃・石斧などの石器を確認している。しかし、出土傾向に格別な特徴が見られないことや、この時期の遺構も確認されていないことなどから、これらの出土遺物は、それぞれの時期の拠点となる周辺遺跡からの搬入品であると判断している。

〈弥生時代の出土遺物について〉

この時期の遺物はきわめて少量（石庖丁片が２点、黒髪式土器の甕片１点）出土したのみである。調査区内にこの時期の遺構は見られず、遺物の出土量も少量であるため、本来的な出土とは考えにくい。70棟の弥生後期の住居を擁する集落を確認した神水遺跡など、江津湖周辺には当該期の遺跡が数多く確認されていることなどから、当遺跡の出土遺物も、これらの遺跡よりもたらされたものと考えられる。

〈古代の検出遺構について〉

今回の調査で検出された古代の遺構は、掘立柱建物が３棟、竪穴住居跡51棟、溝状遺構が８本である。遺構・遺物ともに、この時期以外のものはほとんど見られず、当遺跡が古代を中心とした遺跡であることを示している。

・掘立柱建物について

掘立柱建物は、３棟が確認された。内訳は、１号（２間×３間）、２号（３間×５間）、３号（２間×３間，東面に庇）であり、調査区のほぼ中央に３棟が隣接するように位置している。それぞれの建物の関係は、第１号建物は時期がややずれるようであるが、第２・３号建物は、同時期に存在していた可能性が高く、両者がＬ字型に配置されたものと見られる。両者の時期差については、直接の重複関係がなく明確ではない。

なお、建物と竪穴住居との重複関係によると、竪穴住居が数期にわたって作られたうち、判明する範囲では、いずれも掘立柱建物が先行していることがわかる。そのことから、これらの建物は、当遺跡で検出している古い時期の竪穴住居に併行する８世紀中葉から後半頃の時期のものと判断している。

・竪穴住居について

竪穴住居は、51棟を確認した。このほかにも上部が削平され、カマドの燃焼によると見られる焼土が残る部分があり、周辺に建てられていた住居は、本来もっと増えそうである。道路を隔てて隣接する蚕業試験場遺跡では、住居群の南の端にあたると思われる住居を２棟確認している。また東側には、試掘の結果によると、遺物の集中している地点があり、遺構群も広がるものらしい。

さて、今回確認した住居に共通するのは、小型であること、いずれの住居にも南側を除くいずれかの壁沿いにカマドが設置されていることなどがあげられる。柱穴が検出できないものや、床面の硬化面の

分布が、壁際までおよぶものもあり、この時期の竪穴住居が従来考えられている構造と異なり、直立する壁を持つものなどを想定する必要があるものと考える。

竪穴住居の築造年代としては、出土遺物や住居構造、切り合い関係などから判断すると、若干の時期幅があり、8世紀後半から9世紀の中葉後半にかけての時期にほぼ連続して営まれたものと考えている。

なお、掘立柱建物と竪穴住居の組み合わせであるが、この集落が営まれた当初である8世紀の中葉から後半には、掘立柱建物と竪穴住居との組み合わせによる、比較的規則的な配置で集落が営まれ、それが時期が降ると共に、掘立柱建物を伴わない、竪穴住居のみの集落に変遷していったのではないかと推定している。

・溝遺構について

大小8本の溝を検出している。何らかの区画のために作られたものと見られるが、切り合い関係や出土遺物から判断すると、それぞれは若干の時期幅を持つものの、おおむね竪穴住居群の時期よりも後行するものらしい。なお、出土遺物中に中世の遺物はなく、少なくとも12世紀までは降らないものと判断している。

〈古代の出土遺物について〉

今回の調査では土器を中心としたかなりの量の遺物が確認されている。ただし、遺構に伴う遺物は比較的少なく、包含層からの出土遺物がこのうちの大半を占めている。

・出土土器について

当遺跡における出土土器の特徴としては、①出土量において土師器が須恵器を上回っていること。②回転ヘラミガキ土器（土師器）の存在。③黒色土器A類がわずかに見られること。④施釉陶器が存在すること、などの諸点があげられる。

①については、土師器生産において回転台の使用が定着し、各遺跡で出土する土師器の量が須恵器のそれを上回るようになるのは8世紀後半以降のこととされる。ちょうどその時期に最も特徴的なことが、②の回転ヘラミガキ土器（土師器）の出現である。当遺跡でも、第1.2.15.19.34.36～41号住居跡を始め、包含層からも出土している。二本木遺跡（第20次－2住）の一括資料において、回転ヘラミガキ土器と共伴している須恵器の短頸壷（31図77）や、輪状つまみを持つ須恵器の蓋（30図71）が出土した第15.14号住居跡も、同時期と推定される。次に③は、9世紀の前半になると、須恵器生産の衰退とともに、それを埋め合わせるように黒色土器A類が出現するが、それが急増するのは9世紀の後半である。当遺跡では、遺構からは4号住（103図306）、1号溝（86図144.145）から出土するのみで、包含層出土分を合わせても決して量的に多いとは言えない。④の施釉陶器については、③と同様に須恵器を埋め合わせる形で緑釉、二彩等の施釉陶器や、磁器等が流通し始める。ただし、当遺跡で出土するのは、薬壷、浄瓶（103図314.311）等特殊なものも含まれ、単なる埋め合わせというよりもこの集落の住人とその集落そのものの性格を表すものかと思われる。

その他、包含層出土であるが、本文中で分類した土師器坏Ⅱ類（94図185～89）や、土師器椀Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ類（95図195～200）は、上鶴頭遺跡出土土器と酷似しており、9世紀前半から中葉の様相を示すように思われる。また高台を持たない土師器椀（95図201.202）は、神水遺跡（第3次）の出土遺物同様9世紀中葉から後半の様相を示すと思われる。以上から、当遺跡の出土土器の年代は、おおむね8世紀後半から9世紀後半にかかるくらいのものと推定している。

また、当遺跡出土の土器の供給については、須恵器窯の特定を行うのが一つの方法であるが、残念ながら明確に特定の窯の特徴を見いだすことはできなかった。

・文字資料（墨書等）について

さて熊本市内の他の古代の遺跡と同様に、当遺跡の調査でも墨書土器を中心とした多量の文字資料を確認している。詳細は文字資料の項に記したとおりだが、これらの土器のほとんどは、住居跡内にそのまま遺棄された状態で検出したものでなく、言わゆる包含層からの出土遺物である。つまり、文字資料が当遺跡の集落で一次的に使用されていた土器に記

されていたものか、近隣の公的施設などから二次的にもたらされたものか明確に判別することはできなかった。ただし「大寺」銘の箆描き文字など寺院の備品であったことを示すような土器が見られることなどからすれば、調査区外より二次的に持ち込まれた遺物もかなり含まれているものと考えられる。

なお、確認された文字の中には、施設、方角、吉祥句、地名、護符、符号など様々なものが混在していることも、この文字の記された遺物の一次的使用と二次的使用の混在を裏付けているのかもしれない。

〈遺跡の性格について〉

先に述べたように、今回確認した建物は、竪穴式住居が５１棟、掘立柱建物が３棟にのぼり、さらに住居の分布は、今回の調査範囲の外側にもおよびそうである。掘立柱建物の規模や、竪穴住居などの配置状況などから、神水遺跡（熊本市青年会館敷地）に見られるような官衙的なものとは考えられず、「集落」としての性格が強い遺跡である。さて、８世紀後半から９世紀の中葉後半にかけての集落として、どのような性格を持つ集落との位置づけができるのであろうか。

当遺跡の集落が成立した時期の、遺跡の周辺の状況は、国分僧寺、国分尼寺などが相次いで造営され、官人や職人などの集団が周辺に集落を営んでいたことが予想される。今回の調査では、この集落の明確な性格をとらえることはできなかったが、集落が成立した時期や、彩釉陶器や銅製銙帯などの特殊な遺物、そして多量の文字資料の存在などから、文字を解する人物を含み、周辺の公的施設と何らかの関係を保持した集落であることは、おのずと想定されることである。

なお、今回の調査で住居跡内の遺物として確認した墨書土器の中には、異体字で「今」と銘を記したものがある。これは遺跡周辺の旧地名に「今村」と残ることから、地名を示すものではないかと推定している。この「今村」の初出としては、天文四年(1535)の『鹿子木親員知行目録』（鹿子木文書・新熊本市史所収）に「鹿子木西庄」の内として「三石　今村」との記載がある。今回の墨書が地名を示すものだとすると、当遺跡の住居群が成立していた８世紀の後半には、すでに周辺に「今」の地名が成立していたこととなり、周辺の地名が一挙に遡ることとなる。

一般的に「今村」という地名は、「新村」などの呼称と同じく、既存の村落に対して、比較的新しく成立した村落に冠せられることが多い。つまり、遺跡の周辺は、８世紀の後半に国府・国分僧寺・国分尼寺等の成立に伴って成立した集落という可能性も否定できないのである。

なお、県庁の周辺では、当遺跡の調査のみならず、新県庁舎の建設に伴い調査された蚕業試験場遺跡や、立体駐車場敷地の神水遺跡、さらには、市営団地建設に伴って熊本市文化課によって調査のおこなわれた陣山廃寺跡など、大規模な調査が相次いで行われ、それぞれに多大な成果があげられている。今後、これらの複数の調査の成果が、総合的に分析・検討されることで、古代の国府や国分寺等の行政上の要地の周辺の様相が明らかにされることを期待したい。

（丸山、川俣）

引用・参考文献一覧

中島恒次郎　「奈良・平安土器の移り変わり」『太宰府市史考古資料編』　1992年

山本　信夫　「統計上の土器」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集　1990年

赤司　善彦　「大宰府出土土器の検討」『九州歴史資料館研究論集』第15集　1989年

横田賢次郎　「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館研究論集』第２集　1976年

森田　　勉　「大宰府出土の土師器に関する覚え書き(2)」『九州歴史資料館研究論集』第３集　1977年

横田賢次郎　「大宰府出土土器に関する覚え書き(3)」『九州歴史資料館研究論集』第５集　1979年

横田賢次郎　「大宰府出土の風字硯四例について」『九州歴史資料館研究論集』第15集　1990年

松本　健郎　『生産遺跡基本調査報告書』Ⅱ　熊本県教育委員会　1980年

野田　拓次　『興善寺』Ⅰ　熊本県教育委員会　1980年

江本　　直他　『興善寺』Ⅱ　熊本県教育委員会　1980年

網田　龍生　『大江遺跡群』Ⅱ　1993年

網田　龍生　「奈良時代肥後の土器」『先史学・考古学論究熊本大学文学部考古学研究室創設20周年記念論文集』　龍田考古会　1994年

網田　龍生　「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究』Ⅴ　日本中世土器研究会　1994年
廣瀬　正照　『肥後古代の寺院と瓦』　廣瀬正照遺稿刊行会　1984年
大城　康雄　『神水遺跡発掘調査報告書』　熊本市教育委員会　1986年
松本　雅明　「肥後国国分僧寺ー熊本市出水遺跡」「肥後国国分尼寺」『熊本市南部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会　1975年
坂本　経堯　「肥後国分寺」角田文衛編『国分寺の研究』下巻　京都考古学研究会　1938年
松本　雅明他「肥後国分寺」「肥後国分尼寺」『国分寺の研究』西海道
木﨑　康弘　『無田原遺跡』　熊本県教育委員会　1995年
中井　　公　「平城京跡から出土した「はかりのおもり」をめぐって　『同志社大学考古学シリーズ』Ⅴ　森浩一編　1992年
坪井　清足　『平城京再現』　奈良国立文化財研究所　新潮社　1985年
『平城宮跡資料館図録』　奈良国立文化財研究所　1987年
田中　広明　『埋文さいたま』第19号　1994年
谷口　義介　『歴史の霧の中から』　葦書房　1990年
松本　雅明　『熊本の地名』　平凡社　1985年
後藤　是山編『肥後国誌』　1972年
松本　雅明　『肥後讀史総覧』　鶴屋百貨店　1983年
松本　雅明他『新・熊本の歴史２』古代（下）　熊本日日新聞社　1979年
田添　夏喜他『労働金庫本店敷地遺跡』　労働金庫本店敷地調査団　1983年
『大江青葉遺跡』　1976年　大江青葉遺跡調査団
島津　義昭　『平原瓦窯址』　熊本県教育委員会　1980年
平川　　南　「墨書土器とその字形」『国立歴史民俗博物館研究報告　第35集』
中村　　浩　『須恵器』考古学ライブラリー５　ニューサイエンス社　1993年
玉口　時雄　『土師器・須恵器の知識』考古学シリーズ17　東京美術　1984年
江谷　　寛　『歴史時代の知識』　考古学シリーズ７　東京美術　1984年

写 真 図 版

1．昭和22年　陣山遺跡周辺

※1．2とも国土地理院保有写真

2．昭和37年　陣山遺跡周辺

図版 2

調査区全景(1)

調査区全景(2)

調査区中央部分（北から）

調査区中央部分（北から）

調査区中央～西側部分（南東から）

図版 4

調査区中央部分（南東から）

調査区南側部分（東から）

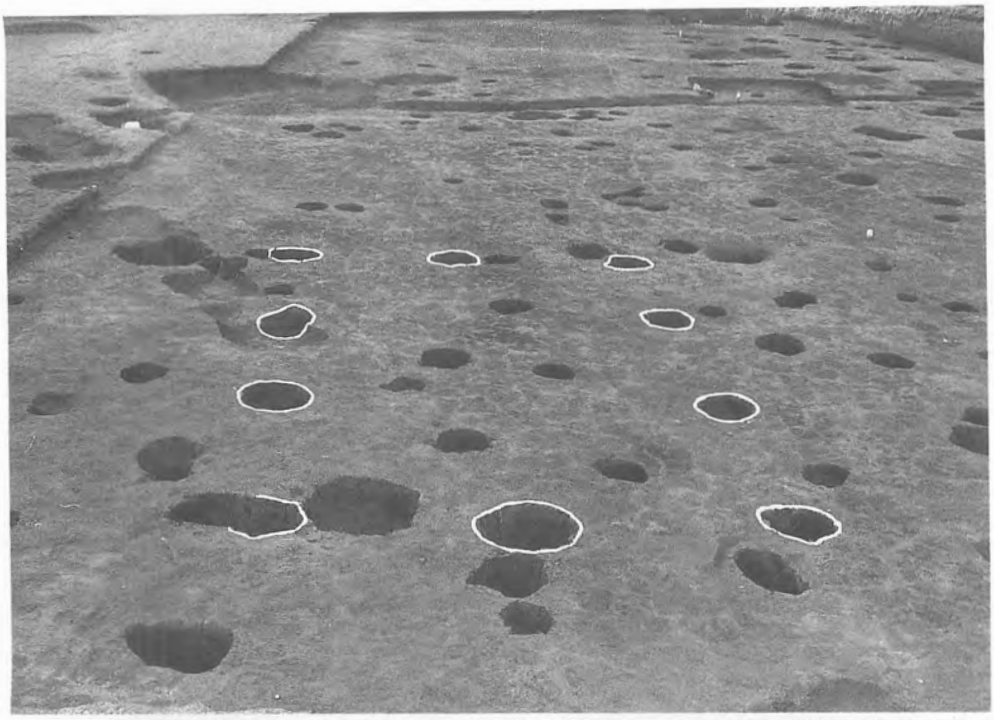
調査区南側進入路部分（北東から）

調査区南側進入路部分（南から）

調査区東側部分（南東から）

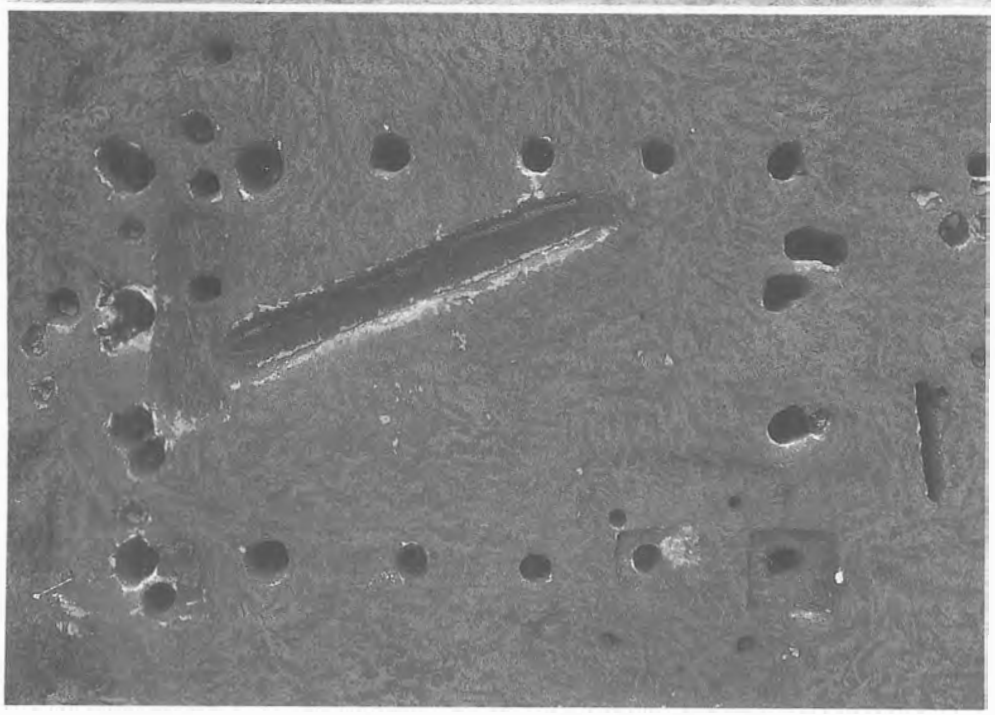
調査区東側部分（北西から）

図版 6

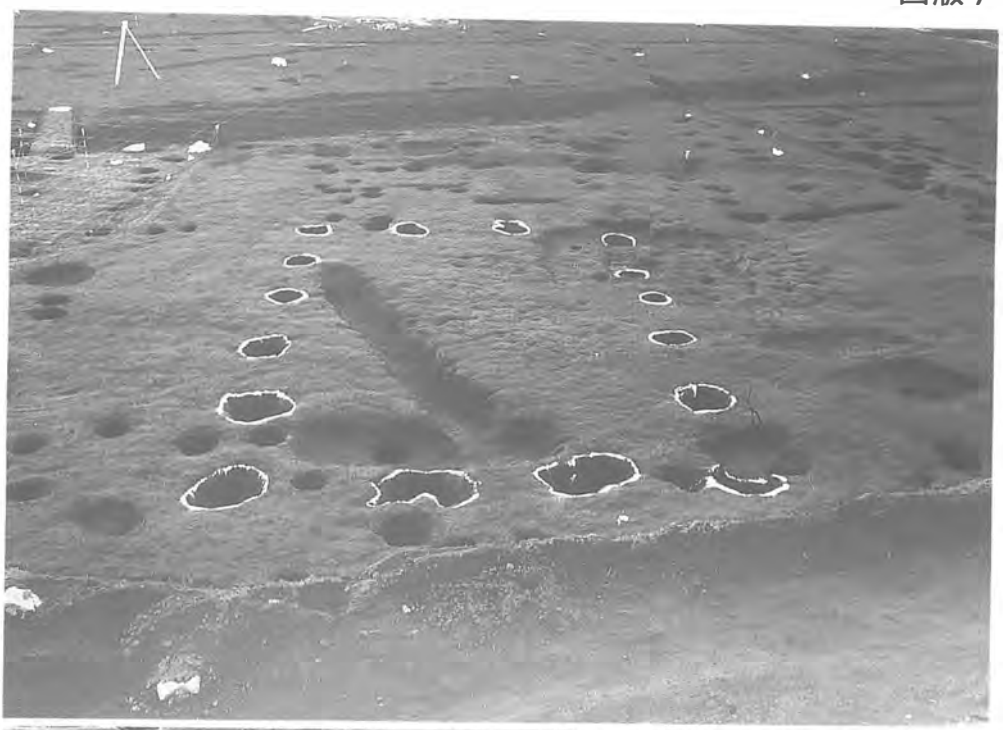


第 1 号掘立柱建物(西から)

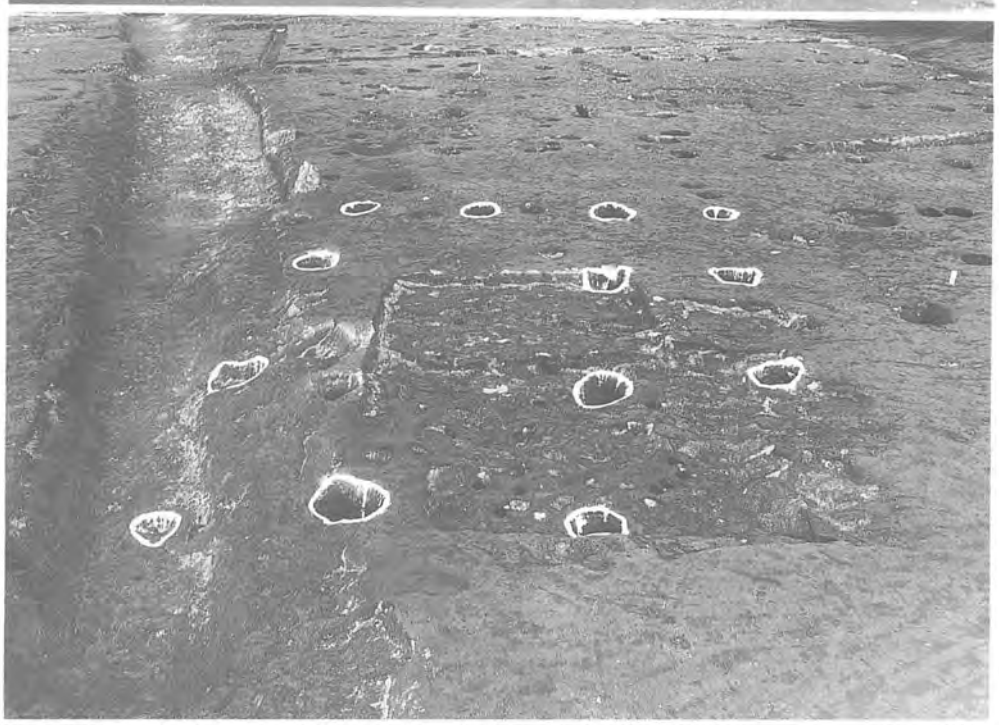
第 1 号掘立柱建物(北から)



第 2 号掘立柱建物



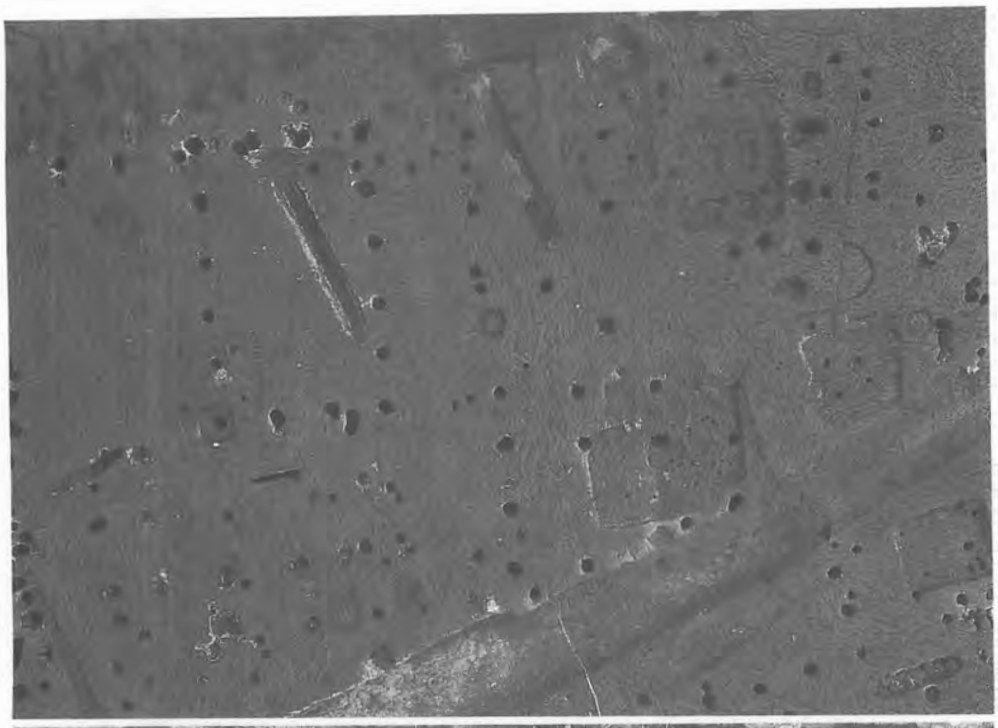
第 2 号掘立柱建物(東から)



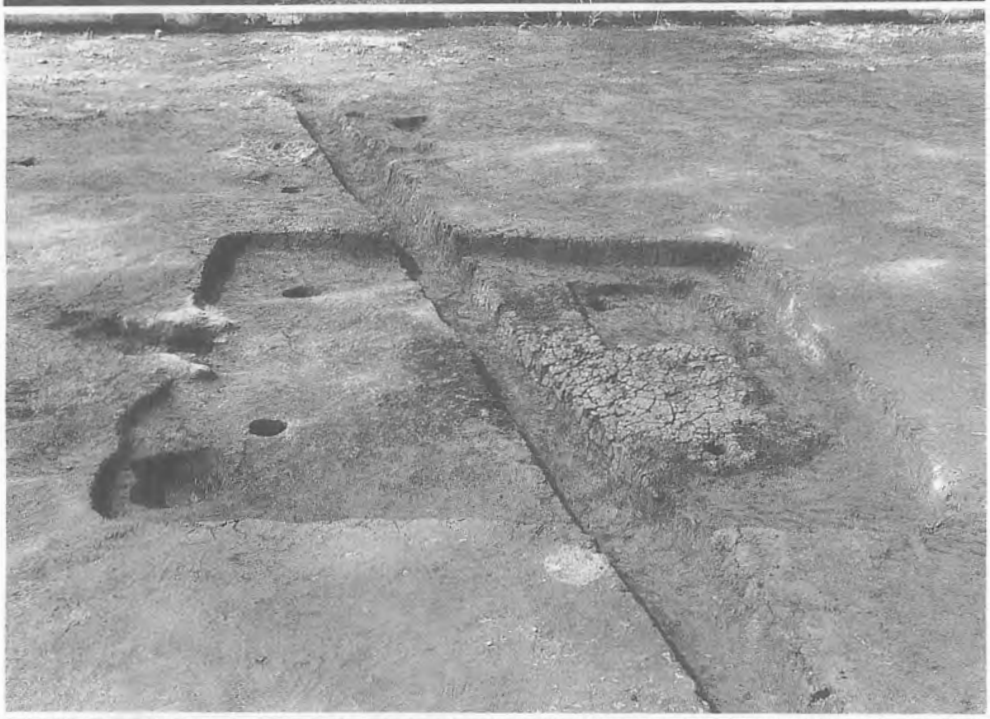
第 3 号掘立柱建物(南から)

第 3 号掘立柱建物(西から)

図版 8



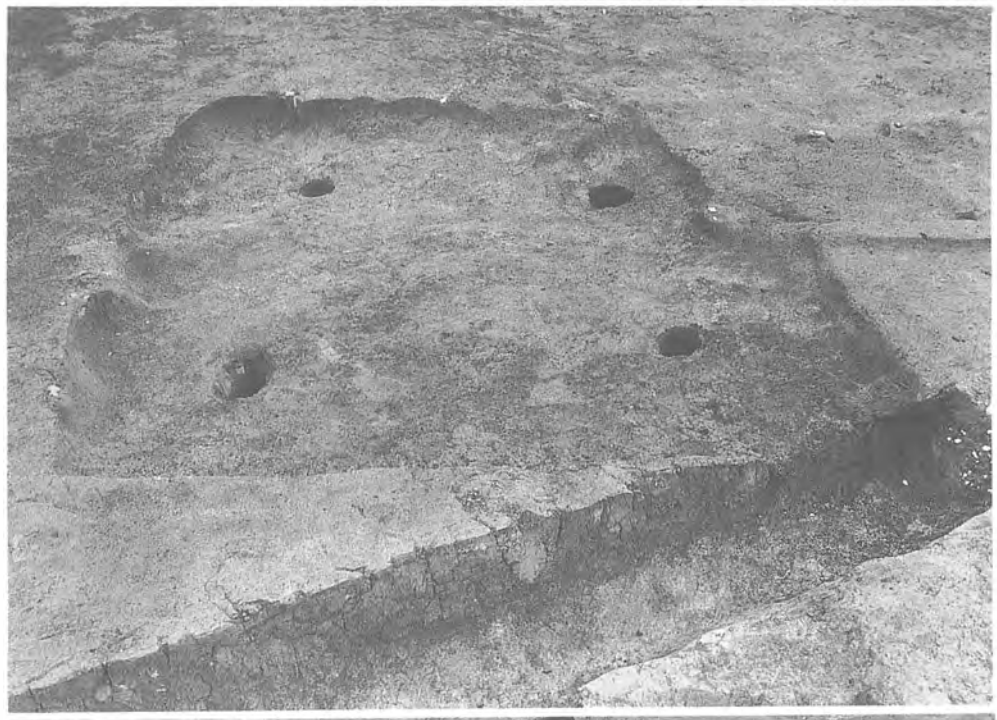
第 2・3 号掘立柱建物配置状況



第 1 号住居跡(南から)

第 2 号住居跡(南から)

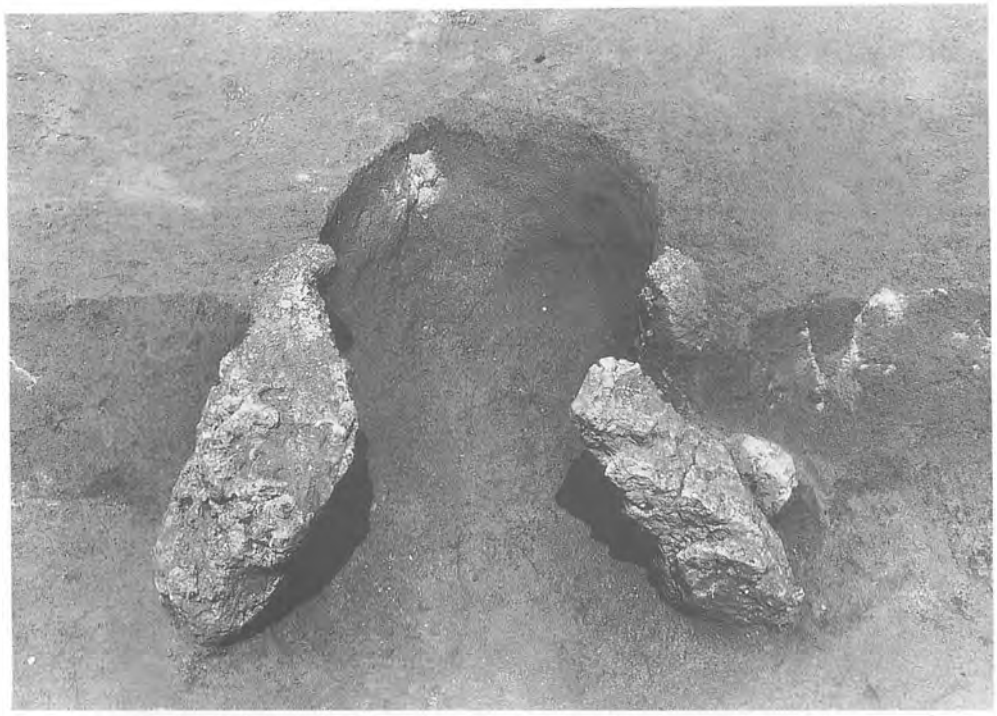
第 3 号住居跡（北から）



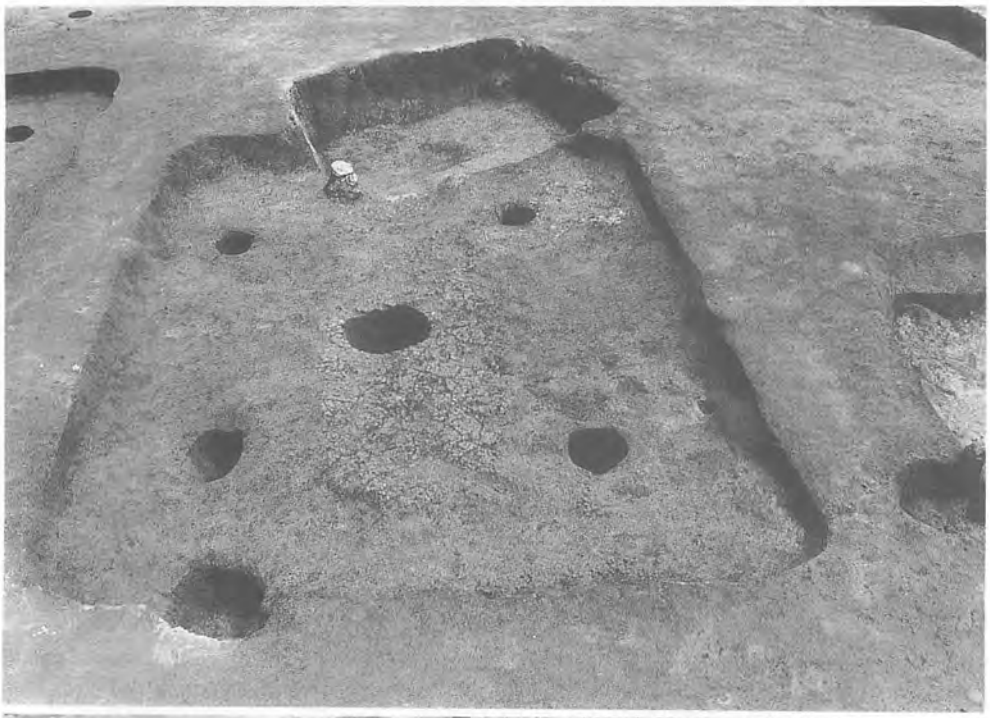
第 4 号住居跡（南から）

第 5 号住居跡（南から）

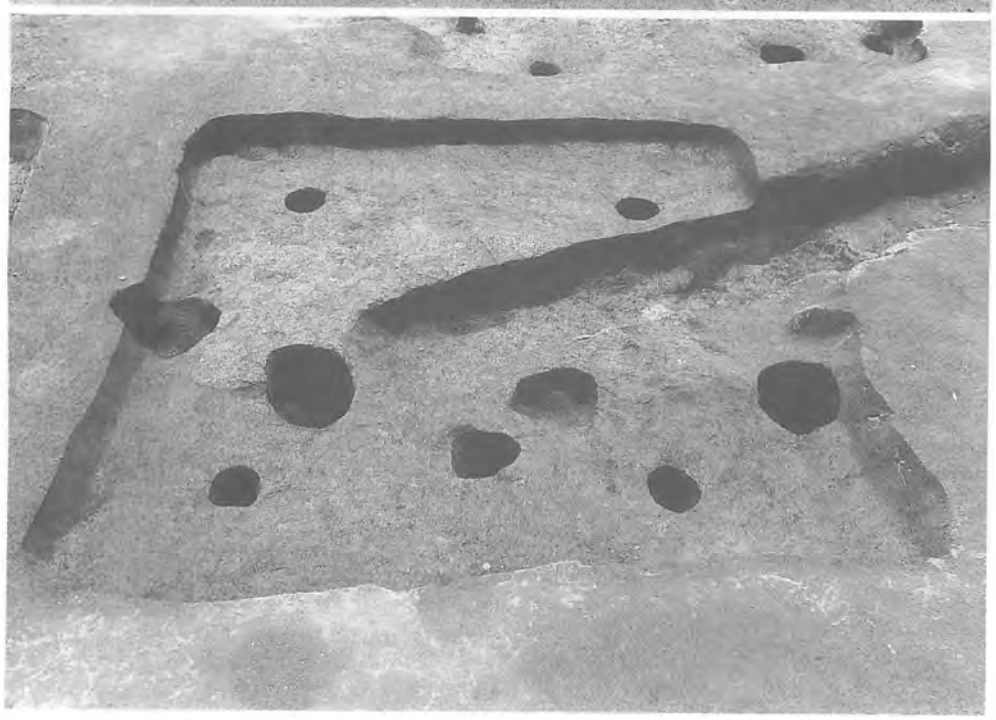
図版10



第５号住居跡カマド（南から）



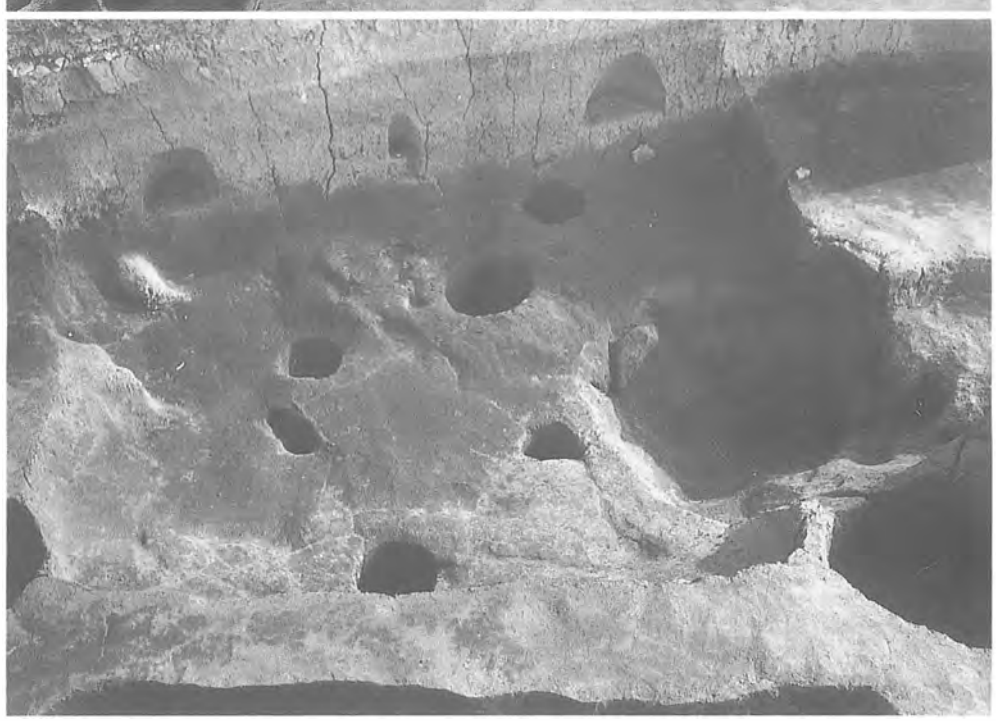
第６号住居跡（西から）



第７号住居跡（北から）

第８号住居跡（南から）

第５～８号住居跡（東から）

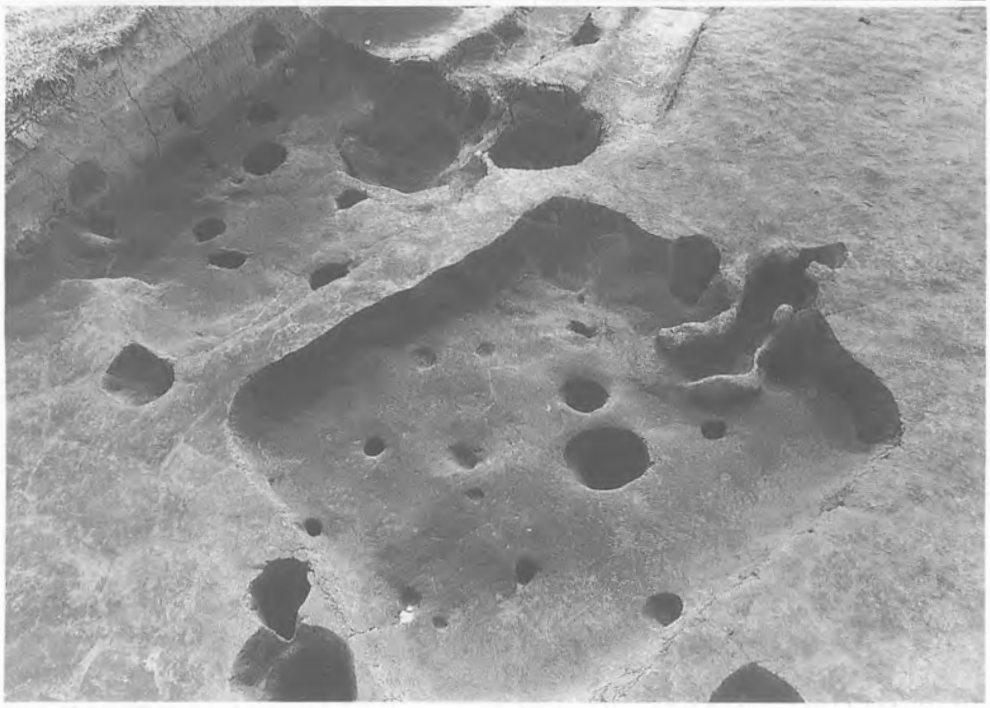


第９号住居跡（北から）

図版12

第10号住居跡(南から)

第11号住居跡(西から)



第12号住居跡(北から)

第12号住居跡カマド（東から）

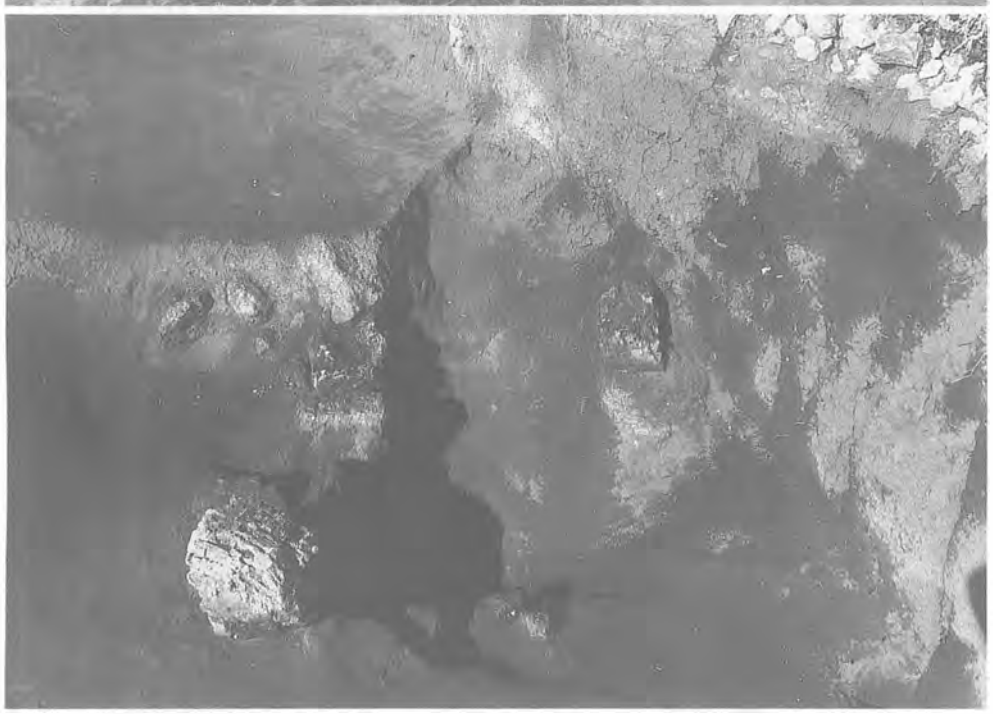
第９・12号住居跡（西から）

第13号住居跡（南から）

図版14

第14号住居跡（北から）

第15号住居跡（西から）



第15号住居跡カマド（南から）

第15号住居跡カマド・部分（西から）

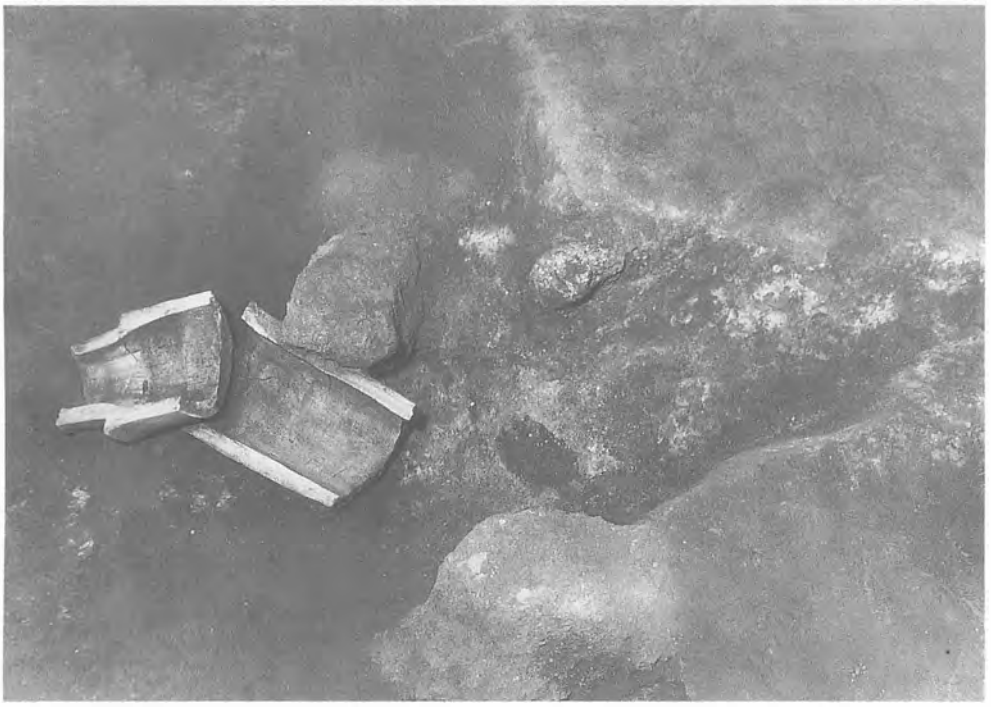
第16号住居跡（西から）

第17・18号住居跡（北から）

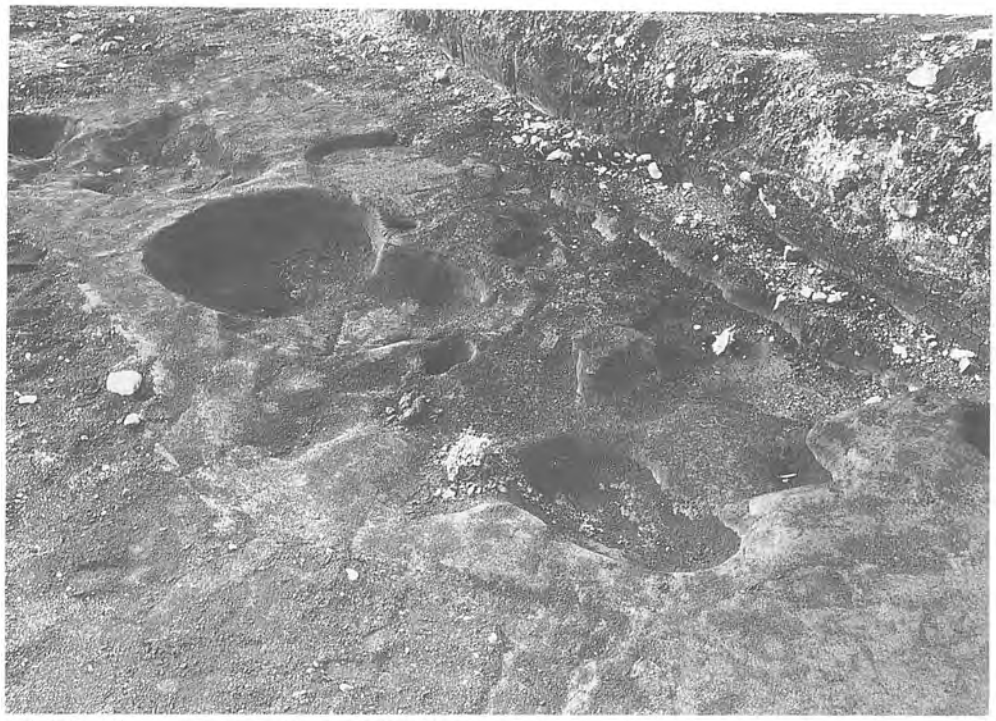
図版16

第19号住居跡(西から)

第19号住居跡遺物出土状況(南東から)



第19号住居跡カマド(北から)



第20号住居跡（東から）

第21～24号住居跡検出状況（北から）

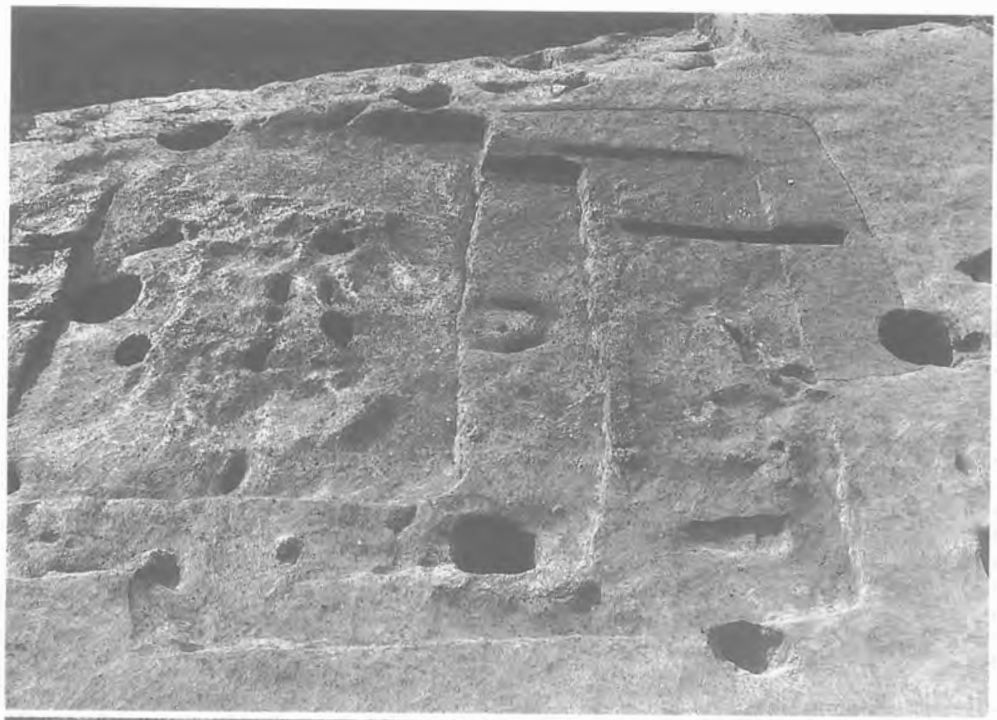
第21号住居跡（南から）

図版18

第21号住居跡カマド（東から）

第22号住居跡（東から）

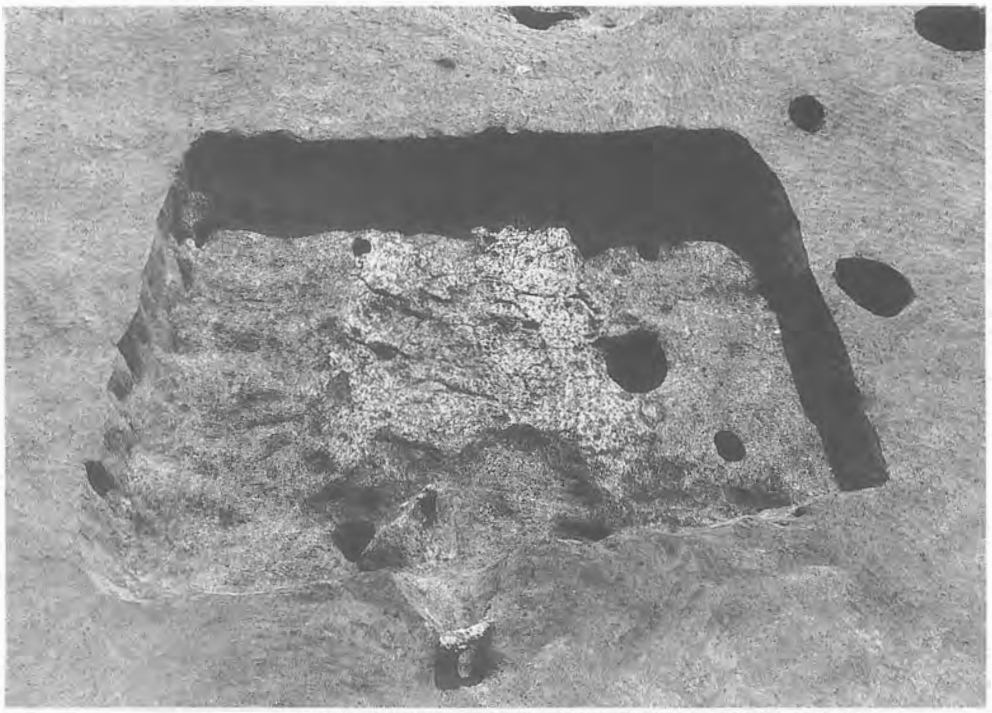
第22号住居跡鉄鎌出土状況



第23号住居跡（西から）

第24号住居跡（東から）

第21～24号住居跡（西から）



第25号住居跡（北から）

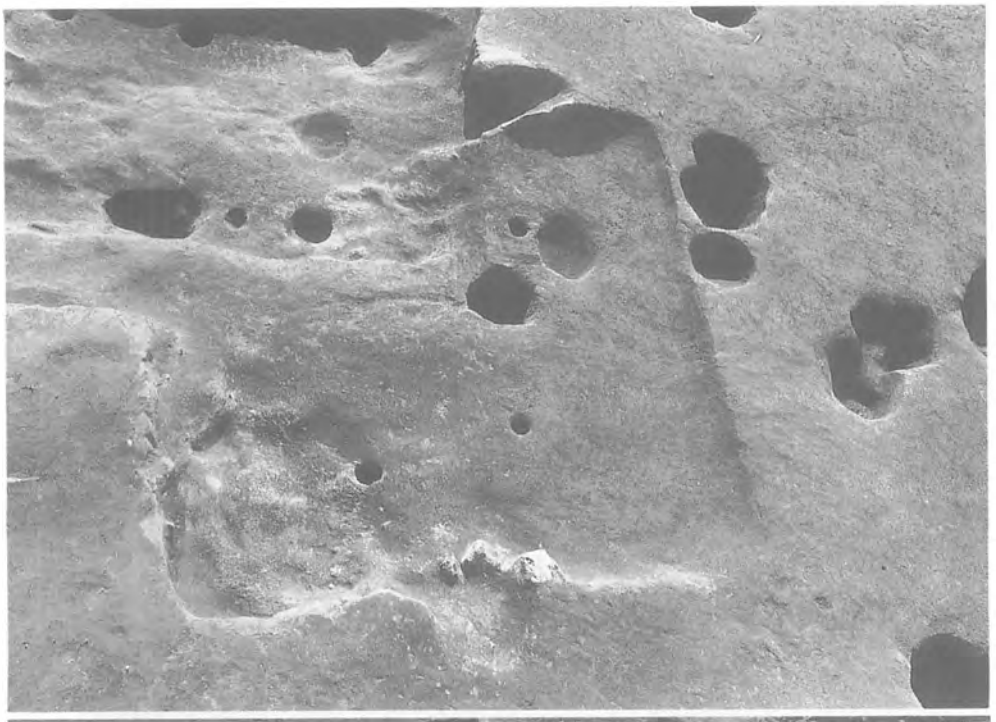
第26号住居跡（東から）

第27号住居跡（北東から）

第28号住居跡（南から）

第29号住居跡（北から）

第30号住居跡（西から）



第31号住居跡(北から)

第32号住居跡(南から)

第32号住居跡カマド(西から)

第33号住居跡（南から）

第34号住居跡（南から）

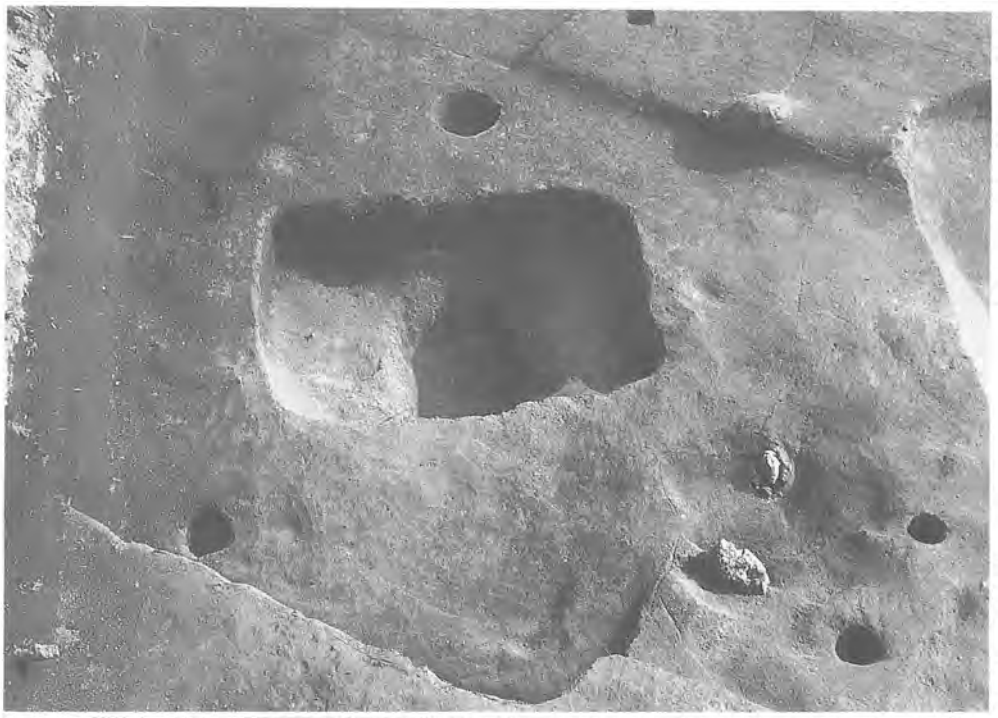
第35号住居跡（北から）

図版24

第36号住居跡（南から）

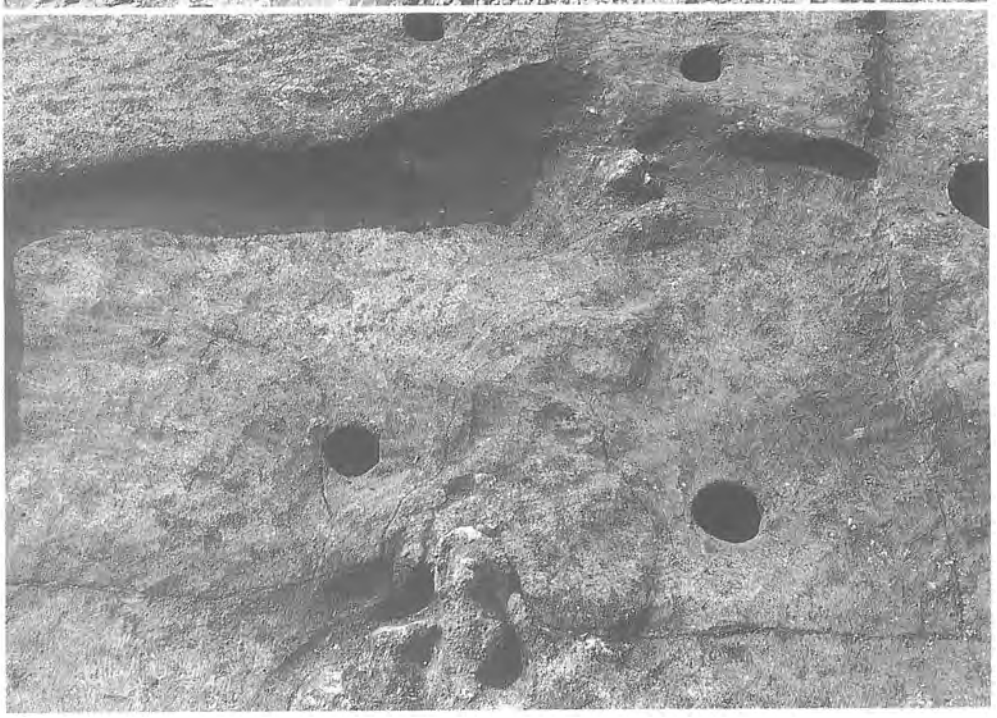
第37号住居跡（東から）

第38号住居跡（北から）



第39号住居跡（北から）

第40号住居跡（東から）



第41号住居跡（東から）

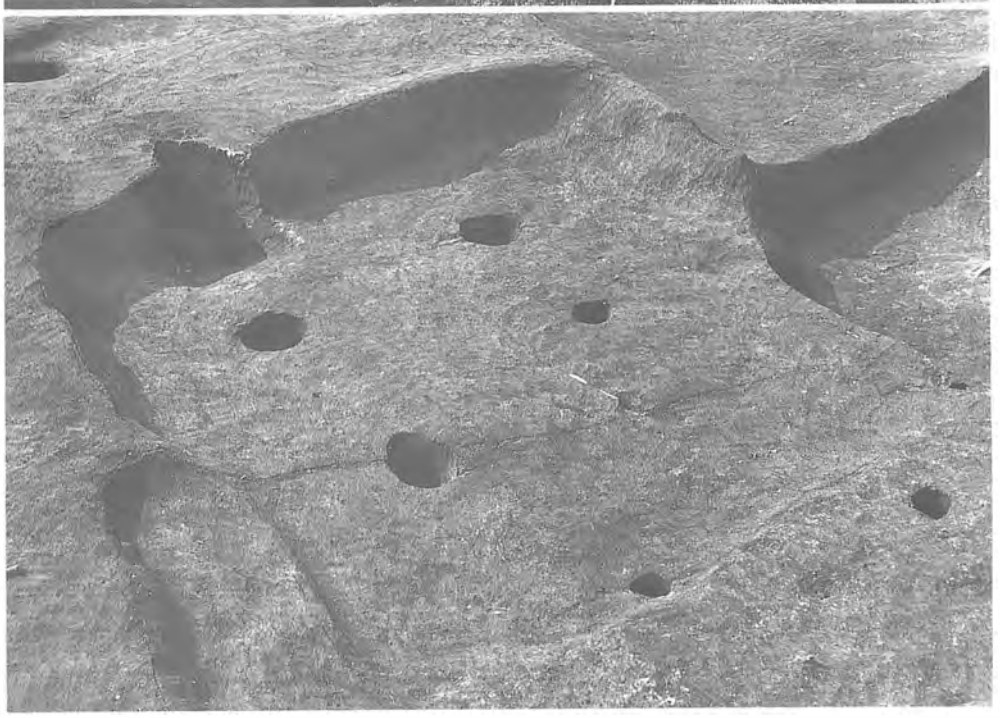
第42号住居跡（西から）

第42号住居跡カマド（東から）

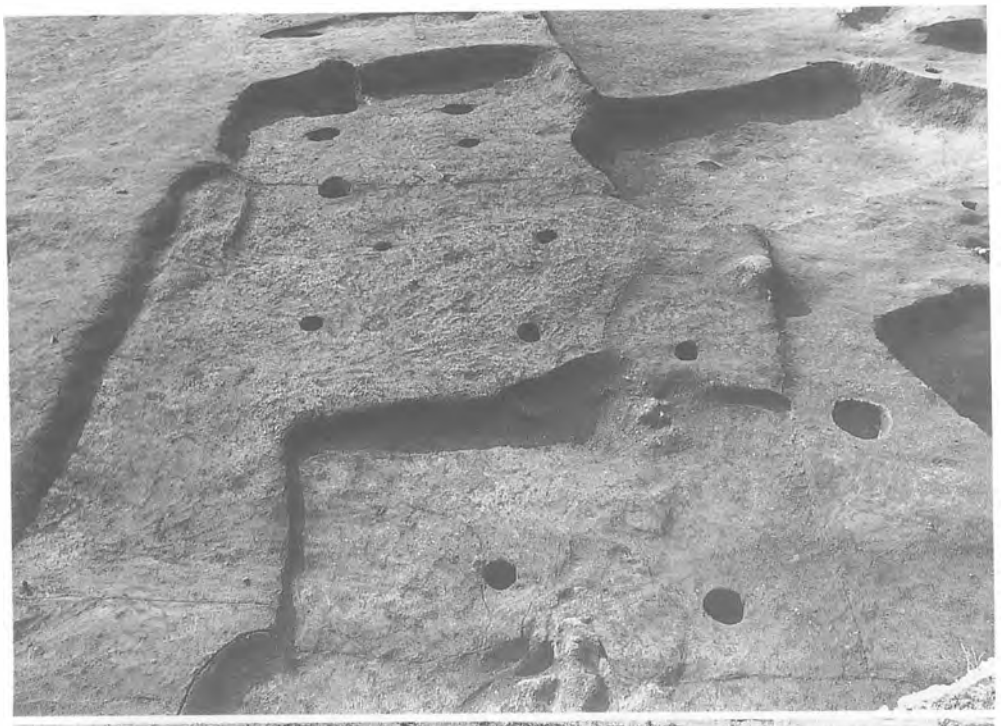
第43号住居跡（西から）

第43号住居跡カマド（南から）

第42・43号住居跡（西から）



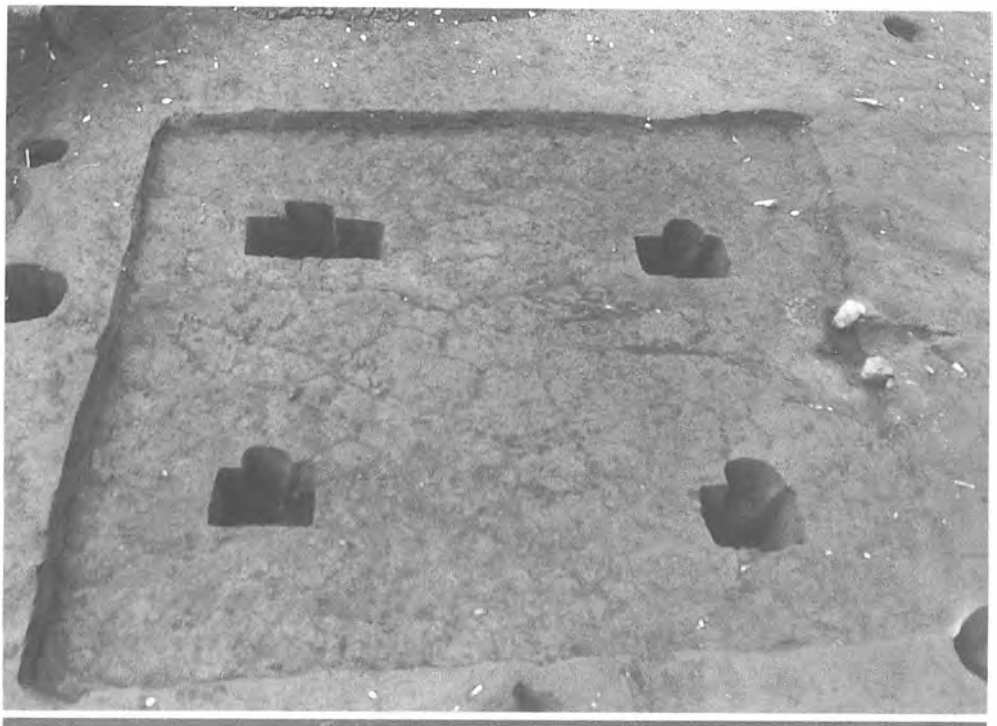
第45号住居跡（東から）



第46号住居跡（東から）

第29～46号住居跡（西から）

第47号住居跡（北から）



第48号住居跡（南から）

第48号住居跡カマド（西から）

第49号住居跡（南から）

第50号住居跡（南から）

第51号住居跡（西から）

第１号溝（北西から）

第１号溝（南東から）

第２号溝（北から）

第３号溝（北西から）

第 3 号溝土層断面

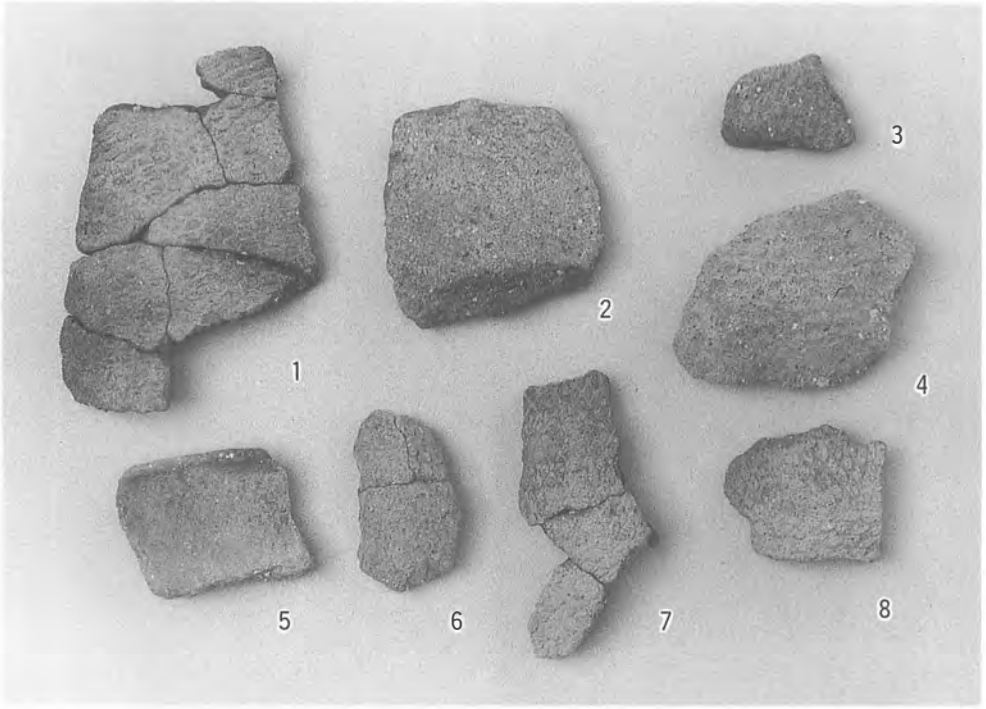
第 3 ～ 5 号溝(西から)

第 4 号溝土層断面(東から)

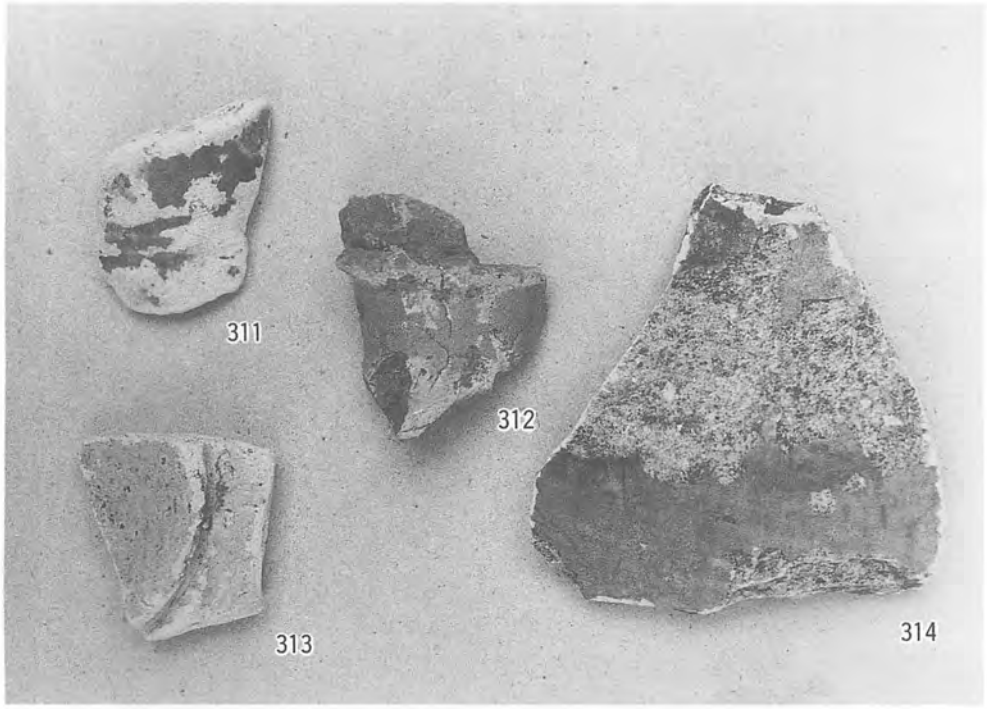
第６号溝（南から）

第７号溝（南から）

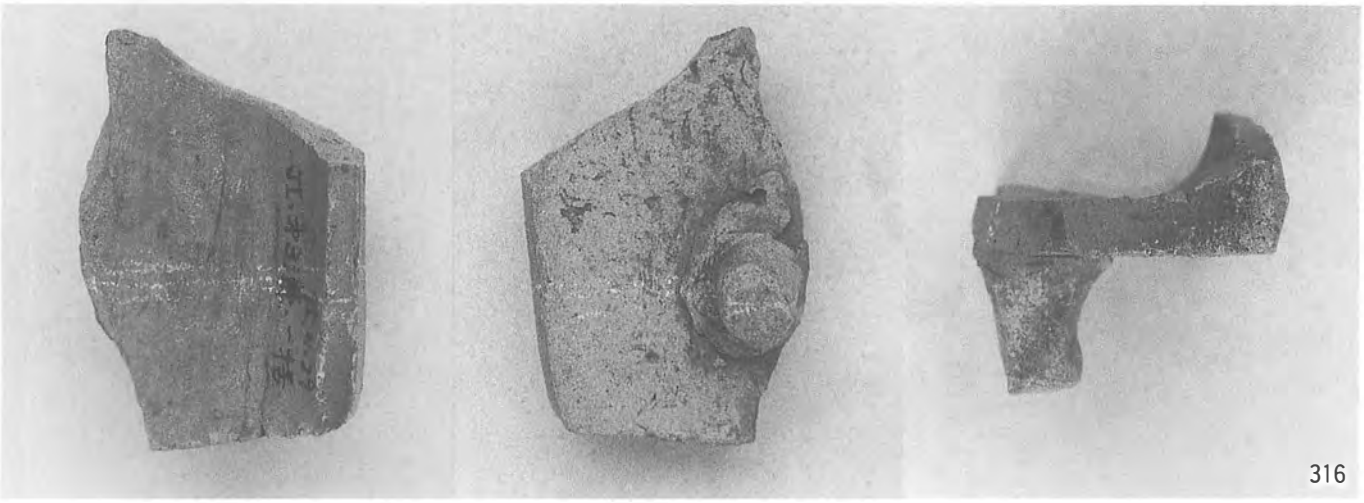
第８号溝（南から）



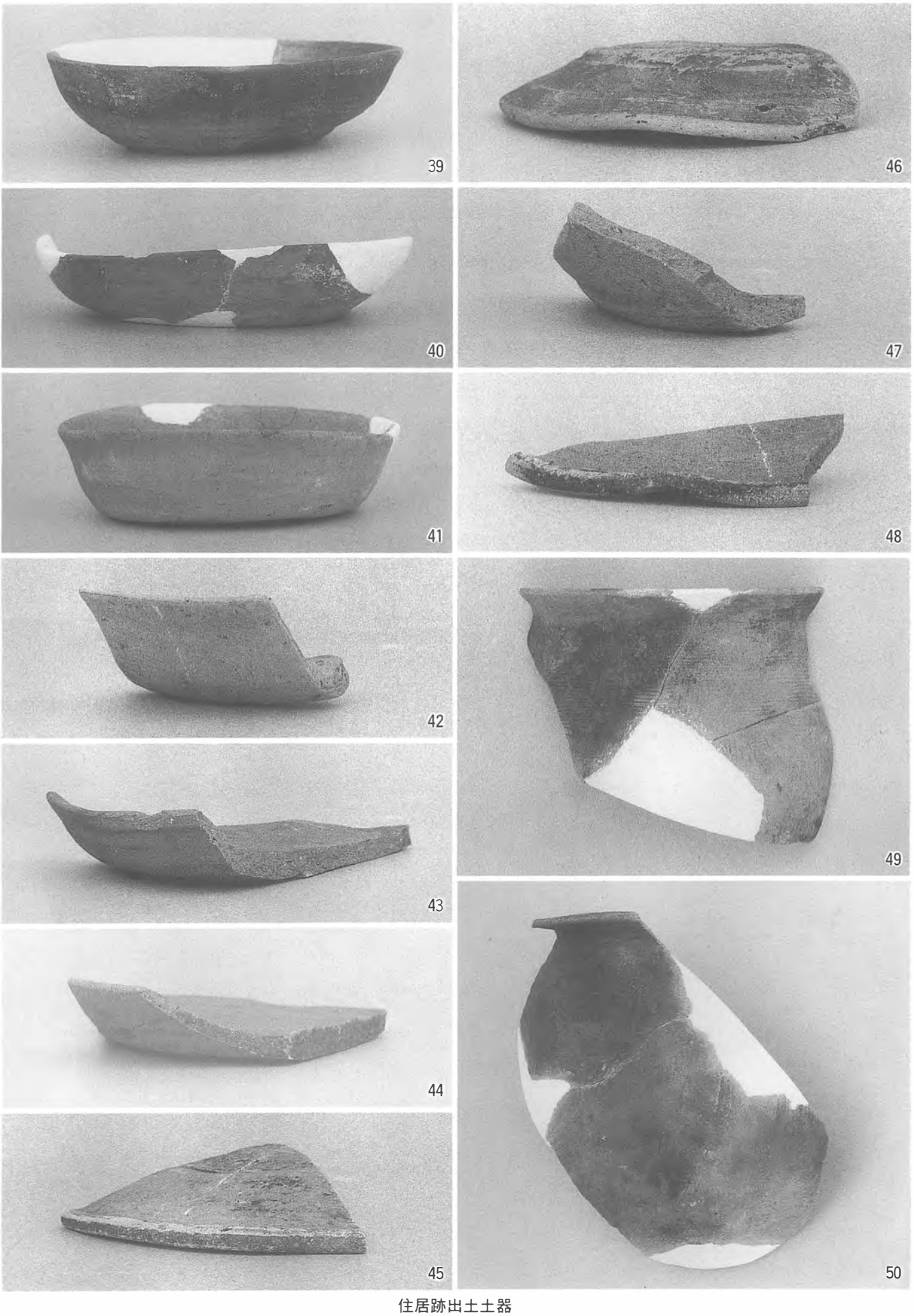
1．押型文土器



2．彩釉陶器



3．風字硯

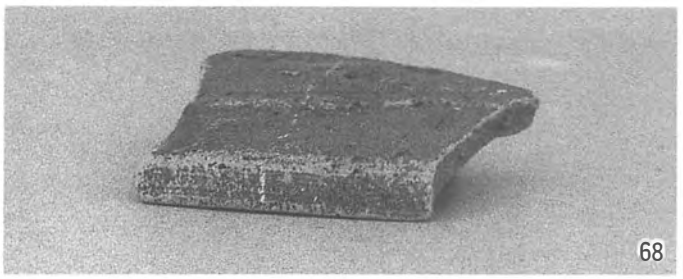


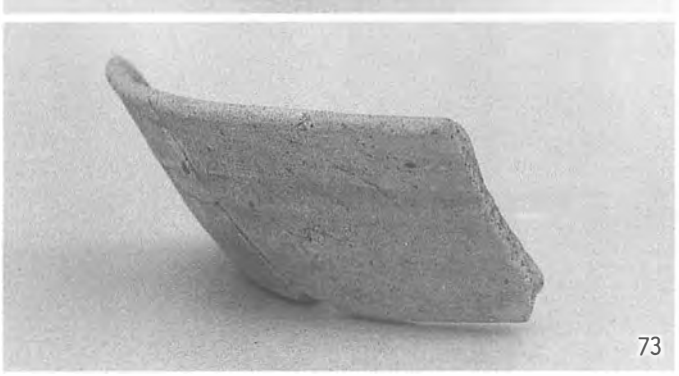
住居跡出土土器

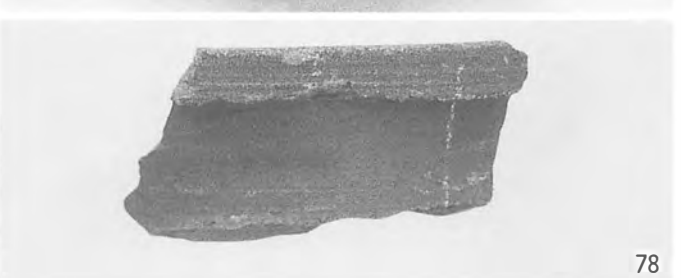
（39：第 1 号住居跡　40～45：第 2 号住居跡　46：第 4 号住居跡　47：第 3 号住居跡
48～50：第 5 号住居跡）

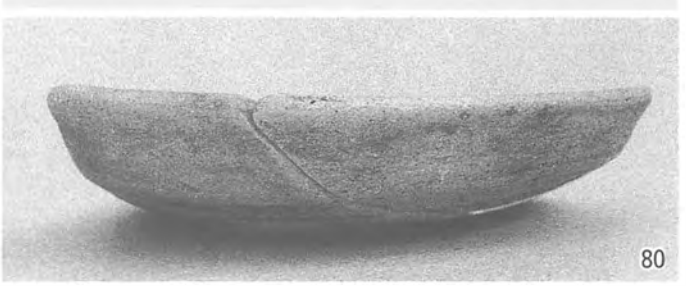
住居跡出土土器

（51：第６号住居跡　54～56、58：第８号住居跡　60、61：第９号住居跡
62、63、65、66：第10号住居跡　67：第13号住居跡）



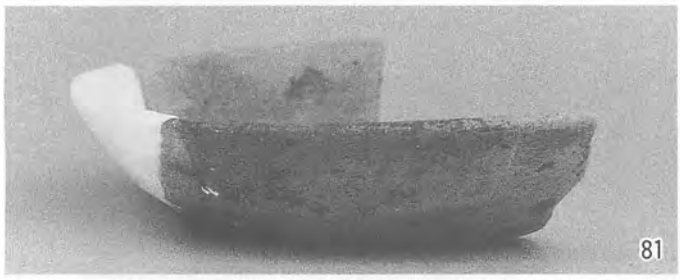


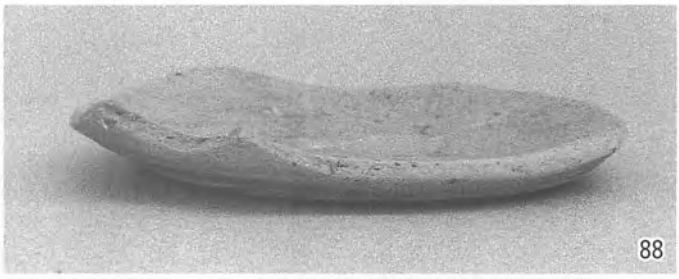


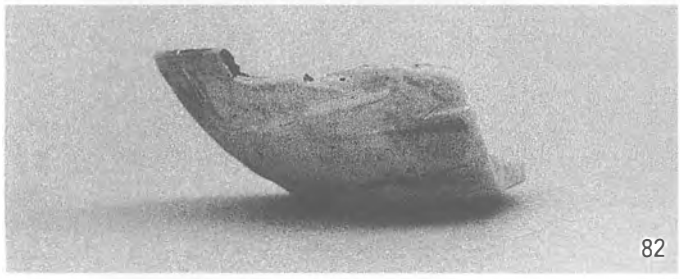


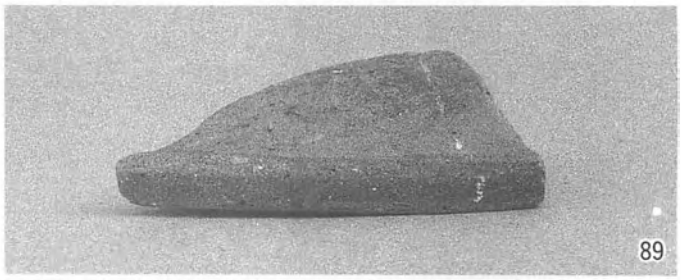
住居跡出土土器

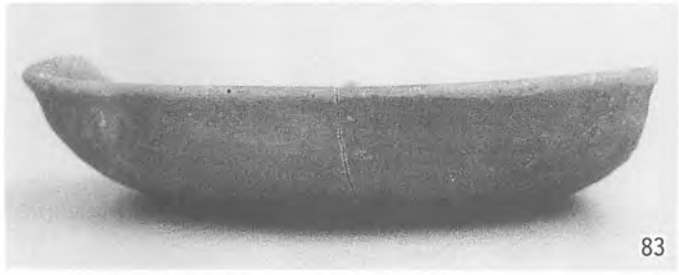
（68～70：第13号住居跡　71～75：第14号住居跡　76～78：第15号住居跡
80：第19号住居跡）

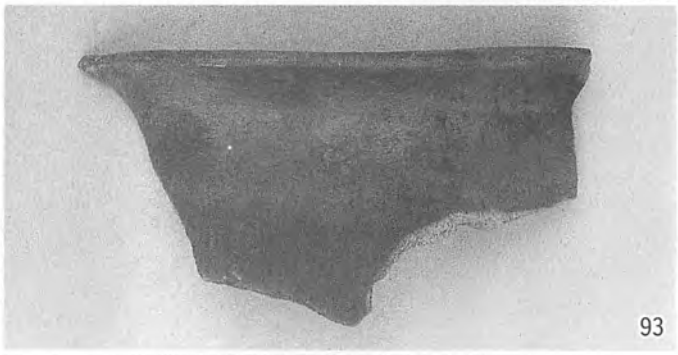


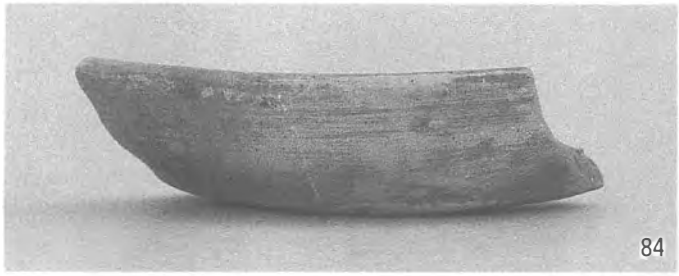


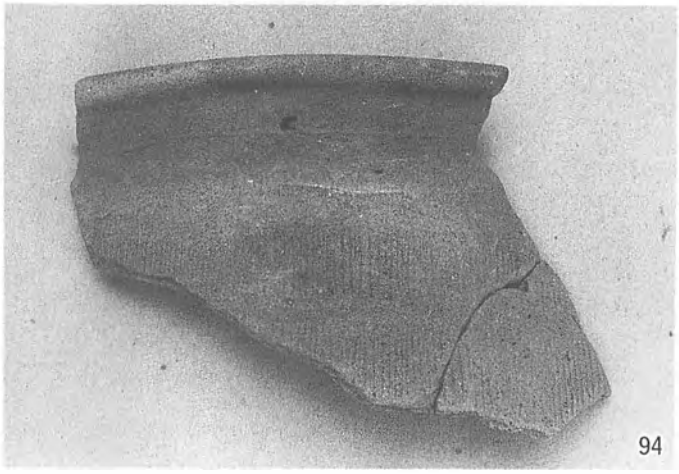






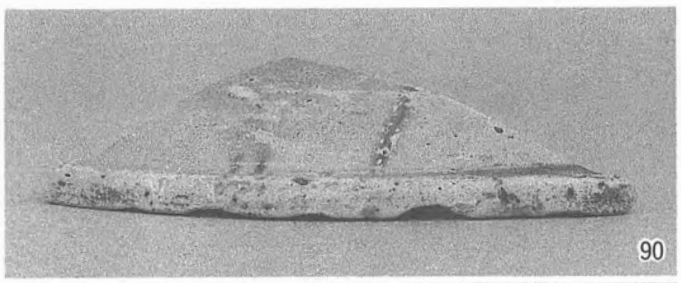


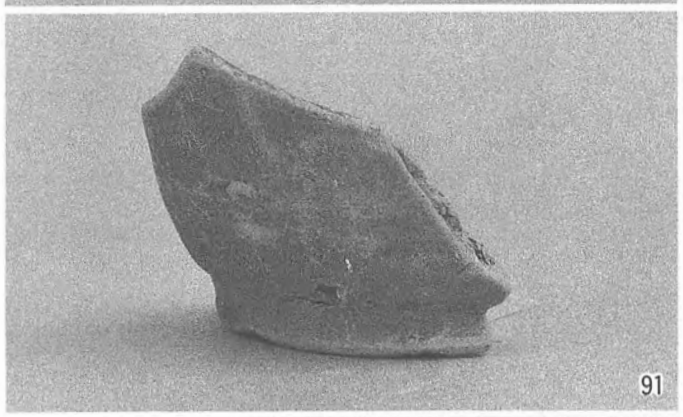


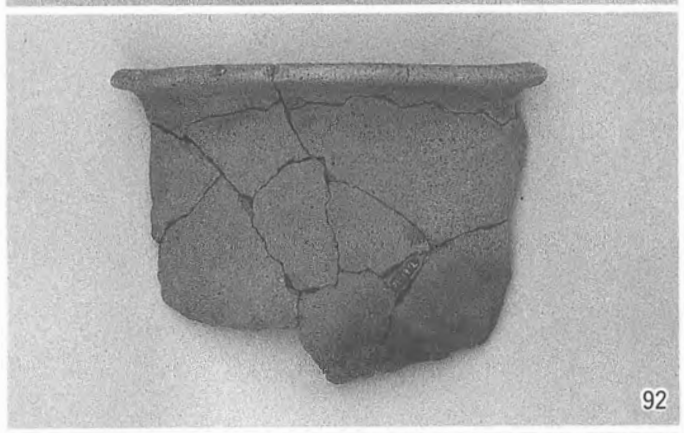


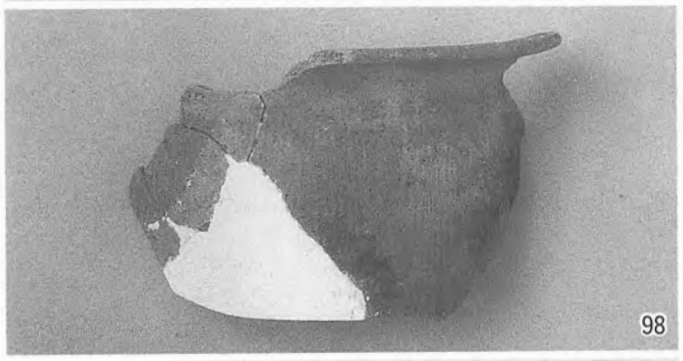
住居跡出土土器

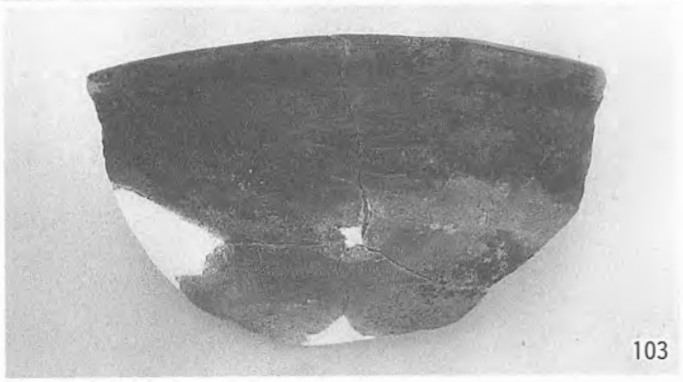
（79：第16号住居跡　　81～89、93、94：第19号住居跡）





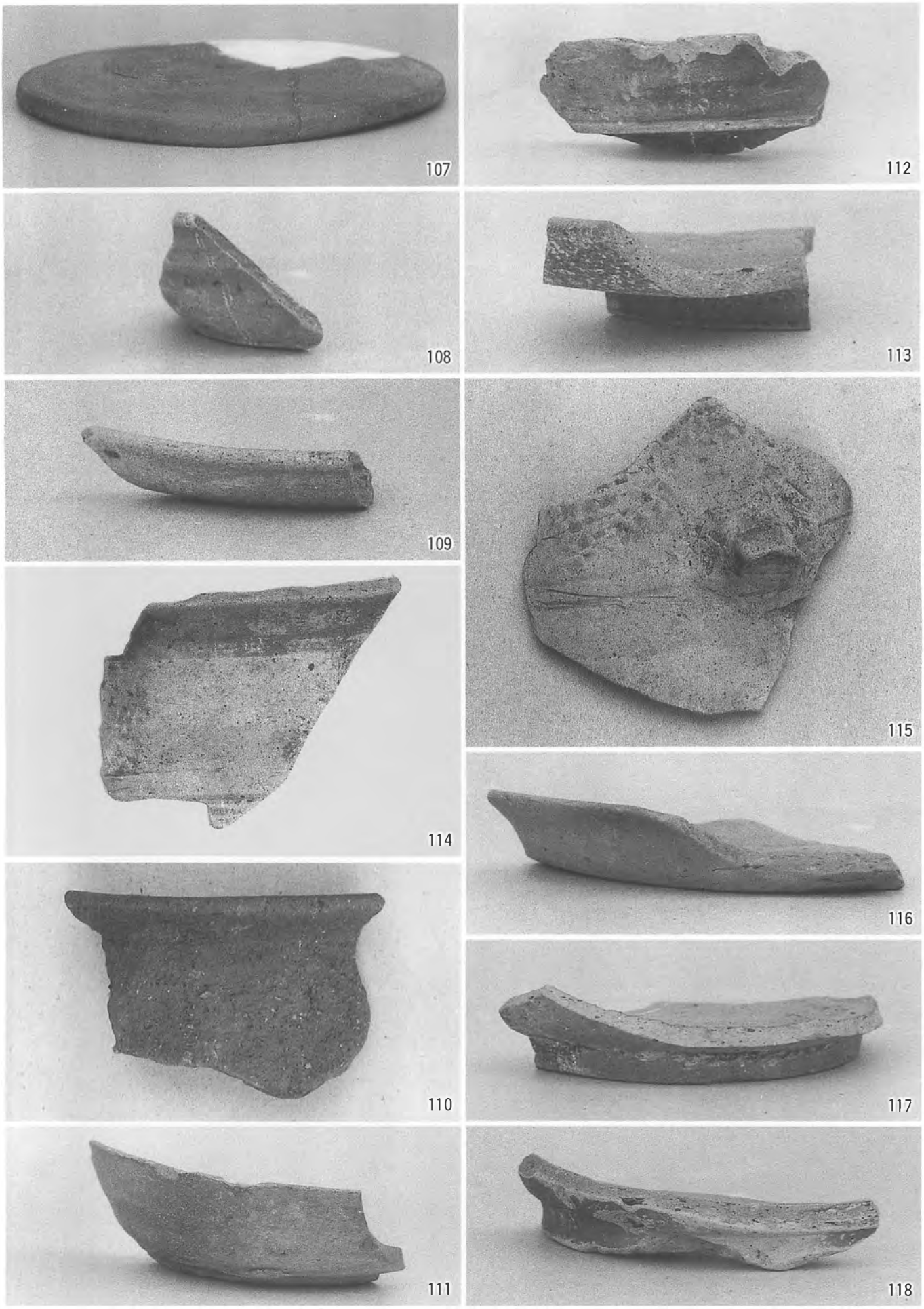






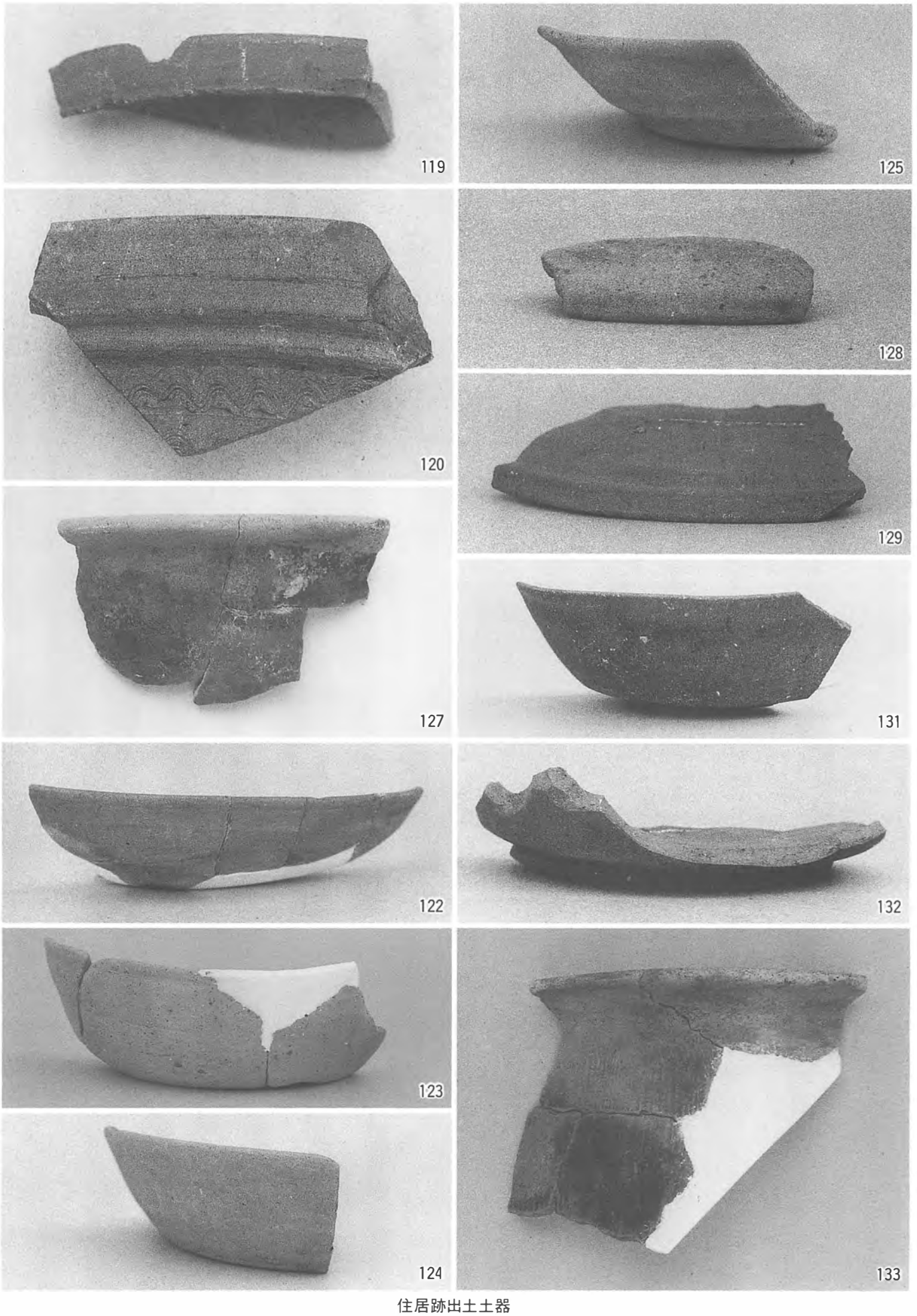
住居跡出土土器

（90～92：第19号住居跡　98～100：第21号住居跡　101、103：第24号住居跡
102：第22～24号住居跡）



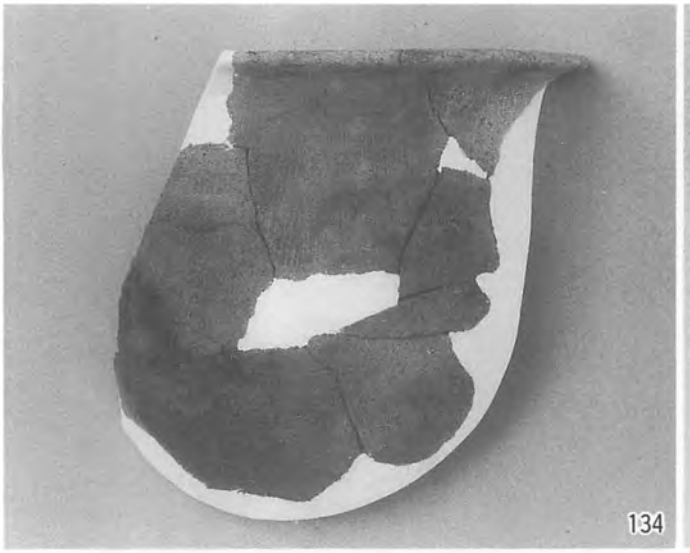
住居跡出土土器

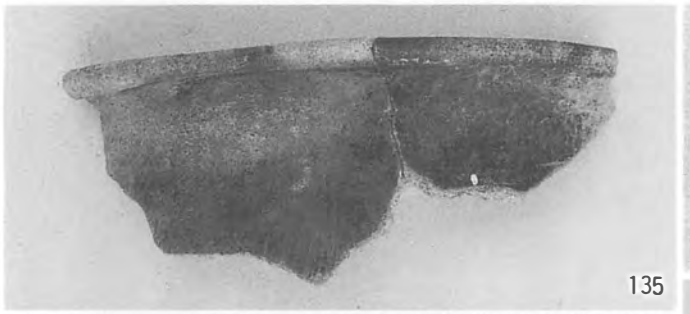
（107：第26号住居跡　108、109：第29号住居跡　110～112：第31号住居跡
113：第30号住居跡　115：第34号住居跡　116～118：第32～35号住居跡）

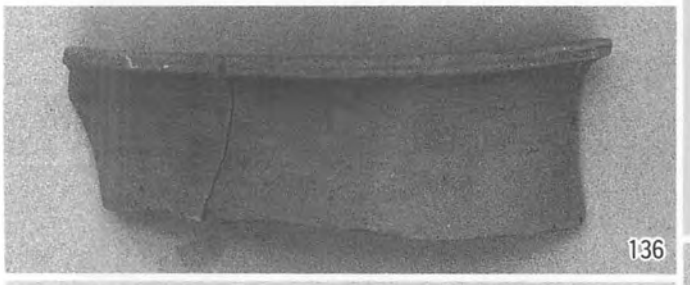


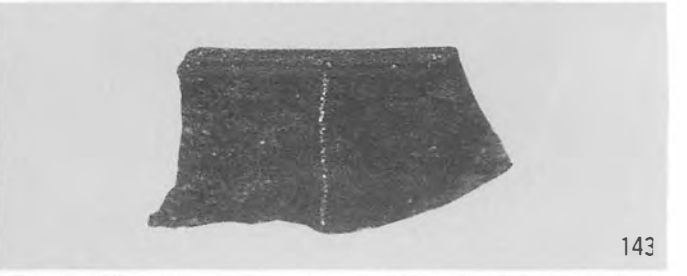
住居跡出土土器

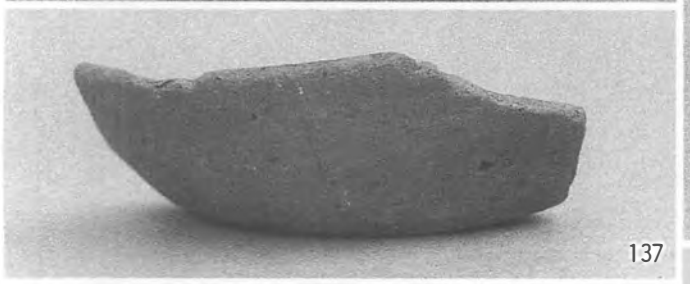
（119、120：第32～35号住居跡　122：第40号住居跡　123～125：第36～41号住居跡
127：第41号住居跡　128、129、131～133：第42号住居跡）

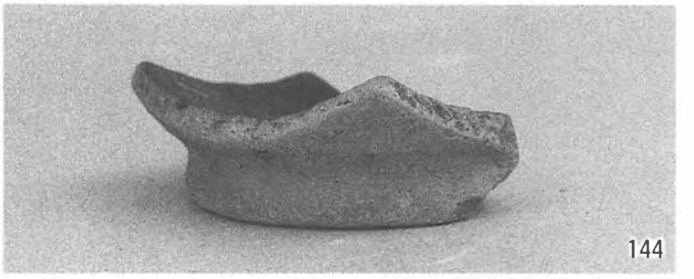


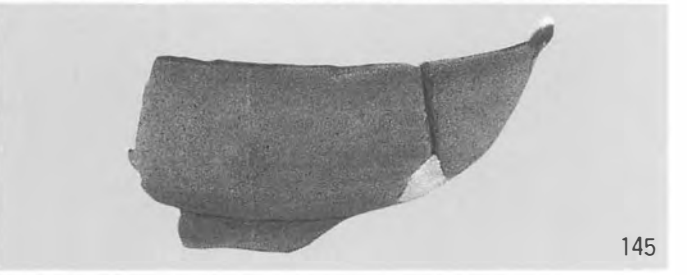








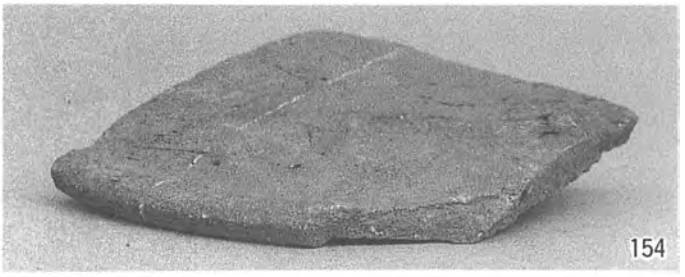




住居跡・溝出土土器

（134：第42号住居跡　135：第43号住居跡　136：第47号住居跡
137～139：第50号住居跡　141、143～146：第１号溝）

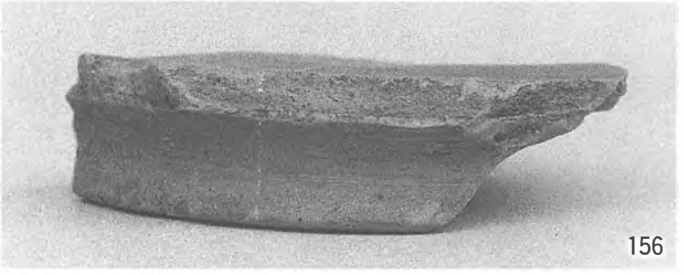
147

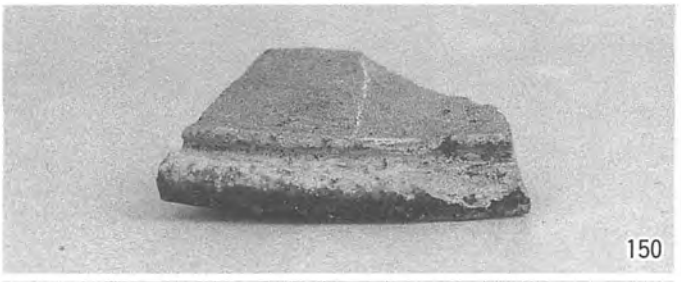

154

148

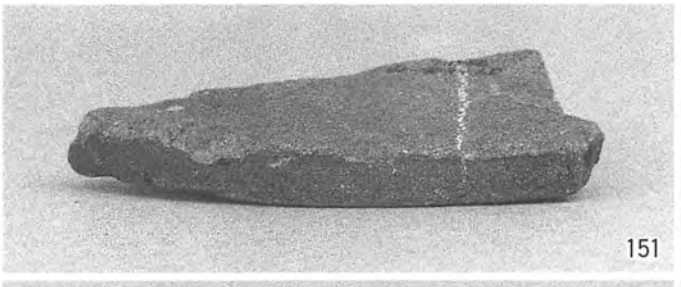
155

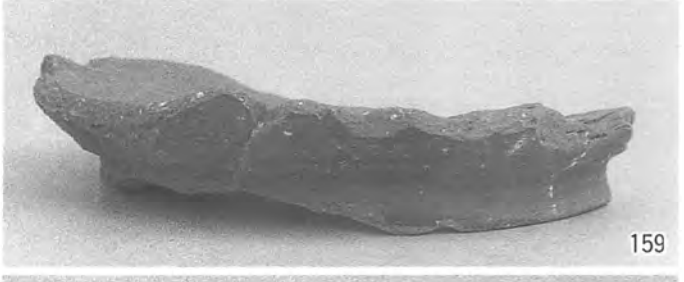
149

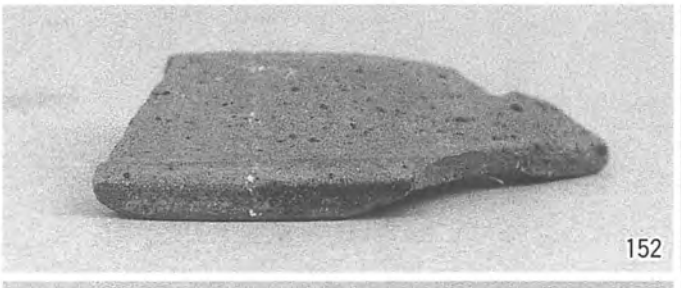

156


150

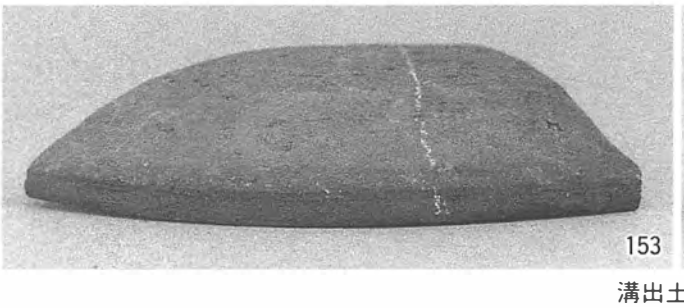
158


151


159


152

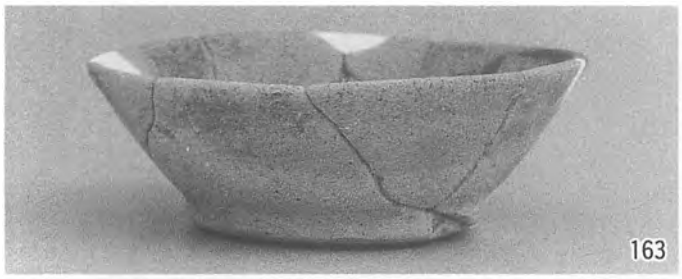
160

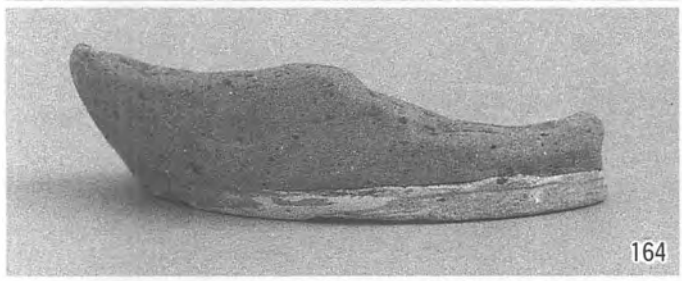

153

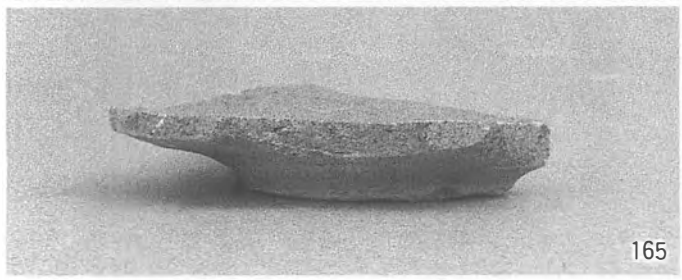
161

溝出土土器

（147～156：第１号溝　　158～161：第３号溝）


163

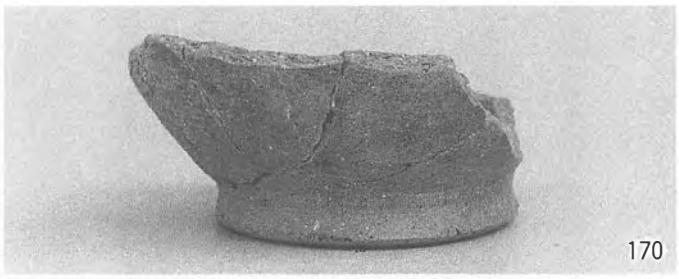

164

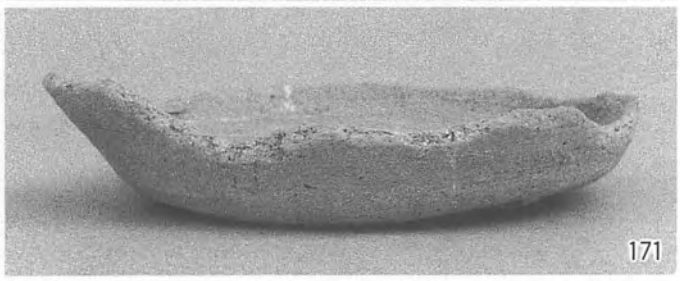

165

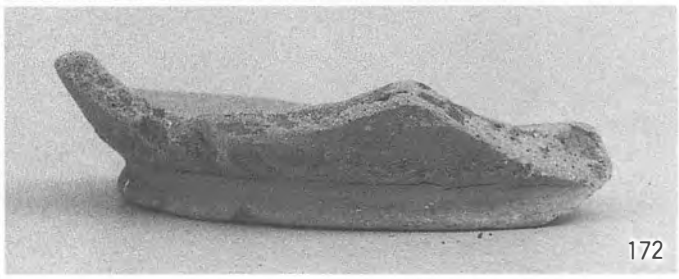
166

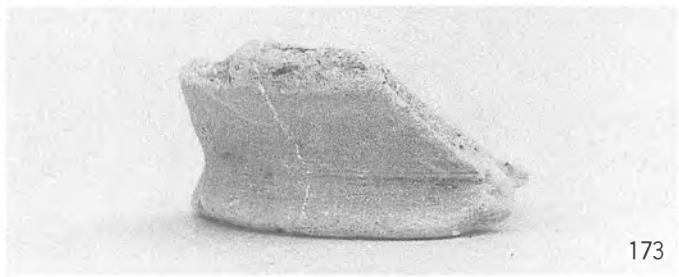
167

168


170


171


172


173

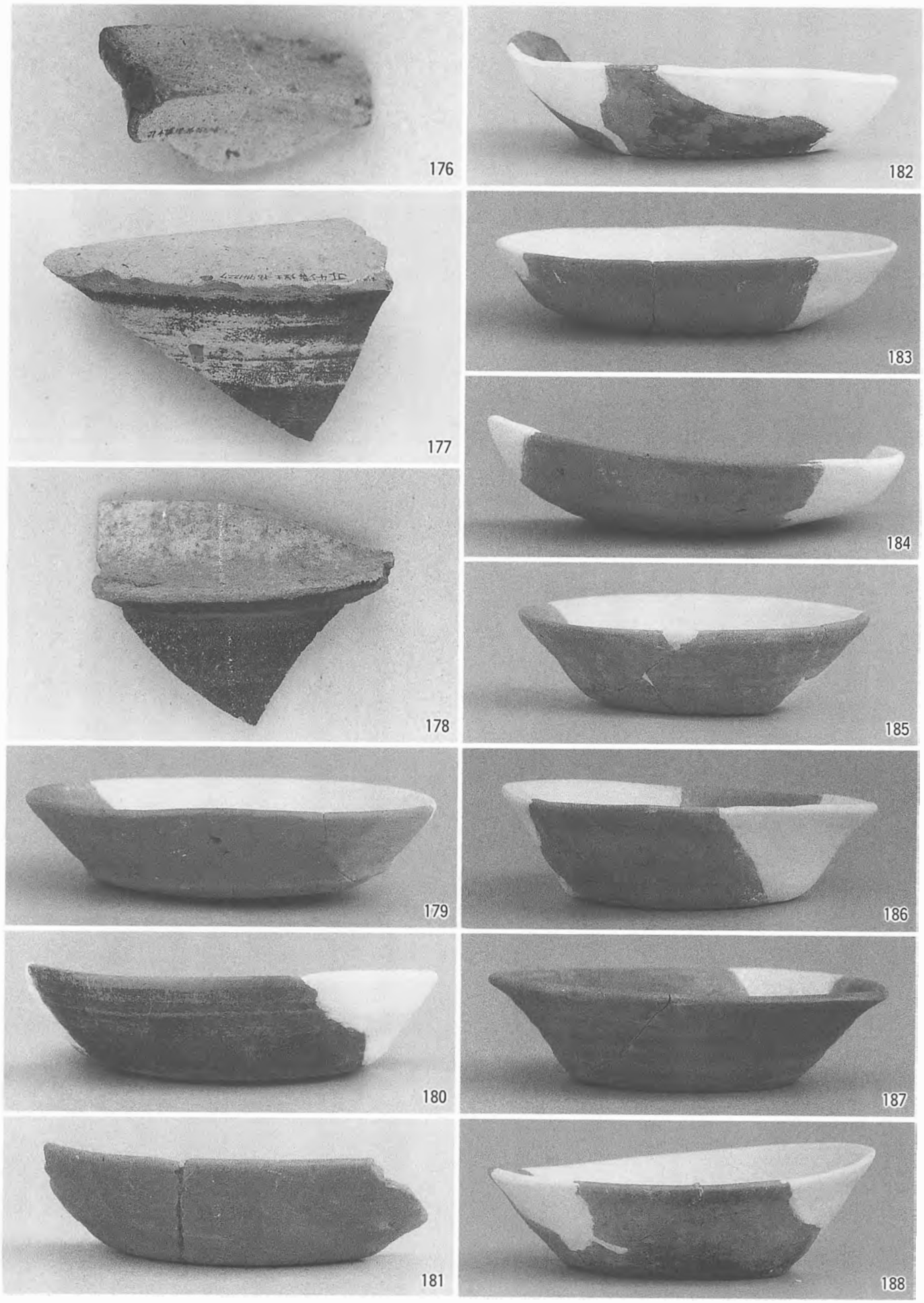
174

175

176

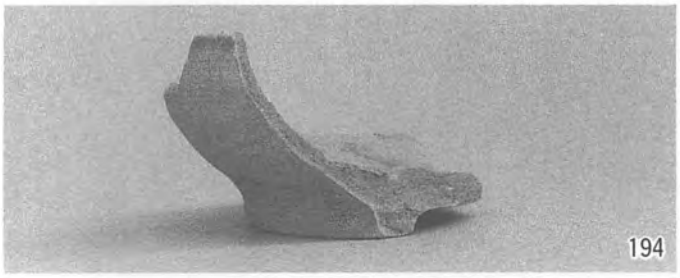
溝出土土器

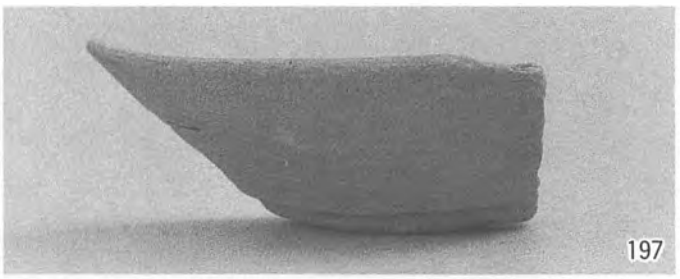
（163、164：第５号溝　165～168：第６号溝　170～176：第４号溝）

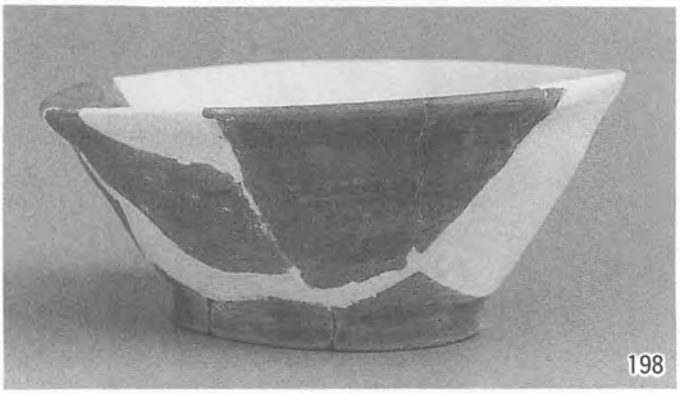


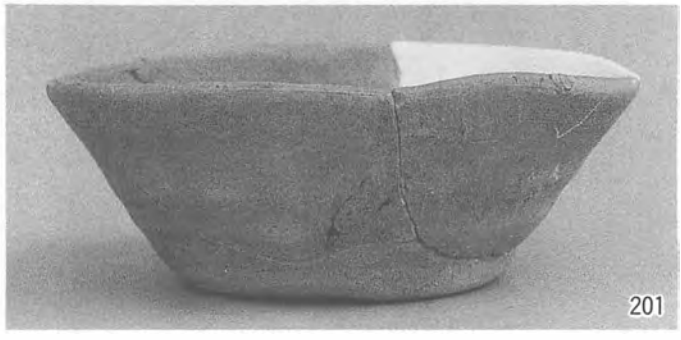
溝・包含層出土土器

（176～178：第４号溝　　179～188：土師器坏）



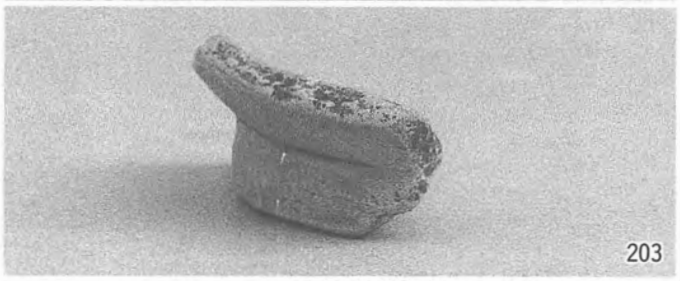


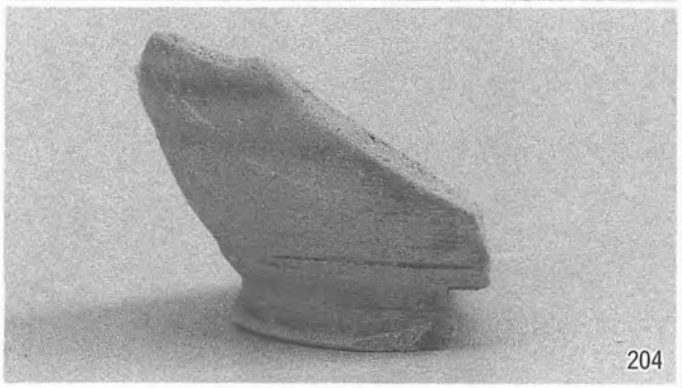


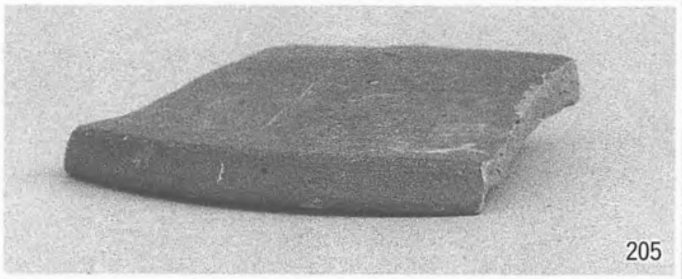


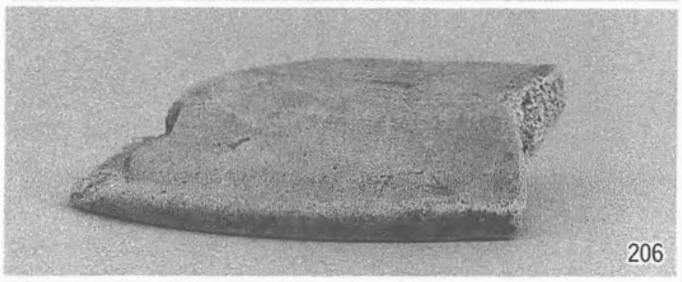
包含層出土土器

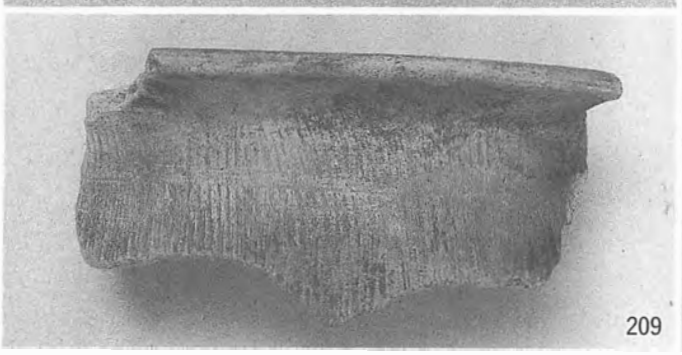
（189～192：土師器坏　　194～201：土師器椀）

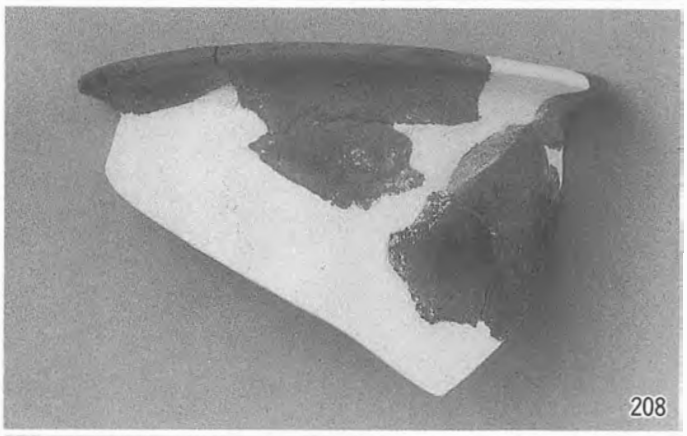


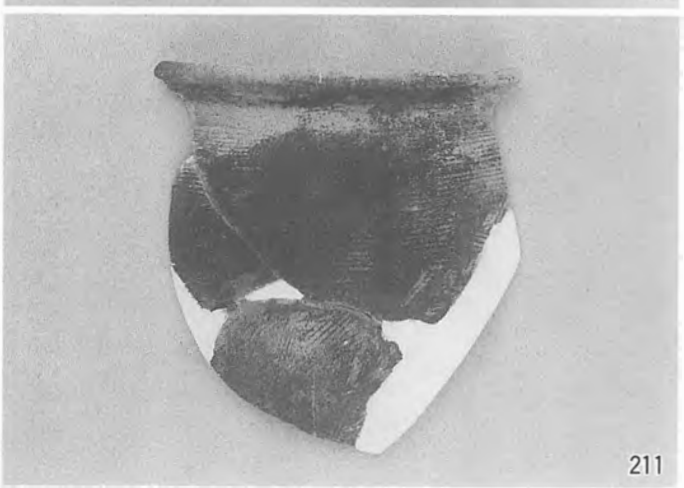






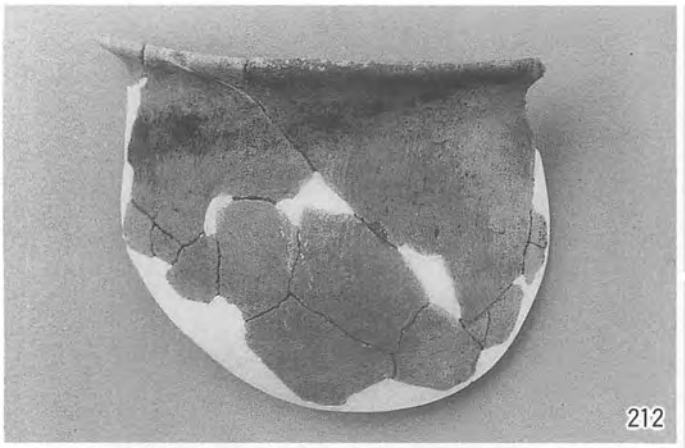


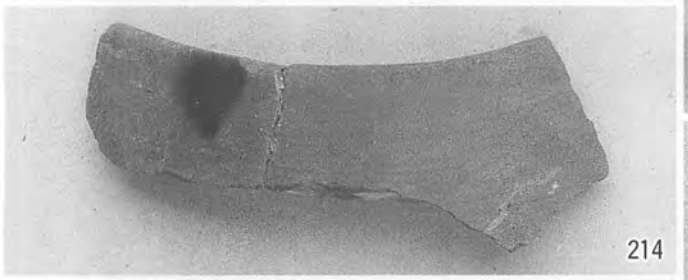


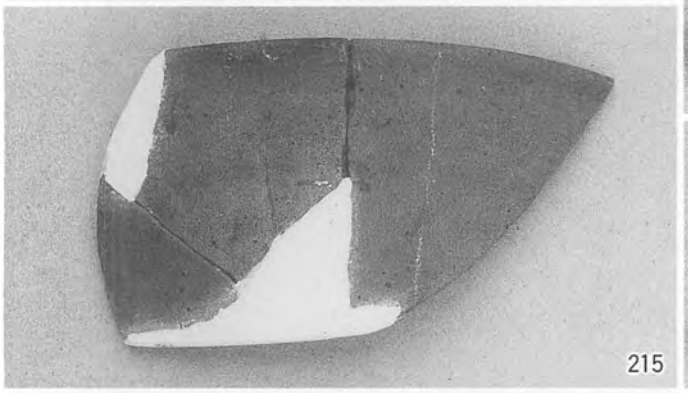


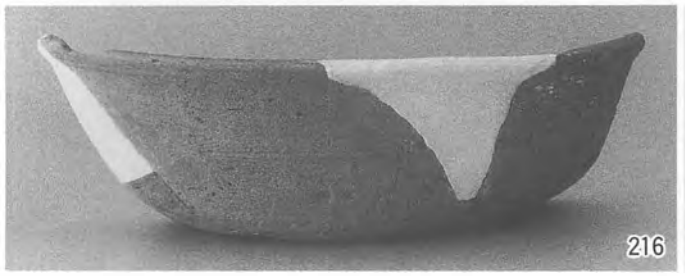
包含層出土土器

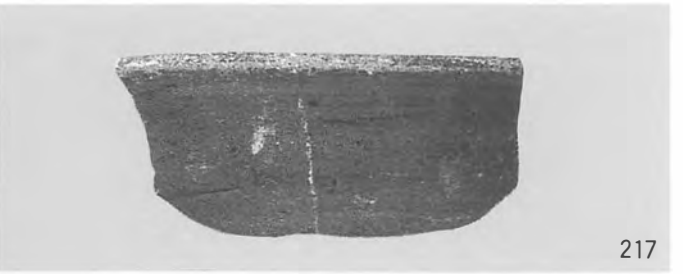
（202～204：土師器椀　205、206：土師器蓋　207～211：土師器甕）

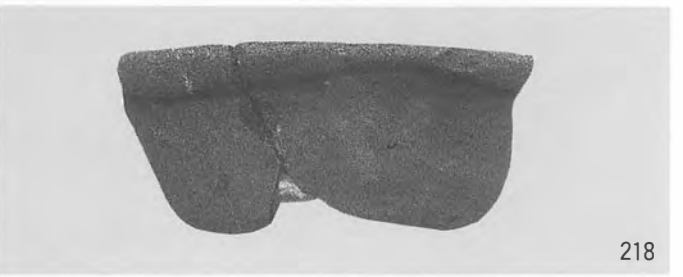


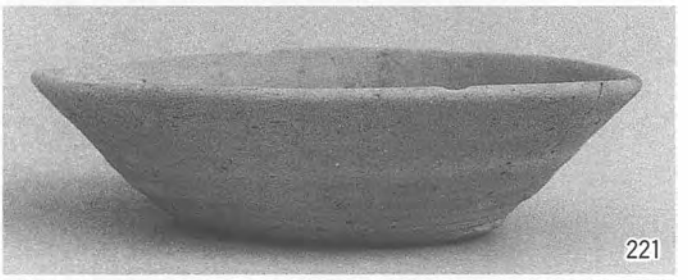


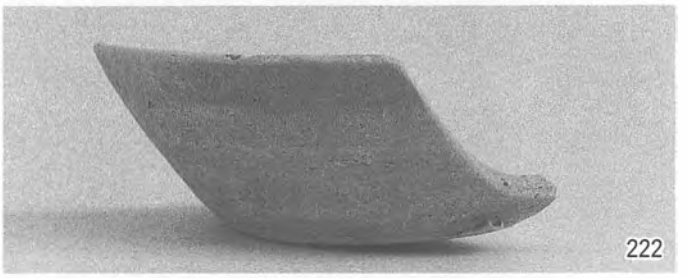


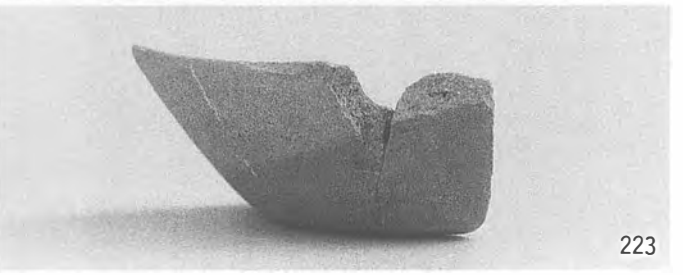






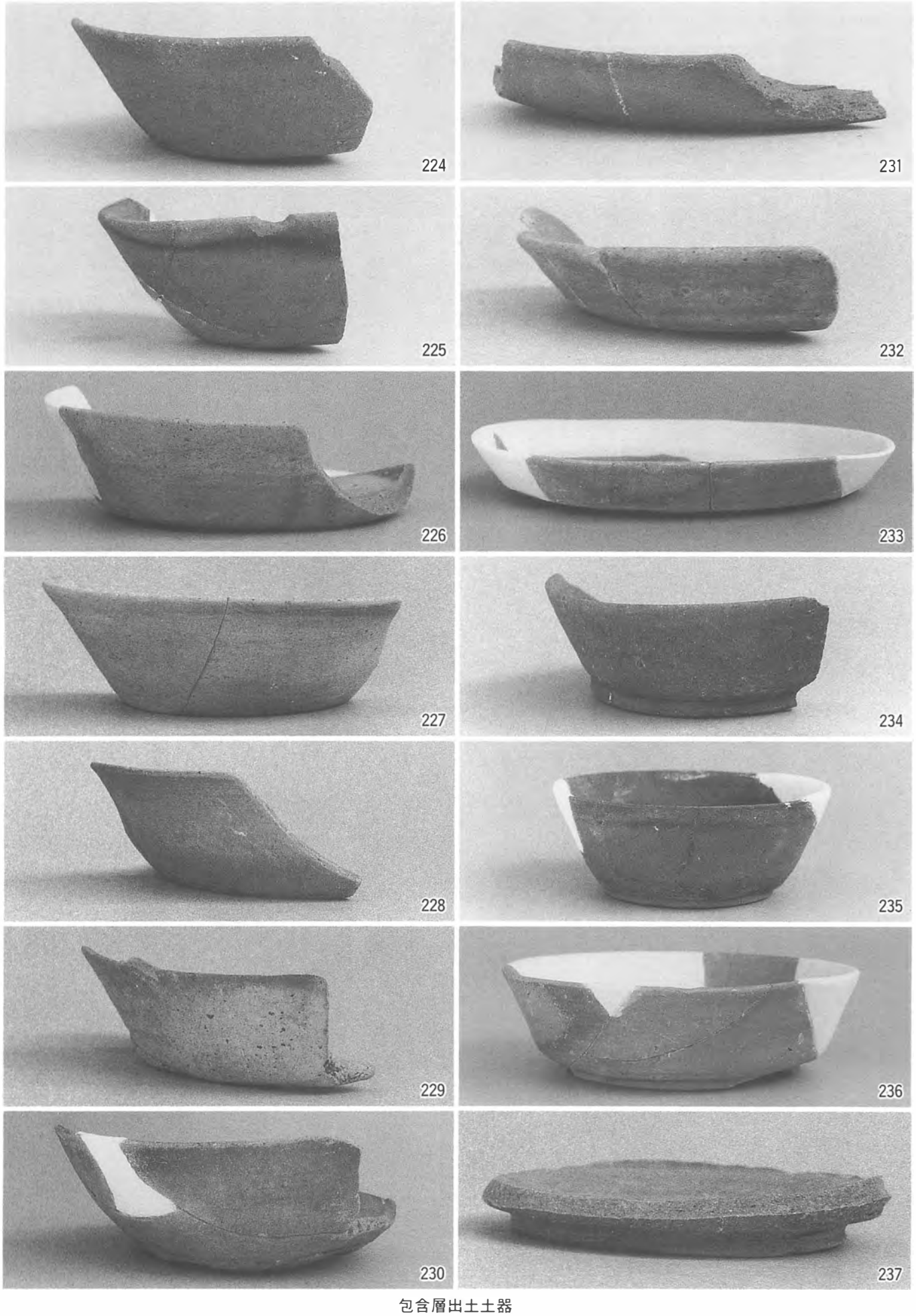






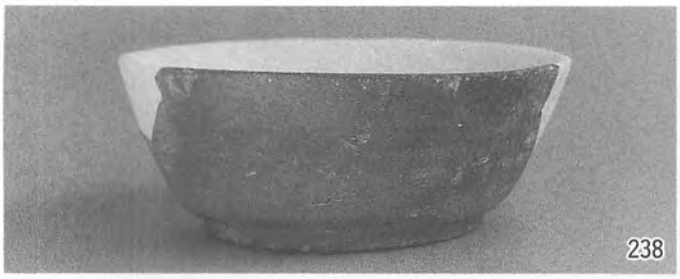
包含層出土土器

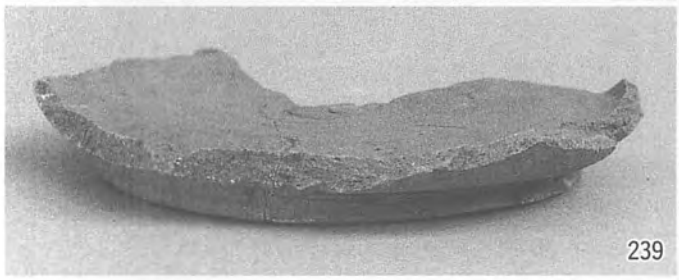
（212、213：土師器甕　214～216：土師器鉢　217～222：須恵器坏）

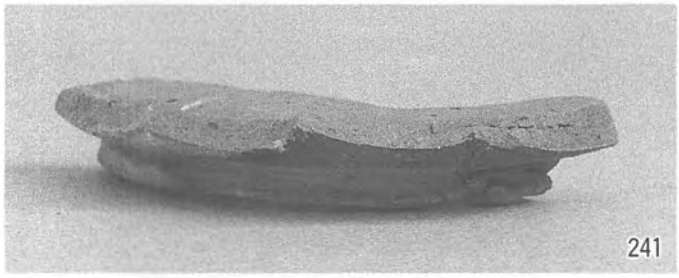


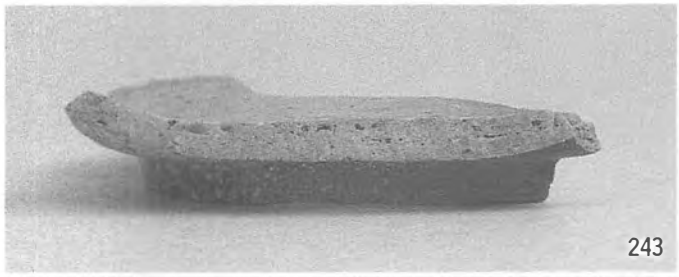
包含層出土土器

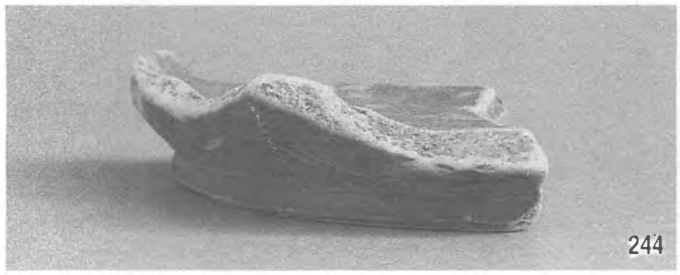
（224～230：須恵器坏　231～233：須恵器皿　234～237：須恵器椀）

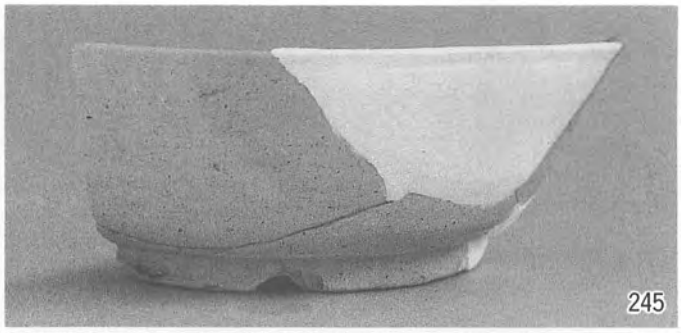


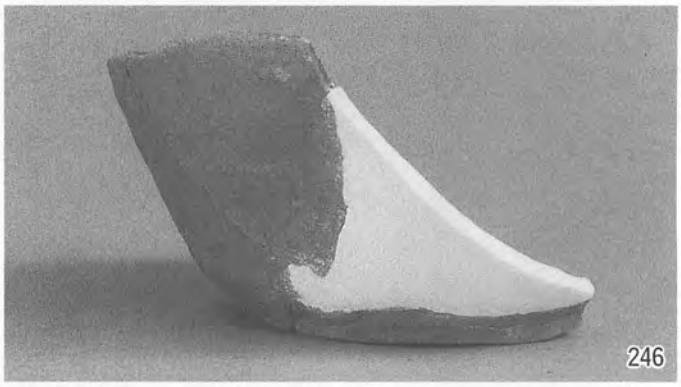


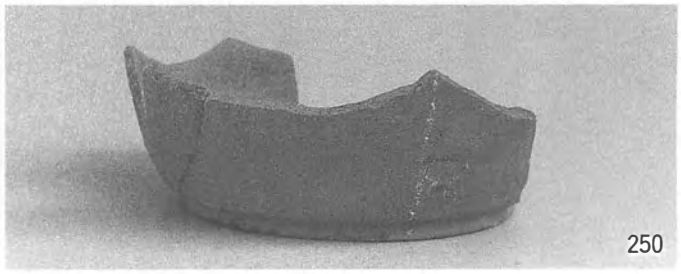




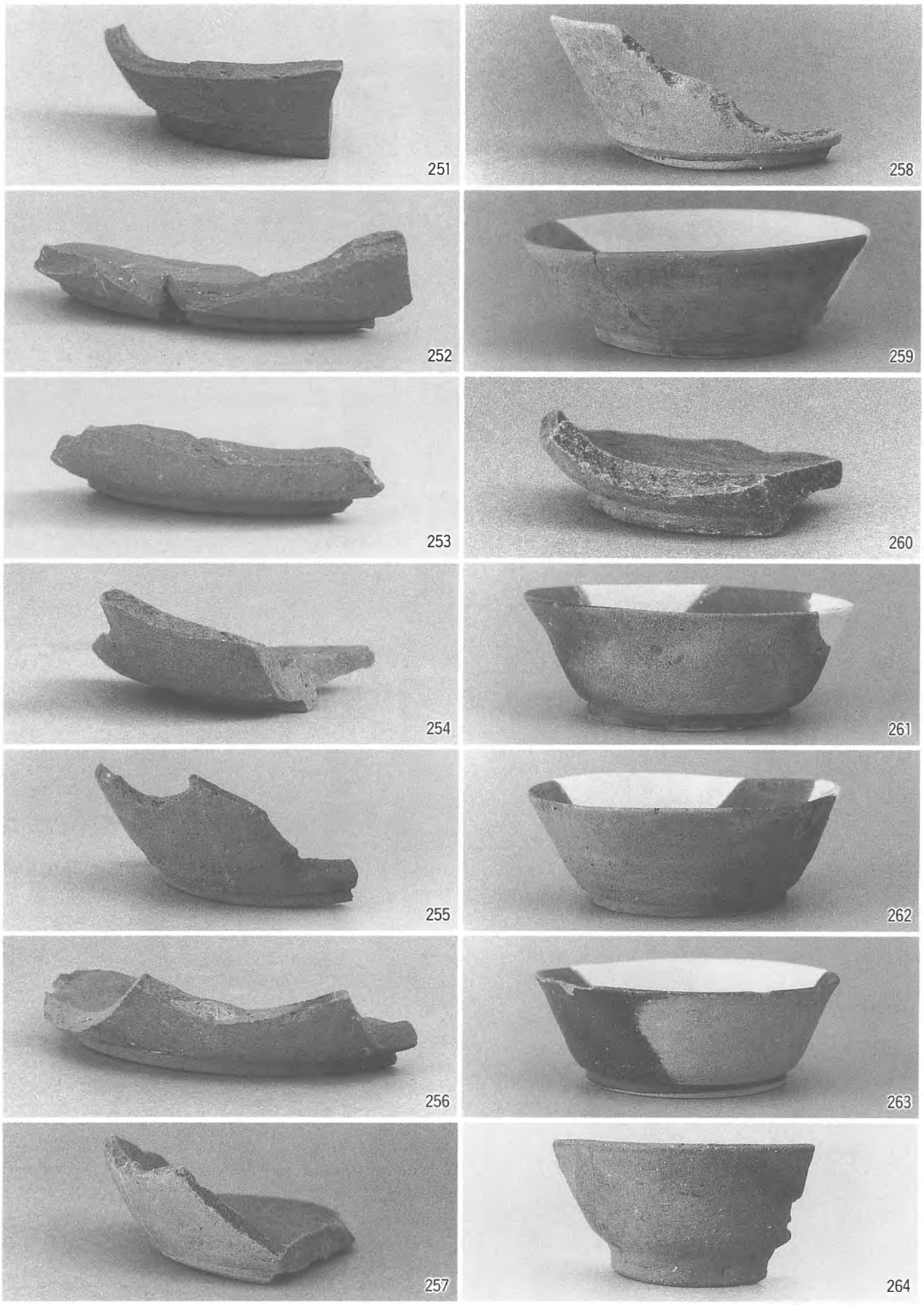




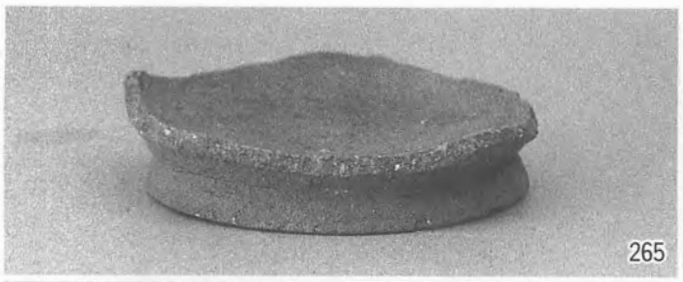


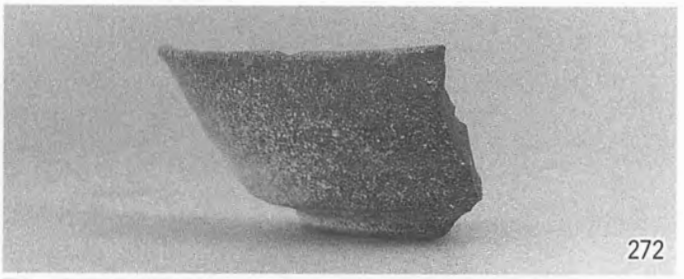


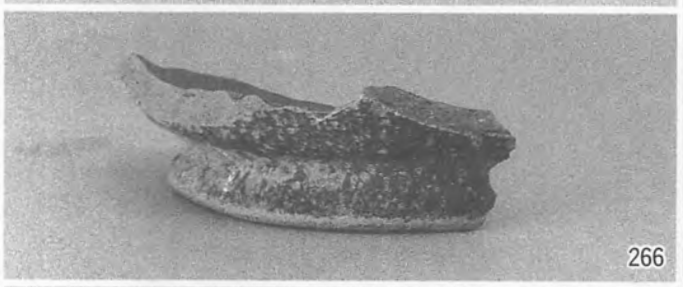
包含層出土土器（須恵器椀）

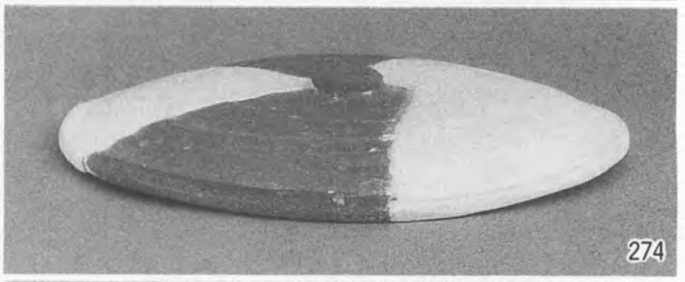


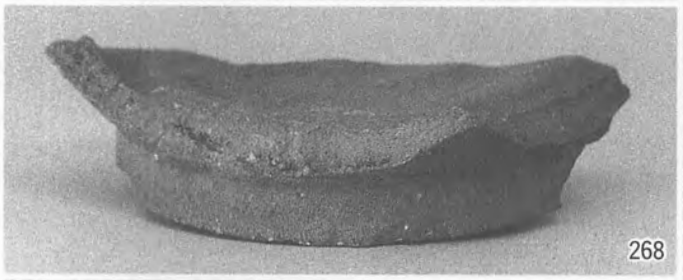
包含層出土土器（須恵器椀）

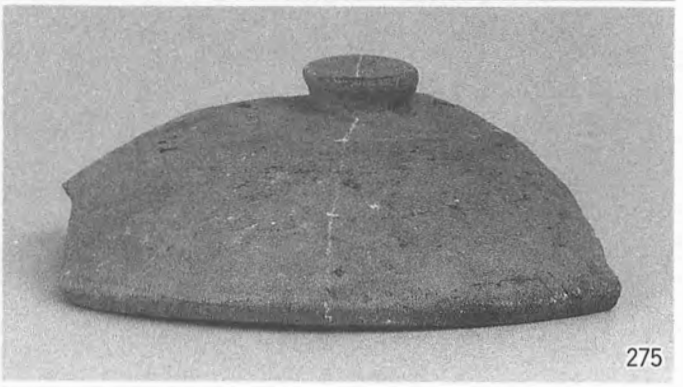


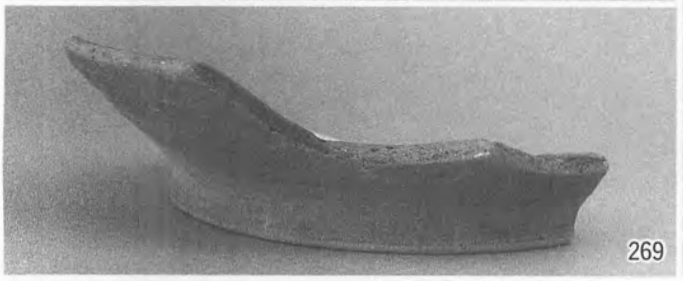


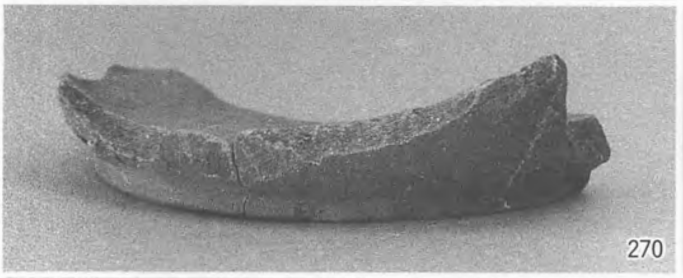


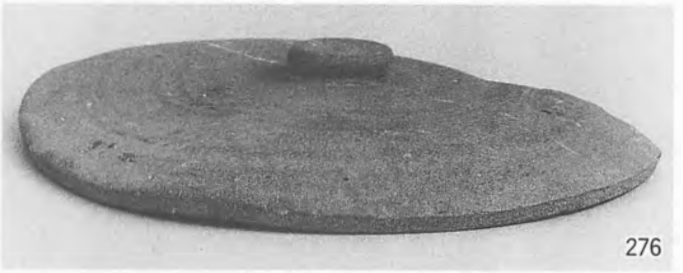


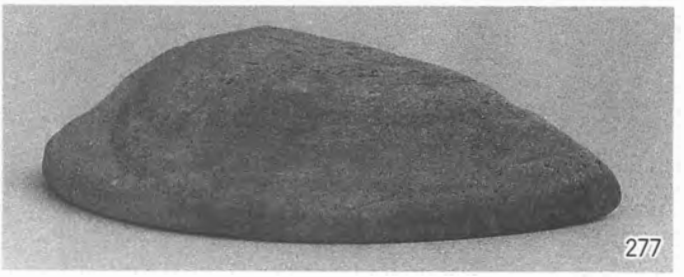






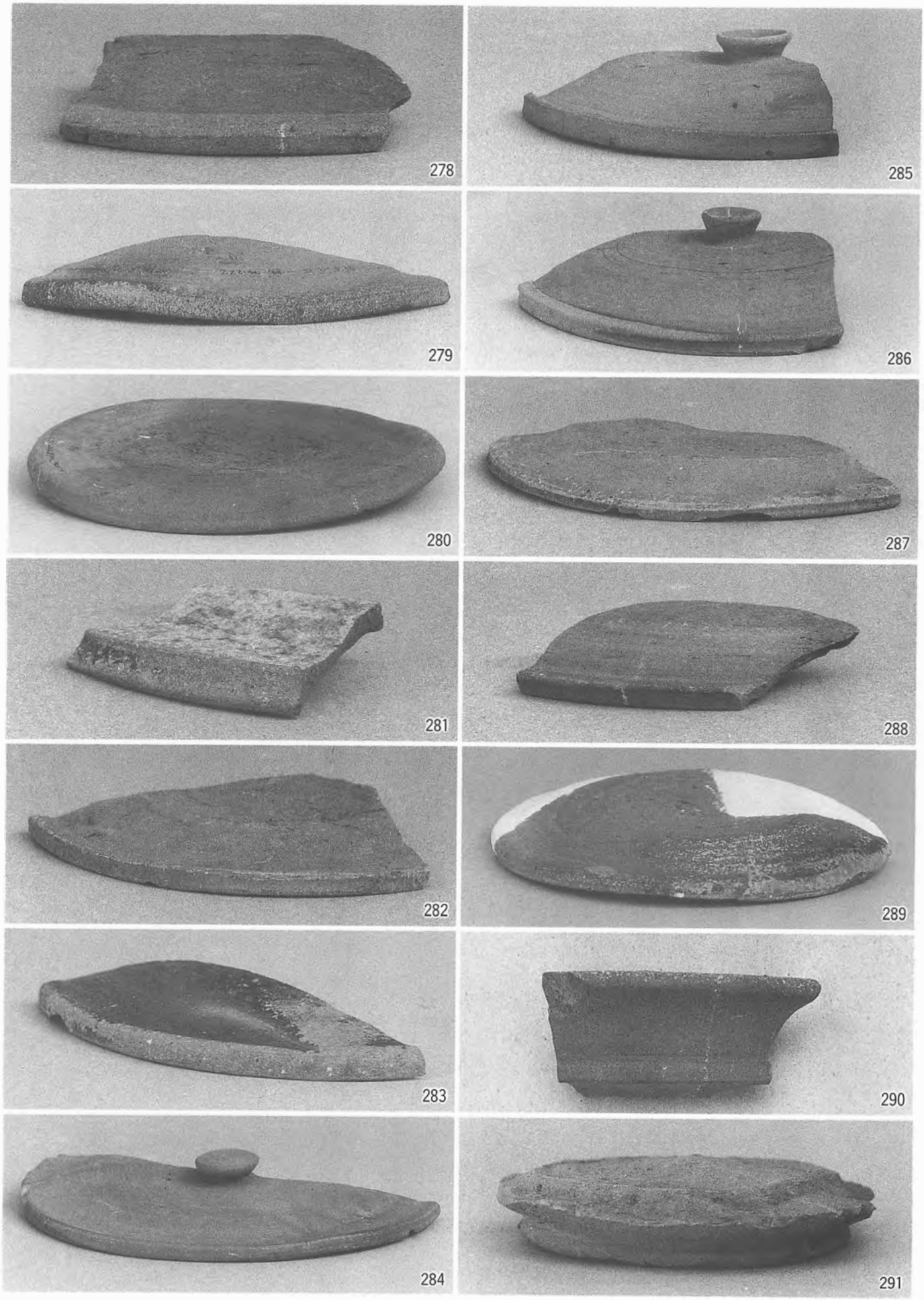






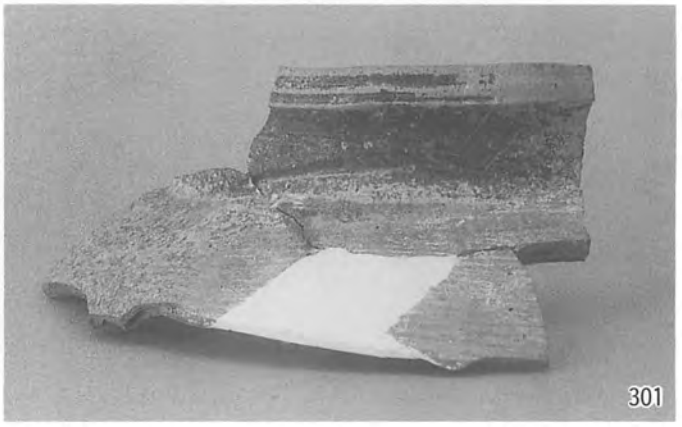
包含層出土土器

（265～273：須恵器椀　　274～277：須恵器蓋）



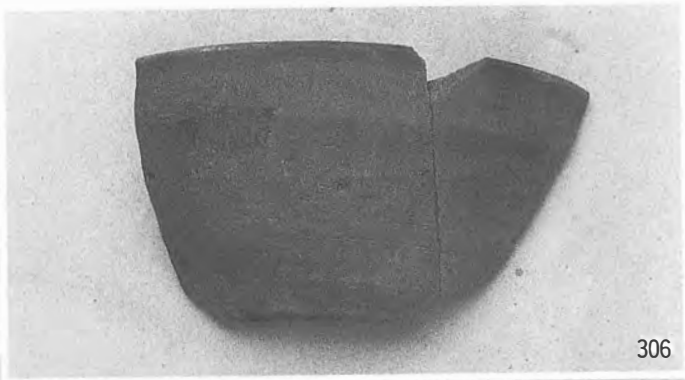
包含層出土土器

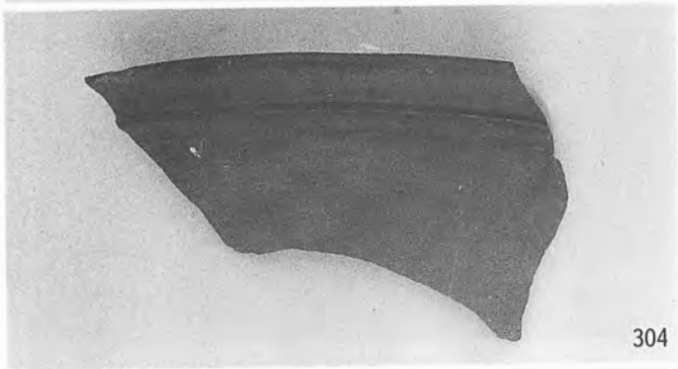
（278～289：須恵器蓋　　290、291：須恵器壺）

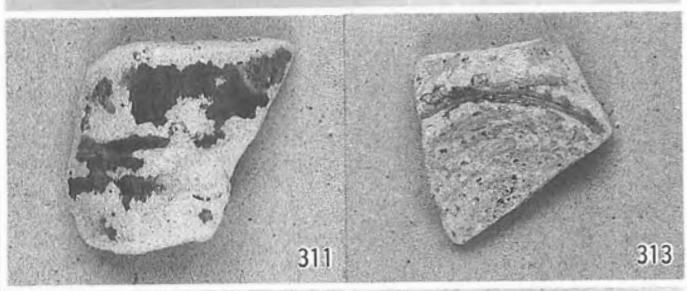


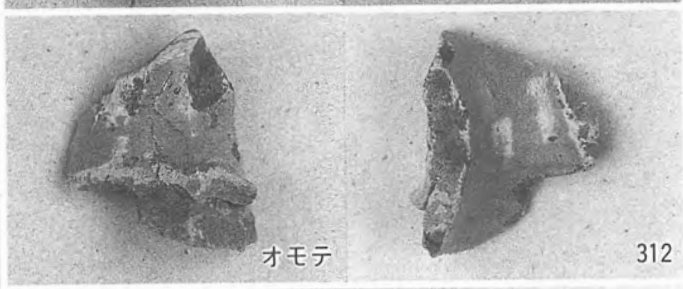
包含層出土土器

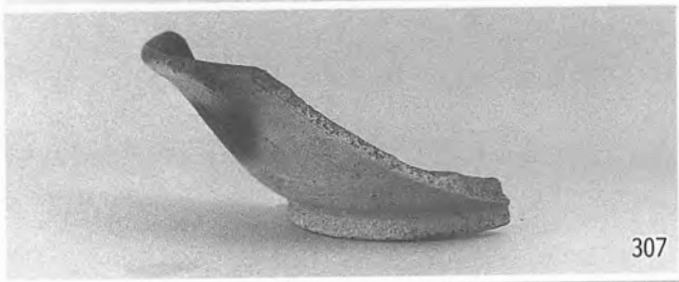
（293、295、298、299：須恵器壺　294、296、297：須恵器鉢
300、301：須恵器甕）

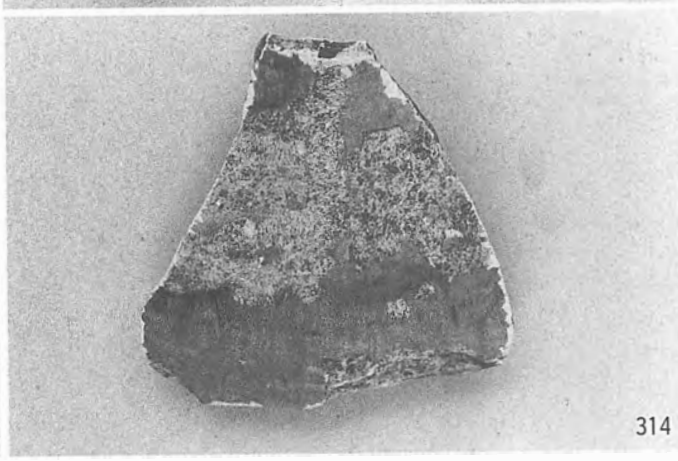


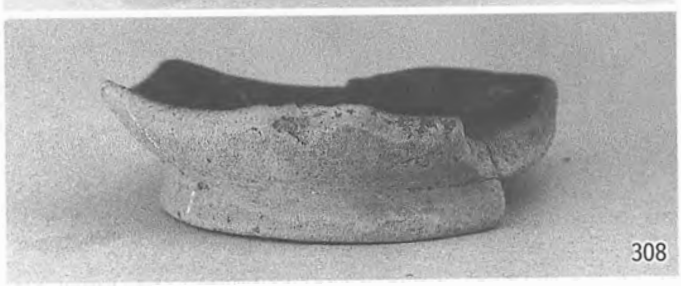








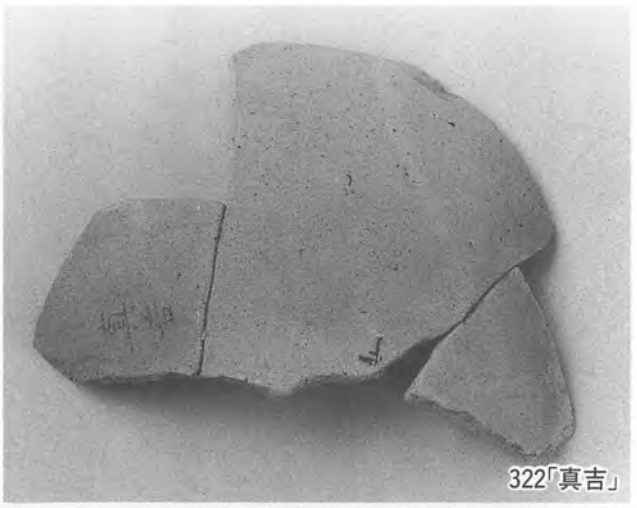




包含層出土土器

（302～305：須恵器甕　306～310：黒色土器A類
311～314：彩釉陶器）

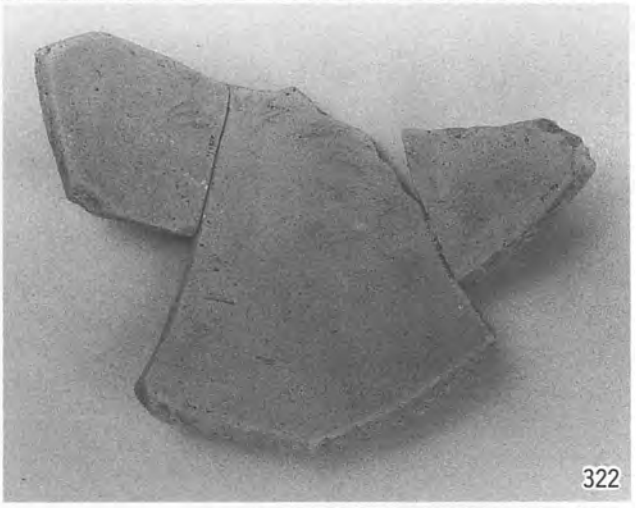
315

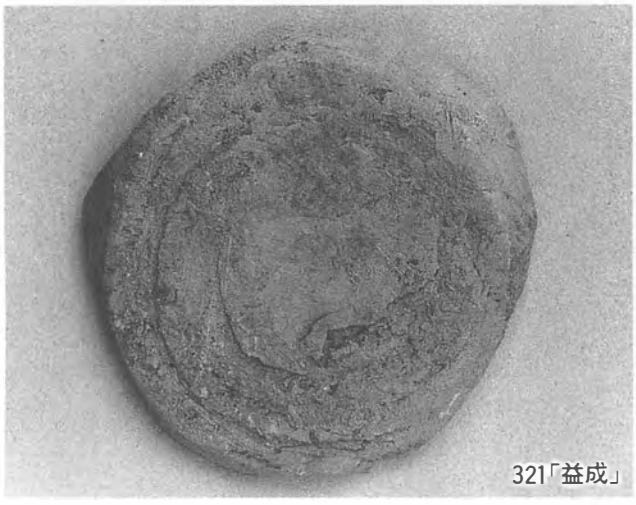

322「真吉」

317

322

320「賀」


322


321「益成」

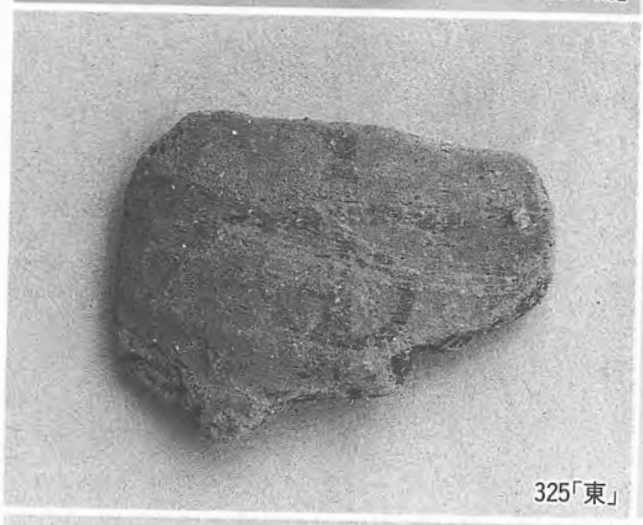
323「東」

包含層出土遺物・墨書土器

（315：円面硯　317：越州窯青磁碗　320～323：墨書土器）

324「南」

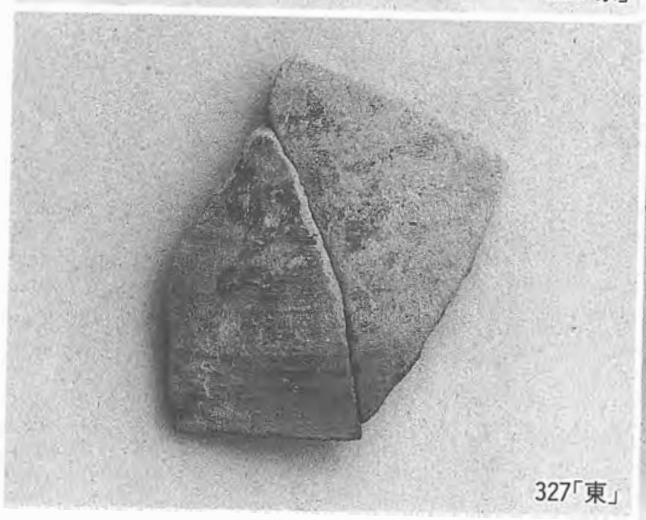
328「厨」

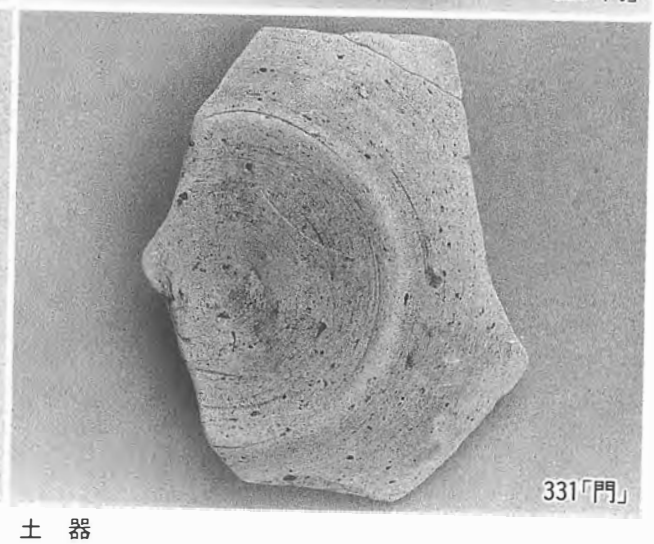

325「東」

329「厨」

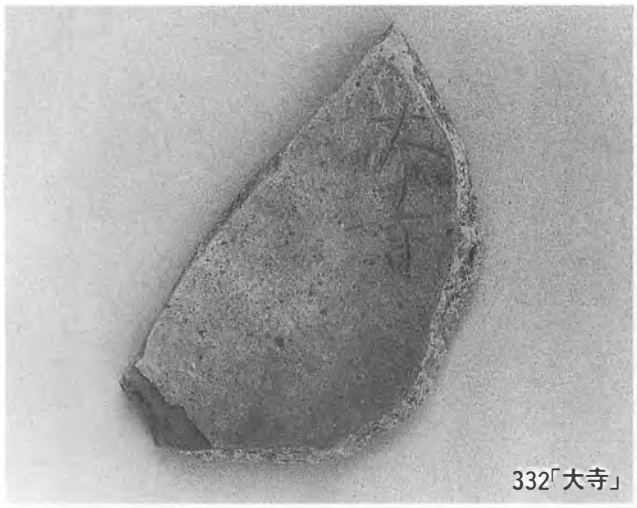
326「家」

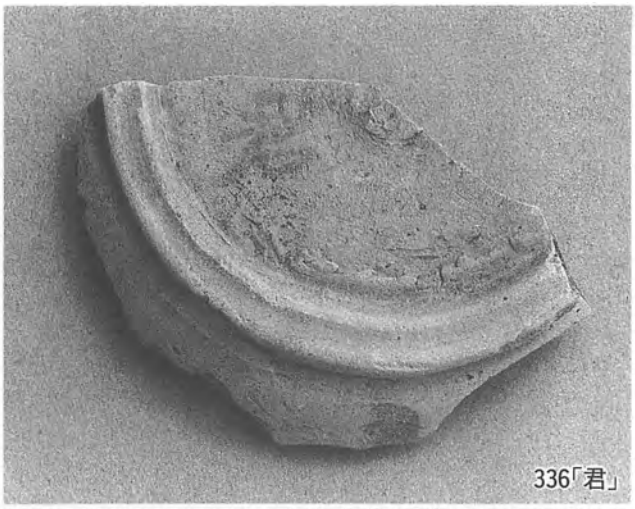
330「門」

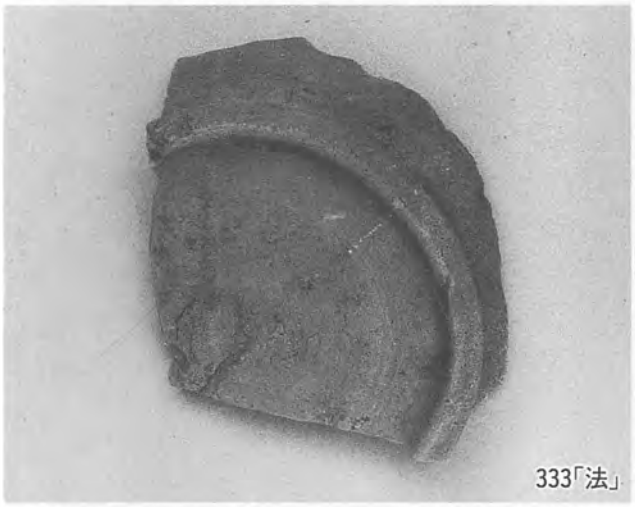

327「東」

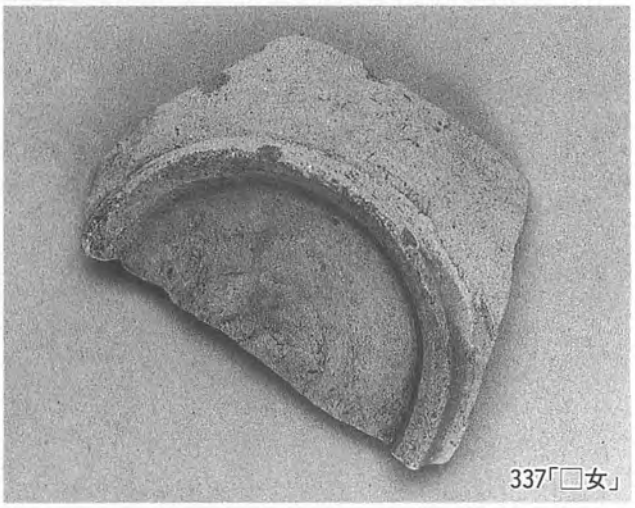

331「門」

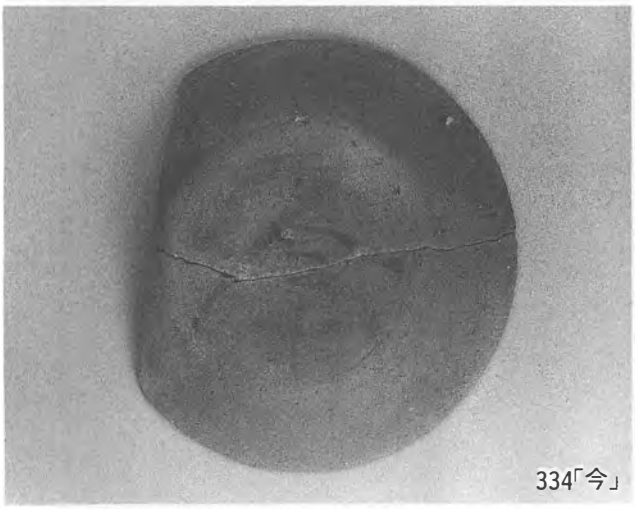
墨　書　土　器

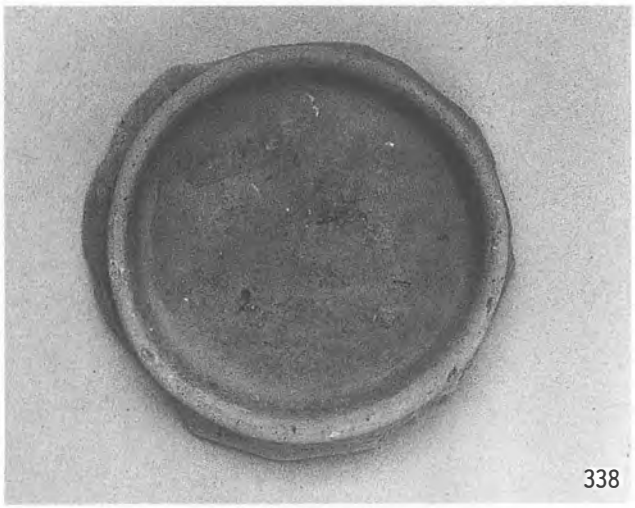

332「大寺」

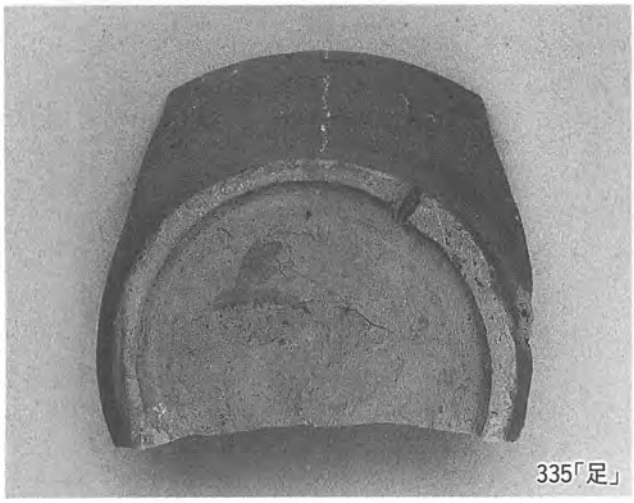

336「君」


333「法」


337「□女」

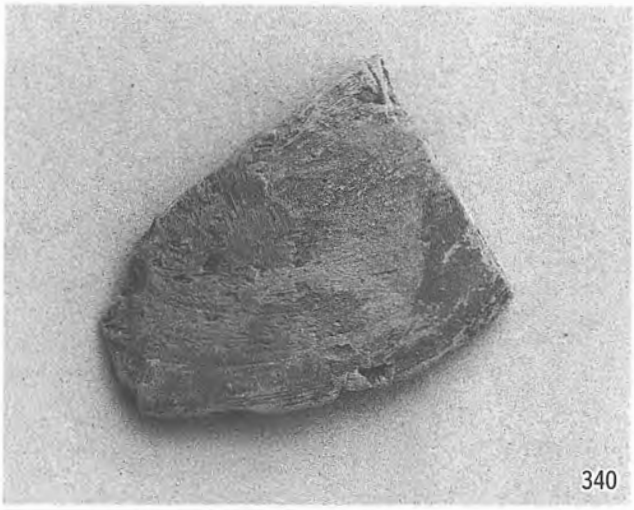

334「今」


338


335「足」

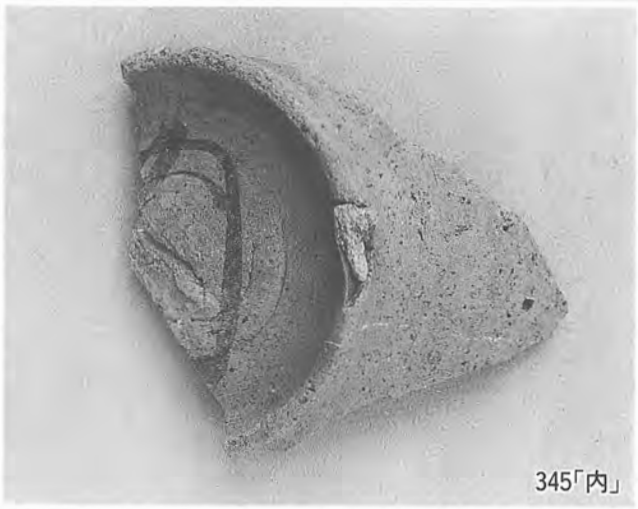
339

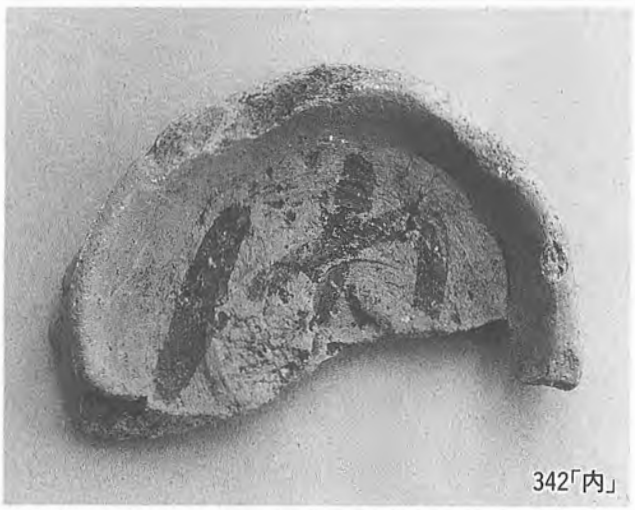
墨 書 土 器

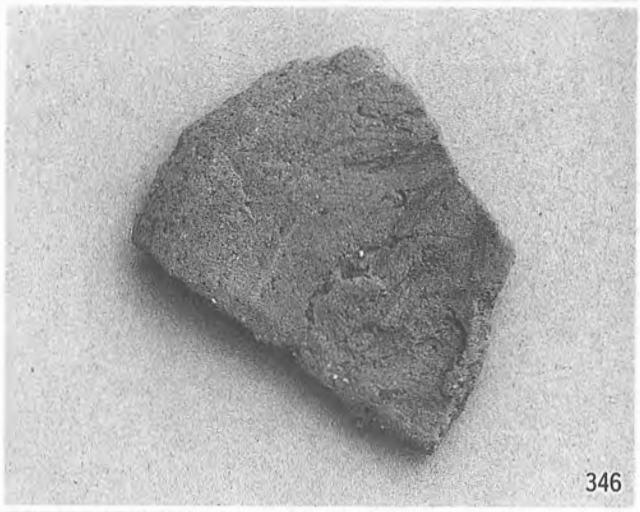

340

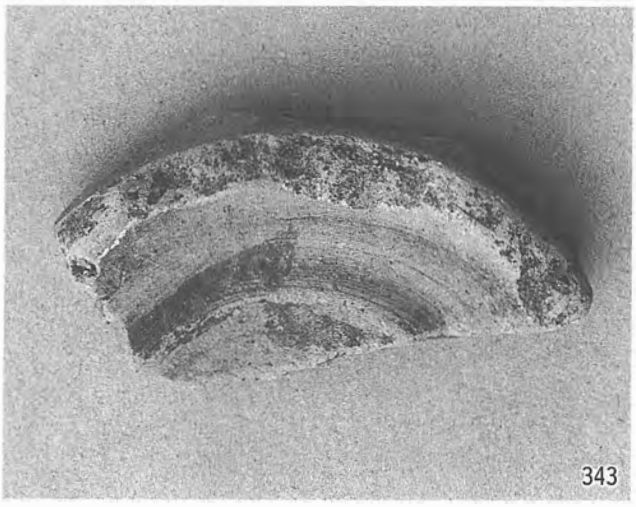
344「内」

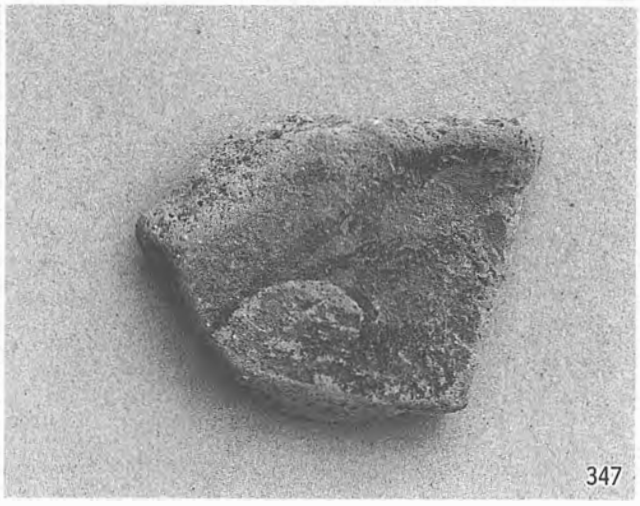
341


345「内」


342「内」


346


343

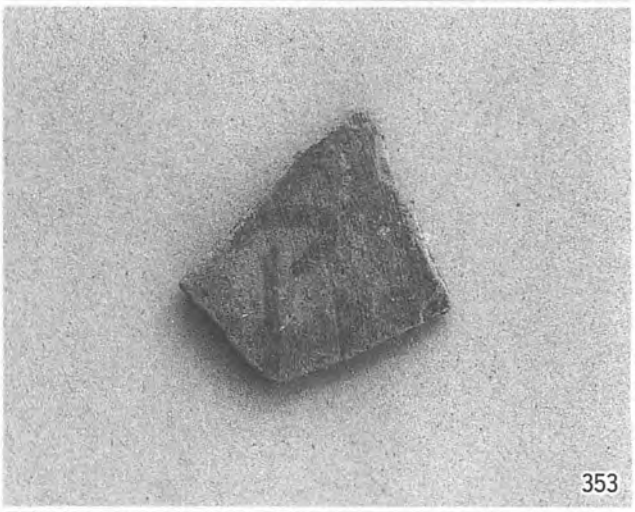

347

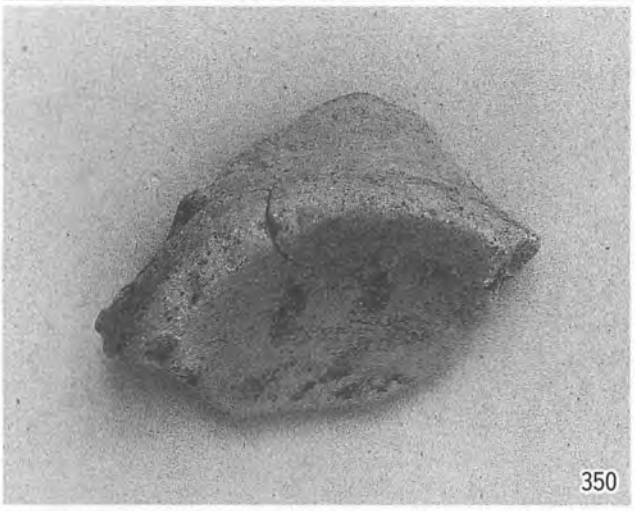
墨 書 土 器

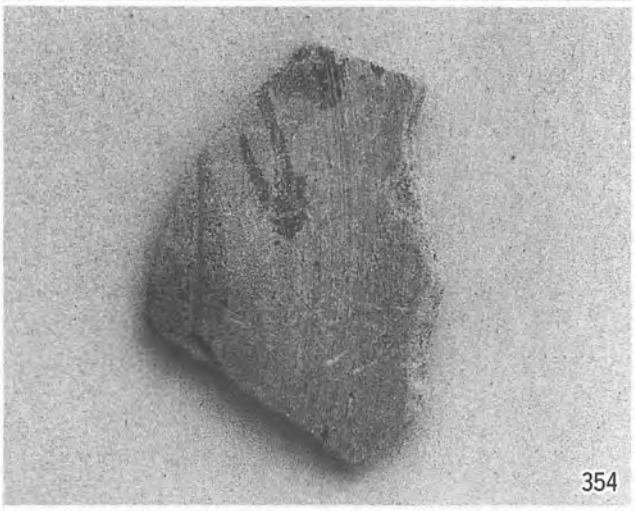
348「福」

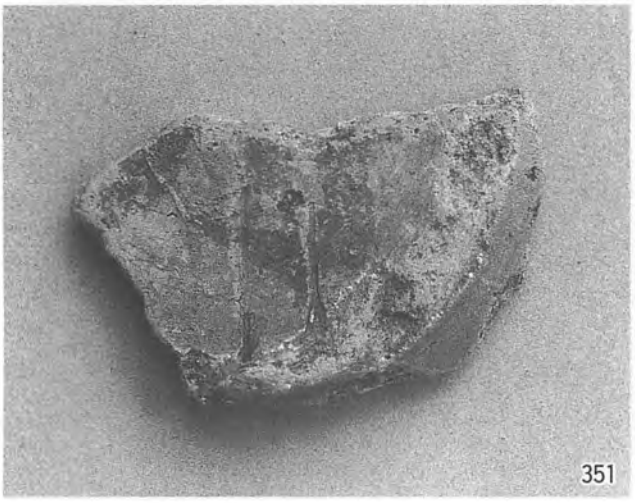
352「公」

349


353


350

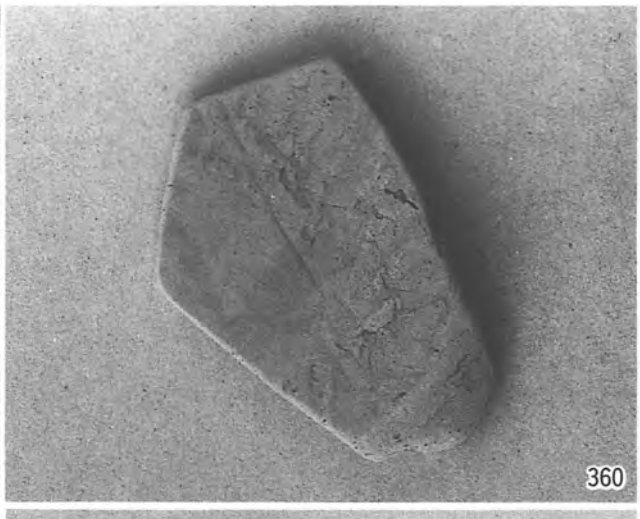

354


351

355

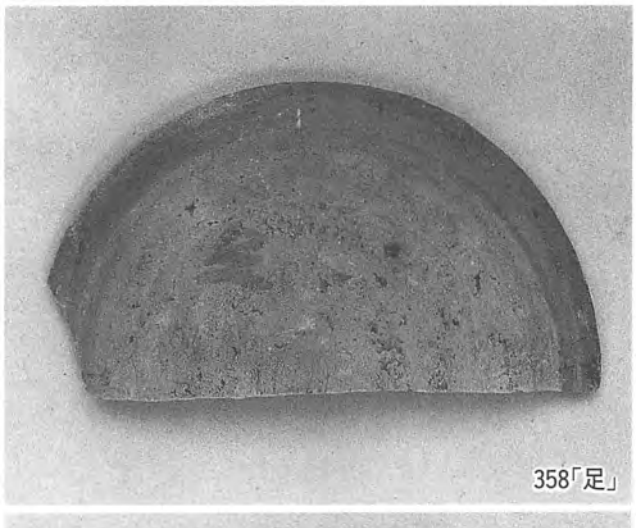
墨 書 土 器

356

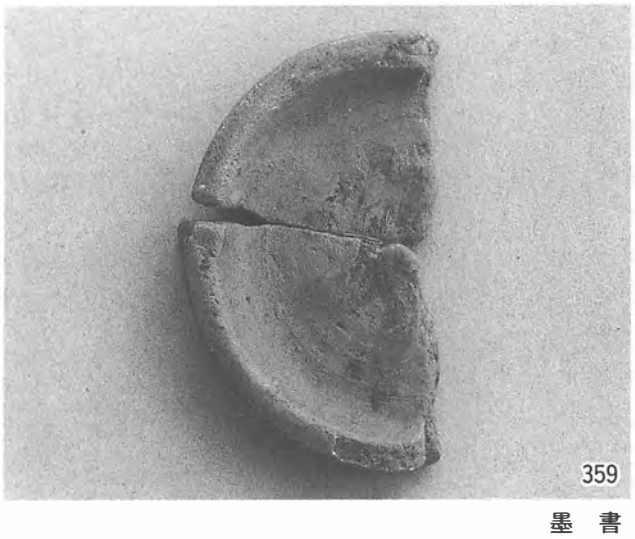

360

357「田□」

361

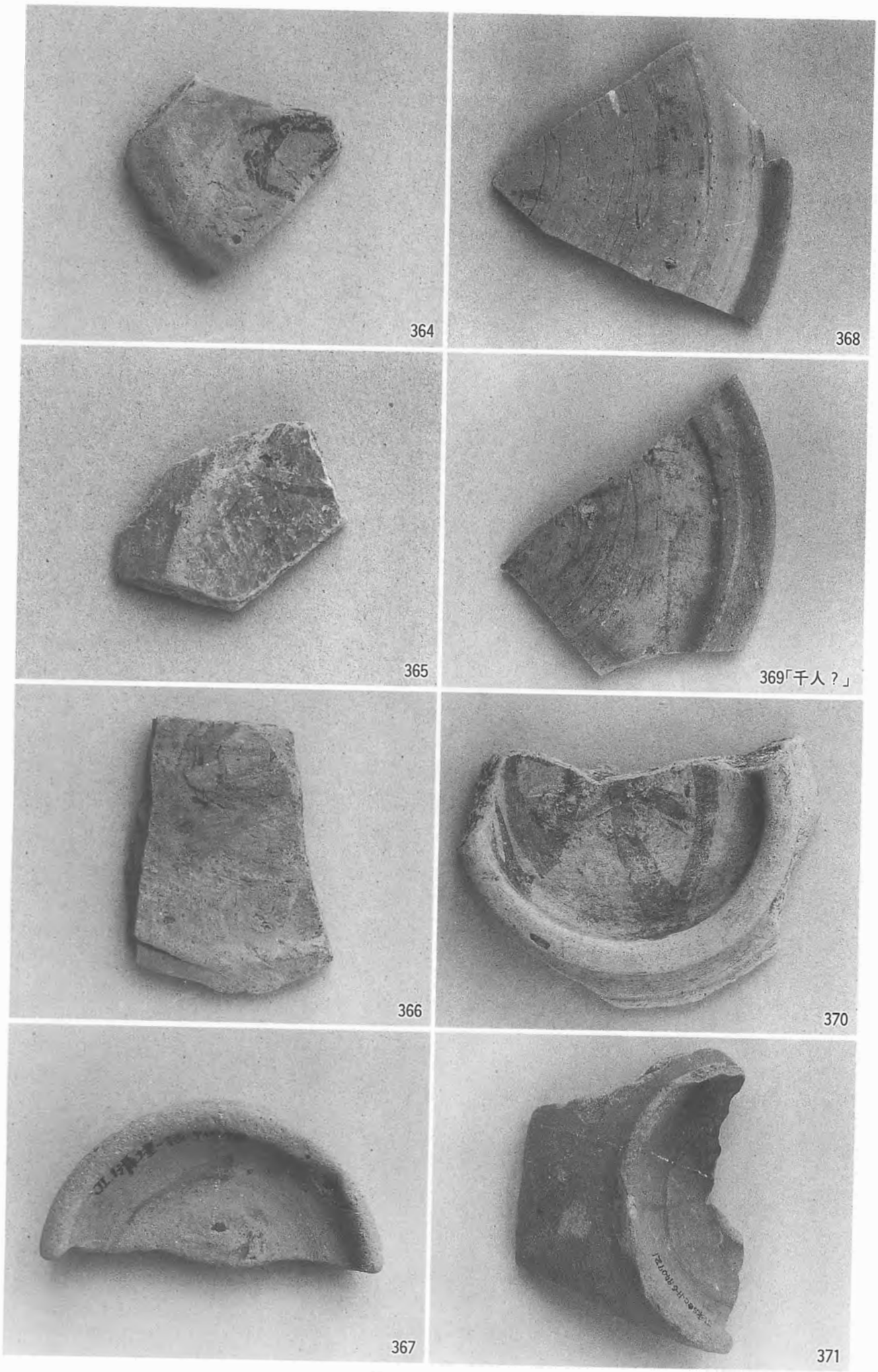

358「足」

362

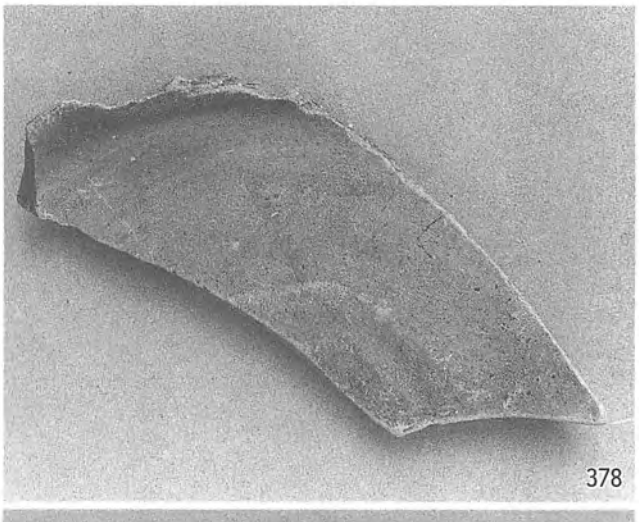

359

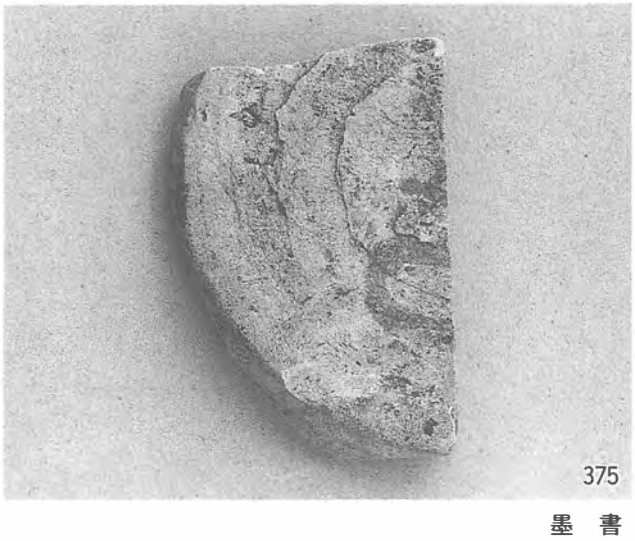
363

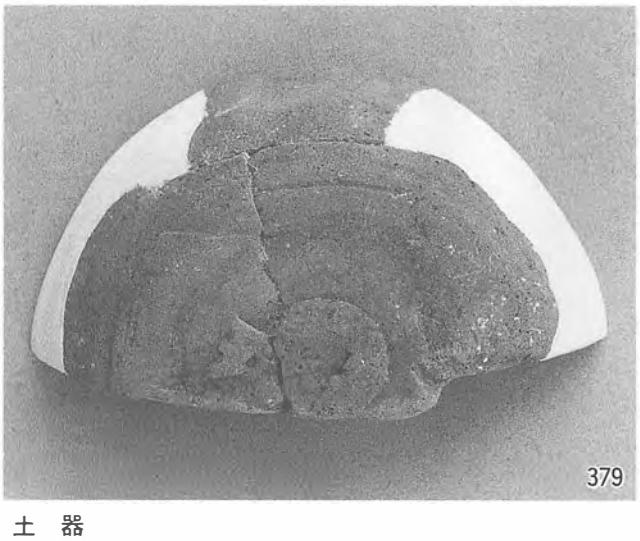
墨 書 土 器



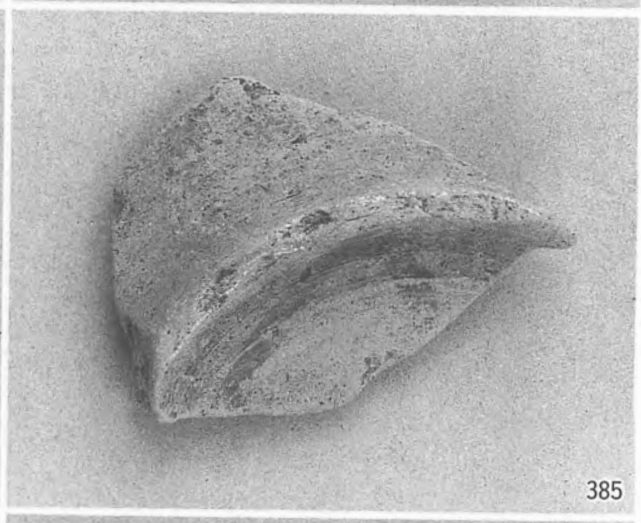
墨 書 土 器

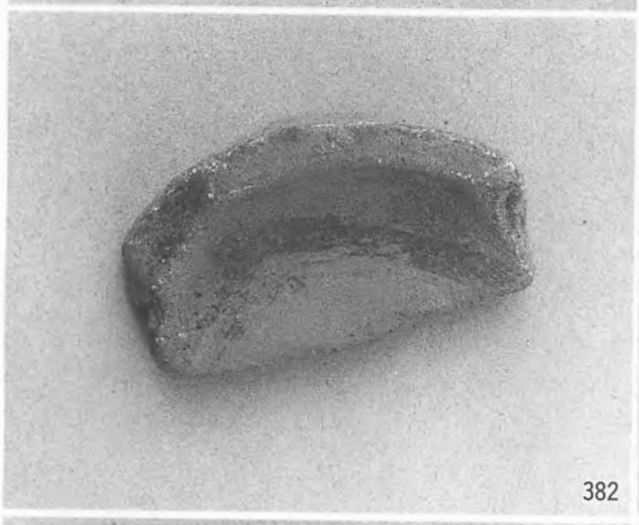


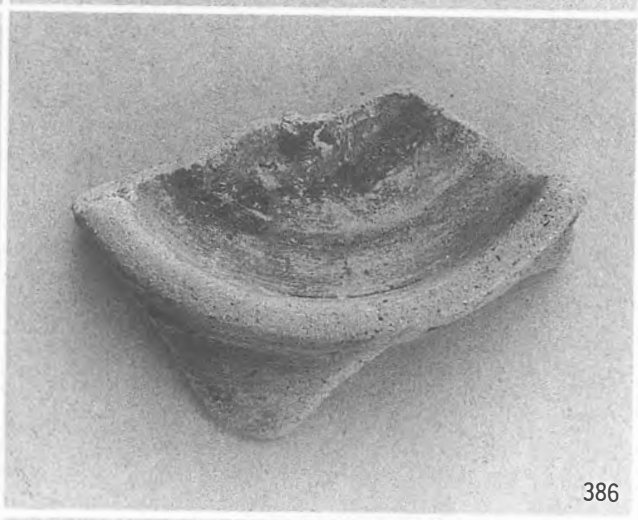


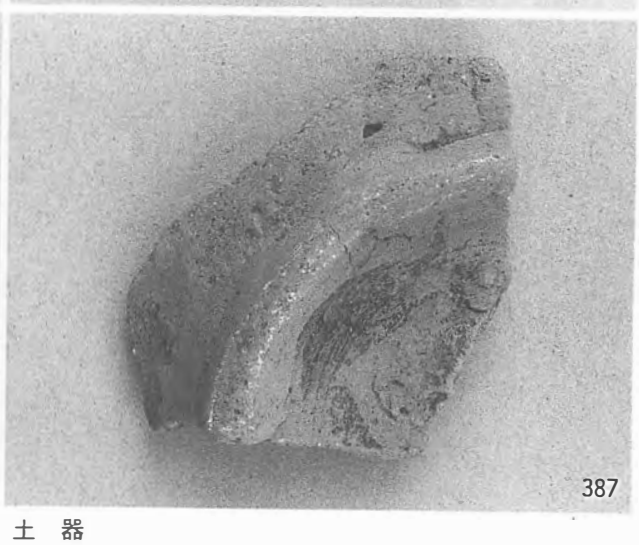


墨 書 土 器





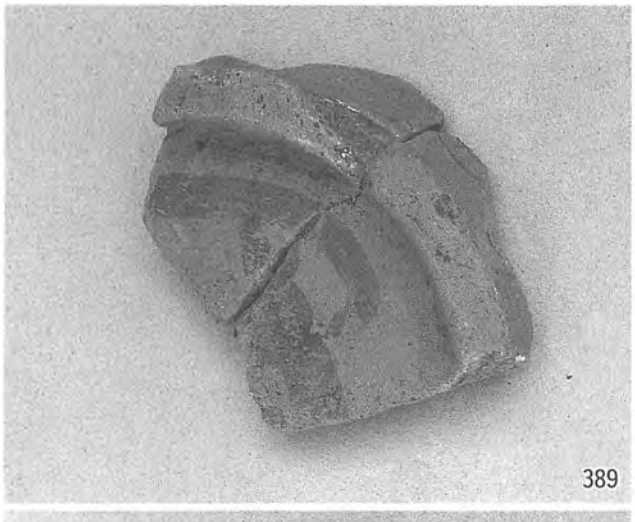


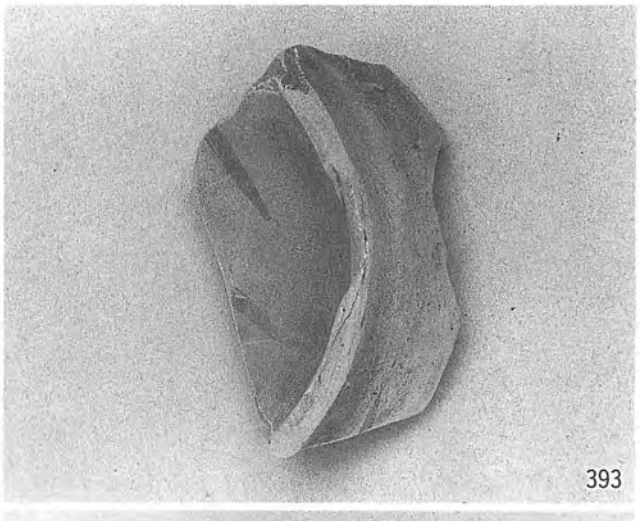


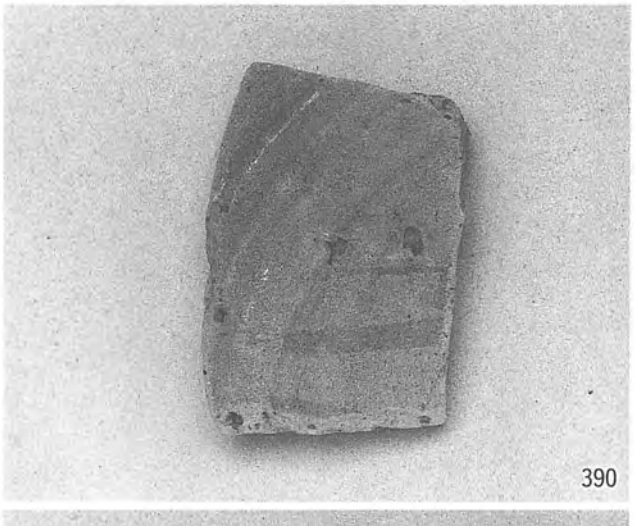
墨 書 土 器

388

392

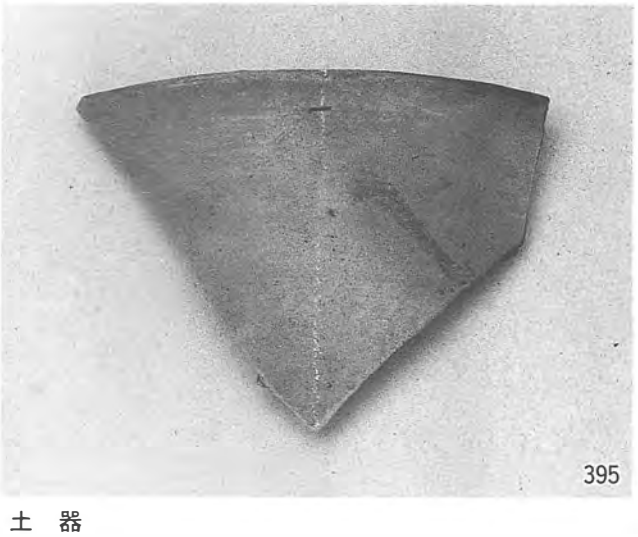

389


393

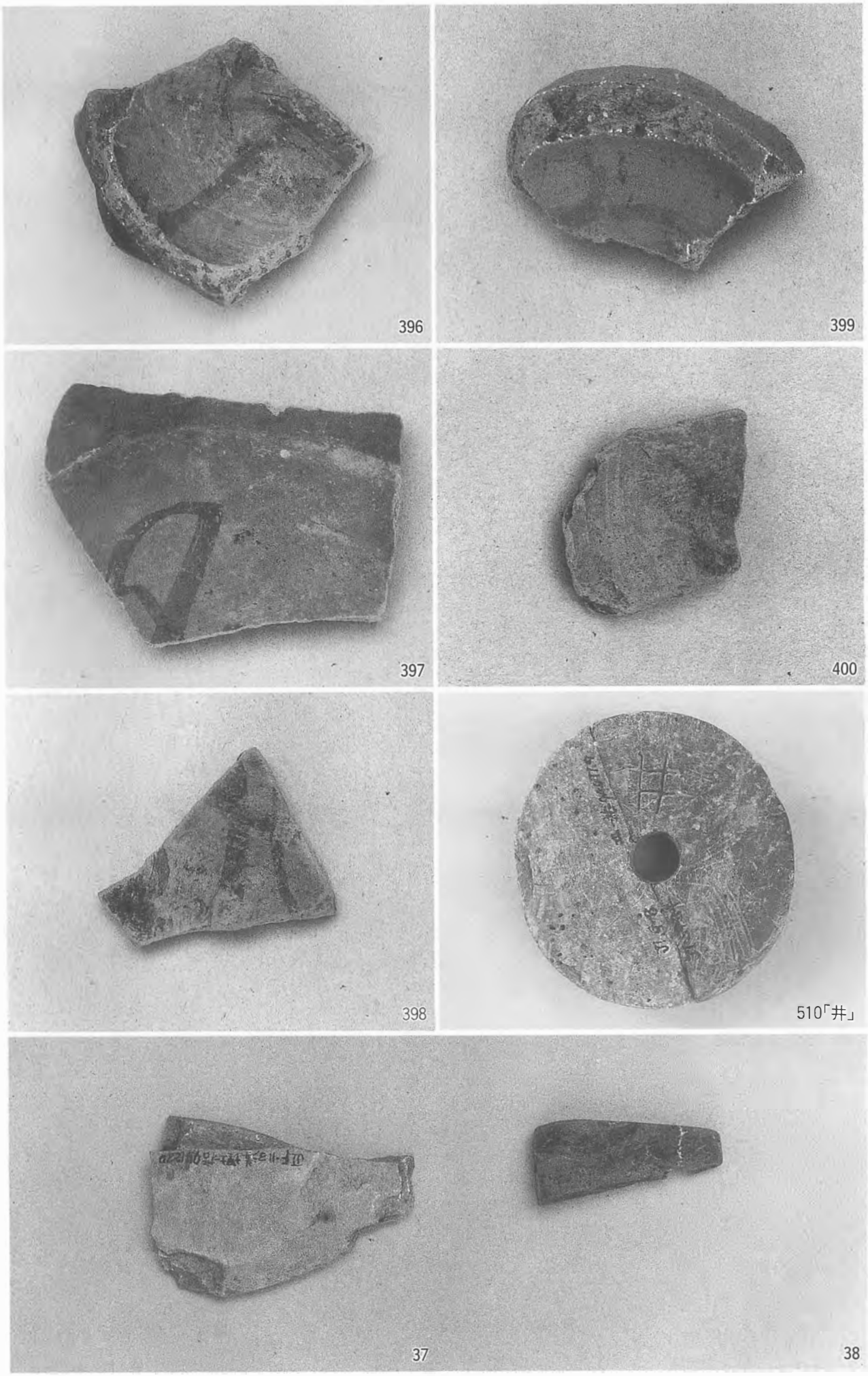

390

394

391

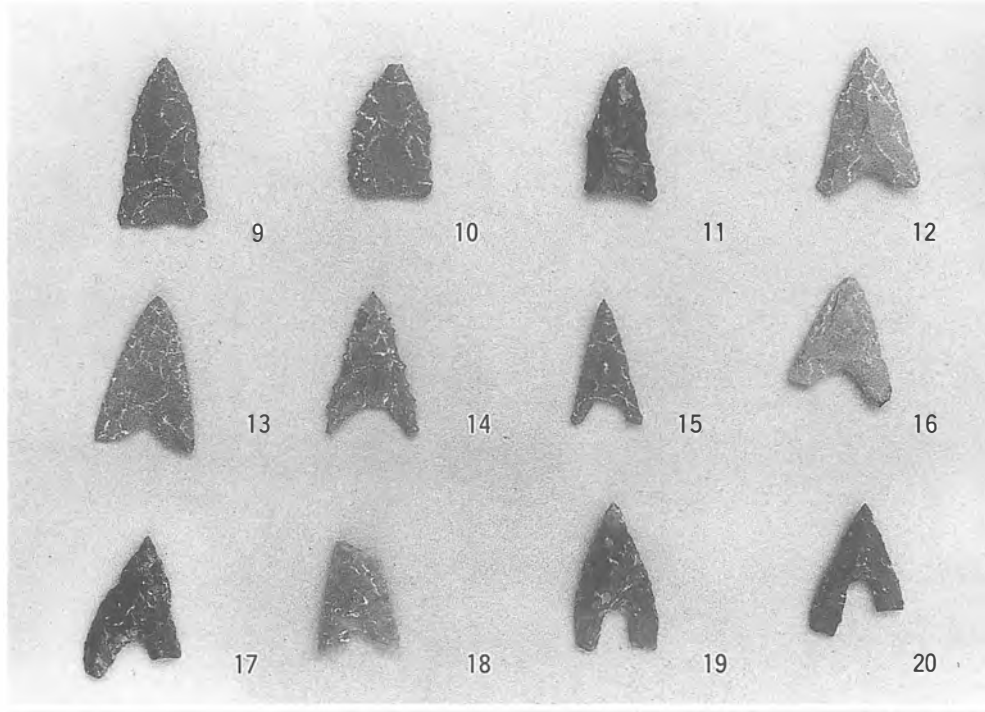

395

墨 書 土 器

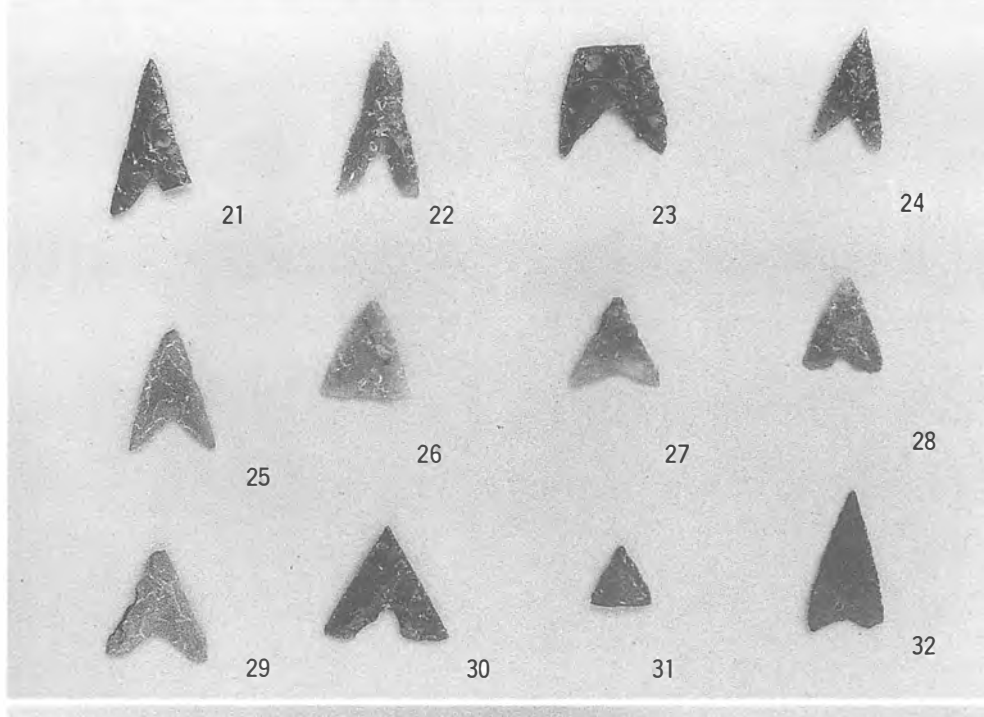


墨書土器・石庖丁

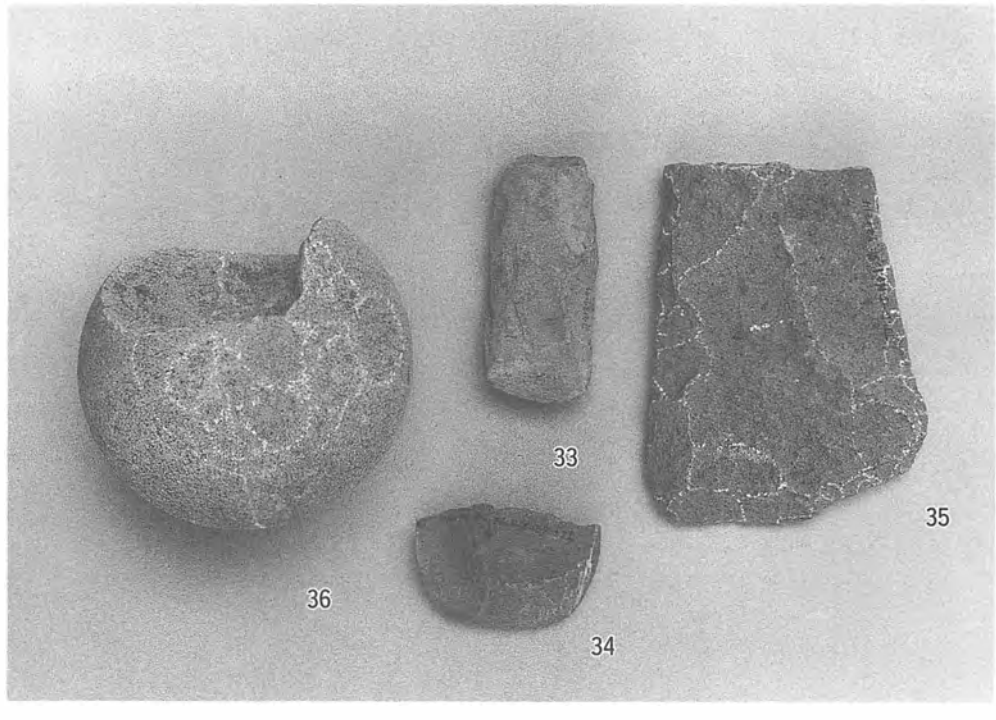
（366～400・510：墨書土器　37、38：石庖丁）



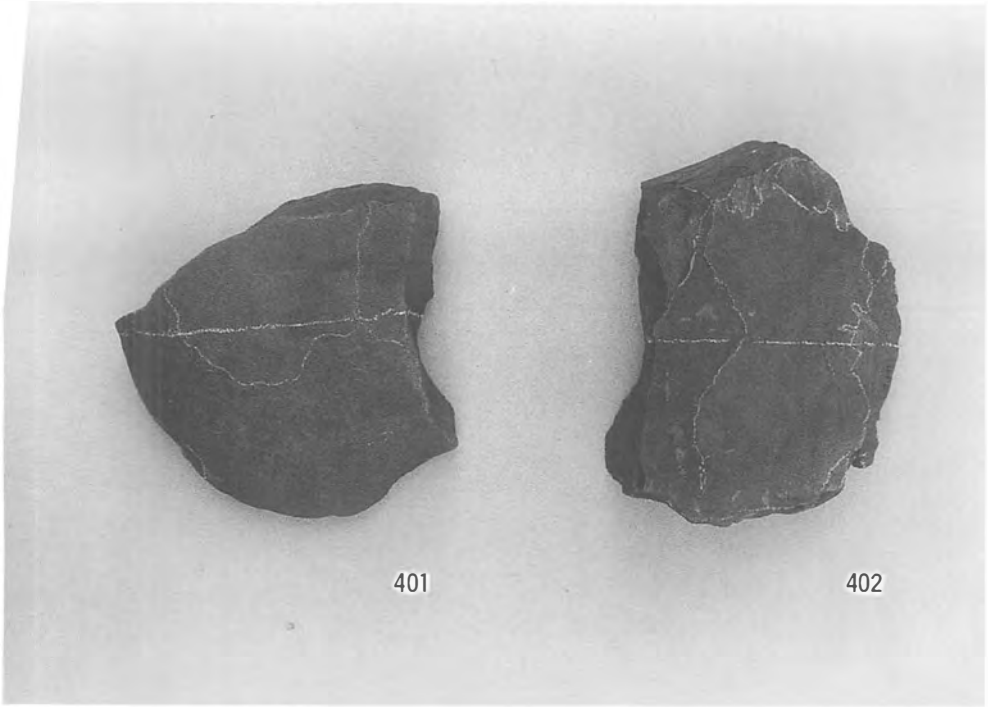
縄文時代石器(石鏃)



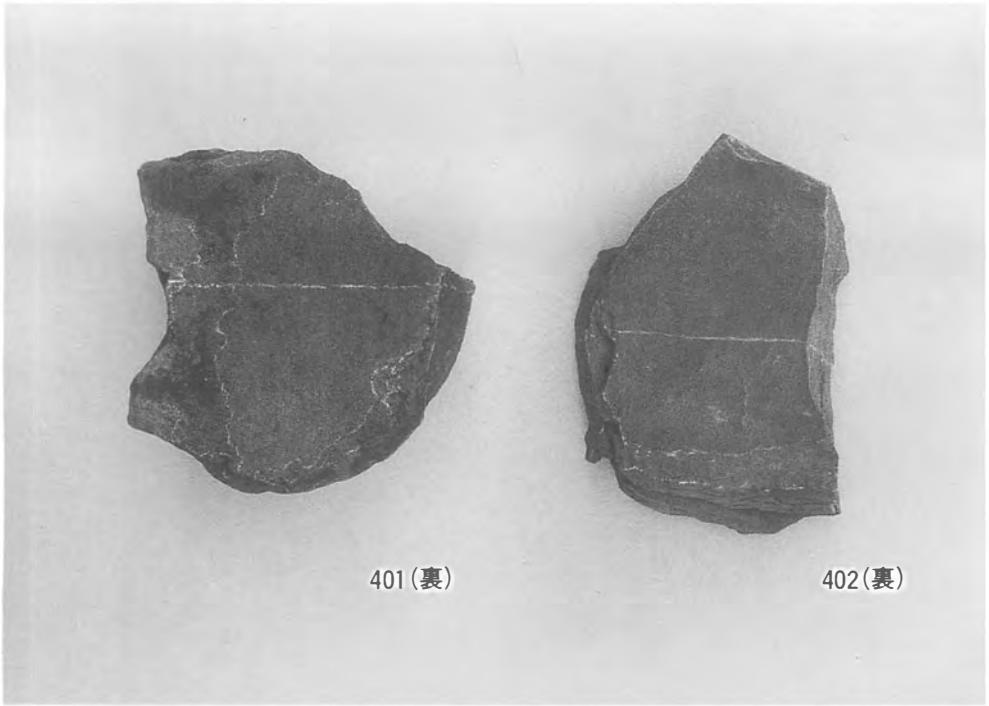
縄文時代石器(石鏃)



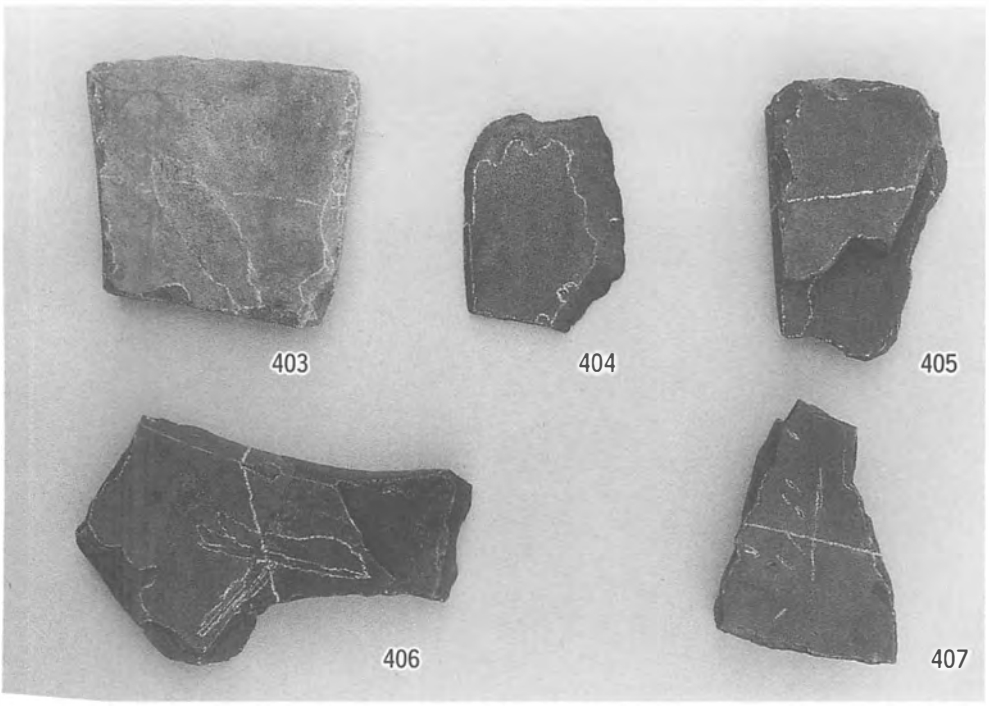
縄文時代石器



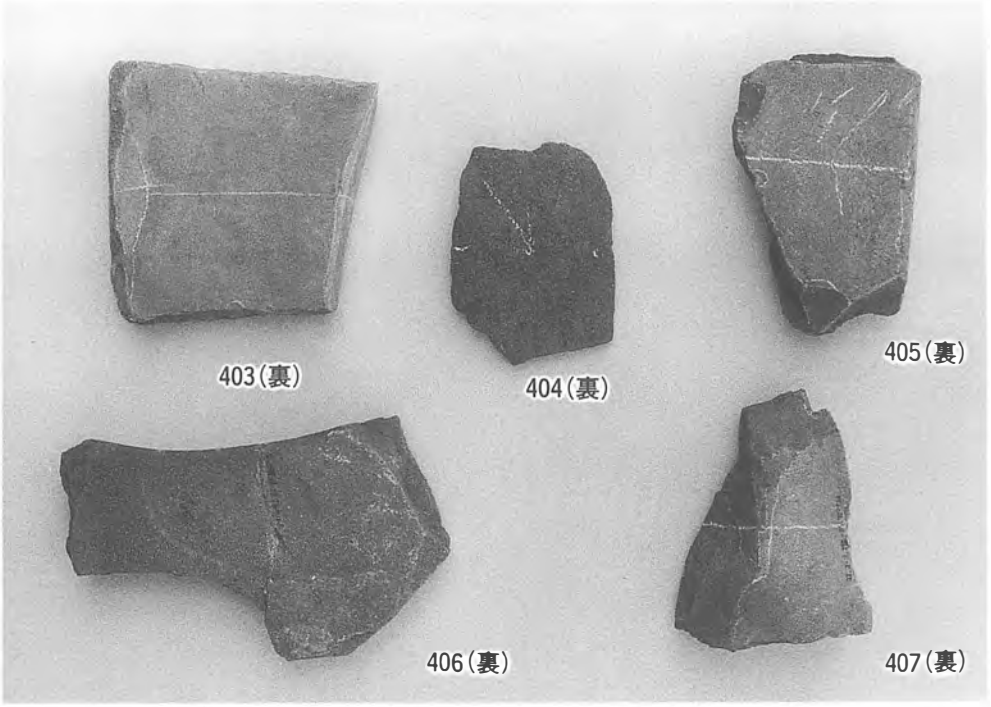
石製品(砥石)



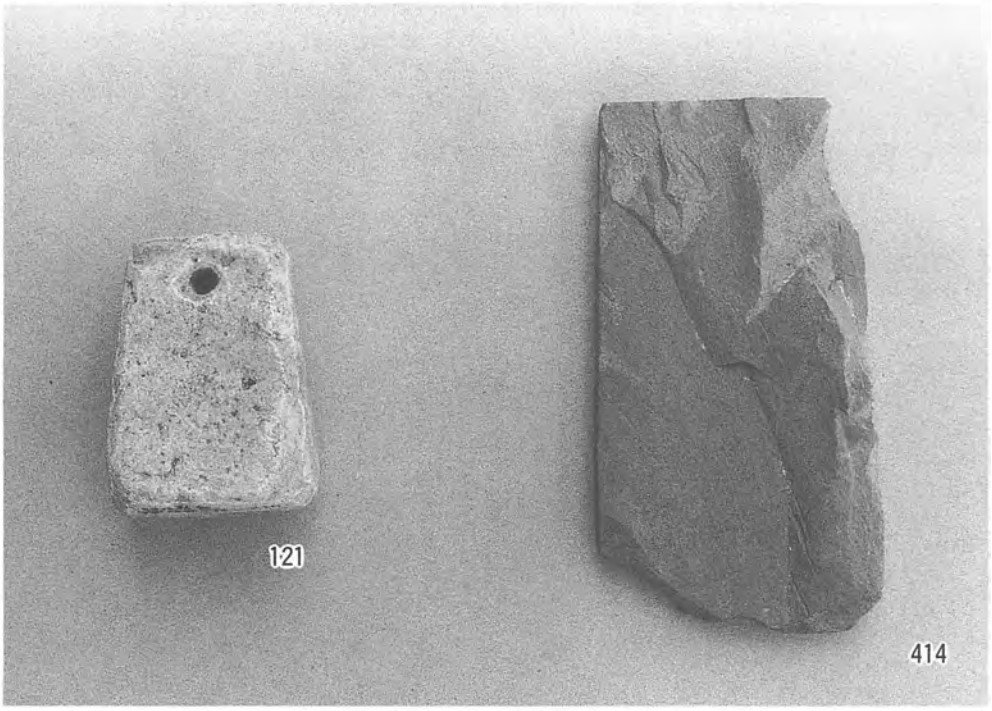
石製品(砥石)



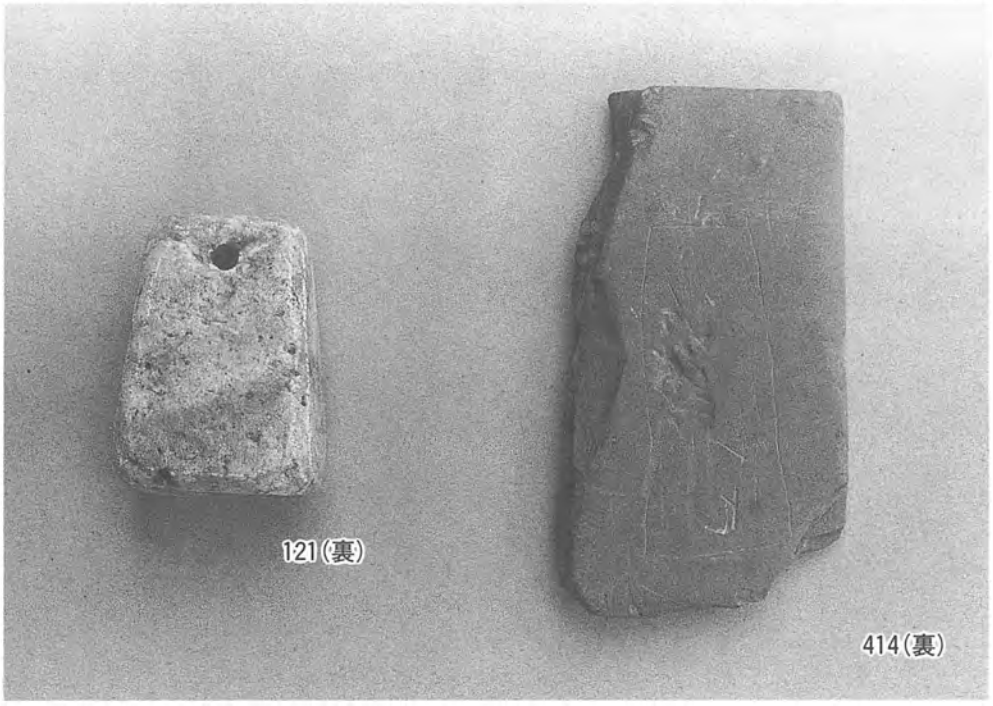
石製品(砥石)



石製品(砥石)

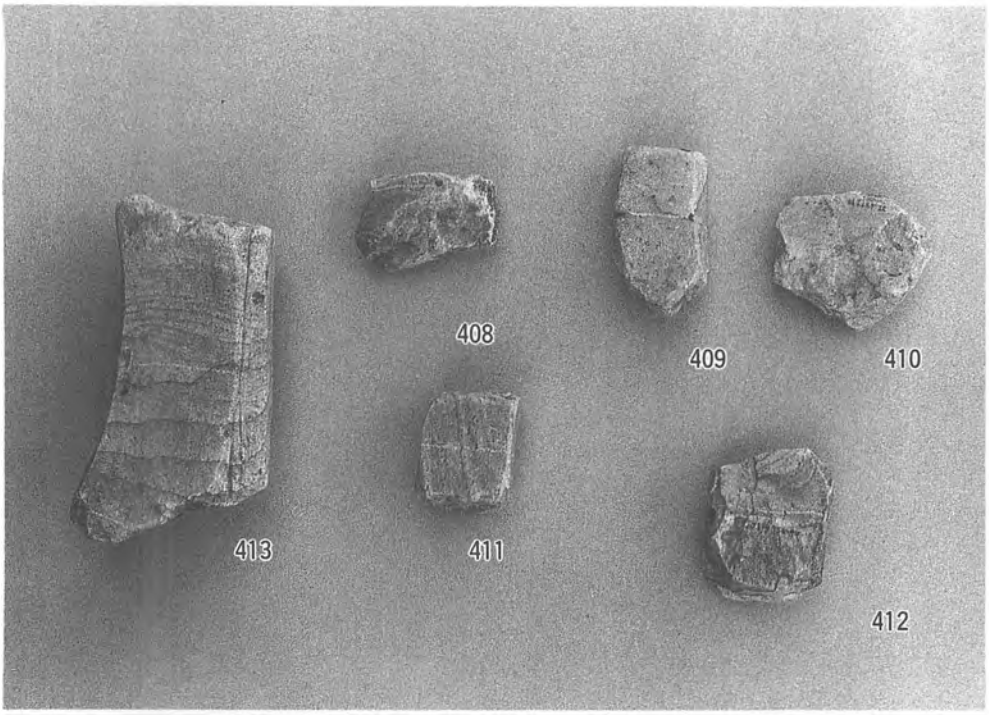


石製品(硯状石製品・鐘)

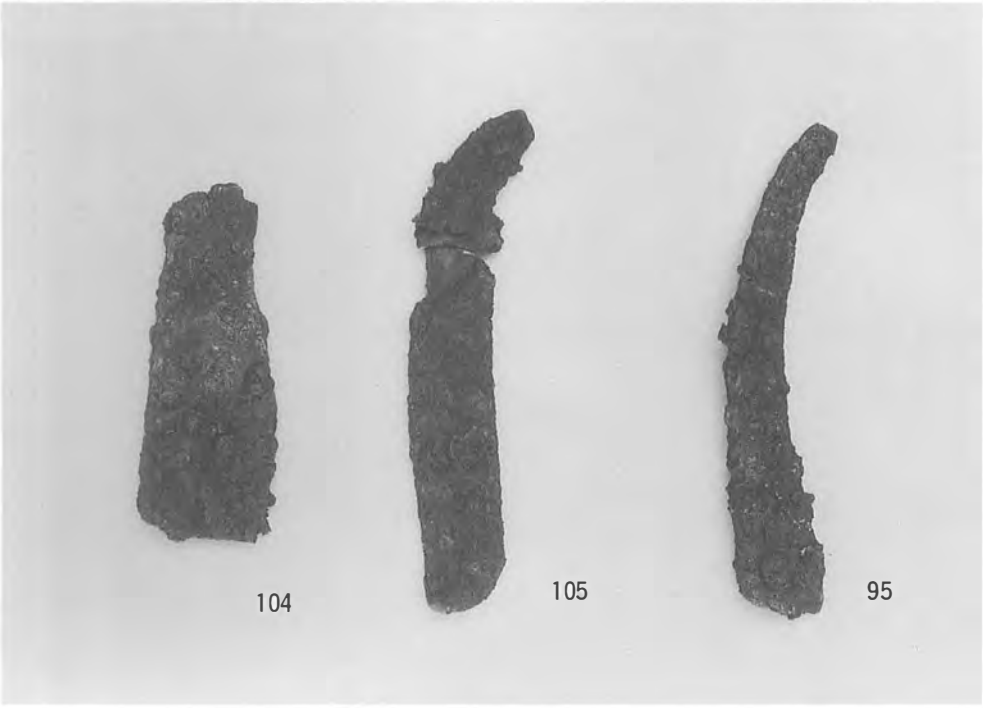


石製品(硯状石製品・鐘)

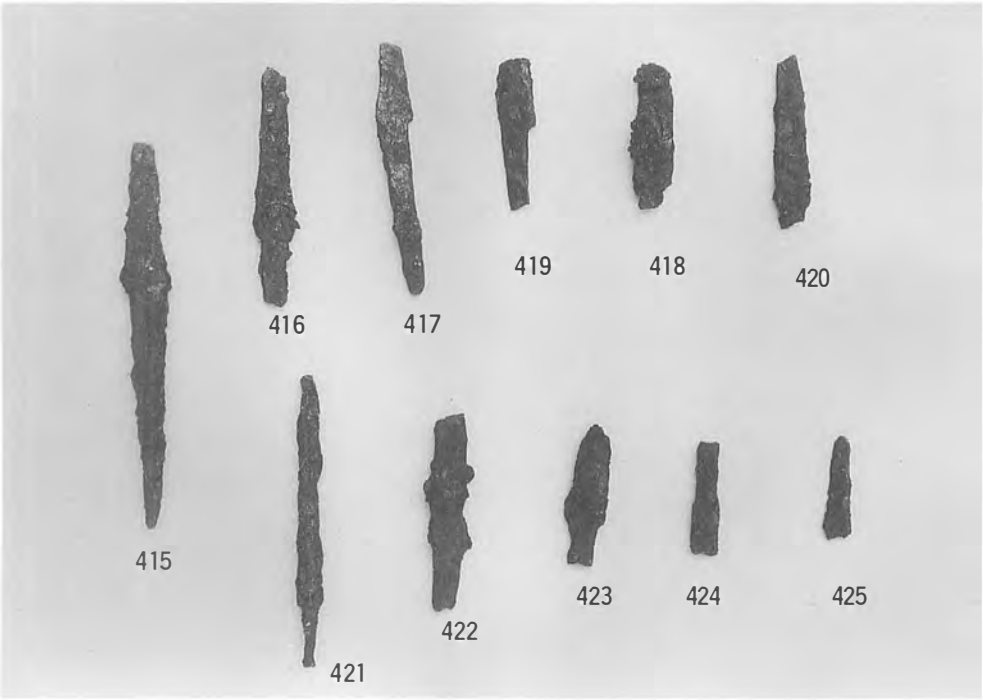
図版70



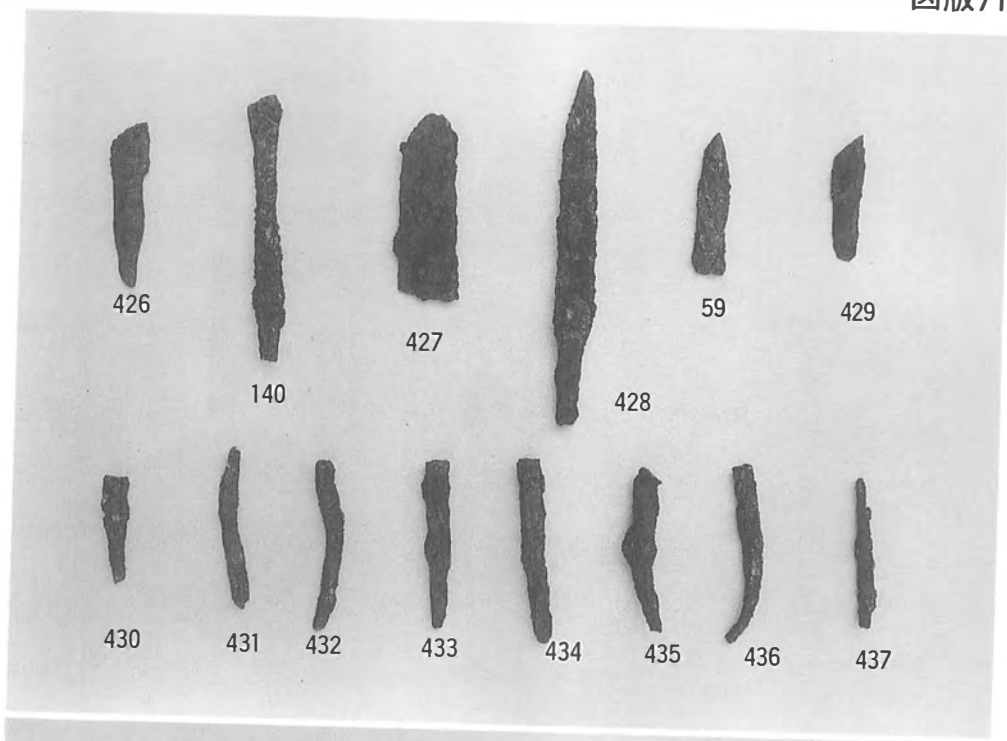
石製品(砥石)



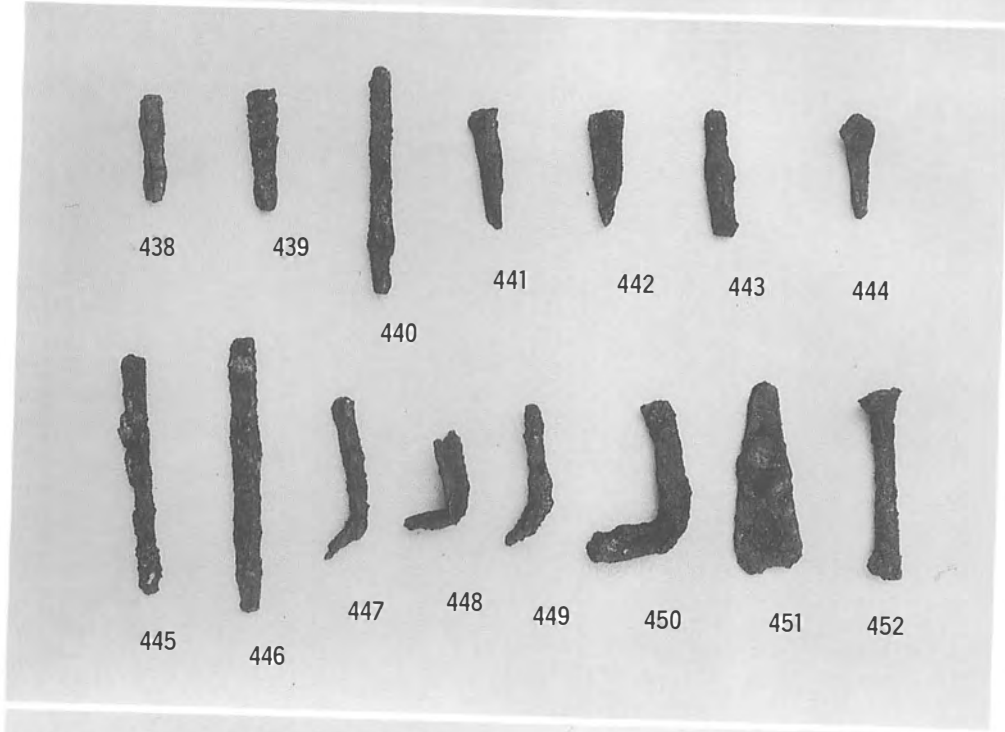
鉄製品(鎌)



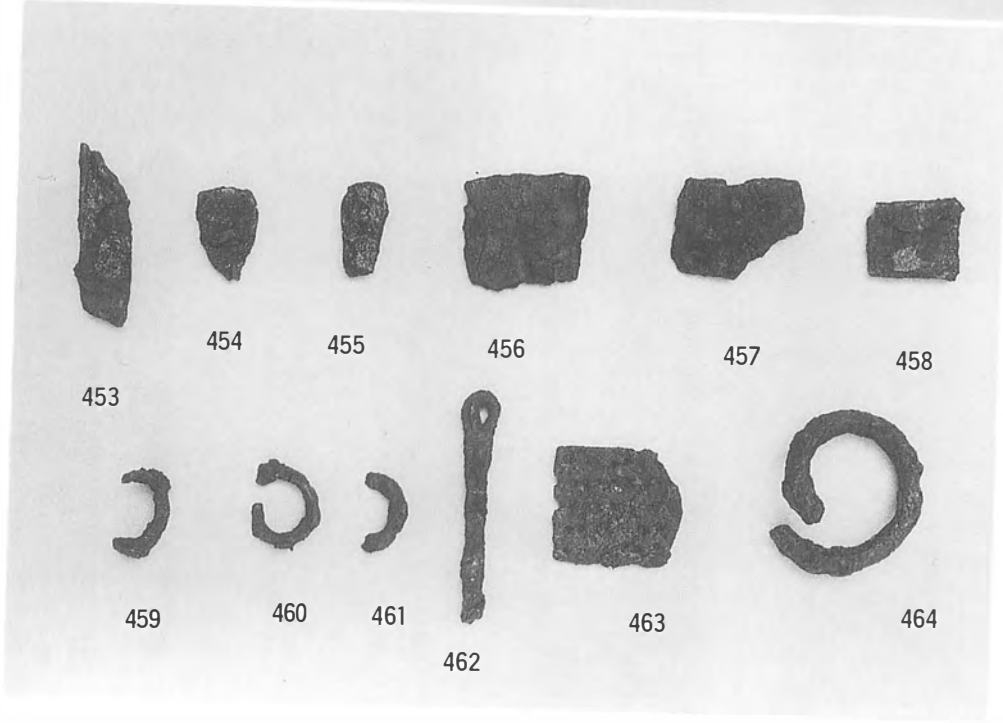
鉄製品


426
140
427
428
59
429
430
431
432
433
434
435
436
437

鉄製品

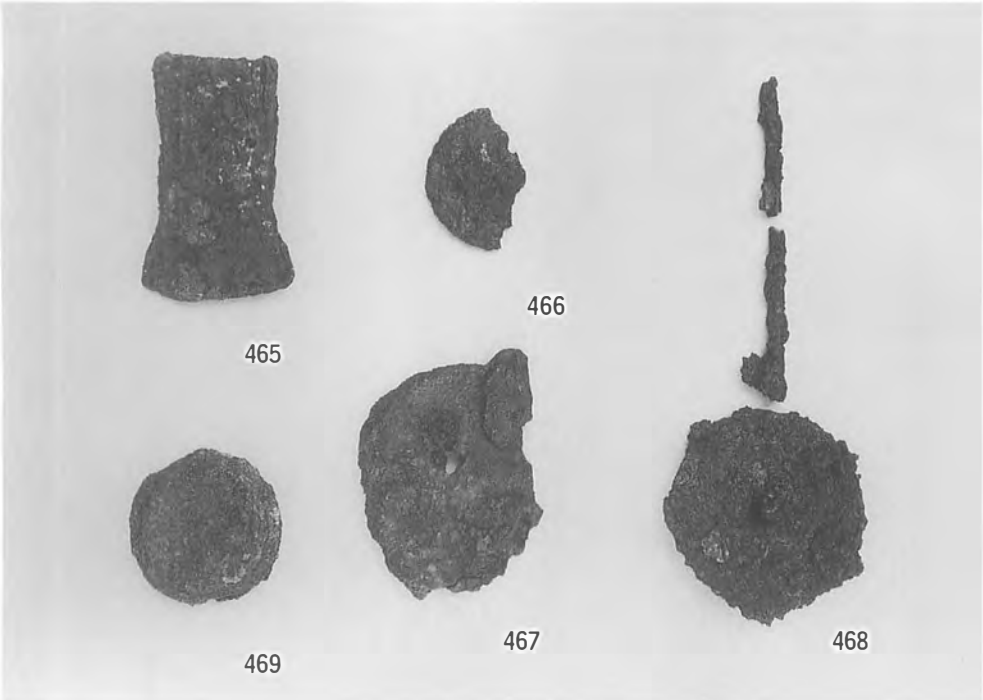

438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452

鉄製品


453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464

鉄製品

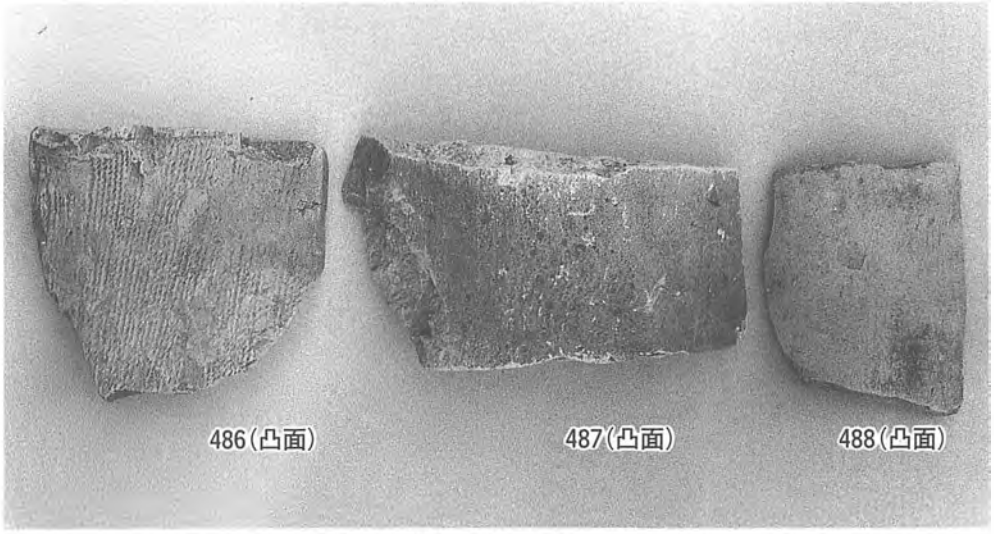
図版72



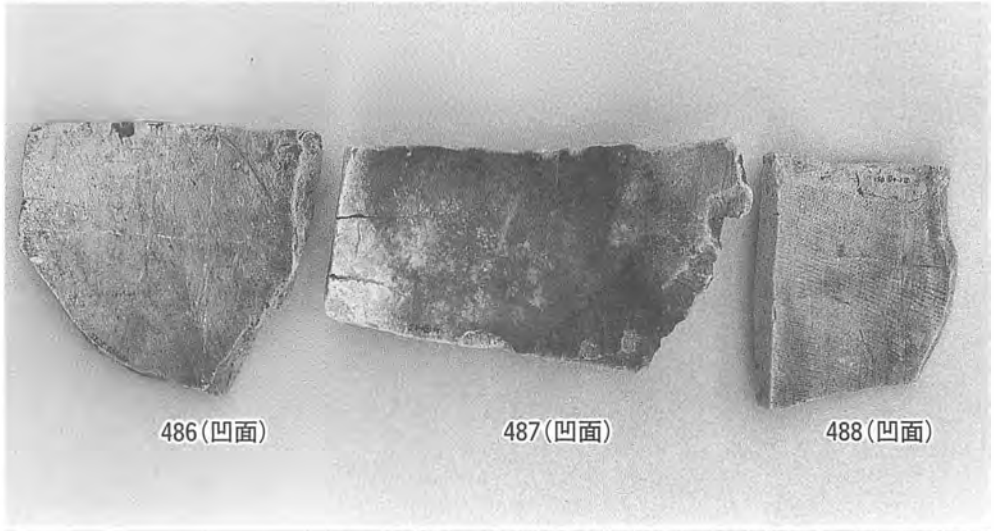
鉄製品

銅製品

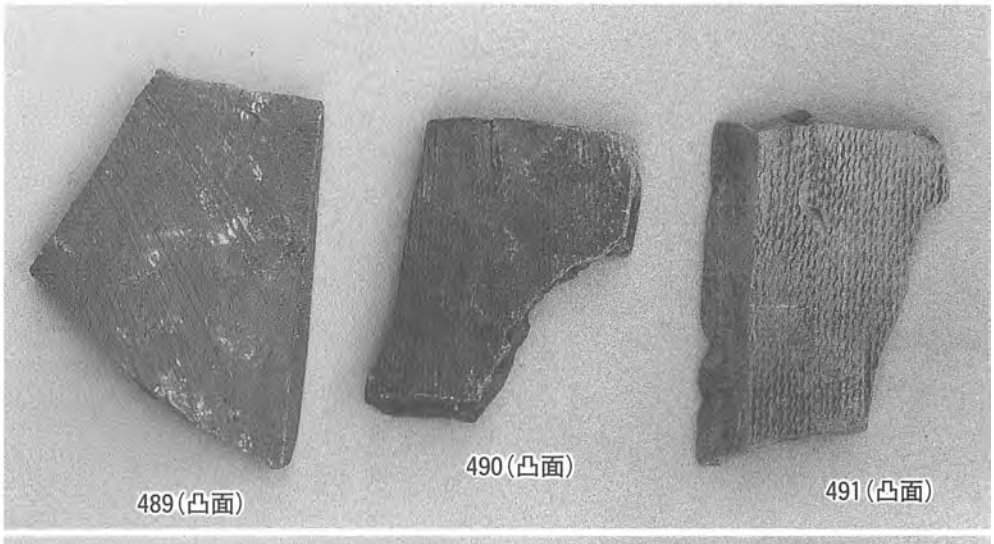
銅製品


486（凸面）
487（凸面）
488（凸面）

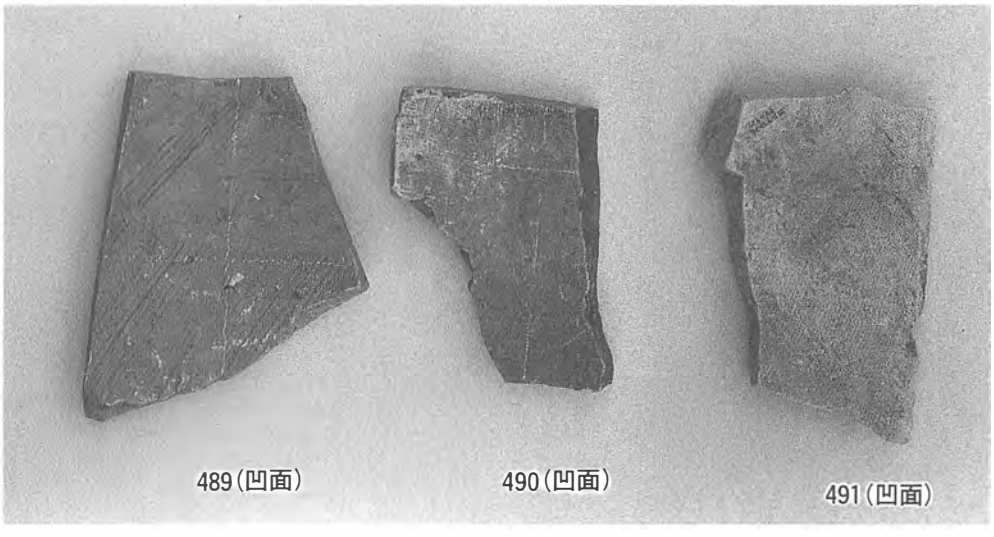
平　瓦


486（凹面）
487（凹面）
488（凹面）

平　瓦

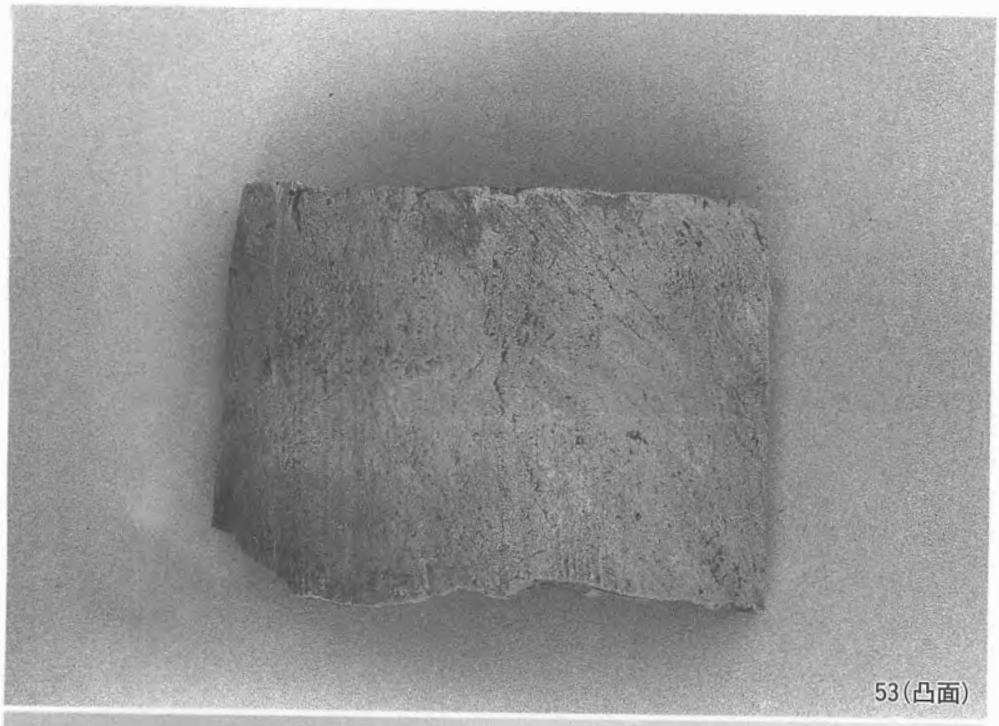

489（凸面）
490（凸面）
491（凸面）

平　瓦

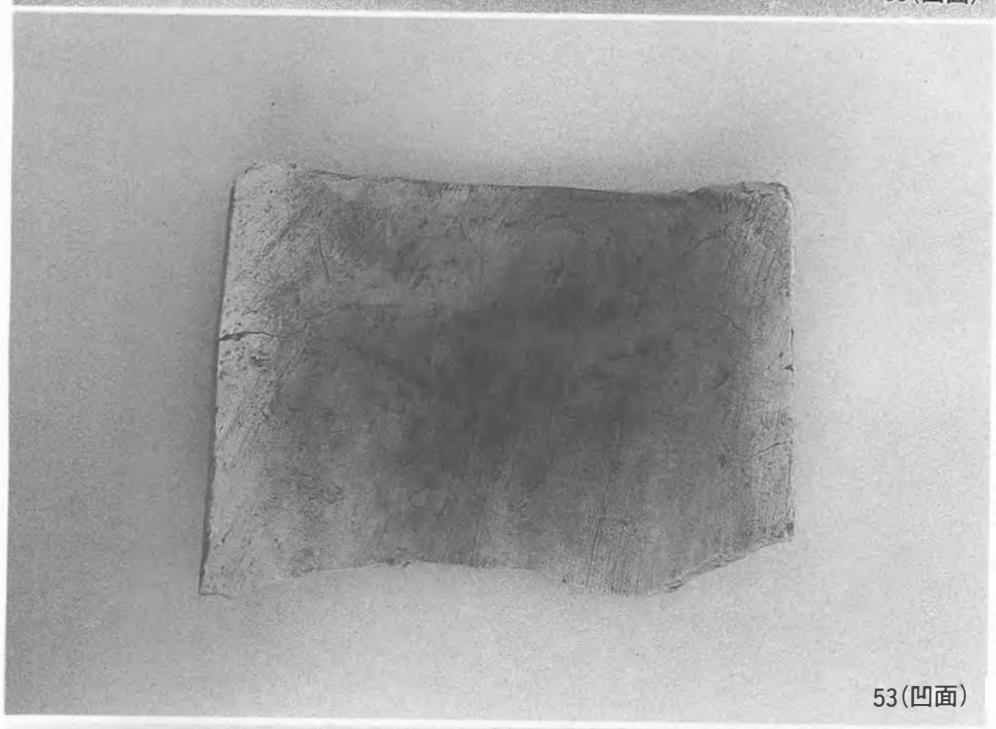

489（凹面）
490（凹面）
491（凹面）

平　瓦

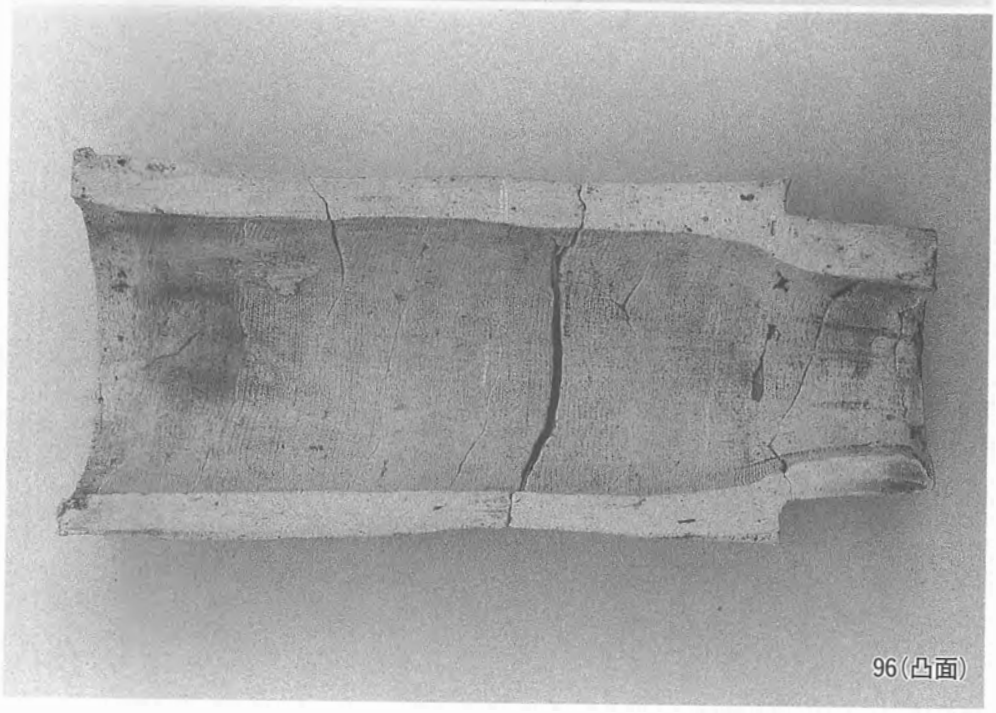
図版74



平　瓦

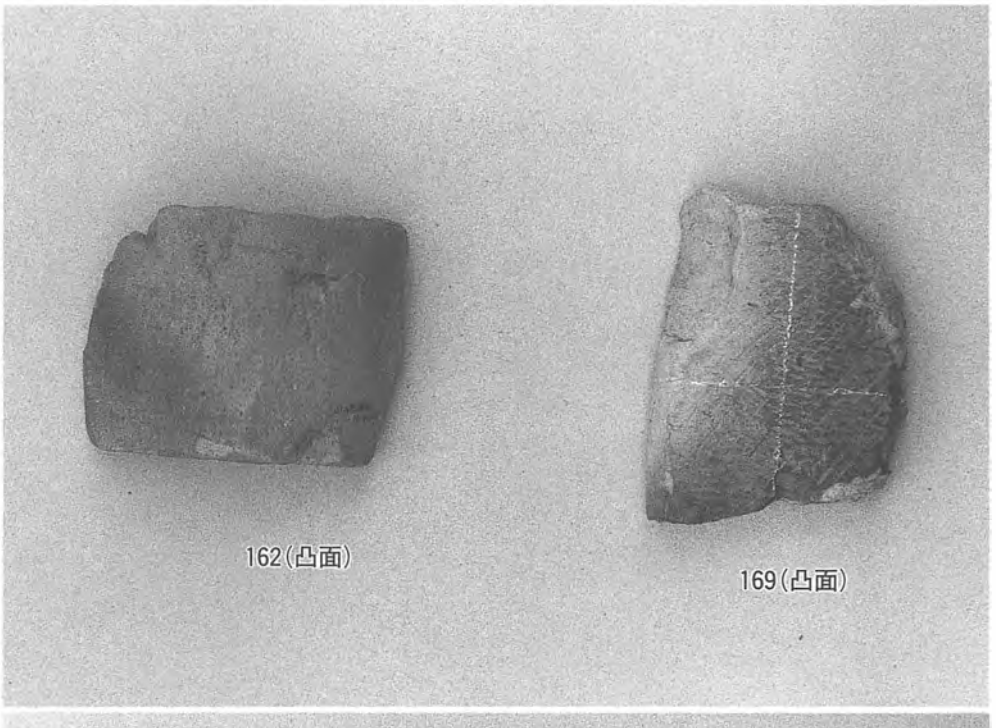


平　瓦

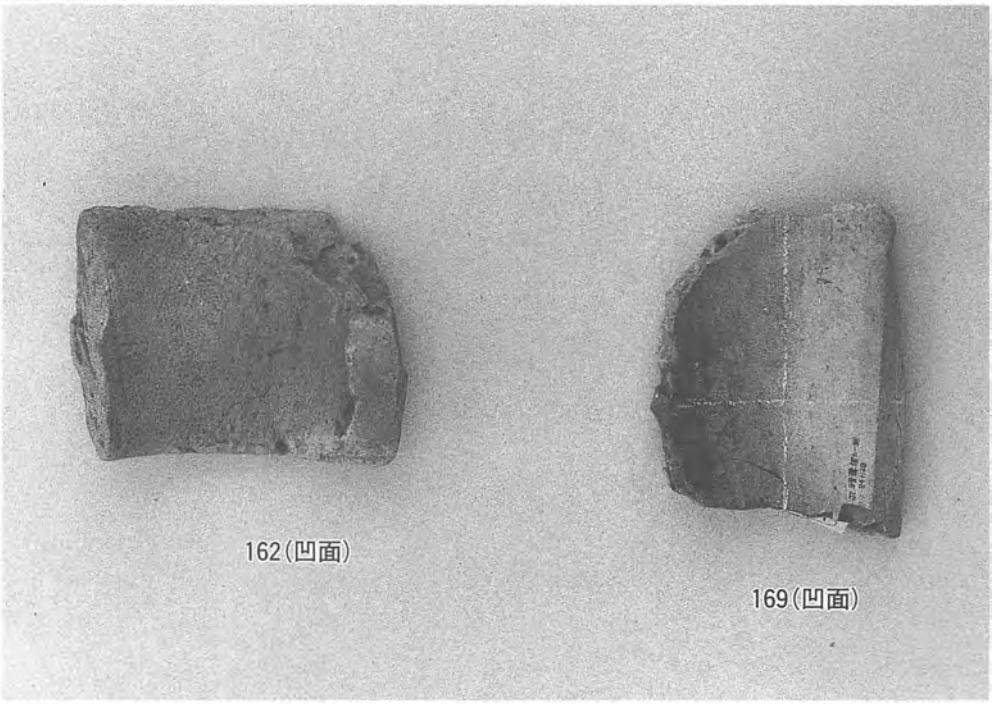


丸　瓦

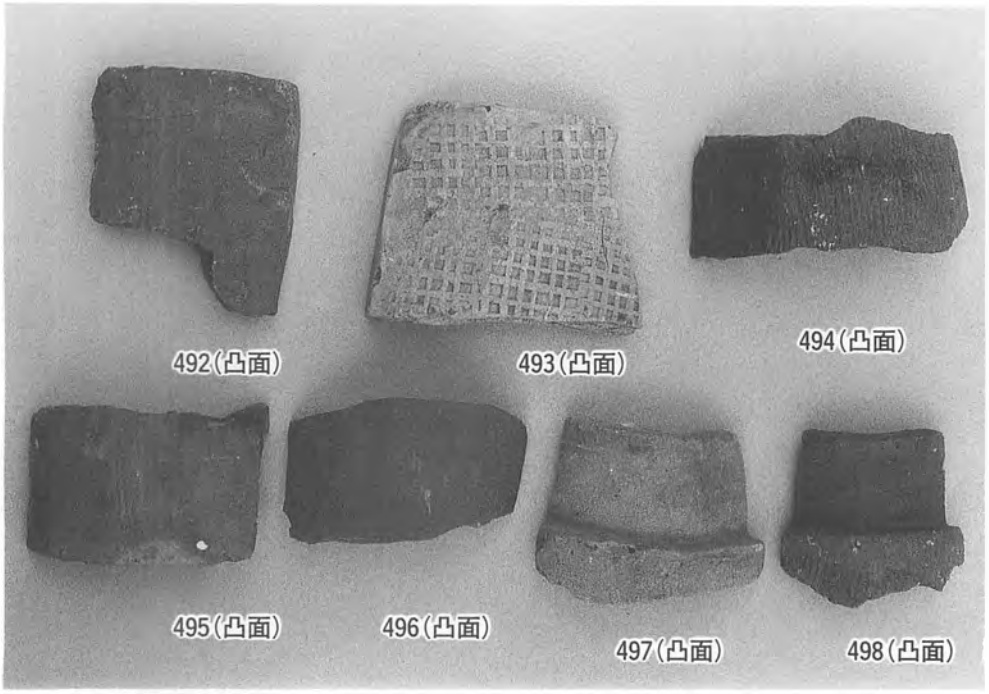
丸　瓦



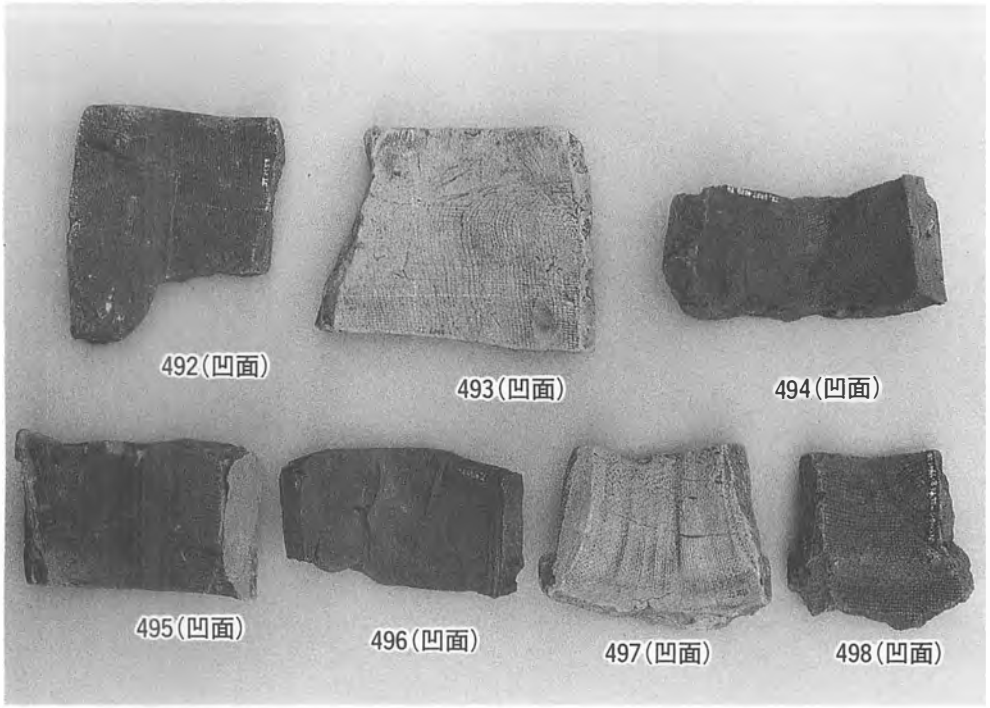
丸　瓦



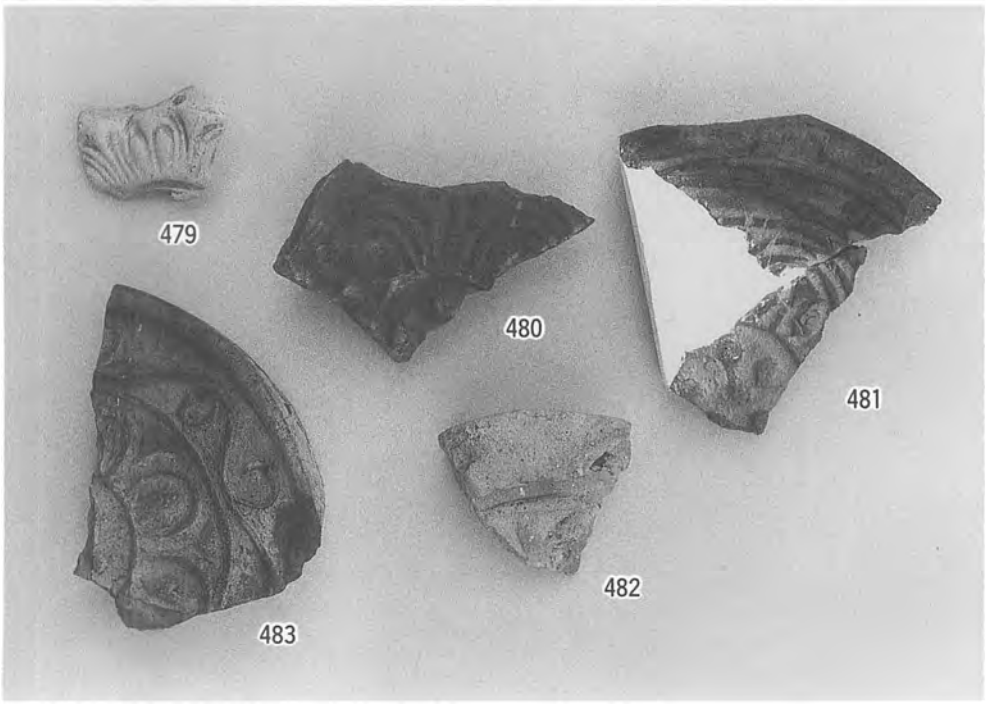
丸　瓦


492(凸面)
493(凸面)
494(凸面)
495(凸面)
496(凸面)
497(凸面)
498(凸面)

瓦


492(凹面)
493(凹面)
494(凹面)
495(凹面)
496(凹面)
497(凹面)
498(凹面)

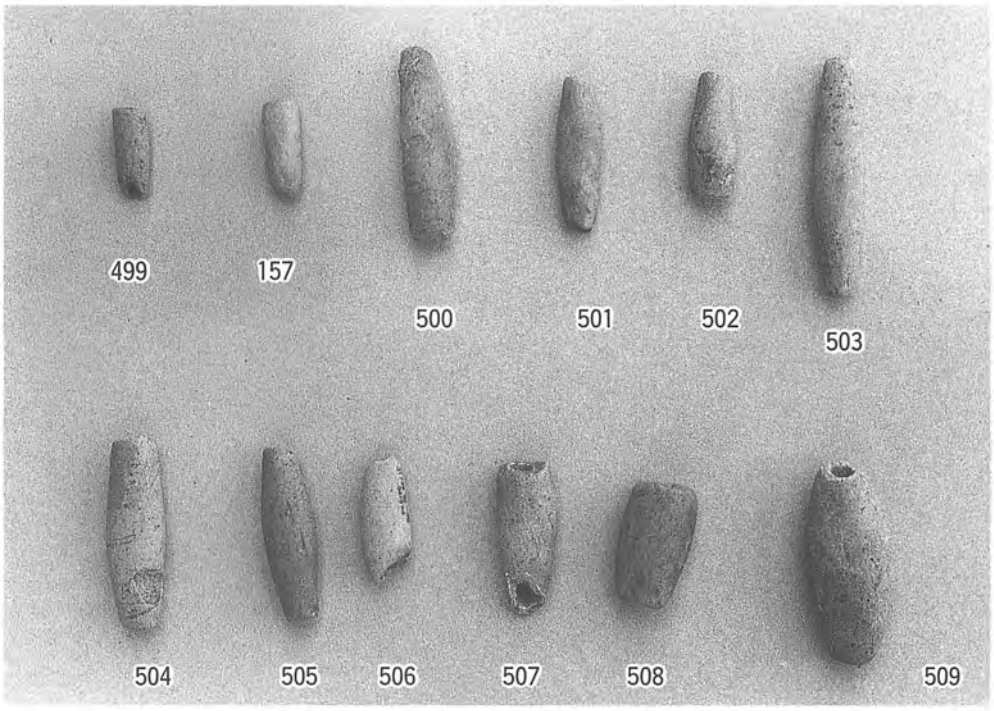
瓦


479
480
481
482
483

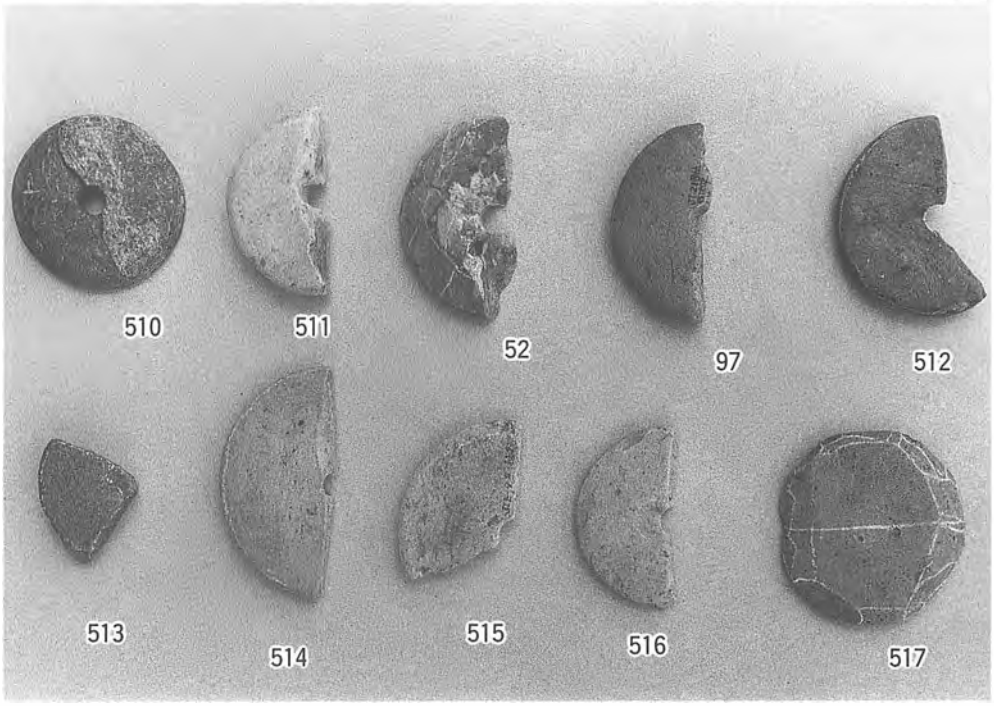
軒丸瓦

484
485

軒平瓦


499
157
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509

土　錘


510
511
52
97
512
513
514
515
516
517

紡錘車

報告書抄録

書名	陣山遺跡
副書名	勤労者総合福祉センター（熊本テルサ）建設に伴う埋蔵文化財調査
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第155集
編著書名	丸山伸治、川俣　恵
編集機関	熊本教育委員会
所在地	〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年月日	1996（平成8）年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村：遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
陣山	熊本市水前寺公園	・ ・	(自)1994.05.23 (至)1995.03.23	7,000㎡	建物建設

主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
縄文時代 早期 後・晩期		押型文土器、局部磨製石鏃 石鏃、磨製石斧、打製石斧	
弥生時代		石庖丁、黒髪式土器片	
奈良～平安時代	掘立柱建物3棟 カマド付き竪穴住居跡　51棟 溝遺構　8本	土師器・須恵器各形態 墨書土器（ヘラ描き含む） 彩釉陶器（緑釉、二彩） 硯（風字硯ほか） 越州窯系青磁片 石製品（砥石、錘） 銅製品（巡方、丸鞆、鉈尾ほか） 瓦 土錘 紡錘車	肥後国の国分尼寺の東方約250mに位置する遺跡で、8世紀後半～9世紀初頭の掘立柱建物3棟、竪穴住居跡51棟を確認している。 多数の文字資料や銅製の銙帯（巡方、丸鞆、鉈尾）、硯（風字硯）などが出土しており、特に「大寺」銘の文字資料の存在などから、国分尼寺等との関係につき注目される遺跡である。
中世		龍泉窯系青磁片、瓦器片	

熊本県文化財調査報告　第155集

陣　山　遺　跡

発行年月日　平成８年３月31日

発　　行　熊本県教育委員会
〒862 熊本市水前寺６－18－１

印　　刷　中央印刷紙工株式会社

07 教委　教文
② 004

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 155 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：陣山遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/